
魔法少女リリカルなのはStrikerS ~ 紅蓮の騎士物語 ~

A I R S

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはStrikers〜紅蓮の騎士物語〜

【コード】

N0600N

【作者名】

AIRS

【あらすじ】

魔法少女リリカルなのはStrikersの二次創作ものです。

この手の小説が苦手な方はご遠慮下さい。

第1話「主人公設定」（前書き）

どうもAIRSです。

これが初めての投稿となるので、「これからもよろしくお願いします。」

それではどうぞ。

第1話「主人公設定」

主人公

神家 光司

(かみや こうじ)

性別

男性

年齢

19

身長/体重

177/67

ランク

AA

魔力光

きれいな赤

バリアジャケット

赤い色の騎士甲冑で、王国の騎士を彷彿とさせるような格好。

容姿

パット見は女性に見える顔立ち。

(本人は気にしている)

前髪は少し分けていて、後ろの髪は型まで伸ばし後ろでまとめている。

色は薄い金髪

目はうすい水色。

性格

基本的真面目で誰にでも優しい。

基本丁寧語でしゃべることが多い。

また、女性に弱く、怒ると怖い。

極度の鈍感であり、すごく純情である。

趣味・特技

料理

けっこうなんでも作れる。味はそこら辺のシェフより上手い。

剣術、槍術に長けている。

家族構成

幼い頃に両親を無くし叔父と叔母に育てられた。

兄弟はいない。現在（19才）は一人。

詳細

小学4年生の時に叔父と叔母のいる海鳴市に引っ越して、そのときからなのはたちと親しくなった。

しかし、中学2年の春に叔父と叔母を事故で亡くし、その時にザックスが覚醒し魔導騎士となった。その後海鳴市から離れ、その時から一人で暮らしている。

ちなみに、魔導騎士となったことはなのはたちには内緒にしているが、連絡は取り合っていた。

中学2年の春から管理局に勤め始め、『紅蓮の騎士』の愛称で知られている。（ちなみに「紅蓮の騎士」と言い愛称だけが通り、とうの名前と顔はあまり知られてない。）

デバイス

名前

ザックス

古代ベルカ式

両親の形見としてもらった腕輪。（貰ったときはただの腕輪だった）

カラーリングは黄色と赤を基調としている。

形状

モード・ブレイド

その名の通り両刃の剣。刀身は白。

モード・ランサー

ブレイドが柄と刀身が厚くなり槍になった姿。

中心は赤い刀身の刃で、両側に白い刃がある三又の槍。

詳細

中学2年の春にデバイスとして目覚めたが、以前の記憶を失っており、自分の名前しか覚えていなかった。

性格は基本的に主に忠実だが、しゃべる時はしゃべる。

たまにマスターである光司をからかったりして怒られている。

技

ブレイド

紅蓮一閃

赤い衝撃波を刀身はから放つ攻撃。
また赤いオーラを纏って攻撃することも可能。

虚空撃破斬

見えないほどの速度で移動し相手に近づき、剣圧で相手を吹き飛ばす技。

カートリッジ一発消費。

絶影・爆炎斬

凄まじい炎を纏って相手を叩き斬る技。感じとしては、上の二つの技を足して2で割った感じ。

カートリッジ三発消費

ランサー

瞬迅槍

凄まじい早さで相手を切りつける技。また、居合いにも使える。

槍雨・一塵

降りしきる雨のように突きを喰らわす技。

カートリッジ二発消費。

烈空・魔龍槍

槍に炎の龍を纏わせて相手に突進する技。今の時点で最強の技。

カートリッジ三発消費。

魔法

フレイム・ドライブ

炎を自在に操って攻撃する技。直線、曲線と、いろいろできる。

フレイム・ランサー

高濃度の炎で作られた槍を出して攻撃する技。

持って戦ったり、発射したりする。また、相手にさして爆破もでき

る。

フラッシュ・ムーヴ

閃光のごとく瞬間移動する技。
虚空撃破斬等の瞬間移動より早い。

第1話「主人公設定」(後書き)

いかがだったでしょうか。

なにぶん初心者なもので、更新が遅くなると思いますが、暖かい目で見守ってください。

第2話「再開」(前書き)

やっと更新できました。

なかなか進めませんが、頑張ります。

それではどうぞ。

第2話「再開」

0071年

4月29日

ミッドチルダの街中にて

~~~~~

光司 side

僕は今日は仕事が休みなので、ミッドチルダの町を歩いていた。

「さうと、久しぶりの休みだしどこへ行こうかな。」

と意気揚々と町へくりだしたが……

「何でこうなるかな。」

そこには、茶髪でサイドポニーの髪型の女性と、腰ぐらゐまであるきれいな金髪の女性が、いかにもチンピラな感じの五人くらいの男に絡まれていた。

「なあなあ、俺たちといっしょにどっか行こうぜ。」

「私たちこれから友人の家に行くので失礼します。」

「そんなこと言わずにさあ。いいじゃんかよお。」

「あ、あの、やめてください。」

「『やめてください。』だって、かつわい〜。」

「悪いようにはしねえからよお。俺たちといっしょに来いよ。」

はあ。全く休日だと言うのに。仕方ないですね。

「あの、その二人いやがってるんならやめてあげたらどうですか！」

「んだあ、テメエは。」

「俺たちになんかようかよ。」

「てか、よくみると君もかわいいねえ。どう、俺たちと一緒にこない。」

「つて、この人たち僕を女性だと思ってるし……  
これは、少しお仕置きしますかね。」

「ちょっと、『お話』しましょうか……」

しばらくお待ちください

僕はその人たちを“かるく”のした。

「大丈夫ですか？」

「怪我とかありませんか？」

「ありがとうございます。おかげで助かりました。」

「強いんですね。そんなに綺麗なのに。」

「ほんとほんと。私ビックリしちゃった。」

はあ、やっぱりこの人たちも勘違いしちゃってるよ。



「はあ、それはどうも。ではこれで失礼します。」

と僕は立ち去ろうとするが、

「あ、あの。なにかお礼をさせてください。」

「そうですよ。助けてもらったのに、なにもしないなんて。」

「あ、いえ。そう言い訳には……」

「『』させてください!』」

「は、はい。」

こんなわけで、僕の休日が始まった。

この出会いが、僕のこれからを大きく変えることになることは、僕はまだ知るよしもなかった。

~~~~~

それから助けた女性二人と、買い物をしたり、食事をしたり、色々町を回った。

なんだかこの二人といると、懐かしい感じがしてとても不思議だった。

それに、二人ともどこかで見たことがあるようなないような・・・

そんなこんなで、今は二人の友人宅の前にいる。

「でもよかったですか？二人の友人の家にあがらせてもらうなんて。」

「大丈夫ですよ。私の友人は来る人を拒まない人なんですよ。」

「そうそう。だからきつと大丈夫です。」

「そう、なのかなあ？」

と、疑問に思いつつもインターホンを押す

ピンポン

「はい。今開けます。」

ガチャッ

「いらっしやい。よお来てくれたなあ二人とも。って、そっちの人はどちらさん？」

「ああ、この人はねえ、私たちがナンパされそうになったところを助けてくれた人だよ。」

「すっごく強いんだよ。」

「そうやったんかあ。ま、立ち話もなんやし、上がってや。そっちの人もどうぞ上がって下さい。」「は、はあ、ありがとっございませ。」

そう言ってその人は家の中に入っていった。

そして、あとの二人も、

「『ほらね。言った通りでしょ。』」

と言ってあとを追って入っていった。

「確かにそうですね。それじゃあ、おじやまします。」

そう言って、僕も3人のあとについていった。

~~~~~

「そう言えば、お名前なんて言うんや？」

「えっとあ、そう言えば聞いてなかったよね。」

「確かに、バタバタしてて自己紹介もできなかったね。私は、フエイト・テストロッサ。」

「私は高町なのはって言います。」

「うちは八神はやてっちゅんやで。」

あれっ、フェイト・テストロッサ？、高町なのは？、八神はやて？、  
ってまさか……

あはっ、まったくんだ2年ぶりの再開だったってことですか。

「あ、僕は……」

じゅじゅく……!

## 第2話「再開」(後書き)

最後はどうしようかと迷ったあげく、こんな形を取りました。

次もがんばります！

第3話「空港火災と新事実」（前書き）

大変遅くなりました。

そして、今までなく長くなりました。

それでは、どうぞ。

### 第3話「空港火災と新事実」

光司 side

「さてと、どうしようかな。」

僕は今、助けた二人の友人の家に一人でいる。  
と言つのも、話は十分前に遡る……

~~~~~10分前~~~~~

「あ、僕は……」

つとその時電話がなった。

「はい、もしもし。八神ですけど。……なんやて!! 分かり
ましたすぐ向かいます。」

「大変や!! ミッドの空港で火災が起こったんやけど、人手が足り
んで救助が間に合わんらしい。せやから、二人とも。」

「分かってるよ、はやてちゃん。早く救助に行こ。」

「おおきにな、二人とも。」

「あの、そう言う訳なので、ちょっとの間待ってもらえますか？」

「は、はあ。」

「ありがとうございます。それじゃあ、なのは、はやて、急ぐっ！」

「『うん。』」

~~~~~

と言う訳である。

「いいのかなあ、見ず知らずの人を家にひとりにしておいて。」

すると、僕にも電話がかかってきた。

「ん？、部隊長からだ。もしもし、はい、それで、・・・分かりました。すぐに向かいます。」

僕は外に出て、自分の右腕のブレスレットを見る。

「ザックス、行くよ。準備はいいね。」

「準備はできています、マスター。いつでもどうぞ!」

「よし、それじゃあ、セットアップ!」

「オーライ、セットアップ!」

そして僕は現場へと向かった。3人がいる、その場所へ。

~~~~臨海第8空港にて~~~~

なのはside

私とフェイトちゃんは休暇を利用してはやてちゃんの家遊びに来てただけど、行く途中にナンパされそうになって、そこを知らない女の人に助けってもらったりして、も〜大変だったの〜。

で、その人とはやてちゃんの家について、自己紹介しようとしたのはよかつただけど・・・

ちょうどその人が自己紹介しようとしたときに、私たちに災害救助の応援要請がかかって、今その現場にいるの。
まったくなんて間の悪い。

で、今はエントランスホールのなかを探しているんだけど・・・

「あ、いた。」

すると、一人で泣いている女の子を発見した。

「よかった、大丈夫みたいだね。助けに来たよ。」

「ふえ、あ、あの。」

「大丈夫。安全な場所まで、一直線だから。」

私はレイジンググハートをかまえる。

「いくよ、レイジンググハート！」

「オーライ、シューティングモード。」

ミシミシッ

「ディバイン、」

バキッ

「え、何！？」

突然、近くにあった像が女の子に向かって倒れてきた。

「あ、危ない！！」

「

私はとつさに女の子をかばってめを瞑る……

つてあれ？

像が倒れてこない？

私は恐る恐る目を開けると……

像がバインドで止められていた。

「あれ、でもだれが？」

~~~~~

光司 side

部長長から災害救助の要請を受けて、僕はとりあえず要求所者の反応があつたエントランスホールに行った。

「この辺りのはずなんだけど、……あ、いたいた!」

そこには要救助者である女の子と、砲撃を撃とうとしているのはさんがいた。

……つて、ここにいるとやばくないか!!

ちなみに今僕は空中にいて、なのはさんが砲撃を撃とうとしている直線上にいる。

……つは落ち着け!

ここは任せて次の要救助者のところへ行こう。

そう考えていると近くにあった像が倒れそうになっているのに気が付いた。

「っ、危ない!」

そう思った瞬間、非情にも像が倒れていった。

僕はすぐさま像にバインドをかけて倒れるのを止めた。

「ふう〜。危ないところでしたね。」

~~~~~

なのはside

「ふう〜。危ないところでしたね。」

そこには、深紅の甲冑を身に付けた騎士がいた。

「あの、あなたは？」

「あ、申し遅れました。僕は本局所属の魔導師で『紅蓮の騎士』と呼ばれていいる者で………
つて、それよりもここから脱出をしましょう！僕がバリアを張りますから砲撃をおねがいします！」

「分かりました。もう一度いくよ、レイジングハート！」
「オーライ、ロードカートリッジ。」

「デイバイイン、バスタアアア!!!」

「よしっ、それじゃあ早く脱出しよう!」

そう言って、私は女の子に手をさしのべる。
が、女の子は動こうとしない。

「どうしたの?」

「あ、あの、まだ中にギン姉が。」

すると騎士さんが

「落ちて着いて。まずは、自分の名前とお姉さんの名前を言ってみて。」

「はい、私はスバル・ナカジマって言って、お姉ちゃんはギンガ・ナカジマって言います。」

「なのはさん、ギンガ・ナカジマと言う子は救助されてますか?」

え、何で私の名前を……
って、今は答えなきゃ！

「ちょっと待ってください。……現在ギンガ・ナカジマ
と言っ子は救助されてないみたいです。」

「そうですか……。分かりました。なのはさん、スバルちゃん
をお願いします。僕はそのギンガ・ナカジマってを探してきます。」

そして女の子に向かって、

「大丈夫、君のお姉さんは必ず助けるから、安心して。」

「は、はい……！」

「ん、いい返事だ。それじゃあなのはさんお願いしますね。」

そう言っくと騎士さんは飛んでいってしまった。

「あ、あの、ちょっと……」

まだお礼も言っていなかったのに……

あと何で私の名前を知ってたんだろう？

それにあの人どこかであったような……

~~~~~

フェイス side

私となのはは休暇を利用して、指揮官研修をしているはやてのところに遊びに来ていた。

そして災害救助の要請があったので、私たちも救助に協力することになった。

「こちら通信本部、本局02応答してください。」

「はい、こちら本局02テストロッサ・ハラオウンです。」

「8番ゲート付近に要求所者の反応が出たんですが、局員が進めないんです、お願いできますか？」

「8番ゲートですね、了解です。バルディッシュ！」

「ルート検索完了。2分以内に到着します。」

そうして私は8番ゲートに向かった。

「管理局です！誰かいませんか!？」

「い、ここです・・・」

そこには小さなバリアを張られた数人の要求所者がいた。

「大丈夫ですか!？すぐに安全な場所までお連れしますね。」

「あ、あの、このバリアを張った魔導師の女の子が妹を探しに行く  
と言って、あっちの方に・・・」

「分かりました。皆さんをお送りした後すぐに向かいます。」

~~~~~

光司 side

僕は今ギンガ・ナカジマと言っ子を探している。

「いつたいどこにいるのかなあ？」

と言いつつ僕は非常階段のような場所にたどり着いた。
すると一人の少女を発見した。

「あ、あの子かな？」

そう思って近づこうとすると、突然少女の足元が崩れ落ちた。

「キヤアアアアアア！！」

「フラッシュ・ムーヴ。」

僕は光速で移動して少女を抱き抱えて助けた。

「危ないところだったね。怪我はない？」

「は、はい。大丈夫です。」

「そう、それは良かった。君はギンガ・ナカジマさんだね。」

「え、・・・あ、はい。でもどうして私の名前を？」

「妹のスバルちゃんから聞いたんだよ。」

「あ、あの、スバルは、スバルは無事なんですか!？」

「大丈夫。さっき救助してきたから。さあ、君も。」

「はあ、良かったあ。」

「妹さん思いなんだね。」

そう言ってギンガちゃんに笑いかける。

「は、はい!・・・あの、きよ、恐縮です。」

あれ？、心なしか顔が赤いような？
そうか！

火災のせいで熱でもあるんだな。早く救護の人に渡さないと！

「さあ、早く脱出しよう！」

すると突然近くの壁が壊れる。

「っ！誰だ！」

「管理局です！……っであれ？そちらこそどなた？」

「あ、申し遅れました。僕は本局所属のってそんな場合じゃない！
って、本日二回目じゃないか！」

そ、そんなことより、この子をお願いします。」

僕がギンガちゃんを渡そうとすると、突然周りの壁が壊れてきた。

~~~~~

フェイトside

私は数人の要求所者を送り届けた後、バリアを張ったと言う女の子

を探していた。

そして一枚の壁を突き抜けた。

ズガアアアアン

「っ！誰だ！」

え、誰かいる！  
とりあえず、

「管理局です！……っであれ？そちらこそどなた？」

そこには深紅の甲冑を身に付けた騎士がいた。

「あ、申し遅れました。僕は本局所属のってそんな場合じゃない！  
って本日二回目じゃないか！  
そ、そんなことよりこの子をお願いします。」

「は、はあ。」

そう言って、女の子を受け取るうとすると、突然周りの壁が壊れてきた。

「っ！しまった。」

「フラッシュ・ムーヴ。」

突然の事で何が起こったのか分からなかった。

気が付くと、私と女の子はその騎士に抱き抱えられていた。

「ふゝ。なんか今日こんなのはっかりだなあ。大丈夫ですか、フェイトさん？」

「ふえ。あ、はい、大丈夫、です……。」

あれ、何で私の名前を知ってるんだろう？

それにどこかで会ったことがあるような……。

「良かった、それは何よりです。」

そう言っつて彼は私に笑いかけた。

「……………」

その笑顔に私は見とれてしまった。

「っ、大丈夫ですか？」

~~~~~

光司 side

「良かった、それは何よりです。」

「……………」

あれ、なんか変なこと言ったのかな。

「っ大丈夫ですか？」

あわててフェイトさんに聞く

「だ、だ、大丈夫です!!!それよりも、あの、お、お、下ろしていただけますか？」

そう、今僕は二人を抱き抱えている状態なのだ。

「っは!!!、す、す、すみません!!!!い、今放しますね。」

僕はあわてて放す。

「そ、それよりもこの子をお願いします。」

僕は素早くギンガちゃんを渡した。

ギンガちゃんはさっきので気絶しているようだった。

「あ、はい。分かりました。」

「それじゃあ、僕は他の人の救助に向かうのでこれで。」

僕は恥ずかしさのあまりその場を逃げ出した。

~~~~~

フエイトside

「それじゃあ、僕は他の人の救助に向かうのでこれで。」

そう言つと、彼は素早く行ってしまった。

「あ、あの。まだお礼も言っていなかったのに……。でも、あんな

に慌てることないのになあ、女同士なのに。」

（実は気付いていないフェイトでした。）

~~~~~

光司 side

「これで全員かな。こちら本局00、要求所者全員救出完了です。」

「ありがとうございます。もうすぐ、そちらに魔導師部隊が行きますので合流して帰還ください。」

「了解です。」

そう言って通信を切る。

「さてと、脱出しますか。」

そして、僕は外に出る。すると、ちょうど本局の魔導師部隊が到着した。僕はその一人に

「このブロックの避難完了です。」

「分かりました。八神一尉、最終ブロックの消火お願いします。」

ん……八神一尉？

まさかね。

「来よ氷結の息吹、アーテム・デス・アイセス！！！！」

すると、キューブのようなものが発射され、瞬時に熱を奪っていった。

すると、魔導師部隊の二人が

「す、すげえ……。」

「これが、オーバーSランク魔導師の力……。」

「ふう、ようやく終わりやな。ほなみんな帰るか。」

「『はい。』」

こうして、ようやくこの空港火災が一段落ついた。

~~~~~

はやてside

うちは今やつと最終ブロックの消火を終えて帰還中や。

途中で本局の魔導師部隊が来てくれへんかったら危なかったなあ。

ん、でもなんか忘れてるような・・・

そやった!!

うちの家に人を待たせとんのすっかり忘れてもった!

どないしよう、めっちゃ怒ってはるやろうなあ。

はあ、憂鬱や。

そんなこんなで、指揮官のナカジマ三佐の所へ着いた。  
そこにはなのはちゃんとフェイトちゃんもいた。

「ナカジマ三佐、救出者の救助、及び消火活動終わりました。」

「ああ、ご苦労だったな嬢ちゃんたち。休暇だったのに悪かったなあ。そっちの騎士さんもご苦労様だ。」

そう言いつと、三佐は後ろの方に目を向けた。

「いえ、大丈夫ですよ。」

そこには深紅の甲冑を身に付けた騎士がいた。

ん、誰やるつ？

あんまり見たことない人やけど。

そしたら、なのはちゃんとフェイトちゃんがこっちにやって来た。

「『はやて(ちゃん)!!』」

「あ、なのはちゃん、フェイトちゃん。二人とも大変やったなあ。」

「ほんとほんと。一時はどうなることかと思ったよ。」

「でも、要求所者にたいした怪我もなくて良かったね。」

「ほんまやなあ。そや！、ナカジマ三佐、その人は？」

「うちはナカジマ三佐に今三佐とはなしている人について聞いてみた。」

「『あー！ー！ー！』」

「あのときのー！ー！』」

「なのはちゃんとフェイトちゃんが叫ぶ。」

「なんや二人とも知り合いなんか？」

「知り合いというか、危ないところを助けてもらったの。」

「わ、私も。」

「そやったんか。しかし二人とも、今日はよう助けられるなあ。で、ナカジマ三佐、誰なんですか？」

「ん？、ああ、こいつの事か？こいつはなあ、本局じゃちょっと有名でなあ、『紅蓮の騎士』って愛称で通ってるんだ。うちの108部隊でもけっこう有名でなあ。まあ俺は昔からこいつの事知ってるん

「だけだよ。いつの間にか有名になりやがってコイツ！」  
「そう言つと、三佐は騎士の人の頭をわしずかみにする。」

「や、止めてくださいよ三佐。僕は別に……」

「『紅蓮の騎士』っちゅうたらめっちゃ有名ですよん！」

「そうそう、ほかに『紅き閃光』とか『灼熱の聖騎士』って愛称がついてるよ。」

「なんかすごいねえ。こんな有名な人に会えるなんて。」

「ついでだ嬢ちゃんたち、そいつに自己紹介でもしな。気軽なやつだから普通にしていぞ。」

「あの、三佐。そういうのは僕が言つものじゃないですか。」

「そうですか。うちは八神はやてって言います」

「高町なのはです。」

「フェイト・テストロッサ・ハラオウンです。」

「・・・・・・・・」

どないしたんやろ？

自己紹介しとないんかな？

「おい、どうした？自己紹介ぐらいしてやったらどうだ？」

~~~~~

光司 side

「おい、どうした？自己紹介ぐらいしてやったらどうだ？」

ナカジマ三佐が言う。

そして三人が心配そうに見てる・・・

ま、言ったら驚くと思うけど、

「では改めて、本局所属、一等空尉の神谷光司です。久しぶりですね、なのはさん、フェイトさん、はやてさん。」

「『・・・・・・・・・・って、ええええー！！！！！！』」

やっぱり相当ビックリしてる。

「か、神谷光司って、こ、こ、光司君?!」

「嘘だよ!だって、こ、光司は男の子だもん!」

「あゝフェイトさん……僕、こんなんですけど男ですよ。」

「確かによう見れば分かる気するけど、光司君より女の子っぽくないなあ。」

「はやてさん、それは言わないで下さい。」

「なんだ。お前ら知り合いだったのか。お、いい忘れてた。お前らもう帰っていいぞ。後は俺たちでやつとくから。」

「あ、ありがとうございます。」

「でもいいんですか、三佐?僕らも手伝いますよ。」

「いいってことよ。それに、積もる話もあるんだろ。ほら、行った行った。」

こうして今回の空港火災は終わりを告げた。

第3話「空港火災と新事実」（後書き）

なんかあまり進んでないように思えるので、更新がんばります。

それではまた。

第4話「別れと新たな決意」(前書き)

ようやくこれではじめのプロローグの部分みたいのが終わりました。

いやあ、かなり長くなってしまいました。

それでは、本編をどうぞ。

第4話「別れと新たな決意」

光司 side

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

僕は今はやてさんの家にいる。

え、なんでしゃべらないかって？

答えは簡単。

目の前にいる約一名が怖いからです。

「それで、なんで光司君は魔導師になったことを黙ってたの……
？」

「え、えと、それは皆さんに、迷惑をかけたくなかったん、です……
」。

僕はおそろおそろ答えた。

するとなのはさんはため息をついて、

「まあ、光司君ならそう言うと思ったけど、私たち友達だよ!! 友達なら迷惑かけ合ってたっていいじゃない!! それに、友達はしょ……

」。

なのはさんは顔が真っ赤で今にも泣きそうだった。

「え、あ、そ、その、と、とにかく、すみません。」

「まあまあなのはちゃん。光司君もこう言ってるんやし。許してあげたら。」

「そうだよなのは。光司にだって色々あったと思うし、ね?」

「まあ、二人がそう言うなら・・・でも光司君、今度こんな事があつたら、『お・は・な・し』だからね。」

よかった、どうやら許してくれたみたいだ。

最後に笑顔で怖いことを言っていたけど・・・

「それじゃあ、今日はもう遅いし、これで失礼します。」

僕が席を立つとすると、

「え、なに言ってるん？光司君はここに泊まるんやで。」

「……………はえ？」

思わず間の抜けた声が出てしまった。

「せやから、光司君は今日ここに泊まるんやで。」

「はいい……………!!!!!!???」

「せつかく二年ぶりに会ったんだから、久しぶりにいいですよ。」

「しかしですね……………」

「『光司（君）は私たち（うちら）と一緒にいるのが嫌なの（なんか）?』」

「なに言ってるん？うちらと一緒に寝るんやで。」

という爆弾を投下した。

「えええええー！ー！ー！！！」。

な、なに言ってるんですか。い、い、一緒に寝るなんて／＼／＼。だいいち、僕らはまだ15ですよ。そ、そんなのまだはやすぎます。・・・」

僕が顔を真っ赤にして答えると、はやてさんはこらえきれず、吹き出しながら

「アツハハハハ！！いやあ、冗談や冗談。光司君は奥の空き部屋のベットをつこうてくれるか？
しっかり、相変わらずからかいがあるなあ。めっっちゃ真っ赤やん光司君。」

そう、今のははやてさんの悪い冗談だったのだ。

「脅かさないくださいよお。はあ全く、はやてさんは相変わらずだなあ。それじゃあ、おやすみなさい。」

「うん。おやすみなあ。」

そう言って、僕は三人と別れた。

そして部屋に着くとすぐに横になった。

「今日は色々あったなあ。もう寝よ。」

そうして僕の意識は薄れていった。

寝ているベッドが一人用にしては大きすぎるといふことには気付かず……

~~~~~

なのはside

私たちは光司君と別れた後、部屋に着いてもすぐには寝なかった。

するとフェイトちゃんが

「ねえ、はやて。さっきのってホントに冗談なの？」

それは私も思った。あのはやてちゃんならやりかねない。私は頷いてはやてちゃんを見る。

「もちろん。冗談やないで」

やっぱり………って、

「『ええー！ー！』」

「でも光司君に怒られるよ！」

「それは大丈夫や。光司君が寝てる間に忍び込んだらええねん。」

そついう問題じゃないと思うんだけど………

「それにな二人とも、光司君には今日逃したらあんまり会えへんと思うで。」

「『た、確かにそつかも！』」

「せやろ！ほんなら今から光司君のベットへゴーや。」

「『了解ッ！ー！』」

~~~~~

光司 side

時間はたつて朝の六時

ピュピュピュピュ、ピュピュピュピュ、ピュピュピュピュ、

セツトした目覚ましが鳴っている。

「んあ、も、もう朝か。」

そう言つて、僕は寝ぼけながら、目覚ましを止めよう手を伸ばす。

ムニユッ

「んあ、これじゃない。」

再び手を伸ばす。

モニユッ

「うっん。これでもない。どこに置いたっけ？」

何かおかしいので目を擦りながら確認してみる。すると……
驚愕の事実が見えた！！

「な、なんで、三人がここで寝てるんだ？」

ベッドの上には三人が僕に寄り添うようにして寝ていた。

「お、落ち着け！と、とりあえず、目覚ましを止めよう。三人が起きたたいへんだ。」

僕はとりあえず、目覚ましを止めて、今おかれている状況を把握した。

「えっと、次はこの場から脱出しよう。」

そう思いベッドから降りようとするとき、

「『ん、うん。』」

なのはさんとフェイトさんが同時に抱きついてきた。

「ひ、ひゃあ／＼／＼！！」

思わず変な声が出てしまった。

僕は急いで支度をして書き置きをして、家を出た。

~~~~~

フエイトside

だだいま時刻は7時

私が起きると二人はもう起きていた。

「あ、おはよう、二人とも。」

「あ、おはようフエイトちゃん。光司君からの書き置きがあるから、みんなで読もうと思って待ってたんだよ。」

書き置き？

いったいなんだろう？

「じゃあ、読むよ。『昨日は久しぶりに三人に会えて嬉しかったです。今日は仕事があるので先に失礼します。また、いつか会える日を楽しみにしています。では、それまで元気でね。光司より』だって。」

そっか、また、行っちゃったのか。

今度はいつ会えるんだろう……

すると、はやてが意を決したように言い始めた

「あんなあ、なのはちゃん、フェイトちゃん。うち、やっぱり自分の部隊を持ちたいんよ！そやから、そんな時には、なのはちゃん、フェイトちゃん、協力してくれへんか！？……も、もちろん二人の将来とか、あるんは、分かってるんやけど……」

何を言い出すかと思えば、全く答えは決まってるじゃない。

「はあ。はやてちゃん、何を水くさい。私たち小学校からの付き合いでしょ……」

「そっそっ……！」

「だいいち、誘ってくれなかったら私怒るよ！ね、フェイトちゃん。」

「うん。」

「ありがとうな。なのはちゃん、フェイトちゃん。」



「あ、それと、その時には、光司も一緒に。」

「もちろんや!」

「何だか楽しくなってきたね。よし、じゃあ光司君に負けないように、私たちも頑張っていこ!」

「『おー!』!」

こうして、光司との久しぶりの出会いを通して、私たちはまた一歩前に進みます。

#### 第4話「別れと新たな決意」(後書き)

後半の方のセリフはだいたいこんな感じだったかな、て感じでした。書きました。

さて、次回から結構とびます。

そして、オリジナルも少しずつ加えていきますのでどうぞよろしく。

第5話「紅蓮の騎士、再来」(前書き)

ここからちょっとずつオリジナルが入ってきます。

それでは、ごきげん。

## 第5話「紅蓮の騎士、再来」

0075年

ミッドチルダ某所

光司 side

なのはさん達と久しぶりに会ってはや5年。僕はいつものように仕事をしていたところ、部隊長に呼び出された。

「なんだろう、僕に用って？」

コンコンッ

「神谷です。」

「おう、入っていいぞ。」

「失礼します。」

すると真剣な表情で部隊長が話し始める

「突然ですまないんだが……」

ゴクッ

「お前は、明日付けで転勤になった。」

「……は、はあ。」

僕はもつと大変な事かと思ったので、拍子抜けしてしまった。

「それで、転勤先なんだが、ここだ。」

そう言って、部隊長は一枚の紙を渡した。

「えっと、なにに……機動……六課？」

そんな部隊聞いたことないけど。

「そうだ。この春から試験運用され始めた部隊だな。上の方は試験運用の部隊だからって心配だな。それで、お前を配属させることにしたんだと。」

「なるほど。それで、メンバーは？」

「そいつは、これを見る。」

そう言って、部長はパソコンの画面を見せてくれた。

「そ、そんな事って……。」

「なんだ、知り合いでもいたのか？」

「え、ええ、まあ。」

「そいつはよかったじゃねえか。ま、新しい部隊で頑張んな。」

「はい！今までありがとうございました。」「うん。今までのご苦労。」

そう言って、僕は部屋を立ち去ろうとすると、

「おう、神谷！」

僕は突然呼ばれて、驚いて振り向いた。  
すると部長が、

「かぜ、引くんじゃあねえぞ。」

「は、はい！部隊長もお元気で。それでは失礼します。」

部隊長と最後の挨拶を交わし、僕は部屋を出た。

そして、僕の人生はまた大きく変わる事となる……。

~~~~~

光司が機動六課に配属が決まった日から1日たった。

なのはside

私は、今年の春から試験運用になったはやてちゃんの部隊、『機動六課』のスターズ分隊の隊長をしています。

フォワード達の初任務から1日たって、私は今ガジェットの反応があった空域にいます。

「こちら、スターズ1。ガジェットを発見、迎撃します。」

「了解。でも、気をつけてくださいね。」

「分かってるよ。心配性だなあ、シャーリーは。」

と言って私は通信を切る。

「それじゃあ、いつくよー！！デイベイイイン・・・バスターー
！！」

そうして、私はガジェットを落としていった。

しばらくして、数は多かったけどなんとか全てのガジェットを落と
した。

「こ、こちらスターズ1。ガジェットを全滅しました。」

「了解。・・・ガジェット全滅を確認。お疲れさまです、なのは
さん。疲れているようですが、大丈夫ですか？」

「う、うん。大丈夫だよ！これより帰還します。」

そう言って通信を切ろうとすると、

「待ってください！前方よりガジェット反応、来ます！！」

「こちらも肉眼でガジェットを確認。これより迎撃します。」

そう言って、迎撃しようとする、現れたのはあのガジェットだった。

「あ、あれは……。」

~~~~~

はやてside

うちは念願だった自分の部隊を、この春から持つことになった。

今日は新人達の初めての戦闘から1日たった日、ガジェットの反応が出たのではちゃんが出ることになった。

「うん。大丈夫だよ！これより帰還します。」

うん。いつも通りなんにもなかったようやな。

「待ってください！前方よりガジェット反応、来ます！！」

「こちらも肉眼でガジェットを確認。これより迎撃します。」

すると突然シャーリーが、

「た、大変です!!このガジェット、前になのはさんを落とした機体です!!」

なんやて!!

あかん、なのはちゃんが危ない!!

「フェイトちゃん、ヴィータ。二人とも出れるか?」

「うん!」

「いつでも行ける!」

「ほんなら二人とも、今すぐ助けに・・・その必要はありません。僕が行きます!」

この声・・・

どっかで、

「本局所属、神谷光司二等空佐、元時刻をもってこの機動六課に配属になりました。」

こ、光司君って・・・

「『ええーーーー!!!!!!!!!!』」

~~~~~

なのはside

私は突然出てきたガジェットにとても苦戦した。確かに、前に落とされたつてもあるけど、さっきの戦闘で体力をかなり消耗してしまっていた。

「プロテクション！」

ガジッジジジジジ

「はあ、はあ。思ったほどつよくないけど。このままじゃあ・・・」

バライイン

「っ！。しまった、キヤヤヤー！！！」

突然バリアが破れ、私は海に落とされそうになったが、なんとかギリギリで止まった。

そして、あのガジェットがやって来る。

「も、もうダメ・・・かも・・・」

そう思って、目をつむりそうになった時、

ズガアアアン

なにかを貫く音がしたので、目を開けてみると・・・

ガジェットに一本の赤い槍が刺さっていた。

そして、

「大丈夫ですか？なのはさん。」

空港火災の時に助けてくれた、あの紅い騎士がいた。

~~~~~

光司 side

僕は六課に挨拶をしようとすると、なのはさん危ないことを知った。

「ほんなら二人とも、今すぐ助けに・・・その必要はありません。僕が行きます！」

「本局所属、神谷光司二等君佐、元時刻をもってこの機動六課に配属になりました。」

「『ええー！！！！』」

なんか大分驚いているようだった。

「なのはさんの場所を教えてください・・・分かりました。それでは。」

僕は通信を切る。

「ザックス、久しぶりにアレをいくよ。」

「アレ、ですか？・・・分かりました。いきますよ！」

「『セットアップ！リミットブレイク！』」

そうしてセットアップしてなのはさんの場所に向かった。

しばらくすると、なのはさんが、ガジェットに海に落とされそうになり、ギリギリで止まっているのが見えた。

するとガジェットがなのはさんに向かっていている。

「っ、危ない！フレイム・ランサー、・・・シュート！！」

僕は一本の赤い槍を出し、ガジェットめがけて投げた。

ズガアアアン

見事に命中。

しかし、ガジェットはいったん止まったがまだ動けるようだった。

「大丈夫ですか？なのはさん。」

「え、あ、も、もしかして、こ、光司君？」

「はい。なのはさん、ここは僕に任せてください。」

「で、でも、あのガジェット強いよー！」

見ると、なのはさんのバリアジャケットは所々破れ、血も出ていた。

「大丈夫ですよ。危ないですから、下がっててください。」

そう言ってガジェットの方を向き殺気をだす。

ガジェットの方も標的を僕にかえ、突っ込んできた。

「この鉄屑が！一瞬で終わらせましょう。フレイム・ランサー……  
シュート！」

僕はさらに赤い槍を4本出し、ガジェットに向かって発射する。

ガジェットは刺さってもなお突っ込んでくる。

「プロテクション。……ランサー……バースト!!!」

次の瞬間刺さっていた槍が爆発し、ガジェットは粉々になっていた。

「リミットブレイク解除。ふう、さて帰りましょう、みんなのこと  
るへ。」

「うん……」

こうして、僕の六課での生活が幕を開けた。



第5話「紅蓮の騎士、再来」(後書き)

今回はただ一つ、

感想待っています。

第6話「機動六課での騒がしい初日」(前書き)

1日分を書いてたら長くなってしまいました。

それにバトルが上手く書けません。

それではどうぞ。

## 第6話「機動六課での騒がしい初日」

機動六課in部隊長室

光司side

僕は今部隊長室にいる。

一応、正式にはやてさんに挨拶するためだ。

ちなみに、フェイトさんも一緒にいる。

なのはさんは治療中だ。

「改めて、本日よりここ、機動六課に勤務する事になりました、神谷光司二等空佐です。よろしくお願いします。」

「こちらこそ、神谷二等空佐。……とまあ、堅苦しいんはここまでや。ようこそ光司君!!」

「はい！これから、色々迷惑かけると思いますが、よろしく願います。」

「しっかし驚いたわあ。いつの間にか、二等空佐やて!？」

「そうだよな。しかも、さっきの戦闘もすごかったし！」

「あ、ありがとうございます／＼でも、まだまだですよ。」

「そや、みんなにも紹介せな！」

「そうですね。僕もみんなの顔と名前を知りたいので。」

「よっしゃ!!ほんなら早速行こか?!」

そうして、三人でその場へ向かった。

~~~~~

六課の通路

三人で歩いていくと、前方からピンクの髪のポニーテールの女性が来ている。シグナムさんだ。

「あ、お久しぶりです。シグナムさん。」

「おお、神谷か?!久しぶりだな、5年ぶりぐらいか？」

「はい！相変わらず元気そうですねによりです。」

「そう言うお前は随分女々しくなったな。」

「ガーーーーーン!!!!」

僕はせいしんに100のダメージを受けた。

「冗談だ。……そうそう、さっきの戦闘見せてもらったぞ、まさか魔導師になっていたとはな。……そうだ、今から模擬戦をしないか?！」

シグナムさんは目を輝かせながら聞いてくる。

「い、いえ。僕これから用事がありますから。ね、はやてさん！」

はやてさんに助けを求める。

「かまへんよ。」

ダメだった。

「ありがとうございます、主。では早速行くぞ！」

シグナムさんは意気揚々と僕を引っ張っていく。

「え、あ、ちょよ、ちょっと。はやてさん、フエイトさん、助けてええ~~~~~」。

こうして僕はシグナムさんに連行された。

「でもよかったの、はやて？みんなに紹介するんじゃないの？」

「普通に紹介してもおもしろいやろ。せやから……」

「なるほど、それはいいねえ!!」

「せやろ!?!さあ、忙しいなるで~~~~~!!」

はやてのプロジェクトが始動した。

~~~~~

訓練スペースにて

僕は今訓練スペースにいる。

そして僕の目の前にはすでにバリアジャケットをきたシグナムさんがいた。

「さあ、神谷。いつでもいいぞ!」

シグナムさんはすごくはりきっている。

「は、はあ。」

シグナムさんははりきっているようだが、僕は気が進まない。なぜなら、女性と戦うのは苦手だからだ。

でも、本気を出さないのもなあ……

と、僕が悩んでいると

「いつまでじっとしている。さっさと来い!」

悩んでいる暇では無いようですね。

「じゃあ行きますよ!ザックス、セットアップ!ブレイドフォームム。」

「オーライ、バリアジャケットセットアップ!ブレイドフォーム。」

そして僕もバリアジャケットをセットアップして、剣を抜いた。

「ほう、お前も剣を使うのか。面白い、ではいくぞ!」

「はい!」

そうして二人とも一気に間合いを詰める。

「はあああああ!」

「たあああああ!」

そして両者降りかぶり、

「『はあ!』!」

ガキイン!!

刃が変わる

「私の一撃を耐えるとは、流石だな。」



「それは、どうもっ」

そう言って僕は少し間合いを取る。

するとシグナムさんがすぐに攻撃をしかけてきた。

「はぁ！..！」

僕はその攻撃を避けるがシグナムさんはまたすぐにしかけてきた。

そうしてしばらくの間、シグナムさんがしかけ、僕が避けるか受け止めるという攻防が続いた。

「どうした神谷！攻撃してこないのか!？」

「ええ、女性を攻撃することは僕の流儀に反しますから。」

「そうか。・・・ならば、レヴァンティン！」

「explosion。」

ガチャッ

「紫電……一閃!!!」

シグナムさんは剣に炎を纏って攻撃してくる。

「っこれはやばい!ザックス。」

「オーライ、マスター。」

そうして、剣に赤いオーラがやどる。

「紅蓮……一閃!!!」

再び二人の刃が交わる。その瞬間

ドカーーン!!!

爆発が起こり、二人とも吹き飛ばされた。所々バリジャケットが焦げている。

「はぁ、はぁ。やるな神谷!正直ここまでやるとは思っていなかった

たぞ。」

「はあ、はあ、あ、ありがとうございます。」

「これで終わりにするぞ。レヴァンティン！」

「シュランゲンフォーム。」

「はああああ！！飛竜・・・一閃！！！」

するとシグナムさんの刀の刃が伸びて攻撃してきた。

「っ、まずい！！カートリッジロード。」

ズドオオオン！！

~~~~~

シグナム side

ズドオオオン！！

「やったか？」

そう思つて見回すが辺りは土煙で見えない。

すると、私の背後に気を感じた。

「っ！そこか！？」

そう思い、剣を振り刃があたつた瞬間

ドカアアアン！！！！

「っ、な、なに！？」

爆発で私は吹き飛ばされ、着地した瞬間に剣を突きつけられた。

「フッ、私の負けだな。」

「は、はい。」

「しかし光司？さっきのはなんだったんだ」

「あ、あれはですね。」

回想

光司 side

「っ、やばい！カートリッジロード。」

「オーライ！」

僕はシグナムさんの攻撃が当たる前に虚空撃破斬でシグナムさんのところに一気に行きシグナムさんに攻撃した。

「っ、な、なに！？」

攻撃があたった瞬間シグナムさんは吹き飛んだ。
だが、シグナムさんがこれで終わるとも限らないので、

「フラッシュ・ムーヴ。」

フラッシュ・ムーヴで先回りをして、背後から剣を突きつけた。

~~~~~

回想終了

「と、まあこう言うわけです。」

「なるほどな、さすが二等空佐と言うわけだ。」

「いえ、僕だってあの攻撃を受けていたらやばかったですよ。」

「まあ、そう謙遜するな。今日は来たばかりなのにすまなかったな。ありがとう。また相手をしてくれ。」

「僕でよければいつでも。」

「ふう、ではシャワーでも浴びに行くか。」

「はい。」

こうして、シグナムさんとのいきなりの模擬戦も終わり、二人でシャワー室に向かった。

~~~~~

機動六課の通路にて

僕がシグナムさんと歩いていると、

すると、訓練を終えたばかりであろう四人の少年少女たちとはちあつた。

「ん？、お前たち、もう訓練は終わったのか？」

シグナムさんが聞くと、前の方にいるオレンジの髪の少女が答える。

「そうですねですよ。いきなりなのはさんが『今日の訓練はこれで終わり！』って言ったものですから。」

続けて青い髪で短髪ね少女が答える。

「そうそう、びっくりしちゃったよね〜。」

あとの赤い髪の少年と、ピンクの髪の少女も後ろで頷いている。

すると、こちらに気付いたようで、青い短髪の少女が

「あの、シグナム副隊長。そっちの方ってもしかして……」

「ん？ああ、そういえば初対面だったなあ。ほら、自己紹介してやれ。」

「はじめまして。本日からここ機動六課でお世話になりました。神谷光司です。うーんと、『紅蓮の騎士』とか、『紅き閃光』とか、『灼熱の聖騎士』って言った方が分かりやすいかな。」

「『………つて、えええええー！！！！！！』」

四人ともかなり驚いているようだった。

「『紅蓮の騎士』つてあの！？」

「本局で知らない人はいないとされる！」

「で、でもそんな人がなんで！？」

「あれ、確か『紅蓮の騎士』つて女性って噂が……」

なんか口々に色々言ってるなあ。

「ここらお前ら、神谷が困ってるぞ。それに、自己紹介もまだだろつ。」

シグナムさんが言うと、四人がはっとしたように答える。

「はじめまして。ティアナ・ランスターです。」
「初めにオレンジの髪が少女が答えた。」

「エリオ・モンディアルです。」

続けて赤い髪の少年が答える。

「キャロ・ル・ルシエです。あの、お会いできて嬉しいです。」

次にピンクの髪の少女が答える。
うん、嬉しいことを言ってくれる。

「あ、あの、スバル・ナカジマです。」

最後に青い短髪の少女が答えた。
でもこの子どっかで見えたような……

「あ、あの、私4年前の空港火災の時に助けていただいたんですけど、覚えてないですかね？」

ん？4年前の空港火災……

ああ、あの時の……！

「ああ、覚えているよ。大きくなったね。」

「あ、ありがとうございます！えと、もうちょっと質問いいですか？」

「こら、スバル、あんまり聞くと失礼でしょ……！」

「え……、だって……。」

「あ、あの、僕も質問いいですか？」

「わ、私も。」

「ああ、いいよ。とりあえず、歩きながら話そうか。」

「『はい、ありがとうございます!』」

こうして、計6人でシャワー室に向かって歩き始めた。

そして、そうこうしてるうちにシャワー室に着いた。

「あ、神谷二佐、部隊長からこのあと案内するようになんて言われてるんですけど・・・」

はやてさんが?
なんだろうな?

「分かった、じゃあ待ってるよ。」

「恐れ入ります。それでは、また。」

こうして、四人とわかれてエリオと一緒にシャワー室に入った。

~~~~~

シャワー室inn男子

「あ、あの神谷二佐はどう言った魔法を使うんですか？」

エリオがさっきの続きの質問をしてきた。

「僕は古代ベルカ式の魔法だよ。武器としては剣と槍になるかな。あ、あと、そんなにかしこまらなくていいよ。僕は階級は気にしないから。」

「は、はい。だったら、光司さん、と呼んでもいいですか？」

「うん、それでいいよ。あ、じゃあそろそろ上がろうか？」

「はい！」

こうして、二人でシャワー室を出た。

~~~~~

シャワー室inn女子

ティアナside

「はあ、覚えててくれたんだあ。嬉しいなあ。」

さっきからスバルの顔が緩みっぱなしだ。

「スバル、あんた顔が緩みっぱなしよ！」

「えへへ／＼。」

「でも、しょうがないですよ。だってあの『紅蓮の騎士』に会えたんですから。」

まあ、私も嬉しかったけど、

「まあ、それもそうね。でも、神谷二佐の前では直すのよ！」

「はい。」

全く、いつもこうなんだから。

「で、あれ？シグナム副隊長は？」

「そういえばいませんね。先に出たんじゃないですか？」

「それじゃあ、私たちも出ましようか。」

「『うん。(はい)』」

こうして、3人でシャワー室を出た。

~~~~~

光司 side

「.....」

「.....」

「遅いですね。」

「まあ、女性はこういつの長いからねえ。」

僕とエリオは先にシャワー室を出て暫く待っている。

待たせては悪いと思い、髪は乾かさずに後ろの髪も結んでない。

すると、シグナムさん以外の3人が来た。

「あれ？シグナムさんは？」

「多分先に出ていかれたと思うんですけど、………神谷二佐  
ですか？」

3人は僕を見てキョトンとしている。

「うん、そうだけど。どうしたの？」

「その、なんと言いますか………」

「あゝ、その………」

「とっっても………」

「『女性みたいだなあと。』」

「ガーン！！！！」

僕は再び精神に100のダメージ。  
そして、僕はその場に崩れ落ちた。

「あ、その、すみません!!」

ティアナが必死で謝ってる。

「あ、いんだよ。もう、慣れてるから。」

そう言っつて、ゆっくりと立ち上がる。

「さて、確かはやてさんが呼んでるんじゃないかな？」

「そうでした！早速案内します。」

こうして4人である場所へ向かった。

~~~~~

機動六課inある場所

僕らはある扉の前に来ている。

「……………本当に、JJJJ?」

「は、はい。ここのはずなんですけど・・・」

「でも確かここって食堂だよな。」

「まあ、とりあえず、入って見ようか。」

ガチャッ

パン！！！！

「『ようこそ、機動六課へ！！！』」

「！！！！！！！！？？？？」

突然クラッカーがなってはやてさん、なのはさん、フェイトさんを
はじめとする六課の人たちが全員集合していた。

「ど、どうしたんですか、皆さん？」

「なに言ってるねや。光司君の紹介を兼ねたパーティーに決まってるやん！」

パ、パーティーって、それでいいのか機動六課！！

「『さあさあ、主役は前だよ。』」

そう言われ、なのはさんとフェイトさんに押されて、前の方に来させられ、グラスを持たされた。

「では、本日より機動六課に勤めることになりました、神谷光司二等空佐です。まあ、階級を気にせず気軽に話してください。」

パチパチパチパチパチパチ

「ほんなら、乾杯の音頭を光司君にお願いしよか。」

「では、カンパニー!!!」

「『カンパニー!!!』」

こうして、僕の歓迎パーティーが始まった。
しかしみんななんかよそよそしい。

するとそんななか、男女四人組が近づいて来た。

「『神谷二佐』。』」

「は、はい!!!」

僕は突然話しかけられたのでびっくりした。

すると、眼鏡をかけた茶髪の女性が話しかけてきた。

「はじめまして。シャリオ・フィーニノって言います。六課ではデバイス関係やってます。あ、みんなからは『シャーリー』って呼ばれてます。」

次に茶髪で短髪の女性がしゃべった。

「はじめまして、アルト・クラエッタです。通信士やヘリパイロットなんかをやってます。」

続けて紫髪の短髪の女性がしゃべった。

「あ、あの、はじめまして。ルキノ・リリエって言います。六課では通信士をやってます。よろしくお願いします。」

すると今度は3人を止めたかっただかのように、眼鏡をかけ銀髪の男性が3人に話しかけた。

「もう、3人とも、それは失礼すぎるよ。すみません突然。僕は式官のグリフィス・ロウランと言います。お会いできて光栄です。」

「いや、いいんだよ。それより、みんな今日からよろしくね。あと、僕は光司でいいよ。」

「そうですか、分かりました光司さん。」

すると、一番にシャーリーが答えた。

後の三人も少し迷ったようだが

「『はい、光司さん。』」

なんとか答えてくれた。

「うん。それでいいよ。じゃあ『光司くん、ちょう来て〜』って
ごめん、ちよっと行ってくるね。」

こうして、僕は四人と別れてはやてさんの方に向かった。

「どうしたんですか、はやてさん？」

「あんなあ、光司君に紹介したい子がいるんや。」

そう言われたので、辺りを見回すが誰もいない。

「あ、あの〜紹介したい子って言うのは？」

「ああ、この子や。」

そう言って出てきたのは、30センチ位の妖精みたいな子だった。

「はじめまして、私はリインフォースと言いますです。」

「この子はうちのユニゾンデバイスでなあ。小学四年生のころから一緒なんよ。」

「へえ、そうだったんですか。それじゃあよろしく、リインさん。」

「ハイです!」

すると、前から茶髪の男性がやって来た。

「どうも、紅蓮の旦那。久しぶりっす。」

「ヴァイス!なんだ、久しぶり。」

「二人とも知り合いなんか?」

「ええ、一度任務の時に会って、それから仲良くなりました。」

「そうなんすよ。でもこの前会ったときは二等空尉だったのに。昇格早いですよ。」

「ほんまや。いったいどんな任務なんや？」

「まあ、それはおいおいと言っことで。」

「じゃあないなあ。そや、光司君こっち来て！」

そう言つとはやてさんが僕を再び前の方につれていった。
そして、マイクを持って

「あー、あー。みんな今からお楽しみタイムや！」

ざわざわざわざわ

「今からここにいる光司君への質問タイムや！普段聞けない、あんなことやこんなことを聞くチャンスやで！」

「『はいはいはい！』」

すると、ほとんど全員が手を挙げた。

「ほんなら、スバル。」

「え〜と、趣味は何ですか？」

「ん〜無難な質問やな。光司君、答えて。」

そう言うと、マイクを差し出す。

「えっと、一応趣味は料理です。中学のころから一人暮らしだったので自然とできるようになりました。」

「ちなみに、味の方はうちが保証するで。次いつてみよか？」

「『はいはいはいはい！』」

「次はティアナいつてみよか？」

「はい、家族構成を教えてください。」

「家族は……今は、もういません。」

「あ、ごめんなさい。私……」

「さて、ここは空気を変えて、うちから質問ええかな？」

「はい、どつぞ。」

「ズバリ、好きな子はおるか？」

「………はえ？」

思いもよらない質問に変な声が出た。

「せやから、好きな人はおるんか？」

はやてさんはズイスイと聞いてくる。

なのはさんやフェイトさんも目が真剣だ。

「あ、いえ、その、………今は、いない………ですかね。」

「ほほう、ほんならまだ付き合ったりとかはしてへんのやな。」

「え、ええ、まあ。」

「（やったー！！！！）」

この瞬間、数人が小さくガッツポーズをしていたのは光司はききずかなかった。

「はいはいはい！次私いいですか？」

「ええよシャーリー。」

「えっと、光司さんは告白されたことはありませんか？」

「は、はい。本局の女性局員から、何度か受けたことがあります。」

「『オーー！！』」

『くそ！俺なんてまだ一度も告白されたことねえのに。』

と、嘆くヴァイス

「まあ、ヴァイス君の嘆きはほつといて、次あたりで最後にしよか。」

「『はいはいはい!』」

「じゃあ、なのはちゃん。」

「やったー!じゃあねえ、光司君は好きな人はいないって言うけど、六課のなかで誰が一番好きですか?」

「え、えっと、それは……………」

「『それは!?!?!?』」

「……………ノーコメントで!」

「『ええー!?!?!』」

「まあ、光司君の答えが気になるどころやけど、そろそろお開きの時間や。みんな各自で解散してな。」

こうして僕の歓迎パーティーは幕を閉じた。

~~~~~

数時間後

会場には僕、なのはさん、フェイトさん、はやてさんが残っている。

「いや、しかしパーティーだったとは驚きました。」

「せやろ！我ながらええ思い付きや。」

「こっちの方がみんなと喋りやすかったですよ。」

「はい。けっこういろんな人と喋りました。」

「『それはよかった。(わあ)』」

すると、今まで黙っていたなのはさんが、意を決したようにしゃべった。

「あ、光司君、さっきの質問の答えなんだけど……私たちにだけ教えてくれない？」

「あ、それ私も気になった。」

「うちもや。」

三人が詰め寄ってくる

「そ、それはやっぱりノー」「お願い」や」「……」

涙目＋上目遣いで頼んでくる。

これに敵うものはいないだろう。

「……み、皆さんですよ」六課の（）。「

「『えっ／＼／＼（）3人ともだと思っている。』」

「い、いややわあ。いきなりそんな。」

「そ、そつだよ。こ、心の、じゅ、準備が。」

「にははは。なんだか照れちゃうよ。」

三人とも顔が赤い

(あれ、何か変なこと言ったかなあ?)

「こんな答え方じゃいけないとは思ってるんですけど、これが僕の  
本音です。」

「『／／／／／ボンツ』」

さらに三人の顔が赤くなった。

「それでは、そろそろ行きますね。ではまた明日。」

こうして大変な1日が終わった。

大変な誤解を残したまま……

第6話「機動六課での騒がしい初日」(後書き)

今回はサウンドステージの話です。

なるべく早く更新できるように頑張ります。

第7話「ロストロギア探索in海鳴〜前編〜」(前書き)

今回は前書きは特にありません。

それではぶいっぞ。

第7話「ロストロギア探索in海鳴〜前編〜」

機動六課での騒がしい初日が終わり、時刻は午前5時。

光司side

僕はいつものように鍛練をしようと朝早く外へ出た。  
まだ日が昇りきってないので、辺りはまだ暗い。  
すると、僕の他に誰かいるようだ。

背は小さく、髪は赤い。ヴィータのようだ。

「あ、おはよう、ヴィータ。」

「なんだ、光司じゃねえか。久しぶりだな。ところで、こんなところで、何してんだ？」

「まあね、早く起きたから散歩かな。ヴィータこそどうしたの？」

「あたしは朝練の準備だ。なのはにばっかやらせられねえからな。」

「優しいね、ヴィータは。」



そう言って、頭をなでる。

「／＼／＼ッ、なぐで〜る〜な〜!〜!」

と言いつつまんざらでもないようだ。  
すると、思い出したように、

「そうだ、光司も朝練に出てくれよ。その方が、なのはもあいつらも喜ぶぞ。」

「う〜ん、せつかくだけどやめと〜うかな。ちょっと、やりたいことがあるし。」

「そうか、残念だな。」

「ごめんね。それじゃ、また後で。」

「ああ、じゃあなあ〜。」

そう言って、僕はヴィータと別れた。

~~~~~

六課の敷地内のある場所

ここには朝早いためか誰もいない。

「さて、それじゃあやるのかな。ザックス、ブレイド・フォーム。」

「オーライ、ブレイド・フォーム。」

そう言って剣を出し、素振りを始める。

ブンッ、ブンッ、ブンッ

素振りの音だけが辺りに響く。

ブンッ、ブンッ、ブンッ

そうしていると、誰かが近づいてきた。

「あれ、もしかして、光司さん？」

「そんなわけないでしょ。あんなすごい人が朝練なんて……」

「あ、おはよう。」

「『光司さん!!!』」

「二人ともどうしたの、こんな時間に？」

「朝練が始まるまで自主連をしようかと。」

「私はティアの付き添いです。光司さんこそ、どうしてこんな所に？」

「ああ、僕は毎朝鍛練するのが日課になってるから、それで。」

「そうなんですか。あの、だったら相手になってもらってもいいですか？」

「こらスバル！、いくらなんでも、それは無理よ。」

「いや、別に構わないよ。」

「『いいんですか！！！？？』」

「二人の実力を見るためにも、二人でおいで。」

「はい、じゃあいくよ、ティアア！！」

「ええ！！」

こうして、ティアナとスバルとの模擬戦？が始まった。

まずはスバルがこっちに突っ込んできた。

「はあああ！！！！」

しかしスバルの攻撃を利用して、スバルを後ろに投げ飛ばす。

「攻撃が単調だよつと。」

「つて、わあああ！！」

すると今度はティアナが攻撃してきた。

「そこ！！」

しかし僕は剣を抜いてティアナの弾丸を叩き斬った。

「タイミングはいいと思うけど、もっと攻撃をトリッキーにした方がいいかな。」

「はい！」

しばらく二人にアドバイスをしながら二人の戦い方を見た。

ふと時計を見るともうすぐ6時になるうとしていた。

「二人とも、朝練って何時から？」

するとティアナが答えた。

「もうすぐ6時だけど。・・・」

「『えええええー！！！』」

「まずいつ、スバル行くわよ！あ、あの、ありがとございました。」

「
あ、待ってよティア。光司さん、今日はありがとうございました。またお願いします。」

「ああ、二人とも頑張ってたね。」

二人を見送ったあと、部屋に戻った。

そして朝食に行く途中白衣を着た女性と青い狼に会った。

「おはようございます。シャマルさん、ザフィーラ。」

「あら光司君、おはよう。」

「うむ。久しぶりだな。」

「はい、二人とも元気そうで何よりです。」

「ふふっ、ありがとう。しかし驚いたわ。光司君がああ『紅蓮の騎士』だったなんて。」

「あはは……あの、これから朝食に行くんですけど一緒にどうですか？」

「ごめんなさい。これからファイラの健康チェックに行くの。だから、また後でね。」

「すまん。」

こう言っつて、二人は行ってしまった。

そして僕は食堂についた。
すると、

「『光司く〜くん』」

そこには朝練を終えたであろうなのはさんとフェイトさんがいた。

「二人ともおはよう。もう朝練は終わっただんですか？」

「うん今終わったとこ。それで、朝ごはん一緒に食べようと思って。」

「そうでしたか。だったら一緒に食べましょう。」

「『うん!』」

こうして三人で朝食を食べ始めた。

そしてなぜか、さつきから二人の顔が赤い。
何でだろう？

「あ、あのね、光司君、き、昨日の事なんだけど……」

「昨日？何かあったかなあ？」

「ほ、ほら、光司が、そ、その、私たちを……」

「??????????」

(はあ、マスターは鈍すぎです。)

何が何だか分からずにいると、

「みんな~~~~」

「あ、はやてさん。」

「なのはちゃんとフイトちゃんも一緒やな。ちよつどええわ。」

「どうしたの、はやてちゃん？」

「何かあったの？」

「あんなあ、実は聖王教会から依頼があつてなあロストロギアの捜索なんやけど……」

「『だけど？』」

「なんと場所が地球の海鳴市なんや!!」

「『ええええー!!!!』」

「今から2時間後に出発やで。」

~~~~~

2時間後

海鳴市

僕は今海鳴市にあるペンションに来ている。

「まさか海鳴市にロストログアの搜索に来るなんてな。」

「本当だよな。」

「ところでなのはさん、このコテージっていったい誰のなんですか？」

「それはね、もうすぐ分かるかな。」

「そっだね。」

「??????????」

またまた、僕は何が何だか分からなくなった。

すると一台の車がやって来て一人の女性が降りてきた。

「なのは！フェイト！」

「『アリサ（ちゃん）！』」

ん、アリサってまさか……

「なによ、こぶさただったじゃない。」

「あはは、まあ、その」

「色々とね……」

「ふ〜ん。まあ、詳しくは聞かないでおくわ。それにしても、あんた誰？」

僕に気付いたようで、アリサさんが質問してくる。

そしてなのはさんとフェイトさんが、にこにこしながらこっちを見てる。

なんかこの後どうなるかがとっても怖いんですけど……

「えっと、久しぶりです。僕です、神谷光司です。」

「……………はああああ！！！！？？？」

「な、な、なんであんながここにいんのよ！だいたいあんな魔導師じゃないじゃない。」

「そ、それは……………」

~~~~~  
しばらくお待ちください
~~~~~

「……………という訳なんです。」

「なるほどねえ。って、納得できるか——！！！！」

スパーン！！

アリスさんはどこからか出したハリセンで、僕を叩いた

「グハッ」

僕に200のダメージ

「アリサちゃん、落ち着いて。」

「そうだよ。光司だって突然だったんだし。」

「だからってなんで光司だけなのよ！・・・んまあ、今回は仕方ないわね。特別に許してあげるわ。」

「あはは、ありがとう、なのかな？」

こうして久しぶりの会話を終えて僕たちは任務をすることになり、スターズとライトニングに分かれて装置を設置することになった。僕はスターズと一緒に。

「ふう、これで全部かな。」

「はい、そうみたいです。」

そして今はスバルと一緒に作業をしている。

「じゃあ、なのはさんたちに連絡を『いや、その必要はないみたいだよ。』?」

すると向こうからなのはさんとティアナがやって来た。

「こっちは全部終わったよ。そっちは？」

「こっちも今全部終わったところです。」

「だとすると、少し早いですね。」

そう、戻ってくる時間にはまだ早いのだ。  
するとなのはさんが、

「あつ、そうだ。……もしもし、お母さん？……うん、仕事でたまたま近くまで来たから。それでね、……うん、ありがとう。それじゃあ今から行くね。」

「えっと、なのはさん、どこに電話かけてたんですか？」

「うん、ちょっと家にね。家喫茶店なんだよ。」

「へえそうなんですか。それで今からそっちに？」

「うん、お土産にみんなにシュークリームを買っていいんじゃないかと思って。みんなも来て。」

(マスター、ヤバイですよ。翠屋といったら、あの桃子さんがいます。)

(しまった、それを忘れてた。……思い出すだけでも恐ろしい。)

「あの、なのはさん、僕先に帰ってますよ。」

「え、光司君も行こ？」

「いやあ、あんまり行くと』とにかく行くの! ……はい。」

「『光司さん弱っ!』!」

こうして、僕らは喫茶翠屋に行くことになった。

~~~~~

カランカラン

「ただいま。」

すると奥から一人の女性が出てきた。

「あらなのは、おかえりなさい。」

「にははは、お母さん久しぶり。」

「本当に久しぶりね。ところで、そちらの方々は？」

「私の教え子たちと、あはは。」

「そうだったの、私はなのはの母の高町桃子よ。」

「はじめまして、スバル・ナカジマです。」

「ティアナ・ランスターです。」

「……えっと、神谷光司です。」

「……えっと本当に光司君??？」

「え、あ、はい。」

「本当に久しぶりじゃない?!」。

桃子さんはかなりはしゃいでいる。

「分かりましたから、とりあえず落ち着いて下さい。」

桃子さんをなだめていると、さらに奥から

「どうしたのお母さん?」

「何かあったのか?」

と、美由希さんと土朗さんが来た。

「お父さん、お姉ちゃん!」

「『なのは!?!』」

「久しぶり。元気だった?」

「うん、元気元気!」

と楽しく会話をしているど、

「そう言えば、どうしたのお母さん？そんな声出して？」

思い出したように美由希さんが聞く。

「そうなのよ。見て、光司君よ！！」

「どうもお久しぶりです。」

「『光司君！！？？？』」

「いや、久しぶりだねえ。5年ぶりぐらいかな。」

「はい、お久しぶりです土朗さん。」

「と言うか、また女の子っぽくなったんじゃない？」

「美由希さん、それは言わない約束で。」

「あ、そうだわ！今なら美由希の服が着れるかもしれないわ！光司君、ちよつと待っててね。」

そう言つて桃子さんは奥へと入つていった。

・・・ヤバイ、非常にヤバイ。

こんな時は

「なのはさん、やっぱり僕先に帰ってますよ。それじゃあ！」

「あ、ちよつと光『フラッシュ・ムーヴ』つて、行っちゃった。」

「『早っ！！！！！』」

~~~~~

スバルside

「フラッシュ・ムーヴ。」

「『早っ！！！！！！』」

私たちが話していると突然光司さんが行ってしまった。

「あゝなのはさん、光司さん何かあったんですか？」

「それはね、ほら、光司君って女の子っぽいじゃない？それで、家のお母さんが……」

すると奥から桃子さんが戻ってきた。

手には美由希さんのであろう制服を持って、

「あゝ、逃げられちゃった。残念。せつかくこれ着てもらおうと思ったのに。」

「あの、光司さんの女装姿ってどんな感じだったんですか？」

「あ、ちょっと待ってね。」

なのはさんは奥から一冊のアルバムを持ってきた。

「えっとね、……あ、この写真だよ。」

見るとうすい金髪のきれいな女の子が映っていた。

「もしかして、こゝこゝに映ってる人って……」

「うん、光司君だよ。」

「『ええええー！！！！！！！！』」

「だってこの子もう女の子じゃないですか！！」

「そうですよ！！光司さんって、本当に男性？」

「あはは、多分男の子、かな？」

「『疑問形！！？？？』」

光司さんの性別が気になってしまった私とティアでした。

~~~~~

光司 side

僕は翠屋から逃げ、もとい桃子さんから逃げて、アリサさんのコテージに向かっていた。

「ふう〜、危なかった。」

（もう少しで、マスターの黒い歴史が再臨するところでしたね。）

「ほんとだよ。全く、二人の前で女装するなんて冗談じゃない。」

(しかしマスター、あの頃のマスターの女装姿は恐らく見られていると思いますよ。)

「どっぴいっ」とっ。」

(恐らくマスターが出ていかれた後、どうしてマスターが出ていかれたのかを聞いて女装の事を知り、それで気になってアルバムなどに入っている女装姿の写真を見るかもしれない、と言うことです。)

「……見てませんように。」

(多分見てるでしょうね。)

「はあ、これからどうしよう。」

しかしこの時、僕はこれから先もつと大変なめにあうことを知るよしもなかった……

第7話「ロストロギア探索in海鳴〜前編〜」(後書き)

今回は話を区切ってみました。

なので次回はいつもより早く更新できると思います。
そして次回、主人公が・・・

第8話「ロストロギア探索in海鳴〜中編〜」(前書き)

出張任務の中編です。

今回はスーパー銭湯がメインです。

それではどうぞ。

第8話「ロストロギア探索in海鳴〜中編〜」

しばらくして僕はアリサさんのコテージに着いた。

そこにはすでにはやてさんとアリサさんがいた。

「はやてさん、アリサさん、今戻りました。」

「お帰り、光司君。」

「お帰り、早かったわね。」

「え、……光司君？」

すると、はやてさんとなりにいる青い髪の女性が言った。

「も、もしかして、すずか、さん？」

「光司君！！」

そう言いつとすずかさんが抱きついてくる。

「／＼／つ、す、すずかさん!!」

「だって本当に久しぶりなんだもん。」

そう言っつて離れようとしなない。

そしてはやてさん達の目が痛い……

「あ、あの、そろそろ離れてもらえると助かるんだけど……」

僕は顔を真っ赤にしながらか頼む。

「しょうがないなあ。でも久しぶりだね、光司君。」

「はい、本当に久しぶりですね。」

とすずかさんと話しているよ、

「あのー、二人でいい感じのどこ悪いんやけど、そろそろ料理の準備しよか……」

はやてさん、目は笑っているが、こ、怖い。

そして無言でこっちを見ている、アリサさんも怖い。

「あの二人とも、もしかして、怒ってます？」

「別に、光司君とすすかちゃんを抱き合ってたことなんて全然怒ってないで！！なうアリサちゃん。」

「そうそうー！！」

ああ、やっぱり……

「でも、あ、あれはすすかさんが……はあ分かりました、どうしたら許してもらえますか？」

「そやなあ、そやったら、うちの願いを1つ叶えるって言うのはどうや？」

「あたしもそれでいいわよ。」

「はあ、良かった。もっとすごいのが来るのかと思った。いいですよ、それぐらいなら。」

「よっしや、約束やで。」

「忘れるんじゃないわよ!」

「はい!それじゃあ、料理の準備しましょうか。」

「『おー!』」

こうして、四人で料理の準備を始めた。

~~~~~

スバルside

私たちはサーチャアの設置を終え、なのはさんの実家に寄って、フ  
イトさんの車で帰ってきた。

「『ただいま』」

「なのはちゃん、フイトちゃん!」

「『すずか(ちゃん)!!』」

「久しぶり。元気だった?」

「元気元気!!」

「すずかも元気そうだね。」

なのはさん達が話していると、もう1台車がやって来た。

「ふう、やっと着いたね。」

「お姉ちゃんズ参上了。」

「ようみんな、仕事してるか？」

「お姉ちゃん、エイミーさん！」

「アルフ！」

「フェイト、フェイト！」

「久しぶり。元気だった？」

「ああ、もちろん元気だよ。フェイトこそ大丈夫か？」

「うん、ありがとうアルフ。」

「エイミィさん久しぶり〜。でもお姉ちゃんお店は？」

「ちょうどシフトが空いてね。お父さんとお母さんが、行ってこいて。」

「そうだったんだ。」

（ねえティア、なのはさん達が普通の女の子みたいだよ。）

（そ、そうね・・・まあ、普通っちゃあ、普通よね。）

するとキャラコが、

「あれ、なんだかいい臭いが。」

「それに、この音・・・」

そう、今私たちの回りには、なんとも言えないいい臭いがしている。

「あ、みんなお帰り。」

「『八神部隊長!?!』」

「部長自ら料理なんて。」

「そんなの私たちがやりますよ。」

「ええからええから。それに料理は元々趣味なんよ。しかも、光司君も奥で料理作ってるで。」

「『えー！！』」

「はやてと光司の料理はどっちもギガうまだぜ。食べといて損はねえ。」

「それより主、この料理にシャマルはてを出していないでしょうなあ?」

「シグナムひっどーい!!それじゃあ、まるで私が料理下手みたいじゃない。」

「『その通りじゃないか(ねえか)。』」

「二人ともひっどーい!!もう、光司君に言いつけてやる。」

そう言ってシャマルさんは奥の方に走っていった。

「はやてちゃん、私たちも手伝うよ。」

「ほんならお願いしよか。」

「うん。じゃあフードはお皿の配膳をお願い。」

「『はい!』」

~~~~~

光司 side

僕がコテージの台所を借りて料理をしていると、

「光司くん。」

「あれ、どうしたんですかシャマルさん？」

「それがね、シグナムとヴィータちゃんが私を料理下手だって言うのよ。」

「あはは、なるほど・・・」

「それでね、何か手伝おうと思ってこっちに来たの。」

「そうですか。ううん弱ったなあ、もうほとんど料理は出来てるからなあ、・・・そうだ！シヤマルさん、最後の盛り付けを手伝ってもらえますか？」

「はい、喜んでー!..!」

(と、とりあえずセーフかな。)

こうしてシヤマルさんの協力？もあって料理が完成した。

僕らが料理を持っていくと、もうみんな集まっていた。

「ほんなら二人も来たとかやし、食べ始めよか。」

「『はい!..!』」

こうして簡単な自己紹介を挟みつつの食事が始まった。
なんか任務中なのに休暇みたいになってるなあ、と思いつつ僕も料理を食べる。

すると一人の女性と一人の少女が話しかけてきた。

「よう、光司。元気だったか？」

「????????」

「アルフ、いきなり言っても分かんないよ。はじめまして、エイミイ・ハラオウンです。」

「はじめまして、神谷光司です。・・・ハラオウンということとは、もしかしてクロノの」

「はい、妻です。」

「ああ、なるほど。大変でしょう彼は。」

「ふふっ、まあ、そうですね。」

「おい、なんか忘れてられてるけど、あたしはアルフ、フェイトの使い魔さ。」

「あれ、アルフって犬じゃないの？」

「まあそうなんだがな、いえとかではいっつも人形だぞ。」

「そうなんだ。じゃあこれからもよろしく、アルフ。」

「おお、よろしくな！」

僕は二人と別れた後自分の料理の所へ行ってみた。

そこにはけっこう人がいたが料理は手をつけていなかった。
なぜなら……

「この料理は私と光司君が作ったのよ！」

シヤマルさんがこう言い張っているからだ。

すると僕に気付いたようで、シグナムさんとヴィータが近寄ってきた。

「どういっつもりだ神谷！シヤマルに料理を手伝わすだと！」

「せっかく光司の料理が食べられると思ったのに、これじゃあ台無しじゃねえか！」

「お、落ち着いて二人とも。シャマルさんには盛り付けを手伝ってもらったんです！」

「まあ、盛り付けるぐらいなら……」

「大丈夫、か……」

二人が恐る恐る食べる。

「『うまい！』」

やったー！

僕は心でガッツポーズ。

それを聞いてかみんな食べ始めた。

「あ、これおいしい！」

「本当だ、すごいおいしい！」

「さすが光司の料理や。」

「……」

「やっぱり光司の料理は、久しぶりに食べてもおいしいね」

「本当にね。光司君をお嫁に欲しいくらいだよ。」

あ、お嫁なんですネ、お婿じゃないんですネ。

と落胆してると

「あ、私も光司お嫁に欲しいな。」

「うちもやな。」

「『私も』」

「も、皆さん!」

「『あははははっ!』」

「じつして、しばらく食べたりしゃべったりした。そして、

「『!』」

「ほんなら先にお風呂済ませとこか。」
「でもはやて、ここお風呂ないわよ。」

「困りましたね、湖で水浴びって言う季節でもないし・・・」

「となると、あそこかな。」

「あそこだよね。」

「ではこれより着替えを持って出発。」

「これから市内のスーパー銭湯へ向かいます。」

「『スーパー銭湯!?!』」

~~~~~

スーパー銭湯にて

ガラガラッ

「いらつしゃいませ、ようこそ・・・団体様ですか？」  
「えっと大人12人で子供5人です。」

「おい光司、子供五人つて誰だ？」

「え、エリオにキャロ、リンにアルフにヴィータでしょ。」

「

「あたしは大人だ!!」

「いや、だって『大人だ!!』わかった。すいません大人13人で子供4人でお願ひします。」

「はい分かりました。」

「会計は僕がやっておくので皆さんどうぞ。」

「ありがとうな光司君。ほなみんな行こうか。」

そして会計を終えて僕も中へ入った。

するとエリオがフェイトさんとキャロに捕まっていた。

「エリオは私のこと、嫌いなの？」

「いや、そ、その、お気持ちは大変嬉しいんですが、えっと、あの・・・」

「エリオ、一緒に入ろう。」

困っているようなので助け船を出す。

「は、はい。そう言う訳なので失礼します。」

エリオは急いでこっちに来る。

そしてエリオと一緒に男湯にはいって行く。

~~~~~

inn女湯

なのはside

私は今フェイトちゃん、はやてちゃん、アリサちゃん、すずかちゃん
んと入っている

「いやあ、ええ湯やわあ。」

「ゆっくり入るのも久しぶりだね。」

「と言うかこうしてみんなではいるのも久しぶりじゃない？」

「そつだねえ。どうせなら光司とも入りたかったなあ。」

「すずか！あんた何てこと言ってるの!？」

「それや!!!」

「『?????????』」

「光司君はすごい恥ずかしがり家なんか。せやから、一緒にお風呂入ろう言つても絶対にはいらへんやろ。」

「『うんうん。』」

「せやから……」

「なるほど。」

「それなら光司でも。」

「ん〜さすがに、可愛いそんな気も・・・」

「でもなのはちゃん、光司君と一緒に風呂入れるんやで。」

「それは、その・・・」

まあ私も確かめたいことがあるし。

「じゃあやつちやおうか。」

「『おー！』」

こうしてはやてちゃんのプロジェクトが始まった。

in 男湯

光司 side

「うわ〜、広いですね。銭湯って初めてきました。」

「そうだったのか。よし、じゃあ入ろうか。」

「はい。」

すると誰かが入ってきた。

「エリオくん！」

「キャ、キャ、キャロ、キャロ!？」

「キャロ、こっちに来たの？」

「はい、そうなんです！カウンターの人に聞きました。」

「そうだったのか。二人ともこっちにおいで、髪洗ってあげるから。」

「『はい。』」

そうして3人で楽しくお風呂を満喫していった。

すると急にはやてさんから念話 came。

(光司君大変や、フェイトちゃんがのぼせて倒れてしもた!!運びたいんやけど手伝ってくれるか?)

(分かりました。すぐにそっちに行きます。)

(ありがとう。混浴の露天風呂の方に来て。)

(了解!!)

「エリオ、キャラ、ちょっと行ってくる。」

「え、あ、あの〜。」

「た、多分それって。」

二人の言葉を聞かずに僕は向かった。

~~~~~

エリオside

「え、あ、あの〜。」

「多分それって。」

僕らの言葉をよそに光司さんは行ってしまった。

「キャラ、もしかして……」

「うん、多分、八神部隊長だと思う……」

「『御愁傷様です。』」

僕らは光司さんが無事に帰ってくるよう祈った。

~~~~~

光司 side

僕ははやてさんから念話を受けて急いでフェイトさんの所へ行った。

「フェイトさん!」

「……」

僕は倒れたフェイトさんに声をかけるが返事がない。
しかし不思議なことに他の場所がない。

「とにかく、急いで運ばないと!」

僕はフェイトさんを運ぼうと抱き抱えようとする。

「ぎゃっ／＼／」

「へえ?」

突然フェイトさんが目を覚ました。
そして、

「いめんね、光司。」

「え、ど、どついでに?」

「それはうちから説明するわ。」

するとはやてさん達がやって来た。

「実はなあ、……光司君と一緒に風呂入りたかったんや。せやけど、光司君絶対に入ってくれへんやろ。せやからこんな方法しかなかったんや。」

「ま、まあ、それはそうですね、でも、そ、その……えっと……」

僕が答えを出せずにいると、

「『まあ、もう光司君はもう逃げられないけどね!!』」

「へっ???」

すると知らぬまにみんなに囲まれていた。

「すまんな神谷、主がどうしても言うのでな。」

「わ、悪く思うなよっ!!」

「じめんね、光司君。」

「はえ、あ、あの……」

そしてなのはさん、フェイトさん、はやてさん、すずかさん達に捕まっていた。

「さ、光司（君）、一緒にお風呂入る！！」

「ヒヤアアアア！・・・」

この時、海鳴の夜空に僕の叫びがむなしく響いた。

それからしばらくしてサーチャーに反応があったので、フォワードと僕でロストロギアの回収に向かった。

「今回のロストロギアは攻撃してこないし、光司君も付いてるから大丈夫だと思うけど、みんな気を付けてね。」

「はいー！」

こうしてフォワード達との初戦闘が始まった。

第8話「ロストロギア探索in海鳴〜中編〜」(後書き)

次回はいよいよ戦闘です。

上手く書けるか心配ですが、頑張ります。

第9話「ロストロギア探索in海鳴〜後編〜」(前書き)

今回はバトルが入りますが短いです。

それにバトルが上手く書けません。

それではごっぞ。

第9話「ロストロギア探索in海鳴〜後編〜」

それから僕達はロストロギア（スライム）を発見した。
しかしスライムは分裂して大量に増えていた。

そしてその中の一匹にスバルが攻撃を仕掛けた。

「リボルバー・ナツクル！！」

ぽよんっ

「っ！攻撃が弾かれた！？」

「どつやら物理攻撃は効かないみたいだ。」

すると今度はティアナが攻撃を仕掛けた。

「だったら、クロスファイヤー・シユート！！」

しかしこの攻撃もバリアによって弾かれた。

「つて、バリアまであるの！？たくつ、きりが無いわね！」

「よしっ、それなら！」

そして僕は手に魔力を込める。

「はあああ！！！」

フレイルム・ドライブ、ファイヤー！」

火柱が回転していきダミーを次々倒していく。

そしてついに、本体を追い詰めた。

「よしっ！、スバル、エリオ！」

「『はい！…！』」

そして僕はその場を離れる。

「エリオ、アサルトコンビネーション、いくよ！」

「はい、スバルさん。」

「『カートリッジロード!!』」

「『ロードカートリッジ。』」

「『ストライク・ドライブアアア!!』」

スガアアアアアア

二人の攻撃が本体にヒットする

が、まだバリアは破れない。

「くそっ、ザックス、カートリッジロード。」

「オーライ。ロードカートリッジ。」

「虚空撃破斬!」

僕は一瞬で本体の所へ行き、バリアを破壊すると共に本体をぶっ飛ばした。

「今だ、ティアナ、キャラロ！」

「『はい！』」

「クロスミラージュ、バレットS！」

「ロードカートリッジ。」

「我が乞うは、捕縛の檻。流星の射手の弾丸に、封印の力を！」

「ゲットセット。」

「『シーリング・シュウウウツッ！』」

そしてついにロストログアの封印に成功。

その後キャラロが封印処理をしてこの出張任務が幕を閉じた。

~~~~~

それからしばらく経って、再びアリサさんのコテージへと戻ってきた。

「それじゃあ、そろそろ帰りましょうか。」

「何言ってるねや、今日はここに泊まらせてもらってるやで。」

「は!?!?・・・そ、そんな話、初耳ですが?」

「当たり前やん。光司君には今初めて言ったんやから。」

「そうだったんですか?」

「『うん(はい)』。』」

な、なんと言う疎外感。なんだか悲しい。

「そう言う訳やから、そろそろ寝よか。」

「えっと、その事なんだけど・・・。」



と、突然アリスさんが申し訳なさそうにしゃべった。

「どうしたんですか？」

「実は、その、ベッドの数が足りないみたいなのよ・・・」

「ん〜、困りましたね。・・・あ、そうだ、だったら僕がその辺で寝ますから、皆さんはベッドで寝てください。」

「『それはダメえ!!!』」

「¥\$¢£%#&!」

予想以上に否定されたので、言葉にならなかった。

「それならええ考えがあるで。光司君がうちと一緒に寝ればええんや。」

「『はあああー!?!?』」

「ノノな、なな、何言ってるんですか!そ、そんなこと、で、出来るわけ、な、ないじゃないですか!」

「そんな。それに私だって光司と一緒に寝たいよ!」

「そうだよ。はやてちゃんだけずるいよ!」

「そうだよ!」

「あ、あの皆さん。そう言っ問題ではないんですけど……」

「せやけど、あん時の約束はどうなるんや?」

「『約束?』」

「あつ、えと、それは。」

「『光司(君)、どういこと!』」

三人共目が怖い。

「~~~~~と言っ訳なんです。」

「なるほど。・・・それこそはやてちゃんずるいよ！」

「そうだよ。私だって光司にお願い聞きてもらいたいもん。」

「私もだよ。」

「じゃあないなあ。せやったらみんなと一緒に寝る言つんはどつちや？ついでに、三人にもお願いを聞いてもらえるようにしたらいいんや。」

「なるほど。」

「それなら。」

「平等だね。」

なんだか話が勝手に進んでる気がする。

「み、皆さん、僕はまだ一言も『光司（君）は黙ってて！』・・・はい。」

「『光司弱つ!!!』」

この5人以外の人の心がそろった瞬間だった。

「『さ、光司（君）行こう』」

「うう、なんか今更ながらとんでもないことを約束してしまったよ  
うな。」

そしてなのはさん、フェイトさん、はやてさん、すずかさん4人に  
しっかり捕まったまま眠りにつくのですた。

が、

「ね、眠れない。・・・そ、それに腕に何か柔らかいものがノノ  
ノノノ!!!」

今僕の両隣にはフェイトさんとすずかさんがいる。  
もちろん二人の胸が当たっている。

「はあ、、いったい、どうしたらいいんだろ。」

光司の眠れない夜は更けていくのでした。

第9話「ロストロギア探索in海鳴〜後編〜」(後書き)

次の更新は多分けっこうかかると思います。  
初心者なものでしません。

第10話「ある少女の思い」（前書き）

お待たせしました。

今回はティアナのお話です。

真面目な話になったと思うのでなんか変な感じですよ。

それではごっげ。

## 第10話「ある少女の思い」

大変なめにあつた海鳴市での探索任務から1週間がたった。  
で時刻は午前5時

ティアナside

私がいつものように朝練をしていたら

「やあティアナ、おはよう。今日も朝練かい？」

「はい、私凡人ですから。」

「……………そうか。まあ自主トレは良いことだけどあんまり無茶はするんじゃないよ。」

「ありがとうございます。でも大丈夫ですから。」

そう言い終わると光司さんは行ってしまった。

分かるわけないんだ、あんな人に、私の気持ちなんて……



~~~~~

光司 side

僕はティアナと別れ一人で自主トレをしていた。

「……………」

「どうしました、マスター？」

「ん、何が？」

「とぼけないで下さい。さっきから元気がないじゃないですか。」

「ふっ、流石僕の相棒だな。」

「恐縮です。やっぱりティアナのことですか？」

「まあ、ティアナと言うより、ティーダさんの事かな。」

「ティーダさんの？」

「あの人も凡人だからってよく自主トレしていたなあって。」

「なるほど、そこは流石兄弟と言つところですかね。」

「まあそうなんだけど……ティードさんの様になってほしくないから」

「あの件ですか……」

「僕がもう少し早く行っていればっ!」

「マスターのせいではありません。」

「……ありがとう。さて、気を取り直して続きをするかな。ザックス、ランサー・フォーム。」

「オーライ。ランサー・フォーム。」

そうして槍を出し素振り始める。

(僕はもう誰も失いたくない。この剣と、このゼストさんが教えてくれた槍で、みんなを……守ってみせる!!)

朝靄に素振りの音がむなしく響くのであった。

時間がけっこう経って今はヴァイスの操縦するヘリで次の任務の現場に行っているところだ。

「ほんなら、今日の任務のおさらいや。今のところ、ガジェットを利用してレリックを収集してる人物が、広域次元犯罪者ジェイル・スカリエツティや。」

「調査の方は私が担当するんだけど、一応みんなにも知ってもらおうと思つて。」

「そして今日の任務の場所はここ、ホテル・アグスタ。今日ここで骨董品のオークションがあるのですが、レリックと誤認したガジェットが来る可能性があります。」

「そして私たちが建物の防衛、及び要人の警護をする。これが今日の任務だよ。」

「『はい！』」

するとキャラがあるものが気になってる様子。

「そこで、シグナム副隊長、ヴィータ副隊長ほか、数名の隊員が昨日から見張ってくれてる。」

「私たちは内部の警備にまわるから、前線は副隊長の指示に従って動いてね。」

「『はい！』」

「あの、さっきから気になってたんですけど、シャマル先生、その箱って？」

「え？、ああ、これはね、隊長たちと光司君のお仕事着」

「え、えっ！？僕も行くんですか？」

今までトントン拍子で話が進んでいたので突然の事で驚いた。

「当たり前やんか。」

「またまた、初耳なんですけど……」

「そりゃあ『今日決めたんだもん!!』」

いや、三人とも嬉しそうに言わなくても。

こうして若干の不安を抱えつつホテル・アグスタへと向かった。

~~~~~

「はあ、何でこうなるのかなあ。」

スーツ姿に着替えながら僕はタメ息をつく。

「まあいいじゃないっすか、旦那。けっこう似合ってますぜ。」

「ん、まあありがとう。」

すると着替えたのはさんたちがやって来た。

「『光司（君）、どう??.』」

「皆さん、本当に綺麗ですよ。」

「////////!!」

三人とも顔が真っ赤だ。

「あの、大丈夫ですか?」

「だ、大丈夫や。ほな行こか?」

そして三人は僕の腕に抱きつく。

「////////!!、な、なにしてるんですか!?!?」

「『ちゃんとエスコートしてよね』」

「.....はい。」

こうして三人に捕まれながら会場に入って行った。

~~~~~

ティアナside

私たちが会場外の警備をしているとスバルから念話が来た。

「ねえティア、そういえば今日は八神隊長の守護騎士勢揃いだね。」

「そうねえ。あんたは隊長たちのこと詳しいんですよ。」

「うん。私も詳しくはないんだけど、シャマル先生たち守護騎士たちは八神隊長個人の戦力で、それにリイン酋長を加えたら無敵なんだった。」

「ふうん、そうなんだ。」

（部隊長がどんな裏技を使ったのかは知らないけど、この部隊の強さは明らかに異常だ。隊長たちは全員オーバース、副隊長でもニア

Sランク。それにほかの隊員達だって未来のエリートばつか。それに光司さんまで加わってるし。やっぱり、凡人は私だけか。・・・でも証明しなきゃ、ランスターの弾丸は役立たずじゃないってことを。」

「ねえティア、どうしたの?」

「なんでもない。じゃあ切るわよ。」

「了解!」

そうして私は警備に戻った。

~~~~~

光司 side

僕らがオークション会場に入っただけでしばらくたった時、ロングアーチから連絡が入った。

「ガジェットの反応を確認しました。数は20・・・いや、30です!」



「了解した。こちらからは私とヴィータ、ザフィーラで行く。前線は防衛ラインを保て!!」

「『了解!!』」

(うん、シグナムさん達なら大丈夫かな。ま、一応準備だけでもしておこう。ザックス、よろしく。)

(オーライマスター。)

こうしてしばらくの間は様子を見ることにした。

~~~~~

???side

ホテル・アグスタから10キロほど離れた場所。そこにはフードをかぶった大男と一人の少女がいた。

「どうした、ここには目的のものは無いのだから?」

「うん。でも、ドクターのお願いだから。ゼストとアギトはドクタ

「を嫌いみたいだけど、私はドクターのことそんなに嫌いじゃないから。」

そう言っつて魔方陣が展開して、彼女は詠唱を始める。

「我が乞うは、小さきもの、羽ばたくもの、言の葉に答え、我が命を果たせ。召喚、インセクトブーク。ミッション、オブジェクトコントロール。」

そして小さな虫のようなものが沢山召喚された。

「気をつけてね。」

そして小さな虫のようなものは、ガジェットに向かって行った。

~~~~~

シグナムside

私たちは突如出現したガジェットを倒していつていた。

「はああああ!!--!」

ガキイイン

「っ！、何！？」

突然としてガジェットの動きが良くなった。

ヴィータやザフィーラも苦戦しているようだった。

「ヴィータ、防衛ラインまで下がれ。ここは私とザフィーラでやる。

」

「わ、分かった！」

と言ってヴィータは防衛ラインまで戻っていった。

~~~~~

ティアナside

副隊長たちが出撃して少したったころ、キャロが叫んだ。

「!?!?・・・召喚、来ます!?!」

と突然私たちの前にガジェットが現れた。

「うそ!?! 召喚ってこんなことも出来るの?」

「優れた召喚師は転送のエキスパートでもあるんです。」

「なんでもいいわ、迎撃いくわよ!?!」

「『はい(おう)』」

~~~~~

光司 side

様子を見てしばらくたったころ、再びロングアーチから連絡があった。

「こちらロングアーチ、10キロ地点で召喚師の反応を確認、ガジェットを召喚しています。」

「了解、僕が行きます。」

僕は急いで会場を飛び出して召喚師の元へ向かった。

着くと、そこには紫の髪の少女がいた。

「君が召喚師だね。できれば大人しく投降してくれないかな、あまり手荒なことはしたくないんだ。」

「だめ、ドクターのお願いだから。」

「ドクター？、それはもしかしてスカ『もういい、ルーテシア。』  
っ！！」

突然フードをかぶった大男が出てきた。

「あなたは！？」

と聞くと大男はフードを取って、

「久しぶりだな、光司よ。」

「っ!!あなたは・・・ゼストさん!!」

そこにはかつての槍の師匠がいた。

「ど、どうして、こんな所に!それに、あなたはもう死んだはずで  
す!」

「いろいろあつてな。すまない今は言えない。それに悪いが、今捕  
まる訳にはいかんだ!」

と言ってゼストさんは槍を構える。

「どうしても、ですか・・・」

「くどい!」

「・・・ザックス、ランサー・フォーム」

そして僕も槍を構える。

「さて、あれからのくらい強くなったかな。」

「いきます!」

「『はあああ！！』」

二人ともほぼ同時に飛び出し、両者の刃が交わる。

ガキイン

「腕を上げたなあ、光司。」

「あ、ありがとうございますっ！」

僕はゼストさんと距離をとる。

(不味いな。ゼストさんの一撃はやっぱり重い。このままじゃ……)  
)

「今度はこちらから行くぞ。」

一瞬で僕の所に来て槍を降り下ろす。

「はあ！！」

ガキイン、ギギギッ

「くっ!！」

僕はなんとかこの一撃を抑え、ギリギリ耐えているが、しかし

「はああああ!！」

「っ!?!?わああ!！」

ズドオオン

僕そのまま地面に叩きつけられた。

「どうした光司、お前はそんなものではないはずだ。」

「も、もちろん、まだまだいけますよ。」

地面に叩きつけられたため、少しボロボロになりながら答えた。

「今度はこちらから行きます!！」

と言った瞬間



「ゼスト、もういいよ。ドクターの探し物は手に入ったから。」

「そうか……光司、この勝負はお預けだ。」

と二人が帰ろうとするので、

「待ってください！その召喚師の女の子、名前は？」

「……ルーテシア。」

「そうかルーテシア、スカリエティなんか協力してはだめだ。彼は広域次元犯罪者何だよ！！」

「……ごめんなさい。」

そう小さく言うと、二人は行ってしまった。

「ち、逃がしてしまっただか。あ、それよりフォワードが！！」

僕はボロボロの体を引きずり、急いでフォワード達のところへ向かった。

~~~~~

ティアナside

私たちは突然現れたガジェットの迎撃に苦戦していた。

「みんな、もうすぐヴィータちゃんが来てくれるから、それまで持ちこたえて!!」

「『はい!』」

しかし私は納得がいかなかった。

「大丈夫です!全機落としてみせます。」

そう言って通信をきって

「エリオ、センターに下がって、私とスバルの2トップで行く!!」

「は、はい。」

「スバル、クロスシュートA、いくわよ！」

「おう！」

そしてスバルがガジェットを引き付ける。

（証明するんだ、わたしの弾丸は、ランスターの力は、役立たずじや無いってことを。）

私はカートリッジを四発ロードする。

「四発ロード何て無茶だよ、ティアナもクロスミラージュも！」

「いえ、いけます！！！」

魔力弾を形成する。

「クロスファイヤー、シュウウウツッ！！！！！」

放たれた魔力弾は次々にガジェットを倒していく。

が、一発がスバルの方に行ってしまった。

「っ!!、しまった・・・」

「えっ？」

ズガアアン

~~~~~

光司 side

僕がフォワードの所に着くと、スバルにティアナの攻撃が当たろうとしていた。

「くっ、ザックス！」

「フラッシュ・ムーヴ。」

ズガアアン

なんとかギリギリの所でスバルを守ることができた。

「スバル、大丈夫か!？」

「え、あ、あの、光司さん……」

スバルは突然のことで動揺しているようだった。  
するとすぐにヴィータが来た。

「ティアナ!!このバカ、無茶した上に味方打ってどうすんだ!!」

するとスバルが落ち着きを取り戻したようで。

「あ、あの、ヴィータ副隊長、その、今のもコンビネーションで……」

「ふざけるタコ!!直撃コースだよ、今のは!光司が来てくれなかつたら、お前今頃っ」まあまあ、今はそのくらいにして。』ちっ、二人とも下がってる、ここは私と光司でやる。」

そうやって二人を下げ、ヴィータと二人でガジェットを落としていった。

しばらくして、ようやくガジェットを全機撃墜した。

「よし、これで全機撃墜だな。」

するとシグナムさんとザフィーラがやって来た。

「こちら全機撃墜した。」

「その、すみません……召喚師を逃がしてしまいました。」

「気にすることはない。それに分かっていたら、対策も取れる。」

「そうだけ。それにお前けっこうボロボロじゃねえか。」

「うんまあ、召喚師の近くにいた騎士に邪魔されちゃって。」

「光司がやられるとなると、相当な騎士のようだな。」

「まあ、そちらも知っていれば対策も取れる。」

「あれ、そういえばティアナは？」

「スバルさんと裏手の警備に行ってます。」

「そうか……」

( ちょっと行ってみるかな )

~~~~~

ティアナ side

私たちは前線から外され裏手の警備に回っていた。

「ティア、向こう終わったみたいだよ。私たちもいこ。」

「私はこつちを警備してるから、あんた先に行きなさい。」

「あのね、ティア……」

「うっさいわね、とっとと行きなさい。」「ティア、全然悪くないよ、私をもっと……。」

「行けっつってんでしょ!!!」

「ティア……また、あとでね……。」

そう言っつてスバルは行つた。

「私はっ……私はっ……私はっ……。」

「こんなはずじゃなかった、そう言いたいのかな。」

振り返ると、そこにはあの人がいた。

~~~~~

光司 side

僕はティアナの様子が心配だったので裏手の方に行つてみた。



「こんなはずじゃなかった、そう言いたいのかな。」

「……………光司さん、何かよろうですか？」

「まあ、用事と言えば用事かな。ティアナ、何で今日ミスショットをしたか、分かるかい？」

「……………自分が、まだまだ未熟だからです。」

「違うよ、ティアナは自分の体を酷使しすぎている。そんなんじゃない、ミスショットだってするのは当たり前だよ。」

「っ！でも、私は『凡人かい？』……………」

「強くなりたいと言うのはよく分かる。だけどこのままじゃ……………」

続きを言おうとしたら

「……………おんかい。」

「・・・なんだって。」

「うるさいうるさい！！あなたみたいな人に、私の気持ちなんか分からないのよ！！！！」

「・・・・・・・・分かった。それじゃあ僕はもうなにも言わない。・・・ただし、今のままじゃ、死んだティーダさんも報われないよ。」

僕はそう言い残し、その場を去った。

ティアナが早く自分の間違いに気付いてくれることを願って・・・

第10話「ある少女の思い」(後書き)

次回はいよいよあの、魔王の登場です。

……恐ろしや。

第11話「すれ違ふ思い」(前書き)

前回到引き続き魔王戦です。

といても戦いませんが。

それではどうぞ。

## 第11話「すれ違う思い」

光司 side

僕たちはホテルアグスタの襲撃の現場検証を終えて六課に戻ってきた。

そして午後の訓練も休みになり、僕らは六課の中に入っていった。

しかしふとみると、ティアナだけが別の方向へ向かって行った。

(ふう、またか……)

そう思いながらも僕はかまわず入っていった。

六課の廊下を歩いているとヴィータが

「なあ三人とも、ちよつといいか？」

「『?????』」

そうして僕は近くのソファアに座った。

「ティアナのことなんだが、若い魔導師が強くなりたいてって言うのはよくあることだけど、あいつはちょっと以上だ。ここに来る前、何かあったのか？」

「うん、その事なんだけど……」

そう言うと、シャーリーが一つの画面を出す。

「ティアナのお兄さん、ティータ・ランスター、階級は一等空尉、享年21才。」

「けっこうなエリートじゃねえか。」

「うん、エリートだったからかな……」

「そこからは僕が話します。」

「『光司（君）が！？』」

僕は話始める。

「今から6年位前でした。あの頃は管理局に入ったばかりで上司からは白い目で見られていた頃でした。そんなとき声をかけてくれたのがティードさんでした。あの人は本当にいい人で、年下の僕をいつも気遣ってくれました。任務の時でもティードさんにいつも助けてもらってました。僕らはいつとも一緒にいて、家族がいない僕には兄のような存在でした。……そんなある日、僕らに指名手配中の違法魔導師の確保の任務が来たんです。僕らはばらばらに捜索しまして、ティードさんが先に見つけて、僕もすぐに合流するはずでした。でも、僕が着いたときには、ティードさんはもう虫の息でした。そして僕はティードさんの最後の言葉を聞いたんです。『……妹を頼む。』と。……結局、この後も犯人は見つけられませんでした。そして上司が『犯人を直前で取り逃がすなんて、首都航空隊にあるまじき行動だ』って言ったんです。……この時ティアナは10才でした。恐らくこれが原因だと思います。」

「……」

みんな沈黙している。

「では、僕は失礼します。」

そう言って僕はある場所へ向かう。

~~~~~

「やっ、ヴァイス。ティアナの調子はどう？」

「旦那!?!?どうしてここへ?」

「まあ、口は出さないっていったけど、気になってね。」

「そっつすか。あれから4時間位やってるんですけど、俺の言っついと聞かないんすよ。」

「……………そうか。体を壊さなきゃいいけど。」

と言って僕は部屋に戻る。

それからティアナとスバルの自主トレを監視しつつ、最近働きすぎのなのはさんの様子も見ながら、日にちが過ぎていった。

そしてある日

僕は今日、みんなの訓練に参加している。
朝から嫌な予感がするからだ。

するとなのはさんが

「じゃあ午前のまとめ、2ON1で模擬戦やるよ。まずはスターズから。」

「『はい!』」

「残りの二人は私らと見学だ。」

上にあがるとフェイトさんが来た。

「ごめん、遅くなって。もう始まっちゃった?」

「いや、これからですよ。」

「本当は二人の相手も私がする予定だったんだけど。」

「「ごんごん、なのは付きっきりだからな、休ませねえと。」

「同感です。」

そしてなのはさん対スバルとティアナの模擬戦が始まった。

まずはティアナが攻撃を仕掛けた。

「クロスファイアー、シュート!!!」

魔力弾が放たれる。

「ん？いつもよりキレがねえなあ。」

「うん、確かに。」

狙いはいいが、いつもよりキレがない弾だった。

それを避けるなのはさんに今度はスバルが仕掛けた。

スバルはウィングロードを通ってなのはさんに正面から攻撃を仕掛

ける。

「っ！、本物！？」

「うつりゃああ！！！」

ガチイイイン

なのはさんはスバルの攻撃を防ぐ。
そしてスバルを吹き飛ばす。

「ダメだよスバル。そんな危ない軌道。」

「すみません。でも、ちゃんと防ぎますから。」

すると今度は遠くの方でティアナが砲撃を射とうとしていた。

「っ！ティアナが砲撃！？」

しかしその際にスバルがまたなのはさんに突っ込んでいった。

「つりやあああ！！」

ガチイイイン

またそれもなのはさんに防がれた。

すると遠くの方にいたティアナが消えた

「あっちは幻影か！」

「えっ！？じゃあ本物は？」

辺りを見回すと、ウイングロードを通って真上に行き、クロスミラー
ージュを魔力刃にしたティアナがなのはさんに突っ込んでいった。

「はああああ！！」

「……………レイジングハート、モードリリース。」

「オーライ。」

ズガアアアン

突然爆発がおこって、そこにはスバルのリボルバーナックルとティアナの魔力刃を素手で止めてるなのはさんがいた。

(ザックス、いつでも行けるようにしといてね。)

(オーライマスター。)

そして再び僕は三人の戦いを見つめる。

「おかしいなあ……二人ともどうしちゃったの?……模擬戦は、喧嘩じゃないんだよ……練習の時だけ言うこと聞いているふりで、本番でこんな無茶するんなら……練習の意味、ないじゃない……ちゃんとさ、練習通りにやろうよ……私の訓練……私の指導……そんなに間違ってる?」

するとティアナが距離をとった。

「私は!……もう誰も傷つけないから!……誰も無くしたくないから……だから……強くなりたい

んです！！！！！」

「少し……………頭冷やそうか……………」

そう言うと魔方陣が展開する。

「クロスファイア……………」

今度はティアナも砲撃を射とうとしている。

「うあああああ！！ファントム・ブレイズ！！」

「……………シュート。」

ズガアアアン

なのはさんの攻撃がティアナにヒット。
するとスバルがバインドされ、まだなのはさんは構えている。

これで終わると思ったが、もう一発!?

「ザックス、セットアップと同時にリミットブレイク。」

「オーライ。」

「よし、セットアップ!リミットブレイク!」

そして僕は飛び出した。

~~~~~

スバル side

ティアアがなのはさんから離れて、一発砲撃を受けたあと、私はバインドされてしまった。

「っ!?!バインド!?!」

「スバル、よくみてなさい……」

そう言うとなのはさんはもう一度砲撃を撃った。

「っ!?!なのはさん!?!」

ズガアアアン

「ティアアアアア!?!」

「ふう、まったく危なかったあ。」

「えっ!?!」

そこには髪が赤くなって赤いオーラを纏った光司さんがいた。

「……………どういうつもり?……………私の訓練の邪魔しないで。」

「これはもはや訓練じゃない。それに、これ以上の攻撃はさせません。スバル、ティアナを連れて早く行け。」

「は、はい!?!」



私は急いでティアナを救って医務室に向かった。

~~~~~

光司 side

僕の前にはかの有名なエースオブエース、白い悪魔ことなのはさんがいる。

なのはさんの目は虚ろでいつもと雰囲気がちがう。

「光司君も……頭、冷やそうか……」

「頭を冷やすのは、どっちですかね……」

こうしてなのはさんとの戦いが始まった。

まずはなのはさんが攻撃を仕掛けてきた。

「アクセル、シューター……」

そして20個ほどの魔力弾が僕に向かってくる。

しかし僕はそれを避けなかった。

ズドオオン

「どうして避けないの……」

「僕は、なのはさんを止めに来たんです。……戦いに来たんじやない。」

「だったら、私が正しいことを……証明してあげる……」

そう言って、なのはさんは収束魔法の体勢に入る。

しかし僕はなのはさんに向かっていく。

「確かに、ティアナにも非はあったと思います。……でも、僕の知ってるなのはさんなら、模擬戦を止めてその場で注意するはずですよ!!」

「……」

「そしてなぜ、ティアナの気持ちを理解しようとしてあげないんですか!」

「……カートリッジロード。」

なのはさんがカートリッジをロードする。
が、僕はそのまま続けた。

「なのはさんだって、本当はもう気付いているんじゃない!あの最後の砲撃はやりすぎだって……話さなければ、何も始まらないってことを!」

「デイベイン……」

「それに、なのはさんは『……バスター。』っ!」

ズガアアアン

~~~~~

なのはside

分かるわけない、光司君には私の気持ちなんて・・・

「それに、なのはさんは『・・・バスター。』っ!!」

私は光司君が話し終わる前に砲撃を射った。

「はぁ、はぁ、こ、これなら・・・っ!!」

そこにはボロボロになりながらも、まだ立っている光司君がいた。

~~~~~

光司side

僕はなのはさんの攻撃が当たる瞬間に手に魔力を込めて、なんとか砲撃を防ぎきった。

が、体はもうそろそろ限界に近かった。

「なのは……さんは、一人で……抱え込み……
すぎです。」

僕はボロボロになりながらもなのはさんに近づいて、肩に手をかけ、

「もっと……僕らに、話してくれても……いいじゃないですか。……それが、友達……でしょ、なのはさん……」

僕はあの時のなのはさんのセリフを言った。

「……ひっぐ、……うえええん、ごめんね光司君……
……ごめんね。」

なのはさんは泣きながら抱きついてくる

「大丈夫ですよ……なのはさん。……ゲフッ!!」

(そろそろ限界が近いですかね。)

するとあわててなのはさんが僕を支える

「っ！光司君、大丈夫！？」

「ちょっと……無理……し過ぎちゃい………ましたかね。」

そして僕は意識を失った。

第11話「すれ違う思い」(後書き)

次回はいよいよ和解です。

そしてティアナのフラグが・・・

第12話「和解とそれから」(前書き)

今回は真面目な話とちょっとコメディが入っています。

それではごじや。

第12話「和解とそれから」

なのはside

私は倒れてしまった光司君を医務室に運んで、今光司君の様子を見ている。

シヤマル先生によると体が異常なくらい疲労しているらしい。

おそらくこれも光司君の力のせいだろう。

「……………こんなになってまで、私を止めようとしてくれたんだね……………ありがとう、光司君」

「……………おはようございます……………んあ……………あ、なのはさん……………」

「こ、光司君……………よかった、目が覚めたんだね」

「あ、はい……………ところどころは？」

「医務室よ」

するとシャルマル先生が奥から出てきた。

はやてちゃんやフェイトちゃんも一緒だ。

「それでね光司君、体の方なんだけど……いったい何をしたの？」

「ああ、その事でしたらお話しします」

そして3人とも席に座ると光司君が話し始めた。

「あれは、リミットブレイクって言って、僕のもともとの力を出すもので、だいたいランクで言うとS+ぐらいまで上がります」

「それじゃあ私たちと一緒にすることだね」

「まあ、少し違うのがリミットブレイクをすると体に負担が掛かることですかね。といっても、僕がまだまだ未熟なのが原因ですけどね」

「もう一つええか？なのはちゃんの攻撃を素手で防いどったようやけど、あれは何なん？」

「あれはフォースフィールドと言って、フィールド系のバリアを僕なりにアレンジしたものです。これは、リミットブレイクした時しか使えないんですけどね」

「そやったんか。せやけどあんまり無理したらアカンで」

「そつだよ。光司は昔からそうなんだから、なのはみたいに無理しないだよ」

「ちょっとフェイトちゃん、それってどういうこと!？」

「そのままの意味だよ!だいたいなのはは、光司の言ってた通り一人で抱え込みすぎなんだから、もっと自分を大切に!!」

「うううう、返す言葉がありません・・・」

「まあまあ二人とも。ほんなら光司君、ゆっくり休んでな」

「はい、ではまたあとで」

「しばらくしたら、また見に来るからね」

「それまで大人しく休んでるんだよ」

「分かってますよ、なのはさん、フェイトさん」

こうして私ははやてちゃんとフェイトちゃんと一緒に仕事へ戻った。

~~~~~

光司 side

僕はなのはさんたちが出ていったあとシャル先生と話していたが、シャル先生も行ってしまったので暇をもて余していた。

「……………暇だなあ」

「いい機会じゃないですか。この際ゆっくり休みましょう。」

「そうだね。……………でも、僕もまだまだ弱いな……………」

「大丈夫です、マスター。これから、まだまだ強くなれますよ、私がついています」

「ふっ、そうだったね。そうだった……」

(僕はまだまだ強くならなきゃいけない……相棒と一緒に)

と僕が決意を新たにしたところで、ヴィータとシグナムさんがやって来た。

「よう光司。見舞いに来たぞ」

「模擬戦で無理をしたと聞いたが、大丈夫か？」

「ええ、もう大丈夫です。まあシャルル先生にはまだ休むように言われましたけどね」

そう聞くと二人はほっとしたようだった。

「そうか、それはよかった。いやあ、一時はもう模擬戦ができないかと思いましたが」

「それに、もう光司の作った菓子が食べないかと思って、ヒヤヒヤしたぞ」

(あれっ?もしかして、二人とも自分の楽しみの心配……………)

「治ったら、早速私と模擬戦をしてくれ!」

「何言ってるんだ!お菓子の方が先に決まってるだろ!」

「いや、模擬戦だ!」

「お菓子だ!」

「なにい!?!」

「やるか!?!」

(このままじゃ、ここが戦場に……………)

「まあまあ、落ち着いて二人とも。ここは医務室ですから静かに!」

そう言うと二人はしぶしぶ口喧嘩を止めた。

「では我らは仕事があるので失礼する」

「じゃあな、ちゃんと休めよ」

「ありがとう、ヴィータ、シグナムさん」

こう言い終わると、二人は仕事へ戻っていった。

「さて、僕も一眠りするかな」

そうして僕は眠りに落ちた。

しばらくして、僕は物音で起きた。

(あれっ、誰か入ってきたのかなあ?)

そう思い起きてみると・・・

「あ、ごめんなあ。起こしてしもた？」

「あ、いえ、大丈夫です。はやてさん」

そこにはリンゴを剥いているはやてさんがいた。

「お腹すいたかと思ってリンゴ持ってきたんよ」

「すみません、ありがとうございます」

そう言って僕がリンゴを取ろうとすると

「あ、ちょっとまってな」

「は、はあ」

そうしてはやてさんがリンゴを一口、つまみづじに刺しおまむるに

「はい、あ〜んしてや」



「／／／！？」

「せやから、あ〜ん」

「い、いや、はやてさん、ぼ、僕自分で『あ〜ん』……」

「あ〜ん……」

僕はリンゴを食べさせられた。

「ど〜、おいしい〜」

「……はいはい」

「なんか、こっつしてるとこっちら新婚さんみたいやなあ？」

「……」

ボンッ

僕は頭が沸騰する思いだった。

「あはははっ。ほんま光司君はおもろいわぁ」

「もう、はやてさん！」

「こういうたわいもない会話を楽しんでいると、」

「あ〜〜！はやてちゃん見つけたです！」

「げっ、リイン！なんでここが分かったんや？」

「はやてちゃんの考えていることはお見通しです。さ、行きますですよー！」

「あ〜〜、光司君助けて〜」

はやてさんが助けを求めると

「頑張ってください」

笑顔でつき返す。

「そんな〜……………」

こうしてはやてさんはつれていかれた。

それからなのはさんやフェイトさんなど、色々なひとがお見舞いに来てくれた。そしてしばらく経って時間は夜になり、突然アラートがなった。

「っ!?!……………よしっ、いける!」

そうして僕は急いでオペレータールームへ向かった。

~~~~~

はやて side

光司君と別れてからしばらくして、海上にガジエットの反応が出た。

「ガジエット、機影全部で24機。それに、以前より格段に速くなっています。」

「場所は何にもない海上。おまけにレリックの反応もない」

「まるで、打ち落としてほしいようですね」

「うーん。テストロッサ執務官はどう見る？」

「スカリエッティのことだから、きっとこちらの航空戦力の把握なんかが目的じゃないかな。」

「なるほど。高町教導官はどうやる？」

「まあ、こっちの手の内は見せないで、『いつも通りやりましょー』って……」

声のする方を見ると

「『光司(君)!!??』」

~~~~~

光司 side

なんか皆さん驚いてるなあ。

あ、そっかいきなりしゃべったからか。

「光司、もう、大丈夫なの？」

「はい！もう大丈夫です！」

「ほんなら、それでいこうか？」

「『了解!!』」

こうして僕らはへりポートへと移動した。

「今回は空中だから、僕となのは隊長、フェイト隊長、ヴィータ副隊長でいく」

「フォワードのみんなはロビーで待機ね」

「そっちの指揮はシグナムだ」

「『はい！』」

「……はい」

「それで、ティアナは待機から外れておこっか」

「『っえ！？』」

「………言うことを聞けないやつは、要らないってことですか？」

「そうじゃない。でも今のティアナは『関係ありません！それに現場での指示や、訓練だってちゃんとやってます。なのに、それ以外の努力はしちゃんけないんですか！？私は皆さんみたいにエリートじゃないし、レアスキルもない、ただの凡人なんです！なら、死ぬ

気になって努力したっていいじゃないですか!!!』……………」

しばらく沈黙が続いた。

「……………今のティアナは、たとえ死ぬ気になって努力しても、  
ティードさんのようにはなれないよ」

「また兄さんのことを……………あなたに兄さんの何が分かるって  
言うのよ!!!」

パシッ

乾いた音が響いた。

シグナムさんがティアナをはたいていた。

「っ!?シグナムさん!」

「駄々をこねるやつは、なまじ付け上がる。ヴァイス、もつでられ  
るな!」

「乗り込んでいただければすぐにでもっ！」

そして僕らはへりに乗り込む。

「ティアナ………ティードさんの気持ちも考えろよ。」

そう言い残し、僕らは現場へと向かった。

~~~~~

ティアナside

私がシグナム副隊長にはたかれて、地に伏せていると、スバルが

「シグナム副隊長！」

「………何だ？」

「あの、命令違反とか、ティアのさっきの物言いとかは絶対ダメだ
と思うし、それを止められなかった私もいけなかったと思います。
でも、自分なりに努力したり、どんなきつい状況でも何とかしよう

とするのって、そんなにいけないことなんじゃないか！！」

「確かに、努力することや、頑張るのはは良いことだよ」

すると聞きおぼえのある声が出た。

「シャーリーさん……」

「持ち場はどうした？」

「通信はリン総長がやってくれています。みんなもう、見てられなくて」

「『……………』」

「みんなロビーに集まって。なのはさんのこと、なのはさんの教導の意味を教える。」「

~~~~~

光司 side

ガジェットの殲滅は比較的楽に終わった。  
そして今は帰りのへりの中。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「光司どうしたの？・・・・・・・・・・やっぱり、ティアナのこと？」

「え、まあ・・・・・・・・・・ティードさんに言われた通りティアナを見守りたかったんですけど、嫌われちゃいましたね」

「ティアナだって、いつかは分かってくれるよ」

「そつだぜ、気にすんな」

「はぁ・・・・・・・・・・」

(僕はティアナを守っているつもりか、いつの間にかティアナを傷つけてしまったなあ)

そんな気持ちになりつつも僕らは戻っていった。

~~~~~

ティアナside

私たちはシャリーリーさんから、なのはさんのこと、なのはさんの教導の事を聞かされた。

「『……………』」

「それでね、ここからは光司さんとティアナのお兄さん、ティードさんの事なんだけど……………」

「……………はい」

「光司さんとティードさんは、親友だったそうよ」

「えっ!?!?」

驚いた、あの人が兄さんのことを親友だなんて一言も言ってなかった。

「今から7年前、光司さんが管理局に入った頃、この頃はまだ『紅蓮の騎士』なんて呼ばれてなくて、上から白い目で見られていたそうよ。そんな時出会ったのが、ティードさんだったの」

「……そんな」

「二人は本当に仲が良かった。それこそ、本当の兄弟みたいに……だから光司さん、ティアナの事が心配なんじゃなかったのかな」

「それじゃあ……わ、私は……ずっと勘違いして……あんなことまで言って……」

「それもあると思うんだけどね、光司さん、ティードさんに死ぬ直前に言われたのよ、『ティアナを頼む』って……」

それを聞くと私は耐えられず泣き出してしまった。

あの人……光司さんに申し訳ない気持ちでいっぱい……

~~~~~

光司 side

僕らは無事六課のヘリポートへ戻ってきた。

と突然シャーリーが駆け寄ってきて、なのはさんに謝っている。

「え〜、ダメだよシャーリー。人の過去勝手にばらしちゃあ」

「い、いじめんなさい」

「どうしたんですか？」

「あっ光司君、シャーリーが私たちの事みんなにばらしたらしいんだよ」

「へえ〜。……………ん？私たちってことは、僕も？」

シャーリーは申し訳なさそうにうなずいた。

「あちゃ〜。まあ話しちゃったんなら仕方ないか」

「まっ、いつかバレる事だしな」

「シャーリー、ティアナは今どこに？」

「ああ、それなら・・・」

こう言っつて、なのはさんはティアナのところへ行った。

「光司は行かないの？」

「ティアナはもう分かってると思いますから。・・・僕からは何も」

「そう、光司らしいね」

そうして僕らは部屋へと戻っていった。

in 光司の部屋

「・・・」

「どうしましたマスター」

「ん、なんか落ち着かなくて」

「でしたら、外へでも行ってみたらどうです？」

「うん、そうだな、そうしよう！」

こうして僕は外に出た。

時間が時間だけに、誰もいなかった。

「何だか静かでいいな……そうだった、ザックス、モードブレイド」

「オーライ。モードブレイド」

そうして僕は剣を出し、精神統一を始めた。

「……………」

それからしばらくすると、後ろからティアナが来ているようだった。

「……………どうしたのティアナ？」

「ど、どうして分かったんですか！」

「これでも剣をやっているからね。それで、なにか用かな？」

「……………あの……………ごめんなさい」

「……………なのはさんの教導の意味を聞いたんだね」

「はい。そして、兄さんのことも……………」

「そうか……………」

そして僕は近くのベンチに座った。

「ティアナ、謝るのは僕の方さ。僕は、君の兄さん、ティーダさん



を救えなかった。本当にすまなかった」

「そんな、光司さんのせいじゃありません!」

「あの時、もつと僕に力があればって思ったよ。……だから、あの時のティアナの気持ちもけっこう分かったんだよ」

「でも、すぐになんか強くなれない。……焦らず、ゆっくりと……ですよね!」

「そう言うこと!ティアナはきっと強くなれる。だって、ティードさんの妹だからね」

そう言つて、僕はティアナの頭を撫でる。

「っ!//////」

あれ?ティアナの顔が赤い。  
どうしたのかな?

「それじゃあ、そろそろ戻ろつか」

そう言って戻ろうとすると

「あ、あの！」

「何だい？」

「えっと、その……兄さんと呼んでいいですか？」

「……はい？」

「いえっ、その、光司さんが兄さんみたいですから……」

「……分かったよ、ティアナ」

「あ、ありがとうございます！」

「兄に敬語はいらないよ」

「……うん……じゃあ、また明日ね……兄さん」

「こうしてティアナは行ってしまった。

「……兄さん、か」

「まさか兄さんとは、ビックリだね光司君」

「そうなんですよねえ………って、なのはさん!?!」

いつの間にか後ろになのはさんがいた。

「ど、どうしたんですか?」

「うん、光司君に言い忘れたことがあって」

「何ですか?」

「その………ありがとう。あの時の私は自分の事で頭がいっぱいだった。光司君が言ってくれたから、私は自分の間違いに気付けたんだよ。本当にありがとう」

「どういたしました。当然の事をしたまでですよ」

「それでね、その……お礼がしたいんだけど」

なぜかなのはさんの顔が赤い。

「いや、いいですよそんな」いいから、目をつむって……分  
かりました」

僕は目をつむる。

チュッ

(ん？何か頬に柔らかいものが……ってまさか！)

「な、なのはさん、い、今は%&\*#\$¢」

後半は僕でも何を言ってるのか分からなかった。

「ふふっ、じゃあまた明日ね」

「う言ってなのはさんは去って行った。

「……………（ポカーーン）」

「ん、マスターが固まってしまっている。面倒なのでそのままにしておこう」

次の日、ベンチで放心状態の僕が発見されたらしい。

そして、なぜかスバルやエリオやキャロまでが、兄と呼ぶようになった。

第12話「和解とそれから」(後書き)

今回はリミットブレイクについての解説をします。

最近更新がなかなかできないですが頑張ります。

第13話「主人公設定その2」(前書き)

今回は主人公の設定なので短いです。

それではさようなら。

第13話「主人公設定その2」

リミットブレイク時について

ランク

A A S +

魔力光

更に赤くなる

髪

薄い金色 綺麗な赤

瞳

薄い水色 漆黒

甲冑



リミットブレイクしてないときのバリアジャケットに加え、肩、腰に防具が付き、赤いマントがつく。

## 備考

リミットブレイクしてないときに比べ、力、技の威力、スピードなどが格段に上がっており、光司本来の能力に戻る。

光司は元々力をセーブしており、それを解放することでリミットブレイクを発動する。

ただし、まだ不安定である。

## 技

### フォース・フィールド

光司があみだしたフィールド系のバリアのアレンジ版。

体全身に赤い魔力を纏うことで大抵の攻撃を防ぐことが出来る。

また手などに魔力をこめ、防ぎながら格闘も出来る。

攻撃にも防御にも使える便利な技。

## 剛熱・爆炎拳

フォース・フィールドの状態で手に魔力をこめ、一気に接近し相手にぶつけ、爆発させる技。高熱と共に自分の拳を相手にぶつけるので、周りが少し焦げる。

## サウザント・レイン

空を覆うほどのフレイム・ランサーを出し一斉に発射し、発射した瞬間に次のフレイム・ランサーが作られ再び発射され、文字どおり雨のように槍が降りしきる攻撃。敵が沢山なほど効率がいい。だが本人いわく、けっこう疲れる。

## メテオ・エクスプロージョン

巨大な火の玉を作り出し相手にぶつけ、その後大爆発を起こす技。ただし、チャージには時間がかかる。現段階で光司が使う魔法で最強の技。

### 第13話「主人公設定その2」（後書き）

主人公はまだまだチートにしていくので、また主人公設定があると思います。

そして、次回はちょっとオリジナルの話になります。

多分更新が遅れると思うので、ご了承ください。

第14話「V.S.フォワード」(前書き)

今回からちょっとオリジナルの話になります。

そして更新が……

それではぶしぞ。

## 第14話「VSフォワード」

光司 side

ティアナの事から少したって、今は午前の練習をみんな元気に頑張っている。

そして

「じゃあ午前のラストは、模擬戦をやるよ。光司君、お願いできる？」

「『え!?!』」

これにはフォワードも僕も驚いた。

「え！、しい兄なんて……」

（これはスバルが言っているのだが、スバルがこう呼ぶのは光司の『司』の字を取って『しい兄』だそうだ。）

「兄さんなんて……」

「お兄ちゃんなんて……」

「『勝てる気がしない……』」

と、スバルやエリオやキャロが諦めムードになっていると。

「何言ってるの！兄さんが相手だからって……まあ、勝てるかどうかは……やってみなきゃ分かんないでしょ！」

そう言ってティアナがみんなを励ますが、

「『お、お〜！』」

まだイマイチなようだ。

ちなみにみんながこれほどまでに怪訝になるのには訳がある。それは、僕は最近よく訓練を一緒にやっているのだが、たまにスバルやエリオの相手をするところがあり、その際に二人を圧倒しすぎてしまったためこのようになるのである。

そこで、

「じゃあみんなが勝ったら、みんなの願いを一つずつ聞いてあげるよ」

「『ほ、本当ですか!?!』」

「よ〜しっ、そうと分かれば、みんないくわよ!!--」

「『はい（おう）！』」

みんな一瞬でやる気を取り戻し、更に今までにないくらいに気持ち  
が一つになったようだ。

（あはは・・・何かとんでもないことを言った気がするけど、  
みんなやる気になったんならそれでいいや）

「じゃあみんな、準備はいい？」

「『はい！』」

こうして、僕対フォワード4人の戦いが始まった。

~~~~~

ティアナside

いよいよ兄さんとの模擬戦が始まった。

今度こそ兄さんに勝って、お、お願いを………つて、今はそんな場合じゃないわね。

まずはスバルとエリオが、兄さんを挟む形で攻撃をしかける。

「はああああ！」

「うりゃあああ！」

ガキイイイン

しかし兄さんは剣とバリアで二人の攻撃を防ぐ。

「うん。二人ともスピードは出てきたけど、一撃の重さに欠けるかな……っと!!」

そして兄さんは剣を振りながら回転し、エリオとスバルを引き離した。

「今よ、キャラー!」

「はい!・・・アルケミック・チェーン!」

私は二人が兄さんから離れた瞬間を狙ってキャラーに指示を出し、兄さんを足止めしようとした。

「っ!?・・・アルケミック・チェーンか」

よしっ、兄さんを捕まえた!

「クロスファイヤー・シユート!」

ズガアアアン

私の攻撃は兄さんに当たった・・・

かに思えたが、

「ん、タイミングは良いけど、もう少し威力が欲しいかな。あと、キャラのアルケミック・チェーンも、もう少し強度がほしいな」

「『えっ！？』」

私たちの後ろには無傷でコメントしている兄さんの姿があった。

~~~~~

光司 side

さっきまではみんなの成長ぶりを見ていた。なるほど、基礎がしっかり身に付いてるし、動きも良くなった。まあ、個人のスキルはまだまだ磨かれるだろう。

「それじゃあ、今度はこっちからいくよ」

「『っ！』」

そう言った途端、みんなが身構えた。

そして僕は剣を抜く。

「それじゃあ久しぶりに、ザックス、ランサーフォーム」

「オーライ、ランサーフォーム」

そして改めて槍を持って構える。

「それじゃあ……………いくよ……………」

~~~~~

エリオside

兄さんがティアさんの攻撃を無傷で避けたかと思ったら、今度は槍を構えてきた。

兄さんが槍を構えるのを見るのは今日が初めてだ。一体どんな攻撃をするんだろうか？

「それじゃあ……………いくよ……………」

兄さんがそう言った瞬間、兄さんの姿が消えたように見えた。

「えっ！？き、消えた？」

そう思った途端、スバルさんの方から何かを防いだような音が聞こえた。

「ス、スバルさん！」

見ると兄さんの槍の一撃をスバルさんが受け止めていた。

「くっ……んぐぐ……」

「さすがに、ヴィータに鍛えられてるだけあるね。……でもこれなら！」

そう言って兄さんが一旦下がりに、再び構えて今度は突きで攻撃する。

「はぁっ！」

「くっ……っ……っ！？うわぁぁぁ！！」

しかしスバルさんが兄さんの攻撃に耐えきれず、とばされてしまった。

「ス、スバルさん！！！」

と突然

「人の心配をしてる場合かな？」

「っ!？」

兄さんはスバルさんをとばしたあとすぐに僕の前に来た。

「はあっ!」

ガキイーン

「くうっ!」

僕はさっきから兄さんの攻撃を防いでばかりで押されている。

兄さんの槍は流れるようにしなやかだけど、一撃一撃がすごく重い。

「ほらっ、防いでばかりになってるよ!」

「っは、はい！」

そして僕は何とか兄さんと距離を取った。

「キャラ、お願い！！」

「うん、エリオ君！」

そしてキャラが詠唱を始める。

「我が乞うは、清銀の剣。若き槍騎士の刃に祝福の光を、猛きその身に力を与える祈りの光を！！」

「ツインブースト、スラッシュアンドストライク！！」

キャラの力が僕に宿る。

「よしっ、ストラーダ！」

「explosion」

カートリッジを二発ロードする。

「一閃……必中!!! たああああ!」

「そう来なくっちゃ、ザックス!」

「ロード・カートリッジ」

「瞬……迅……槍!」

そして僕と兄さんの攻撃がぶつかる。

ズガアアアン

~~~~~

ティアナside

スバルが兄さんに飛ばされたあと、兄さんはエリオと一対一で戦っている。

エリオが随分押されているけど、手が出せない……

すると、飛ばされたスバルがこっちに戻って来た。

「スバル！、あんた大丈夫なの！？」

「う、うん、なんとかね。でも今はエリオが……ティア、どうしよう／＼」

「落ち着きなさいって！とりあえず今は様子を見るわよ」

そして二人がぶつかり爆発が起こった。

「『っ！？』どうなったの？』」

暫くして砂煙が消えると倒れたエリオと寄り添うキャラコの姿が見えた。

「今の攻撃はなかなか良かったね。一応キャラコ、エリオを見ていて、

気絶しただけだと思っから

「は、はい……………」

これで……………残りは私たちってことね。

「いくわよスバル！」

「うん！」

そして私たちは兄さんと向き合う。

「次はティアナとスバルか……………二人のコンビネーションを見せてもらおうか」

「『はい！』」

そうして今度は兄さん対私たちの戦いが始まった。

~~~~~

光司 side

僕はエリオとの一騎討ちに勝利し、今はティアナとスバルと向き合っている。

僕は槍を剣に戻し再び構える。

するとティアナが先に攻撃してきた。

「クロスファイヤー・シュート！」

「くっ！！」

ティアナの攻撃は僕にはヒットせず、地面に当たり土煙をあげた。

「しまった、これじゃあ二人が見えない！」

すると後ろからウィングロードが延びてきて。スバルが突っ込んで来た。

「そこかつ、紅蓮一閃！」

僕は剣に赤いオーラを纏わせてスバルに攻撃した。

しかし、攻撃が当たった瞬間にスバルは消えた。

「くっ、フェイクシルエツトか!？」

その後、剣を振って土煙を払った。
その時、

「今よスバル、クロスファイヤー……………」

「ディバイソン……………」

二人が丁度攻撃しようとしていた。

「『シュート（バスター）!』!』」

「くそっ……」

ドカアアアン

~~~~~

スバルside

ティアの作戦でしい兄に私たちの攻撃を当てることができた。

「やったねティア！」

「そうね。これならいくら兄さんでも無事ではすまないでしょ」

「……」

「わ、私たちの……」

「『か、勝「いや、負けだよ」……えっ?』」

声のした方を見るとフレイルム・ランサーを出して、私たちの方に向けているしい兄がいた。

「『あははは………』」

私たちはもう笑うしかなかった。

「でも、さっきの攻撃はなかなか良かったよ。普通の魔導師なら、やられてたかな」

「あ、ありがとうございます………」

「えっと、普通の魔導師ってことは………しい兄は………」

「………まあそれは置いて、午前の訓練はこれで終わりだよ。しっかり休んでね」

「『ありがとうございます………』」

こうしてしい兄との模擬戦は幕を閉じた。

~~~~~

光司 side

色々あってフォワードとの模擬戦は終わった。

(なのはさん、今模擬戦が終わりました)

(うん。お疲れさま、光司君。それで、どうだった?)

(ええ、文句なしです。これなら第2段階への移行も大丈夫でしょう)

(光司君が言うなら大丈夫だね。でも一応、明日ヴィータちゃんとフェイトちゃんで見してみるね)

(そうしてくれるとありがたいですね。じゃあこれから昼食にするんですが、ご一緒してもいいですか?)

(え／＼／＼!?!?う、うん……じゃあ待ってるね……)

(あ、はい……では、また)

こう言って僕はなのはさんとの念話を切った。

何か最後の様子が変わったけど……まいつか。

こうして僕は食堂に行った。

i n 食堂

食堂に着くと、既になのはさん、フエイトさん、はやてさんがいた。

「あつ、光司くん。こっちこっち」

「みなさん一緒だったんですね」

「そりゃ、これ以上なのはちゃんばっかりな訳にはいかんからな」

「そうそう!」

「うう、本当は光司君と二人で食べるはずだったのに」

みなさんなにか言ってるが、気にしないでおう。

「それじゃあ、食べましょうか？」

「『うん!』」

そしてみんなで昼食を取り始めた。

するとすぐにフォワードたちが来た。

なんかみんな顔が死んでいる。

「なんや、フワードたちはえらい元気ないなあ。なんかあったんかなあ？」

「あは、あはは、あははは・・・」

もう僕は笑うしかなかった。

そんな中、突然フایتさんが

「あのね光司、ちょっと頼みがあるんだけど・・・」

「何ですか？」

「実は午後からスカリエツティが使っていたと思われる研究施設に行くんだけど、光司も来てくれない？他のみんなは忙しくて、光司しか頼める人がいないの」

「分かりました。一緒に行きましょう」

「良かった、ありがとう光司。それでね、あと108部隊に今回の事件で私の補佐をしてくれる人がいるんだけど、その子も一緒にいいかな？」

「ええ、大丈夫ですよ。」

こうして午後はフェイトさんと一緒に研究施設に行くこととなった。

このあとの驚愕の事実は知るよしもなく……

第14話「V5フォワード」(後書き)

次回もこの話の続きです。

なるべく早く更新したいと思います！

第15話「大切なもの」(前書き)

今回でオリジナルの話は終わりです。

そして光司がきれる。

そではどうぞ。

第15話「大切なもの」

光司 side

午前の訓練が終わり、僕はフェイトさんと一緒に研究施設に行くこととなった。

そして今はフェイトさんの車を六課の入り口で待っている。

「それにしても、フェイトさんって車持ってたんだな。ちょっと以外だ」

なんて思っていると一台の黒い車が来た。

「ごめんね。待った？」

「あっ、いえ、大丈夫ですよ。それより早く行きましょう」

「うん、そうだね。さあ乗って！」

「こうして僕はフエイトさんの車でまずは108部隊に行くことになった。」

i n 1 0 8 部隊・隊舎前

僕らは108部隊に着いて車を止め、隊舎前に来ていた。

「しかし108部隊に来るのも久しぶりですね。ゲンヤさん元気かなあ」

「うん。はやての話だとお元気そうって言ってたよ」

「そうですか。ところで、この部隊にいるもう一人のかたっていったい？」

「ああ、それは会えばすぐ分かるよ」

「は、はあ」

そして僕らは隊舎へと入っていった。

するとすぐにゲンヤさんにあった。

「よお、フェイトの嬢ちゃんに光司じゃねえか！久しぶりだなあ」

「はい、お久しぶりです、ゲンヤさん！」

「お久しぶりです！」

「しかし驚いたぜ。気付きゃあ光司は俺より上だもんな！」

「あははは、恐れ入ります……」

「ところで、今日はどうしたんだ？挨拶に来たって訳でもないだろ」

「はい、それについては部隊長室でお願いできますか？」

「分かった、こっちだ」

そうして僕は部隊長室に向かった。

i n 部隊長室

「……………と言っわけなので、ギンガを連れて
いってもよろしいでしょうか？」

「なるほどそういう事だったのか。分かった、ちょっと待ってる今
呼んでやるから」

「ありがとうございます」

なんかフェイトさんとゲンヤさんで話がどんどん進んでる気がする。

なんて思ってるよ

「失礼します、ギンガです！」

「おう、入ってこい」

「失礼します。……………あつ、フェイトさん、お久しぶりです
! ! !」

「久しぶりギンガ、今日はよろしくね」

「はい! ……と、それでそちらの方は？」

僕を不思議に思ったのかギンガがフェイトさんやゲンヤさんに聞いていた。

「なんだお前、覚えてねえのか! ?」

「まあまあゲンヤさん、覚えてないのも無理ありませんよ。あの時ギンガは、スバルの事で精一杯だったと思いますし」

「あの時？……ってもしかして!？」

「そうだよ。空港火災のあの日、ギンガを助けてくれた人だよ」

「えっ!？じゃあ……もしかしてあなたが……」

「うん、まあ。久しぶりギンガ。4年ぶりぐらいかな。『紅蓮の騎士』こと、神谷光司です」

「えええ／＼／＼!! 『紅蓮の騎士』ってあの!？しかも、やっぱりあの時助けてくれたのは、あなただったんですか!？」

「そうだよ。まあ、覚えてないかもしれな『いえ、覚えてます!』っ!？」

「あの時助けていただいたから、私ずっと貴方のような魔導師を目指してきたんです！……だから……そ、その……」

「そっか、ありがとう、ギンガ」

「っ／／／／！！」

ギンガの顔がなぜか赤い。
そっか！緊張してるんだな。

「そんなに緊張しなくても、気軽に話してくればいいからね」

「は、はい！」

するとゲンヤさんが

「まあ無理もないと思うぜ。何せ、この部隊に入ってからお前のことを探し続けて来たんだからな」

「／／／！と、父さん！もう、へ、変なこと言わないでよ！！私

は別に………」

「とまあ、こんなやつだがよろしく頼むわ」

「は、はあ。それじゃあ、改めてよろしく、ギンガ！」

僕はそう言って手を差し出す。

「こ、こちらこそ、よろしくお願いします。か、神谷さ『光司
でいいよ』……ふえ？」

「だから、僕のことば光司でいいよ」

「わ、分かりました……こ、光司……さん……」

「うん。よろしく！」

そう言っただけでギンガと握手をかわす。

その間ギンガの顔が真っ赤だったのは言うまでもない。

こうしてギンガを加えた3人で研究施設に行くこととなった。

in 研究施設

僕らは今、そのスカリエッティが使っていたと思われる研究施設に
来ている。

「フェイトさん、この施設が怪しいってどうして思ったんですか？」

「確かに、ここは少し前に違法な研究の施設になってるからって、
管理局が摘発して、今は無人のはずですが」

「それは、最近この施設から多量のエネルギー反応が確認されてね、
それでこの施設を調べた所、人造魔導師や戦闘機人の研究の施設だ

「たと言つわけ」

「なるほど、確かにそれは怪しいですね。それに戦闘機人や人造魔導師なんかの施設だったらスカリエッティと接点があるかもしれませんね」

「なんにしても入って見ないことには分かりません。早速中に入りましょう！」

「『うん（はい）！』」

「それじゃあ、」

「『セットアップ！！』」

こうして僕らは研究施設に入ってしまった。

施設の中は薄暗く気味が悪かった。

それに不気味な明かりが付いていてまさにお化けでも出そうな雰囲気だった。

なので……………

「じ、じじって、ほ、本当に施設だったんでしょうか？」

「そ、そのはずなんだけど、き、気味が悪いね……………」

「あ、あのく、二人とももう少し放してもらってもいいですか？そ、そのく、歩きにくいんだけど……………」

そう、僕の両腕はさっきから二人にしがみつかれてしまっている。

それに両腕をつかまれているので歩きにくく、二人の、や、柔らかいものが、あ、当たってる……………」

「あ、あの、二人ともだからはな『だ、だめ（ですか）／＼／＼？』
うっ……………」

二人は涙ながらに頼んでいる。

「はあ、分かりました。でもせめてもう少しはなれっ……」

ガタッ

そう言いかけたとき、物音がした。

「『キヤアアア（いやああ……）！』」

（光司の心の声）

「な、な、何！？今の音！？」

「何かが、た、倒れたような音だったけど……」

「とりあえず落ち着こう二人とも！何かあるのかもしれない！」

そして進んで行くと、

ラボのような場所についた。

「ここは、研究室かな？」

「そう、みたいですね。暗くて何が書いてあるか分かりませんが、資料の様なものがありますから、恐らくは・・・」

「よし、手分けして何か手がかりがないか探してみよう！」

「『はい！』」

そう言って3人で探して始めたその時、突然部屋の電気が付いた。

「『っ!?!?』」

僕らはそれぞれ構える。

すると入ってきた扉が閉められた。

「し、しまった、扉を閉められた!!」

「えっ！ほ、他に出口はないの！？」

「ダメです！扉はあるんですが扉が開きません！！」

「くっ！！完全に閉じ込められたか……」

すると突然別の扉が開いた。

「『っ！！』」

僕らはその扉に向かってる構える。

「………な、何にも起こらないね……」

「そう、ですね・・・」

扉が開いてしばらくたったが、何も起こらなかった。

すると、

「しっ、静かに！・・・何か聞こえる・・・」

ガチャッ ガチャッ

「・・・これは、何かが近付いてくる！二人とも、気をつけて！」

そしてその近付いて来た何かが姿を見せる。

「なっ何、あれ!？」

「あれは、一体何？」

「そんな!あり得ない!」

そこには機械でできた人形の様なものが3体いた。

「光司、何か知ってるの?」

「あれは『プレデター』、機械の体と人工知能をもつ金属生命体です!」

「『金属生命体!?!』」

「はい、ガジェットより厄介です！しかも、よりによって人形とは・
・・・来ます！！」

言い終わらないうちに3体のプレデターは僕らに襲いかかってきた。

まず一体が僕の方に向かって来た。

「はあっ！」

僕はそいつに斬りかかるが、

キィィーン

機械の腕に阻まれてしまった。

「くっ！か、固い！」

「シンニューシャハ、ハイジヨ」

するとプレデターはもう一方の腕をドリルに変え攻撃してきた。

「そうはいくか!・・・紅蓮一閃!!!」

ズガアアアン

僕はドリルの攻撃が来る前に剣を切り返し、紅蓮一閃を放ってプレデターを撃破した。

すると残りの2体もフェイトさんとギンガがそれぞれ倒していた。

「ねえ光司、人型がどうしてまずいの?」

「確かに、大して強くもなかったですけど・・・・・・・・・・」

「それは、これを見れば分かりますよ……………」

そう言っつて僕は倒したプレデターの方を指差す。

見るとそこには……………

「えっ、血……………」

「これ、どづいつこと……………」

「プレデターは機械の体と人工知能で出来てはいますが、元々は……………普通の、人間です」

「『えっ……………』」

この事実二人とも驚いている。
それはそうだ、さっきまで戦っていたのが、元は人間だったのだから。

「さっ行きましょう。もしかしたら奴が、D r クロウがいるかもしれません」

「『D r クロウ!?!』」

「はい、このプレデターの開発者であり、スカリエッティと同じ広域次元犯罪者です」

そうして僕は二人に歩きながらD r クロウについて話した。

「じゃあ、もしかしたらD r クロウがスカリエッティに力添えするかもってこと!?!」

「その可能性は充分にあります。それに、D r クロウは、スカリエッティより厄介です。何をしてくるか分かりません……」

と、そうして歩いていると広い場所に出た。

「ん？ここは……ずいぶん広いですね」

「しかし、研究施設にこんな広い場所って、一体……」

「ここは完成体の保管ですよ」

すると突然どこからか男の声が聞こえた。

「『だ、誰だ！』」

すると明かりが付き僕らの目の前に100体ほどのプレデターがいた。

そこには人型だけでなく、様々なタイプのプレデターがいた。

そして一番奥に、2体の龍型のプレデターの真ん中に一人の男がいた。

その男は眼鏡をかけ、銀色で短髪、白衣を着ていた。

「いやはや、君たちを招待したおぼえはないのだがね」

「『Drクロウー!!』」

「おやおや、私を知っているとは。私も有名になったものだな」

「Drクロウ！今度こそお前を捕まえてやる!!」

「おやつ？その声は……紅蓮の騎士、か、久しいな。そしてその二人は……プロジェクトFの失敗作と、あの機械の、たしか……戦闘……機人だったか、そのタイプゼロか」

「『っ！』」

この言葉を聞いた瞬間、二人の顔が曇った。

「どづいづことだ……」

「何そのままの意味だ。その二人は『だまれええ！』」

Drクロウが言い終わる前に、フェイトさんとギンガがDrクロウの攻撃しようとしていた。

しかし、

「グオオオオ！』」

「『くっ！』キヤヤヤ！』」

二人の攻撃はDrクロウの横にいた龍型のプレデターによって防がれ、こっちに吹き飛ばされてきた。

「もう一度言おう。その二人はこのプレデターと同じ、作られた存在なのだよ！」

「『・・・・・・・・・・・・・・・・』」

二人は黙ったままだ。

「君はここで消えるには実に惜しい存在だ。どうだ、私と一緒に来ないか？君はあの二人のように、意味ない存在ではない。私と一緒に来た方が利口だと思うがね」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「それとも何かい？その二人と一緒に行くと言っのかい？君が否定した、このプレデターのように、意味もなく作られた存在の私たち！……！」

「……………黙れ……………」

「……………何か言ったかい……………」

「黙れと言っている……………」

「そうか。残念だよ……………やれ！」

その瞬間一斉にプレデターが襲ってきた。

「リミット・ブレイク……………サウザンド・レイン……！」

ズガアアアアン

その爆発でほとんどのプレデターが撃破された。

「Drクロウ、一つ言っておく。この二人は、作られた存在でもなければ、意味のない存在でもない。僕の……大切な存在だ！」

「ちっ、まあいい。今日のところは、これでおさらばだ。あと、この建物はもうすぐ爆発する。では、また生きていれば会おう。はっはっは……」

そう言ってDrクロウは転送してしまった。

「くそっ！また逃げられたか！……あっそうだ、それより大丈夫ですか、二人とも？」

「え、あ、うん……」

「大丈夫……です……」

「よかった。さあ、早く脱出しましょう！」

「でも、扉が！」

「大丈夫ですフェイトさん。僕に任せてください」

とその時

「『グオオオオ！』」

2体の龍型のプレデターが立ちふさがった。

「フェイトさん、僕が技を出したらそのあとにギンガを連れてソニックムーヴでついてきてください」

「うん！わかった」

「ザックス、あれをやるよ」

「あれですか、マスター」

「ああ、あれだ」

「分かりました。ロードカートリッジ！」

僕はカートリッジを4発ロードする。

「火龍招来……烈空……魔龍槍!!!!!!」

僕は炎の龍を纏わせた槍で突撃した。

「はああああ!!!」

ズガアアアン

見事に龍型のプレデターを倒し外まで一直線に突き抜けた。

その後すぐに施設も爆発した。

そして僕らは六課へと戻ってきた。

今僕はやてさんへの報告を終え、自室へ戻ってきた。

「今日はいろいろあったし、なんか疲れちゃった」
「思っているよ」

「光司、私だけど、今入っていい？」

「はい、どうぞ」

「あ、あのね、さっきの事なんだけど、光司には知ってほしいんだ………」

そう言ってフェイトさんは自分のことについて話し始めた。

「………こう言うことなの………私は、アリシアの代わりにもなれなかった失敗作なんだよ………」

「フェイトさん………僕は、何を聞いてもフェイトさんに対しての思いは変わりませんよ」

「え!?!で、でも私は………」

「フェイト・テストロッサって言う、一人の人間ですよ。たとえなると言われようが、フェイトさんはフェイトさんです。それを忘れないで下さい」

「う、うん………ありがとう光司。………あ、それで

ね、そ、その………」

「何ですか？」

「私ね、光司のことが……好きなの………」

「………はい？」

「だから、光司のことが好きなの！あ、でも、なのはやはやて、
テ
イアナやギンガも好きみたいだし………それでね………」

するとおもむろにフェイトさんが近づいてきて、

チュッ

「あ、あのフエ¥\$£%&#」

僕はまたしても何を言ってるか分からなかった。

「うふふっ、じゃあね光司。また明日！」

そしてフェイトさんは部屋を出ていった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

この後、またまた放心状態の光司が見つかったと言っつのはお約束

第15話「大切なもの」(後書き)

次は普通のお話です。

ヴィヴィオが来ますよ。

第16話「新たな動き〜前編〜」（前書き）

すみません／／／

早く更新する予定がかなりかかってしまいました。

しかもまだ途中です・・・

それではどうぞ。

第16話「新たなる動き」前編」

光司 side

Drクロウとの一件から1日経って、今はフォワードと朝練をしている。

「はいっ、じゃあ朝の訓練はこれで終了!」

「は・・・はい」

「でね、なにげに昨日の光司君との模擬戦と、今朝の模擬戦が第二段階の見極めテストだったんだけど・・・・・・どうでした?」

「うん、合格」

「『はやっ!』」

「ま、これだけみっちりやってて問題あるようなら、どっかして
な」

「『あは、あは……』」

「というわけで、第二段階の訓練は明日から始めるよ」

「『はいっ!……明日?』」

「そっ、午後の訓練はお休み」

「私たちも今日は隊舎にいるから」

「みんな、初日から働き詰めだったでしょ」

「だから、みんな街にでも出かけて、遊んでくるといいよ！」

「『やったー！』」

そして僕らは六課の隊舎へと戻っていった。

フォワードと別れて食堂に入ってみんなと朝食を食べていると、ニュースが流れ、一人の男の演説の様子が撮された。レジアス中將である。

「このおっさんはまだこんなこと言ってるのな」

「レジアス中將は古くからの武道派だからな」

「それに、地上の英雄でもあるしね。まあ、言ってることは分からなくもないけど……」

そんな会話をしていると、カメラが移動して他の人を撮し出した。

「あっ、ミゼット提督もいらっしやってるんだ」

「ミゼットばあちゃん？」

ヴィータが思わず反応する。

（）と言っか、ミゼットばあちゃんって……）

「キール元帥やフィルス相談役もいらっしやるね」

「伝説の三提督揃い踏みやな」

「でもこうして見ると………普通の老人会だ」

「もう、だめだよヴィータ。偉い方たちなんだから」

「管理局を今の形まで作り上げた、影の功労者だもんね」

「ま、あたしは好きだぞ、このばあちゃん達！」

こんな感じで僕らの朝食はすんでいった。

~~~~~

ヴァイス side

俺は今ティアナが俺のバイクを借りたってんで、倉庫の前でバイクを整備してる。

でもって、ティアナも倉庫に来ている。

「そっぴやお前、最近動きが良くなったよな。以前のお前は、一人でもコンビでもチームでも、動きが全部同じだった。だいぶセントらしい動きになってきたんじゃないかねえか」

「ありがとうございます。みなさんの指導のおかげです」

「なるほどな。やっぱり誰かさんのおかげかな」

「／／／／べっ、別に兄さんだけのおかげじゃ、あ、ありません！」

「別に旦那なんて一言も言っていないぜ」

「あ……あの、それは、つまり……」

「まっいいけどな。ほらっ、氣い付けて行けよ！」

そい言つてティアナに鍵を渡す。

「あの、これ、聞いちゃいけないんだつたらすみません。……  
・・ヴァイス陸曹つて魔導師経験ありますよね？」

「ん？まあな、俺は武装隊の出だからな。でもヘリが好きで、それで今はパイロットだ。」

「そうだったんですか……」

「ほらっ、相棒が待つてんだろ。早く行ってやんな」

「はい。ありがとうございました」

そう言つとティアナは行つてしまった。

「やっぱり……………未練があんのかねえ……………」

俺は昔の事を思いだし、空を見上げた。

……………

光司 side

僕はなのはさんと一緒にスバルやティアナを見送りに来ている。

「それじゃあ、転ばないように気をつけてね」



「大丈夫ですよ兄さん。私、前の部隊でけっこう乗ってたんで」

「ティア、けっこう運転上手いんですよ！」

「それじゃあ二人とも、楽しんで来てね」

「はい！あ、お土産買ってきましょうか、クッキーとか！？」

「ありがとう。でも二人で楽しんでくればいいよ」

「『はい』」

こうしてスバルとティアナは行ってしまった。

すると今度はフェイトさんとエリオとキャロがやって来た。

「IDカード持った？夜の町は危ないから、暗くならない内に帰るんだよ」

「『はい！』」

そうしてエリオとキャロも歩いて行ってしまった。

「じゃあ、僕らも戻りますか？」

「『うん！』」

こうして僕らは六課の隊舎へと戻っていった。

そして廊下でシグナムさんとヴィータに出会った。

「外回りですか？」

「ああ、108部隊と聖王教会にな」

「ナカジマ三佐が合同本部を開いてくれてな。その打ち合わせだ」

「ヴィータちゃんも？」

「いや、あたしは訓練指導だ。まったく、教官資格なんて取るもんじゃねえな！」

「あ、そうだ、捜査の事なら私も行った方が……」

「お前は指揮官で、私はお前の副官だ。準備はこちらでやる」

「あ、ありがとうございます………でいいんでしょうか？」

「ふっ、まあ好きにしろ」

そう言って二人は行ってしまった。

「あの、僕ちよつとこれからシャーリーのところに行ってきますね」

「何かあったの？」

「一応、デバイスを見てもらいに、それでは！」

そして僕もデバイスルームに向かった。

inデバイスルーム

「シャーリーいますか？」

「はい、ここにです…」

そこには忙しそうに画面に向かってしゃべっているシャーリーとリンがいた。

「どうしたんですか光司さん？」

「ちょっとデバイスを見てもらおうと思ってね」

「そうですか。分かりました、ちょっと待ってくださいね」

「ごめんね、急に頼んだりして」

「いえ、大丈夫ですよ」

そう言って再びシャーリーは画面に向かう。

「そう言えば、さっきから何をしてるの?」

「フォワードたちのリミッター解除と、なのはさんのエクシードモード、フェイトさんのザンバーモードのチェックです」

「へえ、大変だね」

「はい、とつても!」

と、嬉しそうに答えるシャーリー。  
「……………なぜ嬉しそう？」

「あそつだ、リイン曹長の完全チェックもしておきましょうか」

「はい、お願いするです！」

そしてシャーリーはカプセルの様なものを準備する。

リインはその近くまで行き、服を脱ぎ始める。……………  
！？

「ちよつ、ちよつとリイン！？な、なに普通に脱ぎ始めてるの！？」

「え、だってねえ……………」

「……………」

「いや……その……だから、脱ぐなら一言いって下さい！……」  
「心の準備が……」

僕は少し赤くなりながら言った。

「はは〜ん。もしかして光司さんって、こづいづのは苦手なんですか〜？」

シャーリーがニヤニヤしながら聞いてくる。

「ノノノ、そんなことより、早くしてください！」

「あははっ、は〜い。やっぱり光司さんははてさんの言った通り、純情ですね〜」



「まったく、はやてさんはおしゃべりなんだから！」

そしてシャーリーにデバイスを渡す。

「はい、じゃあ早速始めますね」

そしてしばらくたつと……

「これ………すごいですね。古代ベルカの物なのに………  
こんなに高性能なんて………」

とシャーリーが感心している。

「そんなにすごいもの？」

「はい。こんなの見たことありません！それに、ロックがかかっているとありますが。これはいつたい……」

「それが、ザックスの無くしている記憶の手がかりになると思っただけど……なにか分かる？」

「うーん、分かりませんね。そうだ、聖王教会に行けば、なにか分かるかもしれせん！」

「なるほど、聖王教会か。それじゃあこの後行ってみようか。ありがとうシャーリー。助かったよ」

「いいえ、どういたしましてです。また何かあったらいつでもいいですよ！」

シャーリーからザックスを返してもらい、僕は聖王教会へ向かった。

in 聖王教会

しばらくして僕は聖王教会にたどり着いた。

「さて、ここが聖王教会か、どうしようか?」

と困っていると

「どござれました?」

一人のシスターが声をかけてくれた。

「すみません、少し理事長にお話をうかがいたいのですが、よろしいでしょうか?」

「失礼ですが、どちら様でしょうか？」

「あっ、申し遅れました。神谷光司一等空佐です」

「えっ！？あの『紅蓮の騎士』の方ですか!？」

「えっ？はい、そうですけど……」

「し、失礼しました！すぐにご案内します」

そう言うと、シスターはすぐに僕を案内してくれた。

僕ってどんなイメージなんだろう……

しばらく歩いていると1つの扉の前に来た。

「失礼します、騎士カリム。紅蓮の騎士様をお連れしました」

「すぐに入ってもらってちょうだい」

そして僕は部屋に入った。

そこには金髪の綺麗な長髪の女性と、短髪で黒髪の男性がいた。

まずは女性の方が挨拶をしてきた。

「はじめまして紅蓮の騎士様。私はカリム・グラシア、この聖王教会の理事をしております。そして先ほど案内させたのが、シスターシャツハです」

すると後ろにいたシスターシャツハも一礼した。

「はじめまして、神谷光司一等空佐です。そして……お久しぶりです、クロノ提督」

「ああ、久しぶりだな神谷一佐」

このやり取りを聞いてカリムさんは驚いている。

「えっ！？あ、あの、お二人はお知り合いなのですか？」

「ええ、まあ知らない仲ではないですね。そうだよな、クロノ」

「まあな、光司」

そして僕はクロノと顔を会わせる。

「ああ、そんなに緊張なさないで下さい」

僕がそう言ったが、カリムさんはどうしていいやら分からないようだ。

するとクロノが

「まあ仕方ないさ。だってあの紅蓮の騎士がいるんだからね」

そう言うとカリムさんはものすごく頷いてる。

「あはは……あの、そんなにかしこまらないで下さい。普通に接してもらって構いませんから」

「は、はい、それでは、光司さん、とお呼びしてもよろしいでしょうか？」

「はい、それでいいですよ、カリムさん」

「は、はいっ／＼／＼！」

僕が答えると顔を赤くしてカリムさんが答えた。  
うーん、これはいいったい？

「と、とにかくこちらへどうぞ。シャツハ、もう一つお茶を持ってきて」

「はい、分かりました」

そしてシスターシャツハはすぐにお茶を持ってきてくれた。

「それで用件なのですが、僕のデバイスのことなのですが……」

「『デバイスの？』」



「はい。僕のデバイスは古代ベルカ式なんで、以前の記憶がなく、まだ機能してない部分があるのです。なので、ベルカの時代に何か手がかりがないかと思ひまして・・・」

「なるほど、でそのデバイスの名前は？」

「ザックスって言うんですけど、聞き覚えはありませんか？」

「ザックス？・・・！！、もしかして・・・」

「騎士カリム？」

するとカリムさんは一冊の本を持って来た。

「まず、ベルカの時代には聖王が存在していたことはご存じですね」

「はい」

「では、聖王と共に戦った『霸王』という存在をご存じですか？」

「い、いいえ……」

「そして霸王が使っていた武器、それはもうロストロギアの様な物だったそうです。その名は………覇剣、エツケザックス」

「『エツケ、ザックス？』」

「はい、もしかしたら、光司さんのデバイスは………その………」

「可能性は十分にあります」

するとザックスが話に入ってきた。

「どづいうことだ？」

「確かに私にはまだ機能してない部分がありますが、シャーリーも言っていた通りかなり高性能のようですし、名前も若干酷似していますので、可能性は高いと……」

「そうか……でカリムさん、その後エツケザックスはどうなつんですか？」

「はい、この本によると、あまりにも力が強く他のものでは扱えなかったので、霸王と共に墓地に埋葬されたとなっておりますが……  
・はつきりとは」

「そうですか……ありがとうございます。」

「いえ、お役に立てずすみません」

「そんな、とんでもない！とても助かりましたよ」

「ノノノえっ、あ、その、何よりです。また、何かあったらいつでも来て下さい！」

「ありがとうございます。それでは失礼します」

こうして僕は聖王教会を後にし、ある場所へ向かった。

~~~~~

スバル side

私たちはタイヤが運転するバイクで町に出て、アイス食べたり、ゲーセン行ったりして、今はのんびりしてる。

「あっ、そうだ。あっちの二人は何してるかな？」

そうして私はエリオのデバイスに連絡してみる。

「ちょっと邪魔しちゃ悪いわよ」

で、しばらくするよ

「はい、こちらライトニング」

「こちらスターズ。どう、そっちは楽しんでる？」

「おかげさまで、なんとか」

「そっちは今どんな感じ？」

「えっと、今は公園を散歩して、これからショッピングモールを回る、な感じですよ」

「その後、ご飯食べて、映画見て、最後に夕日の見える海岸線を散歩するってプランを立ててもらってます」

「『はめっっっっ』」

思わずティアと声がそろってしまっつ。

「ちゃんと一しずつクリアしていきますので」

「クリアってあの子達は……」

「あはは、まあ健全だあ……」

「『……?』」

エリオとキャラロはなんだか分からないようすだった。

「いや、何でもないので」

「まあ、何か困った事があったら連絡して」

「はい、ありがとうございます。それでは……」

「うん、じゃ〜ね〜」

そして私は通信を切った。

「よしっ、じゃあ私たちも行こっか？」

「そうね、行きましょー！」

そうして私たちは町にくり出していった。

~~~~~

エリオside



僕はスバルさん達の通信の後、町を歩いていた。

すると

「っ！？キヤロ、今何か聞こえなかった？なんか、重い物を引きずるような……」

「え？何にも聞こえなかったけど」

しかし気になったので音のする方へ行つた

するとマンホールから一人の少女とレリックのケースが2つあった。

「キヤロ、通信お願い……」

「うん、うん……」

この時から、初めての休日は崩れていった。

そしてこの後に起こることは、誰一人として予想できなかった・・・

第16話「新たな動き〜前編〜」（後書き）

次回はこの続きです。

原作より少し変える予定ですので、お楽しみに！

第17話「新たな動き〜中編〜」（前書き）

前編と後編にする予定でしたが、長くなりそうだったので中編を挟みました。

今回はほぼ原作通りです。

あと、主人公はあまり出ません。

それではどうぞ。

第17話「新たなる動き」中編」

はやてside

キャロからの全体通信を受けてなのはちゃんとフエイトちゃん、シヤマル、そしてリインを出撃させた。

幸い、見つけた女の子は無事のようだった。

すると突然

「ガジェット来ました！地下の方に19………20！

「海上方面に12機単位の5グループで、市街地へ向かっています  
！」

「多いですね。どうしますっ。」

「そやねえ……………」

「うちが悩んでると、」

「スターズ2よりロングアーチ、こちらスターズ2！」

「ヴィータからの通信やった。」

「海上で演習中だったんだけど、ナカジマ三佐が許可をくれた。今現場に向かっている。それと……………」

すると次は別の人物からの通信がはいった。

「陸上108部隊、ギンガ・ナカジマです！どうやら、私が今調べ

ている事件と関係がありそうなんです。参加してもよろしいでしょうか？」

「うん、お願いや。よしっ、ほんならリンはヴィータと合流、ガジェットを南西方向から迎撃、なのは隊長とフェイト隊長達は北西部から、ギンガは地下でフォワード達と合流、道々別件の方も聞かせてな！」

「『了解！』！』」

そしてみんなそれぞれの場所へ向かった。

~~~~~

ルーテシア side

私は今ドクターが知らせてくれた、レリックの反応があった地点に
来ている。
すると通信が来た。

「へりの方のマテリマルとケースは、妹達が回収します。お嬢様は
地下の方に」

「うん」

「騎士ゼストとアギトさまは？」

「別行動」

「お一人、ですか？・・・」

「一人じゃない。・・・私にはガリユールがいる」

「失礼しました。協力が必要ななら、お申し付け下さい。最優先で実行します」

「うん」

そして通信は切れた。

「行こうか、ガリユー……探し物を、見つけるために……」

そして私は転移魔法で地下に向かった。

~~~~~

ギンガside

私ははやくさんからの指示を受け、今はフォワード達のところへ向

かっている。

するとティアナから通信がきた。

「お久しぶりです、ギンガさん」

「うん、ティアナ。現場リーダーはあなたでしょ、従つから指示をくれるかな？」

「はい！ひとまずF94区画を目指してください。途中で合流しましょうー！」

「F94……………了解！」

「ギンガさん、デバイス同機で総合位置把握と独立通信ができます、準備いいでしょうか！？」

「うん！ブリッツキャリアバー、お願いね！」

「イエス、サー！」

そして私はバリアジャケットに身を包む。

すると今度ははやてさんから通信が入る。

「ギンガ、移動中に別件の方教えてくれるか？みんなにも、通信は開いてる！」

「はい。私が呼ばれた事故現場にあったのは、ガジェットの残骸と壊れた生体ポットなんです。ちょうど5、6歳の子供がはいるぐらいの。……。近く何か重い物を引こずったような後があり、それをたどっていた最中、連絡を受けた次第です」

「なるほどなあ……………」

「それからこの生体ポット、前の事件で良く似たものを見た覚えがあるんです……」

「わたしも、な……」

「人造魔導師計画の、素体培養機……」

「『っ!!?!?』」

その言葉を言った瞬間、皆さん驚いた。

「これはあくまで推測ですが、あの子は人造魔導師の素材として、作り出された子供ではないかと……」

「……了解、じゃあギンガはそのままフォワードと合流してな  
「！」

「はい！」

そして通信を切りみんなのところへ急いだ。

~~~~~

キヤロside

私たちはギンガさんの話を聞きながら、レリックの場所に向かって
いた。

「あの、人造魔導師って？」

「優秀な魔導師の遺伝子を使って人工的に産み出した子供に、投薬
とか機械部品の埋め込みで、後天的に強力な魔力や能力を持たせる、
それが人造魔導師」

「倫理的な問題はもちろん、今の技術じゃどうやったっていろんな部分で無理が生じる、コストも合わない。だから、よっぽどどうかしてる連中じゃない限り、手を出したりしない技術のはずなんだけど……」

すると私のケリュレイオンが反応した。

「ガジェット、来ます！小型ガジェット、6機！」

そして私たちは戦闘の準備をする。

~~~~~

ヴァーサイド

私は海上に現れたガジェットをラインと一緒に倒していた。

そしてあらかたこの辺りのガジェットは叩いた。

「よしっ、いい感じた!」

「リインも絶好調です!」

「ガンガン行くぞ、さっさと片付けて他のフォーローに回らねえと」

「はいです!っ?あれは……」

見ると向こうの方に

「ぞ、増援!」?

~~~~~

はやてside

なのはちゃんとフェイトちゃん、ヴィータとリインがそれぞれで順調にガジェットを倒して行って、しばらくたったころ。

「航空反応増大！これ……嘘でしょ！？」

「なっ、何だ、これは？」

画面を見るとさっきまでのガジェットの数より、一気に二倍以上増えていた。

「波形チェック。誤認じゃないの!？」

「問題……出ません。どの波形も実機としか……」

「なのはさん達も、目視で確認出来るって!」

(やばいなあ、あれを使うか……)

「グリフィス君!」

「……はい!」

そして私はオペレーター室を離れた。

~~~~~

なのはside

私とフェイトちゃんは急に増えたガジェットに少してまどっている。

そして今フェイトちゃんが数体に攻撃すると……

「っ！？幻影と実機の構成編隊？」

すぐにミサイルが飛んできたので、私はフェイトちゃんごと包むようにバリアを張る。

「防衛ラインを割られない自信はあるけど、これじゃあきりがないね」

「ここまで派手な引き付けをするってことは……………」

「地下か、ヘリの方に主力が向かってる……………」

「なのは、私がここを抑えるから、ヴィータと一緒に……………」

「フェイトちゃん!？」

「コンビでも、普通に空戦してたんじゃ時間がかかりすぎる。限定解除すれば、広域殲滅でまとめて落とせる!」

「それは、そうだけど……」

「それに、何だか嫌な予感がするんだ……」

「割り込み失礼! その案も、限定解除も部隊長権限において却下します!」

突然はやてちゃんから通信が来た。

「はやてちゃん、何で騎士甲冑!？」

「嫌な予感私も同じでなあ。クロノ君から限定解除許可をもらうことにしたんよ」

「えっ、でも……」

「空の掃除はあたしがやるよ。二人はへりの護衛を、ヴィータとリンは地下の方へ！」

「『了解!』!』」

そうして私たちはそれぞれの場所に向かった。

~~~~~

はやてside

私は限定解除許可をとるためクロノ君に連絡を取った。

「君の限定解除許可を出せるのは、僕と騎士カリムのそれぞれで一度ずつだ。それでもいいのか？」

「持つてる能力を出し惜しみするのはいややからな」

「場所が場所だけにSSランクの魔導師は投入できない。限定解除は3ランクまでだが、それでもいいか？」

「Sか・・・それだけあれば十分や」

「ふう、八神はやて、限定解除、リリースタイム120分！」

「ふじっ、リミット・・・リリース!!」

こうしてやっとのことで限定解除ができた。

「ロングアーチ、シャリオから、八神部隊長へ」

「はいな！」

「シュベルトクロイツとの誤差、0・3%。いけます！」

「ごめんな、リンと融合してないと遠距離の制御がしくくてな
」

「いえ、大丈夫です！」

「ほないくで！」

~~~~~

ティアナside

私たちは途中ガジェットを倒しつつギンガさんと合流してレリックを探していた。

そして広い場所に出た。

するとキャラロが

「あ！、見つけました」

ケースを見つけた。

が見えない何かがあるものすごい早さで近づき、キャラロに攻撃してきた。

「キャラロ！！」

エリオがそのなにかを吹き飛ばした。  
がエリオも手傷を負った。

「エリオ君！」

するとその何かは正体を表した。

それは人型で黒い鎧で覆われていて目が赤かった。

私たちがそいつに驚いていると、キャロの後ろの方から女の子が現れケースを持っていこうとしていた。

「あっ!!」

「邪魔……」

「っ!!……キヤア!!」

「キ、キャロ!っわああ!!」



キャラがその女の子に吹き飛ばされ、エリオが助けようとしたが一緒に吹き飛ばされてしまった。

「エリオ、キャラ！このおお！」

とつさにスバルが攻撃するが避けられてしまった。私は隙を見てオプティックハイドでその女の子に近づく。

そしてギンさんがそいつに攻撃をしかける。

「はあああ、たあつ！！」

見事にそいつを吹き飛ばし、その隙にスバルも女の子に近づく。

「その子、それ危ないものなんだよ。こっちに渡して」

「.....」

しかし女の子は返答せず、そのまま行くこととする。

………しかないわね。

そうして私はダガーモードにして刃を女の子に近づける。

「じめんね乱暴で。でもこれすごく危険なものなんだよー！」

それでも女の子は動じなかった。

すると突然、私たちの周りで激しい閃光が光った。

「『くっ！ー！』」

私は突然の光に目を覆い、女の子を逃がしてしまった。  
さらにさっきの黒いやつに飛ばされてしまった。

「っ!!」

飛ばされた後、私はとっさに女の子に銃を向け、撃った。

「えっ!?!」

しかしその攻撃は、また黒いやつに防がれた。  
私たちはいったん集まり、体勢を立て直した。

するとどこからか声が聞こえた。

「まったく、一人でいくからこついうことになるんだぞ、ルール  
もガリユーム」

「アギト……………」

「おう、でももう安心しろ！何たって、烈火の剣精、アギト様が来たからな！..!」

「ようしゃっ、いくぞ..!」

そうしてそのアギトと呼ばれた、融合機が攻撃してきた。

「『くっ!..!』」

放たれた炎によって、私たちは押されてしまった。

「ティア、どうする!..?」

「目的はあくまでケースの確保だから、誘き出しながら退却する」

「今向かってるヴィータ副隊長とリイン曹長に上手く合流できれば、あの子も止められるかもってことだよね!」

「そう言うこと!」

すると突然念話が来た。

(よし、なかなかいいぞスバルにティアナ)

(ヴィータ副隊長!?)

(私もいるですよ!)

(リイン曹長も!?)

(とにかく、あたしたちが行くまで何とかもてよ!)

(了解!)

するとしばらくして、

ズガアアアン

「でやああああ！」

「捕らえよ、凍てつく足枷、フリーレン・フェッセルン！」

天井を壊してヴィータ副隊長とリン曹長がやって来たと思うと、あっという間に三人を倒してしまった。

「『……………』」

「よおっ、待たせたな」

「副隊長、やっぱつよ」

「あはは、そ、そうね……」

「でも局員が公共施設破壊しちゃっていいのかな？」

「まあ、この辺りは廃棄都市区画だし……」

と、私たちが話していると

「ちっ、逃げられたか……」

「じっちもです」

見るとそこにもう三人の姿はなかった。

すると突然地面が揺れた。

「っ、地震!？」

「いえ、恐らく、さっき召喚の反応があったので、そのせいだと思います」

さっきまで気絶していたキャロが答えた。

「よしっ、取り合えず脱出だ、スバル！」

「は、はい！ウィング・ロード！」

「ギンガとスバルが先行しろ。あたしは最後に飛んでいく！」



「『了解!』」

こうして、私たちはこの地下から脱出した。

~~~~~

光司 side

僕は聖王教会を後にしてある場所へと向かっていた。その場所は……
……地上本部。

僕はある人物に報告をするためにやって来た。
そして今、その人物がいる部屋の前にいる。

「久しぶりにあの人に会うな……」

そうして僕が扉をノックしようとするど、

「八神はやて？あの八神はやてか！？」

「はい。闇の書事件の、八神はやてです」

「あのギル・グレアムの秘蔵、どちらも犯罪者ではないか！！」

「っ！？」

「問題発言です。公式の場ではお止めください」

「わかっておる。それより、近くお前が査察に入『その必要はありませんよ！』っ！？」

もう僕は耐えられず部屋の中へ入った。

「き、貴様は……」

「お久しぶりです、レジアス中将」

~~~~~

第17話「新たな動き〜中編〜」（後書き）

次で最後です。

多分前編と中編より短くなると思います。

で、その次からちょっとずつオリジナルストーリーになります。

第18話「新たな動き〜後編〜」(前書き)

今回はけっこう速く更新できたと思います。

それではよいしょ。

第18話「新たなる動き」後編」

光司 side

「お久しぶりです、レジアス中将」

「き、貴様がなぜここにいる!？」

「それは報告のためですよ」

そう言って僕は資料を渡した。

「これは………Drクロウか!」

「はい。この前の事件で偶然見つけましたが、捕らえられません  
した」

「なるほど、調べておこう。だが、あれはいつたいたいどういう事だ！  
査察はオー』その必要は無いと言ったはずです！』くっ……」

僕は殺気立ててもう一度言った。

「し、しかし……それは！」

「それにレジアス中将、さっきの発言は聞き捨てなりませんね」

「貴様、上司に向かって何様のつもりだ！！」

「関係ありませんよ！！僕は大切な人を侮辱するやつは、誰である  
うと許しませんよ！！……たとえば、それが自分の上司であり、  
師の親友だろうと！」

僕は先ほどより殺気をだして言った。

「『・・・・・・・・・・』」

二人とも黙ってしまった。

「それでは、僕はこれで失礼します」

僕はすぐさま部屋を出てグリフィスに連絡を取る。

「グリフィス、今状況はどうなってる!？」

「こ、光司さん!?!今までどちらに?？」



「説明は後にしてくれ！それより状況は！？」

「は、はい。今部隊長が航空のガジェットの殲滅を、なのは隊長とフェイト隊長はヘリの護衛に向かっていて、ヴィータ副隊長とリン曹長はフォワードのところですよ！」

「了解、こちらもすぐに現場に行く！」

「は、はい……」

そうして通信を切って現場に急いだ。

~~~~~

ルーテシア side

私は突然来た局員に捕まりそうになったけど、何とか脱出して外に出て地雷王を召喚した。

「ルーラー、これは不味いって！埋まった中からどうやってケースを探す？それにあいつらだって死んじやうかも知れないんだぞ！」

「あの程度なら、これくらいじゃ死なない。ケースは後でクアットロとセインに探してもらおう」

「よくねえよルーラー！あの変態博士やナンバーズ連中と関わっちゃダメだって、ゼストの旦那も言ってる！あいつら口ばっか上手いけど、本当はあたしたちの事せいぜい実験動物にしか……」

ズウウウン

アギトが言い終わらないうちに地雷王の重みで地面が沈んだ。

「や、やっちゃまった……」

「ガリユー、戻っていいよ。アギトがいてくれるから」

そう言うとガリユーは頷いて戻っていった。

すると突然、地雷王を鎖のような物で捕まってしまった。

「『っ!?!?』」

私たちが驚いていると、さっきの同員たちがやって来て攻撃してきた。

「……………」

「JUN」

アギトと私が応戦をしたけど、私が道路に下りた瞬間に赤い髪の男の子に槍を向けられていた。

アギトも氷のダガーに囲まれていた。

「ここまでですー！」

そうして私とアギトがバインドされ

「ふう、子供虐めてるみたいでいい気分はしねえが、公務執行妨害とその他もろもろで逮捕する」

とうとう私たちは捕まってしまった。

~~~~~

?????side

ここはとあるビルの屋上。

そこにはコートを羽織った二人の女性がいた。

「ディエチちゃん、ちゃんと見えてる?」

「ああ、遮蔽物もないし、空気も澄んでる、よく見える。でもいいのかクアットロ、撃っちゃって?」

「ウーノ姉様いわく、あのマテルアルが当たりなら、本当に聖王の器なら、砲撃くらいじゃあ死なないから大丈夫だそうよ」

「ふん……」

すると通信が来た。

「クアットロ、ルーテシアお嬢様とアギト様が捕まったわ」

「あゝ、そういえばあの赤いちび騎士に捕まっていたね」

「今はセインが見張ってくれてるけど……」

「フォローします？」

「お願い」

そうして通信は切れた。

~~~~~

ルーテシア side

私が局員に捕まって色々聞かれていると、クアットロから念話が来た。

(ルーお嬢様、お困りのようですが、よろしければこのクアットロがお手伝いします)

(うん、お願い……)

(それでは、今から私が言うことを、その赤い騎士に)

(わかった……)

「逮捕は、いいけど……」

「『っ！っ！』」

「大事なへりは、放っておいていいの？」

「『っ！！』」

~~~~~

ロングアーチside

フォワードたちが召喚師達を逮捕してしばらくたったとき

「市街地に高エネルギー反応、物理破壊型、推定Sランク！！」

「『何だっ！？』」



「チャージ確認、ターゲットは……………ヘリです!」

そして非情にも、ヘリに向かってエネルギー砲は発射された。

「あぁっ!!!」

「ちよっ、直撃……………」

「ジャミングがひどい、データ来ません!」

「そ、そんな……………」

指令室は絶望と言つ名の沈黙に満ちてた。

~~~~~

ヴァイタ side

「大事なへりは、放っておいていいの？」

「『っ！！』」

その瞬間、どこからエネルギー砲が発射され、へりに直撃した。

「シャマル先生や、ヴァイス陸曹が……」

「嘘でしょ……」

「おいつ！仲間がいののか！？言え！どこにいる……」

あたしは我も忘れてそいつの胸ぐらにつかみかかった。

しかしやつは答えなかった。

すると今度は

「エリオ君、足元に何か!」

「えっ?・・・うっ!」

突然地面の中からやって来たやつにケースを奪われた。

そしてすぐに召喚師も連れていかれそうになったので

「くっ!」のっ!」

あたしがとっさに捕まえようとしたが、逃げられてしまった。

「ロングアーチ……へりは無事か？あいつら……落
ちてねえよな！？」

「そ、それが……ジャミングがひどくて……確認でき
ません」

「くそっ！なのは、フェイト、どちらか間に合ったのか！？」

「ううん。……私たち……間に会わなかった……」

「そ、そんな……」

「あゝ、へりは落ちてませんが……」

「『はっ？？』」

「いやだから、へりは無事ですって。僕が守ったんですから」

通信からはいつものあいつの声が聞こえていた。

~~~~~

光司 side

僕はリミットブレイクをしてギリギリのところまでへりを守った。

「いやだから、へりは無事ですって。僕が守ったんですから」

「『光司（君）！！』」

「説明は後でします、それより今は目の前の敵です！」

そうして僕は手に魔力を溜める。

「フレイム・ドライブ！」

僕は撃つて来た方へフレイム・ドライブで攻撃する。

が、避けられてしまった。

すると、それと同時になのはさんとフェイトさんが到着した。

「市街地での魔法使用、及び殺人未遂の現行犯で逮捕します！」

「大人しく投降しなさい！」

フェイトさんと一緒に二人を追っていると、突然に姿が消えた。

「っ!?!はやて!」

「位置確認!発動まで・・・あと4秒!」

「光司、行くよ!」

「は、はい・・・」

僕はフェイトさんに言われるがまま、市街地から離れた。

「あのフェイトさん、なのはさん、何で離れるんですか?」

「それはね……」

「もうすぐ分かるよ！」

すると黒い球体が二人が消えた辺りに向かって落ちていた。

「な、なるほど……」

すると黒い球体から逃げるようにあの二人が出てきた。

すると、なのはさんとフェイトさんが砲撃の準備をした。

「トライデント・スマッシュアアア！」

「ダイバイン・バスターアアア！」



そして二人の攻撃が当たる瞬間、何か動いた気がした。

ズガアアアン

~~~~~

フェイトside

ズガアアアン

「ビンゴォ!!」

「じゃない、避けられた!」

「えっ!?!」

「当たる直前に救援が入った!」

「アルト追跡お願い!」

「は、はい!.....ダメです。反応ロストしました.....」

417

「あゝ逃げられたか.....」

「それじゃあ、六課に戻るっか.....って光司がない!」

「えっ!?!あつ本当だ!」

私たちがあの二人に逃げられた事に驚いてると、いつの間にか光司は消えていた。

~~~~~

光司 side

僕はなのはさんとフェイトさんの攻撃が当たる瞬間にあの二人を助けた仲間を探してる。

「うーん、けっこう速かったからな。どこにいるんだろ？」

と、辺りを探してみるとあの二人と、助けたであろう仲間がいた。

僕はとっさに物陰に隠れて様子をつかった。

「トーレ姉様、助かりました」

「感謝……」

「ぼおつとするな、さっさと立て」

どつやら真ん中に立っている女性が助けたようだ。

“姉様”と呼んでいることからおそらく二人の姉だろう。

「まったく、監視目的で来てみれば……来ててよかった。セインはもうお嬢とケースを完遂したそうだ。合流して戻るぞ！」

お嬢……おそらくルーテシアのことだろう。  
合流して戻らって事は、アジトに行くかな。

「よしっ、このままあとをつけて……」

ガサッ

「っ、誰だ!？」

「い、いやっ落ち着け!まだ見つかってはいない………は、はっくしゅん!」

「そこかっ!」

僕はあっけなく見つかってしまった。

「『あっ、この人!』」

「知ってるのか、ディエチ、クアットロ!？」

「へりへの攻撃を防いだ局員だ！」

「しかし、こいつは本当に局員か？局員なら、こんな間抜けに見つからんだろう」

「『確かに……』」

「（ガーン!!!）」

僕は精神的にかなりダメージを受けた。

すると

「いいえ、彼は紛れもなく局員よ。それも、かなりエリートだね」

「『ウーノ姉（様）！！』」

突然通信が入り、紫の髪の長い女性が映った。

「そうですよね、神谷一等空佐？」

「いかにも、僕は紛れもない局員です。それでは単刀直入に言いましょう、僕をスカリエッティの所へ案内してください」

「『何っ！！！』」

「貴様、何を言ってるのか分かっているのか！」

「もちろん、手錠をかけるなり、目隠しをするなりは構いません。そして、この事は報告しないと約束します」

「しかし報告しないという保証はどこにもっ……いいでござう」っ!? ウーノ姉!」

「大丈夫よトーレ、彼は変わり者って噂だし、何よりドクターが彼に会いたがっているわ」

「………了解した」

そうして、トーレと呼ばれた女性は通信を切った。

「おい貴様、私はお前のことを信用したわけではないから……  
………付いてこい」

「ああ、分かってる」

こうして、僕はスカリエッティの所へ案内された。





**第18話「新たなる動き」後編」(後書き)**

今回はスカリエッティとの対話です。

一応、スカリエッティはいいやつに設定してます。

第19話「ナンバーズとマッドサイエンティストとの一時〜前編〜」（前書き

ナンバーズとのお話です！

何だか、ナンバーズのキャラが違ってます……

そしてあのマッドサイエンティストはいい人っぽくなっています。

それではございませう。

第19話「ナンバーズとマッドサイエンティストとの一時〜前編〜」

光司 side

僕は色々あって、スカリエッツィのアジトに向かう事になった。

そして今はセインとルーテシアに合流して、トーレさん、クアットロ、デイエチと一緒に通路を歩いている。

(ちなみに、トーレさんにだけ“さん”付けなのは、何だか僕に対して怖いからである)

「お嬢の集団転送のおかげですね。ありがとうございます」

「うん……」

「あっセインちゃん、ケースの中身確認」

「あいよ〜」

そういつてセインは近くの台にケースを置き中身を確認する。

「じゃじゃーん！………っであれ？」

そこには空っぽのケースだけだった。

「どづいつことだ！？」

「セインちゃん、あなたまさか！？」

「っつて、あたしはちゃんと運んできた！」

「ディープダイバーの使い方間違えて、中身だけ落としていたとか」

「間違えねえ!!」

そしてセインは画面を出して説明する。

「ちゃんとスキャンして本物のケースだって確認して、ほらっ!」

そう言って、画面に映っているケースが本物であることを説明する。

「確かにケースは本物だけど……」

僕も画面を見て確認する。

「ふうん、なるほどね」

と言いつと同時にトーレさんも何か気付いたようだ。

「バカどもが、お前らの目は節穴か！」

そう言って、キャロの帽子を指差す。

「ここだ！」

「『…』めっ！』」

「まっ、っ、してやられたわけだ」

「貴様が言つな!」

僕はトーレさんに怒られてしまった。

「それより、すみませんお嬢、愚昧の失態です」

「別に、私が探してるのは11番のコアだけだから・・・」

そう言ってルーテシアは行ってしまった。

「あつ、これ6番か」

「しかしやっべく、コアもマテリアルも管理局に渡しちゃったとなると・・・」



「ウーノ姉様に起こられる」

「あゝめんどくせー」

こうして僕ら一行は、アジトの奥へと進んで行った。

しばらく行くと、広い場所に出た。

すると一人の女の子が近づいてきた。

「チンクか、今戻った」

「お帰りトーレ姉、クワ姉、ディエチ、セイン。……で、  
そいつが例の」

「ああ、私はどうも信用ならんがな」

「え、トール姉様、何か光ちゃん面白そうじゃないですか」

「こっ、光ちゃん!？」

僕はいきなりちゃん付けで呼ばれたので驚いた。

「クアットロ、お前な!」

「だってトール姉様、彼女の子みたいでかわいいじゃないですか」

「『男だったのか!？』」

デイエチ、セイン、そして先ほどチンクと呼ばれた銀色の髪で眼帯をしている少女が驚いた。

「ど、せ僕は女顔ですよ」

僕は落胆しながらボソツと答えた。

「まあそれはともかく、ドクターが呼んでいる。部屋まで案内するから付いてこい」

「はい……」

そして僕はトボトボとチンクの後を付いていった。

~~~~~

残った4人side

「行っちゃったね」

「少し言い過ぎちゃったかしら？」

「光司さんかなり落ち込んだじゃってたしね」

「ふんっ、あの程度で落ち込むとは、情けない!!!……………とは
言え、さすがに言い過ぎた所もあるなあ……………」

なんだかんだで光司が心配になる4人でした。

~~~~~

光司 side

僕はチンクの案内でスカリエッティの部屋の前まで来た。

「私はここまでだ、これで失礼する」

「ああ、えっと・・・チンクだったかな、ありがとう、助かったよ」

なでなで

そう言ってチンクの頭を撫でる。

「／／／っ！、な、何をする!？」

するとチンクの顔が真っ赤だ。

何か最近こういう事が多いような・・・

「あつ、ごめんねいきなりで」

そして僕はチンクから手を放す。

「べ、別に／＼／＼・・・そ、そでは失礼する！」

そう言っつてチンクは足早に去ってしまった。

「何か悪い事したのかなあ？」

そう思いつつ部屋の中へ入った。

ガチャッ

そこには椅子に座っている紫の髪で白衣を着ている男性と、その近

くに立っている薄い紫の長髪の女性がいた。

「あなたがジエイル・スカリエッティですね」

「いかにも、私がそうだよ。そしてはじめまして、『紅蓮の騎士』  
神谷光司君。まあ、その辺にかけたまえ」

そして僕はスカリエッティの近くに座った。

そしたらお茶が出てきた。

「あっ、お構い無く………って違う！え、えっと………」

「申し遅れました、私はウーノ。ドクターの秘書をしています」

「ああ、」  
「丁寧にごうも」

そして僕は出されたお茶をすする。

「驚いたな、敵地で出されたお茶を飲むとは……」

「あ……」

「まあ毒なんかは入れていないがね」

「ふう、よかった」

「しかし君は実に面白いなあ、本当に管理局かい？」



「本当に管理局です！まったく、これで二回目だ……」

「そ、そうなのか……それで、私に何か用かね？」

「単刀直入に言います。……僕の要求をのんでほしいんです」

「ふむ、その要求と条件次第かな」

「それではまず、管理局への復習を止めて自首してください」

「おやおやいきなりそれとは、参ったね……」

「もちろん、管理局の間は僕が排除します。たとえ……  
相手が最高評議会であるうとね」

「まったく、君は本当に面白いねえ、考えないこともないが……  
こちら君に頼みがある」

「何でしょうか？」

「君の遺伝子がほしいんだが、どうかね？」

「………はあ、まあ、別に、そんなものでいいんなら……」

「よかった。いや、感謝するよ。実を言うと、最近じゃ管理局への復習より、君への興味の方が勝っていてね、ぜひとも研究したいと思ってたんだよ！」

「は、はあ、それはどうも……」

遺伝子一つで犯罪を未然に防ぐことが出来るのならこんなに安い」とは、  
「ではない、と思って僕は了承した。」

「あと、もう一ついいですか？」

「何だい光司、言っでござらん？」

「要求というより質問なんです、ルーテシアはなぜあなたに協力を？」

「ああ、それはだね、彼女の母親、メガーヌ・アルピーノを助けたためさ」

「メガーヌ・アルピーノ!?なるほど確かに似てるなあ……  
、あつ、あともう一つお願いが！」

「何だね？」

「Drクロウには、絶対に手を貸さないで下さい！」

僕は急に真剣な表情で言った。

なので二人も驚いている。

「あ、ああ。君がそこまで言うなら、そ、そうしよう」

「ありがとうございます。では用も済みましたので、僕はこれで」

そうして僕は部屋を出ようとするど

「待ちたまえ、どうせなら今日一日くらいゆっくりしたまえ。それに、他の娘たちに紹介もしたいしね」

「いえ、そう言う訳には……」

「そんなこと言わないで下さい。私も妹達も、光司さんのお話聞き  
たかつたんです」

スカリエッティはともかく、ウーノさんまで僕を引き留めてきた。

「うん、そ、それじゃあ……」

こうして、僕はもう少しここにいることにした。  
そして3人でさっきの広い場所向かった。

そこにはトーレさんやクアットロ、セインの他に、色々な人がいた。

「光司、紹介しよう私の娘達だ！」

そうして一人一人自己紹介が始まった。

「改めまして、ナンバーズ01、ウーノです。よろしくお願ひします、光司さん」

「ナンバーズ03、トーレだ。……まあ、さっきはすまなかつた、少し言い過ぎた」

「ナンバーズ04、クアットロです。改めてよろしくね、光ちゃん」

「ナンバーズ05、チンクだ。……よ、よろしくなっ／＼／」

「ナンバーズ06、セインです。まあ光司さん、管理局って感じじ

やないし・・・気楽にやれそうかな？そんなわけで、よろしくお  
願いします」

「ナンバーズ07、セツテです。お会いできて嬉しいです」

「ナンバーズ08、オットーです。・・・よろしく」

「ナンバーズ09、ノーヴェだ。」

「ナンバーズ10、ディエチ。まあ、さっきはいろいろとごめん」

「ナンバーズ11、ウェンディっす。色々お話してくださいっす！」

「ナンバーズ12、ティードです。よろしくお願ひします」

そしてナンバーズ全員が自己紹介を終えた。  
そこで僕はある疑問をぶつけた。

「あのスカリエツィ、何でみんなナンバーズって名前が付いているんだ？」

「ああそれはね、彼女達を作った順に名前を付けたからさ」

「ふん、作った順にね……………って、作ったあああ！  
？」

「それはそうだよ、彼女達は戦闘機人なんだから……………」

「戦闘機人って……………みんなこんなにかわいいの？」

「『……………！』」



その瞬間、ナンバーズ達の顔が真っ赤になった。

「まったく、君と言うやつは……」

スカリエツティは呆れている。  
……なぜだ？

そして、僕はもう一つの疑問をこっそりと質問した。

（ところで、何でみんな女性なの？）

（それは……秘密だよ）

（あ……そう……）

それからしばらく、僕はナンバーズのみんなと話をしていた。

そしてなぜか時々顔が赤くなっている。

熱でもあるのかな？

なんて思っていると、ウエンディが

「光司さんって、いったいどれくらい強いんすか？」

「え〜、う〜ん、どねくらいって言われると………」

と密かにうなづ

「なら、私と勝負しろ！」

「えっ!？」

突然後ろからノーヴェが言った。

「いや、それは……」

「こんな男だか女だか分からねえやつが強いはずがねえ!!」

「ガーン……」

僕はその場に崩れ落ちた。

周りではセインやウエンディ、オットーやティードまでが慰めてくれている。

……なんか、勝負する前に心で既に負けた気がする……

しかし、僕はみんなの励ましもあ、りなんとか立ち直り

「いいよ、それじゃあ勝負しよう。言っておくけど、手加減はしな

いよ

「上等だ、返り討ちにしてやるよ！」

こうして、僕たちはナンバーズ達が訓練をやっている訓練スペースに向かった。

向かっているのは僕とノーヴェ。

と

セイン、ウエンディ、デイエチ、オットー、ティード……………  
…って、みんなついてきてる……………

こうして、そろそろと訓練スペースにやって来た。

するとそこには先客がいた。

見ると、トーレさん、クアットロ、チンク、セツテがいた。

「ん、光司か？どうしてこんな所へ？」

「いやちょっと、ノーヴェがどうしても勝負したいって言ったもの  
ですから」

「ほう、私もお前の実力が知りたかったところだ。どれ、見物させてもらおう」

と言って、4人は訓練スペースをあけてくれた。

「さて、それじゃあやるうか？」

「おう、どつからでもかかっていい！」

こうして、僕対ノーヴェの勝負が始まった。

なんかナンバーズ総出で見ているような……

と思いつつ僕はセットアップした。

「行くぞおお!!」

そしたらいきなりノーヴェが殴りかかってきた。

「はっ!」

僕はとっさにバリアでその攻撃を防ぐ。

防がれたノーヴェは次々に攻撃してくる。

「はっ・・・・・・・・ちっ・・・・・・・・おりゃああ！」

しかし僕はこういった相手はスバルでなれているので

「よっ・・・・・・・・ほっ・・・・・・・・とおっ！」

次々に避けていった。

するとノーヴェがいったん距離をおく。

「きたねえぞ、ちゃんと攻撃してっいっ！」

「いや、女の子を攻撃するって言うのは・・・・・・・・僕としては  
・・・・・・・・」

なんて言っていると

「そう言いつところが女々しんだよ!」

「めっ、女々しい……」

またまた僕はショックを受けた。

甘いとは言われたことがあるけど、女々しいって……  
ガックシ

と落ち込んでいると、

「勝負の最中に落ち込んでんじゃねえ!」

パッと顔をあげると、ノーヴェが蹴りかかろうとしていた。



「でやああ!?!」

ガキイイインツ

「『っ!?!?』」

ナンバーズのみんなは一瞬の事で分からなかったようだが、僕はノーヴェの攻撃を直前で剣を抜いて止めた。

456

「な、何っ!?!」

「それじゃあ、今度はこちらから行くよ……」

そうして僕はノーヴェを弾き飛ばす。

「ごめんけど、ちょっと我慢してね……………カートリッジロー  
ド」

「オーライ、ロードカートリッジ」

そして僕はカートリッジを一発ロードする。

ノーヴエ side

今あたしはあいつと勝負している。  
あんなやつに、あたしが負けるもんか！

そしてあいつはあたしの蹴りを弾いて、あたしは吹き飛ばされた。

「ごめんけど、ちょっと我慢してね……………カートリッジロー

「ド

「オーライ、ロードカートリッジ」

「く、来るか!？」

「絶影……」

その瞬間、あいつの姿が消えた。

「き、消えたっ!？」

と思ったとたん、あいつが目の前に現れた

「……爆炎斬!!」

「くっ！！・・・うわぁぁ！」

あたしは何とかバリアで防いだけど、バリアを破られ吹き飛ばされた。

~~~~~

光司 side

ズガアアアッ

僕は絶影・爆炎斬を放ってノーヴェを吹き飛ばした。

「あちゃ〜、ちょっとやりすぎちゃったか・・・」

ふと見て、観客のナンバーズ達が唾然としている。

「い、今のって……」

「こ、光司さんの……」

「ああ、たぶんな。……私も一瞬見えなかった」

「す……い………さすが………だね」

すると、少ししてノーヴェが起きてきた。

「い……っ………あたしの、負けか」

「ノーヴェ、大丈夫!?一応、威力は押さえたけど……」

「『あれで!?!』」

みんなかなり驚いてる。

「うん、まあね。それより、本当に大丈夫?スカリエツティ呼ぼうか?」

「大丈夫だ、このくらい!」

「そっか、よかった」

「べっ／＼／＼、別に大したことないからな!／＼」

ノーヴェで話していると、ふと話しかけられた。

「光司さん、ちょっとよろしいでしょうか？」

「何かな？」

するとそこには、セツテとディードがいた。

「私たちに……その……稽古をつけていただけじゃないでしょうか？」

「私たちのISは、この通り武器ですので……」

そう言って二人は二本の剣とブーメランを出した。

「いったいどこから？」

「なるほど、分かった、僕でよかったら喜んで」

「『あ、ありがとうございます／＼』」

二人は顔を赤くしながら言った。

それから、僕は二人と稽古をした。

そして何故か、途中トーレさんやチンクなどが乱入してきて大変だった……

第19話「ナンバーズとマッドサイエンティストとの一時〜前編〜」（後書き

書いてるうち、こんなのでいいんだらうかと悩みました。

感想などをいただけるとありがたいです。

第20話「ナンバーズとマッドサイエンティストとの一時〜後編〜」(前書き

前回の続きです！

それではさようば。

第20話「ナンバーズとマッドサイエンティストとの一時〜後編〜」

光司 side

僕は今トーレさんや、チンク、ティード、セツテ達と訓練を終えシヤワールームへ向かっている。

「ついでぞ、ここだ」

そうして僕達はシャワールームの前についた。

しかし………何かが違った………

しかしその疑問はすぐになくなった。

「あれっ、男性用は？」

「何を言っている、そんなものはない」

「・・・・・・・・・・・・はい？」

「だから、そんなものを作って誰が使うんだ？」

（確かに、ナンバーズはみんな女性ばかりだし、男性はスカリエツ
ティだけだからなあ・・・・・・・・研究室にあるのかな）

と行って研究室に行こうとすると

「『どこへ行くんですか？』」

ティードとセツテが聞いてきた。

「いやどこって、スカリエッツィの研究室に……………」

「なぜだ？」

今度はチンクが聞いてきた。

「えっと、だから男性用のシャワーを探しに……………」

「だからなぜだ!？」

今度はトーレさんだ。

「だって…………一緒に入るわけにいかないでしょ!」

「『どうしてだ()ですか()?』」

全員がはもった。

(ナンバーズには羞恥心ってものがないのか?)

「とにかく、さっさと行くぞ!」

「えっ、ちよっ、ト、トーレさん!?!」

そして、僕はトーレさんに強制連行された。

「いやあああ……」

その時、スカリエッティのアジトに僕の悲鳴が響いていた。

~~~~~

スカリエツテイ side

私が研究室でくつろいでいると

「いやあああ………」

光司の悲鳴が聞こえた。

「ふん、何かあったのかな？」

しばらくすると

「スカリエツテイィー!!!」

「何だね？」

「えっ、あっ、ナン、シャワッ」

「とにかく落ち着きたまえ」

「はあ、はあ、はあ」

「落ち着いたかい？」

「あっ、ああ。とにかくスカリエッティ、ナンバーズには羞恥心がないのか!？」

「おそらく、ないんじゃないかな。彼女達は他人と生活したことがないからね。それより、どうしてそんなこと聞くんだい？」



「あっ、いや、その……」

彼はさっきあったことを話してくれた。

「それで急いで逃げてきたと」

「は……はい」

彼は顔を赤くしながら言った。

「では、彼女達が使った後で使えばいい」

「まあ、それも、そうかな」

「それに、訓練後以外はあまり使われないしね」

「そっか、それじゃあ後で使うよ」

そうして彼は部屋を出ようとしたが、

「あ、そうだ、スカリエッティ、もう一ついい？」

「今度は何だね？」

「ナンバーズって、普段何を食べてるの？」

「ああ、それなら」

そう言って、私はあるものを取り出して、彼に見せる。

「……………これは？」

「何って、食事だが？」

「これが？」

私が今手に持っているのは私が作ったクッキーだ。  
当然、栄養価も考えてある。

「何かおかしかったかい？」

「いや、明らかにおかしいでしょ！食事がクツキーって！！」

「栄養価はちゃんと考えてあるんだが……」

「な、なるほど……」

彼は納得出来ないようで、何かを考え始めた。

そして

「スカリエッティ、厨房ってどこにある？」

「あ、あるにはあるが、いったいどうする気だね？」

すると彼は真剣な表情で

「もちろん、料理を作る！！」

そう言う彼の目は燃えていた。

「しかし、材料がないが………」

「ちょっと失礼」

そう言うと彼は足早に部屋を出た。

~~~~~5分経過~~~~~

ガチャッ

突然扉が開き、買い物袋を下げた光司がいた。

「買ってきたのか!？」

「はあ、はあ、なんだか、世界一無駄に技を使った気がする……」

「そ、そうか。厨房はこの部屋をでて右に曲がった突き当たりだよ」

「分かった、ありがとう」

そう言つと彼はまた部屋を出ていった。

~~~~~

光司 side

僕はスカリエッティの話聞いて驚いた。  
料理を食べたことがないなんて、人生半分を損している。  
これは何とかしなくては！

そう意気込みながら僕は調理場に立った。

「さて、それじゃあ始めようか！」

こうして僕の料理作りが始まった。

ちなみに料理はカレーとハンバーグである。

何気にどちらも僕の得意料理の一つである。

「~~~~~」

トントントント

ジュー、ジュー

厨房には軽快な包丁の音や、肉や野菜を炒める音が聞こえてくる。

そして、料理が完成に近づくにつれ美味しそうな匂いもただよってくる。

すると、その匂いにつられてか誰かがやってきた。

「ん？なんか、いい匂い……」

「確かに、いい匂いだ」



「何だろっ、この匂い？」

「そうっすねっ……あっ、光司さん、何やってんすか？」

振り返ると、セイン、オットー、ノーヴェ、ディエチ、ウエンデイ  
がいた。

「ああ、ちよっと料理をねっ」

「ふっん、光司さんが料理ねっ」

「何だかすっごいっすー！」

とウエンディが感動してると

「何か手伝いましょうか？」

と、オットーが言ってきてくれたので、

「ん〜、じゃあお願いしようかな」

僕は快く承諾した。

すると

「あたしも、あたしも〜」

「それなら私も」

「オットー、セインにダイエチも何言ってるんだよ！おいっウエンデ  
イ！」

「まあまあ、ノーヴェも手伝うっす」

「しっ、しかなねえな……」

と、みんな言ってきたので

「よし、じゃあみんなで作ろー！」

「『おー……』」

「お、おー……」

こうしてナンバーズとの料理は進んでいった。

~~~~~

スカリエツテイ side

光司が料理をすると言い出してしばらくたった。

す
る
こ

「ん、いい匂いだ」

「ドクター、この匂いはいい？」

「ああ、光司が料理をすると言っていたから、その匂いだろっ」

「りよ、料理ですか？」

「確かそう言っていたよ」

すると突然

バタッ

「スカリエッティ、ウーノさん、ご飯出来たんでホールに集まってください！」

光司が私達を呼びに来た。

「ほら、噂をすれば」

「分かりました、すぐ向かいます」

「そうですね。では、なるべく早くお願いしますね」

そう言って彼は戻っていった。

「確かに、光司さんはドクターの言っていた通り面白い人ですね」

「ああそうだね。それでは我々も行くか」

「はい」

そうしてウーノと一緒にホールへ向かった。

着くとそこにはナンバーズ全員が揃っており、全員の席に美味しそうなカレーとハンバーグが置いてあった。

~~~~~

光司 side

「ん〜と、みんな揃ったかな？」

するとしびれを切らしたように

「おいっ、いつまで待たせんだよ!？」

ノーヴェが怒りだした。

「まあまあノーヴェ、落ち着いて。それじゃあ全員揃ったことだし、  
だべようか！」

そして全員が不思議そうに手を合わす。

(実は前もって言っていたのだ)

「せーのっ」いただきます!」

そして全員が食べ始める。



「『・・・・・・・・・・・・・・・・』」

「ぶ、ぶ、ぶ、かな？」

「『美味しい（うまい）！！』」

「よかった」

「こんなの今まで食べたことないよ！」

「光ちゃんやるわね」

「これは本当にお前が作ったのか？・・・・・・・・信じられん・・・」

「いえ、セイン達も手伝ってくれましたよ」

「まああたし達は……」

「料理をどうこうじゃなく……」

「ただ手伝っただけです」

「料理自体はすべてあいつがやったからな」

「しかし、こんなに美味しいものがあつたとはなあ……」

と、みんな口々に誉めてくれている。  
よかった、みんな気に入ってくれたようだ。

すると

「おい光司、これってもうちょっとないのかよー!？」

ノーヴェエが聞いてきた。

「あつ、あたしもほしいっす!」

「あたしも、あたしも」

「私もだ!」

「それなら私も」

今度は口々におかわりを欲しいと言い出した。

「そんなこともあるのかと、余分に作っておいたからあっちにあるよ」

「『やったー!』」

それからしばらくして

「『!』—『!』—『!』—」

「はい、お粗末さまでした」

カレーとハンバーグはどちらももきれいに無くなっていた。

そしてみんなが去ったあと、お皿を洗っていると

「光司さん、ちょっといいですか？」

「は、はい。何ですか？」

振り返るとそこにはウーノさんがいた。

「料理とっても美味しかったです。ありがとうございました」

「そんな、お礼を言われるような事は」

「いいえ、私もドクターも妹達のおんなに楽しそうな顔を見るのは初めてです。本当にありがとうございます」

「い、いいえ、そんな／＼」

ウーノさんに面と向かってお礼を言われると、何だか照れる／＼

「光司さん、何だか顔が赤いようですが？」

「な、何でもありません！／＼」

「そうですか。それで、何か手伝いしましょうか？」

「は、はい！」

こうして、僕はウーノさんと一緒にお皿を洗うことになった。

すると突然

「何だか、こうしていると夫婦みたいですね」

どこで覚えてきたのか、こんなことを言い出した。

「ウ、ウ、ウーノさん!？」

「冗談です」

「あは・・・あはは・・・」

僕はただ笑うしかなかった。

しばらくして皿洗いも終わり、ウーノさんと別れた後一人歩いていった。

「あれっ？何か忘れてるような・・・」

と思いつつもスカリエッティの部屋へと入った



「やあ光司、さっきの料理美味しくいただいたよ」

「あ、ありがとう」

そうして僕はスカリエッティの近くの席に座った。

「そういえば、君は機動六課に帰らなくてもいいのかい？」

「あっ、忘れてた！」

そう、さっき忘れてた事はこれだったのだ。

まさかスカリエッティに言われるとは思わなかったが・・・

「そして、シャワーを浴びなくてもいいのかい？」

「あっ、それも忘れてた！それじゃあ、ちょっと行ってくる！」

「ああ、帰る頃になったらまたよってくれ」

「了解」

そしてスカリエッティの部屋を出た。

~~~~~

スカリエツティ side

「了解」

そう言って彼は部屋を出ていった。

「そうか、光司は帰ってしまうのか。………ああ、私も彼の遺伝子をもらってないな、何とかしなくては………」

そして私は考えた。

「おっ、そうだ、これだ!」

そしてナンバーズに連絡してある事を伝えた。

「ふっふっふ……楽しんでくれたまえ……光司」

さて、この後が楽しみだ！

~~~~~

光司 side

僕はスカリエッティの部屋を出てシャワールームに向かっている。

「あっ、ここだ」

そしてシャワールームにたどり着いた。

「さて、誰も……いない……よね?……よしっ、それじゃあ入ろう」

誰もいないのを確認して僕はシャワールームに入った。

これから起こることなど、思いもよらずに……

中に入るとけっこう中は充実していて、シャワーの他にも風呂もあった。

「ちょうどいいからお風呂にしようかな」

そして僕はお風呂の方に行った。

中は案外広かった。

「すごいな〜ここ！」

と、僕は感心してしまった。

しばらく僕は敵の基地であることも忘れ（だいぶ前から忘れてた気がするが・・・）リラックステキしていた。

すると、入り口の方で音がした。

「ん？多分スカリエッティかな？」

しかし明らかに足音が多い気がする……………ま、まさか……………

バタッ

「お風呂っス〜!!」

「こらウエンディ、あんまり騒ぐんじゃない!」

「まあまあトーレ姉様、いいじゃありませんか」

「そつよトーレ、たまにはね」

「私は静かに入りたいのだから……」

「僕も同感です」

「同じくです」

「しかしドクターも何なんだろう？急に『たまにはみんなでお風呂に入ってきなさい』なんてよお」

「何かあるのかな？」

「あれっ、誰が入ってる？」

「そんな！私たち以外に誰が？………って何だ光司ではないか」

そこにはナンバーズ全員がいた。



「なっ、な、何で、み、みなっ、皆さんが？」

僕はなにが何だか分からなくなりつつも、なんとか聞いた。

「いやな、ドクターが『たまにはみんなでお風呂でも入ったらどうだ？』と」

「それで、私たちは来たんですけど、光司さんが入ってるなんて思ってもみませんでしたので、すみません」

と、ウーノさんとトーレさんが代表して答えてくれた。

「そっ、そ、そうだったんですか……」

「どうした光司、顔が真っ赤だぞ!？」

「大丈夫ですか、光司さん!？」

心配して二人をはじめ、みんな近づいてくる。

「あっ、いやっ、そ、その、ちっ、近づかれ……………る……………」  
と……………¥¢£&\*@#%」

505

ぱたっ

「『光司さん!？」』」

それから、僕は意識を失った。

~~~~~

ウー s i d e

光司さんの顔が真っ赤になっていたので、心配して近づいてみるよ、

ぱたっ

「『光司さん！？』」

私はすぐにかげよった。

「大変、鼻から血が出てるわ！」

そうして私たちは医務室を後にした。

でも、何で血が鼻だけからだったのかしら？

しかもどこも悪くないみたいだし……人って不思議
ね。

~~~~~

光司 side

「……ん、ん？……はっ、」

僕は突然に目が覚めて起き上がった。

「どうしてベットになんか……それに……」

周りを見ると、チンク、セイン、セツテ、デイエチ、ウエンデイ、  
ティードが寝ていた。

「みんな、どうしてっ?」

「それは、おそらく光司さんが心配だったからじゃないですか?」

「ウ、ウーノさん、それにみんなも!」

見ると入口に、ウーノさんをはじめ他のナンバーズ達がいた。

「あの、僕はどうしたんでしょうか?」

「お前、何も覚えてないのか!」

「何を?」

「光ちゃん、お風呂でわたしたと会ったあと鼻血を出して倒れたのよ」

「ん〜……………はっ、そうだった!」

「それで倒れたあなたをトーレと一緒にここまで運んできたというわけです」

「そうだったんですか、ありがとうございました。……………」  
あの、トーレさん、ウーノさん

「『何だ(ですか)?』」

「なぜ、僕は今裸なんでしょうか?」

「それは、倒れてここまで運んできたからに決まっているだろう」

「その時……もしかして……」

「ええ、裸でしたけど、何か？」

「……………（ボフッ!）」

あまりの恥ずかしさに頭が爆発してしまった。

「おいつ大丈夫か!？」

「また顔が真っ赤ですけど？」

「ドクター呼びましょうか？」



「はうう／＼／＼・・・ん？ドクター・・・」

（スカリエッティにシャワーに行くと伝えた  
つまりスカリエッティは僕がシャワールームを使っていたことを  
知っている）

そしてナンバーズにお風呂に入るよう言った  
すべてはスカリエッティのせい  
・・・潰す）

「セットアップ、フラッシュ・ムーヴ」

ババツ

「『っ！』」

僕はすぐさまセットアップをして、スカリエッティの部屋に急いだ。

~~~~~

スカリエツテイ side

光司が倒れてからずいぶんと時間がたち、外はもう朝だ。
すると

ズガアアアッ

「な、なん何だ!？」

私は壊れた扉の方を見ると、そこには

「スカリエツテイイー!!」

鬼の形相の紅蓮の騎士が立っていた。

あの表情はただ事ではない！

「と、とりあえず、お、落ち着きたまえ……」

「……………」

しかし彼は無言でこちらに向かっている。

「こ、ここは冷静に話し合おうじゃないか……………」

ガツッ

「はっ……！」

私は部屋のすみに追いつめられていた。

「ま、待て、話せば分かる、こ、光司……」

「問答無用、紅蓮一閃!!」

「ぎゃあああ……」

その日、私の悲鳴が響いたのは言うまでもない。

~~~~~

光司 side

スカリエツティへのお仕置きも終わり、これからやっと機動六課に帰るところである。

「え、光ちゃんも帰っちゃうの？」

「そうっすよ。もっといてほしいっす」

「そっだよ、もう少しくらい」

ナンバーズみんな見送りに来てくれている。  
って、一応僕敵なんですけど……

「そう言っなお前達。光司はこれでも管理局なんだ。我々とそんなに長くいるわけにいかんだろう」

そう言っつと、みんなシヨボンとした。

なんか、後ろ髪引かれる思いが……

「まあ、僕もみんなと過ごさせて楽しかったよ。本当にありがとう！」

「『っ！／＼／』」

「それじゃあ、みんな元気だね！あとっ、そのボロボロ博士も元気だね」

僕はナンバーズのみんなど、一応スカリエッティにも挨拶をして僕は機動六課へ向かった。

「しかし、どう言い訳しようか……」

（残念ですがマスター、諦める他ありませんね）

「はあ、嫌だなあ」

憂鬱な気持ちになりながらも機動六課に向かうのだった。

第20話「ナンバーズとマッドサイエンティストとの一時〜後編〜」（後書き）

次回から六課での日常編です！

果たして光司はどうなるのか！

第21話「光司の大変な1日」前編」（前書き）

突然ですが、

何と総合アクセス数が1000000を越えました！！

これも日頃読んでくださっている皆様のお陰です！

これを励みに頑張っていきますので、応援の方よろしく願いします。

それではどつぞー！



第21話「光司の大変な1日」前編」

光司 side

僕は今スカリエッツィの所から帰ってきて、機動六課に帰って来たわけだが……………

「あの、み、皆さん、これには、ふか……い訳が……………」

520

「ほう、そんならそのふつか……い訳を聞かせてや？……………  
なあ、なのはちゃん、フェイトちゃん」

「そうそう、その訳を聞きたいなあ……………」

「うん、どんな訳なのかな？……」

「あ、いや、そ、その……」

（ど、どうしよう。……スカリエッティの所へ行ってたなんて言えるわけないな……）

「そ、その訳、言わなきゃダメですかね？（ウルウル）」

僕は上目遣いでたのんだ。

「『……』」

「そっ／＼、それはズルいで、光司君」

「そ／＼、そうだよ。そんな、頼み方されたら……」

「ゆっ／＼、許すしかないよ／＼」

(あれっ？何だか分からないけど、助かった？)

「そやけど、やっぱり帰還命令違反はいけんなあ。ん、なんか  
いかなあ」

「『』そうだよね」

やっぱり帰還しなかった処罰はしないといけないらしい。

「お手柔らかに、お願いします」

「ん………あっ！二人とも、こんなはどうやるっ！？」

ヒソヒソヒソヒソ

「ふんふん……」

「なるほど、それなら……」

「なっ、ええ考えやろ！？」

どうやら僕の処罰が決まったようだ。

そしてはやくさんが僕の処罰を言い渡す。

「それでは神谷二等空佐、今から処罰を言い渡します。」

「……………はい」

「あなたには、……………今日一日、誰の言うことでも、何を言われても聞いてもらいますー!」

「……………はい?」

「まあ簡単に言つと、今日一日光司君には、『NO』という言葉はないっちゅっこっちゅ」

「なるほど……………って、それかなり理不尽じゃあ?」

「細かいことは気にしたら負けや。ほんなら、早速これに着替えてや」

そう言って、はやてさんはある服を差し出した。

「じつ、これは!？」

~~~~お着替えタイム~~~~

そして僕はその服に着替えてきた。

「ど、どうでしょうか?」

「バッチリやで、光司君」

「本当、凄くにあってるよ、ねっ、なのは?」

「うん、とっっても!」

「あ、ありがとうございます。しかし、なんで執事服？」

「そりゃ、その方がおもしろいからや」

「あはは……なるほど……」

「ほんなら早速やけどええか？」

「はい、何なりと」

「うちの仕事、代わりにやっついてな」

「えっ、いきなりそん『返事が聞こえへんな』……はい」

「ほな、よろしくな。あっそうそう、六課にいる間はずっとその格好な」

「は………はい………」

「まあ、私たちはそれが終わった後でいいから………」

「うん、さすがにこれ以上は可愛そうだから………」

「あ、ありがとうございます………」

こうして僕は大変な処罰を受けることになった。

~~~~~

スバルside



時刻は午前7時、私は今ティアと一緒に六課に向かっている。

えっ？朝練はいいのかった？

今日はなぜか朝練が休みだったので、普通に六課に出勤なんです。

珍しいこともあるもんだな

でも、今日のティアの機嫌はいつにもまして悪いようです。

多分、昨日しい兄が戻らなかったからだとおもっ……

しい兄どこ行ってんのかな？

「ねえ、ティア？」

「何よっ!?!」

「そ、そんな怒りなくなつて……それにしても、しい兄ごへ行つたんだろっね? 昨日は帰つて来なかつたし」

「そ、そりゃ、兄さんは有名だし、他の仕事が長引いたとかあるんじゃないの? 言っておくけど、べっ、別に早く会いたいつて訳じゃないからね!」

(ティア、そんなこと言つてないよ)。まったく、ティアは素直じゃないんだから。ああ、でも私も会いたいなあ)

そんな会話をしていると、隊舎にたどり着いた。

私たちが中に入ると、そこにはなぜか執事さんがいた。

「ティア、あれ、いったい誰だろう?」

「何よ、って執事!?! ん? でも……」

「よく見ると………」

「兄さん!？」 「しい兄!？」

「やつ、おはよう二人共」

「兄さん、どうしてそんな格好!？」

「それはね、………  
なんだよ」

と、さっきあったことをしい兄が説明してくれた。

「な、なるほど………」

「ねえティア、それじゃあ私たちもしい兄に何かお願い出来るってことかな!？」

「ちよつ、止めなさいよスバル！」

「いや、いいんだよティアナ。一応これは処罰なんだし」

「で、でも……………」

「そうだよティア、これは処罰なんだよ。それじゃあ……………  
……………あつ、またしい兄の料理が食べたいなあ、今度はデザート  
とか！」

「あんたが言う事じゃないでしょ!まったく……………でも……………  
……………食べて……………みたいわね」

「ああ、それくらいなら、お安いじやうだよ。そうだな……  
チョコレートケーキ、何てどうかな？」

「『はい……』」

（しい兄のチョコレートケーキかあ……美味しんだろなあ  
）

ふと、横のティアを見てみると

「兄さんをお願い……も、もしかして、あんなことも  
……はう／＼」

（ティア）、口に出てるよ。幸いしい兄は気付いてないみたいだ  
けど……）

「それじゃあ、おやつ時間くらいに作っておくね」

「はい、じゃあそれで」

「ケーキ楽しみにしてるね！」

そして私たちは仕事に戻った。

~~~~~

光司 side

スバル達とわかれてからしばらくして、やっとはやてさんの分の仕事が終わった。

「はあ、やっと終わった……」

「お疲れさま、光司」

「あつ、フェイトさん」

振り返ると、そこにはフェイトさんがいた。

「あれっ？そういえばなのはさんは？」

「なのはなら、シグナムと一緒に聖王教会に……………なんでも、昨日助けた女の子の様子を見るに」

「そうですか……………そうだ、フェイトさん何か用ですか？」

「う、うん……………お願いの事なんだけど……………」

「ああ、そうですか……………」

「その、お願いは1つだけなのかな？・・・それとも、どこかのランプの魔人みたいに、3つ？」

「いやあ、多分はやてさんのことですから・・・数限りないと・・・」

するとフェイトさんの顔がパアッと明るくなった。

「そ、そうなんだ、何個でもいいんだ！」

フェイトさんが小さくガッツポーズをして喜んだ。

正直、ちょっと可愛かった。

「それで、何ですかお願いは？」

「えっとね・・・うん・・・あっそっだ！えいっ」

フェイトさんが僕のほつぺたを突っついてきた。

「ふえ／＼／＼？」

「だって光司のほつぺた気持ち良さそうだったんだもん。お願い、触らせて?？」

「は、はぁ……………」

っん、っん、っん

グイッ、グイッ

「あ、あおお、うえいおあん）あ、あの、フェイトさん）」

「ダ〜メ」

そうしてしばらくしフェイトさんのほっぺたいじりは続いた。

~~~~~10分後~~~~~

「ああ気持ち良かった。また触らせてね」

そうしてフェイトさんは満足そうに帰っていった。

そして僕ははやてさんに仕事が終わった報告をしに部隊長室へ向かった。

「失礼します」

僕は声をかけるが、返事がない。

「あれっ、はやてさん？」

不思議に思って僕は部屋の中に入った。

すると

「スー、スー」

はやてさんが寝ていた。

「まったく、しょうがないなあこの人は」

僕は執事服のジャケットをかけて、『仕事終わりましたb y光司』と書いた紙を置いた。

そして僕は静かに部屋を出た。

すると廊下でシャルルさんと会った。

「あ、おはようございますシャルルさん」

「光司君、はやてちゃんから聞いたんだけど何でも言う事聞いてくれるって本当!？」

「え、ええまあ……………」

「本当に!?!?じゃあねえ……………」

とシャルルさんは悩み始めた。

(何かものすごく嫌な予感が……………)

「私に、お料理教えてほしいの！」

「・・・・・・・・・・はえ？」

「だから、私に料理の“いろは”を教えてほしいの！..」

意外なお願いに僕は驚いた。

てつきり、『これ作ってみたの、よかったらどうぞ』と、何だか得体の知れないものを食べさせられるのかと思ってた。

「それでね、みんなが私のこと『料理下手どころか、料理を殺している！..』って言うのよ。だから、料理の上手い光司君に教えてもらおうと思ってる」

「あはは・・・・・・・・・・なるほど。そう言うことなら喜んで！」

「ありがとう！」

「でしたらちよつどお昼も近いですし、みんなのお昼を作りまじょうか」

「はい」

そして僕とシャルルさんは六課の厨房へ向かった。

~~~~~

はぢてslide

「ん？……うん。寝てしもうたか……あれっ？」

うちが起きて見ると光司君に着せた執事服のジャケットがかかっていた。

「ほんま、光司君は優しいなあ〜……………ん、何やるこれ？
ん〜と何々……………」仕事終わりましたby光司……………
……………早っ!」

うちは光司君の仕事の早さに思わず突っ込んでしまった。

「光司君……………仕事早過ぎるやろ……………あっ、もう
こんな時間や、そろそろお昼にしよう」

そうしてうちは食堂へ向かった。

食堂へ着くと何かみんなの様子が違った。

「どしたんやみんな、食べへんの?」

「あつ、はやてちゃん、それがね……………」

「うん、ちょっとね……………」

見るとそこには嬉しそうなシャマルがおった。

「はやてちゃん！私の料理食べて食べてー！」

「……………なあ、帰ってええか？」

するとどっからか声が聞こえた。

「その必要はありませんよ」


~~~~~

光司 side

僕らが料理を作り終えて、シャマルさんに遅れて食堂に入ると、みんな警戒していた。

(ん〜……………まあ、分からなくもないかな)

そこで僕はみんなの誤解を解くため

「その必要はありませんよ」

「『っ!?!?』」

すると、みんなが一斉に僕の方に向いた。

「その料理は本当にシヤマルさんが作った物ですが、味は大丈夫ですから」

「『えええー！！！』」

みんながあり得ないくらい驚いていた。

「うー、みんなひどい・・・」

「まあまあそう言わず、食べてみてくださいよ」

そうしてみんな恐る恐る食べ始める。

「『い、いただきます・・・』」



「いえ、お役立てたのなら幸いです。それじゃあ、僕らも食べまじ  
ようか？」

「はい」

こうして、今日の昼食は無事に始まった。

第21話「光司の大変な1日」前編」（後書き）

今回はこの続きです。

こ、光司がもつと大変なことに……

第22話「光司の大変な1日」後編」（前書き）

前回の続きです。

試行錯誤したあげくこんな感じになってしまいました。

それではどうぞ。

第22話「光司の大変な1日（後編）」

光司 side

シャマルさんとの料理が成功し、僕は今お昼を食べている。

「しっかし光司君すごいなあ、まさかシャマルの料理がこないになるとはなあ」

「あはは……まあ、シャマルさんもやれば出来るってことで  
すよ」

するとなのはさんが突然

「あっそうだ、私まだ光司君にお願い聞いてもらってない！」

「そ、そんな別に必ずお願いしなきゃいけないってわけじゃないんですけど……」

「そう言つわけにはいかないよ！んとねえ……それじゃあ、」

そしてなのはさんは

「はい、あ〜ん」

「えっ／＼、ちよっ『あ〜ん……あ〜ん／＼』」

パクッ

「（モグモグ……）」



「美味しい？」

「……………はい／＼」

僕は真っ赤になりながら答えた。

「ああ！なのはちゃんずるいで！！」

「そつだよなのは！！」

「えへへ／＼」

なのはさんも心なしか顔が赤い。

「じゃあうちも、あ〜ん」

「……あ〜ん／＼／」

「美味しいか？」

「はい……」

「もう、なのはやはやてばかり〜それじゃあ私は………光司、私に“あ〜ん”して」

「えっ？／＼／」

今度はフェイトさんがとんでもないことを言い出した。

「はやく〜」

「そ、それじゃあ……………あ〜ん／＼」

「あ〜ん……………うん、美味し」

こんな感じで僕の昼食は過ぎていった。

「そや、なのはちゃん今日のフォワードの訓練はお休みにしてくれるか？」

「えっ？う、うん……………」

「それと光司、仕事が終わったら部隊長室に来てな」

「は、はい……………」

( 部長長室か…………… いったい何だろうか？ )

そう思いつつ、僕は仕事に戻って行った。

~~~~~

フエイトside

何だろうかはやて？

急にフォワードの訓練休みにしたり、光司を部長長室に呼んだり……

不思議に思って私ははやてに聞いてみた。

「ねえはやて、いったい何するつもりなの？」

「それはなあ…………… 言いつつさや」

「そんなことまで!?! / / いいのかなあ?」

「そやけどフエイトちゃん、見たないんか?」

「そ、そりゃあ. 見たいけど.」

「それに一応これは処罰なんやで、せやから. なっ
「!」

「そう言いつことなら. まあ. 仕方ないよ
ね」

「うんうん、今から楽しみやわあ〜!」

「じつにはやての計画は着々と進んでいくのでした。

~~~~~

光司 side

僕は自分の仕事を終え、今は部隊長室に向かっている。

「いったい何だろうなはやてさん？」

そう思いつつも僕は部隊長室に着きドアをノックする。

「はやてさん、来ましたけど？」

「ああ、入ってや〜」

「失礼します……………ってみんな!？」

部隊長室にははやてさんやリンの他に、なのはさん、フェイトさん、そしてフォワードのみんながいた

「どづして……………みんなが？」

見るとみんな何だかそわそわしてる。

そしてなぜかエリオとキャロは申し訳なさそうな顔をしてる。

「光司君、そういえば小さい頃はよく女の子に間違えられてたなあ？」

「は、はい、そうでしたけど……」

「そんな光司君が女装したらどうなると思っ？」

「女装………ってまさか!？」

「そのままかや!なのはちゃん、フェイトちゃん、光司君押さえて  
!..!」

「『っん』」

「ヒヤアアアアア!..!..!」

そして僕はなのはさんとフェイトさんに取り押さえられた。



じげんぐくじり……………」

「あ、あの／＼……………」  
「これは？……………」

僕はなのはさん達に化粧をされ女性物の服を着せられている。

「じ、これは……………」

「そ、想像はしてたけど……………」

「……………」

「『かわいい〜…………』」

「えっ、本当に兄さん!？」

「なのはさんに小さい頃の写真見せてもらったけど……」  
「こまでとは……」

「に、兄さんが……姉さんに……」

バタッ

「エ、エリオ君!！」

「あちゃ〜、エリオには刺激が強すぎたみたいやな。しっかし光司君、可愛い過ぎるやろ〜」

「です〜」

「そ、そう言われても／＼・・・・・・・・」

とするとスバルが

「あっそういえば、しい兄ケーキ作ってくれるって・・・・・・・・」

「『ケーキイイ！？』」

「それならばやく言っておよ」

「そうそう、それなら・・・・・・・・」

「・・・」

そう言って取り出したのは……

「め、メイド服!？」

「『そっだよ(や)!!』」

「ま、まさかこれを来て作れと……」

「『その通り(や)!!』」

「えええー!!」

「『返事は?』」

「……はい／＼」

こうして僕は今度はメイド服姿でケーキを作ることになった。

~~~~~

ティアナside

兄さんがメイド服姿でケーキを作りに行っただけでしばらくたった。

そして私は疑問に思っていたことを部隊長に聞いてみた。

「あの部隊長、どうして私たちの訓練が休みになったんですか？」

「あ、それ私も気になった」

「それはやなあ、みんなにも光司君のあの姿を見せたくてなあ。可愛かったやろ？」

「『・・・・・・・・はい』」

確かにあの兄さんは可愛かった。

男なのに・・・・・・・・私より可愛いなんて・・・・・・・・

「絶対生まれてくる性別間違ってるよね〜」

「『確かに・・・・・・・・』」

そしたらスバルが

「思ったんですけど・・・・・・・・しい兄って誰が好きなんでしょうかね？
？歓迎パーティーの時は答えてくれなかったし・・・・・・・・」

「確かにそうよね・・・・・・・・皆さん誰かご存知ですか？」

すると3人揃って

「『いやあ〜誰かは分からないなあ（分からへんなあ）』」

と3人とも顔を少し赤くしながら答えた。

はっ、まさか!?

3人とも兄さんから告白されたとか!?

ああ〜どうしよう…………このままじゃ兄さんとの距離がどんどん遠くに……………

「ねえねえティア、いったい誰なんだろうね!？」

「そうね……………」

私は落胆しながら答えた。
すると

ガチャ

「お待たせしました」

メイドさん（兄さん）が来た。

~~~~~

光司 side

僕は今頼まれていたチョコレートケーキを作るため厨房にいるのだが………

「何だか、回りの視線が気になる………」

そう、メイドが厨房でケーキを作っているのだ、違和感を感じない方がおかしい話である。



中には

「ねえ、あのメイドさんって誰？」

「分かんない。でもなんだか神谷二佐に似てる気がするんだけど・・・」

「何言ってるのよ、だって神谷二佐は男性よ」

「だよね、そんなわけないか」

「じゃあさ、もしかして妹さんとか!？」

「マジで!?!?声かけてみよっかな」

などと言っている始末である。

「はあ、早く作って持っていかないとな」

そしてしばらくしてようやくケーキは完成した。

僕がケーキを持って部隊長に向かってしていると

「その綺麗なお嬢さん、部隊長になんのご用で？」

「え？」

声のした方を見ると、ヴァイスがいた。

(うーん、関わり合つと面倒だよな。どうしようかな?)

(マスター、私にいい考えがあります)

(.....ふんふん、なるほど、じゃあそれでいいのかな)

(了解です)

そうして僕は声を変えて

「あの、私に何か？」

「すみません呼び止めてしまって、俺はヴァイス、このへリパイロットをやってます。ところで、どうして部隊長室に？」

「あ、はい。ご主人様がここでお世話になっているときいたものでご挨拶に来たしだいです」

「ご主人様って、旦那のやつ.....」

「では、私はこれで失礼します」

「あっ、ちょっとせめて名前だけでもっ！」

「でしたら、私を捕まえてみてください」

そうして僕は逃げ出した。

~~~~~

ヴァイス side

俺は今、旦那のメイドさんと話をしてる。

「では、私はこれで失礼します」

「あっ、ちょっとせめて名前だけでもっ！」

「でしたら、私を捕まえてみてください」

「え？」

するとメイドさんが不思議なことを言い出し逃げていった。

「捕まえてみなさいって……そうかつ、俺を試してるんだな！そう言うことなら、待ってください」

そうして俺はメイドさんを追いかける。

メイドさんが角を曲がってしばらくして俺も角を曲がると、

「待ってください……ってあれ？い、いない？……」

「・

角を曲がるとそこにメイドさんの姿はなかった。

~~~~~

光司 side

僕は言葉巧みにヴァイスを誘きだし、僕を追わせている。

「よしっ、っ ついてきてるね」

僕は通路の角を曲がる。  
そして

「ザックス、いくよー！」

「オーライ、フラッシュ・ムーブ」

僕はフラッシュ・ムーブで素早く移動し、物陰に隠れた。

その頃ヴァイスは

「待つてくださーい……………ってあれ？い、いない？……………」

どうやら見失ったようだ。

「さて、ふりきったことだし行くつか」

そうしてやっと部隊長室に着いた。

「お待たせしました」

「『えっ?』」

するとなぜかみんな驚いていた。

「あのどちら様ですか?」

「何言ってるんですか、僕ですよ」

「って、光司君……………なの?」

「は、はい……………みなさん、どうしたんですか?」

「マスター、おそらく声を変えているせいではないかと……………」

「あっしまった!今戻しますね」



「『そのままでー!』」

皆一斉に止めてきた。

「は、はあ……」

「いやあ驚いたわあ」

「そうそう、本当に女性のメイドさんかとおもっちゃったよ」

「『さっし』」

みんな口を揃えて言っていた。

「あはは……はあ」

「さて、ほんならケーキも来たことやし……」

「うん、そろそろ……」

「続きに行こうか」

「えっ？ま、まだやるんですか？」

「『もちろん』」

そして3人が迫ってくる。

「あ、あのおお……」

「『さ、お着替えしよっ  
』」

「キヤアアア……」

それからしばらく、僕は3人の着せ替え人形となってしまうていた。

そして時間はたつて今は夜。

「ひ、ひどいめにあつた……」

3人からやっと解放された僕は自分の部屋に戻ってきていた。

すると

「兄さん、ちょっといいですか？」

「どうぞ」

「失礼します」

ティアナが部屋を訪れた。

「あの兄さん、お願い、いいですか？」

「あ、ああ、いいよ」

（多分ティアナのことだから無理なこととは言わないと思うけど・・・）

「あの、兄さんの・・・す、す・・・」

「す？」

「好きなひとを教えてください／＼／」

「……………？」

「だから、好きなひとを教えてくださいの／＼！」

「そ、それは……………」

「それは？」

（うーん、この場合どう答えたらいいのかなあ？とりあえず、）

「いない……かな」

「でも、隊長たちに告白したんじゃないの!？」

「はっ!?!いやっ、えっ、ええ!?!」

「違うの?」

「告白なんてしてないよ。それに、僕なんか告白してもどうせダメだよ」

「そんなことない!!」

「っ!?!」

突然ティアナが大声を出したので驚いた。

「兄さんはいつだってみんなのために動いて、いつだってみんなを

守ってくれた！私だって、兄さんに救われてなかったら今頃……」

ティアナは言いながら泣き出してしまった。

「そっか……」

そして僕はティアナを抱き締める。

「ふえ／＼、に、兄さん？」

「ありがとうティアナ、僕なんかのことをそんな風に思ってくれて。僕はやっぱりバカだなあ……だって、こんなに僕を思ってくれてる大切な存在に、気付かないなんてね……」

「／／／／／／／／／／」

そしてしばらくして僕はティアナを放した。

するとティアナの顔が真っ赤だった。

あれっ？なんか変なこと言ったかなあ？

(いい加減、マスターにはそう言うのを理解してほしいものです)  
ソザックス)

「あ、あの、兄さん」

「何かな？」

「その、もう一つだけお願い、いいですか？」

「いいよ、言ってみて」



「その／＼、一緒に寝てもいいですか／＼」

「………ん？えつと………それは………  
つまり………一緒の布団でつてこと？」

「………(コクッ)」

「………」

「やっぱりだめ………ですか？」

ティアナが上目遣いで頼んでくる。  
しかもさっきまで泣いていたので目がウルウルだ。

「………ん………今回だけだよ／＼」

「ありがとう兄さん!」

こうして僕はティアナと一緒に寝ることとなった。

~~~~~

ティアナside

今私は兄さんと一緒のベットにいる。

べ、別に変な意味じゃないんだからねノノ

そして私は兄さんに話しかけた。

「兄さん、まだ起きてる?」

「.....」

「もう寝ちゃってる。そりゃそうよね、あんなに働いたんだものね。」

・・・おやすみ、兄さん」

そう言って私も眠りにつく。

兄さんの、大好きな人のぬくもりを感じながら。

第22話「光司の大変な1日」後編」（後書き）

今回は一旦本編に戻ります。

まあヴィヴィオと予言の話です。

第23話「機動六課と父」(前書き)

今回はわりと短いです。

それで、微妙に本編進みます。

それではどうぞ。

第23話「機動六課と父」

光司 side

あの大変な日から一夜明け、今はなのはさん、フエイトさんと一緒に部隊長室にいる。

「『査察?』」

「そうなんよ、それも地上本部からの……」

「地上本部は査察が厳しいからねえ……」

「それにうちの部隊はただでさえ突っ込み所満載やからなあ」

「そつだよねえ」

「『はあ』」

とみんな不安がっている。

あ、そっか、まだみんなに言っていなかったんだっけ。

「あ、皆さんその心配はいらないと思いますよ」

「『……』」

「『そねびじじい(や)』」

3人は不思議そうに聞いてきた。

「それはですね、話せば長くなるんですが……」

「『何々？』」

「ちょっとレジアス中将に“OHANASHI”をしましてね」

「『……』」

3人とも啞然とした顔をしている。

「ど、どうしたんですか、皆さん黙っちゃって」

「い、いやあ、そらあ……なあ？」

「う、うん……」

「まあ、さすがと言えばさすがだね……………」

「……………」

「そう言うことなら、この件はもうええかな。」

「ではやて、私たちを呼んだわけて？」

「それはやな……………そろそろみんなに六課の創立の
訳を話そう思ってたな」

「『六課の？』」

「ええ機会やし、ちよつと今日聖王教会のカリムの所へ行こうと

「たんよ」

「『なるほど……』」

「そう言うわけで、みんな来てくれるか？」

「『うん（はい）！』」

こうして僕ら4人は聖王教会に行くことになった。

~~~~~移動中のへりにて~~~~~

「そつえばなのはさん、一昨日保護した子っていったいどうなったんですか？」

「うん、ヴィヴィオって言うんだけど、私があずかることにしたの！といっても、保護してくれる人が見つかるまでだけだね」

そしてフェイトさんが

「あと、私も後見人になったんだよ」

と、付け足した。

「へえ、そうだったんですか。……あつ、じゃあ、僕も後で見に行ったりしてもいいですか？」

「うん！ ヴィヴィオも喜ぶと思うよ！」

そんな会話をしながらへりは聖王教会に向かっていった。

~~~~~ 聖王教会にて~~~~~

僕ら4人は聖王教会に着いたら、すぐにカリムさんのところへ案内された。

そこにはカリムさんの他にクロノもいた。

「失礼します、高町なのは一等空尉であります」

「フェイト・テストロッサ・ハラオウン執務官です」

「神谷光司二等空佐です。お久しぶりですお二人とも」

「なのはさん、フェイトさんはじめまして、聖王教会・教会騎士、カリム・グロシアです。そして光司さん、久しぶりですね」

そして僕らは挨拶を済ませ奥へと案内された。

「さて、本題なんですが……」

「六課の設立の訳と、今後の話や……」

「『うん……』」

「司つての通り六課の後見人は、僕クロノ・ハラウンと、僕とフ
エイトの母、リンディ・ハラウンだ。そして公ではないが、あの
伝説の三提督も六課の設立に一役かっている」

596

「『うん……』」

この事になのはさんとフェイトさんは驚いているようだった。

「六課の表向き目的は、ロストロギア探索とレリック事件の調査。
そやけど本当は……」

はやてさんがそう言うとおもむろにカリムさんが立ち上がった。

「それには、私の能力が関係あるんです」

するとカリムさんはカーテンを閉め、古い紙の束を手にする。

そしてその紙が光り出しカリムさんの周りを回り出した。

「これは私のレアスキルなんです、遠い先で半年後に起こる出来事を予知することが出来ます。しかし、時と場所もバラバラで、文章も古代ベルカ語で書かれていますので、訳のしようによっては全く異なる意味になりますから、さしずめよく当たる占い程度のようなものです」

そう言って、カリムさんは僕らの前に紙を差し出す。

当然古代ベルカ語で書いてあるので、読めない。

「そして、その予言に最近気になる言葉が出ているそうなんだ」

そうしてカリムさんは予言を読み上げる。

「古い結晶と世界の革命が集い交わる地、死せる王の下、聖地よりの翼が蘇る。革命の同士達が町を覆い、なかつ大地の法の塔はむなく焼け落ち、それを先駆けて数多の海を守る法の船も崩れ落ちる……」

「じ、じれって……」

「まさか……」

「……管理局システムの崩壊」

「『……』」

それは誰もが予想し得なかった言葉だった。

「でも、そんなのあり得ないですよ!」

「そうなんよ、地上本部がテロやクーデターにあうとして……
・それで本局までって」

「まあ、そんなわけで本局も警戒はしてるんだが……」

「問題は地上本部ですかね……」

「そやなあ、地上本部の上層部はこの手のレアスキルがお嫌いみたいやからなあ……」

「レジアス中将……ですね……」

「異なる組織同士が協力しあうのは難しいことです……………」

「協力の申請も、内政干渉や強制介入という言葉に言い換えられれば……………即座にいさかいの種になる」

「ただでさえ、地上本部の武力や発言力の強さは問題視されてるしなあ……………」

「だから、表だつての主力投入はできないってことか……………」

「すまないなあ、政治的な問題は現場には関係なしとしたいんだけど……………」

「なんにしても、地上で自由に動ける部隊が必要やった、レリック事件でことが済めばよし、大きな事態に繋がっていくようだったら、最前線で事態の推移を見守って……………」

「地上本部が本腰を入れるか、本部と教会の主力投入まで……
……前線で頑張ると……」

「うん……それが六課の意義や」

「なるほど……そういうことでしたか……」

こうして六課設立の理由が話された。

そして聖王教会から帰ってきて六課に戻ってきた。

僕はなのはさんとフェイトさんと一緒にヴィヴィオに会いに行った。

なのはさんの部屋につき扉が開くと

「……」

一人の女の子が走ってなのはさんに飛び付いた。

「あっ、あの、なのはさん、ママって!?!」

「うん、ヴィヴィオの親が見つかるまで私がママになってあげよう
と思って」

するとフェイトさんがヴィヴィオに

「でもねヴィヴィオ、実はフェイトさんもちっとだけヴィヴィオ
のママになったんだよ」

「……………なのはママと、フェイトママ?」

「『はい、ヴィヴィオ』」

「えへへっ」

ヴィヴィオは本当に嬉しそうな表情だった。

するとヴィヴィオが僕に気付いたようで

「なのはママ、この人は？」

「この人はね……………あっそうだった……………」

ヒソヒソヒソヒソ

なのはさんはフェイトさんと何やら密かに話をしているようだ。

「うん、それいいね！」

「ヴィヴィオ、この人はね……………ヴィヴィオのパパだよ！」

「……………はい？」

「パパ？」

ヴィヴィオが上目遣いで聞いてくる。

うっ、これは答えるしかない……

「……はい、ヴィヴィオ」

「パパー!!」

そうしてヴィヴィオが今度は僕の方に抱きついてきた。

「あは、あはは……」

（何だか、また大変なことになってしまったような……）

ふと見るとなのはさんとフェイトさんが、何やらガッツポーズをしていた。

こうして、僕は一児の父?となってしまった。

ちなみに、この事を聞いたはやてさんが

「し、しもた………」

と悔しがっていたらしい。

第23話「機動六課と父」（後書き）

今回はいよいよ書きたかった回です。

少し長くなるので、遅くなると思いますが、お楽しみに！

第24話「The change day」前編（前書き）

光司は果たしてどうなるのか！

それではどうぞ。

第24話「The change day」前編

ここは六課のある一室。そこには一人の女性が何やら怪しげな作業をしていた。

金髪のボブヘアで白衣を着ている。

シヤマルだ。

「で、出来たわ……………」

そこには先ほど出来たであろう、怪しげな液体があった。

608

「早速はやてちゃんに連絡しなきゃっ！……………もしもし、はやてちゃん？例の薬、出来ましたよ」

「ほんまか！？そやったら……………で、こっうして……………こっうしてや」

「了解です、結果が楽しみですね！」

「ほんまやわぁ、ほな、頼んだで〜」

そうしてはやてとの通信を切るシャマル。

「さ〜て、ここから楽しみだわ」

こうしてまたしてもはやての計画が始動したのだった。

ちなみにこれは光司がヴィヴィオの父親となった日の夜遅くのことである。

~~~~~

光司 side

何だかんだでヴィヴィオの父親となつて一夜明けた。

昨日の夜はヴィヴィオが

「パパとママと一緒に寝たい！」

なんて言い出したので、色々大変だった。

「はあく、何か昨日は大変だったなあ……医務室にでもよろうか」

そして僕は朝練の前に医務室に向かった。

「失礼します……シャマルさんいますか？」

「あっ光司君、いいところだー！」

「いいところだ？」

「いやっ、その、何でもないわ。ところで、どうしたの？」

「はい、朝練の前に何か栄養ドリンク的なものを飲んどこうか思っ  
て、ないですかね、そんなの？」

するとシャルマルさんは嬉しそうに

「やっぱりちょうどいいわ！それだったら、はいこれ」

そう言ってシャルマルさんが差し出したのは、何だか怪しげな液体だ  
った。

「・・・・・・・・・・・・・・・・シャルマルさん、これは？」

「私が調合した栄養ドリンクよ。味は分からないけど、効果は保証  
するわ！」

「は、はあ、じゃあ」

(シヤマルさん、料理はあれだけど、薬なら大丈夫かな)

そうして僕はそのドリンクを飲む。

しかし、この安易な考えが間違っていた。

僕がそのドリンクを飲み干すと

「(ゴクッ、ゴクッ、ゴクッ)ふう………ふう!!」

バタッ

僕は後からきた何とも言えないような味に、思わず気絶してしまっ  
た。

~~~~~

シヤマルside

光司君は思っていたより簡単にこの薬を飲んでくれた。

(でも気絶することないのに……)

そう思いながら私は光司君をベットに寝かせる。

「フッフツ、どうなるか楽しみだわ！悪く思わないでね、光司君」

そして私は、その場を去った。

~~~~~

光司？side

「ん？……あれっ、いつの間にか寝ちゃってた？」

時間を見ると、もうすぐ朝練の時間である。

「大変だ、急がなきゃ!!」

僕は急いで訓練スペースに向かった。

「遅れてごめん!」

「もう光司君、遅刻、は……」

なのはさんが言葉を言い終わらずに、僕の方を見て啞然としている。

見ると、他のみんなも僕に目が釘付けだった。

そしてみんな一斉に

「誰?？」

「何言ってるんですか、僕ですよ、光司ですよ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・は??.?。」

「そちらこそ何言ってるんですか?、光司君は男で、あなたは女でしょ」

「そうですよ。確かに光司は女の子っぽいけど、あなたは明らかに女でしょ!」

(ん?、お、女?)

不思議に思い自分の顔を確認すると・・・・・・・・



「お、お、女だ……」

そこには衝撃の事実が写っていた。

~~~~~

なのはside

朝練をしてると急に声をかけられて、誰かと思ったら見知らぬ女の人でした。

その女の人は自分が女と分かれると相当ショックを受けていたようでした。

「……………(ガーン)」

(ねえなのは、何だか落ち込んでるね、あの人)

(うん。でも何でかなあ？何だか今女ってことに気付いた感じだけど……………)

（それに、何だかあの人が光司に似てる気がするんですけど……）

（私もそう思う、けどあの人は完全に女だよ）

と、私たちが念話で話していると、あの女の人復活したようで、私たちに近づいてきた。

「皆さん、どうしたら信じてくれるんですか？光司ですよ！」

「そ、そんなこと言われても……」

「た、確かに、証拠がないとねえ……」

するとスバルが

「あの、セツトアップしてみたらいいんじゃないでしょうか？
・・・」

「『ああー！』」

そして早速あの人セツトアップした。

「セツトアップー！」

そこには全体が紅く、上半身が光司君と同じ騎士甲冑で、下半身がシグナムさんのような甲冑を纏い、腰に剣をさしたあの女の人がい
た。

「その甲冑と剣って・・・」

「じゃあ、やっぱり……………」

「あの人は……………」

「『光司（君）（兄さん）（しい兄）（お兄ちゃん）！！！！？！？』」

~~~~~

光司 side

セットアップすることでやっとみんなに信じてもらえた。

ここで僕の容姿について説明すると、髪は全体的に伸びて腰ぐらいまである綺麗な薄い金色のロングヘアになり、スタイルは自分で言うのもなんだが、出るところはでて絞まるところは絞まっている。世に言う、十人男がいれば十人振り返るような女性だ。

しかし、下半身が何だか変な感じだ。

見ると、下半身の甲冑がシグナムさんみたいになっていた。

「何で騎士甲冑まで変わってるんだ？」

と疑問に思っていると

「光司君……なんだよね？」

「ねえ、どうして女性になっちゃったの？」

「それが、僕にも何が何だか………あっ、もしかしてっ！」

僕はあの栄養ドリンクのことを思い出して急いで医務室に向かった。

「シャマルさん……！」

「ああ、こ、光司君、調子はどうかしら？・・・」

シャルさんは若干拳動不審に答えた。

「どつという事が、ちゃんと説明してもらえますね・・・」

「は、はい・・・」

「こうして僕はシャルさんからあらかたの事情を聞き出した。

「なるほど、やっぱり元凶ははやてさんでしたか」

「す、すみませんでした・・・」

「で、これの効力はいつになったら切れるんですか？」

「多分明日には、元の姿に戻れると思うんだけど・・・」

「自分でもまだ分からないってことですか？」

そう言うとシャルさんは申し訳なさそうに頷いた。

「はあ、まあ起きたことは仕方ないですから、もうこれつきりにして下さいね」

「は、はい！」

そう言つて僕は医務室を出た。  
すると外にはなのはさんフェイトさん、ヴィータ、シグナムさん、  
フォワードのみんながいた。

「光司、テストロツサから聞いたぞ。まあ………災難だな……  
……」

「こうして見ると今の光司綺麗だよなあ。そのまま女になっちな  
えばいいのに」

これには全員が頷いた。

「そ、そんなあ……それより皆さんちょっとついてきてください。これからこうなった元凶に会いに行きますから、事情を説明してもらいます」

そうして僕は部長室へ向かった。

しかしこの時、僕はまだ知るよしもなかった。

あの、悪夢のような惨劇がまた再び訪れようとは……………

コンコンッ

「失礼しますよ!」

そうして僕は返事も待たずに扉を開けた。

案の定、はやてさんはかなり驚いていた。



「ちょっと光司君！、いきなり入ったりしてどない……したん？  
？と言うか、ホンマに光司君？」

「何言ってるんですかはやてさん！はやてさんの仕業でしょ、これ  
！」

そう言っ僕は自分自身の体を指し示す。

「あはは、ばれてたかあ……」

「ばれてたかあ、じゃないですよまったく！女になるこっちの身も  
考えてほしいです！」

「ごめんごめん、けど、そんな怒ることないやんかあ……」

はやてさんは目につっすら涙を浮かべて伏せてしまった。

( あっ、ちょっと言い過ぎたか…… )

「 あ、あの、はやてさん、僕、もう怒ってないですから……  
……」

「 ……ほ、ホンマに？」

「 はい……」

「 せやったら、うちのお願ひ聞いてくれる？……」

「 はい！……ん？」

あれっ？なんか話の流れで大変なこと言っちゃったような……  
……

「むっふっふっふっ、光司君、男に一言はないわなあ？」

「あの、今僕女ですけど……」

「……細かいことは気にしたら負けや！」

「は、はあ……」

「ほんならなあ、光司君には……あの日の再現をしてもらいたいなあ」

「あの日……って、ま、まさか……」

「そっ、あの光司君何でもデーの復活や……」

「『おおお……』」

「ええええ……！」

みんなが歓声を挙げるなか、一人僕が否定的に言う。

「あつ、あの日を、再現………はあ」

「やったあ！今度は何お願いしようかな？」

「あれにしようかな、これにしようかな」

「あのはやてさん、これは別に処罰じゃないんですから、何回もお願ひ聞けませんよ！」

「『えええええ〜！』」

みんながブーイングを飛ばしてきた。

そんなこと言われても、ダメなものはダメなんです！

「わ、わかったわあ……………」

「まあ仕方ないよねえ……………」

「残念です……………」

なんだかみんな残念そうだ。

そしたら、こっちが悪いみたいじゃないか？みたいな気がしてきた。

「ま、まあ、そこまで落ち込まなくても……………そんな  
に沢山じゃなければいいですから……………」

その瞬間、みんなの顔がパツと明るくなった。

「『本当に!?!?!?』」

「え、ええ、まあ……………」

みんな突然近づいてきたので、僕は驚きながらも返事をした。

「ほんなら、とりあえずこれ着てや。その服やと動きにくいやろ?」

そう言っではやてさんはどこから出したのか、女性用の職員の服を出してきた。

「はやてさんっ!そっ、そんなのどこから出したんですか!？」

「企業秘密や あと、女やのに“光司君”っておかしいから、今日は“光ちゃん”って呼ぶで!」

確かに言われて見れば、今の僕は女だ。  
ならば呼び方を変えるのも納得がいく。

「分かりました、早速着替えてきます」

そうして僕は用意された服に着替えようと別室へ向かおうとしたが、ここで僕はある重大なことに気付かされた。

それはフェイトさんの何気ない発言から始まった。

「そういえば……じゃなくて光、下着ってどいつするの？」

「……?？」

「ほんとだね、どうしようか？」

「……下着、貸してもらっしかないわなあ……」

何だかややこしいことになってきたような……

僕は、この先また大変なことになりそうな予感がしてたまらなかつた。

みんながどうするか話していると、はやてさんは僕の胸を見て

「とりあえず、上はフェイトちゃんかシグナムの貸してもらいや・・・」

と、何か残念そうに言っていた。

「ほらっ、いくぞ光」

「合うかどうか分かんないけど、とりあえず見てみよ」

そうして僕はフェイトさんとシグナムさんについていった。



かくして、僕？の変わった1日は始まるのだった。

第24話「The change day」前編」(後書き)

次回も光の1日です。

お楽しみに!!

第25話「The change day」中編（前書き）

またしても長くなりそうだったので、中編を挟みました。

そして今回はエリオが主役です。

それではどうぞ。

第25話「The change day」中編

光 side

僕はフェイトさんとシグナムさんに下着を借りて、今はやてさんから渡された女性用の職員の服に着替えてるところなんだけど……

「あの、こ、これはどう着れば……？」

「えっ？あ、そうだよ、着方とかも分かんないよね」

「待っている、今説明するからな」

「す、すいません……」

女性の衣服は男性用と違う点も多く、二人に迷惑をかけたばなしである。

しばらくして、ようやく着ることができたが……………

「なんか、下がスースーする／＼……………」

「それは仕方がない、慣れる」

シグナムさん、ここでも厳しい。

「……………はい」

そんなこんなで、僕らは再びはやてさん達のところへ戻ってきた。

「ただいま戻りました」

「あっ、来た来た。よう似合ってるやん光ちゃん」

「ほんとほんと！」

「は、はあ……………」

(喜ぶべきなのか、悲しむべきなのか……………)  
僕は何が何だか分からなくなってきた。

「あの、それでは僕はこれで……………」

「うん、またお願いすることできたら呼ぶわぁ」

「は、は、いい加減にしてください……………」

そうして僕はやっと部隊長室を出た。

部隊長室から出てしばらくたって、僕が仕事をしていると、

「光ちゃん、ちょっといい？」

「何ですか、なのはさん？」

「えっとね、今日の訓練に出てほしいの……いいかな？」

よかったと、と内心僕は思った。

なのはさんだからあまり無理なことは言わないと思ってるけど、やっぱり怖い。

そんなわけで、訓練に出るくらいいけないので、

「もちろんいいですよー！」

「本当！？じゃあ、また後でねー！」

そう言ってなのはさんはむこうに走っていった。なぜか楽しそうに  
.....

「さて、それじゃあ仕事終わらせますか！」

そして僕は次々に仕事を終わらせていった。

~~~~~

なのはside

私たちは今訓練場にいる。

今日は光ちゃん、もとい光司君も訓練に参加してくれる。

これをきっかけに、光司君と二人っきりで訓練できるようにお願い
すれば.....

よしっ、頑張らなきゃねっ！

でも肝心の光ちゃんがなかなかこない。

「光ちゃん遅いねえ」

「何かあったのかなあ？……」

私たちが話していると

「すみませ〜ん、遅くなりました！」

光ちゃんが綺麗な髪と胸を揺らせてやって来た。

……光ちゃん、元は男なのに私より胸があるなんて・
シヨツケツ！

~~~~~

光side

僕はやっとのことで仕事を終わらせて、急いで訓練場に行った。

その間、何だか胸が邪魔で走りにくかったけど……

そして付いたとき、なのはさんがなぜか落ち込んでいた。

「あゝ、なのはさん？」

「……はっ、それじゃあ訓練始めようか！」

「『はいっ……』」

「じゃあいつものように……」

と、なのはさんが言い終わらないうちに、

「あ、あのっ！ちょっとよろしいでしゅうか？」

突然エリオがしゃべった。

「どうしたの？」

するとエリオは何だか言いにくそうにモジモジしながらもいった。

「あ、あのお、今日は兄さん……あ、じゃなかった、姉さんに、お願いできるって言ってましたので……その〜」

なるほど、謙虚なエリオはやっぱりお願いするといつのは言いにくいかな。  
そこで僕は助け船をだす。

「いいよエリオ、言うてごらん？」

「は、はい／＼……えっと、姉さんに……その、僕の槍を見てほしくて……今の自分が、どれくらいなのか知リた

くて……いいでしょうか／＼？」

エリオが言うには、自分のいまの実力が知りたいと言っことだ。  
そんなの、もちろんいいに決まっている。

僕はエリオの頭に手をおいて

「大丈夫、僕でよかつたら力になるよ」

「……………／＼／！！」

するとエリオの顔が何だか赤い。

そしてなぜかなのはさん、フェイトさん、ティアナまでが落ち込んでいた。

みんなどうしたのかな？

「じゃあ、行こうかエリオ」

「は、はい／＼／＼！」

そして僕とエリオはみんなと離れ広い場所へと向かった。

~~~~~

その他の人々

なのは

（あゝあ、まさかエリオに取られるとは思わなかったなあ。せっかく二人つきりになれると思ったのに……）

フェイト

（エ、エリオ、けっこう大胆なんだね。でも残念だなあ、せっかく光司と一緒に訓練しようと思ったのになあ……）

ティアナ

（エリオ……やられた……兄さんと二人で訓練しようと思ったのに……）

三人

「『はああ〜〜〜』」

恋のライバルの三人だが、このときばかりは心が通じあつた瞬間だった。

~~~~~

エリオside

僕は今姉さんと向き合っている。  
僕の槍を見てもらうためだ。

「姉さん、準備できました」

「よしっ、じゃあこっちも、セットアップ、ランサーフォーム！」

そうして姉さんもセットアップをして向かい合う。

しばらくの沈黙が続いた……

そして

「『はああああ！！』」

ガキイイインツ

両者の刃がぶつかり合う。  
しかし、僕は不思議に思った。

（あれっ？何だか姉さんの一撃から、いつもの重さが感じられない。  
……あの時はもつと強烈な一撃だったし、いくらなのはさん  
達の指導の成果と言っても、こんなに一気に強くなるはずがないよ  
なあ……）

とっていると、やはり姉さんも不思議に感じたようで

「はぁあっ!」

競り合いを止めて僕を吹き飛ばした。

しかし軽く飛ばされたので、なんなく体制を保って着地した。

「ん〜、やっぱりちょっと重いなあ」

「あの、姉さん?」

「エリオ、今の一撃どうだった?」

「はい、何だかいつもより弱く感じました」

すると姉さんはやっぱりと思ったのか槍を何度か振りながら



「やっぱりなあ、女になつてるせいか筋力が大分落ちてるなあ。仕方ない、戦い方を変えよう……」

(戦い方を変える！？簡単そうに言っけど、出来るのかなあ?)

そう思つてるうちに姉さんの構えが変わった。

今までは、槍を右手で持ち左手を前に出して刃を後ろにして構えていたのが、今は槍を両手で持ち刃を前に出し地面につけている。

「いくよエリオ、今までとは少し違うから気を付けてねっ！」

「っ!?!?」

ガキインッ

姉さんは僕の方へ一瞬で来ると、自分の体を回転させ僕に攻撃を仕掛けてきた。

その一撃は前に姉さんと戦った時ぐらい、いやそれ以上の威力だっ

た。

「おっ、受け止めたねえ。これはけっこう重いと思ったんだけどなっ！」

そして姉さんは僕と距離をとる。

「なら、今度はこっちからいきます！」

そうして僕は構え直し姉さんに向かっていく。

「でやあああっ！」

僕は姉さんに向かっていくが、姉さんは別に構えもしないで落ち着いて行った

「エリオ、一つ教えてあげよう。槍って言うのはね、ただ受け止めるだけじゃないんだよ……」

「やああっ!!」

僕は渾身の一撃を出したが、姉さんは僕の攻撃を槍を回して受け流し

「はああっ!!」

その遠心力を利用して槍を回して攻撃してきた。

「うわあああ!!」

当然受け止められると思っていた僕はその攻撃を受けてしまった。

「ちょっと飛ばし過ぎたかな……でも、まだやれるよねエリオ!!」

「も、もちろんです！」

「ただ、僕はまだ負けられない！」

「絶対に姉さんみたいに強くなる！」

「じゃあ、今度はこっちからいかせてもらおうよっ！」

「っ!？」

「姉さんはさっきみたいに一瞬ではなかったが、けっこうなスピードで近づいたかと思うと」

「はっ、はっ、そりゃっ!」

「カンッ、カンッ、カキンッ」

「っく、くうっ……」

姉さんの攻撃は今までの突き主体の鋭い攻撃とは打って変わって、体を回転させることで流れるように槍を振り回し、更に遠心力によってスピードもました連続攻撃を繰り出してくる。

それは、まるで舞を思わせるようだった。

しかし僕はその攻撃を防ぐだけで精一杯だった。

そして

「これで……………どうだ……………瞬迅槍！」

姉さんが連続攻撃の最後に瞬迅槍を放ってきた。

「くっ……………うわああ!!」

僕はまた姉さんに飛ばされた。

僕は力を振り絞りなんとか立ち上がる。

(さすがに、次当たったらきついかも……………でも、そんなこと言ってられない！次で決める！)

「ストラーダ!!」

「explosion」

僕はカートリッジをロードして構えをとる。

「さすがだね、まだ立ち上がるか……………だったら、ザック  
ス！」

「オーライ、ロードカートリッジ」

そうして姉さんもカートリッジをロードして構えをとる。

しばらくの沈黙が続く

そして

「一閃、必中、でやあああっ!」

僕は最後の力を使って姉さんに向かっていった。

~~~~~

光 s i d e

僕らは互いにカートリッジをロードしてしばらく沈黙している。

そうして

「一閃、必中、でやあああっ!!」

エリオが渾身の一撃を放とうとしている。

どうやらこれで決めてくるつもりのようなのだ。

だったら、こっちも!

「火竜、招来……………」

そうして僕は炎の龍を槍に纏わせる。

「列空……………魔龍槍!!」

僕は、今は女の体で力も弱くカートリッジも一発しかロードしていないが、自分の中で最強の技を放った。

「はぁぁぁぁぁあつ!!」

「でやぁぁぁぁあつ!!」

二人の距離は縮まり、

そうして

ズガアアアアアアン!!

しばらくたって土煙が晴れてくると、そこにはバリアジャケットが少し焦げた光と、光に寄り掛かっているエリオの姿があった。

「驚いたな、あの技を相殺するとはね。……強くなった

ね、エリオ」

「は／＼、はい、ありがとうございます／＼……」

こうして僕らの闘いは終わった。

それからしばらくたって

僕は、あの後抱きかかえたら顔を赤くして気絶したエリオを医務室に運んで、シャワー室に向かっている。

すると

「『^{ちゃん}光！』」「姉さん！」

「光姉！」

「お姉ちゃん」

「み、みんな！」

訓練を終えたであろうなのはさん達に出くわした。

「光ちゃんも今終わったの？」

「ええ、そんなところです」

「あれっ、エリオは一緒じゃないの？」

「ええ、訓練の最後に僕の技をくらってフラフラになっていたので、運ぼうとしたら顔を赤くして気絶しちゃったんですよ」

「『・・・・・・・・・・・・・・・・（じびやましい〜）』」

その時、なぜかなのはさん達が黙ったまま落ち込んでいた。

「あの、光姉もこれからシャワー？」

「うんそうだけど、みんな先に入ってきてね、外で待ってるから」

と、いつものように一緒に入るのを先に断ろうとするが、僕はこの時大事な事を忘れていた。

「何言ってるの？今日は女の子同士なんだから一緒に入る！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・はっ！、そうだ、忘れてた！」

そう、僕は今女になっている事をすっかり忘れていた。

（なんか・・・・・・・・女になってから、男として大事な何かを失っていつてるような気がする）

「そう言うわけだから、一緒に入る？」

「い、いや！そういう訳にはいきませんよー!!」

その通り、中身は一応男だ。

一緒に入るのは僕の精神が持たないし、僕のポリシーに反する！

しかし、この時もまた、僕は大事な事を忘れていた。

「でも……」

「今の姉さんには……」

「『拒否権なんてないけどね』」

(。口。； 今の光の顔

「『それじゃあ、レッシュゴ』」

そうして僕はシャワー室という名の地獄に連行されていった。

ちなみに中では最初から最後まで目を閉じてました。

そうしないと・・・・・・多分死んでしまいます。(主

に鼻血による出血多量で)

第25話「The change day」中編」（後書き）

AIRS「今回は、天照大神さんの「魔法少女リリカルなのは」転生せし物語」より、主人公の優星君に来ていただきました」

パチパチパチパチ

優星「ど、どうも」

光「直接会うのは初めてかな、神谷光……て言います。よろしくね、優星」

優星「は／＼、はい！こ、こちらこそ／＼」

AIRS「さて、初めてのゲストとして、毎回感想を下さってる天照大神さんの主人公である優星君をお招きしたわけですが、いかがでしょうか？」

優星「あ、あの、と、とっても嬉しいです／＼」

光「本当！？それは良かった」

ニコッ

ズキユウウン

優星「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ぱたっ

光「たっ、大変！顔真っ赤にして倒れちゃった！すぐに運ばなくちや！」

AIR S「あゝ、多分それは君の・・・・・・・・行っちゃった。・・・・・・・・と言っわけで、この他にも、あとがきに使ってもいいと言

「う方大募集です！それではまた次回お会いしましょう」

第26話「The change day」後編」(前書き)

今回は前回のエリオのようになのはが主体です。

そねじはじゅんじゅ。

第26話「The change day」後編」

光side

なのはさん達に連行されていってしばらくたって、僕はようやくシヤワー室から出てきた。

「し／＼、死ぬかと思った／＼……」

こうしてなんとか逃げ出した僕は食堂へ向かった。

するとそこにはもうすでにみんな集まっていた。

「あつ、光ちゃん！」

「じつちで食べよ」

なのはさん達に呼ばれたので、行ってしまうよ……

「違います！姉さんはこっちで食べるんです……！」

「光姉、こっちこっち」

今度はティアナ達が呼んでいる。

「『』」
「『』」
「『』」
「『』」

「『』」
「『』」
「『』」
「『』」

何だか争いの予感が……

するこ

「どうしたのバ……誰？」

「あ、ヴィヴィオ、こう見えても、僕だよ光司だよ」

「光司パパ？……それとも光ママ？」

「うん……どっちかっていうと、今はママかな？」

「う……分かった。じゃあ光ママ、ご飯食べよ」

「うん」

こうして、僕はなのはさん側でもなく、ティアナ側でもなく、ヴィオと一緒にご飯を食べることになった。

ちなみに、この時なのは達全員が残念そうな顔をしてたのはお約束

そうして食事を終えてしばらくして

ピンポンパンポーン

「神谷二等空佐、至急、部隊長室までお越しください」

「ん？はやてさんが、どうしたんだろうっ？」

不思議に思いながら僕は部隊長室へ向かった。

「はやてさん、何かよろうですか？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

しかし僕の問いかけにはやてさんは答えない。

「あの、はやて、さん？」

僕がはやてさんにもう一度問いかけようとしたそのときだった、

バタンッ

「っ!?!?」

急にドアが閉まった。

すると同時にはやてさんが立ち上がり

「光ちゃん……………」

「な、何でしょうか……………」

するとはやてさんはもの凄い笑顔で

「さっ、お着替えの時間やで」

「ち……………ちっぴり……………」

予想してた通りの展開になってしまった。

「あの、…」
「応じますけど……………」
「拒否権は……………」

「もちろんないで」

「はあ〜……………」

「さっ、最初はこれやで！」

そう言うてはやてさんが差し出したのは、

「また……………ですか……………」

そう、あの時着たメイド服である。

「まずは無難にこれかなあ思ってた〜」

「無難って、何の無難なんですか……………はあ〜、それじゃあ
着替えて来ますね」

そう言っ僕が服をもっ僕が着替えに行こうとする

「ん？別にここで着替えたらええやん。今は女の子なんやし」

「・・・・・・・・・・・・・・・・あ」

僕はまたしても自分が女であることを忘れてしまっていた。

「で、でも、なんか恥ずかしいじゃないですか・・・・・・・・」

僕は少し顔を赤くしながら言う。

「っ／／／・・・・・・・・ほ、ほんならあっちの方で着替えてきや／／
・・・・・・・・」

そしてなぜかはやてさんも顔を赤くしながら答えた。

不思議に思いながらも僕は着替えに行つた。

~~~~~

はやてside

光ちゃんが恥ずかしいからと言つんで、別室に着替えに行つてしばらくたつた。

「あの顔は反則や〜、可愛すぎるやん／＼／」

光ちゃんのあの時の表情はあかんかった。

顔を赤くしながらあんな表情されたら、男の人はいちころやるな．．

．．．

そんな風に思っていると、ドアをノックする音が聞こえた。

「失礼します、シャリオです」

シャリーか………おもしろなるかもな

「ええよう、入っても」

「失礼します部隊長、点検のためデバイスを預かりに来ました」

「おおきにな。それより、もうちょっとここにおいたらおもしろい光景見られるで！」

「は、はあ………」

さて、光ちゃんがどんな反応するか、楽しみや！

~~~~~

光 side

メイド服に着替えるのにその時間はかからなかった。

「なんか慣れって怖いな……………」

メイド服を着るのになれている自分が何だか悲しい……………

そうして着替え終え部隊長室に戻ると

「ただいま戻りました……………って、シャーリー？」

「『……………』」

そこには無言のシャーリーとはやてさんがいた。

「『……………か……………か……………』」

そしてつまりながらもゆづやく一言

「『かわいいー！ー！』」

「はあ……………」

まあ予測はしてたけど、面と向かって言われると、何だか男としてへこむなあ……………

「ええ！？本当に光司さん何ですか！？」

「今は女になって、光ちゃん' になってるんやけど、やっぱりかわえ

えわあゝ」

「はあ、びじも……」

何だか二人してはしゃいでいる。
女の子ってこう言うものなのかなあ？

(今は女なのに、乙女心はあまり分からない光司でした b y 作者)

「そうだったんですか……あっ、じゃあ」

そう言ってシャーリーは僕には聞こえないようにはやてさんに提案
を持ちかけているようだった。

「……ふむふむ、なるほどそれもおもしろそうなや！よっ
しゃっ、次はこれや！」

「……執事服？」

「そや！あえて女の体でって言うのがミソやで！」

と言う訳で、今度は執事服に着替えてきた。

「ぎじじじ……ですか？」

「『………かつこいい（ええやん）！』」

着替えて戻って来ると何だか観客が増えていたような気がした。

なのはさんとか………フェイトさんとか………フォワードとか………ってみんなじゃないか！

「みんな！？」

「そんなことより、はやてちゃん！」

「はいな、次はこれやで！」

○セーラ服

「あ／＼／＼、あの、僕19ですけど／＼……………」

「『これもかわいいー！ー！』」

「じゃあ、次はこれ着てみて」

○チャイナドレス

「下が／＼、スースーする／＼」

「『……………き、綺麗……………』」

「じ、じゃあ、次はこれお願いします／＼」

○水着_{ヒキニ}

「さ／＼、さすがにこれは不味いと／＼／＼……」

「『だめ(ですか)?』」

みんなが上目遣いで頼んでくる。

「……着ればいんどしょ／＼／＼!」

僕はもうやけくそに答えた。

~~~~~着替え中~~~~~

そして僕はみんなの前に立った。

「『……………』」

「どうぞ……………ですか？」

「『<sup>ちゃん</sup>光……………』」

「姉さん……………」

「光姉……………」

「お姉ちゃん……………」

「『それは反則だよ( )です( )……………』」

みんな顔を真っ赤にして一斉に答えた。  
エリオはいつの間にか倒れていた。

こうして、やっとのことで僕のお着替えは終わりを告げた。

それからしばらくたって、時刻は午後10時。

僕は部屋に戻って一休みしていた。

「今日は散々な一日だったなあ……………お風呂でもはいる……………」

僕は一日の疲れを癒すためお風呂に向かおうとするが、ここである問題が起こる。

「……………今、僕の体って女だよね……………」

そう、風呂に入ると言うことは、自分の体とは言え女性の裸体を見ることがなるのだ。

「……………ど／＼ど／＼ど／＼……………」

そこで僕は考えた。

「……………ん……………」

10分ほど考えた結果、ある一つの考えが浮かんだ。  
しかし、それは光にとってあまり良い方法ではなかったが、  
現段階ではこれしかなかった。

「やっぱり／＼、これしかない……………かあ／／」

そうして僕はある場所へと向かった。

ある場所

「すみません、なのはさんいますか？」

「光ちゃん？、入っていいよ」

そう、ある場所とはなのはさんの所だ。

「失礼します」

部屋にはなのはさんとヴィヴィオがいた。

「あっ、光ママー！」

「で、どつしたのこんな時間に？」

「は／＼、はい……………実は、その……………お願い  
があつて……………」

「私に？」

「はい……………」

「何だ、そんなことだったの。それくらい、いいに決まつてるじやない。今日は光ちゃんにたくさんお願い聞いてもらったし。で、お願いってなに？」

「その／＼……………お風呂に入るのを手伝ってくれませんか？／＼／」

「どひ言ひしよと？」

「つまり／＼／＼……」

僕はなのはさんに事の発端を説明した。

「なるほどねえ……でも、光ちゃんそれだと私の裸見ることになるよ？」

「その点は大丈夫です。僕は目隠して入りますから、なのはさんは何がどこにあるかを言うてくれるだけで結構ですので……」

「む、別に光ちゃんになら見られてもいいのに！」

「なっ／＼、なに言ってるんですか／＼!? そ、そんなの、ダメに決まってるじゃないですか／＼！」

「ふふっ、冗談だよ 本当光ちゃんってそう言うの弱いよねえ」



「もぉー／＼、からかわないで下さいよなのはさん／＼!」

「ごめんごめん、じゃあ行こうか」

「はい」

そうして僕らはお風呂場へ向かった。

お風呂場

僕は今脱衣を済ませてお風呂場にいる。

当然今は目隠しをしている状態なので目が見えない。

「光ちゃん、お待たせ」

どうやらなのはさんも入って来たようだ。

「それじゃあなのはさん、よろしくお願いします／＼」

「はい！」

そうして僕のお風呂大奮闘が始まった。

まずは湯船に入ることから始まる。

「い、い、いの辺ですか？」

「ん、ん、もつちよつと右」

「右………あっ、」」ですね

そうしてようやく湯船に入ることができた。

するとすぐになのはさんも入ってきた。

「すみませんなのはさん、こんなことお願いしちゃって」

「ううん、私は大丈夫だから。それに………光  
ちゃんと一緒にお風呂に入れてよかったから／＼」

「えっ／＼………」

「何でもないの!」

「す、すいません／＼………」

そうしてしばらくなのはさんと会話をしていた。

「じゃあそろそろ、体洗おっか？」

「はい。じゃあなのは、指示をお願いします」

「それなんだけど………こつたららどつっ…」

そう言うとなのはさんは僕の手を握った。

「なっ／＼、なのはさん／＼」

「こつして手を引いた方が早いでしょ」

「は、はい／＼そうですね／＼………」

そう言うってなのはさんに連れられ、湯船の外に出た。

「それじゃあ、体も洗ってあげるね」

「いや／＼、そんな／＼……」

「いいから、いいから」

そうしてなのはさんにされるがままにされ、お風呂大奮闘は終了した。

そして僕となのはさんはお風呂から上がって、なのはさんの部屋に戻って来た。

「ありがとうございますましたのはさん、おかげで助かりました！」

「どういたしまして。役に立ったんなら何よりだよ」

「じゃあ僕はこれで……」

そうして帰ろうとすると……  
服を引っ張られる感じがした。

「ん？……どうしたのヴィヴィオ？」

するとヴィヴィオが僕の服を引っ張っていた。

「光ママ、行っちゃダメ……」

「ヴィヴィオ……………」

するとなのはさんがヴィヴィオに耳打ちした。

「あのねヴィヴィオ、……………なんだよ」

「そうなの？……………だったら、ヴィヴィオと一緒に寝て  
！」

694

「えっ、えええ！？」

「だって今日は光ママにお願いできるんですよ？」

「えっ……………まあそうだけど……………」

「じゃあいいでしょー！」

「ん〜、わかったよヴィヴィオ」

「えへへ」

「そういう訳で、すいませんなのはさん／＼」

「まあ／＼、そういう訳じゃ仕方ないよね／＼」

こうして僕とヴィヴィオとなのはさんと一緒に寝ることになった。

しばらくたって



僕、ヴィヴィオ、なのはさんの順に寝ていたのだが………

「何でこうなるかな………」

いつの間にか、ヴィヴィオ、僕、なのはさんの順になっていた。  
しかも二人ともなぜかこっちに抱きついている。

なので………

「ね、寝れない………」

そしてそれに加え

「ん……………うん……………」

ムギユツ

「／／／＼\$£%#&@）言葉にならない声（」

なのはさんが寝ぼけてより抱きついてきた。  
さらに胸があたってる。

「ね／／／、寝れるわけないよお／／／／」

僕の眠れない夜は続く。

第26話「The change day」後編」(後書き)

次回もオリジナルの話です。

そしてもうちょっとで日常編が終わり、ストーリーが進展します。

第27話「多対一と地上本部」(前書き)

色々書いてるうちに何だかぐだぐだになってしまいました。

そしてネタが………

誰か助けてください？

それではござい。

## 第27話「多対一と地上本部」

光司 side

僕、昨日あまり眠れなかったと言つのに朝早く目が覚めてしまった。

「ん……………うん、朝か……………ん？」

そして僕は顔や体をさわったりして、自分の体のある変化に気が付く。

「お、男に戻ってるー!!」

「マスター、嬉しいのは分かりますがなのはさんやヴィヴィオが起きてしまいます」

「おっとそうだった！……」

男に戻れた喜びを大声で叫ぶのを止め僕は周りを見た。

「スー、スー……」

「むにゃむにゃ……」

「良かった、起きてなかった……」

僕はなのはさんとヴィヴィオを起こさないようにベットから抜け出し外へ出た。

外は朝早いと言っことで誰もいない。

「ふうー、やっぱり男の体の方がしっくりするな」

「そうですね、しかしマスター、その割りにはけっこう似合ってたよ、あの服……」

そう言ってザックスは昨日の‘お着替え’の写真を見せてきた。

「……いつ撮ったんだよ……」

「それは、はやてさんに言われて……」

「……今すぐ消すんだ……」

「し、しかしマスター……」

「でない……君が消えることになるよ……」

「Y、yes．．．sir．．．．．」

「こうしてザックスに『かるゝいお話』をして、僕はいつものように剣を振っていた。

するこ

「マスター、いい忘れていましたが、メッセージが一件届いています」

「誰から?」

「どつちやら、スカリエッティからのようです」

(スカリエッティから……何かあったんだらうか?……)

そう思い僕はメッセージを見ることにした。



「内はメッセージの内容です。  
一応ただのメッセージなので衛生電話等ではありません。

「やあ光司、元気にやっているかな？こちらの方は、私も娘達も皆  
元気だよ」

(なぐんだ、ただのメッセージか、心配して損したな)

「ああそうそう、真面目な君のことだから、私が君にメッセージを  
送るぐらいなんだから、『何かしら危険な事態になっているんじゃないか!?』、  
と思ったんだろが、この通り私はピンピンしているよ。はっはっはっはっ！」

(……………エスパーか!?)

「それで本題なんだか、実は管理局に私の娘の一人をスパイとして  
潜入させていてね。彼女にあるデータを届けてほしいんだよ」

(あれっ、ナンバーズって……………確か……………)

「ちなみに、彼女はN o . 0 2 ・ドワーエ、あの時はいなかっただ  
ろ」

(ああっ!……………あぁ?)

なぜか、こっちの思った事が筒抜けなのが不思議だが……………まい  
つか。

「今の彼女の顔写真と渡すデータを添付しておいたから。それじゃ  
あよろしく頼むよ」

そうしてスカリエッティのメッセージは終わった。

「うーん……………」

「どうします?マスター」

「どうするもこうするも、行くしかないだろ」

「そうですね。添付されたデータはマスターのパソコンの方に送っておきましたから、後で見てください」

「さすが、手が早いね」

「恐れ入ります。そしてマスター、そろそろ朝練の時間ですが」

「そうか、それじゃあ行こうか」

そうして僕は朝練へと向かった。

## 訓練場

訓練場に着くとそこにはすでにみんな集まっていた。

「おはようーみんな」

「『おはよう(い)ちます』」

見るとなのはさん達やフォードの他にもう二人いた。

そしてなのはさんが

「じゃあ朝練始まる前に紹介するね。今日から事件調査のため機動六課に配属になった、ギンガ・ナカジマ陸曹とマリエル技官だよ」

「『はい……!』」

こうして軽い自己紹介を終えて朝練が始まった。

ギンガはスバルと、ティアナはヴィータと、エリオとキャロはフェイトさんとそれぞれ訓練をした。

僕となのはさん、シグナムさんはその様子を見ていた。

「そう言えば、光司はいつの間にか男に戻ったな」

「そうなんですよ! いやあ、一時はどうなることと思いましたがよ」

「でも、もし戻らなかったらどうしたの?」

「……………考えたくもないです……………」

「『あはははっ』」

そうしてたわいもない会話をしているうちにティアナとエリオとキヤロは戻って来たが、ギンガとスバルはまだやっていた。

しかししばらくすると、

「はい、そこまで！」

ギンガのリボルバーナックルがズバルに向けられ勝負がついた。

「それじゃあみんな集合！」

「『はい…』」

そしてみんな一カ所に集められた。

「じゃあ朝のまとめ、隊長対フォワード対光司君で模擬戦やるよ。ギンガはフォワードの方に入ってね。」

「『はい……………え?』」

その言葉を聞いた瞬間僕とギンガの返事が重なった。

「ああギン姉、これたまにやるんだよ……………」

「とりあえず、隊長達に特定の攻撃を与えられればクリアです。でも隊長達、けっこう本気でやってきますから……………」

「あはは……………そうなんだ」

「攻撃は、ギンガはりボルバーナックルと蹴りね、で光司君は……  
……どうしよっか？」

「いやそれ以前に僕一人だけなんですか!？」

「大丈夫、光司君強いでしょ」

「え………じゃあり、ミットブレイク、ぐらい使いま  
すよ。こちらの訓練にもなりますから」

「うん………分かった。でもやりすぎないでね」

「『うんうん』」



ギンガ以外が一斉に頷く。

それもそのはず、光司がリミットブレイクすると大抵の攻撃は避けられる。

したがって、勝てないのだ。

その事を知らないギンガは当然不思議に思う。

「ねえスバル、いったいどういう事？」

「ああそれはね、しい兄リミットブレイクするとすっごく強くなつて……」

「私たちの攻撃が当たらないんですよ……」

「な、なるほど……」

「じゃあそろそろみんな始めるよ。準備して！」

「『はい！』」

そしてしばらくたち

僕はセットアップしてみんなと向き合っている。

「みんな準備出来たね。それじゃあ……レディ……  
・ゴー!!」

そして模擬戦がスタートし、僕はすぐに空中に上がって様子を見ることにした。

するとなのはさんとティアナが攻撃してきた。

「アクセル・シュター！」

「クロスファイヤ……………シュートッ！」

「くっ、フレイム・ドライブ！！！」

僕はフレイム・ドライブを放ち二人の攻撃を相殺しつつ、地面へ下りた。

「まったく、いきなり攻撃してくるなんて……………まあ、そ  
うだよな……………」

そんな矛盾することを考えていると

「『はあああああつー！！』」

今度はシグナムさん、ヴィータ、スバル、エリオが一斉にこっちに

突っ込んで来た。

しかしみんな一斉に僕に攻撃してくるなんて思ってもいなかったの  
で、避けることが出来そうもなかった。

「くそっ！……フレーム・ランサー・バトルシフト！！」

「遅いつー！ー！」

ガキイイイン

「『なにっ（ええっ）！？』」

「ぐっ……くっ……」

僕はフレーム・ランサーを二本出し手両手に持ち、剣を地面に刺し

て、片方の槍でシグナムさんとエリオを、もう片方の槍でヴィータとスバルの攻撃を防いだ。  
しかしギリギリ四人の攻撃を防いでいるので動けない。

「みんな退いてー！！ダイバiiiiiiiiん……………」

「トライデント……………」

上ではなのはさんとフェイトさんが集束魔法を撃とうとしている。

……………つてやばいー！！

しかし防ぐのに手一杯で動けない。  
そして無情にも

「バスタアアアア！！」「スマツシャアアア！！！」

「よしつ、今だ！」

「『はい！』」「おう！」

二人の攻撃が放たれると同時に四人が同時に僕から離れた。

「くっ……………」

ズガアアアアアン

~~~~~

なのはside

私とフェイトちゃんでなんとか光司君に攻撃を当てることができた
……………かも。

フェイトちゃんの方もまだ警戒している。

だんだんと土煙が晴れてくると、そこには髪が赤く染まった光司君がいた。
どうやらリミットブレイクをしたみたい。

「あれでもダメなの……………」

「相変わらず強いなあ……………」

とフェイトちゃんと話している

「なのはさん、何だか僕対全員になってる気がするんですけど……………
……………気のせいですか？」

やっぱりばれちゃったかあゝ、まあ仕方ないよね。
私は諦めて本当の事を言うことにした。

「じ、実は、そうなの……………」

そう答えると、光司君はしばらく考えて

「だったら、少し本気でいかせてもらいますよ!」

~~~~~

光司 side

僕は二人の攻撃が当たる直前に、リミットブレイクをしてフォース  
フィールドを張りなんとか攻撃を防いだ。

しかし何だかこれではまるで僕対全員出はないかと思い、なのはさ  
んに質問すると案の定そうだった。



(はあ、やっぱりそう言うことだったのか……………そう言うことなら)

「だったら、本気でいかせてもらいますよ!」

「『っ!』!」

そのとたん全員が構え直した。  
が、それも意味をなすことはないだろう。

「はあああっ!、サウザンド・レイン!」

ヒュンッ、ヒュンッ、ヒュンッヒュンッ

次々に魔力で作られた赤い槍が四方八方に飛んでいき、なのはさん達を襲う。

「『キヤアア!』!」

みんなそれぞれに当たっていく。

が、もちろんこれだけで終わるはずもなく

「はあああああつ!」

土煙が晴れる前にシグナムさんとヴィータが、両方向から突っ込んで来た。

「紫電……………」

「ラケーテン……………」

「はあつ!」

そして僕は手に魔力をためる。

「……………閃!!」

「……………ハンマー!!」

ガキイインッ

「くっ!!」

「くっそー!!」

僕は地面に刺した剣を抜いてシグナムさんの一撃を防ぎ、手にためた魔力でヴィータの攻撃を防いだ。

そして僕は同時に二つの技を発動させる。

「紅蓮……………」

「剛熱……………」

「っ!?!」

「……一閃!?!」

「……爆炎拳!?!」

ドカアアアアン

「『うわあああ!?!』」

僕は紅蓮一閃と爆炎拳を放ってシグナムさんとヴィータを吹き飛ばした。  
しかし、至近距離で紅蓮一閃と爆炎拳を放ったため少しダメージを受けた。

「くっ……………次っ!」

すると今度はスバルとティアナが向かって来ていた。

あの二人のコンビネーションは厄介だ。

「二人が来る前に……………フレイム・ドライブ！」

「『っ!?!』」

僕は二人がコンビネーションを繰り出す前にフレイム・ドライブを放って二人を攻撃した。

これで終わると思えないけど、時間稼ぎぐらいにはなるかな。

「よしっ、一気に決める!!」

そして僕はあの技を放つため力をためる。

しかし時間がかかるのであまり使いたくはないが、ここまで大人数だと仕方がない。

すると僕が魔力をためている事にした気付いたのか、

「でやああああ!!」

「うりやあああ!!」

「はああああ!!」

「フリード、ブラストレイ!!」

「デイベイン・バスターアア!!」

全員が一斉に攻撃を仕掛けてきた。  
が、少し遅かったかな。

すでに魔力をため終えた僕は、自分の中でも最強の広域魔法を出す準備ができた。  
もちろん威力を多少押さえて。

そうして僕は上空に上がり技を放つ。

「メテオ……………エクスプロージョン!!」

ズドオオオオオン

「こ、これで……………みんな、倒した……………かな?……………」

僕はゆっくりと地面に下りる。

土煙がだんだんと晴れてくるが、動く気配はない。

「多分、みんな倒したよね……………」

不安に思い僕は人数を確認してみる。

「なのはさん、フェイトさん、シグナムさん、ヴィータ、スバル、  
ティアナ、エリオ、キャロ、ギンガ……………  
?ギン……………ガ?」

そうギンガがいることをすっかり忘れていた。

「ん〜、でもあの攻撃ならギンガもやられてるかな？」

とそんな風に思っていると

「はあああっ！〜！」

「っ、後ろか！？」

「はああっ！〜！」

気付くと後ろからギンガがリボルバーナックルで攻撃してきていた。

僕はなんとかフォース・フィールドを発動して防ぐ。



「しかし驚いたよ。あの攻撃を避けるなんてね！」

「はい、光司さんが魔力をためていた時点でなにか来るって思っていましたから！」

「なるほどねっ！」

そうして僕はギンガを吹き飛ばす。

(しかしやばいな……………すぐに決着つけないとな……………)

「ギンガには悪いけど、一撃で勝たせてもらっつよ！」

「望むところですよ！」

そうしてしばらくの沈黙が続く。

しかしこの時、僕は自分の体のある異変に気付いた。

(あれ?.....何だかまぶたが重い.....そうか!今日は全然寝てないし、朝からリミット・ブレイク発動させちゃったし、.....ね、眠気が.....)

そう、体の異変とは眠気のことだった。

そうして僕はギンガの他に睡魔とも戦わなければならなくなった。

しかし、この睡魔が相当なものだった。

「くそっ.....ね、ねむい.....集中出来ない.....」

しかし光司が自分の他に睡魔とも戦っていることなど知らないギン  
ガが突っ込んで来た。

~~~~~

ギンガ side

私は今、あの憧れの光司さんと模擬戦をしている。

最初は1対9だったのに今は私一人だ。

どれだけ強いんだろ……光司さん……

でも、負けられない!!

そして私は光司さんに攻撃を仕掛ける。

「はあああつー!!」

しかし、何だか光司さんの様子がおかしい。

(どうしたんだろ、光司さん？何だか、立ってるのがやつとって感じだけど……でもやらなきゃこっちがやられちゃうー！)

そう思って私は躊躇せず攻撃しようとしたが

「も……もうダメ……」

「えっ／＼／」

攻撃しようとしたけど、光司さんがいきなり倒れてきて私の方にもたれ掛かった。

「ええ／／．．．．．あ、あの／／．．．．．こ／／、
光司さん／／？」

「スー．．．．．スー．．．．．」

「ね、寝ちゃってる／／？」

「ついで今回の模擬戦はギンガの勝ち？で終わった。

~~~~~

光司 side

「ん……………うん……………はっ！……………って、寝ちゃったのか」

気が付くと僕は医務室のベッドに寝かされていた。

「確か最後は……………ギンガと……………多分そこで寝ちゃったのか……………」

ようやくこうなった訳を思い出すとギンガがやって来た。

「あつ光司さん！目が覚めたんですか？」

「うん。なんか、色々迷惑かけたみたいでごめんね」

「い／＼、いえ！大丈夫です／＼」

ギンガはあわてて答えるが顔が赤い。  
やっぱり僕が何かしちやったのかなあ。

「それに……その……光司さんの寝顔／＼……可愛かった  
ですから／＼……」

「ん、何？」

「なんでもないです／＼！」

ギンガが何か言った気がするけど、まあいつか。

「それじゃあ、そろそろ戻ろうか」

「はい！」

こうして僕とギンガは仕事に戻った。  
まっ僕は違うんだけどね。

~~~~~地上本部~~~~~

僕ははやてさんに外回りという名目で今地上本部に来ている。

もちろんスカリエッティの頼み事をするためだ。

「さてと、確か……No.02のドゥーエさん……だったかな？」

僕は部屋のパソコンから取り出した顔写真と渡すデータを確認してみ
みる。

「しかし、あの中からこの人を見つけ出して、怪しまれないようにデータを渡すか……うん、けっこう難しいな」

「やはり、受付で聞いた方がいいかと」

「やっぱりそうするしかないか……もう少し穩便にいきたかったけど仕方ないか」

意を決し、僕は地上本部の建物へと入っていった。

入ると何だか周りがざわついているが気にせず、僕はまず受付の人に聞いてみた。

「あのすみません、この写真の女性にお渡ししたいものがあるんですが……」

「は、はい！、少々お待ち下さい！」

そしてしばらくして

「お、お待たせしました！25階のミーティングルームでお会いできるそうなので、そちらでお待ちください！」

さっきから思ってたけど、この人やけに緊張してるな。
僕そこまで有名じゃないと思うんだけど。

この時受付の人が緊張していたのはもちろん光司が紅蓮の騎士と
いうのもありますが、噂で聞くよりかっこよかった、というのもあ
ります。

（本人には全く気付かない）

「ありがとうございます。では」

そして僕はその場所へと向かった。

25階ミーティングルーム

僕は指定された部屋でしばらく待っていたのだが

「遅いな~~~~~」

待てど暮らせど彼女は来ない。

不思議に思い僕がふと部屋の外に出ると、数人の男が女性を連れ去っているのが見えた。

よく見ると写真の女性その人だった。

「っ！あの人って!？」

「間違いありません。写真の女性です！」

「不味いな、追いかけてよう!!」

「了解！」

そして僕はその男達を追いかけた。

~~~~~

ドゥーエside

私は突然数人の男に拉致され、人気の無い屋上に連れてこられた。

理由はおそろくあの課長の件だろう。

最近私に言い寄ってくるあの課長、何回も“迷惑です”って言ったのに聞くどころかこんな手段に出るなんて！

すると男達が喋り出した。

「まったく手間かけさせんじゃねえよ、こつちとら忙しいっていうのによー！」

「お前さあ、さっさと課長の女になつた方が身のためだぜ」

「そつそつ」

（やっぱり、課長の件だったか………まったく、本っ当最低！）

「だ、誰がなるもんですか！！」

「やっぱりか……………仕方ねえ、多少痛い目にあってもらうしかねえなあ……………」

（本当はこんなやつらたいしたこと無いけど、あんまり力を使っわけには……………）

そう思った時だった

バンッ

そこには薄い金髪の女の人がいた。

~~~~~

光司 side

僕はその男達を追って屋上に来た。

隠れて話を聞いていると、どうやらその女性が課長のセクハラを受けているようで、今その課長の部下に脅されているようだった。

「まったく、どこにもこんな最低のやつらはいらんだなっ！」

742

バンッ

僕はわざとこちらに気付くようにドアを蹴り開けた。

「だっ、誰だてめえ！」

「お前らに名乗る名は無い！」

「ふざけやがって、このやる！」

一人の男が殴りかかって来た。

が

パシッ

僕はその拳を受け止めた。

「一度だけ言う、お前らに少しでも良心が残っているなら、今すぐ彼女に謝罪して、二度と彼女に近づくな。そうすればこの事は黙っておこう」

「良心？そんなもん、はなっからねえよ！」

「そうか……………残念だ……………」

そう言つて、僕は受け止めていた拳を握り潰す。
もちろん骨が折れない程度に。

「ああ、あがあつ」

そしてそいつを投げ飛ばす。

「こいつ、やりやがったな！」

「かまわねえ、やっちまえ！！」

残りの男達がかかつて来たが

「遅い！」

「がはっ!」「ぐふっ」「しはっ!」

もの一分もかからずに相手を気絶させた。

ふと見ると、女性は一瞬の出来事についていけないようだった。

「お怪我はありませんか?」

「は、はい／＼……………」

「そうですね、それではミーティングルームに戻りましょう」

そして僕らはミーティングルームへと戻った。

ミーティングルーム

「あの／＼、さっきは助けをいただいております。ありがとうございます。／＼。そ、それで、私に用って？」

「ある人物からあなた宛にデータを預かってね。ああ申し遅れました、神谷光司と言います。よろしくお願いします、No.2、ドウエーさん」

「っ、なんのことですか？」

僕はいきなり確信を突いたことを言ってみたが、彼女は動揺している様子はなかった。

なるほど、流石にスパイだけのことはある。

「大丈夫ですよ、他の人に聞かれている心配はありませんから。そ

れに、スカリエツティから僕のことを聞いていませんか？」

「.....分かりました、それでは改めて、」

そう言って、ドゥーエさんは顔を変え

「NO.2ドゥーエと言います。まさかあなたが光司さんだったなんて、驚きました。男性の方と聞いていたので.....」

.....
どうやら、僕を女性と勘違いしたらしい.....もうイヤ

「は、はあ.....」

「あ、それでドクターからのデータと言っは.....」

「あっはい、これです」

そうして僕はドゥーエさんにデータを渡し、ある質問をした。

「ドゥーエさん、つかぬことを聞きますが、最高評議会は、もう？
……………」

「いえ……………ドクターの指示があるまで、という事だったので……………」

「そうですね……………なら、このまま穏便にお願いします、最高評議会は僕が何とかしますので」

「はあ、しかしなぜあなたはこんなことを？私たちは管理局にとつて敵のほうですが……………」

確かに、ドゥーエさんの言うことももっともである。
敵からすれば、僕は相当おかしくうつっているだろう。

「僕は実際スカリエッティに会って思ったんです、あの人は根は悪くないと……… だったら、これ以上罪を重ねさせるわけにはいかないって話ですよ、彼の一人の友人として……… それに、ドゥーエさんみたいな綺麗な人が、犯罪に手をそめるなんて間違ってます。僕は、スカリエッティとナンバーズのみんなを救いたいです」

「…………… / / / / /」

ドゥーエさんは僕が話している間、黙って聞いていてくれた。なぜか最後の方で顔が赤くなつたが。

「すつ、すみません長々と。では僕はこれで……………」

そう言って立ち去ろうとするが、

「あつ、あの、まだ助けにいただいたお礼をしません！」

急にドワーエさんに呼び止められた。

「えっ？ああ、お礼なんていいですよ」

「そんなこと言わず、ちょっとじっとしててください」

「は、はい……」

僕がドワーエさんに言われたようにじっとしていると、おもむきでドワーエさんが近づき

チュッ

その瞬間、頬に柔らかいものを感じた。

「えっ／＼／＼、ドウ、ドウーエさん!?!／＼／＼」

「助けていただいて、ありがとうございました。またお会いしたいです。それでは」

そう言い残し、ドウーエさんは部屋を出た。

「い／＼、今のって／＼……………」

「キスでしょうね、間違いなく」

「……………（ポフッ）／／／／」

僕はさっきのことを思い出すだけで沸騰してしまう思いだ。

「……………帰ろうか／／／」

「イエス、マイマスター」

こうして僕は地上本部を後にした。

えっ、例の課長はどうなったかって？

もちろん帰りにちゃんとO H A N A S H I (鉄拳制裁)を
しましたよ。

第27話「多対一と地上本部」(後書き)

AIRS「突然ですが、あとがきコゝナ」

パチパチパチパチ

ドンドン、パフパフ

光司「な、何が始まったんだ？」

AIRS「やって参りましたあとがきコゝナ、第一回の優星君に続きまして、なっぺさんの『魔法少女リリカルなのは』The Fantastic Storyより、吉谷吼太君に来ていただきました！」

吼太「どうも、吉谷吼太です」

光司「こうして会うのは初めてだね、改めて神谷光司です。よろしくね吼太」

吼太「こちらこそ、よろしくお願いします」

光司「ところで、登場した時から気になっていたんだけど……なぜ女装？」

吼太「こ、これはノノ……さ、作者のせいなんですノノ！」

光司「そうか………まだ中学生なのに………大変だな」

吼太「わ、分かってくれますか!?!」

光司「ああ、分かるさ、分かるとも!」

吼太「光司さん！」

光司「吼太！」

ガシッ

そして、ここに男と男の作品を越えた深い友情が芽生えた。

AIR S「え、完全に空気になってますが、あの雰囲気壊したくないのでこれにて失礼します。感想、誤字訂正、その他もろもろ大歓迎です！ではまた次回！」

第28話「正しい選択とは」(前書き)

最近やっと呪縛テストから解放されました。

気付けば一週間もほったらかしでした。

それではどござい！

第28話「正しい選択とは」

????side

ここはとある研究施設。

そこには一人の科学者がいる。

「もうすぐだ……………もう少しで、私の華麗なる復讐劇が始まる……………それには、まず」

白衣を着た銀髪の男は、ディスプレイに同じく
白衣を着た紫の髪の男を映し出す。

「ふっふっふ……………スカリエッティよ、せいぜい君の技術、利
用させてもらおう……………」

その銀髪の男は不適な笑みを浮かべ、その復讐劇へ向けての準備の

ため、ある場所へ足を運ぶのだった。

彼の後ろにいる寡黙な機械人形達と共に。

~~~~~

光司 side

地上本部へ行った日から1日たったが、最近ではなんの動きもない。

スカリエッティは大丈夫だと思うけど、一体何をしているんだろ？

それに、Drクロウも姿を見せない。

(もし、カリムさんの予言が当たるとすれば、もつちよっつとで行われる公開意見陳述会が怪しいかな)



「どうなるかな……………」

僕は少し悪い予感がするものの、時が過ぎるのを待つしかなかった。

しかしこのときの僕は、こんなにも早く事が急転するなんて、思いもしなかった。

~~~~~

スカリエツァイ side

光司が機動六課に戻ってだいぶたったが、私たちは特に動くことはなかった。

正直、管理局の復讐もする気がなくなったので暇をもて余しているところだ。

「暇だね〜」

「そうですね。あれからレリック等の回収もしてませんし……
やることなくしましたね、光司さんが来てから」

「全くその通りだよ。彼に会えなくて、娘達も大分寂しがつてるし
ね。また突然来ないものかね〜」

とすると、侵入者の反応があった。

「『っ!?!?』」

「光司………ではないな、おそらく」

「では一体誰が………」

すると今度は私のいる部屋のドアが突然開いた。

そこにいたのは

「ごきげんようスカリエッティ、会つのは初めてかな……………Dr
クロウだ」

「あ、あなたが……………」

「単刀直入に言おう、私に協力したまえ。私には、管理局への復讐
と言う共通の目的がある、悪い話ではないと思うが……………どうかね
？」

「なるほどそうか、残念ながらDrクロウ、あなたに協力することは出来ないね。私には、ある男との約束があるからね」

「彼とは……………神谷光司のことかね？」

「ああそうだよ、それに彼を見ていると、管理局も捨てたものではないと思うてね……………」

その言葉にDrクロウはかなり驚いているようだった。

「どうしても、と言うのかね？」

「ああ、すまないがね」

「そうか……………」

彼は落胆し、しばらく黙っている。

「残念だよ」

その言葉を聞いた瞬間、私の腹部に激痛が走った。

「がはっ！……………」

「っ！？ドクター！！」

「やれやれ、やはり狙いが甘かったか。まだ改良が必要だな」

彼はポケットから、銃のようなものを取り出し、悠々と改善点を上げた。

「そ、それは……………質量兵器かね?……………」

私はウーノに支えられ、左の脇腹を押さえながら言った。

「違うね。これは言うなれば魔法兵器と質量兵器のハイブリッド……………より強力にしてあるのさ!その証拠に、かすっただけで立てないだろ」

「くっっ!……………」

確かにヤツの言う通りだ。

少しかすっただけなのだが、血が止まらない。

「さて、ここを明け渡してもらおうか？」

「そっ、そんな！……」

（くそっ、ここには私の技術のほとんどがある。それをヤツに利用されては管理局だってかなうまい。何とかしなくては……）

「やはり力づくでやるしかないか……」

「『』……」

もう殺されると思ったその時だ

「『』やれるもの（もん）ならやってみる……」

ギリギリトーレとノーヴェが来てくれた。

「貴様、ドクターを撃つたな!!」

「このやろおお!!」

二人がヤツに向かって行くが、ヤツは顔色一つ変えず余裕の表情で

「やれやれ、無駄だと思うがね……………」

などと言っていた。

が、私はすぐにその意味を知ることとなる。

「『はああああ!!』」

二人がヤツに向かって行くが、ヤツが指を鳴らすとたちまち二人はそれ以上近づけなくなってしまうた。

「くそっ！す、進めねえ！」

「なんだ、一体どうしたんだ！！」

トーレもノーヴェも、自分でも何がなんだか分からないようだ。

「無駄だよ。今私が開発した特殊なフィールドを発生させた。これはある一定以上の距離に近づけないようにする効果があつてね、何人たりとも私に触れることは出来ないのだよ」

そしてトーレとノーヴェは仕方なく距離を取った。

「それに、もうすぐここに私の手駒達も到着する……………諦めた方が賢明だよ」

「くっ……………これまでか……………」

もはや、完全に万事休すだった。

私の状態も、けっこう深刻だと言うことは自分でもよく分かった。

あの厄介なフィールドに加え、ヤツの手駒まで来てはこちらに勝ち目はない。

「さて、覚悟はいいかな？」

今度こそ殺されると思った。

その時

「そこまでだ!!」

声のした方を見ると、そこには彼がいた。

~~~~~

光司 side

僕は急に悪い予感が強くなり、スカリエッティの所に行ってみた。

スカリエッティの部屋に行ってみると、スカリエッティ、ウーノさん、トーレさん、ノーヴェの他に、僕の予感通りそこにはDrクロウがいた。

しかも悪いことに、4人はDrクロウに追い詰められているようだった。

「そこまでだ！」

僕が叫ぶとみんな驚きこちらを向いた。

「Drクロウ、今度こそお前を捕まえてやる！！！」

「やれやれ、そのセリフは何度目だね？それに、君は状況を理解できてないようだ」

「何っ！？」

見ると4人はDrクロウに銃のようなものを向けられていた。

「理解できたかね？君が来たところで状況は変わらんよ。まあ、大人しくここを明け渡すなら、彼らの安全は保証しよう、どうかね？」

「……………本当か？……………」

「本当だとも、私はこれでも嘘はつかない主義でね」

「スカリエッティ、みんなを連れて外へ」

「しかしそれでは、私の技術がヤツに利用されてしまうぞ！それでもいいのか！？」

「……………かまわない」

「そうならば、管理局への復讐も激しさを増すぞ！！私たちを犠牲にすれば、それが減らせる。管理局なら、どちらが正しい選択か分

かるだろ！！」

すると、僕らのやりとりを聞いていたDrクロウが笑いだした。

「はっはっはっは……………いやあ、スカリエツティが管理局の心配をするなんてね、これは面白い。そして君も実に面白い……………まさかこいつらの命を選択するとはね」

Drクロウはあざけ笑うように言った。

その言葉に僕はどうしても我慢ならなかった。

「確かに、大勢を救うには多少の犠牲も仕方ない……………僕の選択が今後どのような結果を招くかも分からない……………この選択が管理局にとって間違った選択なのかもしれない……………ただ、目の前で誰かの命が無くなるかもしれないって言うのに助けないなんて……………僕には出来ない！！！！もちろん他のみんなだって守って見せる。こんな考えが甘いつて分かってるけど……………僕はこの選択に後悔なんてしていない！！！！」

「それが、君の選択か………やはり面白いね君は。だが、君のその選択は後悔することになるだろうがね」

「そしてDrクロウ、貴様は僕がこの手で捕まえてみせる！」

僕は最後にこう言い放ってスカリエッティに肩を貸した。

スカリエッティは出血が多いようで、もはや一人では立てなかった。

「大丈夫か!？」

「あ、ああ。しかし、君と言っちゃつは………」

「しゃべらないで、今は脱出する方が先だ」

こうして僕はスカリエッツィとナンバーズのみんなと脱出した。  
その間Drクローウは言った通り攻撃などはしてこなかった。

しかし外へ出たはいいものの、一つ問題が浮上した。

「しかし、我々はこれからどうする？」

「確かに、私たちは世間から見ればお尋ね者よね……………」

「でもこのままじゃドクターが……………」

そう、ナンバーズ達には行くあてがなかった。

その上スカリエッツィは負傷しているため、早く手当てをしなければならぬ。



まあそんなこともあるつかと

「大丈夫ですよ、皆さん僕の家に来てください。そこでスカリエツ  
ティの手当てと、皆さんをかくまいます」

「『えっ、家！！？？』」

まさかそんなに都合よくいくものかと、みんな目が点になっていた。

そんなわけで

「ここが、僕の住んだ家です！」

「『おおおおおー!』」

僕の家は普通の戸建てで、13人が生活するにはちょっと狭いかもしれないが、生活には困らないと思う。

ナンバーズのみんなは外が初めてなのか、色々アクションが大きい。

「感想は後で、早くスカリエッティの手当てを!」

「は、はい!」

そしてスカリエッティはウーノさんとトーレさんに運ばれて家の中に入った。

「また明日来るから、みんなおとなしくしてるんだよ」

「『はい』」

元気よく返事をして他のメンバーが家へ入っていった。

「やてと……………これからどうなるかな」

僕はスカリエッティを助けた選択に後悔はしてないものの、これから先に若干の不安を抱きつつ空を見上げるのだった。

第28話「正しい選択とは」（後書き）

AIRS「第3回、あとがき」ナ」

光司「はあ、また始まった」

AIRS「やって参りましたあとがき」ナ、第3回はAris hiaさんの「魔法少女リリカル……なんとか！」より暁優さんに来ていただきました！」

優「どうも、暁優です」

光司「しかし優、君はなんか最新話で死にかけてないか？」

優「ああ、と言つかあれは死んでるかもな」

光司「そんなまた悠長な」

優「でも今ここにいるからぶっちゃけ実感わかないけどな」

AIRS「それは言えてる」

二人「はははっ!!」

AIRS「……………ってコラー!、二人して無視するんじゃないよ!今日の議題はこれだ!」

“なぜお前らそんなにフラグを建てるのか!?”

AIR S「全く、どうしてこうホイホイと建てるかな？」

光司「なぜって……」

優「そりゃあ……」

二人「『作者が書いたからだろ？』」

AIR S「う、うん、うん、うん、うん……」

光司「そして……」

優「もう……」

光司「僕たちは、……………」  
優「俺たちは、……………」

二人「『そんなもの、建てた覚えなんてない!!』」

AIRS「え、このままいくとらちがあかないので、これにて終了です。感想等お待ちしております。また、うちの光司を出したい方はお気軽にお申し付けください。それでは次回！」

第29話「ナンバーズの新たな生活」(前書き)

リアルが忙しく、一週間ほどあいてしまいました。

本当は4日に一度くらいにしたいのに………

それではよいね。



## 第29話「ナンバーズの新たな生活」

光司 side

スカリエッティを助けてから一夜明け、僕は再び自分の家（今はスカリエッティとナンバーズのみんなが使っているが）にやって来た。

「みんな大丈夫かな？」

心配しつつ、僕はインターホンを鳴らした。

ピンポーン

「……………」

「……………あれ？」

返事がないのでもう一回押してみる。

ピンポーン

「……………」

「おっかしいな……………」

二回押しても返事がないので、僕は家に入ることにした。

するとドアを開けた瞬間

「はあああああ……！」

「誰かいな……………ええっ、ちよっ…!!……………ぐはっ！」

トーレさんの一撃をお見舞いされた。

「ふう、……………ん？光司じゃないか。どうしたんだそんなところで伸びて？」

「いや……………どうしたって……………やっぱりいいです。それよ  
り、みんなどう？」

「ああ、それなら皆それぞれの場所で寝てるぞ。私とセツテは交代  
で見張りをしてな、不審者が来ないよう見張っていたんだ」

「なるほど……………それじゃあ僕はスカリエッティの様子を見に行  
きます」

「ああ、了解だ」

そして僕はトーレさんと別れ、スカリエッティの所へ向かった。

スカリエッティは使っていなかったベットに寝ていた。

「やつ、元気なっただ？」

「なんだ君か、ああ、大分傷の方も回復してきたよ。これも君のお陰だ」

「回復してきたなら良かった。なるべく早く、もう少し広いところへ移せるようするから」

「いや、それには及ばんよ。私は十分満足しているし、娘たちもここが気に入ったみたいだよ」

「そ、そう……………そりゃあ、良かった……………」

そして僕はスカリエッティの所を後にして、家の中を見て回ることにした。

リビング

リビングに行くと、ほとんどのナンバーズがいた。  
まあ、何人かまだ寝てたけど……………

「あっ光ちゃん、おはよ」

「光司さんおはよ」

起きているクアットロとセインが挨拶してきた。

「二人ともおはよう。」「この生活はどう？」

「そうね、不満って訳じゃないんだけど」

「外に出れないっていうのが、ちょっとね」

（そうだよな、ナンバーズにとって外は初めてだから、色々見てみたいってのもあるよね。でも……………その格好じゃあ……………）

789

ナンバーズはみんなボディースーツなので外を歩かせるわけには行かない。  
歩いた途端通報されてしまう。

「まあ、それは仕方ないかな……………あっそうだ、朝ごはんもう食べた？」

「ただだけど……………もしかして作ってくれるの!？」

「やったあ、また光ちゃんの料理が食べられるのね！」

(え〜っと、まだなんにも言ってないけど、まあいつか)

「それじゃあみんなを起こさなきゃいけないね。で、他の人は？」

「ウーノ姉様はドクターの隣の部屋に、デイエチちゃん、ティードちゃん、オットーちゃんは書斎………だったかしら？ チンクちゃんはもう起きてその辺にいますと思うわ」

「ありがとうクアットロ、じゃあその人達起こしてくるね。セインはそこに寝てるウエンディとノーヴェエをお願い」

「あいよ〜」

僕はウエンディとノーヴェをセインに任じ、ウーノさんの所へ向かった。

## 自室

スカリエツィの休んでいる部屋の隣は、実は僕の部屋だった。

「ウーノさん、起きてますか？」

僕はドアをノックして聞くと、しばらくしてウーノさんがドアを開けて答えてきた。

「はい、起きてますが。どうしました？」

「朝ごはんの準備をしてるので、もう少ししたらリビングに集まってください」



「そうでしたか、では光司さんの朝ごはん楽しみにしてますね」

「はい／＼、ではまた後で」

そうしてウーノさんと別れ、今度は書斎に向かった。

書斎

「ここは僕の家書斎。」

この部屋には大抵の本が揃っている………と言つ位本がある。

そして僕は外側から声をかけてみる。

「ディエチ、オットー、ティード、起きてる？」

「……………」

しかし返事はなく、中から物音もしない。

不信に思いドアを開けてみると、そこには大量の本が山のようになっていた。

「ま、まさか……………この中に?」

そう思って、僕が本の山に近づくと

「……………す……………け……………たす……………けて……………」

「っ…?やっぱりこの中か!」

僕は急いで本を掻き分けて3人を救出した。

「た、助かった」

「一時はどうなることかと思っただよ」

「すみません光司さん、ご迷惑をお掛けして……………」

「いや、3人が無事ならそれでいいよ。それで朝ごはんの準備して  
るからリビングに集まってね」

「あっ、じゃあ手伝っよ」

「同じくです」「私も」

「みんなありがとね。それじゃあここを片付けて準備しに行こうか」

「はい」

そうして4人で本を片付けてキッチンへ向かった。

キッチン

キッチンに着くとまず食材を確認した。

週に一度は家に帰って料理を作っているので、材料がないってことは……………

「ん、無いな……………」

あったのは食パンと少しの食材のみ。

(一般的に言う食材はある方なのだが、料理につるさいマスター  
いわく無い方らしい byザックス)

「仕方ない、サンドイッチでも作ろうか……………」

こうして僕は渋々サンドイッチを作ることにした。

途中、手伝わてくれている3人にも作り方を教えつつ料理を作っていた。

その時なぜか顔が赤くなつてた気がするけど……………気のせいかな。

そんなこんなで料理が完成し、リビングに持っていくとすでにみんな集まっていた。

「それじゃあ、みんな集まったことだし」

「『いただきます』」

みんなで合掌をして食べ始めた。

「うん、相変わらず光司の料理は上手いな」

「今回は、ディエチとオットーとティードも手伝ってくれたんだよ」

「ほうそうなのか、3人ともよくやったな」

(トーレさんが褒めている……………珍しい)

「おい光司、今妙なこと思わなかったか!？」

「いつ、いいえ」

流石トーレさんだ、勘が鋭い。

そんなこんなで食事が終了し、みんなで今後のことについて話すことにした。

「えっと、これからのことなんだけど……………多分みんなは命を狙われているわけではないかと思うから、管理局に見つからないように隠れて生活する……………かな。僕もなんとかしてみるから、それまで頑張つて……………としか言いようが無いけど」

僕が話終わるまで、スカリエッティとナンバーズのみんなは黙っていた。

するとみんなを代表してスカリエッティが話始めた。

「大体の状況は分かった。要は管理局に見つからなければいい、そういう事だろ？ だったら別に隠れて生活することはないんじゃないかね？」

「う、うん……」

（確かにスカリエッティの言うことも分かるが、外に出でもしたら一発で分かると思うんだけど……）

そう思っていると、スカリエッティがある名案を出した。

「普通の服を着れば恐らくばれないと思うがね」

「……………確かにそうか、それならっ！」

「それじゃあ私たち外に出られるの!？」

「本当かよ!？」

「外っス〜」

みんなもう外へ出る気満々である。

「いやまだみんなの服を買ってからじゃないとダメだから……」

「『ええ〜〜』」

「まあ材料も切れてたし、これから買い物に行くからそのついでに買ってくればいいんだけど……ちょっとね」



「なにか問題でもあるのか？」

チンクが不思議そうに聞いてくる。

無論問題大有りだ。

「第一僕は男だし女の子の服を買うなんて不自然すぎるし、女の子の服を選ぶなんてできないよ」

「『そうなのか（んですか）？』」

しかし、この問題はナンバーズのみんなにはあまり理解出来ないようだった。

僕にとっては大問題なのだが……………

「うーん、だったらウーノを連れていけばどうかね？彼女は唯一普通の服を着ているよ」

確かにウーノさんは唯一ナンバーズの中で服を着ている。

しかしこれには危険も伴う。

「でも、いいんですかウーノさん？」

僕は期待しないで聞いたが

「はい、構いませんよ。妹達のためですから」

あっさりOKだった。

「それじゃあ、ウーノさんよろしくお願いします」

「はい、こちらこそ」

そんなわけで、僕はウーノさんと一緒に買い物に行くことになった。

~~~~~

inデパート

ウーノside

私は今、光司さんとデパートに買い物に来ている。

でも何だか回りの視線が変な気がするのは気のせいかしら？

気になって光司さんに小声で聞いてみた。

「光司さん、何だか回りの視線が変な気がするんですけど……指
差している人もいますし……」

『ああ、それはウーノさんが美人さんだからじゃないですか？』

「えっ！？／＼／＼／」

私は思いもよらない返答に声をあげてしまった。
回りの人も少し驚いていたようだった。

「ウーノさん、顔が赤いんですけど大丈夫ですか？」

「は、はい／＼、大丈夫です／＼……………」

(何なんだろうこの気持ちは……………私は戦闘機人のはずなのに……………)
……………)

私は自分でもよく分からない思いに戸惑いを感じながら、光司さんとの買い物続けた。

~~~~~

その他大勢 side

ここからは先ほどの回りの人の声を実況したいと思います。

「あれっ、あの人がどっかで見たことが……………」

「ほらっ、あの人がよ、紅蓮の騎士の人よ！」

「あの人か！でも隣にいる人は誰だろうか？」

「ずいぶん綺麗な人ね、彼女かしら？」

「いやでも、あの人が彼女はいないって話らしいわよ」

「管理局の職員の人も、何人が告白したらしいって話もあるわよ」

「てことはあの方は管理局の人かな？」

「いや、でもあの服装は違つたら」

「『うん、一体誰なんだろう（なのかしか）？』」

光司の言ってることも間違つてはいなかったが、実はナンバーズより光司の方が目立ってましたとさ。

そして、この噂が後にとんでもないことになってしまつとは……………

~~~~~

光司 side

僕とウーノさんはデパートである程度の食材を買つた後、女性物の服売り場に来た。

「それじゃあウーノさん、僕はこの辺で待ってますから。終わったら声をかけてください」

「えっ、光司さんも一緒に選んでくれるんじゃないんですか？」

「ええっ／＼、僕てつきりウーノさんが選んでくれるものだ……
…それに、僕なんかを選んでいいんですかね／＼？」

「はい、その方が妹達も喜ぶと思いますよ」

「そ、そうですか／＼……じゃあ／＼……」

そんなわけで、僕はウーノさんと一緒にナンバーズの服を選ぶことになった。

のだが………

「うん、難しいな。どんなのがいいのかな」

さっきから、迷ってばかりでなかなか決まらない。

それで

「光司さん、こっちなんかどうですか？」

「いいですね、それにしましょうか」

と、こんな感じでほとんどウーノさん任せになっている。

そうして全員分の服を買って、僕達は家に戻ることにした。

そして、家の近くにつく頃にはもう夕方になっていた。

「すみませんウーノさん、今日一日買い物に付き合ってもらって、その上荷物まで持ってもらっちゃって」

「そんな、こちらこそ。私たちのためにここまでしていただいて、本当にありがとうございます。それに今日一日、光司さんと一緒に買い物できて嬉しかったです」

「そ／／／……そうですか／／／……」

ウーノさんが言うには、その時の僕の顔は夕日のように真っ赤だったと言っ。

「はっ／／、早く帰りましょう／／！」

「はい」

そうして僕達は家に着いた。

光司家

「ただいま」

「『おかえり』」

するとみんなが出迎えてくれたが、待ちきれないのか数人が押し寄せてきた。

「それで光司さん、服はどうなったの!?!」

「服っス」

「これで外に出でも大丈夫なのだな!？」

「さっさと出せよ!」

「こらノーヴェ、少しは落ち着け。そんなにしては光司も服を出せ
まい」

「でも服早くみたいな」

「そうそう、なんたってウーノ姉様と光ちゃんが選んでくれたんで
しょ」

「いや、みんな……近い……」

現在、玄関は服を見たいセイイン、ウエンデイ、チンク、ノーヴェエ、そしてそれを止めようとするトーレさん、後から出てきたディエチ、クアットロなど、たくさんの人で溢れてしまった。

僕はなんとかこの場をなだめてみんなをリビングに集まらせた。

「それじゃあ、みんなに服を渡すよ」

そうして僕はナンバーズそれぞれに服を渡していった。

さながらプレゼントを渡すよサンタクローズみたいだった。

そして全員に配り終わると今度は

「お腹減ったっス」

「朝しか食ってねえしな」

「確かに、腹が減ったな」

「ご飯、ご飯」

「(コクコク)」

「ご飯をねだる始末である。」

「ああ分かったから、しばらく待っててね」

「はい」

こうして休む暇なくご飯を作ることになった。

ちなみに、朝手伝ってくれた3人がまた手伝ってくれた。

どうやら、ナンバーズの中での料理担当はこの3人だな。

と言うわけで、僕は3人に料理を教えつつ進めていった。

そしてほどなくして、料理が完成した。

が、よほどお腹が空いていたのか、料理はあっという間に無くなっ
た。

と言うか、ノーヴェが食べすぎなような……………

そんなこんなで僕は機動六課に戻ることにした。

前回、見送られて後ろ髪引かれる思いがしたので、今回は内緒で出ていく。

がしかし、一人の声に呼び止められた。

「光司、ちょっといいかね？」

案外その声はスカリエツティだった。

「何か用？」

「光司、用心することだ、Drクローウは強敵だよ。今の管理局じゃ、太刀打ちできないほどね……………」

彼の目は真剣である。

それこそ、犯罪者と思われたいぐらいに……………」

「忠告ありがとう。もしもの時は、僕一人でも戦ってやるぞ」

「ふっ、君はまったく……………死ぬなよ」

「……………ああ、約束だ」

そして僕は機動六課へと戻った。

友との約束を胸に刻み。

第29話「ナンバーズの新たな生活」(後書き)

今回は機動六課に戻って、フォワードの強化です！

多分短めになると思うので、早めにいけるかな？と思います。

それでは、感想お待ちしています。

第30話「フワード特訓」スバル、ギンガ編」(前書き)

今回は割りと短めです。

何人かに分けて書いていきますのでよろしくお願いします。

それではどござー！

第30話「フォワード特訓」スバル、ギンガ編」

光司 side

昨日のナンバーズとの一時から数日たった日、僕はいつものように訓練を始めようとするが、僕はある言葉を思い出す。

「今の管理局でもかなわない……………か……………隊長陣は心配ないにしても、やっぱりフォワードのみんなはまだまだ心配だな」

818

そうして僕はある決意をする。

「よし……………フォワードの強化だな」

こうして僕とフォワードの強化期間が始まったのだった。

~~~~~

ティアナside

私たちはいつものように朝練と朝食を終え、訓練のため訓練場集まった。

すると兄さんから話があるらしい。

いったい何だろう？

と知っている兄さんが喋り始めた。

「え〜つと本当に悪いんだけど、今日から数日間フォワードの強化をしたいので、今日からフォワードのみんなの訓練はすべて僕が見ます」

「『は、はあ……………』」

突然の兄さんの宣言に私達は頷くしかなかった。

(でも一人で見るって………兄さん大丈夫なのかな?)

「見るのはティアナ、スバル、エリオ、キャロ、ギンガ、この5人だよ。強化の内容はそれぞれで違うけど、それぞれに必要なだと思っただけだから、よろしくね」

「『はい!』」

するとここでのなのはさん達の方から手が上がった。

「あの〜光司君、フォワードを見てくれるのはいいんだけど、どうして今なの?」

確かに、いくら兄さんでも言うことが突発すぎる。

これには何か深い理由があるに違いないと思った。

けど

「それはですね……………僕の勘です」

「『は?????』」

「いやあ何となくなんですけど、嫌な予感がするんですよ最近。なので急遽こんな形をとらせていただきました」

「そ、そうなんだ……………」

あまりの兄さんの意外な答えになのはさんも言葉が出ないようだった。

「それじゃあまずは、スバルとギンガからやろうかな、その間他の

みんなは準備運動なんかをしててね、けっこうハードだと思うから

「『は………はい』」

何が始まるか分からないけど、兄さんの特訓が始まった。

~~~~~

ギンガ side

私とスバルは急遽光司さんの特訓を受けることになって、今光司さんをまっついているところ。

「何なんだろうねギン姉、しい兄の特訓って？」

「さあ？、私にもよく分からないけど、間違いなくハードだったことは確かだね」

「あはは、それ言ってる……………」

すると向こうから光司さんがやって来た。

なぜかリミットブレイクを発動して……………

「やあ二人とも、準備は出来てるね？」

「まさかしい兄……………」

「模擬戦ってことですか……………」

「いやそうじゃないよ、今から教えたい技がリミットブレイクした方が見せやすいからね」

「『そ、そんなんだ（ですか）……………（よかった）』」

私もスバルも内心ほっとした。

「それじゃあ見ててね……………」

そう言うと光司さんの腕に魔力が集まっていき真っ赤になった。

「はああああ、剛熱、爆炎拳!!」

すると轟音とともに魔力、が解放され赤い衝撃波が放たれた。

見ると光司さんの回りが少し焦げている。

「『……………』」

「つとまあ、こんな感じなんだけど、これみたいな技を二人に教えたいと思うんだよ……………どうかな?」

「いや、どうしようより……」

「私達にできるのでしょうか……」

「ああそれは大丈夫、コツさえつかめば誰でもできるよ。それじゃあ早速、第一段階からやってみよう」

「『はい！』」

「第一段階は手に魔力を集めること、形としては集束形の魔法かな。それじゃ、やってみて」

しかし、いざやってみると

「あれ？集まらないよ〜」

「た、確かに……………以外と難しいわね……………」

なかなか手だけに魔力を集めるのは難しかった。

しかしスバルはディバインバスターを撃てる分集束形の魔法はなれているらしく、少しづつ魔力が集まっていった。

すると出来ない私を見かねてか、光司さんが近づいてきた。

「ああギンガ、そうじゃなくって……………ちょっとごめんね」

ピ
ッ

「はえ！？／＼……………あの、光司さん！？／＼」

光司さんは私の手の甲に手を添えてきた。

「嫌と思うけど、ちょっとだけ我慢してね。魔力を集束するイメージは球体を……………」

「い、いえ／＼、嫌だなんて／＼……………その／＼、むしろ嬉しいくらいで／＼／＼……………」

恥ずかしさのあまり私は光司さんの説明をまともに聞けなかった。

しかし次やってみると、不思議と形になりかけていた。

（やっぱり光司さんのおかげかな／＼）

するとスバルが

「ギン姉だけずるい。私にもやってほしい兄」

「ん？ああ、いいよ」

今度はスバルの手の甲に手をのせた。

「えへへ／＼／＼」

「どうしたのスバル、そんなに笑って？」

「別に、何でもないよ」

こうして光司さんの助力もあって、私とスバルは何とか手に魔力を
ぼんやりと集められるようになった。

「じゃあ次は手の魔力を圧縮するんだけど、これは二人だけで出来るかな。僕は他のフォワードの方に行くから、またしばらくしたら来るよ」

「』はい、ありがとうございました」

「それじゃあ二人とも頑張っ
てね」

そう言っ
て光司さんはティアナ達の方へ戻っ
ていった。

「……………光司さんの手／＼／＼……………（ほわぁ〜ん）」

「ギン姉？、ギン姉……………ダメだ、しい兄のことで頭が一杯
みたい。まあ気持ち分かるけど……………」

そして私たちは、しばらくの間手の魔力を圧縮させる訓練を続けた。

第30話「フォワード特訓」スバル、ギンガ編」(後書き)

え、私AIRSは大変悩んでおります。

と言うのも、主人公のイメージ画をかいてみたのですが、どうやって自分の小説に載せたらいいのか分かりません。

小説は携帯で投稿していて、現在パソコンはありませんので携帯の画像を載せることが出来ません？

どうかよい考えをお持ちの方は是非教えてください。
心からお願ひします。

第31話「フワード特訓」エリオ、キャラ編」(前書き)

前回に引き続き、エリオとキャラの特訓です。

それではどしどしー！

第31話「フォワード特訓」エリオ、キャラ編」

光司 side

僕はひとまずスバルとギンガの特訓を終え、ティアナ達の方に戻って来た。

「それじゃあ次はエリオとキャラいこうか」

「『はい!』」

すると、何だかティアナがっかりしたような表情をした。

「ごめんねティアナ、もうちょっとだけ待ってて」

そう言っつて僕はティアナの頭を撫でる。

今度はティアナの顔が赤くなった。

「はい／＼／……………待ってます／＼／」

「うん、本当にごめんね。それじゃ、いこうか二人とも」

「『はい…!』」

そうして僕はエリオとキャロを連れ訓練場所へ向かった。

~~~~~

エリオside

スバルさんとギンガさんに続いて、今度は僕とキャロが兄さんの特訓を受ける番だ。

「いったいどんな訓練なんだろう？」

「じゃあ先ずはキャロから、キャロには僕のフォースフィールドを教えたんだ。フィールド系のバリアはやったことがあるかな？」

「い、いいえ……あんまり」

「そっか、フィールド系のバリアは全身に魔力を行き渡らせる感じでやるんだよ。ちょっとやってみて」

「はい」

「あの、兄さん僕は？……」

僕はたまらず兄さんに聞いてしまった。

「エリオには……………」

「ぼ、僕には……………」

兄さんが言うのをためらっている。

きつと相当きついんだろっ……………

すると兄さんが思い口を開いた。

「エリオには……………僕と鬼ごっこをしてもらっっっ!!」

「……………はえ？」

僕は兄さんのあまりにも意外な答えにすっとなきような声を出した。

（お、鬼ごっこで、あの鬼ごっこ？遊んでる場合じゃないと思うんだけど）

「エリオに教える技はスピードが最も重要なんだ。だから鬼ごっこでスピードと体力をつける。あそれと、ただの鬼ごっこじゃないからね」

「と、言いつつ？」

「この鬼ごっこは逃げるときも追いかける時も、エリオはソニックムーブで動くこと」

「ええ！？……は、はい」

「じゃあ今から僕が10数えるからその間に逃げてね。逃げていいのは、六課の敷地内ならどこでも可。それじゃあ………スタート！」

「ソニックムーブ」

兄さんの合図と同時に僕はその場から消えた。

~~~~~

光司 side

「8……………9……………10、よし追いかけよう。それじゃあキヤロ、コツをつかんだと思ったら、念話で呼んでね、キヤロはこっぴいっ系得意だと思っからすぐできるよ」

「はい、お兄ちゃん」

「フラッシュムーブ」

そして僕はその場を去った。

(そう遠くへは言っていないと思うから、まずは近場からがしてみるかな)

そして僕は六課の隊舎に来た。

「うーん、ここにはいなかったか。どこへ行ったのかな？」

すると向こうからはやてさん、シグナムさん、ヴィータがやって来た。

「あつ光司君、こんなところでなんしてるん？」

「エリオと、ちょっと鬼ごっこを」

「『鬼ごっこ！』」

「遊んでる場合じゃねえぞー！」

「まあ待てヴィータ、光司には考えがあるのだから」

「ただの鬼ごっこじゃないですよ。移動手段は全てソニックムーブですから」

「『……………』」

すると三人とも固まってしまった。

何か変なこと言ったかな？

「それでは、僕はこれでっ！」

そう言っつて、僕は三人と別れた。

なんか去り際に

『それは鬼ごっこと違うで……………』
「エリオ……………頑張れよ……………」

見たいな声が聞こえた気がするけど、気のせいだよな。

そして僕は次の場所へ向かった。

スバルやギンガがいるところ
訓練場所

エリオを探すがてら、スバルとギンガの様子を見ようと二人の方へやって来たら、疲れきったエリオがそこにいた。

「はあっ……………はあっ……………っ、疲れた」

「大丈夫エリオ君？」

「まあしい兄と鬼ごっこはきついよね。しかもソニックムーブだけって……………」

二人はエリオに同情しているようだった。

（そ、そんなにきついことだったのかな……………なのはさんの教導に比べればまだ優しいと思うんだけどな）

そう思いつつ、一瞬でエリオのところまで行き

「はい、タッチ」

「兄さん!？」

「しい兄!？」

「光司さん!？」

「まあエリオはまだまだ成長期だから、一気にソニックチームの使用時間が長くなるとは思わなかったけど、今の時点でここまで出来るのは驚いたよ」

エリオを探して約5分、その間エリオはほとんどソニックチームで探していたことになる。

さすがにこの事には僕も驚きを隠せなかった。

「じゃあ第1段階はオツケーかな。スバルとギンガの方はどう？」

「はい、なんとか二人とも手に集められるようになりました」

「そっか、なら第2段階へいこうかな。それじゃあ手に魔力を集めた状態でリボルバーナックルを回してみて」

「『はい！』」

しかし僕はこの発言にすぐに後悔することとなる。

リボルバーが回り始めると、当然手に集めた魔力も同時に回ることになる。

そうなれば、魔力が遠心力により外側へ飛び出そうとするので……

……

「ええっ！？ちよっ！！」

「せ、制御が……ああ！」

ドカ〜〜〜ン

遠心力に耐えきれず魔力が暴発してしまった。

爆発が目の前で起こったスバルとギンガが無事なはずもなく……

「ゲホッ、ゲホッ………ひ、ひどい目にあつた」

「ゴホッ………まさか、こんなに難しいなんて」

二人とも少し焦げてしまった。

「あははっ、まあ最初から出来るとは思ってなかったけどね。まずはゆっくり回してみるといいよ」

「『そ、それを先に言ってよ（下さいよ）〜』」

するとキャラ口から念話 came。

(お兄ちゃん、なんとか出来ました！)

(おっ、早いね。分かった、今そっちへ行くよ)

(はい)

「それじゃあ僕とエリオはキャラ口のところに戻るから、二人とも引き続き頑張ってね」

「『はい』」

そして僕はエリオを抱き抱えた。

「に、兄さん!？」

「エリオ、いい機会だから、本当の早さってやつを教えてあげるよ。どのみち、今は疲れちゃってソニックムーブできないでしょ」

「た、確かに……」

「じゃあ……いくよっ……」

「フラッシュムーブ」

そうして僕らはその場から一気にキャロのところへ向かった。

~~~~~

スバルside

私達が特訓の第2段階に進むとキャロから念話に来て、しい兄はキャロのところに戻るようになった。

するとしい兄はおもむろにエリオを抱き抱えて

「フラッシュムーブ」

「『きつ、消えた!?!』」

しい兄はエリオを抱き抱えたまま、文字通り一瞬で消えるように行ってしまった。

「ギン姉、しい兄……………消えた?」

「いや、多分瞬間的に移動したんだと思うけど……………見えなかったわ……………」

「しい兄って、いったい何者?……………」

「さ、さあ?……………」

私達はしい兄のすごさに啞然とするばかりでした。

~~~~~

キャロ side

私がお兄ちゃんに念話で話して少したった時、急に誰かが現れた。

「やつキャロ、お待たせ」

「えっ、お兄ちゃん!？」

見るとエリオ君を抱えたお兄ちゃんが立っていた。

よく見るとエリオ君が目を回している。

「ん、どうしたのキャロ、そんなに見つめて？」

「あのお兄ちゃん、エリオ君が目を回しちゃってるんだけど……」

……

「あぁっ！エリオ、大丈夫か！？」

「は、早すぎ……兄さん……」

「ごめんエリオ。ちょっと休んでて」

そしてお兄ちゃんはエリオ君を少し遠くに連れて行って戻ってきた。

「じゃあキャロ、早速やってみて」

「はい！」

そうして私は全身に魔力を行き渡らせる。

すると弱々しくもピンク色のオーラが私を包んだ。

「う、こんな感じ……でしょうか？」

「うん。いい感じたよ、キャロ。そうしたら、その状態で動いてみて」

お兄ちゃんに言われて動いてみるけど……

「う、動きにくい……」

全身に魔力を行き渡らせているのでけっこう動きづらい。

「それじゃあ次からはその状態で動く訓練かな。違和感なく動けるまでだよ」

「は、はい……」

どうやら、私の特訓はここからが山場のようです……

~~~~~

光司 side

僕はキャロの特訓が一息ついたところで、エリオの様子を見に行っ  
た。

すると近付くと同時にエリオも起きた。

「エリオ、もう大丈夫？」

「は、はい。なんとか」

「じゃあ特訓の第2段階へいくよ」

「はい！」

「第2段階は、エリオ特有の魔力変換資質‘雷’をストラーダに帯電させること」

「はい！」

「これは、なるべく強力に帯電させた方がいい。出来るかい？」

「や、やってみます」

そうしてエリオはストラーダに帯電させようとするが、まだ‘パチパチ’としかならなかった。

「まあ次はこれを練習してみてください。僕はティアナのところに戻るから」

「はい。ありがとうございました」

そして僕は最後にティアナの特訓をするため戻っていった。

第31話「フワード特訓」エリオ、キャロ編」（後書き）

次回はいよいよティアナです。

最近ティアナがツンデレじゃなくなっているような……..  
頑張ります。

第32話「フォワード特訓」ティアナ編」（前書き）

今回はティアナのターンです。

でも内容は特訓と言っよりお話です。  
それも結構真面目な。

それではどうぞー！

第32話「フワード特訓」ティアナ編」

ティアナside

いつまでたつても兄さんが来ないので、一人で自主練していると、ようやく兄さんが来た。

「ごめんティアナ、遅くなったね」

「本当、待ちくたびれちゃいました!」

「ごめんごめん」

そして兄さんは私の頭を撫でてくれた。



これをされると、どんなことでも許してしまふ。  
兄さんずるい／＼

「それじゃあ、訓練始めようか」

「はいっ!」

「ティアナにはこれをやってもらおう」

そう言って、兄さんは魔力でできた直径15センチ位の球体を出した。

「これで何を？」

「これは攻撃を受けると速度が上がる仕組みでね、ティアナにはこれをいろんな状況で撃ってもらおう。状況把握と射撃の正確さ、あと弾丸の威力向上や連射力を鍛える訓練だよ」

「な、なるほど……」

（流石兄さんだ……私のスキルに適しかつそれを鍛える訓練方法……自分なりに自主練はしてたけど、こんな思い付かなかった）

私は兄さんの指導に改めて驚かされた。

私もこんな風に強くなれるのかな……

あの時兄さんにはああ言われたけど、実際強くなっているのか不安になることもある。

「あの兄さん、私……もっと強くなれるでしょうか……」

すると兄さんは笑った顔で

「大丈夫、ティアナはティードさんの妹なんだから、絶対強くなれるよ！」

「はっ、はい！..」

こうして、いよいよ私の特訓が始まった。

~~~~~

光司 side

ティアナの特訓が始まってしばらくたった。

ティアナは順調にスピードを上げて正確に撃っていった。

正確さで言うならティードさん以上と言えるものだった。

「よし、一旦終了しよう」

「は、は..」

「しかしティアナはすごいね。まさか、これほどの正確さとは思わなかったよ!」

「あ／＼、ありがとうございます……………」

「何だかティアナの顔がちょっと赤い。

疲れちゃったかな？」

「あの、ちょっと聞いてもいいですか?」

「答えられるかどうか分からないけど……………いいよ、言ってみて」

「はい、ティータ兄さんはどんな風に戦ってたんですか?」

「うん……………ティードさんのポジションは、ティアナと同じセンターガード。ティードさんは、的確に状況を把握して仲間に指示を出しつつ、全線や後方の援護もしてた。戦い方は……………そうだな、今のティアナとは逆かな」

「逆？」

「そう。ティードさんは一発一発の威力が凄かった。それこそ、状況を变えるほどにね。ティードさんがいれば、それだけで心強かったよ」

「そう……………ですか……………」

ティアナは少し落ち込んだ表情だった。

自分の兄について知ることが出来た反面、兄と今の自分を比べて自分の弱さを嘆いているのだろう。

「でもねティアナ、スバルやエリオやキャロにとって、君はとても心強い存在だと思うよ」

「えっ？」

「それだけじゃない。みんなもティアナを頼れる存在だと思って
いるよ。無論、僕もね」

「……………」

「だからティアナ、そんなに自分を卑下することはないんだよ。テ
ィアナにはティアナの強さがあるんだし、まだまだ強くなれるから
ね」

「は、はい／＼／……………あの、もう一つ聞いてもいいです
か？」

「今度は何？」

「兄さんは、どうしてそんなに強くなるうと思っただんですか？」

「それはね……………強くないと、大事なときに、大切な人を守れないからさ……………」

「守れない？」

「うん……………僕は今までで大切な人をたくさん失ってしまった。僕を産んでくれた両親と兄弟……………中学まで僕を育ててくれた叔父と叔母、管理局に入ったばかりの頃お世話になったティードさんやゼストさん……………みんな僕をおいてしまった。……………その時、もっと僕に力があれば、そうならなかったかもって思ったよ」

「でもそれは……………兄さんのせいじゃ……………」

「それは、分かってるつもりなんだけどね。やっぱり思っちゃうんだよ。……………だから僕は、もう二度と大切な人を失わないように、

大事なときに守れるように、強くならなくちゃいけないんだ……」

~~~~~

ティアナside

私はひよんな事から兄さんの強さに対する思いを知ってしまった。

兄さんの気持ち、なんとなく分かる気がした。

でも兄さんの話が聞けたのは良かったんだけど……

「……………」

「……………」

（どうしよう、何だか気まずい雰囲気になっちゃった。せっかく兄さんと二人きりなのに、何にも話題がない。でも私から質問し



ちゃったし……また私からって言うのも………)

私が心の中であーだこーだ思っていると、この雰囲気をぶち壊してくれる(いい意味で)やつが来た。

「しい〜〜 兄〜〜」

「『ス、スバル!?!』」

見ると嬉しそうに手を振りながらこっちに近づいてくるスバルだった。

あとから追うようにギンガさんも来ていた。

そしてエリオとキャラロも………ってみんな来たわね。

「どうしたのスバル？」

「さっき失敗したやつ、成功しそうだからしい兄に見てもらおうと思っ—!」

「すみません光司さん、スバルが言うこと聞かなくて」

「『面白そうなので、僕（私）たちも見に来ちゃいました』」

「そ、そうなんだ……………」

まったく、スバルはいつもこうなんだから……………まっ、今回は助かったけど。

「それじゃあしい兄、見ててね！」

「うん、やってみて」

するとスバルのリボルバーナックルの回りに青い魔力の渦が出来始め、段々とその回転スピードを上げていった。

そして回転スピードが上がるにつれ、スバルの回りの砂や小石が舞い上がる。

(すごい……スバルのやつ、いつの間に)

人目見るだけで、今までのスバルの技とは全く違うものだと言つて  
とが、私にも容易に想像できた。

「すごいねスバル、驚いたよ!」

「えへへっ」

「あつ、でも途中で気を抜くと……」

「ほえっ?」

その瞬間、スバルの回りで爆発が起こった。

幸い、私たちは兄さんが張ったバリアで大丈夫だったけど、スバル

は……

心配になって兄さんの方を向くと、兄さんは笑顔でスバルの方を指差した。

「ゲホツ……………くっそ〜、また失敗だよ〜」

そこには顔やバリアジャケットが黒焦げになっても、いつもスバルがいた。

「まったくあなたは……………心配させるんじゃないわよ!!」

ポカッ

「痛いよティア〜」

「うるさいっ！バカスバル、あんたはいつもいつも!!」

私はスバルを怒ると同時に、口を引つ張り上げた。

「ふいやゝ、ゆふひいふえゝ（ティアゝ、許してゝ）」

「いやダメよ！こんな危ない技なら最初から言いなさいよ！兄さんがバリアを張ってなかったら私たちまで黒焦げじゃない！！」

「だからごめん」

「だいたいあなたはね、周りのことをもうちょっと考えて行動を…」

~~~~~

光司 side

スバルが新しい技を失敗してからしばらくティアナが起こり続けている。

……そろそろ止めようか。

「もういいんじゃないかなティアナ。スバルも反省してるみたいだし」

「まあ……………兄さんが言うなら……………まったく、気を付けなさいよスバル!!」

「分かってるよティア」

「それじゃあティアナ、特訓に戻るっか？」

「はいっ!!」

そうしてティアナの特訓に戻ろうとすると……………

「あつ、あの光司さん／＼……………私もいいですか？」

「あつ、ぼ、僕も」

「私も、いいですか？」

スバルに続いてギンガやエリオやキャロまで見てほしいと言いだした。

「なっ、何言ってるの／＼！！今度は私の番なんだから！」

そう言っただけでティアナは僕の腕をつかんで向こうに引っ張る。

「ティアナ、ちょっとだけだから、ね？」

「ダメです！」

「あの……………僕の意味は聞いてないのかな……………」

何だかんだでフォワードにも意見が通らない僕でした……………

悲しいな。

第32話「フワード特訓」ティアナ編」(後書き)

次回は光司が*****なことになります！

第33話「つかの間の平和」(前書き)

今回はなのは達とのお出かけ編です。

最近なのは達出してなかったの……

それではどうぞー！

第33話「つかの間の平和」

光司 side

僕はここ最近フォワードの特訓を集中的にやった。

おかげで個々の技も完成しつつあり、心なしかフォワードのみんなが少し頼もしく見えてきた。

そしていつものようにフォワードの訓練を見ていた、そんなある日

「神谷二等空佐、至急部隊長室までおこし下さい」

「部隊長室に？何の用だろう、ちょっと行ってくるね、みんなはそのまま続けてて」

「『はいっ—』」

そうして僕は部隊長室へ向かった。

しかしこの時の僕は、この先の事など知るよしもなかった……………

部隊長室

「失礼しまゝす、何か……………」

僕は部隊長室のドアを開けたとたん、言葉を失った。

なぜなら、なのはさん、フェイトさん、はやてさんが3人とも不思議なくらい笑顔だからだ

何だか逆に怖い……………

「まあ光司君、そこに座りや」

「は、はい………」

僕は言われるがまま近くのソファへ座る。

それと同時になのはさんとフェイトさんがドアを閉めて僕の近くへ立つ。

どうやら僕に逃げ場は無いようだ……

「ほんなら光司君、本題に入るか」

「……………（コクッ）」

僕は無言のまま頷いて答えた。

いったいどんなことを話されるのだろうかと、心配でならないが……どうやら覚悟を決めるしか無いようだった。

そしてはやてさんが話しはじめた。

「光司君正直に答えてな……………光司君は、誰かと付き合っ
とるん？」

「……………は？」

ただそれだけだった。

突然のはやてさんの質問に対して出た言葉は本当にそれだけだった。

「言ってる意味がよく分からないんですが……………」

すると今度はフェイトさんが話しはじめた。

「今局で噂になってるんだよ、光司が綺麗な女の人と付き合ってるって言う噂が。光司私たちには彼女はいないって言ってたから、その真意を確かめたくて」

「な、なるほど……………」

(いつの間にそんな噂が広まったんだろう。第一僕は付き合ってもいないのに……………)

「でも、その噂って本当なんですか？」

「実際、休日に光司君と綺麗な女の人がデパートで買い物してたり、女物の服と一緒に選んだり、楽しそうに一緒に歩いてる姿を見たって人がいるらしいよ。彼女でもない限り、光司君が女の人とそんなことしないよね」

突然なのはさんが冷静に答えた。

ん？それって……………

(ひよっとしてウーノさんのことかな。確かにこの前の休みに一緒に買い物したり、女物の服を選んだりしたけど……………彼女じゃないよな。でも、本当のことを言う訳にもいかないから……………)

「『で、びつなの(なんや)！本当なの(なんか)！……』」

3人がすごい勢いで迫ってきた。

これは嘘でも答えるしか無い……………

「たつ、ただの友人ですよ。たまたまデパートで会ったんで買い物に付き合わされて、家まで荷物持ち去れて……………断れなかつたんです」

(ど、どうかな……………)

「『ふうんそうなんだ(なんや)、へえ……………』」

3人ともまだ疑いの目だが、なんとかなったようだ。

(ふう、危ないところだった)

「それじゃ、僕はこれで……………」

と、僕が部屋から立ち去ろうとすると、出来なかった。

なぜかって

それは

「『話はまだ終わって無いよ（へんで）！……！』」

「はっ、はい！」

3人のすさまじい威圧感に圧倒され、その場を動くことが出来なかった。

だって怖いもん……………

3人はさっきよりも威圧感をまして聞いてきた。

「光司君、最近ティアナやスバルやギンガとすごく仲がいいみたい

だね……」

「エリオやキャロも、最近光司のことばかり話してるよ……」

「うちらと言つものがありながら……」

（うーん、話が読めない。いったい何を言いたいんだろうか……）

僕は考えてもしょうがないので直接聞いてみた。

「あー、どづいことですか？」

「『しまじ』」

「しまじ……？」

「『フォワード』ばかりじゃあなくて……」

「……………は？」

またまた僕は分からなくなってしまった。

フォワードばかり、訓練のことかな？

でもそれは仕方ないことで……………もしかしたらなのはさん達も訓練したいのかな？

うーん、どうなんだろう？

「で、僕にどうしろと？」

と聞くと、3人とも顔を赤くしてしまった。

「その／＼／……………」

「えっと／＼……………」

「あぁっ、もう面倒や／＼！！光司君、今日一日、今からお休みや！
！そんでじつちらに付き合ってもらっつで／＼！！！」

「えっ！？それはっ」部隊長命令や！」「あ……………はい」

なぜか部隊長命令で今日一日なのはさん達に付き合っことになってしまった。

僕の返事を聞くと3人ともすごい笑顔になった。
どうやらこれでよかったようだ。

しかし、大変なのはこの後だと言うことに僕は気付かなかった……
……………

~~~~~

なのはside

私たちは、はやてちゃんの提案で光司君と一緒にクラナガンに買い物に来た。

光司君と一緒に買い物なんて久しぶりなの

なんだか懐かしいな、なんて思っているよ

「えいつ」

「フェノ、フェイトさんノ、何してるんですかノノノ!?」

「だって懐かしくって」

フェイトちゃんが光司君に抱きついたので。

「う、ずるい！私もっ」

「なっ、なのはさんまでノノ!?」

「えへへっノ」

「なのはちゃんフェイトちゃんずるいー！うちま」

今度ははやてちゃんが抱きついたの。

「はやてさんまで／＼……………誰か助けて……………」

「『あははははっ』」

なんだか、これから楽しくなりそうなのー！

~~~~~

光司 side

僕はなぜだかなのはさん、フェイトさん、はやてさんと一緒にクラナガンのショッピングモールに来ている。

まあ来たからには一緒に買い物をするわけだけど………どうしてこうなったのだろうか。

「『ねえ、この色似合うかな?』」

3人があるものを持って、一度に僕に聞いてくる。

うくん、聞いてくるのは構わないんだけど………なぜ下着なの／＼／

そうあるものとはズバリ下着のことだ。

ちなみに、なのはさんはピンク色、フェイトさんは黒色、はやてさんは薄い青色の下着をそれぞれ持っている………って、何言っているんだ僕は／＼!!

「そ／＼、そういうのは僕には／＼／………」

「『ダメなの（なんか）?』」

「うっ／／………」

3人とも上目遣いで頼んでくる。

こ、断れない／＼

「じ、じゃあ／＼……………その……………似合ってるんじゃないですか／＼と言うか、3人とも綺麗なんですからどんな色でも似合うと思うんですけど／＼……………」

「『ふえ／＼？』」

3人とも赤面して同じ声を上げた。

「そ、そうかな／＼……………」

「光司が言うなら／＼……………」

「ほんなら／＼……………買ってくるわ／＼……………」

「そ、それじゃあ僕はトイレにでも行ってますね／＼／＼！」

そして僕は話を切り上げトイレへ逃げ込んだ。

男子トイレ

「は、恥ずかしかった／＼」

「マスター、大丈夫ですか？」

「あ、ああ……………なんとかね」

「しかしマスター、女性の下着を選ぶなんてそうそう無い経験ですよ」

と、ザックスが心配してくれていると思いきやからかい出した。

「ザックス……………何か言ったかい？」

「い、いえっ！なんでもありません！」

「まったく、一言多いんだから………そろそろ戻るかな」

そうして僕は先程別れた場所に戻った。

しかし

「あれ、どこへ行ったのかな？」

なのはさん達の姿は見当たらない。

「仕方ない、探してみるか」

こうして僕はなのはさん達を探すことになった。

このショッピングモールは意外に広い。

探すのは大変そうだと思ったのだが……………

すぐ見つかった。

数人のチャラチャラした感じの男達と共に……………

（あれっ？この状況どっかであったような……………そしてやな予感がする……………）

しかしすぐに、このやな予感が当たることになる……………

~~~~~

フエイトside

私たちが光司を探していると、数人の男の人がやって来た。

「君たちかわいいね〜、どう、俺たちと一緒に遊ばない？」

「いえ、私たち人を探しているので」

「なんだ、だったら一緒に探してあげるよ、だからさあ〜」

「あの、本当にけっこうですので」

「そんなこと言わないでさ〜、いいじゃんかよ〜」

「いい加減、止めてください!」

「お〜、怒ってもかわいいね〜。怒っちゃうとどうなるのかな〜?」

男の人が私たちに手を出そうとしたその時だった

「じつなっちゃつたですよ」

「『っ!?!?』」

光司がその男の人の手をつかんでいた。

「何だデメエ、俺たちに何かっ……………」

そこまで言って男の人は話すのを止めた。

いやしゃべれなくなつたと言つた方が適切だろう。

なぜなら

「それ以上僕の友人に迷惑をかけると……………どうなるか、分かつてるんでしょうね?……………」

光司がすさまじい殺気を出しているからだ。

向けられていない私たち出さえも怖いと思う位だから、男の人達は相当怖いだろう。

「『ヒイイッ！！』」

「で……………どうするんですか？」

「『し、失礼しましたー！！』」

そうして男の人達は逃げていった。  
なんかかわいそうだったな……………

「ふう〜まったく、大丈夫ですか3人とも？」

「うん、大丈夫だよ」

「助かったわ光司君。でもごめんな、迷惑かけて」

「いえ、皆さんが無事ならそれでいいですよ」

見ると、光司はいつもの優しい感じに戻っていた。

でも、さっきの光司ちよつとかつこよかつたかなノノ

余談だが、この日からクラナガンのショッピングモールでナンパすると、恐ろしい女が来ると言う都市伝説が出来たという……………

~~~~~

光司 side

僕らはちよつとしたハプニングがあったものの、買い物続けた。

しばらくして昼食を食べ、僕ら一行は映画を見ることにした。

映画は、アクション、SF、ラブロマンス、ファンタジー、と色々あったが、僕はラブロマンス映画を見ることにした。

そしてそれぞれポップコーンと飲み物を持って席に行くまではよかったのだが……………

ここである問題が起きた。

「『光司（君）、一緒に座ってもいい（ええか）？』」

「い、いいですけど……………物理的に3人は無理ですよ」

「『はっ……………』」

3人とも……………今気が付いたのか……………

「そしたら……………」

「やることは……………」

「一つやな……………」

3人はそれぞれに気合いを入れて……

「『じゃんけんぽん!』」

じゃんけんをした。

結果は

なのはさん……グー

フェイトさん……グー

はやてさん……チヨキ

「『やったー』」

「くう、なんであそこでチヨキを出したんや……」

こんな感じで僕らは映画を見ることになった。

しばらくして……………

また問題が起きた。

「うう／／／……………はあ／／……………」

どうしてこんなことになったのだろうか……………

今の状況を説明すると、なのはさんとフェイトさんが僕に寄り添う形で寝てしまっている……………

したがって、僕はもう映画を見るどころでは無くなってしまっている。

そして

「隣の隣で………なんか殺気を感じるのは気のせいだろうか………」

（言うまでもなくこの殺気はやてのものであることは、光司には分からなかった）

しばらくして映画が終わり、上映館の外に出た。

「あゝ楽しかった」

「そうだね」

「って、二人とも寝ちゃってましたけどね」

「『えへへっ』」

「ええな〜二人とも」

なのはさんフェイトさんは上機嫌、対するはやてさんは不機嫌だ。

するとはやてさんが

「光司君喉乾いてへん？」

「え？あ、はい、そうですね」

「せやったらこれ」

僕に飲み物を渡してくれた。

「あ、ありがとうございます」

僕ははやてさんにもらった飲み物をなんの躊躇もなく飲んでいた。

はやてさんのこの言葉を聞くまでは……………

「あつ、これって間接キスやな」

「っ／／／!?」

僕は一瞬飲み物を吹き出してしまいそうになるのをなんとかこらえた。

か／／、か／／、間接キス／／／……………

するとははやてさんがいつの間にか僕の飲み物を飲んでいる。

(いつの間に無くなってると思えば……………)

すると今度はなのはさんとフェイトさんが

「『光司（君）、私のもつ………あ………』」

二人が自分の飲み物を差し出すと、虚しく中の氷の音だけが聞こえた。

要するに、もう残ってないのだ。

「『うううううう』」

「~~~~~」

今度は逆になのはさんフェイトさんが不機嫌に、はやてさんは上機嫌となった。

そうして僕たちはそろそろ六課に戻ることにした。
また、時間があったので歩いて戻ることにした。

歩いていると、ちょうど夕日が僕らに差し込んでとても綺麗だった。

「こんなの、本当に久しぶりだね」

「本当、今日は楽しかったよね。ありがとうね光司」

「いえ、僕も昔みたいに皆さんとこうして過ごせて楽しかったですから、お礼を言うのはこっちの方ですよ」

「そつやな、こんな休日久しぶりや……………こんな平和がずっと続けばええねんけどな……………」

「』……………」

確かにはやてさんの言う通りだ。

今は平和に見えていても、いつどんな脅威が来るのか分からない…………

……………でも、そのために僕は強くなるって決めたんだ……………すべてを守れるように！

「大丈夫ですよ」

「『えっ?』」

「この平和も、町も、六課も、皆さんも、僕が守ります」

「『// // //』」

すると3人とも黙ってしまった。

何だか顔も真っ赤だな.....あそっか、夕日のせいか

(本当に3人の顔は真っ赤です)

「で//、でも、光司も無理しちゃダメだよ//!」

「それはなのも同じだよ」

「にゃ!?!、フェイトちゃん!?!」

「そやな……………なのはちゃんには言われとつないわな」

「はやてちゃんまで!?!」

「『あはははっ』」

「でも光司、本当に無理しないでね。死んじゃったら元も子もないんだからね」

「そつやで、それにつちらもおるんやし……………」

見れば、3人とも目が真剣だ。

「大丈夫ですよ、僕は死んだりしませんって……………絶対に!」

「『約束だよ(やで)』」

こうして僕らは大切な約束を結び、六課へと戻っていった。

~~~~~

Drクロウside

ここはかつてスカリエッテイが使っていたアジト。  
まあ、今は私が使っているが。

「ふっふっふ、ようやく完成だ」

私の周りには私が作った駒達が整然と並んでいる。

「ドクター、準備はもういいのですか？」

「早いところ暴れさせてくれよ」

「まったく、君は血の気が多いね」

振り替えると、同じく私が作った人造魔導師の3人がいた。

「ああ、君たちの出番も近い。たのむよ、レナ、ガルシア、ルーク」

そして3人は黙って頷き、どこかへ行ってしまった。

「さあ、楽しみにしていたまえ。管理局の諸君、そして……  
……神谷光司よ……ハッハッハッハッ……」

私の笑い声が、アジトに響き渡った。

第33話「つかの間の平和」（後書き）

今回はいよいよ公開意見陳述会編です。

果たしてどうなるのか……………次回をお楽しみに！

感想待ってます

第34話「復讐劇、開演〜前編〜」(前書き)

タイトルの通りです。

ついに、あのサイエンティストが動き出します。

それではどうぞ！

### 第34話「復讐劇、開演〜前編〜」

光司 side

あれから数日後、とうとう公開意見陳述会の日がやって来た。

六課は陳述会に参加すると共に護衛任務もある。

なので、スターズの二人とフォワードは護衛、はやてさん、フェイトさん、シグナムさん、僕は陳述会に参加する。

そして今は護衛の人達を送るため、ヘリポートに来ている。

「それじゃあみんな、気を付けてね」

「うん！」

「おう！」

「『はい…』」

するとヘリポートにヴィヴィオと寮母のアイナさんが来た。

「あれ？どうしたのヴィヴィオ」

「なのはママ…………どこが行っちゃったの？」

「ごめんなさいね、なのは隊長。ヴィヴィオがどうしても言うもんだから…………」

「ダメだよヴィヴィオ、ちゃんとアイナさんの言うこと聞かないと」

「まあまあなのはさん、ヴィヴィオも心配だったんですよ」

「うーん…………ヴィヴィオ、ママね今日は帰ってこられないの。でもね、ヴィヴィオがいい子で待ってたら、ヴィヴィオの好きなキャラメルミルクつくってあげるよ」

「……………本当？」

「うん、約束」

「やくそく」

そしてなのはさんはヴィヴィオと小さな約束をして、地上本部へ向かって行った。

「フェイトさんのところに戻ろっか、ヴィヴィオ」

「うん！」

僕とヴィヴィオは手を繋いでフェイトさんのところに戻っていった。

部屋に戻り、フェイトさんやヴィヴィオと話していると、通信が来た。

「あっ、母さんからだ」

ピッ

そこには緑色の長い髪の女性が映っていた。

フェイトさんのお母さんのリンディ提督だ。

「はあ〜いフェイト、元気？」

「うん、お久しぶりです母さん」

「ヴィヴィオも、こんばんは」

「こんばんは〜」

「えっと……………光司君……………でいいのよね？」

「はい、お久しぶりですリンディさん」



「やっぱり！話には聞いてたけど、本当に魔導師になってたなんてね。それに、昔に比べてかわいくなってるわよ。」

「は、はあ……………リンディさんも昔と変わらずお綺麗ですね。」

「まあ、ありがとう。」

「それで母さん、どうしたの？」

「ええ、明日の陳述会なんだけど、私も出よっかなって。」

「大丈夫だと思いますよ。私も出ますし、クロノも何にもなかったはずですから。」

「でも、久しぶりにフェイトの顔も見たいし、ヴィヴィオや光司君にも会いたいな。」

「私と光司は行きますけど、ヴィヴィオは六課で留守番ですから」

「あらそうなの、残念ね〜。あっそうだわフェイト、光司君とどこまでいったの？」

「『えええっ!?!』」

突然リンデイさんがとんでもないことを言い出した。

もちろん僕もフェイトさんも驚きの声を上げた。

「か／＼、母さん何言ってるの／＼!?! 私たちそんなんじゃないよあ／＼  
……そりゃあ／＼、そうならばいいけど／＼……」

「ふえ／＼、フェイトさん／＼!?!」

終いにはフェイトさんまでこんなことを言い出してしまった。

「うっふっふっ、若いっていいわね〜。それじゃあまたね、二人とも

」

そう言っつてリンディさんは通信を切った。

それと同時に僕も恥ずかしくなり、その場を逃げ出した。

## 光司の部屋

「まったくリンディさんは、フェイトさんが僕なんかとつりあうわけないじゃないか／＼！」

「そんなことよりマスター、明日の件ですが……」

「ああ、やっぱり嫌な予感がするからね……………あれをやるつか」

「了解です」

そして僕は明日のためにあるものを作り始めた。

そして次の日

とうとう公開意見陳述会当日になった。

僕ははやてさんとシグナムさんと一緒に陳述会へ、フェイトさんはなのはさんと一緒に内部の警備にまわった。

するとカリムさんが話しかけてきた。

「お久しぶりです、光司さん」

「カリムさん、こちらこそお久しぶりです……………あの、それで予言のことなんです……………」

「はい、その事なんです……………なんとも……………」

カリムさんも不安の色を隠せないようだ。

「そう、ですか……………まあ、予言通りにならないことを、天に祈りましょー……………」

「はい……………」

そうして僕たちは不安な面持ちのまま陳述会へ臨むこととなった。

~~~~~

そして時間はたち陳述会がしばらく続いている状況の頃、とある場所にて

Drkrowside

いよいよだ。

待ちに待ったこの瞬間が、復讐の時がやって来た。今日は手始めに祝砲をあげてやる……………

まあこんなこと、私にとっては雑作もないことだが……

「さてそれじゃあ……………開演だ!」

私の合図と共に駒たちが動き出す。

「ふっふっふっ……………管理局の屑どもよ、せいぜい私の舞台で
華やかに散っていけ……………はっはっはっはっは!」

~~~~~

レナ side

ドクターからの合図を受け、私たちはそれぞれ動き出した。

まず私が地上本部の動力源を破壊する。

「ブリザード……………」

すると辺り一面が氷の世界に包まれる。

無論私の技だ。

「……………ブレイク！」

私が指を鳴らすと氷は轟音をあげて碎けて、動力炉は跡形もなく碎け散った。

これで地上本部の守りは無に等しくなるだろう。

「ルーク、次をよろしく」

「了解！」

~~~~~

ルーク side

レナからの連絡を受けて、僕も行動を開始する。そして僕は地上本部に向けてデバイスを構える。

「いくよ、グレイガー」

「OKマスター、いつでもどうぞ」

「ボルテックス……………バレット!!」

僕は地上本部に麻痺効果のある攻撃を撃っていく。

地上本部の人を動けなくすると同時に、地上本部の破壊もしてる。

いくら弱いからって、反撃されると面倒だからね」

僕は何発か撃った後、プレデター達に本部へ行くよう指示をした。

「そろそろ次かな、ガルシア、ルーテシアさん、どうぞ」

「待ってたぜ!!」

「……………」

それだけ言って二人は通信を切った。

ガルシアはいいとして、やっぱりルーテシアさんはしゃべらないか
……
そりゃそうだよな、ドクターが完全に洗脳してるんだから……

まあ、僕はあまりそういうの好きじゃないけど……

「さて、どう動くかな？機動六課……」

~~~~~

ガルシア side

ルークからようやく通信が来て、俺も動けるようになった。

今俺がいるのは地上本部の目の前。

漢なら、正々堂々正面突破だろ！

「よっしやあ、いつくぜえええ！！！！」

そして俺は相棒のデバイス、バルバトロスを構えカートリッジを何発かロードする。

「うおおおお、暴風・絶覇斬！！！！」

凄まじい風を纏った斬劇は地上本部のバリアを容易に切り裂いた。

そして俺はプレデターどもを率いて攻撃を開始する。

「強えやつはどいつだ、出てこい！！！！」

しばらく俺は地上本部の奴らや他の部隊のやつを倒していったが、まるで歯応えがねえ。

くそ面白くもねえ……………

「ちつ、ここはハズレか。あとはこいつらに任せるか……………」

そして俺は空中に上がり高見の見物をすることにした。

~~~~~

その頃地上本部

はやてside

陳述会の途中、いきなりここが襲われてしもた。

(やっぱり、予言通りになってまうんやろうか……………地上本部の
鉄壁の防御も破られてしもたみたいやし……………外とも連絡が取れへ
ん)

うちがそう思っていると、光司君に異変が起きた。
なんか、体が薄なってるような……………

「光司君、どないしたん!？」

「ああ、AMF濃度が高くなったからだと思えますよ。今の僕は魔力で出来ているフェイクですから」

「『……………えええええ!!!???'』」

これにはうちもシグナムもカリムも驚いた。

偽物って……………もつとんだけや……………

「まあ、詳しい事は後で話しますので……………」

そう言い切ると、光司君（偽物）は消えていってしもつた。

なんか偽物でも光司君が目の前で消えるんは嫌やわあ……………

見るとカリムも少し心配そうな顔をしとった。

(まさかカリムも!?!……………あり得る、光司君誰にも優しいからなあ……………って、今は言ってる場合やなかった!)

「『じゃあ、光司(君)(さん)は一体何処にいるのでしょうか(おるんやろつか)?……………』」

~~~~~

ヴァイタ side

陳述会が開始してからけっこう時間がたった頃、いきなり本部が襲われちゃった。

くそっ、どうなってんだよ!

「ロングアーチ、状況はどうなってんだ!?!」

「分かりません！本部のメインシステムがハッキングされて防衛システムは機能せず、内部の映像もきません！！」

「ちっ、ダメか……………」

「っ！？本部に向かう魔力反応、推定オーバース！！」

「くそっ！そいつはあたしとリンが行く、地上はこいつらに任せ  
るー！！」

そしてあたしはデバイスをティアナ達に預ける。

「こいつらのことも頼んだぞ！」

「『はいっ』」

「リン、ハロビン、くぞー」

「はいですー！」

そしてあたしはフォワード達と別れリインとユニゾンし、空に上がった。

~~~~~

ゼストside

俺がレジアスのいる地上本部へ向かっていると、一人の魔導師が俺に向かってきた。

俺は間一髪のところであぎととユニゾンし、距離を取った。

「機動六課、スターズ分隊副隊長、ヴィータだー！」

「ゼスト……………機動六課と言うことは、光司のいる部隊か」

「っ！？光司を、あいつを知ってんのか！？」

「ああ……………俺の、弟子だ」

「だったら、悪いやつじゃないはずだ！ゼスト、目的を言えよ、出来ることなら管理局は力を貸す！！！」

（ふっ、若いな……………だが、いい騎士だ）

（旦那、誉めてる場合かよ）

「すまんが、俺にも譲れないものがある。ここを……………通しても
らうぞ！！！」

「くそっ！！」

そして俺とその騎士の戦いが始まった。

~~~~~

光司 side

僕の魔力で出来たフェイクが消えた頃、僕は地上本部の近くにいた。

（くそっ……………思ったより悪い状況だ……………地上本部が危ない！）

外に目をやると、あちこちから火の手が上がり、たくさんのプレデターがはびこっていた。

929

「やはり、Drクロウか……………いくよ、ザックス!!」

「オーライ、マスター!!」

「リミットブレイク!!」

そして僕はプレデターを倒すため外へ飛び出していった。

~~~~~

Drクロウside

地上本部を襲撃してしばらくたった。

地上本部の本部の方はもういいだろう。

そこでルークとルーテシアに通信を入れる。

「二人とも、そろそろあれの回収に向かってくれ」

「了解」

「……………」

それだけ言うと、二人は通信を切った。

「さてどう出るかな、神谷光司……………」

~~~~~

ティアナside

私たちは今、緊急時の集合場所に向かっている。

（まさか……………地上本部が襲われるなんて……………やっぱり、あのスカリエッティ一味なのかしら……………）

そう思っていると突然、スバルが何かに飛ばされてしまった。

「スバル!?!」

よく見ると、向こうからその何かがたくさんやって来るようだった。

「何……………あれ?……………」

「戦闘……………機人?」

「いや……………多分、それとは違う……………」

私たちの前に現れたのは、今まで見たこともない寡黙な機械の人形達だった。

第34話「復讐劇、開演〜前編〜」（後書き）

オリキャラにつきましては、次回のそのまた次回に載せたいと思います。

そして次回、光司が……………お楽しみに！

第35話「復讐劇、開演〜後編〜」(前書き)

後編は前編より多少長くなっております。  
ご了承ください。

それではどうぞ！

第35話「復讐劇、開演〜後編〜」

ティアナside

私たちは突然現れた機械の人形達と交戦することとなった。

飛ばされてしまったスバルもなんとか戻り、私たちは体勢を立て直した。

「大丈夫、スバル!？」

「うん、なんとかね!それより……………こいつら」

「ええ、何だか分からないけど、とにかくやるしかないわ!」

「『うん(はい)!!』」

まずは私が遠距離から仕掛ける。



「クロスファイア……………シュート!!」

私の攻撃はあいつらに直撃した。

避けないって、どういづこと!?

しかし、その答えはすぐに分かった。

「っ、AMF!？」

そう、あいつらはAMFがあるようだった。

しかし完全に防いでいるわけでもなく、何体かには攻撃は通っていた。

これもきつと、兄さんの特訓のおかげね。

「よしっ、AMFがあるけどいけるわ!みんな、今までと同じように対処するわよ。スバルとエリオが先攻してあたしとキャロが後衛

でサポート、これでいくわよー」

「『おっ！』（はっ！）！ー！ー！ー」

こうして本格的にあいつらとの戦闘が開始した。

~~~~~

なのはside

私とフェイトちゃんは地上本部の襲撃によって、本部に閉じ込められてしまった。

「フェイトちゃん！」

「うん！どつやら閉じ込められちゃったみたいだね。とにかく、ここから脱出しないとー」

「うん、そうだね！」

そして私たちは他の皆さんと協力してなんとかエレベーターの扉を開け、ワイヤーをたどって降りていった。

「こんなの陸士訓練校以来だね」

「うん、やっぱり習っておいてよかったよ。フォワードには緊急時の集合場所を伝えてある。そこに急ごう！」

「うん、なのはー！」

こうして私たちは集合場所である地下通路のロータリーホールへ向かっていった。

~~~~~

光司 side

僕はしばらく地上本部に出現しているプレデターを倒していたが、  
どうもおかしい……………弱すぎるのである。

「確かに地上本部はかなりのダメージを負った、けどまだ完全に  
やられているわけじゃない、なのにごおして……………とにかく、  
一旦地下のロータリーホールに行ってみるか」

僕は皆の安否と状況を確認するため、ロータリーホールへ急いだ。

~~~~~

ティアナ side

しばらく私たちはあの機械の人形と戦闘をした。
最初は苦戦したけど、なんとかかすべてを倒すことができた。

するとスバルが

「ギン姉？、ギン姉！！」

「どうしたの？」

「ギン姉と通信が繋がらないの！私、ちょっと見てくる！！」

「あっ、ちょっとスバル！！」

スバルは私の声を無視してすごい早さで行ってしまった。

「まったくしょうがないわね。私たちだけでも合流するわよ」

「『はいっ！』」

そして私たちはスバル抜きで集合場所であるロータリーホールへ向

かった。

しばらく行くと、私たちはロータリーホールに着いた。

私たちが着くと、すでになのはさん達がいた。

「あつ、みんな！」

「ちょうどいいタイミングだね」

そして私たちが預かったデバイス達をなのはさんたちに返す。

すると一人のシスターがやって来た。

「『シスターシャツハ！？』」

どうやら騎士カリムのシスターのようだった。

「シスター、上の様子はどうですか？」

「今はやてさんが皆さんを落ち着かせていますが、もつかどうか……
……そして、光司さんなんです……」

「『光司（君）（兄さん）がどうかしたんですか？』」

シスターが言いにくそうに言ったので、私たちは思わず聞き返した。

まさかつ、兄さんに何か！？

しかし、その心配は無用だった。

「呼びましたか〜」

「『ええええええ！！！？？？』」

「ですから、陳述会に参加していた光司さんは偽物だったんですけど……………」

「『そ、そうなんですか……………』」

私たちは呆れるしかなかった。

「それで、みんな無事！？」

今度は急に兄さんが真剣な顔で聞いてきた。

「えっと……………スバルがギンガさんを探しに行っちゃいましたけど……………ちよっと連絡してみますね」

そう言って私はスバルに連絡を取ろうとしたが……………

「スバル、スバル！返事しなさい！！」

「……………」

「大変です……………スバルから、返事がありません！！」

「何だって、スバルはどこに！？」

「確か……………動力炉近くの方に……………」

「分かった、ちょっと行ってくる！！」

そう言って、兄さんはすごい早さで向かっていった。

「こっつ、光司君!？」

「なのはさん、私たちも！」

すると今度はフェイトさんに通信が来たようだ。

「もしもし、こちらライトニング！」

「こちら……グリ……フィス……」

「グリフィス、どうしたの!?通信が……」

「こちら……は……只今……アンノウン……の……攻
撃を……応援を……」

「分かった、すぐにそっちに行くー!」

どうやら機動六課も危ないようだ！

「それじゃあ、二つに分けよう。スターズはスバルとギンガの救出に、ライトニングは六課に戻ろう！」

「『はいっ(うんっ)！』」

そして私たちはそれぞれの場所へと向かっていった。

でも私たちはまだ、この後分かる驚愕の光景を目の当たりにすることなど、思いもなかった……………

~~~~~

ヴィータside

あたしはしばらくあのゼストって言う騎士と闘った。

すると、ゼストが何かに気付いたようだった。

「あちらのオーバースが数人動き出したようだ。地上の守りはもう復活したか」

どうやら結果的にあいつの目的を防いだようだった。

すると急にユニゾンを解除したと思うと、あたしの頭上にその融合機が巨大な火の玉を出した。

947

「くそっ、リン！」

あたしはその火の玉に向かおうとしたが、ゼストに阻まれた。

「はあああああ！！」

「くっ、わああああ！！」

あたしはゼストに吹き飛ばされてしまった。

あたしはビルに叩きつけられ、強制的にユニゾンを解除された。

「リイン？、おいリイン！？」

「.....」

「くそっ.....」

アイゼンも壊され、あたしはただその場にたたずむしかなかった。

~~~~~

光司 side

嫌な予感がした

今までで一番嫌な予感がした。

また、大事な人を失う気がした。

「今回は、当たらないでくれよ……………」

僕は無我夢中で急いだ。

そして僕の目に飛び込んできた光景は

「そ、そんな……………」

僕と同じ金髪の長い髪で青いドレスのようなバリアジャケットと細い剣を持った女性と、体がボロボロになりなおかつ半分氷付けにされかけているスバルとギンガの姿だった。

「あら、また誰か来ましたね」

金髪の女性はこちらに気付き声を発する。

僕は思わず身構える。

「まったく、もうちょっとで殺すところだったのに、また邪魔が入ってしまったわ」

「っ！？……何だって？」

「あら聞こえなかった？殺すところだったって言ったのよ。もちろん、あなたもすぐに殺してあげるわよ」

「……………そうか、なら……………」

次の瞬間、二人の剣が交差した。

「君が僕を殺す前に、僕が君を殺そう……………」

「へえ、面白いじゃない……………」

そして僕たちは一旦距離を取る。

しかし、この人を相手にするよりスバル達を何とかする方が先決だ。

僕はすぐに二人の近くへ行き、熱の効果を持ったバリアを二人の回りに張る。

これで氷が少しでも溶けるといんだけど……

しかし僕がバリアを張った途端、彼女の攻撃が来る。

「よそ見をしてる暇は無いわよっ!!」

「くっ!!………っ!!」

僕はなんとか受け止めたが、数メートルほど飛ばされた。

リミットブレイクしてこれだと、少しヤバイかも………

だけど、そんなことも言ってもらえない。

「フレイムランサー！」

すると彼女も同じように氷の槍を出してきた。

「フリーズランサー」

「『シユート！』」

赤と白の槍が同時に発射され相殺し合い、氷が溶けることで辺りは水蒸気に包まれる。

（一か八か、ここは仕掛けてみるか……………）

そう思い、僕はカートリッジをロードし、彼女に突っ込んでいく。

「紅蓮……………一閃！」

すると彼女もまた同じようにように突っ込んできた。

「氷花……………一閃」

赤と白の刃が再び交わる。

しかしこの時、僕は圧倒的不利な状況だった。

「水蒸気の中に飛び出して来るなんて、あなたおバカさん？」

そう、相手は紛れもなく氷を得意とする騎士だった。

したがって、水蒸気に包まれているこの場所は、彼女にとって絶好の場所だった。

「っ！？しまったっ！」

すると、みるみるうちに僕のバリアジャケットやザックスが氷始めている。

そして当然のごとく、僕は押し負け、今度はさっきより飛ばされて、壁に叩きつけられ。

「ガハッ！」

それに対し彼女はまだ余裕の表情だ。

「あら、もうおしまいかしら？」

「いや、まだまだよ………フォースフィールド！」

僕は実は高温効果を持ったフォースフィールドを展開する。

それにより僕のバリアジャケットやザックスの氷が溶ける。

「そう来なくてはね。クローンより弱いオリジナルなんて聞いたことがないもの」

「……………何だつて？」

「そういえば自己紹介がまだだったわね。私はレナ。ドクターに産み出されたあなたのクローンよ」

「なっ、何だつて……………僕の!？」

「そう言うこと。それじゃあ、おしゃべりはここまです」

「そう言い終え、レナは再び構える。

「君は間違ってる!あいつの言いなりになんかなっちゃいけない!」

「あなたには関係の無いことよ」

僕は必死に彼女の説得を試みたが、結果は無駄に終わった。

そして一進一退の攻防がしばらく続いた。

いや、正確には僕の方が少し押されている。

「はあ、はあ、はあ……………」

息づかいが荒くなっている僕に対し

「だいぶ疲れているよね」

疲れの色は見えるが、まだ余裕そつな表情のレナ。

これは明らかに歩が悪い。

「それじゃあ、私も本気を出そうかしら」

「くっ!?!」

(まだ本気じゃなかったのか!?このままじゃ……………)

そして僕のこの考えは現実のものとなる。

彼女のある一言によって……………

「アイス……………エイジ」

瞬間、何が起こったのか分からなかった。

気付いたときには体が動かないのだ。

見ると、身体中がいつの間にか氷で覆われている。

「くそっ、どうなってるんだ!？」

「教えてあげましょうか？」

「っ!？」

向こう側にいた彼女がいつの間にか目の前にいた。

「答えは簡単よ。あなたの周りにある水蒸気を一気に凍らせたの。あなたが、たくさん私の氷を溶かしてくれたおかげよ」

そう、彼女との戦いの中で僕は彼女が作り出す氷をことごとく溶かしてきた。

すべてはこのためだったのか……………

「ここであなたを殺すのは容易いけど、先にあの二人を殺しちゃおうかしら」

「何だって!?!」

「そこで仲間が殺されるのをじっくり見せてあげるわ」

そう言い放ち、レナはスバル達の方へ向かう。

「やめろおおお!?!」

僕は氷を砕こうとするがびくともしない。

そして一歩、また一歩と彼女は二人に近づいていく。

（僕は、また何もできないまま、大切な仲間を失ってしまうのか……
嫌だ！そんなの絶対に嫌だ！！………もっと、
もっと僕に力があれば………）

僕は力を願った。

絶対的な力を。

ドクンッ

「っ……！」

その瞬間、僕の中で何かが目覚めた気がした。

~~~~~

フイトside

私とエリオとキャロは六課へ向かい急いでいた。

すると急にどこからか攻撃が来たので私は二人を守るためシールドで防いだ。

「誰だっ!？」

煙が晴れると、そこにはバルディッシュと同じような魔力刃が黄緑色の鎌を持ち、月明かりに照らされている漆黒の騎士がいた。

いや……………騎士と言うより死神に近いと言った方がよい。

「ほお、俺の攻撃を防いだか。バレないように攻撃したつもりだったんだがな」

「質問に答えなさい!!」

「おいおいあせるなよ、俺の名はガルシア。まあ色々あって、今はあいつに協力している」

「あいつって、スカリエッティのこと!？」

「スカリエッティ、誰だそりゃ?そんなやつ知らねえよ」

(えっ、どういうこと!?!今回の事件はスカリエッティの仕業じゃあ……………)

私は少し動揺したが冷静になって考えた。

(もしかしたら、このガルシアって人が嘘をついているかもしれない……………でも今はエリオとキャロを先に行かせないと……………)

すると、彼から思いもよらない言葉が返ってきた。

「おいあんた、そのチビ共を先に行かせる」

「えっ!?!」

「俺は強えヤツと闘いてえんだ、ガキには興味ねえ」

「……………エリオ、キャロ、先に行つて!」

「『は、はい……………』」

こうして思っていたより簡単に二人を行かせることができた。

そして私もバルディッシュをハーケンフォームにして構える。

「ほお、あんたも鎌なのか？こりやおもしれえ！」

「くっ！……………」

そして私はガルシアと向き合い、いよいよ戦闘が開始された。

~~~~~

ルークside

僕は今、ルーテシアさんと機動六課と言つところに来ている。

ドクターに言われた、ある物を取りに行くためだ。

そして今僕は二人……………いや、一人と二匹と交戦中だ。

といっても、勝負は目に見えてるけどね。

「いい加減諦めてください。あなた方にもう戦う力など残っていないはずだ」

「くっ！……………」

しかし、まだ諦めてはいないようだった。

「仕方ない……………グレイガー」

「オーライ、ロードカートリッジ」

僕はカートリッジをロードし、双銃であるグレイガーの片方を構える。

「マルチプル……………バレット!!」

僕のデバイスから様々な方向へ攻撃が発射される。

しかし

「クリアルビント、防いで!!」

金髪で緑の服を着た女性に阻まれ、

な

「…!!」

もい一匹の蒼い狼も襲ってきた。

「やれやれ……………」

しかし僕は焦らず対処した。

もう片方の銃でボルテックスバレットを射って。蒼い狼を吹き飛ばした。そしてその狼をもう一人の金髪の女の方に向けた。

両方とも、ボルテックスバレットのおかげで気絶しているようだ。

「ふう……………出来ればこんなことしたく無かったけどね」

そしてルーテシアさんと一緒に六課へ入って行った。

~~~~~

キヤロside

私とエリオ君は急いで六課へ向かっていた。

すると私たちの前に驚きの光景が広がっていた。

「ひ、酷い……………」

「そんな……………」

六課は元の面影がないほど破壊され、あちこちから火の手が上がっていた。

すると、エリオ君が何かに気付いたように急に立ち上がった。

「キャロ、あとお願い!!」

「えっ、エリオ君!？」

エリオ君は六課の方から出てきた何かに向かって行ったけど、途中で落とされてしまった。

「エリオ君……!!」

私は急いでフリードで駆けつけ、なんとかエリオ君を救出した。

するとエリオ君を落としたであろう人が私の頭上に現れた。

「よかった、助けてくれて。海に落ちたら可愛そうだからね」

「えっ??」

私はその人の言ってることが分からず思わず声を出してしまった。

そして私は勇気を持って聞いてみた。

「あの………あなたは一体?………」

「ああ、そりやおかしいよね、敵の心配するなんて。はじめまして、僕はルーク。色々あって今はDークロウに協力してる。ああ、言っとくけど今回の犯人はスカリエッティなんかじゃないからね」

「は……………はあ……………」

(何でこの人こんなこと教えてくれるんだろ……………)

不思議に思いながらも、私はその人の話を聞き続けた。

すると、とんでもないことを言い出した。

「君は機動六課の人だね。だったらお願いだ……………僕らを止めてほしい」

「えっ、それってどういっ……………」

そして私が言い終わらないうちに、その人は姿を消してしまった。

いったいどういふことなのかな……………

~~~~~

レナ side

私はオリジナルを足留めしている間にあの二人を始末しようと二人に近づいていく時、異変は突然に起こった。

彼を覆っていた氷が一瞬で砕け散ったのだ。

「っ！？そんな、何が!？」

あの氷はちょっとやさっとじゃ砕けない。

何が起きたんだと思い、彼の方を見てみると、さっきと様子が明らかに違った。

さっきまで赤かったオーラが真っ黒になり、鎧や髪の毛は血黒く染まっていた。

「あつ、あなた、いったい……………」

「……………」

「ちょっと見た目が変わったからって関係ないわ！ いけっ、フリーズランサー！！」

私は氷の槍を何発も発射する。

しかし彼は避けようともせずただ立っていた。

直撃するはずだった……………けど、私の攻撃は彼には届かなかった。

「そ、そんな……………」

氷の槍は彼に当たる前にあの黒いオーラによって消滅してしまっていた。

「こんなものか……………」

「っ!？」

その瞬間、私はとてつもない殺気を感じた。

以前の彼からは到底感じられなかった殺気だ。

「今度はこちらからいくぞ……………」

私は彼の言葉を聞くと同時に構えた。

しかし次の瞬間、彼は私の視界から消えた。

「虚空黒覇斬……………」

そして次に私が気が付いた時には、彼の攻撃を受け壁に叩きつけられた時だった。

（見えなかった……………彼の動きが……………全く……………）

私はこの時生まれて初めて恐怖と言つものを感じた気がした。

そして彼は少しずつ私に近づいていく。

「まだだ……………まだ……………グフッ!!」

「っ!?!?」

突然彼は血を吐いた。

このままでは不味いと思っていた私は、今だと思いその場を離脱した。

~~~~~

ガルシア side

俺はしばらくあの金髪の女と戦ってた。

この女なかなかやるな、と思った矢先、レナから通信が来た。

「何だよ、今いいところなのに!？」

「うるさいわね。ルークが例のものを回収し終えたわ。撤退よ」

「おいおいマジかよ。ちえっ、つまんね」

そして俺は通信を切りヤツの方を見る。

「わりいな、どうやらお開きのようだ。また会おうぜ、嬢さんよ」

「ま、待て！お前たちはいった……………」

そこまで聞いて俺は強制転移させられた。

~~~~~

ティアナside

私となのはさんは、急いで兄さんが先に行ったスバルとギンガさんのところへ向かった。

それにしても、兄さん早すぎ……………

「三人とも、大丈夫でしょうか……………」

「きつと光司君がいるから大丈夫だよ。光司君強いもん」

「そ、そうですよね」

なのはさんの自信気な答えに私も安心した。

でも、いざその場へ着いてみると、私たちの表情は一変した。

そこには

ボロボロだかなんとか立ち上がっているスバルとギンガさんと、さらにボロボロで血の海に倒れている兄さんの姿があった。

~~~~~

光司 side

気付いた時、僕は血の海に立っていた。

しかしすぐに身体中に激痛が走り、立っていられなくなり、その場へ倒れた。

向こうを見ると、スバルとギンガが立っていた。

「よかった……………二人とも……………無事……………ゲホッ、ゲホッ」

また血を吐いた。

どうやら本格的にヤバイかもしれない……………

すると誰かがこっちに近づいて来るようだった。

「『光司君（兄さん）！！』」

それはなのはさんとティアナのようだった。

「よかった……………こっちの二人も……………無事……………ですね」

「そんな！光司君が無事じゃないよ！！」

なのはさんが涙目になりながら怒っている。

（ダメだな……………なのはさん泣かせちゃったよ……………なにやって

んだ僕は……でも、もう動けないし、至るところから血が出ちやってるし。まあそうだよな、リミットブレイクを長時間使用して、僕は覚えてないけど彼女を退けるほどの力を使ったんだ……無事な方がおかしいかな  
)

「光司君、光司君!! しっかりして!!」

「な……のは……さん……」

僕は最後の力を振り絞って、なのはさんに伝えた。

「……………いじめ……………んな……………さ……………い……………」

そして、僕の意識は闇に沈んだ。

第35話「復讐劇、開演〜後編〜」（後書き）

今回は予告通りオリキャラの紹介をします。

そして一話挟んでいよいよ決戦へ進んでいきます。

おそらくその頃は更新が遅くなっていると思いますので、またまたご了承ください。

感想お待ちしております。

### 第36話「オリキャラ設定」(前書き)

今回は予告通りオリキャラの設定です。

けっごうネタバレも含んでおりますので、それでもよければどうぞ。



第36話「オリキャラ設定」

その1

○名前

レナ

○年齢

18才

○容姿

光司を本当に女にして髪をまとめずに腰まで伸ばした感じ。

○魔力光

青

○魔力変換資質

氷結

○バリアジャケット

青いドレスに所々甲冑を加えた感じのバリアジャケット。(イメージはfateのセイバーの格好)

○詳細

Drクロウにより産み出された光司のクローン。見た目や技が多少似ているが、性格は別格。人を殺すことをなんとも思わない残酷な性格。しかしその性格には秘密がある……………らしい。

~~~~~デバイス~~~~~

○名前

カリバーン

○形状

待機状態は青い宝石がはめ込んであるロザリオで、戦闘モードは少し細身の剣のみ。

○詳細

同じくDrクロウによって作られたレナのデバイス。基本的無口だが、主の命令は絶対的に従う。戦闘モードが一種類しかないので、そのスペックは計り知れない。

~~~~~使用する技等~~~~~

## ○氷花一閃

カリバーンに冷気を纏わせ、敵に攻撃する技。敵を攻撃した後、カリバーンから氷の欠片が花びらのように舞うことからこの名がついた。

## ○ブリザードクラッシュ

標的を一瞬で氷付けにし、そのまま粉々に砕く技。ただし人の場合、局部的に破壊することは出来ず、全身を氷付けにしないと砕けない。

## ○フリーズランサー

光司のフレームランサーの氷版。空気中の水分が多いと、切れ味が増す……………らしい。

## ○アイスエイジ

一気に空気中の水分を凍らせる大技。勿論、水分が多いほど強力で、局部的に凍らせることもできる。ブリザードクラッシュより強固に氷る。

### ○氷楼乱千舞

魔力で作った氷の結晶を何個も作り出し、一瞬で相手の懐に入ってカリバーンによる斬激とともにその結晶で相手を攻撃する技。レナの技中で最大の技。

~~~~~

その2

○名前

ルーク

年齢

17

容姿

端正な顔だちで、髪は黒い感じの茶色。目は金色なのだが、本人は気にしている。

○魔力光

薄い黄色

○魔力変換資質

雷

○バリアジャケット

白地に黒のラインが入ったロングコートに黒いズボン、腰にはホルダーのベルトを装着して、インナーには白いシャツに黄色いネクタイをしている。

○詳細

レナと同じくDrク로우によって産み出された人造魔導師。しかしゼストな問題は全く無く、ほとんど人間に近いと言っている。性格はいたって普通。しかし産まれたばかりなので、少々常識がない。また、Drク로우に手を貸すことを少し疑問に思っている。

~~~~~デバイス~~~~~

## ○名前

グレイガー

## ○形状

待機状態は白いイヤリングで、戦闘モードは双銃と剣。しかし剣は滅多なことでもない限り使わない。

### ○詳細

カリバーンと同じくDrkクロウに作られたルークのデバイス。基本的にあまりしゃべらないが、しゃべるときはしゃべる。短いながらもルークとのコンビネーションはとてもよい。

~~~~~使用する技等~~~~~

○ボルトテックスバレット

麻痺効果の弾を形成し、電気の魔力とともに打ち出す技。威力を調整すればダメージを与えながら相手を麻痺させることが出来る。

○マルチプルバレット

一度に様々な方向へ攻撃することが出来る技。多方向への攻撃のため、他と比べて若干威力が劣るが、使い勝手のいい技である。

○レーザーバレット

カートリッジをロードし、銃口から一筋のレーザーを発射する技。細さや太さが自由に換えられ、二本合わせることにより強力になる。

○ソニックバレット

空気を圧縮したものを発射し、それと逆方向に高速移動する技。その時同時にカメラのフラッシュのように光らせるので、相手が分からないまま動くことが出来る。

○ホーミングバレット

ホーミング性のある魔力弾を作り、一気に発射する技。また一つ操作することができ、トリッキーな攻撃が可能である。

○マグナムレーザーバレット

特殊なカートリッジを装填することで出来る技。その装填した弾をそのまま撃つことで魔力と質量兵器の合わさった強力な攻撃となる。

~~~~~

その3

○名前

ガルシア

○年齢

22

○容姿

厳つい感じの顔立ちにスキンヘッド。目は黒色で、かなりの迫力がある。身長も高いので、余計に厳つく見える。

○魔力光

薄い黄緑色

○魔力変換資質

風

○バリアジャケット

全身黒色の鎧に身を包んだ重騎士のような姿。普段は黒い布を纏っている。死神の姿に似ている。

○詳細

レナやルークと同様にD r kロウに作られた人造魔導師。性格は一言で言うと、猪突猛進熱血バトルバカ。

~~~~~デバイス~~~~~

○名前

バルバトロス

○形状

待機状態は黒い腕輪で、戦闘モードは鎌と斧。どちらもかなりのサイズで彼にしか扱えないほど。ちなみに鎌より斧の方が威力が格段に高い。

○詳細

同じくDrクローウに作られたガルシア専用のデバイス。ガルシアとは対称的に、こちらの性格を一言で言うと、冷静沈着クールインテリ（デバイスだから、頭がいいのは当たり前）。だがガルシアとの相性はなぜかいい。

~~~~~使用する技等~~~~~

○暴風絶覇斬

武器に凄まじい風を纏わせ、その状態で攻撃する技。風は触れただけでも少し切れるほど強力。

### ○ウィンドスラッシュ

目に見えないほどの細かな鎌鼬かましたちを発生させて攻撃する技。勿論、一般的に言う鎌鼬とは比べ物にならないほど強力である。

### ○デス・サイズ

一瞬で相手の懐に入り、相手の急所に攻撃を食らわす一撃必殺の技。本人が言うには「これを食らって立ってたやつはいないぜ！」（まだ一度も使ったことがない）

### ○疾風連撃刃

疾風のごとく移動し、相手を圧倒する連続攻撃を繰り出す技。その巨体に似合わないスピードの攻撃はかなり強力。

○剛風滅牙斬

簡単に言うと、暴風絶覇斬と疾風連撃刃を掛け合わせた技。単純に掛け合わせただけだが、その攻撃はガルシアの技の中で最大の技。

第36話「オリキャラ設定」（後書き）

A「今回は後書きにオリキャラ三人に来てもらいました」

レ「どうもはじめまして、レナと言います」

ル「ルークです」

ガ「ガルシアだ。………っておい作者！何だあの俺の説明は！？」

A「え、何って………そのままだけど？」

れ・ル「『うんうん』」

ガ「くそっ、テメエらまで………俺はバカじゃねえ！！」

バル「主、もうそれくらいにしておけ。余計バカに見える」



ガ「くっそおおお……！」

A「こんな感じのオリキャラ達ですが、多分けっこう変わるところもあると思いますので、よろしくお願いします」

第37話「決戦前」(前書き)

今回は時間軸をかなり省きました。

なので今までで、一番悪いと思います……………

それではさようば。

### 第37話「決戦前」

光司が倒れてから数時間後、ある一人の男が反抗声明を出した。

他ならぬ今回のテロを引き起こした張本人、Drクローウである。

「やあ管理局の諸君、聞こえているかね？君たちは素晴らしく私の復讐劇を彩ってくれた、恐怖と絶望という演出でね。さて、第一幕はこれで終演だが、まだ第二幕と最終幕が残っているのだよ。もうすぐ第二幕の開演だ。楽しみに待っていてくれたまえ、ハッハッハッハッ……」

この反抗声明は管理局中に波紋を呼んだ。

しかし、皮肉にもテロを受けた地上本部は、かたくなに本局の介入を拒んだのだった。

~~~~~

ティアナ side

あの凄まじいテロから1日たち、私はなのはさんと一緒に六課の破損状況を確認している。

するとシグナム副隊長が病院から帰ってきた。

「シグナム副隊長、病院の方はどうでしたか？」

「ああ、大まか怪我を負った隊員はもう大丈夫だそうだ。しかし、ヴァイスとザフィーラはまだ意識が戻らないらしい。そして、光司は……………」

やっぱり、言うのをためらっている。

相当酷いんだろうと私は思っていたけど、シグナム副隊長の答えは私の想像を遥かに越えるものだった……………」

「まあ、言いにくいんだが……医者の話では……光司は……」

「いつ死んでもおかしくない状態らしい」

「えっ……」

「兄さんが死ぬ？」

「嘘よ、そんなはずがない。」

「だって兄さんはあんなに強くて、あんなに優しくして、いつだって、いつだって私たちのそばに……」

すると、シグナム副隊長はすぐに強く言った。

「だが、やつがこれくらいでやられるはずはない。きっと帰ってくるぞ」

「は、はいっ！」

「お前も、病院に顔を出してこい。ここは、私が引き継ぐ」

「あ、はい。ありがとうございます」

そして私はスバル達の様子を見に病院へ向かった。

そして病院へ着くと、スバルとエリオとギンガさんの病室にキヤロがすでに来ていた。

「スバルにエリオにギンガさん、もう大丈夫なんですか？」

「うん、私とスバルは神経ケーブルが少し切れて、体の一部が低温火傷だけだったから」

「僕も、ちょっと攻撃受けちゃいましたが麻痺攻撃を受けたただけなだけなので、大丈夫です」

（よかった、シグナム副隊長から聞いてはいたけれど、やっぱり元気そうでよかった。）

「それで、チビたちにあんたとギンガさんのこと話したの？」

「うん、私とギン姉の生まれとか、そのへんは……」

「まさか、こんな形で話さなきゃならなくなるとははね……」
「ごめんね二人とも」

「い、いえ……」

「そんな……」

「それでティア、しい兄の様子は？……」

「うん……」

私は正直話そうか迷った。

本当のことを話したら、スバルもギンガさんも自分を責めてしまうと思う。

でも、正直に話さかったらスバルやギンガさんはもちろん、エリオやキャラにも申し訳ない。

そして私は意を決して四人に本当のことを話した。

「兄さんは……………酷い状態……………としか言えないわ。それ以上のことは私も分からない」

「そう……………なんだ」

「やっぱり、酷い状態……………なのね」

「『兄さん（お兄ちゃん）……………』」

しばらくの沈黙が続いた。

やはり話すべきじゃなかったと後悔していると、その沈黙を破ったのは意外にもギンガさんだった。

「ティアナ、でも光司さんは死んだわけじゃないんでしょ。だってら、私は信じる。光司さんは、きっと帰ってくるって！」

「『ギンガさん（ギン姉）……………」』」

「うん、そうだね。そうだよね！」

「兄さんは、きっと大丈夫ですよね！」

「お兄ちゃんなら必ず！」

ギンガさんの言葉をきっかけに、みんな次々と元気を取り戻した。

さすが、兄さんの力と言ったところなのかな。

「兄さんのためにも、次は勝つわよ！！」

「『はいっ！』」
「『うんっ！』」

そして私たちは次の戦いへ向けて、決意を新たにするのだった。

~~~~~

フエイトside

私たち六課のメンバーはクロノや騎士カリム、ナカジマ三佐から戦闘機事件、スバルやギンガのこと、そして光司が追っていたDrクロウについての話を受けた。

そして時間はたつて時刻は夜。

私が六課でなのはを探していると、外で遠くを見つめているのを見つけた。

「なのは、こんなところにいたんだ」

「あ……………フェイトちゃん……………」

なのはは目に見えて元気がなかった。

「やっぱり、ヴィヴィオのこと……………」

「うん……………約束、破っちゃったなあって」

「……………」

「私がママの代わりだよって言ったのに……………そばにいてあげられなかった！守ってあげられなかった！……………それに光司君だって……………身を呈して二人を守って……………あんなにポロポロになってまで……………」

そこまで言い切り、なのははとうとう泣き出してしまった。

「大丈夫、光司はきっと大丈夫だから……ヴィヴィオも、きっと大丈夫……だから、二人で助けよ」

私はこんな時どうしていいのかわからず、自分も溢れてくる涙をこらえながらなのはを抱き締めるしかなかった。

~~~~~

そしてそれぞれの思いと決意の日から3日たち、六課のメンバーはヴァイス、ザフィーラ、光司を除き全員が回復し持ち場に帰っていた。そしてメンバーはアースラに乗り込み、Drクロウの動きを待っている。

そして事態は急展開を見せた。

アインヘリアルは二機ともすぐに破壊され、ガルシア、ルーク、ルーテシア、そして大量のプレデター達が再び地上本部に攻撃をしかけたのだ。そしてゼストとアギトもレジアスのもとへ向かっている。そして更に悪いことに、古代ベルカの最強の遺産『ゆりかご』が空に上がったのだった。

~~~~~

はやてside

この3日間音沙汰もない思ってたら、急に来よったな。本局の部隊も投入できへんし………ここは、うちらでやるしかないみたいやな！

「ほんなら戦力分けを説明するで。まず地上の人造魔導師二人と召喚師、及びプレデターはフォワード陣、地上本部に向かっている騎士にはシグナムとリン、ほんで残りは全員である『ゆりかご』を止めるんや！みんな、準備はええな！？」

「『はいっ(うんっ)!!!!』」

「よっしゃ、ほんなら機動六課、出撃や!!!」

こうして、うちの今まで最大の戦いの火蓋が切って落とされた。

第37話「決戦前」(後書き)

今回はやっと主人公の登場です。

はたしてどうなるのか、お楽しみに！



第38話「光と闇」(前書き)

初めて連日投稿です。

かなり疲れました。

そして今回で光司が復活します！

それではどうぞ！

### 第38話「光と闇」

機動六課が出動して二時間がたとうとしている頃、集中治療室に一人の男が眠っていた。

他でもない光司である。

~~~~~

光司 side

気が付くと、僕は真っ白い世界に一人で立っていた。

何も無い、ただ白だけの広い世界。

「……は？……そうか、僕は死んじゃったのか」

『いえ、マスターは死んではいません』

「うわぁぁっ!?!?」

声のした手の方を見ると、そこにはいつもの通りザックスがいた。

「ザックス、死んでないってどういうこと?」

『正確に言えば、今私たちはマスターの心の中にいます』

「心の中?」

『はい。マスターは先程の戦闘で、マスターの中に眠っていた闇の力を引き出してしまったのです』

「それってどういう……」それは、俺が説明しよう『っ!?!?』」

振り返ると、誰もいなかったはずなのに、一人の人が立ってた。

その顔は、まぎれもなく僕自身の顔だった。

「誰だ!?!?」

「『誰だ?』はないだろ………相棒」

「何っ!?!?」

「正確に言うと、闇の人格と言ったところかな。俺はお前であるが、お前ではない」

「その闇の人格が何の用だ!?!?」

「おつとそうだったな、じゃあ説明する。

人には必ず光の人格と闇の人格と言うものがある。

これらは互いに相反し、人によってその存在の割合が決まっている。人は必ず、どちらかの人格の割合の方が勝っていて、その一方の人格がその人自信を司っている。

そうでなければ、一つの体に二つの人格が同等に存在し、人は長くは生きられない。

『多重人格』と言うものがあるが、あれは光と闇の他に色々な人格があり、それが一般の人より変わりやすいだけだ。

それで、今の状態はお前つまり光の人格と、俺つまり闇の人格とが同等に存在している。

したがって、俺とお前のどちらかが残りの一方を倒さなければならぬ。

この意味が分かるな？」

「なるほど……………つまり僕が君を倒さないと、僕が僕でなくなるってことだね」

「そう言うことだ。それじゃあ、始めるぞ……………」

「ああ……………」

「『セットアップ、リミットブレイク！！』」

そして僕らはそれぞれバリアジャケットを見に纏う。

闇の人格は僕のを黒くしたようなやつだ。

こうしてみると、やっぱり気味が悪い……………

とにかく、僕VS闇僕（闇の人格の僕の略）の戦いが始まった。

しばらくの沈黙のあと、僕らは二人同時に動いた。

「『虚空……………』」

そして同時に間合いを詰め

「……撃破斬!!」
「……黒覇斬!!」

ガキイイインッ

凄まじい衝撃波と共に赤と黒の刃が交差した。
しかし、勝敗は思わぬ方向にいつてしまった。

「はああああっ!!」

「くうっ……じわぁっ!!」

僕の方が押し負けてしまったのだ。

「同じ力のはずなのに、どうして!?!」

「教えてやるさ」

「はっ!?!?うわあああ!?!!」

どこからか闇僕の声が聞こえたと思うと、僕は一撃で吹き飛ばされてしまった。

「それはな、お前自信が俺の闇の力を呼び覚ましたからだ」

「なん……………だって?」

「さっきの戦闘で、お前は少しの間だけ俺に乗っ取られた。その証拠に、その時の記憶はお前にはないはずだ。その時俺は闇の力を手にいれた、お前があの時欲した力をな。したがって、今のお前は俺には勝てない」

「そ、そんなのありか……………」

「おっと、よそ見をしてる場合かっ！」

闇僕の言葉をそこまで聞き終えると、その場から一瞬で消えたように見えた。

そして僕は咄嗟に剣を構え、何とか攻撃を防いだ。

「くっ！……………」

「ほう、防いだか……………そうでなければ困る。……………だが、甘
いっ！」

「ガハッ！」

闇僕は体勢を変え、僕に踵落としを繰り返した。

もちろん防ぐのに精一杯だったので、僕はもろに肩にくらい下に叩
きつけられた。

「こ、ここまで……………力の差があるとはね……………ちょっと理不尽
かな……………」

『悠長なことを言ってる場合ではありません』

「うん……………分かってるって！ザックス、ランサーフォーム！」

そして僕は槍を構え、閻僕と再び向き合った。

すると閻僕もいつの間にか槍を構えていた。

「いつの間」……………」

「言つたら、俺はお前でありお前でないと。お前が槍を持てば、俺も槍を持つ。当たり前だ」

「くそっ！……………だったら、カートリッジロード」……………」

そして僕はカートリッジをロードして閻僕と向かい合う。

どうやら閻僕も僕と同じ構えをする。

「槍雨……………」

「槍覇……………」

そして二人とも同じタイミングでぶつかり合う。

「『一塵！！』」

僕は目にも止まらぬ早さで槍を連続で突き出すが、闇僕も同じように槍を繰り出し相殺した。

しかし、この技もあっちの方が一枚上手だったようだった。

「はあああっ！！」

「なっ！！」

僕の槍が弾かれたと思うと

ザシユツ、ザシユツ、ザシユツ、ザシユツ

「がっ……………」

弾かれた瞬間に僕はたちまち闇僕の攻撃をもろに受けてしまい、何か所も槍で刺されてしまった。

バリアジャケットも壊れ、至るところから血が出てしまい、僕はその場に膝を付いた。

「ガハッ……………ま、まだだ……………フォース……………フィールド……………」

僕はポロボロながら力を振り絞りフォースフィールドを張る。

「諦めろ、お前はとう足掻いたところで俺には勝てない」

「くっそおおおお!!」

僕は無我夢中で闇僕に突っ込んでいった。

が

「ふんっ、目障りだ。消えろ……………黒覇、一閃」

黒い刃が、僕を貫いた。

そして、僕はその場に崩れ落ちた。

（ああ……………負けちゃったか

……………僕は……………どうなるのかな？

……………死ぬのかな？

何か、大切な約束を

何か

あれ？

忘れていたような……)

ふと僕の脳裏に、あの情景が蘇った。

それは友と交わした誓い

「ふっ、君はまったく……死ぬなよ」

「……………ああ、約束だ」

それは守りたい人との約束

「大丈夫ですよ、僕は死んだりしませんって……………絶対に！」

「『約束だよ（やで）』」

思い出してくると、不思議と僕に力が沸き、再び立ち上がる。

「バカな、まだ立ち上がれるだど!?!」

「僕はまだ死ぬわけにはいかない。友のために、大切な仲間達のために、僕は負けられないんだ!?!」

「ほざけえええ!?!」

その瞬間、僕を眩しい光が包み込んだ。

気が付くと、僕はまた真っ白い空間に浮かんでいた。

さっきと違うのが、ザックスが腕にではなく、目の前にいると言っていることだ。

「ザックスここは、いったい？まさかまた僕の心？」

『いえ、そうではありません。ここは私が作り出した疑似空間です』

「な、なるほど………」

『マスター、私はあなたに言わなければならないことがあります』

「何かな？」

『以前、騎士カリムの所で“覇剣・エツケザックス”について聞きましたね』

「うん。………って、まさか」

『はい。私は、古代ベルカの遺産、“ロストロギア 覇剣・エツケザックス”です』

「……………で？」

『驚かないんですか!?!』

「まあビックリはしたけど、ザックスが僕の相棒なことに、変わりはない……………だろ？」

『マスター……………失礼しました。愚問でしたね』

「そう言うこと。それよりどうする？今の僕じゃ、あいつには勝てない」

『大丈夫ですマスター。私にいい考えがあります』

「いい考え？」

『はい。やつが、マスターの中に眠る闇の力を利用したように、マスターは自信の中に眠る光の力を手に入れればいいんです』

「光の力？」

『はい。闇の力が存在すると言つことは、同時に光の力が存在する
とでもあります』

「なるほど、そう言うことが……………」

『そしてマスター、更に強くなる方法があります。しかし、これは
同時にリスクもあります』

「……………聞こうか」

『私の記憶が戻ったことで、新しいフォームが追加されました。し
かしこれは、ベルカの時代に私が覇剣と呼ばれた所以のフォームで
もありません。力に溺れ逆に身を滅ぼしていった者が、過去に何人も
います。……………それでも、やりますか？』

「もちろん、僕はみんなのために勝たなくちゃならないからね。それに、ザックスとなら、大丈夫な気がする」

『……………分かりました』

「じゃあいこうか……………相棒!!」

『イエス、マイマスター』

その瞬間、僕を包んでいた光が晴れ、闇僕を吹き飛ばしていた。

「くっ、どうなっている!?! いったい何が起こったんだ!?!」

「いくよ、リミットブレイク・パラディンフォー！ザックス、ストレイダーフォーム！」

『オーライ。チェンジ・ストレイダーフォーム』

そして僕を暖かい光が包み込み、バリアジャケットやザックスの様子が変わっていく。

バリアジャケットは、鎧が赤から白に変わりマントも綺麗な赤に染まった。

ザックスは全長が1mくらいの巨大な剣になった。

「これが、僕の光の力……………これならっ！」

「光の力を手に入れたか。だが、やはり俺には勝てん！」

そして闇僕はこちらに突っ込んできた。

「烈空……………黒龍槍!!」

闇僕は僕の中でも最強の技を出してきた

がしかし、今の僕にはそこまではなかった。

「はあっ!!!」

「なあっ!?!」

ザックスを人振りして攻撃を止める。

さすが覇剣と言われただけのことにはある、すごい力が握っているだけで伝わってくる。

「今度はこっちからいかせてもらう！ザックス、ロードカートリッジ！」

そうして僕はカートリッジをロードし一瞬で後ろを取る。

「新・虚空撃覇斬！」

「うわあああ！！」

闇僕はかなりの距離を飛んでいった。

しかし、まだ終わりではなかったようだ。

「くそっ！だったら、こいつはどうだ！！」

そして闇僕は空中に上がり力をため始めた。

おそらく、メテオ・エクスプロージョンを射つつもりのようだ。

「だったらこちらも、この一撃で終わらせる。ロードカートリッジ
！」

「ロードカートリッジ、フルドライブ」

そして僕は赤いオーラを纏い、ザックスの刀身にはこれまた赤い光
が宿る。

「デス……………メテオ……………」
「終蓮……………絶覇……………」

しばらく二人に沈黙のときが流れる。

そして

「……………エクスプロージョン!!!」

「……………閃光斬!!!」

その光景は、黒い球体……………いや、漆黒の太陽に、一筋の紅蓮の光が向かっていくような光景だった。

「はあああああ!!!」

僕はザックスで漆黒の太陽を切り裂き、闇僕の本体に一太刀を入れた。

そして振り返ると、闇僕が斬った場所から少しづつ消えていった。

「ふんっ、この俺を倒したか……………だが忘れるな、俺はいつでもお前の中にいる」

「……………ああ」

「お前に隙があれば、いつでもお前と変わってやるからかな……せいでい気を付けることだ！はっはっはっ……………」

そうして、闇僕は消えていった。

それを見届けると、僕も意識を失った。

気が付くと、僕は病院の集中治療室で寝ていた。

見ると、体のどこにも異状や怪我は見当たらない。

「戻ってこれたのか……………そうだった、みんなは!？」

僕は慌てて治療室からでた。

すると、ヴァイスとザフィーラを見かけた。

「『光司（旦那）！？』」

「やあ二人とも。心配をかけたね。それより状況は？」

「どうやら、連中が再び動き始めたようだ。六課は最前線で戦っているらしい」

「俺たちが寝ちまつてる間に、ずいぶん大変なことになってるみたいだぜ」

「なるほど………それじゃあ二人とも、いこうか!!」

「『あゝ（おっ）!!』」

そして僕らは戦場に向かう。

大切な仲間を守るために。

第38話「光と闇」（後書き）

次回からはそれぞれの戦いについて書きたいと思います。

多分更新は今までより遅れると思いますのでご了承ください。

第39話「最終決戦〜序章〜」（前書き）

いよいよ決戦……………と言いたいところですが、ぶっちゃけ
まだです。

これから、全体的に少しずつ書くので進みが遅くなりますので、あ
しからず

それではどごごぞー！

第39話「最終決戦〜序章〜」

起動六課が出動して約1時間、まだ光司が起きていない頃、六課のメンバーはそれぞれの場所にたどり着こうとしていた。

スバルside

私たちフォワードとギン姉は地上本部に向かっていて、人造魔導師二人と召喚師とプレデター………だったかな？の侵入を防ぐため、現場へと向かっています。

「ねえティア、人造魔導師二人ってどんな人なのかな？」

「さあね。でも、あたしたちの敵に変わりはないわ」

するとキャラ口が遮るように言った。

「あの一！……そうとも言い切れないと思います……」

「どういこと？」

「はい、実は皆さんには話してなかったんですけど、私その人造魔導師の人と話したんです」

「『ええええつ！？』」

これには全員が驚いた。

敵であるキャラと話さずがない。

ましてや、あんなテロを起こした側が話し合いをするはずもないと思っていた私はとても驚いた。

「えっと……ルークさんって言うんですけど、その人『僕たちを止めて欲しい』って言うてました。敵なら、そんなことは言わないと

思います……………」

「なるほど、確かにそうね。でも、戻って可能性も……………」

ティアがそこまで言うと、突然私たちはどこからか攻撃を受けた。

「っ！？みんな散開！！」

ティアの指示でみんな散り散りになってしまった。

私とギン姉はもといた場所から少し下がって攻撃を避けた。

土煙が晴れてくるにつれ、向こう側に一人の人影が見えてきた。

でもよく見ると、それは私たち姉妹がよく知る人物だった……………」

……………」

「嘘……………そんなことって……………」

「だって……………あの時行方不明だって……………」

そこには両腕にリボルバーナックルをし、綺麗な薄い紫の長い髪を
棚引かせている人物が立っていた……………

そう、そこにいたのは

「『何で（お母さんが……………』」

~~~~~

ティアナside

私たちは突然の攻撃を受けバラバラになってしまった。

私はとつさに近くのビルに入ったけど、スバル達は大丈夫かしら…

……

そんな心配をよそにどこからか声が聞こえてきた。

「ナイスな判断だったね。でも、君はこれで一人になってしまったよ、ティアナ・ランスターさん」

「っ!？」

声のした方に素早く振り向くと、片手に銃を構えた茶毛の男性がいた。



「あなたは？」

「ああ、まだ名乗ってなかったね、僕の名はルーク」

「ルークって………まさか!？」

「その口ぶりだと、どうやら僕のことを知っているようだね。あの女の子に聞いたのかな？」

「そうよ。あなたいったいどういうこと!?!あなたは私たちの敵じゃないの!?!」

するとルークと名乗った男性は辺りを見回し始めた。

何かを探しているのだろうか？

「ちっ、囲まれたか……………」

「えっ？」

「いや、何でもない。それに、今君には話せないんだよ」

そう言って、私に銃を向けた。

私も慌てて銃を構える。

（不味いわね……………私一人でこの人の相手をしなきゃいけないなんて……………でも、負けるわけにはいかない！）

こうして、ひとりぼっちの戦いが始まった。

~~~~~

フェイス side

私は今、シスターシャツハとDrクロウのアジトの前に来ている。

入り口は森の中にあり、かなり分かりにくいようになっていた。

「シスター、それにしてもよくこんな所分かりましたね」

「ええ。実はここはフェイス執務官がお調べになっていた、スカリエッティのアジトのようだったんです」

「えっ！？それじゃあスカリエッティも中に!？」

「いえ……………スカリエッティの姿はありませんでした。今……………ここにいるのか……………」

「そう、ですか……………それじゃあ行きましょう」

「はいっ」

そして私たちはアジトへと潜入していった。

中には空の生体ポットが数個転がっていた。

「どうやら、Drクrowも生物遺伝子に関する研究をしていたみたいです」

「ええ。でも光司の話だと、他にも違法な研究を数多くしてきたとか……………」

「一秒でも早く、逮捕しなければなりませんね！」

「はい、行きましょうー！」

そうして私たちは急いで奥へと進んでいった。

~~~~~

エリオside

僕とキャラコはあの突然の攻撃の後スバルさん達と別れ、今は召喚師の少女向き合っている。

その少女は何だか目が虚ろで悲しそうな目をしていた。

「あなたの名前は！？」  
「どうしてこんなことを！？」

「……………」

キャロの問いかけに彼女は答えずただ黙っていた。

すると、おそらく彼女の召喚獣であろう黒い人形のものが、僕ら目掛けて襲ってきた。

「っ！？はぁっ！！」

僕はとっさにキャロを守るようにその攻撃を防ぎ、キャロの隣に着地した。

そいつも攻撃した後彼女の隣に戻っていた。

「訳を話して、そしたら私たち何か手伝えるかもしれないんだよ！」

「……………」

相変わらず、彼女は答えないままだ。

やっぱり、戦うしかないのか……………」

僕たちはいったいどうすればいいのか……………そんな疑問を抱えつつ、僕たちは戦いに集中する他なかった。

……………」

シグナムside

私は今、地上本部の近くの空にいる。

騎士ゼストを止めるためだ。

「起動六課、ライトニング2、シグナム二尉です。以前は首都航空隊、あなたの後輩になります」

「そうか……………」

「地上本部へは、どういったご用で、復讐ですか？」

「いや……………古い友人に、レジアスに会いに行くだけだ。一つ、確かめたいことがあってな」

「それは、どのような理由で？」

「悪いが、言葉で語れることではない。そこを……………通してもらおうぞー！」



「言っていただけなければ、言葉にしていただけなければ、譲れる道も譲れません！」

そして、私たちはお互いに武器を構える。

さらに、互いのユニゾンデバイスも前に出る。

「グダグダ語るなんてな、騎士のすることじゃねえんだよ!!！」

「騎士とかそうでないとか、お話ししないで意地を張るから戦うことになっちゃうんですよ!!！」

そしてそれぞれにユニゾンをして、騎士ゼストは髪やバリアジャケットの一部が金色に、私は全体が薄い紫色へと変化した。

「……………いきます」

「……………来い！」

そうして文字通り、騎士同士の戦いが始まった。

~~~~~

なのはside

私はヴィータちゃんとはやてちゃんと隊員達と一緒に、ゆりかごから出てくる航空戦力と戦っている。

今まで戦ってきたガジェットと違って、今戦っているのはステルス機みたいな形で、AMFやミサイルやレーザー砲などが搭載されていてとても厄介だ。

けど、時間がない。

早く中に突入してヴィヴィオを助けないと！

「第3密集編隊、撃破！………次！」

「こっちも第15密集編隊、撃破！くそっ！何でこんなに多いんだよ！」

「確かに、倒しても倒しても、次から次へと出てくるね………」

「そやけど、諦めたらあかんで………機動六課、ここが踏ん張りところやで………」

「『うん（おう）！』」

私たちは諦めない。

あの人なら、光司君なら、きっと諦めないから。

そして、光司君はきっと帰ってくるって信じてるから!!

~~~~~

クロノside

機動六課のメンバーが出動してはや一時間、僕は次元航行部隊の指揮を任されているのだが、先の混乱のせいでなかなか部隊が集まらない。

時間も無いのに……

すると、ユーノから通信が来た。

「何か分かったか？」

「うん。ゆりかごに関する文献は少なからずあったからね、探すのは難しくはなかったよ。そして、あの聖王のゆりかごは古代ベルカの時代でさえロストロギア扱いでね、かなりヤバイ代物だよ」

「だろうな。それで、停止方法は？」

「ゆりかご内の駆動炉を破壊するか、鍵となる聖王がそれを命じるか………ぐらいかな」

「ヴィヴィオはDrクロウに洗脳されてしまっているようだ。それは不可能に近い。そして駆動炉も、破壊したところで直ぐに止まるかどうか………まあ、やってみるしかないと思うが………」

「あとクロノ、もう一つだけ………小さい可能性がある」

「なんだ？」

「古代ベルカの時代………これと同じようにロストロギア扱いされていた一本の剣がある。その名も、‘覇剣ーエツケザックス’」

「それは!？」

「知ってるの？」

「ああ、前に一度騎士カリムからその名を聞いたことがある。何でも、光司のデバイスがその可能性があるとかで………それで、それがどうかしたのか？」

「この文献によると、この剣は破壊の剣、勝利の剣と呼ばれていたらしくてね、あのゆりかごにも勝るとも劣らない力を持っていたらしいんだ」

「つまり……」

「うん。もし光司が持っているデバイスが、このエッケザックスだとすれば……」

「ゆりかごを止められるかも、ってことだな？」

「そう言いつつ」

「しかしこれも難しいな……光司は今瀕死の状態らしいし、それがエッケザックスという可能性の方が低い……それでユーノ、ゆりかごが軌道上に上がるまで、あとどのくらいだ？」

「あと……2時間39分……そっちはあとどのくらい？」

「……2時間49分だ……」

「……………10分か……………」

「……………すまない、なのは、フェイト、はやて……………頑張っ  
てくれ……………」

僕は自分の無力さを痛感しつつも、ただ仲間達の健闘を祈るしかなかった。



第39話「最終決戦〜序章〜」（後書き）

今回はようやく戦闘に入ります。

そして最後にはあの人も！？

第40話「最終決戦〜第一章〜」（前書き）

前回、戦いになっていきましたが、何かまだ戦闘が微妙です。

おそらく次回には確実に本格的に戦闘に入れると思います。

それではどごごぞー！

第40話「最終決戦」第一章」

機動六課のメンバーがそれぞれに戦闘を開始してから1時間が経過した。

この頃には光司も復活し、行動を開始していた。

~~~~~

光司 side

僕は病院を出て二人と別れた後、詳しい状況を把握するため通信を開いた。

「ルキノ、僕だけど今の状況を教えてくれないか？」

「えっ！？こっ、光司さん！？お体の方はもう？」

「うんもう大丈夫、心配かけたね。それより、状況は？」

「はい。現在フォワード達はそれぞれ人造魔導師や召喚師と交戦中、なのは隊長とヴィータ副隊長と部隊長はゆりかごの外部にて航空戦力の迎撃に、フェイト執務官はシスターシャツハとともにDrクロウのアジトへ潜入、シグナム副隊長とリイン曹長は地上本部に向かっていた騎士と交戦中です」

(となると危ないのは、ゆりかごか……………)

「分かったありがとう！僕もすぐ現場に向かう！」

「了解です！」

そうしてルキノとの通信を切り、新たに通信を開く。

通信の相手はクロノだ。

「もしもしクロノ、僕だ」

「っ！？光司、もう平気なのか！？」

「ああ、もう大丈夫！それより、次元航行部隊の方はどうだ！？」

「いや………こちらはまだ時間がかかりそうだ。そして光司、1つ
いいか？」

「どうした？」

「前に騎士カリムが言っていた『覇剣 エッケザックス』の事を覚えてるか？」

「ああ、まあ」

「あくまでも可能性の話として聞いてくれ。もし、光司のデバイスがそのエッケザックスだったとしたら……… ゆりかごを止められるかもしれない」

「どづいづいとっ」

「1時間ほど前にユーノから通信が来てな、その話をされたんだ。エッケザックスは古代ベルカの時代で、ゆりかごと同じ位の力を持っていたそうだ。もしかしたら、ゆりかごを食い止められるかもしれない……… と思ってな」

「なるほど……… そうだったのか」

僕はこの言葉を聞いた途端、笑いが込み上げた。

相棒が、そんな力を秘めていたなんて……… 心強い!!

「大丈夫さクロノ、ゆりかごは必ず止める……………僕と僕の相棒、エッケザックスがね!!」

「何っ、どういことだ!?!」

「ごめん、説明は後で!それで、ゆりかごが軌道上に到達するまでの時間は!?!」

「あ、ああ。……………あと、1時間39分だ」

「それだけあれば十分だ!じゃあクロノ、行ってくる!」

そうして僕は通信を切るうとする

「待て光司」

「ん、どうした？」

「こんなことを言うのはあれなんだが……………たのんだぞ!!！」

「ふっ、言われなくても!!後始末はそっちに任せるよ!!！」

「ああ、行ってこい!!！」

そうして僕はみんなのもとへ急いだ。

~~~~~

ティアナside



ルークってヤツと戦いはじめてから約1時間、私は幻術や地形を利用してなんとか粘っていた。

見ている限り、相手の強さは確実に私より上。

けど、私には分からないことが一つあった。

それは

「ちっ、またハズレか。僕幻術苦手なんだよな。ティアナー、どこにいるんだー！！！」

「まったく、ここまで丸聞こえだわ……………」

そう、ルークには敵対の意思がまるで見られない。

さっきから幻術を攻撃しながら叫んでいるだけだ。

(本当、どう言いつもりなのかしら？敵ならもつとまともに攻撃してくるはずだし、もし敵じゃないならこんなことしないわよね……  
………  
うっん、分かんないわ………)

私が一人で考えていると、突然足元から黄色いレーザーのようなものが貫通してきた。

「っ、何!？」

見ると、ルークのいた場所から一直線に綺麗な穴が空いていた。

それこそレーザーでも通ったかのように、綺麗に………

「危ないわね。こんなの喰らったんじゃ、ひとたまりもないわ!!  
とにかっ『やっと見つけたよ、ティアナ』ええっ!？」

前を見ると、さっきまで違う所にいたルークがいつの間にか目の前にいるのである。

「くっ、」のおっ！！」

私はとっさに数発ルークな向かって射つが

「まだまだっ！」

ルークによってすべて相殺されてしまった。

もはや万事休す、やられるかと思ったその時だった。

いきなりルークがとんでもないことを言い出した。

「ティアナ、お互いガンナー同士、最後は決闘で勝負しようよ」

~~~~~

スバルside

私たちがお母さんと戦って1時間、私たちは相手がお母さんと言っ
こともあり手が出せずにいた。

「お母さん！！分からないの、スバルだよ！！」

「……………」

お母さんは無言のままリボルバーナックルを振り上げる。

「スバル、危ない！！」

間一髪ギン姉のおかげで避けることが出来たけど……………二人とも
かなりやばい。

「ギン姉……………あの人……………」

「分かってるスバル、多分、あの人は私たちのお母さんよ……………」

「やっぱり……………でもどうしようギン姉、お母さんを攻撃するなんて……………」

「それは分かってる……………私だって辛い……………でも、今は戦うしかないの！多分、お母さんは操られてるだけだと思うから、二人で助けよ、ね？」

「ギン姉……………うん！！助けよう、お母さんを！！」

そうして二人で立ち上がり、お母さんの方に向く。

もう迷わない……………必ず、助ける！！

「いくよ、ギン姉！！」

「ええ、スバル！！」

「『はああああ……!』」

私たちは戦う。

大事なものを取り戻すために。

~~~~~

キャロside

私はあの召喚師の女の子と戦い始めてしばらくたつけど、まだまともにお話もできないまま戦っていた。

「どっぴしてこんなことするの!?!何で、理由を教えて!?!」

「……………お母さん」

すると、始めて私の呼び掛けに答えてくれた。

「お母さん？」

「ドクターは、私のお母さんの目を覚まさせてくれる……………お母さんが目覚めたら、私は一人じゃなくなる……………お母さんがいれば、他の人はどうでもいい……………だから……………」

「そんなこと……………」

「そんなこと？……………あなたにとってはそんなことでも、私にとつたら大事なこと……………」

「違う！お母さんのことじゃなくて！！」

「あなたと、もう話したくない……………」

彼女が言い終わった瞬間、召喚虫が私に向かって来た。

けど、エリオ君が間一髪の所で助けてくれた。

「私アルザスの竜召喚師、起動六課の魔導師、キャロル・ルシエ！」

「同じく、エリオ・モンディアル！」

「あなたの名前は……………」

「……………ルーテシア、そっちの子はガリユー」

「ルーちゃん、他人を不幸にして自分だけ幸せになるなんておかし



いよ………そんなの間違ってるよ………」

「うう………あぁ………」

私の言葉を聞いた途端、突然ルーちゃんが苦しみ出した。

「『ルー（ちゃん）！……！』」

私たちがそばに駆け寄ろうとすると、今度は巨大なモニターみたいなのが現れた。

そこには銀色の髪をした白衣を着た男の人が映っていた。

「困るね君たち、彼女の心を惑わすようなことを言ってもらっては」

「『誰っ（だっ）！……！』」

「これは失礼した、自己紹介がまだだったね。はじめまして、Fの遺産と竜召喚師、私の名は……………Drクロウだ」

~~~~~

フエイトside

私たちは時々現れるプレデターを倒しながらアジトの奥へと進んでいった。

すると、奥から何かが近づいて来るような音がしてきた。

「っ、っの音は!?!」

「どっちら、何か近づいて来るようですね……………」

そうしてお互いにデバイスを構える。

緊迫した空気が流れ、しばらくするとその何かが見えてきた。

「……………あ、あれは……………」

「……………な、何でしょう……………」

私たちの前に現れたもの。

それはプレデターより体は一回りほど大きく、全身が金属で構築されている人形のロボットが立っていた。

しかも全部で3体いるようだった。

「フエイト執務官、おそらくこれも……………」

「ええ、どつやらこいつらもドックロウが作り出したようですね」

見たところ、外見はプレデターと何ら変わりはないようだったので、
私たちは攻撃を仕掛けることにした。

だが

ガキイイイイン

「『っ!?!』」

あろうことか、私たちの攻撃は先頭にいた一体に簡単に防がれてしま
まった。

私たちは念のためすぐに距離をとった。

「こいつ………思ったよりもやりますね」

「ええ、でも、早くしないとD r kクロウにっ。私が、どうかしたかね?』っ!?!?」

突然奥から声が出たと思うと、そこにはあの男の姿があった。

「久しぶりだねFの遺産いや……………フェイトテストロッサ執務官」

「D r kクロウ!」

~~~~~

ゼストside

しばらくの間、俺はあの管理局の騎士と戦っていた。

しかしあの騎士、確かシグナムと言ったか……………あの太刀筋は紛れもない古代ベルカの騎士。

そしてあの炎と魔力光……………もしかすると、アギトの真のロードかもしれない……………おっといかん、今は戦いに集中せねば。

俺は気を取り直してあの騎士と向き合う。

「はあああつー!!」

「ふんっー!!」

それぞれの剣と槍が交差し、乾いた金属音が響く。

そしてしばらく均衡した後、お互い距離をとった。

「レヴァンティン！」

「シユラーゲンフォーム！」

するとシグナムは剣に炎を纏わせ、さらにそのまま剣を伸ばし攻撃してきた。

こちらもカートリッジを一発ロードして反撃にでる。

「炎熱消去、衝撃加速！」

アギトの力で放った衝撃波は剣の炎を消し去り、さらに攻撃も防いだ。

すかさず俺は再び攻撃を仕掛ける。

「はぁぁっ！ー！！」

「くっ！……………うわぁぁー！！」

シグナムは鞘で攻撃を防いだが鞘が耐えきれず、下に落ちていった。

だが、俺の方も限界に近い……………急がねば……………

「アギト、行くぞ……………」

「でも旦那、からだの方は大丈夫かよ？」

「問題ない……………急ぐぞ」

「おう！！」



そうして俺は地上本部へと急いだ。

友に……………あの日の真実を聞くために……………

~~~~~

グイータside

戦闘が始まってからけっこうたったが、あたしたちはまだ外の航空戦力に苦戦していた。

「くそつ、突入口はまだ見つからねえのか!？」

愚痴をこぼしながらも一体潰すと、別動隊から通信が来た。

「お待ちせしました!!突入口、発見しました!」

「はやくちゃん！私、なかに入るよ！！！」

「うん、ヴィータもお願いや！」

「了解！！！」

こうしてあたしとなのははゆりかごの中に突入した。

中に入るとAMFが重く、危うく落つこちるところだった。

「AMFが重いな……………突入隊はまだ到着しねえのか！？」

「……………ダメ、まだみたい」

「ちっ、あたしらだけで行くしかねえか……………行くぞなのは！！！」

「うんっ！！」

そうしてあたし達は奥へと進んでいった。

途中何体がプレデターが出てきやがったが、私が全部潰してやった。

「ヴィータちゃん、飛ばしすぎだよ！」

「うるせえ……………後衛の魔力温存も、前衛の仕事なんだよ……………」

まあ、確かにちょっと無理しちまったが問題ねえ……………いける。

すると本部から通信が来た。

「駆動炉と玉座の間の位置が分かりました。今そちらに地図を送り

ます
「

そうして送られた地図を見ると……………

「まっ、真逆!?!」

「突入隊はまだなのか?」

「はい……………なにぶん各地から要請しましたので、時間がかかっています……………」

「そうか……………なら、スターズ1とスターズ2、別行動で目標に向かう」

「了解しました」

そこまであたしが言って通信が切れる。

「ちょっとヴィータちゃん！――手に別れるってどういふこと！？」

「どうもこうも、駆動炉と玉座どっちか止めただけじゃ、止まらねえかもしれないねえ……………なら――手に別れた方が効率がいい」

「それは分かってるけど！……………でも『それにな』っ！？」

あたしはなのはの言葉を遮ってアイゼンをつきだして言う。

「あたしの本職知ってるだろ？破壊と粉碎……………鉄槌の騎士ヴィータと錬の伯爵グラーフアイゼンに、壊せないものなんてねえ。だから、あたしが駆動炉の方へ行く、お前はとっととヴィーヴェイオを助けてこい。駆動炉なんざすぐぶっ壊して、すぐに合流してやるよ」

「絶対、絶対すぐに合流だよ！！」

「おお、任せとけ」

そしてなのはは玉座の間の方へ向かって行った。

それを見届けた後、あたしも駆動炉へと進んでいった。

~~~~~

光司 side

クロノとの通信が終わって、いざ行くところとした時急に通信が来た。

こんなときに誰だろうと思いでみると、そこには意外な人物が映っていた。

白衣を身に付け、紫の髪にキラリと光る金色の瞳。

そう、そこに映っていたのは

「スカリエッツァイ！？」……………何の用？」

すると

かくっ

こけた。

「きつ、君はまったく……まあい、何やら大変なことにな  
っているようじゃないか」

「そりゃそつだけど……まさか!？」

「そのまさかだよ。私はやらねばなしは趣味じゃなくてね。それ  
に、君には命の借りがあるからね、私も協力させてもらうよ。もち  
ろん、娘達も君のためなら喜んで協力するだろう」

この言葉に僕はかなり驚いた。

まさかとは思ったけど、本当に言い出すとは……でも、こ  
れは心強い。

「……分かった、ありがとう。それで悪いんだけど、ナン  
バーズみんなの配置はこちらで指示するよ」



「ああ、かまわないよ。それに私より君の方が的確だろうしね」

「それはどうも。あとそれと、もう一つお願いしていいかな？」

「何だいそれは？」

「それは……………をして欲しいんだ」

「なるほど、だったらそれは私とウーノとクアットロでやってお」  
「う」

「ありがとう。助かるよ」

「なに、大したことはない。それじゃあ、気を付けたまえよ」

「うん、そっちなも！」

そして僕は通信を切る。

「それじゃあ行くところか、ザックス！！」

「オーライ、マイマスター。スタンドバイレディ、セットアップ」

そしてセットアップと同時にリミットブレイクをした。

「よし……………行くぞ！！！！」

僕は再び戦場へと向かう。

大事な仲間を、今度こそ守り抜くために。

第40話「最終決戦」第一章」（後書き）

まことに申し訳ありませんが、今日からテストのため、一週間ほど更新ができません。

話が中途半端な所申し訳ありません！

ところで話は変わりますが、ゆりかご戦が終わった後って、季節的には何になるのでしょうか？

誰かご存じなら教えてください。

よろしく願います！

第41話「最終決戦〜第二章〜」(前書き)

やっとテスト呪縛から解放されました。

お待たせして、申し訳ありませんでした。

突然ですが、

本日の挿入歌

「T・M・Revolution」で

「Meteor ミーティア」

分かる人には分かります。

1109

第41話「最終決戦」第二章」

光司が行動を開始して30分程たった。

相変わらずゆりかごからの攻撃は続いていたが、町の被害は少なかった。

そしてそれぞれの戦いが……徐々に終わりを迎えようとしていた。

~~~~~

ギンガside

私たちはあれからお母さんと戦っている。

けれど、私たちの攻撃は全然当たらない。

それにカートリッジも魔力も……………

そう私が油断していた時だった。

お母さんがローラーで一気にスバルの方へ近づき、アップアーで空中へと打ち上げた。

「っ！？スバル！！」

私はすぐにスバルの方に行こうとしたが

「はっ！？……………キヤアア！！」

お母さんに阻まれてしまい、私もリボルバーナックルで吹き飛ばされてしまった。

そしてお母さんはウィングロードで飛ばしたスバルの方へ向かい、

再び攻撃しようとした。

しかしその時

《ウィンググロード!!》

スバルのマツハキャリバーが自らウィンググロードを発動させ、お母さんの一撃を回避したのだ。

そしてその後私の方へ戻ってきた。

「スバル、大丈夫!？」

「ギン姉……………それに、マツハキャリバー……………」

《練習通りです》

「ええ?.....」

《まだやれます、私も、あなたも。それに.....》

すると、マツハキャリアバーの呼び掛けに答えるように私のブリッツ
キャリアバーも反応した。

《はい、私たちも。そうですね、マスター》

「ええ、もちろんよ!..!」

「でもギン姉、私たち.....勝てるのかな.....お母さん.....
...本当に助けてあげられるかな.....」

「それは.....」

私は言葉につまった。

正直言つて、今まで戦つた中で最も強いと思う……そんな相手に、自分達の母親に……勝てるのだろうか……こう思い始めていた。

(こんなときに……あの人なら何て言ってくれるのかしら……
……光司さん……)

私はダメもとで念話を試してみた。

(お願い!!………答えて、光司さん!!)

(何だいギンガ?)

「えっ？……………えええええ！！！」

私は念話の返事なのに思わず叫んでしまった。

スバルも突然私が叫んだのを聞いてかなり驚いてる。

「ギン姉、どうしたの？」

「ス、ス、スバル、あと……………えと……………こ、こ……………」

「ギン姉まったく言えてないよ……………」

私は驚きのあまりスバルに説明することが出来ずにいた。

すると、光司さんがスバルにも念話を聞こえるようにしてくれた。

(スバル、大丈夫かい?)

(その声!もしかして、しい兄なの!?)

(正真正銘、本物だよ)

(しい兄……………良かった、本当に良かった)

見るとスバルが少し涙目になっている。

それを見ると、なんだか私も目頭が熱くなってきたのを感じた。

そして私は事の次第を光司さんに説明した。

(なるほど、大体の事情は把握したよ。それにしても、二人ともよく頑張ったね、さぞかし辛かっただろうに……………)

(は、はい……………)

(しい兄、私どうしたら……………)

(二人とも思い出して……………その手の魔法は一体何のためにあるのかを)

(私たちの魔法……………)

(……………敵を打ち負かすため?……………違う!
何かを壊すため?……………違う!

その手の魔法は、大切な誰かを守ったり、助けてあげたり出来るものだったことを……………)

~~~~~

スバル side

しい兄の念話を聞いた途端、私のはっとした。

そうだった。

しい兄の言う通りだった。

この手の魔法は、誰かを傷つけるためのものじゃなく、大切なものを守れる力、悲しい今を撃ち抜く力なんだ！！

(二人ならきつと大丈夫だよ。それに、僕が教えた技もあるしね)

(うん、ありがとうしい兄！！)

(はいっ、光司さん！！)

そうしていい兄との念話は切れた。

お母さんの方はどうやらこっちの動きに気付いたようだ。

「行くよ、マツハキャリバー！！！！」

「私たちも行くよ、ブリッツキャリバー！！！」

《《オーライ相棒<sup>マスター</sup>！！》》

「ギア、エクセリオン！」

《《イグニッション》》

「ブリッツキャリバー！」

《《フルドライブ》》



そして私たちはお母さんと正面で向かい合う。

しばらくの沈黙の後

「『はああああああつ！！』」

二人同時にお母さんとの距離をつめていく。

しかしお母さんの方はその場から動かずにいた。

そして

ガガアアアン

私たちの拳とお母さんのシールドがぶつかる。

お母さんは両手でこっちの攻撃を防いでいる……………これなら！

(ギン姉!!！)

(今ならいけるわ!)

ギン姉と念話で確認をして、私たちの最大の技を放つ。

そのため、私たちはそれぞれリボルバーナックルと逆の腕に魔力を溜めて拳をうった。

まあこの攻撃もしい兄に教わったから出来ただけだね。

「『マツハ(ブリッツ) キャリバー!!』」

《《ロードカートリッジ、スピニングスタート》》

カートリッジを三発ロードして、私たちのリボルバーのシリンダーが回り始める。

回転速度が上がるにつれ、シリンダーを回る魔力の渦は、私は青色にギン姉は紫色に変わっていく。

そしてだんだんと、魔力が収縮していくにつれてその色は濃くなっていく。

そして

「『ダイバイイイイン……………ナツクル！……………！』」

青と紫の光線が、お母さんを呑み込んだ。

~~~~~

ティアナside

その時、ルークの言った事を全く理解できなかった。

敵を追い詰めておいて、いきなり『決闘で勝負しよう』だなんて……
………下手をしたら自分が負ける可能性だってあるのに、一
種の挑発かしら？

でも、これはこっちにとって好都合。

射撃の腕なら、あいつにだって負けてない！

だって…………私の射撃の腕は……………兄さんが鍛えてくれ
たんだもの！

そこで私はその決闘を受けることにした。

「い、いいわよ。受けて立とうじゃない！」

「そうこなくっちゃ。それじゃあ始めるよ」

そうして私たちは互いに一丁の銃だけ持って、背中合わせになって立つ。

まるで西部劇のワンシーンね、これじゃ。

「ティアナ、3つカウントしながら一歩ずつ歩いて、3歩目で互い
に向き合って一発で決める。それでいい？」

「ええ、大丈夫よ」

「それじゃあ……………いくよ」

そしてついに決闘が始まった。

「ワン!!」

カツッ

最初の一步。

大丈夫、いける……………そう自分に言い聞かせた。

「ツーン！」

カツッ

あと一步……………

落ち着いて、冷静になるのよ私……………そう、また言い聞かせた。

そして

「スリー!!!」

その言葉を言い終わらないうちに二人とも振り返り、銃を射つ。

私は回転と同時にルークの体を狙い射った。

狙う場所は心臓の部分。

ある程度の威力で射ったら気絶くらいするだろう。

するとあり得ないことが起こった。

「えっ?.....」

私を狙ったはずのルークの弾丸は私に当たることなく私のすぐ横を通りすぎた。

そして私の弾丸はルークに見事命中した。

「.....ありがとう、ティアナ.....」

そう言ってルークはその場に倒れた。

「何?.....どう言っつとよ.....」

私が訳も分からず混乱していると

ズガアアアン

突然周りの壁を突き破ってプレデターが現れた。

その数約10体。

「っ！？……………完全に囲まれたわね」

（前にルークが言ったのはこの事だったのね……………って
あれ？何でルークはあの時舌打ちしたのかしら。今思えば不思議だ
わ……………）

そんなことを考えている暇なく、プレデター達はジリジリと近付いてくる。

「ちょっと……これはヤバイわね……私……」
「こで殺られちゃうのかな？」

「兄さん……」

私は無我夢中で念話を送った。

「ティアナ、もう諦めるのかい？」

「え？……」

(まだ、諦めるのは早いと思うよ)

(その……声……兄さんの？……)

(そうだよ、心配かけてごめんね)

(兄さん!!……バカ……本当に心配したんだからね!)

(本当にごめん。それより)

ティアナの力は、ランスターの弾丸は、こんな所で終わってしまうものだったのかい？

違うだろ？)

(う……………うん！！)

兄さんの言う通りだ。

こんな所で終わるわけにはいかない！

私は証明しなくちゃならない……………兄さんの教えてくれた魔法は、私の弾丸は、どんな状況だって負けないってことを！！

そう思い返し私は立ち上がる。

プレデター達は相変わらず私たちを囲んだまま動かない。

(おそらく、こいつらは人工知能だから、囲んだ時の基本戦術で攻めてくるはず……………だったら、その初動を見抜けば、勝機はある！！！)

そうして私はあいつらが動くのを待った。

そして

ダッ!!

「っ!!そこおっ!!」

基本戦術、まずは相手の正面と真後ろから攻撃。

私はクロスミラーージュを二丁にして構え、前方と後方に同時に射つた。

すると私の攻撃は見事2体に当たり、倒した。

いける、これならいけるわ!!

基本戦術その2、相手が攻撃を防いだ場合何人が一歩下がり様子を見て残りの何人かは近接戦闘の準備。これは防いだ者がどの方向へ向かうか分からないためである。

そして案の定、プレデターは数体が数メートル下がり、残りが武器を構える。

数は約4体。

おそらく、配置は私を囲んで四方つてところね。

これなら大丈夫ね。

私はすぐに前、後、右、左、それぞれの方へ向けクロスファイヤを射った。

私の攻撃は次々と当たった。
しかし辺りは倒したときに出た土煙が広がってしまった。

「っ！しまった、これじゃ見えないわ！！」

周りのプレデター達は様子を伺っているようで攻撃してこない。

私は片方をダガーモードにして、こっちも様子を伺うことにした。

しばらくして、数体のプレデターがこっちに攻撃してきた。

私はダガーモードの方で攻撃を防ぐ。

「ぐうっ！………不味いつ、このままじゃあっ！」

そう思った瞬間、後ろから残りのプレデターがこっちに向かって来た。

私はもう片方で応戦するが、一体が止まらずに向かって来た。

「っ！？しまっ『ティアナ、伏せる！』っ！？」

私は声の言う通り急いで伏せた。

すると、そこにいたすべてのプレデターが黄色い光線によって倒された。

でも、この攻撃って……………

「ル、ルーク？……………」

「その通り！ティアナ、大丈夫？」

私が見つけた通り、あの攻撃はやはりルークのだった。

「えっ、ええ。でもこれはいつたい……………」

「うん、プレデターどもも全部倒したし、いいかな。実はね、そいつらは僕を狙ってきたんだ。裏切者の僕をね」

「えっ、裏切者!？」

「うん。僕は前からドクターには賛同できなかったからね、これを機会に抜けようと思ったんだ」

「じゃあキャラコが言ってたことは本当だった、ってこと?」

「そう言うこと。で、良かったら僕も君たちに協力させてくれないか?せめてもの罪滅ぼしとしてね」

「……………もちろん、歓迎するわ!!」

「ありがとう……………ティアナ」

こうして私たちに、新たにルークと言う頼もしい仲間が増えた。

エリオside

Drクロウが僕らの前にディスプレイで現れてから、ルーの目が真っ赤に染まり、次々と召喚虫を召喚し始めた。

そして中には巨大な召喚虫もあって、キャロがボルトールまで召喚しなければならなくなった。

そうして僕は体から触手が出たガリユーと向き合う。

「ガリユー、ルーはあいつに操られてる、もうやめるんだ!」

「……………」

ガリユーは黙ったまま、首を横に振る。

戦うしか……………無いのか……………

するとキャラロがルーを説得し始めた。

「ルーちゃん!!こんなことしたって、何にもならないよ!!」

「あなたたちには分からない……………優しくしてくれる人がいて
……………暖かい家族がいて……………私はいつも一人……………」

……………」

「『……………』」

その言葉に、僕ははっとした……………

そうか、そうだったのか……………

「ルーちゃん……………」

「ルーは僕らと似てるんだ……………」

「え？……………」

「私は小さい頃からずっと一人で、フェイトさんと出会っただけで生まれてることを後悔してた……………」

「僕は、誰かのコピーだって分かって、自分の存在が分からなくなつて……でも、フェイトさんと出会って、変わったんだ!!」

「……………わ、……………私は……………あああつ!!!!」

「『っ!?ルー（ちゃん）!!!!』」

すると急にルーがまた苦しみだした。

そして、またあの男がディスプレイに現れた。

「だから困るのだよ。君たちの言葉は、彼女にとって有害なものなんだよ。だから……………」

そう言いつつ……………

「あぁっ！………あぁぁぁぁぁ！………！」

「『ルー（ちゃん）！………』」

「……………」

「『ル、ルー（ちゃん）……………』」

ルーの目は先程と同じ真っ赤だけど、その目に生氣はない。

「………ただど、僕とキャロは確かに見たんだ……………ルーの瞳に涙が光っていたのを。」

「……………ガリユー、白天王、地雷王……………こいつら、殺して……………」

「『グウオオオ！！！』」

するとルーが召喚した召喚虫が苦しみだし、白天王に目玉のようなものが体から出現し、地雷王は辺りに放電し始め、ガリユーは体ノいたるところから爪のようなものが出てきた。

ガリユーにいたっては出た所や目から血が出ている。

僕は戦う覚悟を決めてキャラ口に念話で話す。

（キャラ口、ルーをお願い！僕はガリユーを止める！！）

（うんっ！エリオ君気を付けてね！）

そうして僕はキャラ口とは離れたビルに飛び移った。

ガリユーも、ルーを巻き込まないよう僕の方に来た。

「いくよ、ガリユー!!」

ガリユーはやはり無言のまま構えた。

そして

「でやあああつ!!」

ガキイイインッ

僕のストラードとガリユーの爪がぶつかると。

しかしさっきまでより若干僕が押されている。

「ぐうっ……」のぉー……」

僕はなんとかガリユートの攻撃を押し返したが、ガリユートは素早く一旦離れ、今度は勢いをつけて攻撃してきた。

「くっ！……………はっ！うわあああ！！！」

僕は受け止めてはいたが、しばらくしてストラーダを弾き飛ばされ、ガリユートの蹴りを喰らってしまった。

僕は近くの壁に叩きつけられ、ストラーダも遠くの方にあり取りにいけない。

そしてガリユートがジリジリとこちらへやって来る。

（不味い……………ストラーダは遠くにあるし、デバイス無しでガリユートと戦う何て無理だ……………くそっ！どうすればいいんだ！！）

その間にもガリユートとの距離は縮まっていく。

もはや万事休すと思ったその時

(エリオ、これを使え！)

(っ！？)

兄さんの声がしたかと思うと、僕の目の前に魔力で出来た一本の紅く光る、三又の槍が刺さっていた。

間違いない、これは

「兄さんの………兄さんの槍だ！！」

僕はすぐにその槍を取り、ガリユーを攻撃する。

咄嗟の事だったので、槍を片手で振ったけれど、ガリユーを軽く吹き飛ばした。

「凄い……………これなら！」

そして僕はまたガリユーに向かっていく。

ガリユーもまたこっちに突っ込んできた。

「はあああああ……………でやああっ！……！」

僕はガリユーに向けて槍を思いきり振った。

ガリユーはしばらく耐えていたけど、やがて防いでいた爪が折れ、足場が崩れて僕らはビルの中へ落ちていった。

しかし僕はここで追撃を入れた。

「紫電……………一閃!!」

僕がシグナム副隊長の技を真似した技に電気を付加した技、紫電一閃で止めをさした。

恐らく死んではないが、ガリユーはその場で動かなくなった。

（キャラロ、こっちは何とか終わったよ。そっちは？）

（うん、私も今ルーちゃんを気絶させたところ。目立った怪我も無かったよ）

（そう、よかった……………）

キャラロとの念話を終え、僕はふと自分の持っている槍に目を向ける。

(エリオ、僕はまだ生きてるよ！)

何も答えないはずの兄さんの槍が、僕にそう告げていたような気がした。

~~~~~

はやてside

なのはちゃんとヴィータがゆりかごの中へ突入してしばらくたったけど、こちらは相変わらず航空戦力に手間取っていた。

「第1班から第3班、西側に展開！密集地帯はうちの広域魔法で何とかするから、みんなは一機つつ確実に減らして！！」

「『了解！』」

言うても、現状はかなりきつい。

まだ地上の町に被害は出てないよつけど、恐らく時間の問題やろな……………

早くなんとかせんと！！

そう思いうちはシュベルトクロイツを掲げる。

「第9、及び第17密集地帯、攻撃するぞ！近くのもんはすぐ避けてー！！」

そう口早にみんなに伝え、広域魔法の準備をする。

「デアボリック・エミッションー！！」

黒い球体が次々に航空戦力を破壊していく。

これで少しは減ったかな………と思ったその時やった。

「っ!?!? 部隊長、後ろです!?!」

「えっ?」

振り替えるとすぐ近くに一機迫ってきてった。

しかも翼に付いている魔力刃で攻撃しようとしていた。

(あかんっ、防御が間に合わへん!?!………みんな、ごめん  
………)



うちは諦めて目を瞑った。

ズガアアアン

ここでBGMスタート!!

ありゃ？

何にも起きてへん。

いったい何があったんや？

そう思いながら目を開けてみると

紅い騎士甲冑に白いマント。

そして甲冑とは違うけど綺麗な赤い髪。

あの人の姿を見間違っはさすがない。

そう、そこにいたのは

「こ、こ、光司君?.....」

『はい。ただいま戻りました、はやてさん』

そこにはうちの好きな人。

紅蓮の騎士が目の前にいた。

嬉しさのあまり、うちは泣き出してしまいそうになったけど、光司君に頭を撫でられた。

『感動の再会はまた後にしましょう。それより、僕から離れないで下さいね』

どう言う事やるつもりかと思いつちは光司君の側による。

「ゆりかご周辺にいる局員に伝えます！！今から航空戦力の一掃を行いますので、いったん全員地上及び町の防衛に回ってください！！！」

「『『りよ、了解しました！！』』」

そしてゆりかごの周りにいた局員は全員その場から離れた。

「よしっ、それじゃあ一掃しますか!!」

そう言うと、光司君の周りに赤い槍がいくつも現れた。

その数は、辺りを赤く染めてしまうほどの数やった。

「サウザンド・レイン!!!」

そう言った瞬間、沢山の槍が一斉に放たれ次々と落としていった。

そして航空戦力は目に見えて激減した。

「ふう、まあざっとこんなところかな」

「復活しても相変わらずの規格外やなあ……………」

その光景にうちはただ啞然とするしかなかった。

すると光司君に通信が来た。

「何があつた？」

「ち、地上に、人造魔導師が……………たす……………」

そこまで言つて通信は切れた。

このままやと地上が危ない！

「はやくさん、僕向こうの方へ行つてきます！」

「うん、こっちはもう大丈夫や。任しとき……！」

「頼みます、ではっ……！」

そう言うと、光司君は凄いスピードで向かった。

（光司君……………気付いてな……………）

うちは光司君を見送ると、現場の指揮に戻った。

ゆりかご、軌道ポイント到着まであと1時間09分。

第41話「最終決戦〜第二章〜」（後書き）

次回はナンバーズ辺りとフェイトとシグナムとゼスト辺りと少しオリジナルな予定です。

多分また長くなると思っているので、更新が遅れると思いますがよろしくお願ひします。

第42話「最終決戦〜第三章〜」(前書き)

かなり長くなってしまいました!!

おかげで更新が随分と遅れてすいません。

それではどうぞ。



## 第42話「最終決戦」第三章」

光司がゆりかごの一掃をする少し前、一方での戦いは終結し、また一方では戦いが始まるうとしていた。

シグナムside

私は騎士ゼストを追いかけ、地上本部のレジアス中將のもとへ急いだ。

レジアス中將の部屋に続く廊下で、騎士ゼストの融合機のアギトが立ちふさがっていた。

「ここから先は通さねえ！！旦那は……………旦那はただ、昔の友達と話をしたいだけなんだ！！」

なるほど、そうだったのか……………ならば！

私はレヴァンティンを鞘から抜き

「はぁぁっ…!」

「くうっ!……………え？」

アギトが張っていたバリアだけを切り裂いた。

「こちらはもとより、話を聞きたいだけだ。事件に関する事なら尚更だ」

「あなた……………」

「さぁ行くぞ。それとリン、こちらはもう大丈夫だ。主はやての方へ行ってくれ」

「了解です!!」

そして私とアギトはレジアス中將の方へ、リインは主はやての方へとそれぞれ向かっていった。

部屋に着くと、そこにはレジアス中將と騎士ゼスト、それに秘書である女性局員が二人いた。

「すまん……………わしの……………すべてはわしのせいだ……………  
……………本当にすまない……………ゼスト」

「お話しは終わりましたか？」

「ああ、どつちやら俺は、戦つ相手を間違っていたようだ」

「では……………」

そこまで言った途端、突然黒い布で全身を隠している何者かが、窓ガラスを割って入ってきた。

「『貴様（お前）はいつたい何もっ……………っ！？バインドー！？』」

私と騎士ゼストは一瞬でそいつにバインドをかけられてしまった。

「邪魔はさせませんよ、そこのお二人さん。さてレジアス中将、あなたはもはや我々にとって用済みなんですよ」

「いつ、いつたい何のつもりだ！？」

「決まっているでしょ、あなたは用済みなだから始末するんですよ」

そう言つと、そいつは懐からナイフのようなものを出した。

「くっ、レジアス……！」

やつが、ナイフをレジアス中将に突きつけながら近づいていったその時

「さあ、大人しく死になつ『ええ、あなたがね』グフツ……………  
な、に……………」

ズブツと嫌な音がしたと思うと、そいつが言葉を言い終わらないうちに、やつが心臓の辺りに鋭い爪のようなものが刺さっていた。

しかも驚くべき事に、刺しているのは秘書と思っていた女性だった。

「まったく、プロの暗殺者が不意を付かれて殺されるなんて、おかしな話ね」

彼女は刺していた爪を引き抜き、付いていた血を拭き取った。

そして私たちのにかかっていたバインドを解いて、自己紹介をいたしました。

「申し遅れました、騎士ゼストに機動六課のシグナム二尉ですね。私はドゥーエ、ある人にレジアス中将の護衛を頼まれました」

「ある人とは？」

「お二人ともよくご存じの、神谷光司さんです」

「『っ！？光司あいつだと！？』」

そんなバカな！！

あいつは今意識不明の重体のはずだ。

そんな事があるわけがない！！

すると騎士ゼストも同じく疑問を感じたのか、ドゥーエと名乗った女性に聞いた。

「レジアスを守ってくれたことには感謝する。しかし、証拠はどこにある！」

「そうですね……少々お待ち下さい」

するとドゥーエは通信を開き始めた。

「光司さんですか？私です、ドゥーエです」

「ドゥーエさん、いったいどうしたんですか？」

通信画面にはいつものあいつの姿があった。

「光司！？もう大丈夫なのか！？」

「シグナムさんにゼストさん？ええ、もう大丈夫ですよ、心配をおかけしました」

「そうか……よかった」

「これで、分かっていただけでしたか？」

「ああ、疑ってすまなかったな」

「いえ。では光司さん、また後程」

「ええ、また後日」

そうして通信は切れた。

「しかし、ドゥーエと言ったか、あいつはいったい何者なんだ？」



「おそらく、最高評議会直属の暗殺者ではないかと。レジアス中將も、用が済んだらただの邪魔な存在だったのでしょね」

「そうか……………ありがとう」

「では私は引き続き、レジアス中將の護衛をします」

「俺も残ろう。どのみちもう残り少ない命だ、友に看取られて死にたいしな……………」

「『ゼスト（旦那）……………』」

「では私は、ゆりかごの方へ戻ります」

そう言って、私が行こうとすると、騎士ゼストが呼び止めた。

「シグナム、こいつを……………アギトを連れていってくれ……………マ  
スターに巡り会えなかった、不運な子だ……………俺とレジアスが  
守りたかった空を……………頼む」

「……………分かりました」

「あたしは、まだあんたらを信用した訳じゃない。けど、旦那があ  
んたらを信じるってんなら、あたしも信じる！！けど、もしあんな  
が、旦那の志を裏切るような真似をしたら！！」

「その時は……………お前が、私を焼き殺せ」

そう言って、私はアギトに手を差し出す。

「ユニゾン……………インー！！」

そして私はアギトと共に空へと上がった。

彼らが守りたかった空を、守るために。

~~~~~

フェイトside

あれからしばらくDrkクロウの作ったアンドロイドと戦闘してるけど、こいつら……かなり強い。

正直、ザンバーモードじゃ、勝てない……

私とシスターが苦戦していると、あの男がしゃべり出した。

「いかがかな、私の新作の出来は？」

「『新作！？』」

「そつだ、私が新たに産み出した人工殺戮兵器……………その名もイノベイダー。こいつらは人造魔導師を基にして、その脳や筋肉などを機械の体に移植して作り上げた作品だ。しかし、失敗も多くてね、ここにあつた人造魔導師素体をだいぶ使つてしまつたよ」

「何てことを……………」

「酷すぎる……………」

「酷い！？心外だなあ、私は価値の無いものを有益に使つてやつたにすぎん。むしろ感謝してほしいぐらいだよ」

「『ッ！ー！』」

その言葉に私は我慢できなかった。

気付くと私はDrクローウに一目散に向かっていた。

「はあああああつー!!」

私はザンバーで切りかかろうとするが、やつが指を鳴らすとたちまち動けなくなった。

見ると、体やザンバーの刃に赤い糸のようなものが絡まっている。

「くうっ!!」

そのままザンバーの刃を折られ、私はその赤い糸のようなもので閉じ込められた。

「いやはや、普段は温厚かつ冷静だが、熱くなるとすぐに回りを見失う」

「フェイト執務官!! ツ!? キャアアア!!」

「シスター!!」

私がシスターの方を見るとシスターはイノベイダーに飛ばされ壁に叩きつけられた。

「シスター!!、シスター!!!!」

「安心したまえ、気絶しただけだろう。私は無闇に人の命をとることとはしないさ」

「黙れ、ライオット!!」

《ライオットブレイド》

私はバルディッシュを切り札の一つであるライオットに変え、赤い糸を切り裂いた。

けれどAMFが重いせいか、けっこうきつい。

「なるほど、それが君の切り札か。だが、使ってしまった方がいいのか？たとえここにいる私を逮捕したとしても、ゆりかごは止められない。それに……………」

「黙れえええ！……！」

私はフォトンランサーを数個作り、Drククロウに向けて発射するが、イノベイダーたちに防がれてしまった。

「いや……………止めておこう。しかし、君と私はよく似ている」

「何を？……………」

「私は自分の目的のために産み出した人造魔導師達、君は自分で見つけた、自分に反抗することのない子供達。それを自分の思うように作り上げ、自分の目的のために使っている」

「……………黙れ!!」

「違っのかい？君もあの子達が自分に逆らわないように教え込み、戦わせているだけだろ」

「　　ッ!?!」

「私がそうであるように、君の母親も同じさ。周りの人間は全て自分の道具にすぎない。そのくせ君たちは、自分に向けられる愛情が薄れるのには臆病だ。実の母親がそうだったように、君もいずれ、ああなる」

「……………」

「間違いを犯すことに怯え、薄い絆にすがって震える。そんな人生など、無意味だとは思わないかね？」

「わ……………私……………は……………」

「違つと言いつれるのかね？そんなもの、君が勝手に『違つっ！』
っ？」

突然Drクロウの言葉を遮って、モニターのエリオとキャロの二人
が叫んだ。

「絶対に、無意味なんかじゃない！！」

「僕たちは自分で自分の道を選んだ！！」

「フェイトさんは、行き場のなかった私にあつたかい居場所をくれ
た！！」

「たくさんの優しさをくれた！！」

「大切なものを守る幸せを、教えてくれた!!」

「助けてもらって、守ってもらって、なのはさんや兄さんに鍛えてもらって」

「やっと少しだけ、立って歩けるようになりました」

「フェイトさんは、何も間違っってなんかない!!」

「不安なら、私たちがついてます!! 困った時は助けに行きます!!」

「もしフェイトさんが道を間違えたら、僕たちがちゃんと連れ戻します!! そして僕たちが、みんながついてます!!」

「だから負けないで、迷わないで」

「『戦って!!!!』」

そうだよね。

そうだったね。

何を疑ってたんだろうね。

「オーバードライブ……………真……………ソニックフォーム」

《ソニックドライブ》

私のもう一つの切り札、真ソニックフォームをだした。

《ライオットザンバー》

バルディッシュのライオットも二本に変わり、私は構える。

「どうやらまだ切り札を残していたようだね。だが装甲が薄い、当たれば墮ちるよ」

そして一体のイノベイダーが動き出す。

「はあああつー!!」

私の攻撃は一瞬イノベイダーの腕に防がれたけど、そのまま腕を切り落とした。

これにはD「クロウも驚いていた。

「ほほう、イノベイダーの腕を切り落とすとはね。だが……………」

すると残りの二体も動き始め、私を取り囲んだ。

「三対一ならどうかな？」

「くうっ！..！」

さすがに三対一は不味い.....どうしよう.....

「さあ.....やれ」

あいつがそう言ったその時、突然私がさっきまで相手をしていたイノベイダーが後ろから撃たれた。

でも一体誰が.....

「間に合ったようですね、フェイトお嬢様」

「っ！..？誰！..？」

すると奥から三人の人がやって来た。

一人は長身で青い髪、一人はピンク色のロングヘアー、残りの一人は水色の髪でシヨールとヘアーの女性達だった。

「詳しい説明は後でします。それよりも」

長身の女性がそう言うと、残りのイノベイダーも彼女達に気付いたようで、向こうの方にも戦闘体勢を取った。

「セイン、ここは私とセツテでやる、お前はあそこに倒れているシスターを外まで運んでくれ」

「了解！」

するとセインと呼ばれた水色の髪の女性がシスターに近づき

「ISディープダイバー」

するとシスターごと地面に消えてしまった。

ど……………どういうこと???

そう思っているとイノベイダーの一体がこっちにやって来たので、
一本のライオットで防ぎも片方で攻撃する。

が、今度は避けられてしまった。

同じく向こうの二人も、少し苦戦を強いられているようだった。

「やっぱり一筋縄じゃないか……………」

すると突然、二体のイノベイダー達の様子がおかしくなった。

動きが不自然になり、体のいたるところから緑色の液体が漏れ始めていた。

「ふむ、まだまだ改良が必要だねこれは。やはり所詮はこんなものだったか」

そう言うと同時に二体のイノベイダーはその場に崩れ去った。

辺りにはイノベイダーの中に入っていただろう脳や筋肉などが散乱し、醜い状態となった。

けれどこれはDrクローを捕らえるチャンスだと思い、私は素早く詰め寄り気絶させようと攻撃する。

「はあああつ！...！」

しかし私の攻撃はやつに届くことはなかった。

私の攻撃が当たる直前に、Drクロウは転移して回避したのだった。

「……………逃げられたか」

「では私たちの説明をしましょう」

すると二人もこっちにやって来て、長身の女性が説明し始めた。

「まずは自己紹介から。私はトーレ、でこちらがセツテ。先ほどシスターを抱えていったのはセインと言います」

「は、はあ……………」

「で、私たちがここに来た理由ですが、あなたもご存じの、光司の頼みです」

「こっ、光司の！？光司は今生きてるんですか！？」

私はその事を聞くとすぐにトローレに聞き返した。

「まあ落ち着いてください。光司は今ちゃんと生きていますよ。間違いないからね」

「そうですか……………よかった／＼」

私は嬉しさと安心感でその場に座り込んでしまった。

でも、本当によかった、光司が生きててくれて……………

「では、急いでここから脱出しましょう。恐らく次期に危なくなります」

「待つてください。ここにはまだ、人造魔導師素体の人たちが生きてるかもしれないんです。その人たちを助け出さないと」

「分かりました。では早くしましょう」

こうして私の戦いは終わりを告げ、アジトに残っていた人造魔導師素体の人たちの救出活動を開始した。

~~~~~

ティアナside

私はプレデター達との戦闘が終わったあと、ルークと共にスバルたちを探していた。

しばらく探していると、どこことなくスバルに似たギンガさんと同じ紫の髪の女性と、スバルとギンガさんを見つけた。

「スバル、ギンガさん!!!」

「ティアア!!!無事だったんだね!?!」

「ええなんとかね、それより、そっちの女の人って……」

「うん、私たちのお母さんだよ。今は魔力ダメージで気絶してる。ティアの方こそそっちの人は？」

「ああ、こっちの人は前にキャラロが言ってた」

そう私が言うとルークが自己紹介をし始めた。

「はじめまして、スバルにギンガ、だったかな？僕はルーク、色々あって今は味方だよ」

「あっ、どうも」

「いちばんこそ、よろしくお願いします」

「詳しい説明はルークから聞いて。それより地上の迎撃に回らないと」

「そうだねティア、いこう!」

そうして私たちは地上の迎撃に向かったのだけれど、不思議なことにプレデターが一体もない。

あるのはただの残骸だけだった。

「おかしいわね……………一体もないなんて」

「ええ、この辺りは地上本部の局員もないはずだし、いったい誰が……………」

キングさんが言った途端、私たちの疑問は一瞬で消えることになった。

ある男の一言によって。

「俺だよ」

「ㄎ  
ツ!?!」

声のした方を見ると、真っ黒い布を纏った漆黒の騎士が立っていた。

その姿はフェイトさんが交戦した人造魔導師に酷似していた。

「俺が全部ぶっ壊した。あんまりにも暇なんだな」

そいつの言ったことは訳が分からなかった。

普通、暇だからって自分たちの戦力を破壊する？

すると懐かしそうにルークが話し始めた。

「ああガルシア、そんなところでなにやっているんだい？」

「ルーク？そっち側にいるってことは、裏切ったんだな」

「ああ、まあね」

「そうか……なるほどな」

「驚かないんだね？」

「まあな。それより……………」

そこまで言うと、ガルシアと呼ばれた男は、身の丈ほどある大きな鎌を構えた。

「俺にとっちや、お前とやれるならそんなことはどつでもいいんでな！！」

「やれやれ、相変わらずのバトルバカなんだから」

「うるせえっ！！」

そしてガルシアはルークに向かって鎌を降り下ろす。



がルークはそれを避ける。

「っ！？ルーク！！」

私はそいつに向けて何発か射つが、鎌で防がれてしまった。

「ほう、お前らもやるのか？いいぜえ、面白くなってきたぜ！！」

今度は私に向かって鎌を降り下ろす。

私はギリギリでその攻撃を避けたけど、降り下ろされたところはスツパリ割れていた。

「う……………嘘でしょ……………」

「オラオラ、かかってこい！！」

私はガルシアについて聞こうとルークに念話をした。

（ルーク、あいつっていったい何者？）

（ガルシアは僕と同じドクターに作られた人造魔導師だよ。まあ、戦うことが好きみたいだけど、悪いやつじゃないから。ただ、バカなだけだよ）

（ばっ、バカ？）

（そっ、バカ）

「おおいつ！！今なんか失礼なこと言わなかったか！？」

（（意外と地獄耳））

私とルークは揃ってこう思った。

するとスバルとギンガさんが揃ってガルシア攻撃を仕掛けた。

「『はあああつ!!』」

「はああつ!!」

しかしガルシアは鎌を素早く振り回し、二人を吹き飛ばした。

あんな大きな鎌をあんなに早く回すなんて……………どうやら一筋縄  
ではいきそうにないわね。

ここは一旦離れて……………

「オラアアアア!!!!」

そう思いかけた途端、ガルシアが向きを変えて私に向かって来た。

それもかなりのスピードで。

「っ！？しまっ  
」

そう思った瞬間、突然ガルシアにナイフが飛んでいき爆発した。

私はその隙を見てスバル達の方へ戻った。

「スバル、ギンガさん大丈夫！？」

「ええ、飛ばされたただけだから大丈夫よ」

「でもティア、さっきのって………いつたい………」

すると爆発の煙からガルシアは抜け出し、私たちと距離を取った。

「今は少しいたぜ……………なあおチビさんよ」

ガルシアが向いている方を見ると、数人の人が立っていた。

一人は茶髪でロングヘア、もう一人は赤い髪で短髪、そしてガルシアに攻撃したであろう人は銀の髪のロングヘアで眼帯をしていた。

「おチビさん」とは失礼だな」

「テメエ、チンク姉を悪く言ったな!!」

「そんなこと言ってる場合では無いと思うんだけど」

……………何なのかしら、あの人たち……………

「そうだなそんな場合では無かったな」

するとその3人はこっちにやって来た。

「君たちは、起動六課の者だな？」

「そ、そうだけど……あんたたちは……」

「申し遅れた、私はチンク、こっちの赤い髪の方はノーヴェ、長い髪の方はティードだ」

「『よろしく』」

「は、はぁ……」

「でもどうして私たちを助けるような真似を？」

「時間がないので詳しいことは後で話すが、あいつの………光司の頼みでな」

「光司さんの!?!」

「しい兄の!?!」

「兄さんの!?!」

「ああ、ドクターの言ってた彼か」

「そう言うことだ、………っ!?!来るぞ!?!」

私たちがチンクと名乗った女性から話を受けていると、ガルシアは私たちの方に向かって来ていた。

「話はすんだか?なら………いくぜええ!?!」

鎌を振り上げ私たちに迫ってくる。

するとどこことなくスバルに似たノーヴェエが一人で向かっていった。

「ノーヴェ、無茶するな!!」

「心配ねえよチンク姉、あんなやつ、あたしだけで十分だ!!」

ノーヴェはチンクの忠告を無視してガルシアに突っ込んでいった。

すると今度はティードと呼ばれた女性もガルシアへ向かっていった。

「っ!?!ティード、お前まで!!」

「チンク姉様すいません。ノーヴェだけでは危ないので、私も行きます」

そして二人でガルシアへと向かっていき



「オラアアアア！……！」

降り下ろした鎌と、ノーヴェの蹴りとティードの二つの剣とがぶつかり合う。

が

「この程度かよあつ！……！」

「『くううつ………つわああつ！………』」

二人とも押し負けて飛ばされてしまった。

その様子に、チンクはかなり驚いている。

「ノーヴェとティードの二人がかりで押し負けるだ！？やつはいつたい何者だ！？」

「詳しいことは後！相手が悪いな……………ここは一旦退こ」行かせねえよ  
『よ　っ…！』

するとさっきまで数メートル先にいたのに、ガルシアは一瞬で距離を縮めていた。

「ルーク、せっかく楽しくなってきたっていうのに、つれないこと言っんじゃないよ」

「生憎と僕は、君みたいに戦いが好きなわけではないんでね」

「そっか……………残念だっ！」

そしてルークに向かって鎌が降り下ろされる。

しかしルークは防ごうともしない。

「『ルーク!!!』」

私たちはルークのもとへ駆け寄るが、到着するよりも早く鎌がルークに近づいていく。

(不味い、間に合わない!!!)

と諦めかけたとき

ギイイイイーン!

何かと何かがぶつかったような轟音が辺りを支配した。

そして目の前には、ルークをガルシアの攻撃から守りように、あの人が立っていた。

「まったく、命はそんなに簡単に捨てるもんじゃないよ」

「兄さん!!!!!!」

「光司さん!!!!!!」

「しい兄!!!!!!」

あの、紅蓮の騎士が立っていた。

~~~~~

光司 side

僕が連絡があつた区域に着くと、ちょうど大男が鎌を近くにいた茶髪の男性に降り下ろそうとしていた。

そして近くにはティアナ達やチンクがいた。

僕は咄嗟にギリギリのところでのその攻撃を防ぐ。

「っ！？俺の攻撃を防ぐとはな。お前、何者だ？」

「紅蓮の騎士だ！！」

「紅蓮の騎士？……………そうかお前が……………」

そう言と、大男は鎌を一旦引いて二、三步下がった。

「お前となら、少しはやれそうかな……………」

「どうだろうね、君の期待に答えられるかどうかは分からないよ。
でも」

僕はザックスを構え、少し殺気立てて言った。

「僕の大切な仲間に出したことは、後悔させてあげるよ！…！」

「面白い……………」

「ティアナ、みんなを連れて逃げるんだ」

「でも、兄さん一人じゃあ!！」

「心配ないよ、きっと大丈夫だよ。今度ばかりはね」

「わ、分かったわ……」

僕のお願いに渋々ながらティアナは納得してくれた。

そしてみんなを連れて、ゲンヤさんのいる、拠点へと向かった。

「さてと、始めようか」

「そうだな」

二人ともそれぞれに構え、しばらくの沈黙の後

「『はあああああつ！！！』」

新たな戦いの火蓋が切って落とされた。

ゆりかご起動ポイント到着まで、あと58分。

第42話「最終決戦〜第三章〜」（後書き）

次回はゆりかご内部がメインです！

これもまたまた長くなると思いますので、なるべく早く更新したいとおもいます。

それと、みてみんなに、デバイスの大きさ比較の画像と、少し手直した主人公の画像とリミットブレイク時のバリアジャケットの画像を載せました。

よろしければ、見た感想などをいただけるとありがたいです。

第43話「最終決戦〜第四章〜」（前書き）

すみません！

予告と違って、今回は光司対ガルシアです。

なんかこれだけ別にした方がいい気がしたので……………

それではどうぞ！

第43話「最終決戦〜第四章〜」

ゆりかご周辺の航空戦力との戦いが少しずつであるが落ち着き始めていた頃、町の外れの方では激しい戦いが繰り広げられていた。

光司 side

僕は今ガルシアと言う男と戦っている。

しかし……………ガルシアは、はっきり言って強い。

単純な攻撃だけれど、一撃ごとに込められている力が半端ではない。

僕はなんとかガルシアの攻撃を受け流しながらその攻撃をしのいでいた。

「俺の攻撃が通らないとはな。お前、名前は？」

「神谷……………光司だ」

「光司か……………いい名前だ。お前になら、本気を出してもよさそうだな！！バル、あれをいくぞ！」

《了解だ。ロードカートリッジ》

するとガルシアの持っていた鎌が変形し始めた。

まず鎌の魔力刃が小さくなり、反対側の部分から斧の形をした刃と槍の形をした刃が現れた。

その形はハルバードと呼ばれる西洋の武器に酷似していた。

そして大きさは1メートル以上あり、今まで見てきた中で最大級の大きさだった。

「それが、君の本気モードってことか…………………………だったらこっち

も、ザックス！」

《オーライ、ストライダーフォーム!!》

「リミットブレイク……パラディンフォース!!」

そして僕も本気モードであるパラディンフォースになり、鎧が赤から白になった。

言わねば、紅蓮の騎士から白蓮じやくれんの騎士となった。

「ほう、お前もまだ本気ではなかったのか。これはますます面白い……」

「無駄話はいい……いくよ……」

「ああ…………来いっ!!」

そして僕とガルシアはほぼ同時に技を出した。

「うおおおおつ!! 暴風……………絶覇斬!!!!」

「はああああつ!! 真……………虚空……………撃覇斬!!!!」

すさまじい風を纏った斧と紅蓮の炎の剣技がぶつかり、辺りに衝撃が伝わる。

二人が立っている地面は少し陥没し、辺りにはガルシアの攻撃によって生じた風で僕や地面に軽い切り傷が出来たり、僕の攻撃によって生じた炎は辺りを少し焦がした。

僕らはしばらく均衡し、お互いに空中にあがった。

「いいぜえ、こんな相手初めてだぜ!!……………俺は待っていた……………お前みたいに強えヤツが現れるのをな!!!!」

そしてガルシアは再び僕へと向かってくる。

「なっ！！」

僕は何とかその攻撃を防いだ。

しかし、いくらこっちがストレイダーフォームにしたからといっても、力では向こうの方が上。

防ぐのもけっこうギリギリだった。

「ガルシア！！君はどうして戦う！？なぜDrクロウに協力するんだ！？」

すると以外にもガルシアは攻撃を止め、話始めた。

「そいつは違うぜ。俺はな、あいつの命令には従ってはいるが、あいつの仲間になった覚えはねえ！！そして俺は、強いヤツと戦いたいから戦ってるだけだ！！」

ガルシアは高らかにそう言い放った。

しかしふと考えると……………

（あれ？命令に従っているってことは……………協力してるんじゃないか？
でも仲間になった訳じゃないんだし……………？？
？？）

僕がガルシアの返答に訳が分からなくなっていると、突然念話が来た。

（もしもし、兄さん？私だけど、ちょっといい？）

以外にも相手はティアナだった。

（どうしたの、何かあった？）

(いやルークがね、兄さんにこれだけは伝えてほしいってことがあるらしくて)

(ルーク?)

(ああ、ルークって言うのは、そこにいるガルシアって人と同じでDrクロウに作られた人造魔導師で、今は私たちの味方なの)

(なるほど、それで?)

(ルークが言うには“ガルシアはバカだから、Drクロウに利用されただけなんだ。根はいいヤツだから、どうか殺さないでほしい”だそうよ)

(ふうん……………なるほど、だったらいい方法がある。ありがとう、ティアナ)

(どういたしまして。じゃあ兄さん、気を付けてね)

そしてティアナとの念話は切れた。

そして僕はガルシアにある提案を持ちかける。

「ガルシア、じゃあ君はDrククロウの仲間ではないんだね？」

「ああ、その通りだ！」

「だったら、僕らの仲間にならないか？そしたら、僕たちが戦う必要なんてない」

するとガルシアは突然笑いだし、思いもよらない答えが返ってきた。

「ハッハッハッ！面白え、いいぜえ！ただし条件がある！！」

「……………条件って？」

「それはな……………テメエが俺に勝つことだ！！」

そしてガルシアは言い終わらない内に僕に突っ込んできた。

僕は何とかその攻撃を防いだ。

(くそっ！結局戦わないと解決しなかったか！……………でも、これならっ！)

そして僕はガルシアを押し返し、距離を取る。

(……………無理に殺さなくてもよさそうだ)

そして僕もガルシアへと攻撃を仕掛ける。

「はあっ！…！」

僕が剣を降り下ろすが、やはりガルシアの斧に防がれてしまう。

そしてガルシアもまた僕に攻撃を仕掛け、防がれるという攻防がしばらく続いた。

しかし僕はガルシアの攻撃をしばらく受けてみて、少し違和感を感じていた。

(何なんだろう……………この違和感は……………)

そして僕はガルシアにもう一つ質問をぶつけてみた。

「ガルシア！もう一つ君に問いたい！！」

「ああ！？なんだ！！」

ガルシアは一旦攻撃の手を止め、その場に止まった。

「君の言う“強さ”とはなんだ！？」

「はあっ！！知れたことだ、強さとは……………則ち！！！」

そこまで言っただけでガルシアは一瞬で僕の目の前に来て

「力だあああっ！！！」

「くっ！！……………うわあっ！！！」

ガルシアのその一撃に僕は耐えきれず、地面に叩きつけられた。

でも、これでようやく違和感の正体があった。

「どうした光司、急に弱くなったか！？お前の“強さ”はそんなものか！？」

そう、違和感とはガルシアの言った強さに関係している。

確かに強さには、人それぞれ色々な解釈があるだろう。

けど、今のガルシアが思っている強さは本当の強さじゃない。

それが攻撃に反映し、僕に違和感をもたらしただった。

「……………」

「ん？なんだ、もう終わりなのか？」

「ガルシア、君が思っている強さは本当の強さじゃない」

「何？……………だったら、本当の強さってやつは、一体何なんだ？」

「強さって言うのは……………力だけじゃない……………技でもない……………」

《フラッシュムーブ》

そして、今度は僕がフラッシュムーブで一瞬でガルシアに近づき

「心だっ！！！！」

お返しとばかりに峰打ちで、ガルシアを地面に叩きつけた。

「人は戦うとき、必ず何かを守るために戦う。
それは、己の命であったり、地位や名誉であったり、自分の財産で
あったり、大切な家族や仲間であったり……………だから人は強
くなれるんだよ……………守るためにね。だから、何も守るものが
ない君の“強さ”に、守るものがある僕の“強さ”は……………絶
対に負けない」

するとガルシアが瓦礫の中から立ち上がった。

だが、無傷ではないようで手傷ぐらいは負っていた。

「な、なるほど、守る強さか……………そいつは知らなかったな。
だがこれで、俺の強さとお前の強さ……………勝った方が本当の強
さって訳だな……………」

そう言って、ガルシアは斧を構える。

どうやら次で決めてくる気らしい。

そうして僕もザックスを構える。

そして、ほぼ同時に動き出す。

「バル、カートリッジをロードしろ」

《了解だ、ロードカートリッジ》

「ザックス、カートリッジロード」

《オーライマスター、ロードカートリッジ》

そしてお互いのデバイスからは三発の薬莖が落ち、互いの魔力光の色が濃くなっていく。

「剛風……………」

「終蓮……………絶覇……………」

そしてついに

「……………滅牙斬！！！！」

「……………閃光斬！！！！」

紅い閃光と鮮やかな黄緑色の閃光がぶつかり合う。
辺りの地面はぶつかっている場所から次々に吹き飛んでいく。

それだけぶつかり合った時の衝撃はすさまじかった。

そして、次第に勝負が付き始める。

「はあああああつ！！」

「何っ！？この俺が……………押し……………負けるだっ！？」

「これが……………本当の“強さ”だっ！！！！」

そして僕はガルシアの攻撃を打ち負かし、ガルシアを吹き飛ばした。ガルシアは数十メートル位飛んでいき、僕の周りやガルシアを飛ばした方にはクレーターのようなものが出来ていた。

「ふっ……………守る、強さか……………確かに……………強えな……………負けたぜ」

そう言って、ガルシアは意識を失った。

恐らくは気絶しただけだろう。

そうして、僕の戦いは終わりを告げた。

僕の“守る強さ”の勝利をもって。

第43話「最終決戦〜第四章〜」（後書き）

次回こそはゆりかごに入ります。

そしてもうそろそろ最終決戦も終わりそうです。

出来れば年内に仕上げたいと思います！

第44話「最終決戦〜第五章〜」(前書き)

今回は次回に向けての前フリみたいなものです。

それではさようぞー！

第44話「最終決戦〜第五章〜」

光司とガルシアのあの激しい戦いが終わる少し前、ゆりかご内にて

ヴァイタside

あたしはなのはと別れてから駆動炉に向かっていた。

途中何体かのプレデターをぶっ潰しながらなんとか駆動炉までたどり着いた。

カートリッジも数発残ってる……………大丈夫、いける……………
そうあたしは思いながら駆動炉の前までやって来た。

が

「ッ!?……………なんだよ……………これ」

そこには中心部分が不気味に赤く光っている巨大なクリスタルがあった。

(恐らく、真ん中の部分が本体だな……………なら!)

「アイゼン、リミットブレイク、いけるよな?」

《もちろん、ツェアシュテールングスフォーム!》

カートリッジを二発ロードしてアイゼンの形状が変わっていく。

ラケーテンのドリルとブースターにギガントの巨大さを足したようなフォーム。

まさにぶち破りのフォームってわけだ。

『警告、駆動炉内で危険な魔力を感知しました。これより駆動炉に近づくものは無条件で攻撃されます。』

「くっ……………上等だ……………」

あたしは警報と同時に出現した、四角い機械の方を向きアイゼンを構える。

「でりゃあああああつ！！！」

あたしは無我夢中でそいつらに飛びかかって行った。

~~~~~

なのはside

私はヴィータちゃんと別れた後たくさんプレデター達に邪魔されながらも、なんとかヴィヴィオがいる玉座の間へたどり着いた。

そして私は玉座の間の扉を壊して中に入る。

中には玉座に縛り付けられるように座っているヴィヴィオと、ここにいるはずのない男が立っていた。

白衣を身にまとい、銀色の短髪。  
間違いない、彼は

「Drクロウ!?!」

「おや、どつちやら聖王の保護者の登場かな?」

「Drクロウ、どうして……」

「答える義理は無い」

「くっ！だったら、私がここで逮捕します……！」

私は言い終わるとすぐにDrクロウに攻撃したが、Drクロウは一瞬でその場から消えてしまった。

そしてすぐに声だけ返ってきた。

「はっはっはっ！自分の子供の危機より、公務を優先するとは流石だね。そんな君に、ささやかなお礼をしよう」

すると今まで縛り付けられていたヴィヴィオが浮き上がり、突然苦しみだした。

「ヴィヴィオ!!!」

「見ていたまえ。かつて古代ベルカの時代に自らの体を作り替えて  
まで手に入れた力……………聖王の鎧……………その強さ、その身で  
とくと味わってくれたまえ。さあ、親子の死闘デスゲームの始まりだ!!!」

そうしてヴィヴィオは、子供の姿から黒い鎧をまとった大人の姿へ  
変貌した。

「ヴィヴィオ!!!私だよ、なのはママだよ!!!」

「……………違う……………あなたは、私のママじゃない!!!」

「……………」

「返して……………私のママを……………返してよ!!!」

「私が、ヴィヴィオのママだよ!!」

「違っっ!!!!」

そしてヴィヴィオは私に襲い掛かる。

私は咄嗟にバリアを張って攻撃を防ぐ。

「くっ!!.....どうしよう.....ヴィヴィオは傷つけないし.....」

私が戸惑っている間にもヴィヴィオは魔力弾を出して攻撃してくる。

「WASが見つけてくれるまで.....なんとかもちこたえるしかないね.....アクセル・シューター!!」

そして私もアクセル・シューターで応戦する。

早く何とかしないと……………

しかし、私の思いとは裏腹にヴィヴィオの攻撃は激しさを増す。

(本当にヴィヴィオを助けられるのかな……………)

戦っている間、そんな思いが私の頭をよぎってならなかった。

~~~~~

ヴィータ side

あの四角い機械が現れてしばらくたち、なんとかあたしはそいつらを全機潰した。

だが、あたしもアイゼンももうそろそろ限界に近かった。

「はぁ……………はぁ……………はぁ……………まだいけるか、アイゼン」

《はい》

「こいつをぶっ壊さねえと……………はやてや、みんなが困るんだ……………あいつだって……………きつと生きてる……………あいつが寝てる間に……………この空を落とさせるわけに……………はいかねえんだよ……………！！……………だから、アイゼン！！」

《explosion》

アイゼンわ残り三発のカートリッジを全てロードし、大きさがギガント並みの大きさになった。

そして

瞬間、白い光があたしを包んだ。

気が付いた時には、あたしは誰かに抱き抱えられていた。

そしてふとみると……………

「は……………はちて?……………リン?」

「はいです」

「謝ることなんて……………なんにもない!……………」

「え?……………でも……………あたし……………」

「鉄槌の騎士ヴィータと、鉄の伯爵グラーフアイゼンが、こんなにポロポロになるまで頑張って……………」

すると駆動炉の表面に亀裂が入り始める。

よくみると、アイゼンのドリルの先がめり込んでいる。

「こんなになるまで頑張って……………それでも壊せへんもんなんて……………この世のどこにも……………あるわけないやんか」

そして、駆動炉は粉々に砕け散り、あたしの役目は終わりを告げた。

~~~~~

光司 side

ガルシアとの戦闘が終わり、僕はゆりかごへ向け急いだ。

ゆりかご周辺には僕が一掃したときよりは少なかったが、それでもかなりの航空戦力がいた。

僕は航空戦力を少しずつ倒しながらゆりかごへ近付いていくが、急いでいたため後ろから来ている二機に気が付かなかった。

「ッ!?しまっ……………」

ズガアアアアアン

僕が振り返ったその時、突然僕の目の前でその二機が爆発した。

でもいったい誰が……………

しかしその答えはすぐに分かった。

「『光司さん!!』」

「ウエンディ、ディエチ!!助かったよ」

「こいつらはあたしらに任せるっス!!」

「光司さんは早くゆりかごの中へ!!」

「二人とも、ありがとう!!」

そうして僕は二人に助けられ、ゆりかごの近くへたどり着いた。  
すると、クロノから通信が来た。

「光司、僕だクロノだ！」

「ど、どうしたんだそんなにあわてて!？」

「ゆりかごが軌道上に上がるまであと1時間を切った!ー!だが、次元航行部隊の到着にはまだ時間がかかりそうなんだ………すまない、なんとか時間を稼いでくれ」

「なるほど………分かった、なんとかしてみるよ」

「本当に………すまない………」

そう言ってクロノは通信を切った。

「しかし、どうしようかな………時間稼ぎか………」

すると突然

《マスター、それでしたら良い方法があります》

ザックスが良い方法があると言い出した。

それはゆりかごを止めるとともに、侵入口もなんとかしてしまおうと  
言う一石二鳥な案だった。

しかし魔力消費が大きいと言うのが難点らしい。

「ザックス、その案でいこう」

《了解しました。ロードカートリッジ》

そしてザックスがカートリッジを何発かロードする。

《マスター、私の後に続いて詠唱してください》

「分かった！」

《我、力を制する者なり》

「我、力を制する者なり」

《我の前に立ちほだかりし物に》

「我の前に立ちほだかりし物に」

《我が力をもってこれを粉碎する》

「我が力をもってこれを粉碎する」

《出でよ聖なる剣、我に仇為す物をその刃において浄化せよ》

「出でよ聖なる剣、我に仇為す物をその刃において浄化せよ」

気が付くとザックスの刀身から魔力で出来た巨大な剣が伸びていた。

その長さは軽い高層ビルほどだった。

(うーん、先が見えない……………)

《マスター、いつでもいけます!》

「分かった!!」

そして僕は巨大な剣を降りかぶり

「ダイバiiiiiiii……………」

ゆりかごへ向け降り下ろした。

「セイバー……………」



巨大な剣はゆりかごに直撃し、ゆりかごの進行方向を大きく変え斬撃により大きな穴があいた。

それを見ていた他の局員は

「『は、反則だろ……………』」

と溜め息混じりに漏らしたと言っ。

「よしっ、早く中に入ろう!」

そして僕はゆりかご内部のある場所へ向け急ごうとすると、急に通信が来た。

「光司聞こえる!? 僕だ、ルークだ」

「ああルーク、話には聞いてるよ。それで、いったい何の用？」

「うん……………その、レナのことなんだ」

「レナの？」

レナ……………彼女はあの時僕がまるで敵わなかった相手。

そして、僕の……………

「……………で、レナがどうしたの？」

「レナは……………彼女は何も悪くないんだ！！」

「エンジェルさん」

「光司は、彼女が君のクローンってことは知っているだろう？でも、性格がまるで違う」

「まあ、確かにそうだった……………」

「けど、いくら違つといつてもあそこまで正反対な性格はおかしいと思わないか？」

「それって……………まさか!？」

「うん……………光司の考えている通り、レナはDrクローウによって残酷で冷酷な性格にされてしまったんだ。そして、自分の命令には逆らえないようにもね……………」

「……………」

ルークの答えを聞いた途端、僕は憤りを感じずにはいらなかった。

(人間を……………人の心を……………いつたいなんだと思ってるんだ!!!)

僕は耐えられず、力一杯に拳を握りしめた。

「それでルーク、レナを助ける方法は!？」

「おそらく、レナ本来の性格はまだ彼女の心の中に残っていると思うんだ。だから、どうにかしてその本来のレナを引き出すことが出来れば……………」

「一方的に植え付けられた残虐な心を元に戻せるかも……………ってこと?」

「うん……………でも、かなり危険だよ。説得が通るかどうかも分からないし、何より彼女は強い。僕やガルシア以上に……………」

「……………それでも、僕はやるよ。彼女を助けてあげないと……………」

「！」

「……まったく、光司はティアナの言った通りだね。……  
……また、こんなことを言うのはあれなんだけど……レナ  
を、僕の大切な仲間を、どうか救ってほしい」

「ルーク……ああ！！もちろんそのつもりさ！！！」

「ありがとう……レナは確か、ゆりかご内にある航空戦力の生  
産場所にいる……あとくれぐれも……死ぬなよ」

「……分かってる。必ずみんなと帰って来るよ。あとそれと  
……そっちも、死ぬんじゃないよ。君はもう、僕の大切な仲  
間なんだからね」

僕はそう言い終わると、ルークの返事を待たずに通信を切った。

そしてルークの言っていた航空戦力の生産場所に急いだ。

しばらくゆりかご内を回りなんとかその場所へたどり着いた。

そこにはスカリエッティが集めたであろうたくさんのレリックが機械に組み込まれた生産機械があった。

このせいで、なかなか航空戦力の数が減らなかったようだ。

そして、その機械の前に立っている女性が一人。

青を基調としたドレスのようなバリアジャケットに身を包み、雪の様に白い細身の剣を持ち、綺麗な金髪の髪を靡かせていた。

「……………レナ」

「あら？まだ生きていたんですね、私のオリジナルさん」

そこには、僕に冷たい笑みを浮かべるレナの姿があった。

第44話「最終決戦」第五章」(後書き)

次回、ようやく決着が着きます。

多分また長くなってしまおうと思いますが………お楽しみに!!

第45話「最終決戦〜最終章〜」(前書き)

ようやく決着です！

多分今までで最長かと……………

それではどうぞー！！



第45話「最終決戦〜最終章〜」

光司のおかげで、ゆりかごの軌道上到着の時間までに次元航行部隊の到着が間に合うことが分かり、少しの希望が見え始めた頃、ゆりかご内ではまだ戦いが繰り広げられていた。

光司 side

今僕の前には僕によく似た女性、レナが立っている。

そしてこちらに気付くと待っていたかのように喋り始めた。

「待っていたわ私のオリジナルさん、あのときは不覚を取ったけれど今度こそあなたを殺してあげるわ」

「レナ……………目を覚ますんだ！！本当の君はこんなことはな望んでないはずだろ！？」

「何を言っているのかしら？これが本当の私よ」

( やっぱり、Drクロウに植え付けられた心は簡単には打ち消せないか…………… )

「さあ、お話しは終わりよ。殺し合いを始めましょうか……………」

そうしてレナは剣を抜き、一歩一歩こっちに近づいてくる。

「くっ！……………やっぱりやるしかないのか！！」

そして僕も仕方なく剣を構える。

しかし相変わらずレナの歩みは止まらない。

「来ないのなら……………こっちから行くわよ！！」

近づいて来ていたレナは、一気に僕の目の前まで来て剣を降りおろす。

僕もその一撃を剣で防ぐ。

「へえ、前よりやるじゃない。そう言えば、なんだか見た目が変わってるわね。だけど……………」

レナがそこまで言うと、無数のフリーズランサーが僕の前に現れた。

「これならどうかしら!? フリーズランサー、シュート!!」

僕はレナを剣で押し返し距離を取り、フリーズランサーを叩き落としていく。

以前のように、水蒸気を増やさないためだ。

「なるほど、あなたの炎で相殺すると空気中の水分が増えるから、剣で壊すって訳ね。だけど……………いつまでもつのかしらね」

「はあ、はあ……………余計なお世話だよ……………」

フリーズランサーを叩き落とすと言っても全てを叩き落とせるわけではないので、当然何発かは当たってしまった。

（確かに、レナの言う通りだ……………これじゃあ、いつまで持つかわからないな。だけどこのままじゃあ……………くそっ！何かいい方法は無いのか！！）

すると、ザックスが突然話始めた。

（マスター、一つ方法があります）

（何だって！？）

（しかし、かなり危険です。それに成功するかどうか……………）

（やってみないと分からないよ。それで？）

（はい、まず始めにマスターのリミットブレイクについて説明します。マスターのリミットブレイク・パラディンフォースには炎の魔

力変換能力に加え、光の魔力変換能力と言ったものがあります)

(光の魔力変換能力?)

(光の魔力変換とは癒し、浄化、回復、と言った補助系統の魔法と、反射、貫通、発散、と言った攻撃系統の魔法の両面を持った魔力変換のことです)

(そんなすごい力が……………僕に?)

(今は炎7に対し、光3の割合ですが補助系統の魔法は使用できるかと)

(なるほど……………で、どうやるの?)

(魔法を使用する際に、暖かいやわらかな光をイメージしてみてください。ただし、3割りほどしか無いのでかなり難しいかと)

(分かった……………やってみよう)

そして僕はイメージした。

暖かくて、やわらかくて全てを見守るような……………そんな光を…

……

すると、紅いはずの僕の魔力光が眩い白色に変わった。

(マスター、その魔力で触れることが出来れば、レナの心を浄化できると思われます)

(触れるって言ったって……………そうだ!!)

僕は咄嗟にあることを思い付いた。

「一か八か……………はあああ!!」

僕は光の魔力を全身に行き渡らせる。

「シャイニング……………フィールド!!」

僕はフォースフィールドの要領で全身に魔力を纏った。

普通のフォースフィールドに比べ、色が紅から白に変わり少し体が光っている。

そして、僕の様子にレナはかなり驚いているようで

「な、何なのよ……………その力はっ!!!!」

やけくそになって僕に突っ込んできた。

が、それはこっちにとっても好都合だ。

(こっちもそんなに長くもちそうにないからな………これしかないか………)

そしてだんだんとレナとの距離は縮まっていき………

ガツッ

「なっ、何を!?………」

僕はレナの攻撃を防ぐこともせず体で受け止め、レナを優しく抱きしめた。

「もう、いいんだよ………君はもう………戦わなくていいんだ………」



「　　ッ！？.....わ.....わた.....しは.....  
.....あああああああああああ！.....！」

するとレナが頭を抱えて苦しみだし、その場に崩れ落ちた。

「っ！？レナ、どうしたの！？」

「あ、頭が.....あああああ.....」

するとまたレナは苦しみだし、終いには気絶してしまった。

そして今度はどこからかモニターが現れた。

「まったく君は、どこまで私の邪魔をすれば気がすむんだね？私の作品がクラッシュしてしまったよ」

「Drクロウ!!!」

そこにはやれやれと言った表情のDrクロウが映っていた。

そして、僕はあいつの言葉にどうしても我慢ならなかった。

「Drクロウ………さっき、レナを作品と言ったな………」

「ああ、その通りだ。彼女は私の意のままに操れる、まさに作品だろう。」

そうそう、今私の持っているこの機械を壊せば、レナももどに戻るかもしれないよ。もっとも、ここまでたどり着くことが出来ればの話だがね。ハッハッハッハ!!!」

Drクロウは言いたいことだけ言ってあざけ笑いモニターから消えた。

でもこれで分かった………なんだ、よく考えれば簡単なこと

だった……………

そして僕はレナに近寄りそっと頭を撫でる。

「安心して、もうすぐ助けてあげるからね……………」

そうしてレナから離れザックスを構える。

「あいつの居場所なら見当がついてる、恐らく一番安全な場所……………  
すなわち中心……！」

《マスター、ゆりかごの中心まで100メートルです》

「仰角は40度と言ったところかな……………ザックス……！」

《オーライ、ロードカートリッジ》

そして僕はカートリッジをロードして仰角40度方向にザックスを構える。

「今回は詠唱破棄、すぐにいくよー!」

《オーライ、いつでもどうぞ》

「デイベイイイイイン……………」

そして、ザックスに魔力が集中していき

「セイバー……!」

聖なる剣がその中心部へ向け一直線に伸びていった。

~~~~~

Drkrowside

私は今ゆりかごの中心部分にいる。

ここまでこられる者など……………

まあ、先ほど神谷光司の怒りを煽っておいたが……………はたしてどうなるかな。

と思っていた矢先だった。

ゴゴゴッ

「ん、なんだこの音は？」

地震なわけがないし……………何だろうか？

すると突然、巨大な剣がどこからか伸びてきた。

「何iiiiiiii!？」

私は突然のことで奇声をあげてしまった。

だが……………

「フッフッフ、神谷光司……………やはり君はすばらしい……………」

そして私に向かって剣が降りおろされる。

「今回はこれで退くとしよう……………だが……………また会うことになるだろう……………ハッハッハッハッハッハッハッハッ……………」

ズガアアアアアン

光司の放った攻撃はDrクロウに直撃した。

そしてその場には機械の残骸しか残っていなかったと言う。

そう、機械の残骸しか……………

そして彼の死に際に放った一言は、光司の運命を大きく変えることとなる……………

~~~~~

光司 side

デイベイン・セイバーで攻撃してしばらくたったあと、ザックスから報告があった。

《マスター、中心部分で爆発を確認》

「ふう、やったかな？………」

すると気絶していたレナが目を覚ました。

「こ、ここは………いったい？………私は………何を………」

「レナー!」

僕はすぐさまレナに駆け寄る。

「あなたは………光司………さん？」



「うん……………と言つことは、自我が戻つたんだね!？」

「はい……………けれど、私はあなたやたくさんの人々に……………  
あんな酷いことを……………」

「君のせいじゃないさ」

「たとえそうだとしても……………私の罪に……………変わりはないんです……………もう、死んで償うしk」それは違つ!」……………え?」

僕はレナの言葉を遮ってレナに言った。

「確かに、レナの言うことも分かるけど、死んで償うなんて絶対に間違つてる!!罪は生きて償つてこそ罪なんだ!!!」

「けれど、私みたいな存在、生きていたって意味がないし、いつそ死んだ方が『だからっ!!』」 ツ!？」

僕はレナの肩に手を置き続けて言う。

「死んでしまっていていい存在なんて、どこにもいないんだよ。それに、レナはやっと自分を取り戻したばかりじゃないか。生きていれば、必ずいいことがある。そして……………」

僕は再びレナを抱きしめて続けた。

「僕は君に……………生きていて欲しい」

「 ツノノノノノ!!……………」

そしてレナは何かから解放されたかのように大粒の涙を流した。

しばらく僕はレナの頭を撫でてあげた。

そしてしばらくして

「もう大丈夫？」

「は／＼……………、はい／＼……………」

「それじゃ、行くのが」

「……………はい」

こうして僕は無事にレナを救い出し、なのはさんの方へ向かった。

~~~~~

なのはside

ヴィヴィオと戦闘を開始してしばらくたった。

ヴィヴィオは思っていたより強く私は苦戦していた。

そして私はリミット2を発動させることにした。

「リミット2、リリース!!!」

《ブラスター2》

そして私の周りに小さいビットが数個出現し

「クリスタルゲージ……………ロック!!!」

ビットが三機ヴィヴィオの方へ行き、クリスタルゲージを作る。

「くっ、こんなもの!！」

しかしヴィヴィオは脱出しようとゲージを拳で叩く。

これも……………長くはもたないね……………

(レイジングハート、サーチャーの様子はどう?)

(それが、サーチャーが全て破壊されてしまっています……………恐らく、内部にいるプレデターによるものだと思います)

(そっか……………)

そう、私が落胆した時だった。

ガガガガッ

突然ゆりかごが大きく揺れた。

(今の揺れっていったい……………)

《マスター、先ほど中心部分にて爆発を確認しました》

「爆発!?……………いったい何がどうなってるの?……………」

私が混乱していると、今度はヴィヴィオの様子に変化が現れた。

「ッ!……………なのは……………ママ?」

「ヴィヴィオ!……………」

私はヴィヴィオの方へ駆け寄ろうとしたが

「来ないでっ!!」

「ッ!!」

ヴィヴィオは反射的に拳で攻撃して、私はとっさにバリアで防いだ。

「ダメなの……………まだ……………体が、言うことを聞かない……………」

そうしてヴィヴィオは再び魔力弾で攻撃してくる。

「くっ、レイジングハート!!」

《ラウンドシールド》

私はまたシールドで防ぐ。

けど、結構やばいかも……………

とっていると、ヴィヴィオの攻撃が止み、ヴィヴィオが話し始めた。

「私……………分かったの。私は大昔の人のクローンで……………この体も、戦うための兵器。……………私のパパとママだって……………とっくに死んで……………なのはさんも、フェイトさんも、光司さんも……………本当のパパとママじゃない……………」

「違うー！……………私もフェイトちゃんも光司君も……………ヴィヴィオこと、の本当の『違うよっー！』……………ッー！！」

「私の本当のパパとママは……………もう、どこにもいない……………私はひとりぼっち……………私なんて……………この世界にいちゃいけない存在なんだよー！！……………」

「ちが……………」

そう、いいかけた瞬間

ズガアアアアアン

「『っ!?!?』」

突然玉座の間の壁が壊され、二人の人影が見えた。

まさか、敵!?

だとしたら、本格的に不味い……………」

けど、私の心配は一瞬で消し飛んだ。

その、優しくもどこか頼もしく聞こえる、懐かしい声を聞いて

「それは違うよヴィヴィオ。……………この世界に、いちゃいけない存在なんて、あるわけないんだよ」

「こ、……………光司君」
「……………パパ」

そこには私の大好きな人が立っていました。

「でも……………私の……………家族は……………」

「それなら……………」

すると光司君はおもむろにヴィヴィオに近づいていき

ガシッ

「え？……………」

ヴィヴィオの手を握りしめて言った。

「家族なら、ここにいないじゃないか……………ヴィヴィオの目の前に……………確かにヴィヴィオとは血の繋がりはないかもしれないけど……………今ヴィヴィオは僕とこうして繋がってだよ……………これは僕の叔父と叔母……………いや、父さんと母さんが言った言葉なんだけど“家族って言うのは、血の繋がりだけじゃない。家族の繋がりは、心の繋がりなんだ”って……………だから、たとえこの手

を放したって、僕とヴィヴィオは繋がってる、なのはさんとも、フ
イトさんとも、他のみんなとも……………だから、ヴィ
ヴィオはひとりぼっちじゃないんだよ」

「……………ありがとう……………パパ……………あっ、でも」

「心配はいらないよ。ヴィヴィオは必ず助けるから」

そうして今度は私の方に近づいてきて

「なのはさん、ヴィヴィオは恐らく埋め込まれたレリックによって
動かされています。だからレリックだけを破壊すれば……………」

「ヴィヴィオはもとに戻るってわけだね。だったら私に任せて!!」

「分かりました。僕はヴィヴィオを押さえます!」

「うん、分かった!!」

こうして二人の初の共同作業が始まった。

え、言い方が違っつて？
もちろん間違っつてないよ

そしてまずは光司君がヴィヴィオの動きを止める。

でも今のヴィヴィオは並大抵のバインドは破っちゃっつからな……
……どうするんだろ……

「いくよヴィヴィオ……我がこつは聖なる鎖………光の戒め
をもって彼のものを捕らえよ………サンクチュアリーバインド
！……」

するとヴィヴィオの周りから眩く光る鎖が出てきてヴィヴィオを捕らえた。

ヴィヴィオははずそうとするけどびともしない。

.....私あんなに苦労したのに.....

「なのはさん今です！..！」

「う、うん！！ブラスター3！！..！」

《ファイナルリミット》

私は空中に上がりカートリッジをロードする。

「ヴィヴィオ、いたいのちょっと我慢してね」

「.....うん」

「全力……………全開!!」

《スターライトブレイカー》

レイジングハートやプラスタービットにピンク色の魔力が収縮していく。

そして

「スターライト……………ブレイカー……………!!」

ヴィヴィオを私の砲撃が飲み込み

「ブレイク……………シュー……………」

ズガアアアアアアア

「はあ、はあ、はあ……………終わった？……………」

そして私はその場に倒れ

ガシッ

なかった。

いつの間にか光司君が私の肩に手を回して、私を支えていた。

「なのはさん、大丈夫ですか？」

「うん、ありがとう光司君……………ヴィヴィオは？」

「ヴィヴィオなら、ほら」

光司君が指差した方を見ると、一人でなんとか立ち上がったヴィヴィオの姿があった。

するとまた

ズガアアアアン

「『っ!?!?』」

壁が壊され今度は

「なのはちゃん無事!?!」

「『はやてちゃん(さん!?!?!?)』」

「光司君も、二人とも無事のようやな。ヴィヴィオは?」

「うん、ヴィヴィオならさっき助けたところ」

「そうか、ほんなら早いとこ脱出や!?!」

「『うん(ええ)!!!』」

すると今度はゆりかご館内に音声が流れ始めた。

「聖王の消失を確認。これより館内全ての魔力はシャットダウンされます。乗組員は速やかに指定の場所へ向かってください」

すると光司君はやてちゃんが壊した部分が修復され、はやてちゃんもリンとのユニゾンが解けてしまった。

「あかん、全然魔力が結合せん……………出口も塞がれたし通信も繋がらん……………」

「万事休すってことか……………そうだレナ！」

「『レナ???』」

すると光司君が来た方から女の人が一人来た。

あのと看見た人影のもう一人はこの人だったんだ。

「レナ、あいつは何か言っていなかった？」

「いえ、ドクターはこう言う場合の対処は聞いていません。恐らく、勝つと言う自信があったのでしょう」

「やっぱりそうか……………困ったな」

なんだか二人だけで話が進んで……………ってその前に！

「『光司君、この人誰！？』」

私とはやてちゃんは光司君に問い詰めた。

「と、とりあえず二人とも落ち着いて……………彼女は……………」

そうして女の人が自己紹介し始めた。

「申し遅れました。私の名前はレナと言います。光司さんとは……
…切っても切れない関係（クローンとオリジナルの関係）とでも言
いましょうか」

「『ええええ！！？？』」

これには全員が驚いた。

「光司君、いったいどうということなの！？」

「そ、そんなこと言われても／＼！僕にもさっぱり／＼……………」

「まったくうちらと言つものがありながら！ー！」

「す、すいません／＼！ー！……………っつてどういふことですか？」

「それより、レナさんになにもしてないでしょうねー!」

「な／＼、何かしているわけじゃないでしょ／＼! ね、レナ!？」

「えっとその／＼……頭を撫でてもらったり／＼……抱き
締めてもらいました／＼……」

「『やっぱり!』」

「誤解だ——!」

「『光司君、そうなった経緯をたっぷり聞かせてもらっよ(で(？』」

「あ……えっと……っ、つまり……」

光司君を問い詰めているその時、突然壁が壊れた。

今日こいつ言っの多いなうなんて思っているよ

「『みなさん、助けに来ました！！！』」

「『スバル、ティアナ！！！！』」

やって出られると思ったその時だった、スバル達とは反対側の壁を突き破って蜘蛛型のロボットが現れた。

恐らく、こいつがサーチャーを破壊したんだ。

でもこの状況は凄くまずい……………魔力が結合しないんじゃ戦えない……………

すると光司君が前に出た。

「スバル、ティアナ、なのはさん達を連れてすぐに逃げて。ここは僕一人で食い止める」

「『光司君？』」

「しい兄！？」

「兄さん！？」

いくらなんでも、光司君一人じゃとても無理だ！

そんなことは、誰もが分かる状況だった。

無論、光司君も。

「光司君、無茶だよ！！」

「そうや、いくら光司君が強い言っても、こんな状況で戦えるわけないやん！！」

「光司さんが残るなら私も残ります!!」

「レナ、それはダメだ。いくら無茶って分かってても、みんなを救うにはこれしかないんです!!」

「じゃあ私が残る!!今の私ならちゃんと戦える!!」

「それもダメだ。スバル、今の君には、なのはさん達を助けると言うのが目的のはずだ」

「なら、兄さんもその対象に入ってる!!」

「うっ……………なら、スバル・ナカジマ二等陸士、ティアナ・ランスター二等陸士兩名に命じます。高町なのは一等空尉、八神はやて二等空佐、及びゆりかご内で保護した二名を地上まで連れていきなさい。拒否権は認めません」

「っ!?!?.....そんな」

「しい兄.....」

「どっち道、二人で運ぶにはこの人数は多すぎる。大丈夫、必ず戻るよ。だからなのはさん、行ってください」

光司君は強い目で私に言った。

こうなると、光司君は止められないんだよね.....昔から.....

「光司君.....絶対、絶対帰ってきてね。また帰って来なかったら.....許さないよ!!!」

私は少し泣きそうになりながら光司君に言った。

「ほんま、なのはちゃんの言う通りや!.....帰って来んかったら、また言うこと聞いてもらうで!!!」

はやてちゃんも泣きそうになりながら言った。

「光司さん、信じてますから……………絶対、生きて帰って来ると」

レナさんも、光司君に言葉をかけた。

「ありがとう、3人とも……………じゃあ、行ってきます」

「『……………いつてらっしやい』」

そうして私たちはスバル達の方に、光司君はあの蜘蛛型の方にそれぞれ向かっていった。

私たちは向かっている間、誰一人として振り向かなかった。

みんな、光司君を信じているから。

~~~~~

光司 side

僕は突然現れた蜘蛛型のプレデターの方に向かう。

とりあえず、蜘蛛型のプレデターが僕の方に来てくれて助かった。

「魔法が使えなくても！！いくよ、ザックス！！」

《オーライマスター》

「はあああああつ、たあつ！！」

僕はおもいつきりそいつに向かって剣をふった。

すると鈍い音がして、蜘蛛型プレデターは少し吹っ飛んだ。

ははは……………ザックス、君はなんて強さだ……………

と、僕はつくづくザックスのハイスペックさに感激した。

だが、そう思ったのもつかの間で、蜘蛛型はすぐに起きて攻撃してきた。

カンッ、カンッ、ガキッ

僕は蜘蛛型の攻撃に手も足も出なかった。

前方の4本の足から繰り出される攻撃は、僕に攻撃する隙を与えなかった。

(くそっ、このままじゃあ……………せめて、壁を壊すことが出来れば……………ん？壁……………いや、いける！)

そうして僕はある作戦を思い付いた。

そのためにまずはヤツと距離を取る。

そして

「ほら、ここまで来てみな!!このおんぼろプレデター!!」

僕は蜘蛛型を挑発してみた。

まあ、機械だから挑発に乗るとは考えにくいけど………

ガガガガガガガガガガガガガガ

するとすごいスピードでこちらにやって来た。

案外うまくいくもんだな………

そして壁ギリギリのところでは僕は避けた。

すると、勢い余って壁まで壊れた。

「よしっ、うまくいったぞー!」

こんな風にして、僕は目的の部屋へ向かった。

航空戦力生産室

向かったのはレナを助けた部屋。

「ここにあるはずなんだけど………あ、あったー！」

見つけたのは射出口。

航空戦力を外に出すためのものなので、当然外に繋がっている。

今は僕が生産を止めたので何にも無い。

僕はすぐさま射出口を滑り降り、外へと飛び出した。

そして僕の後を追うように蜘蛛型も壁を突き破って追って来た。

しかし、僕は大事なことを忘れていた。

滑り降りる先は空の上

したがって



「やっと出た……………つてああああああ」

重力に従い真つ逆さま。

《マスター、落ち着いてください。外では魔法が使用できますよ》

「あつ、そうだった……………ほっ！」

そして僕はいつも通り飛行魔法を使って飛んだ。

上を見ると先ほどの蜘蛛型ブレデターが落っこちてきている。

「よしっ、ザックスいくよー!!」

「オーライマスター、ロードカートリッジ」

そしてザックスの刀身に赤色と白色の魔力が宿る。

「はあああああつ、光焰……………一閃！！！」

僕は落ちてくる蜘蛛型プレデターを一刀両断した。

そして、これでやっと……………

「終わったか……………全部……………」

そして僕はみんなが向かったヴァイスのへりに向かい、開いていた後ろから中に入った。

すると、みんなちよつど帰ってきた所のようで、僕の登場にかなり驚いていた。

しかし僕はそんなみんなに一言だけ言った。

「みんな……………ただいま」

そしてようやく、僕らの戦いは終わりを告げた。

第45話「最終決戦〜最終章〜」（後書き）

まことに勝手ながら、しばらく執筆活動はお休みさせていただきます。

まあ理由としては……察してください。

一応、感想には顔を出すかもしれませんので……よろしくお願ひします。

## 第46話「それからのこと」

事件から数週間後、ミッドチルダは平穏を取り戻していた。

あのDrクロウの起こした事件はDLC事件と呼ばれ、地上本部や本局に大きな影響を与えた。

地上本部はレジアス中将が、本局はクロノ提督らが中心となり少しずつではあるが両者が歩み寄り始めていた。

そして光司が助けたスカリエッティは事件後自ら自主し、地上本部へ引き渡された。

ナンバーズは事件の時の協力もありチンク以降のナンバーズは海上の更正施設へその他のナンバーズは………それは後でお話ししよう。

人造魔導師の3人はガルシアやルークは意思を持ってDrクロウに協力したため、こちらも地上本部へ引き渡された。そしてレナは…

………

光司 side

あれから僕は事件の功績を讃えられ、一等空佐に昇進した。  
なにげにはやてさんより階級が上になってしまった。

そして機動六課はいつもの落ち着きを取り戻した。

そう、機動六課は。

うってかわって僕はと言ひつと……………

「光司さん、お茶が入りました」

「あっ、ありがとうございます。ウーノさん」

「光司、何だか暇だ。少し模擬戦の相手をしてくれ」

「いやトーレさん……暇なたび相手をしてたら僕の身がもちま  
せんよ……」

「光ちゃん、このシステム何だけど、どうかしら？」

「うん？どれどれ……ああこれはいいねクアットロー！後でデー  
タを送っておいて」

「はい」

「光司さん、次の事件の資料です」

「ありがとう、レナ」

そう、ナンバーズのウーノさん、トーレさん、クアットロとレナは僕の監視下に置かれることになって、4人とも機動六課に来たのだ。

まあ監視下と言うか………手伝ってもらってる。

あの事件の後、急に僕に色々な事件や調査がやって来たからだ。

おかげで最近はずいぶん忙しい。

すると館内放送がかかった。

「神谷一等空佐、大至急部隊長室におこしてください」

「あれ、はやくさんが呼んでる？それじゃ、行ってくるね」



そして僕は部隊長室へ、ウーノさんは事務作業、クアットロはシステム関係の作業に、トーレさんはレナを連れ模擬戦へと向かった。った。

## 部隊長室

そして部隊長室に着いた僕はドアをノックして中に入る。

「失礼します。はやてさん、何かようですか？……………あれ？」

そこには自分の机にうつ伏せ、うぐうぐ唸っているはやてさんがいた。

「あゝ、はやて……………ちゃん？」

「う〜〜〜、最近光司君が全然かまってくれへん……………寂しいわあ  
……………」

「……………」  
「ご用は何ですか？」

「無視なんか！？うちがこんなに言ってるのに無視なんか！？」

「何だか最近はやてさんの良からぬ意思が分かってきたんで……………  
……………」

「そんな……………あんまりや……………」

ガクツとその場にまた伏せるはやてさん。

何だかこうしていると僕が悪いみたいだ……………仕方ない

「分かりましたよ、帰ったらまた来ますから」

「ほんまか！！！」

すぐさま机から飛び起きるはやてさん……………と言っか早すぎいな  
ような……………

「それで用は何ですか？」

「ああ、何や光司君にお呼びだしがかかってるんよ。相手はあの伝  
説の三提督やって……………」

「お三方が？何のようだろう……………まあとりあえず、行ってみま  
す」

「はよ帰ってきてな」

「……………善処します」

そうして僕は機動六課を放れ、本局へと向かった。

本局に着くと、すでに伝説の三提督がいた。

「お久しぶりです、ミゼット提督、ラルゴ元帥、レオーネ相談役」

「ええ、本当に久しぶりね光司君」

「しばらく見てないが、どうやら元気そうだな」

「いえ、お三方ともお元気で何よりです」

「なに、まだまだ現役じゃよ」

「ハハハッ、失礼しました。それで、ご用は何ですか？」

「ふむ、その事なんだが、実は君に頼みたいことがある」

「僕にですか？」

かの伝説の三提督からの直々の頼み。

相当難しい任務なのだろうと思ったら……………

「実は君に、部隊の隊長になってもらいたいんだ」

「は、はあ……………」

僕は思ってもいない回答にそう答えるしかなかった。

「と言ってもただの部隊じゃない。対危険魔導師用特別精鋭部隊……その名も、イージス、すべてを守る盾の名を持つ部隊だ。この部隊の隊長を君にやってもらいたい。メンバーは君にすべて任せるよ」

（任せるって……そんな急に……あ、いたな）

僕は何人かふさわしい人材を思い出した。

「分かりました。何人かふさわしい人材に心当たりがあるので、その……」

僕はお三方にあるお願いをした。

「ふむ、君が言っならいいだろ」

「ええ」「ああ」

「では、慎んで勤めさせていただきます」

「詳しい資料は後でまた送るとしよう。それでは、頼んだぞ」

そして三提督の承認も貰い、僕は機動六課に戻ることにした。

機動六課に戻り、部隊長室に向かうとはやてさんの他になのはさんとフェイトさんがいた。

「あれ、みんな揃ってどうしたの？」

「『はやて（ちゃん）だけ抜け駆けさせるわけにはいかないからね

！』」

「うー、こんなはずじゃなかったのに……」

再び机に伏せるはやてさん……

「で光司君、二提督からのお話って何だったの？」

「ああ、それは……」

僕はさっきの出来事をなのはさん達に話した。

思ったけど、これって話したりしても良かったのかな？

すると三人の反応は予想通りで……

「『『……ええええええええええ！！！！！！！？？？？？』』」



かなり驚かれた。

「自分の部隊って、光司君すごいよ!!」

「しかもその隊長だなんて、流石は光司だね」

「これはお祝いせんといかんな!!」

「『うん!!』」

何だか勝手に話が進んでいるような………まあいつか、いつものことだし。

なのはさん達はいつの間にか三人で話が盛り上がってる。

すると、今度は僕に通信が来た。

相手はドゥーエさんからだった。

「ドゥーエさん、どうしましたか？」

「光司さん、どうやら最高評議会が動き出しました。ドクターとガ  
ルシアさん達の処分がもう決まっているみたいなんです！！」

「何だって！？……………ならそろそろ」

「はい、計画を実行しなければなりませんね」

「では、今からそちらに向かいます。手筈の方を、よろしく願  
いします」

「はい、お待ちしております。それでは」

そしてドゥーエさんからの通信は切れ、僕は急遽地上本部に向かう  
ことにした。

が、僕はその場に立ちつくしてしまった。

ただならぬ殺気を感じて

「『『光司（君）、さっきの女の人是谁なの（なんや）？』』」

そう、三人の恐ろしいまでの殺気を感じた……………

「いや、べ、別に、ただの知り合いですよ……！」

「『『ふ~~~~ん、そうなんだ（なんや）』』」

三人の笑顔が逆に怖い……………

「そう言えば、六課に何人か女の人連れ込んでいるよね、あれは誰なの？」

「しかも仕事も手伝ってもらってるみたいだし……ただの知り合  
いってことはないよね？」

「ええかげん白状した方が、光司君の身のためやで……」

笑顔で三人が僕の方にゆっくりと近づいてくる。

(ま、不味い……このままだと地上本部に行けない……  
…仕方がない、後で怒られるかもしれないけど)

そうしてる間にも三人は迫って来る。

「『『さあ、答えて(や)!!』』」

「その……ごめんなさいっ／＼ザックス！」

《フラッシュムーブ》

そして僕はフラッシュムーブを使ってその場から逃げた。

~~~~~

三人 s i d e

ここは地上本部でもごく一部の人間しか知らない場所。

ここにはそれぞれ巨大な装置に入っている3つの脳がある。

最高評議会だ。

「しかし、神谷光司には驚かされたな」

「我らの予想を遙かに上回る能力。これは何とかしなくてはな」

「こいつを我らの仲間にてできれば、最早怖いものは無いだろう」

「しかし、スカリエッティのヤツが自首するとはな」

「我らのことを話す前に始末せねばな」

「それなら問題あるまい。先ほど、逮捕した他の人造魔導師と共に処刑するよう命じた。これで大丈夫だろう」

「流石に手が早いな。では、神谷光司の件だが」

「それも問題ない。局にあいつの昔からの友人がいるようだ。そいつを人質にすればよかるう」

「なるほどそれは名案だ」

「では、神谷光司に用済みのレジアスの始末も頼むとしよう」

「そうならば、我らに刃向かう者もおるまい」

すると急に一つの扉が開き、二人の人が入ってきた。一人は女性で、もう一人はフードを被っている。

「失礼します、調整に参りました」

「いつもは一人だろう。そのもう一人は何だ？」

「はい、お三方にどうしても直接お耳に入れたいことがあるらしくて」

「ほう、では聞こう。が、その前にフードを取れ」

「……………はい」

そしてフードを取ると、そこには薄い金髪で水色の瞳の女性のような男性が立っていた。

そしてその姿に最高評議会の三人……………いや、3つの脳は驚きの声を上げる。

「貴様は、神谷光司！！なぜここが分かった!？」

「喋るな。こんな醜い姿になってまで生きている物と話したくありませんから。それで、まずはこちらをご覧ください」

そう言うと、部屋にたくさんモニターが映し出された。

映っているのは地上本部や本局のお偉いさん方。もちろん光司が信用に足りると思った人物ばかりだ。

そして皆口々に驚きの声を上げている。

「どうですか皆さん、これが最高評議会の真実です」

「いやはや、我々はこんなものに踊らされていたのか……………」

「まったくだ……………いまだに信じられん」

それぞれに少しづつではあるがこの状況の感想を述べ始める。

そして最後に映っている中でも一番偉そうな老人が喋りだした。

「元時刻をもって最高評議会の全権利を剥奪し、管理局からの永久追放を命じる。皆さん、よろしいですか？」

「『』意義なし！』『』」

そしてここに元最高評議会……………もといただの醜い脳に判決が下った。

「そんなっ！、我々は今までこの世界をみちび『喋るな、と言ったはずですが』……………くっ！」

「神谷一等空佐、どうかこの事は内密にお願いしたい」

「分かりました。ただし条件があります」

「何だね？」

「一つ、僕にこいつらの処分を任せること。二つ、恐らくまだ管理局内にいるであろうこいつらの部下及び加担したもへの処罰も僕に任せることと、そいつらの穴をすぐに埋めるよう手配すること。この二つの条件を飲んで頂きたい」

「それは一向に構わないが、部下の方は見当がついているのかね？」

「はい、すでにほぼ一ヶ所に集めています。後程そちらに向かう予定です」

「さすが……………と言っべきかな。分かった喜んでその条件を飲む」

「ありがとうございます。では」

そしてモニターは切れ、部屋には静けさが戻ってきた。

光司はゆっくりと3つの脳に近づく。

「く、来るなあ、来るな来るなあ!!」

「ま、待ってくれ、は、話せば分かる!!」

「頼む! た、助けてくれ!!」

「この期に及んで見苦しいですね。でも大丈夫、一瞬で終わります

から」

すると光司はセットアップをして空中に上がり、手を上に掲げ魔力を溜め始めた。

それはだんだんと太陽のようになり赤く燃え出し、その大きさを増していく。

「これは、今までにあなた方の言うくだらない正義のために死んでいった人たちや、なんの罪もなく実験台にされ命を落としていった人たち、あなた方のせいで人生を狂わされ地獄のような思いをした人たち、これら全ての人々が味わった絶望や悲しみや苦しみ……そして、この僕の最大の怒りだと思え！！！！！！」

そしてついに直径20メートル程の小さな太陽が出来た。

もちろん小さいと言っても、表面温度はおよそ4000　ほぼ太陽と同じである。

ちなみにこの部屋の外側には内側の熱を外に漏らさないような境界が張ってある。

「サン……………フレア……………インパクトオオオオオオ
オオ!!!!!!」

小さい太陽は3つの脳の装置を全て飲み込み、
跡形もなく消え去った。

炎は全てを燃やし尽くし、
灰さえ残らなかった。

「……………終わったか」

そして光司はその部屋を後にした。

~~~~~

光司  
side

最高評議會を処分した後、少し寄り道した後で僕はあの場所へ向かった。

そう、最高評議會の部下や加担したものを集めた場所だ。

その数およそ2000人。

その階級は上から下まで様々だ。

これはスカリエツィに頼んだお陰でこれほどの数が分かった。

そして僕はその人数を一ヶ所に集めた。

そして僕はその場所へと入る。

僕が入るとすでに全員がいるようだった。

「皆さんに集まって頂いたのは他でもありません。これをご覧ください  
なす」

そして僕は僕やスカリエツティが調べた悪行の数々を見せる。

中には驚きの表情を浮かべたり、啞然とした表情を浮かべている。

そしてここにいる全員に向かって言い放つ。

「単刀直入に言います。あなた方にまだ、管理局員としての誇りがあるのなら、今すぐ罪を認めて出頭してください」

が、その答えはやはり……

「何を言っているのだね？我々は一切これに関与などしていないよ」

誰一人として認めようとする者はいなかった。

「そうですか。なら、仕方ないですね……………カづくでいかせてもらおうとしましょう！ー！」

そして僕はそいつらに近づいて行く。

何人かは怯えて出口へと駆け込んだ。

が

ズガアアアアン

その扉を開ける前に扉は吹き飛び近くにいた連中も一緒に吹き飛んだ。

そして扉の外側には二人の人影があった。

一人は大男で、もう一人は少し細身の男性だ。

「ねえガルシア、ちょっとやりすぎじゃない？」

「なに言ってんだルーク、こついうのは最初のインパクトが大事なんだよ！」



「多分それ、使い方間違ってるよ……………」

そこには僕の仲間、ルークとガルシアが立っていた。

ここへ来る前に僕が二人を助け出しておいたのだ。

「なっ、何なんだお前達は!?!」

「そ、そうだ!我々をいつたい誰だと思っている!」

すると近くにいたそこそこの地位にいるような男性二人が二人に聞いた。

「ああ!?!……………えっと、こついつ時なんて名乗ればいいんだ?」

「もうガルシア、さっき光司に言われたじゃないか。あれを言えばいいんだよ」

「おお、そうか！よし分かった……………俺は管理局・対違法魔導師用特別精鋭部隊“イーリス”のナイトオブ3、ガルシアだ！  
！！」

「おおよく言えたね、絶対一部忘れてると思ったのに。それじゃあ僕も……………同じく管理局・対違法魔導師用特別精鋭部隊“イーリス”所属、ナイトオブ2、ルーク！！」

「か、管理局特別精鋭部隊……………イーリス？……………そんな部隊聞いたことないぞ！！」

「当たり前ですよ」

「『』 ツ！？『』」

僕はそいつが言い終わるとすぐに返答した。

「イーリスは今日、伝説の三提督が発足しこれがその初任務ですから、知らないのも無理ありませんね」

僕は再びあいつらに近づいて行く。  
今度は殺気を出しながら。

そして観念したのかほとんどはその場に入たりこんだ。

が、それでもやって来るやつはいるもので……………

「う、う……………うわああああ!!..!」

大声で叫びながらこっちに突っ込んできた。

「まったく、無駄なことを……………はあっ!!..!」

僕はそいつを意図も簡単に投げ飛ばし、壁に叩きつけた。

すると何を思ったのか

「そ、そうだ……………相手は高々3人……………」

「ここにいる全員でかかれば……………」



しかしルークが扉の方に電気のパリアを張っていたため局員は逃げられなかった。

「ちとと……………それじゃあ覚悟してくださいね！…！」

そして僕はセットアップもせずに素手で戦った。

~~~~~10分後~~~~~

「結局……………全員のしちゃったね」

「まったく、口ほどにもねえ野郎共だぜ」

僕らはその場にいた全員を倒してしまった。
もちろん軽く気絶する程度に。

まあほとんどガルシアが叩きのめしたけど……………

「それじゃあ僕は局員を呼ぶから二人は先に六課に行つてて」

「ああ」「うん」

そうして二人は先に六課に戻り、僕はしばらくして来た局員に事情を説明し、全員の身柄を引き渡し六課に向かった。

しばらくして、僕は六課に戻つて来てこっそりと中に入る。

あの3人に見つかると何をされるか……………考えただけでも恐ろしい……………

そして運良く僕は目的の2人を見つけた。

「スバル、ギンガ、2人ともちよつといい？」

そう、目的の2人とはナカジマ姉妹のことだ。

「しい兄？」

「光司さん？」

「これから聖王教会の病院に行こうと思うんだけど、よかったら一緒に行かない？」

「はい是非！スバルもいいよね！？」

「うん！！」

そうして2人を連れ聖王教会の病院へと向かった。

病室に入るとそこには二人の女性が眠っていた。

メガーヌさんとクイントさんだ。

そしてメガーヌさんのそばにはルーテシアがいた。

「やあルーテシア、もう大丈夫？」

「うん、もう大丈夫。光司さんの方は？」

「僕も、もう大丈夫だよ」

僕はルーテシアと軽く挨拶を交わし2人の様子を伺う。

(メガーヌさんは長い間意識が無い状態だったし、クイントさんはDrクロウに何をされているか分からないからな……………けど、やってみよう)

そうして僕はセットアップをしてリミットブレイク・パラディンフオーズを発動させる。

すると当然3人は驚く。

「しい兄、一体何してるの!？」

「そうですね、ここは病室ですよ!?!」

「どござするつもりなの?」

「まあ、見ていてよ」

そして僕は集中し、光の魔力を集める。

「聖なる光よ、その光に治癒と癒しの力を!ヒール・オブ・シャイン!?!」

そうして部屋全体を暖かな光が包み込んだ。

しばらくしてその光は消え、僕もバリアジャケットを解除した。

「ふう……………これではらくしたら目を覚ますと思っよ。それじゃあ僕は別の部屋にいるよ」

そして今度はゼストさんの部屋へと向かった。

部屋に入ると、その部屋にはゼストさんしかいなかった。

「ゼストさん……………僕が必ず救ってみせます……………」

僕は先ほどと同じ行動をした。

光が消えると、僕は耐えきれずその場に崩れた。

「はあ、はあ、はあ……………さ、さすがに力を使いすぎたかな……………」

《その通りですマスター、もっと自分を大事にしてください》

「はっはっは、デバイスに言われちゃったよ……………分かってる、今日はもう魔法は使わないよ」

《約束ですよ》

「ああ、約束だ」

するとゼストさんが目を覚ました。

「ん……………ここは？……………俺は一体どうなった？」

「ここは聖王教会の病院ですよ、ゼストさん」

「っ、光司！？……………そうか、お前が俺を助けてくれたのか。礼を言う」

「気にしないで下さい。昔はゼストさんにお世話になりっぱなしで、いつか恩返しをしたいと思ってましたから」

「ふっ、そうか……お前らしいな」

と、ゼストさんは笑って答えた。

「それじゃあ僕はクイントさんとメガー又さんの様子を見てきます。ゼストさんは安静にして下さいね」

「ああ、分かった」

そして僕はゼストさんの病室を出て、再びクイントさんとメガー又さんの病室へ向かった。

そして扉を開けるとすでに二人は目覚めて家族の対面を果たしていた。

「お二人とも、目が覚めましたか？」

「その声って……………もしかして」

「光司君……………なの？」

「はい。お久しぶりです、クイントさん、メガーヌさん」

「『光司君！！！』」

「うわぁっ！？／／／」

すると急に二人が飛び起きて僕に抱きついてきた。

あまりにも唐突過ぎたため、僕はどうすることもできずただ捕まっ
てしまった。

「お、お二人とも／／もう大丈夫ですか！？／／／」

「大丈夫よ。もともと大したことなかったんだし」

「それに、光司君が魔法を使ってくれたんでしょ。だったら大丈夫よ」

(え〜〜〜と、それは大丈夫な要素に入れていんだろうか……………)

「あ、あのノノ……………そろそろ離れてもらうとノノ……………僕としては嬉しいんですがノノノ」

「あら、昔はよくやったじゃない」

「そうよね〜。あの時はまだ私たちの方が背が高くて、娘が増えた気がしたわ」

「娘なんですね……………息子じゃなくて」

昔はよく間違えられたけど……………まあ今でも間違えられるけど……………やっぱり悲しい。

そして今状況的にはすごく不味い。

何と言うか……腕に何か当たっている／＼……何かとはあえて言わない、言いたくない／＼

「あの／＼……そろそろ離れてもらわないと／＼……と言
うかお二人ともまだ全快じゃないんですから、安静にして下さい
！！！」

「相変わらず心配性ね、光司君は。分かったわよ」

「そこまで言われたら、仕方が無いわね」

そうして、二人はしぶしぶ自分のベッドの所へへ戻って行った。

「そう言えば光司君、あの話覚えてる？」

「うん／＼／＼……………光司さんなら……………いいかも／＼／＼」

「スバル／＼！？……………ギンガ／＼！？」

スバルもギンガもなにげにとんでもないことを言い出した……………
……血は争えないな。

するとメガー又さんが

「あら、だったら家に養子に来るって話もあったわよ」

「そ／＼、そんな話まで／＼／」

いったいいつそんな話をしたのか、全く記憶に無い。

「光司……………お兄ちゃん……………」

「ル、ルーテシア?……」

今度はルーテシアまで言う始末だ。

この状況をどうしよう……

するとまた

「そう言えば大人になったら私とメガーヌ、どっちをお嫁にしたいかって話もしたわね」

「そうそう。その時の光司君の顔ったら『あー！ー！ー！ー！ー！もういいですから！ー！』」

「『あはははははっ』』」

そうしてしばらくたった後、僕らは六課に戻った。

しかしこの後、僕がとんでもない目になるうとは夢にも思わなかつ

た。

六課

僕は六課へ戻るとすぐに呼び出され、部隊長室へ通された。

そこには鬼のぎょうそ……………ゴホンッ、すばらしい笑顔の三人がいた。

(僕はいったいどうなるのだろうか……………)

そんなことを思っていると、はやてさんが口を開いた。

「光司君……………今の今までいったいどこで何しとつたんや?……………」

「え……………あ……………その……………初任務ですよ!新しい部隊の!……………」

僕は必死に言い訳をしたが

「ほう、そうなんや……………ほんならどんな任務やったか全部包み隠さず聞きたいわ」

はやてさん達の怒りは治まらなかった……………こうなれば

「す、すっ、すみません！！あの、何でもしますから、許して下さい……！」

（ちなみに言うと、今では光司の方が階級も上なので、内容は極秘だ、とか言えばすむのだが、光司はどんな階級だろうとはやて達……………もとい女性には頭が上がらないのだ

BY作者)

するとはやてさん達の顔がパアッと明るくなった。

「光司、今何でもしますって言ったよね？」

「は、はい……………確かに」

「本当に、何でもするんだね？」

「まあ、それでも許してくれるなら……………ってまさか！
」？

「光司君には、これからうちの言うことは何でも聞いてもらうので
」

「や、やっぱり……………」

「そちけどもう遅いし、今日はもう寝るか」

「ん？……………寝るってまさか……………」

「『』もちろん一緒に寝るんだよ（やで）『』」

「……………はあ」

そうして僕はとぼとぼと歩いてズットに向かった。

まあ当然の「うとく

「ね／＼／……………寝れないよ／＼／」

只今僕は三人に抱きつかれてベッドの上にいる。

と言っか、こんなにベッド大きかったかな？

そんな若干の疑問を抱いていると、なのはさん達の寝言が聞こえてきた。

「むにゃあ……………光司君……………もう、無理しちゃダメだよ……………」

「私たちも……………少しくらい……………頼ってんだからね……………」
光司……………」

「もう……………どこへも行かんといてや……………光司君……………」

「……………心配掛けすぎってことかな……………皆さん、
ありがとうございます……………」

僕はさん達のに申し訳ない気持ちと感謝の気持ちを抱きつつ眠りに落ちた。

第46話「それからのこと」(後書き)

次回は光司が

なことに!?

お楽しみに!!

第47話「神谷光司危機一髪!？」（前書き）

今回はイージスの任務回です。

その前にいろいろありますが、はたして光司がどうなるのか!!

それではどうぞ。

第47話「神谷光司危機一髪!？」

イージスの初任務から1日たった日。

あれから管理局は2000人が逮捕されたと言つのに驚くまでの素早い対応を見せ、ニュースを独占した。

管理局側は内部の一斉告発と題したが、実際は全て光司のお陰である。

そしてその光司はと言つと……………

光司 side

色々あった1日から日から一夜明け時刻は午前5時。

僕はいつものように起きまよじと手を伸ばす。

モニユ

手に柔らかい感触。

不思議に思い僕は眠い目を擦りながら目を開ける。

「えっ／／／／／……あっ／／／／／……£ ¥ \$ £ # & * %」

見るとフェイトさんの……その／／／……む、胸／／／……
……に僕の手があった／／／……

(いけない／＼！落ち着け僕！！……………と、とりあえず手を放して起きよう／＼……………)

そうして僕が起きようとするが……………

「ん……………うん……………」

「(ひゃあああああ／＼／＼／……………)」

(光司の心の声)

フェイトさんは寝返りをうって、僕の手はフェイトさんの下敷きと
なってしまった。

しかし僕は負けじとなんとか手を抜き、ベットから抜け出した。

そうして僕は外に出た。

まだ朝早いとあって誰もいない……………と思ったがそこ

には一人の男性がいた。

スカリエツティだ。

実は、ガルシア達を救った時一緒に連れて来てかくまっている。

ちなみにかくまっているのは僕の家なんだけど……………どうやって入ったんだろ……………

「こんなに朝早くから何してるんだい？」

「やあ君か、どうも目が覚めてしまったね。散歩してるところへ来てしまったんだよ。そっちこそどうしたんだい？」

「僕はいつものことさ」

そう言っつて僕はスカリエツティの近くに立った。

するとスカリエツティはおもむろに喋りはじめた。

「光司……………私は本当に助けられるべき存在だったのだろうか……………」

……」

「どういふこと？」

「私はこれまで様々なことをやってきた………まあ異端者と呼ばれるようになったのもそう言う訳だよ。私は様々なものを作り、壊し、実験してきた。それは非人道的と言われても仕方ないものだった。そんな私が………本当にこの先、生きていて良いものだろうか………」

パシッ

乾いた音が静かな朝靄に響いた。

そこまで言ってスカリエッティは少しよろけた。

僕がぶつたからだ。

「まったく、スカリエッツィらしくない。生きて良いか？そんなの良いに決まっているじゃないか……………スカリエッツィの技術は素晴らしいものがあるし、それをこれからの世に生かせばいい。それが、今までの罪滅ぼしになると思うよ……………」

スカリエッツィは驚いた表情で僕を見つめた。

そしてしばらくの沈黙の後口を開いた。

「はっはっは、君にはいつも助けられてばかりだな……………わかっただけありがと。だが、君への礼がまだだからね、しばらくは君に協力させてもらおうよ。あと、私が君に協力していることは隠しておいてくれ」

「わかった、こちらとしても助かるよ」

「それじゃあ、私はこれで失礼するよ」

そう言って、スカリエッツィは戻って行くと思いきやふりかえり

「そうだ！私としたことが君に渡したいものがあつたのをすっかり忘れていたよ」

そう言つてスカリエッティは僕にあるものを渡した。

「これは……………バッチ？」

渡されたのは剣と盾でデザインされたバッチだった。

「それは君へのお祝いさ。新しい部隊の隊長になつたんだろ？」

「そうだけど……………どこでそのことを？」

「私にはすべてお見通しだよ」

「逆に怖いけど……………まあ、ありがたく受け取っておくよ」

「それには、バッチ同士での通信機能、発信機、など色々詰め込んだから役立ててくれ。それじゃあ、私は今度こそこれで失礼するよ」

「ああ、わざわざありがとうスカリエッテイ」

「なに、かまわんさ」

そう言ってスカリエッテイは今度こそ帰っていった。

その表情はどこかいつもの彼とは違い、晴れ晴れとしているようだった。

それから一人になった僕はいつものように剣を出し素振りをした。

最近、ザックスにストレイダーフォームが増えたのでそれを慣らすためだ。

実はこれがブレイドフォームやランサーフォームに比べてけっこう重い。

いくら強力だと言っても、満足に使いこなせなかったら意味がない。

「ふっ、ふっ、はあっ！」

ここのところ素振りをばかりやって来たので、少し体がかっちりしてきた。

これはこれで女性に間違えられなくなるので、むしろ好都合だ。

しかし数が1000を越えた辺りから、次第に体が動かなくなってくる。

まだまだな証拠だ。

「1496、1497、1498、1499、1500!!!ふう……
……少し休もうか」

《お疲れ様ですマスター》

「ありがとう、でもまだまだなんだよな」

すると後ろから誰かが近づいてくる気配がした。

その気配に気付き、パツと後ろを振り返るとそこにいたのは……

「スバル、ギンガ………いったいどうしたの？」

いつになく神妙な面持ちの二人に戸惑いながらも、僕は二人に尋ねた。

「あのねしい兄………事件の時はしい兄が倒れてたから言えなかったんだけど、私たちしい兄に言わなきゃならないことがあるの……」

「……………それは？」

「以前フェイトさんと光司さんと私でDrクロウの施設に潜入した
ことがありましたよね？その時に言えばよかったです、なかなか
言い出せなくて……………実は、私たちは戦闘機人な
んです」

それは突然の告白だった。

だが僕はこの事に驚かずただ二人の話を聞いていた。

「……………」

「事件の最後の時も、私が戦闘機人だったから、あるとき魔法が使
えたんだ……………」

「その……………別に騙すつもりじゃなかったんです……………ただ、
本当のことを知ったらどんな顔されるだろう……………って思うと、
言えなくて……………」

二人は申し訳なさそうに話した。

しかし、僕の考えは最初から決まっていた。

「……………それで、それがどうしたの？」

「『えっ！？』」

僕の返事に二人はかなり驚いているようだった。

「それがどうしたのって……………しい兄……………」

「驚かないんですか？」

「そりゃあまあ、驚きはしたけどそれだけだよ。二人が戦闘機人だろうと、スバルはスバルで、ギンガはギンガでしょ。それは変わらないから」

「し、しい兄……………」

「こ、光司さん……………」

「だからね」

僕は二人の頭に手を置いて

「二人とも、僕の大切の人（守るべき）に変わりはないんだよ」

「『は、はい／／／／／………』」

僕が二人の顔を見ると二人とも真っ赤になっていた。

そして時刻を見ると、午前7時。

朝食の時間だ。

「それじゃあ二人とも、朝ごはんを食べようか」

「『はい(うん)』」

そうして僕らは食堂へと向かって行った。

~~~~~

なのはside

私たちが目覚めるとすでに光司君はいなかった。  
きつといつもの鍛練に出かけたのかな。

そう思い私たちは朝食をしに食堂へと向かった。

私たちが席について朝食を取っていると鍛練を終えたであろう光司君がやって来た。

嬉しそうなスバルとギンガを連れて……………

光司君……………少し O H A N A S H I が必要かな……………

……  
どうやら、フェイトちゃんとはやてちゃんも私と同じ考えみたい。

でも……………

「なのはさん、フェイトさん、はやてさん、三人ともおはようございます」

光司君が笑顔で挨拶してきたの……………

「『『お、おはよう／＼光司（君）／＼』』」

まったくあの笑顔はずるいと思うの……………



そうして私たちが朝食を食べていると、レナちゃんがこっちへ来た。

「皆さん、おはようございます」

「『『』』おはよう（い）づい（ま）す（）、レナ（さ）ん（）ち（ゃ）ん（）『『』』」

あの事件のあとレナちゃんは光司君の監視下にあって今は六課で生活してるの。

でも、ここ最近光司君と一緒にいすぎる気がする……………

「それで光司さん、任務です。至急部屋まで戻ってください」

「ま、また〜？仕方ないな〜」

そして光司君は、ここ最近任務が多くてなかなかお話しできないし

……………

なんだか光司君との距離が遠くなってる気がするの……

そう思っている間に光司君は部屋へと戻って行った。

「あゝあ、光司君行っちゃったね」

「『『『残念だね（です）』』』」

ここにいる全員が少しションボリする中、なぜかはやてちゃんは不適な笑いを浮かべていた。

「これは……………かえって好都合かもしれへんな……………」

「『『『『はいはい（ですか）？』』』』」

そしてはやてちゃんは私たちに話し始めた。

「あんな、実はな.....をやると思ってんねぞ

」

「『『『いいねそね（）ですなそね（）』』』」

「やる！今から忙しくなるぞ！」

「ううしてはやてちゃんのプロジエクトは始まった。

~~~~~

光司 side

朝食を食べていると突然の任務が来てしまった。

最近こんなのはっかりだ。

そうして部屋に戻るとクロノから通信が来ていた。

「今度は何の任務だいクロノ？」

「すまないな光司。今回も違法魔導師のアジトに踏み込んでほしいんだ」

「ランクは？」

「AAA以上だ……」

「なるほど、なかなかのランクだな……分かった向かうよ」

「ありがとう。健闘を祈るよ」

そうしてクロノの通信は切れた。

「また、違法魔導師の摘発ですか？」

「ああ、まったく困ったもんだよ。」

「では、私も一緒に」

「いや、今回は僕一人で大丈夫だよ」

「そ、そうですね。ではお気を付けて」

「ありがとう、レナ。それじゃあ行ってくるよ」

そうして僕は目的地へと転移した。

しかしこのときの僕は、自分を過信し過ぎていたことに気が付かなかった。

~~~~~

レナ side

光司さんが任務へ向かってしばらくの時間がたった。

しかし私には少し嫌な予感がした。

そして思いきって今回の任務の内容をクロノ提督に聞いてみることにした。

「すみません、クロノ提督ちょっとよろしいですか？」

「何かな？」

クロノ提督は少し警戒しながら言った。

監視下にある私は、どうやら信用性が無いらしい。

「先ほど話しにあった光司さんの任務について教えていただけませんか」

「それは無理だ。この任務はイージスとして彼に依頼されたもので、部外者である君には教えられない」

「そうですか……………なら、敵の情報だけでも教えてくれませんか!？」

私の強いお願いを渋々クロノ提督は聞いてくれた。

「敵の情報については、実はあまり分かっていない。ランクがA A以上と言うことしか分かっていないんだ」

「そんな!？それなのに光司さんは行ったんですか!？」

「ああ、だが彼なら大丈夫だろう。そんなに心配はいらないさ」

クロノ提督はそう言うけれどもしもと言つのがある。

私には、そのもしもが怖かった。

「要件はそれだけかい？なら切るよ」

そう言ってクロノ提督は通信の切った。

「光司さん……………私やっぱり……………」

そして私はいてもたってもいられなくなり、光司さんの任務の場所へ向かう決心をした。



(私の思い過ぎならいいのだけど……………)

そんな若干の不安を抱きつつ、私は目的地に向かっていった。

~~~~~

光司 side

僕は今ある建物の前に立っている。

ここが任務にあった建物なんだけど……………

「ザックス、ここであってるよね？」

《間違いありません》

「……………何でこんな豪邸なんだろう……………」

僕の目の前にあるのは広さ300坪はあるつかと言つ豪邸。

こんなところに本当に違法魔導師なんているのだろうか？
とりあえず僕は広い門の前に行き

ピンポン

インターホンを押してしばらく待つ……………

すると

「はい、どちら様でしょうか？」

インターホンの近くのマイクから女性が答えた。

「管理局の者ですが、少しお話を聞かせていただけないでしょうか？」

するとしばらくして女性が答えた。

「分かりました。今から門を開けますので少々お待ちください」

「ありがとうございます」

僕はとりあえず中に入ることにした。

もしかしたら管理局側が間違っているかも知れないのでその確認もするためだ。

しかし僕はこの選択を後悔することになる……………

しばらくすると中からメイドさんが出てきて僕は中に入っていった。

中はやっぱり豪華でいくつも部屋があり、その一つに僕は通された。

「ここでもうしばらくお待ちください。すぐに主が参りますので」

「分かりました。ありがとうございます」

そうして僕は部屋に一人残された。

部屋を見渡して見るが特に変わった様子はない。

「やっぱり間違いなんだろうか……………」

僕が一人呟くと突然扉の方で声がした。

「いったい何が間違いなんですの？」

「えっ!？」

振り返ると、そこには20代前半ぐらいで、水色の髪を腰の辺りまで伸ばしたいかにもお嬢様と言った感じの女性が立っていた。

「いえ、何でもありません。お気になさらず」

「そうですの。で、どちら様?出来ればお名前と階級を言っていたきたいですわ」

彼女は落ち着いた様子で聞いてきた。

名前とはかく、階級を聞く意味が分からなかったが僕は率直に答えた。

「申し遅れました。本局所属、神谷光司一等空佐です。まあ、紅蓮の騎士」と言った方が早いですかね」

「紅蓮の騎士……………あの紅蓮の騎士ですよ!？」

「ええ、そうですよ」

そう言った途端、彼女は喜んだ表情で握手してきた。

それもすごい勢いで……………

「すごいですわ、すごいですわ、すごいですわ!!! やっと、紅蓮の騎士に会えるなんて。さぁお座りになってください」

「は、はぁ……………どうも……………」

僕は彼女の勢いに圧倒されてしまい、彼女に言われるままイスに座った。

すると、どこからかメイドさんが出てきて僕にコーヒーを出してくれた。

さすがプロのメイドさん……………なんという仕事の早さ……………

僕がメイドさんに感心していると、彼女は話始めた。

「申し遅れました。わたくし、この家の主のカトリーヌ・ディエラ・フロストと申しますの。以後お見知りおきを」

彼女は凄く丁寧に自己紹介してくれた。

しかし……………なんかどこかで聞いたような名前だな……………

「それで、紅蓮の騎士様がどういった御用件でこちらに？」

「いえ、実はこの辺りに違法魔導師が潜伏しているらしいという情報を掴んだものですから、少しお話を伺いたく訪問させていただきました次第です」

「そうでしたか……………」

「それで、この辺りで何か変わった事はありませんでしたか？」

「いえ……………特に変わった事はありませんね……………」

「そう……………でしたか」

「他に質問は？」

「いえ大丈夫です。お手数をお掛けしてすみませんでした。それで僕はこれで」

そうして僕が立ち上がろうとすると

「お待ちになって」

「はい？」

先にフロストさんが立ち上がり僕を止めた。

「せっかく紅蓮の騎士様がいらしたんですもの、もう少しあがって
いってください」

「あ、いえ。そう言う訳には……………」

「そうおっしゃらずに」

フロストさんはそう勧めるが、長居するわけにもいかないので断つて立ち去ろうとするが

「いえ、長居すつ……………何のつもりですか？」

断ろうとしたとき、僕はイスに手足がロックされてしまっていた。

「ふふふ、まさかこうも簡単に引っ掛かっていただけなんて、思いもありませんでしたわ」

フロストさんは不適に笑い、そう答えた。

「フロストさん、やはりあなたが違法魔導師だったんですね」

「カトリーヌでよろしいですわ。では改めて自己紹介をしを、“流麗のカトリーヌ” と言えばお分かりいただけるかしら？」

「ッ！？ 流麗のカトリーヌ！？ …………… まさかとは思いましたが、あなただったとは」

流麗のカトリーヌ

ここ最近管理局で話題になってきている違法魔導師。

主に宝石などを盗みだし、その手口はただ宝石の入ったケース等を切って盗み出すと言うものだが、その切り口は見事なまでに綺麗に切れているという。

しかも辺りにはわずかな魔力反応しか残っていなかったらしい。

「それで、僕をどうするつもりですかカトリーヌさん、殺しますか？」

僕は動けないが冷静に聞いた。

だが、意外な答えが返ってきた。

「いえ、わたくしはあなたを殺す気はありません。最初に言いましたわね、やっと会えましたと」

カトリーヌさんはそう言うと、僕に近寄り僕の腕に腰かけ肩に手を回した。

「わたくし、あなたに興味がありますの」

「なっ／＼、何言ってるんですか／＼！？」

当然この行動に僕は驚く。

「かの有名な紅蓮の騎士がどれ程のものかと思えば、こんなかわいい男性だなんて驚きですね。もっと近くで顔を見せてください」

そう言ってカトリーヌさんはさらに近づき、カトリーヌさんの顔がだんだんと近づいてくる。

(不味い／＼……………このままじゃ、僕の精神がもたない／＼／……………仕方ない、少しあらっばいけどっ！！！)

「セツトアップ！！！」

僕はセツトアップをし、手足のロックを破壊してその場から抜け出した。

するとそれに反応してカトリーヌさんもセツトアップした。

白と青を基調としたドレスに所々アクセサリーをあしらったようなバリアジャケットだった。

「カトリーヌ・ディエラ・フロスト、あなたを管理局魔法条令違反で逮捕します!!」

「あら、あなたにわたくしを逮捕することなんて出来ますの?」

カトリーヌさんが指をならすと、どこからか10人ほどのメイドさんがセットアップをしてそれぞれ武器を構え出てきた。

て言うか……………バリアジャケットもメイド服なんだ……………

そうして僕はザックスを構える。

がしかし

「知っていますのよ。あなたが女性を傷つけられないことを」

「くっ!!……………」

仕方なく僕は剣をおろす。

そしてメイドさん達が僕を囲んだ。

「さあ、騎士様を捕らえなさい！」

「『『』』仰せのままに、お嬢様！……！……！……！」

そしてカトリーヌさんの合図でメイドさんが一斉に僕に飛びかかってきた。

「仕方ない………ちょっときついけど………やるしかない……！」

そうして僕は剣を納めて

「リミットブレイク、フォースフィールド……！」

僕はフォースフィールドを発動させ応戦する。

「はあっ……！」

まずは一人が剣を降り下ろす。

僕は白刃取りで受け止め、そのまま剣を弾きメイドさんの後ろに回り

「すみません、はっ！」

「がっ……………」

僕はメイドさんの首元に手刀を当て気絶させた。

「まずは一人！」

続いて二人が同時に前から来た。

「ザックス！」

《フラッシュムーブ》

そして一瞬で二人の目の前に移動し、腹部を拳で攻撃した後気絶した二人を抱き抱えその場におろした。

「これで三人！」

すると今度は五人が一斉にかかってきた。

何人かはロープの様なものを持っていた。

おそらくあれで捕まえるようだ。

でもあれは使える！

僕はロープを持っている人を気絶させロープを奪った。

そして残りの七人を一ヶ所に集め

「ちょっときついですが、我慢してくださいね」

さっきのロープでぐるぐる巻きにして動きを封じた。

(今度からこういう魔法も考えておくかな……………)

そう思いながら僕はカトリーヌさんの方を見る。

彼女は依然としてこちらを見たままだ。

「わたくしのメイド達を素手で相手するとは、さすが紅蓮の騎士様ですわね。ですが、わたくしが相手ならどうかしら？」

そしてカトリーヌさんは杖を構えた。

おそらくあれが彼女のデバイスのようだ。

すると回りに無数の青い球体のようなものが出現し、カトリーヌさんの回りを回り始めた。

それは魔力弾のようだったが、何か少し違った。

なのでさすがに丸腰では危ないと思いつックスを構える。

「喰らいなさい、アクア・インパクト!!!」

その球体はかなりのスピードでこちらに向かってきたが、僕は的確にそれを切り落としていった。

「っ！？み、水！？」

しかし魔力弾と思っていたのは実は水の塊だった。

おかげでバリアジャケットもびしょ濡れになってしまった。

「今です！捕らえなさい、スプラッシャー・バインド！！」

「ッ！？ぐおっ！！」

突然、周りの水が僕を捕らえ近くの壁に張り付けにされた。

壁に向かってバインドされている手足や胸がすごく押さえつけられている。

「そのバインドは外れませんよ。何せ、あなたの体はずぶ濡れです

もの」

カトリーヌさんは勝ち誇ったかのように説明した。

事実、このバインドからは抜けられそうにない。

「もしや、あなたは水を操れるんですか？」

「ご名答ですわ。わたくしの魔力変換資質は水、したがってわたくしが作り出した水はわたくしの思うがまま。さっきの攻撃は、あなたに水を当てるためのフェイク。本当の目的はあなたを捕らえることですもの」

1402

彼女の言う通り僕は全身びしょ濡れの状態。

もちろん彼女の作り出した水なので、身動きがとれない。

フォースフィールドを使おうにも、水を蒸発するだけの強力なものを発動する時間もない。

「くっ……………万事休すか……………」

「さすがの紅蓮の騎士様も絶体絶命ですわね。でもご安心下さい、

わたくしは命は取りません。ただ………」

そしてカトリー又さんは僕に歩みより

「あなたのすべてを、わたくしのものにしますわ」

そう言つてカトリー又さんの顔が近づいてくる。

(待てよ……………これつて／＼／……………)

「うふふっ、まずはあなたの唇から奪わせていただきますわ」

(や、やっぱりなのー／＼／＼!!??)

そう思っている間にも、だんだんとカトリー又さんの顔と僕の顔の距離は縮まっっていく。

そしてカトリー又さんの顔が目の前に来た。

「唇を奪われると言うことは……………ふ、ファーストキス／／／
／!?」

「あら初めてでしたの？なら、そのファーストキスも奪わせていた
だきますわ」

(しまったー！！心に思ったこと言っちゃったよ！！)

僕は懸命に顔をそらそうとするが、顔はピクリとも動かなかった。

「大丈夫ですわ、わたくしにすべてをお任せください」

そうしてカトリーヌさんの唇と僕の唇の距離が縮まっていき……………
……………

ズガアアアアアン

距離が2センチくらいになったところで、突然壁が破壊された。

(と、とりあえず助かった／＼／＼……………)

そして壊れた壁に立っていたのは……………

「れ、レナ！？どうしてここに!？」

「せっかくいいところでしたのに、全く不粋な登場ですこと」

「すみません光司さん、どうしても気になってしまって。それより……………誰ですかその女性は？そして、さっきまで何をされていたんですか？」

突然現れたレナにはただならぬ黒いオーラがただよっていた……………
……………なんか怖い……………

「あ／＼、いや、それは／＼／＼……………ってそんな場合じゃなくて助けてよ!!」

僕は一心にレナに助けを求めたが……………

「いいえ!!きちんと説明してもらいます!!!!」

頑として聞き入れて貰えなかった……………

すると、なぜかカトリー又さんが説明し始めた。

「見ての通り、これからわたくしが騎士様の唇を奪うところですよ。ですから、よそ者は引っ込んでいてくださる?」

カトリー又さんは高らかに説明した。

そして説明が進むにつれ、心なしかレナのオーラが増していったよ

うに見えたのは気のせいだろうか……………

「あ、あのレナ、そう言う訳だから早くなんとかしていただきたいな……………」

「なるほどそうでしたか…………… 思えば光司さんがそんなことするはずありませんね。分かりました、すべてはその女性が悪いのですね…………… いいでしょう、私がお相手します!!」

そしてレナはようやく状況を理解し剣を構えた。
また同じようにカトリーヌさんも杖を構えた。

そうしてカトリーヌさんの気がレナに向いている間に、僕はある準備をする。

「あなたでわたくしの相手が務まるのかしら？喰らいなさい、アーク・インパクト!!」

そしてレナに向かってさっきと同じ様な水の弾が発射された。

しかし

「はあっ！！」

レナが腕を前に出すと、たちまち水の弾は氷って床に落ちてしまった。

そしてその様子は、カトリーヌさんに大きな衝撃を与えたようだった。

「なっ、何ですの！？一体何が起こりましたの！？」

すると今度はレナが説明し始めた。

「申し遅れました。私は管理局・対違法魔導師用特別精鋭部隊“イージス”所属、ナイトオブ1のレナと申します。私の魔力変換資質は凍結、したがってどんな水でも凍らせることが出来ます。あなたに勝ち目はありません。おとなしく投降してください」

レナは冷静、かつ慎重に言った。

下手に相手を挑発すると、何をしでかすか分からないからだ。

「ま、まだですわ！こちらには騎士様と言う人質が、残念ですが、僕はもう人質ではありませんよ」っ、いつの間に!？」

僕はカトリーヌさんがレナに気をとられている隙にバインドから脱出した。

そしてカトリーヌさんは脱出した僕を見てかなり驚いている。

「なっ、なぜですの!?!どうやってあのバインドから!？」

「説明しますと、今僕の体の表面に高温のオーラ系のバリアを張っています。その温度は約300度。あれ位の量の水なら軽く蒸発する温度ですよ」

「水を蒸発させてわたくしのバインドから抜け出したと言うわけですね……………」

「」名答。さ、おとなしく投降してください」

そして僕とレナはカトリーヌさんに歩み寄る。

がしかし、カトリーヌさんは最後の抵抗を見せた。

「まだですわ！！切り裂きなさい、ウォーター・カッター！！！！」

「ッ！？」

突如、二本の細い水の線がそれぞれに向け発射された。

‘ウォーター・カッター’ と言う言葉を聞いて僕は受け止めるのを止め回避に専念した。

だがレナは凍結があるため避けようとせず、攻撃が直撃してしまっ

「レナっ！？」

僕はすぐさまレナへ駆け寄った。

どうやらレナは、攻撃が当たる直前に凍らせてウォーター・カッターの直撃は防いだようだった。

しかしレナの肩には凍らせたウォーター・カッターによって傷付き、血が滲んでいた。

「れ、レナ……………血が……………」

「だ、大丈夫です……………少し油断しただけですから……………っ！
！」

肩の傷は思っていたより深く、血が出てきた。

そして僕は痛感した……………

僕が

僕がもっとしっかりしていれば……………レナは、こんなこと

にならなかったのに……………

そしてカトリーヌさんが僕らに近づいてくる。

「いかがですか？わたくしのウォーター・カッターの切れ味は？」

「やはり、一般的な工業用のウォーター・カッターと原理は同じですよですね」

「ええ、わたくしの手から時速700キロメートルほどで打ち出しておりますの。ですが、まだまだ速く出来ますのよ」

（確か、ウォーター・カッターの最大射出速度はマッハ2だったかな……………だとしたら、さっきみたいに避けるのは無理か……………）

そう思っている間にカトリーヌさんは次の攻撃を溜め始めた。

「形勢逆転ですわね。どうなさいますか、おとなしくわたくしのも

のになるならよし、ならないと言つのならその女を殺して言つ」とを聞かせるだけですわ。さあ、どちらを選びますの?」

カトリーヌさんはそう言うが、僕の答えは最初から決まっていた。

「カトリーヌさん、残念ながら僕はそのどちらも選びませんよ」

「あら、それはどういふことなのかしら?」

「なぜなら、あなたの敗北は既に決まっているからですよ」

「おかしなことをおっしゃるのね。この状況でわたくしが負ける? あり得ませんわ」

カトリーヌさんに言わせれば、この状況でこんなことを言えるはずがないと思っっているだろうが、僕にはどんな状況だろうが関係無かった。

「答えは、それを射ってみれば分かりますよ」

そして僕は一つの賭け事をするためカトリーヌさんを挑発し、カトリーヌさんは予想通りの行動をとってくれた。

「よろしいでしょう。いつまでも言うつことを聞かない悪い子には罰を与えましょう。貫け、ウォーター・ジェット・カッター！！！！！」

そしてカトリーヌさんが攻撃をする前に

「唸れ剛拳！！剛熱・爆炎拳！！！！！」

僕は攻撃が繰り出される前に拳を無我夢中で前につきだした。

そして強烈な水流と炎の拳がぶつかり合い、轟音と共に辺りを水蒸気が覆った。

「くっ、これでは何も見えませんわ！！！」

「今だ!！」

《フラッシュムーブ》

僕は一瞬の間をついてカトリーヌさんの背後に回り込み首元に手刀を喰らわせ気絶させた。

「カトリーヌさん、あなたの敗因はただ一つ………僕の仲間を、傷つけたことです」

そして、僕らの豪邸での戦いは幕を閉じた。

~~~~~

レナ side

怪我のショックで気絶してしまった私が目を覚ましたのは、光司さんが違法魔導師を引き渡しているときだった。



見ると私の傷は既に手当てしてあり壁にもたれ掛かっていた。

そして光司さんの右腕からは、事件が終わった今でも血が垂れていた。

「こ、光司さんどうしたんですかその怪我!？」

私はあわてて光司さんに駆け寄って聞いた。

すると光司さんは笑いながら

「いや大したことは無いんだけど、右腕がしばらく使えなくなっただけだよ」

と、まるで軽い怪我でもしたように答えた。

もしかして、この怪我って……………

「あの光司さん、その怪我……………もしかして気絶した私を庇って

……………」

「いや、これは相手の隙を作るために賭けをしたんだよ。まあ結果的にレナを庇ったことにはなるけど、レナが引け目を感じることはないよ」

やっぱりそうだった。

光司さんは私を守るためにあんな怪我を……………

そう思うと、私は涙が溢れてきた。

すると光司さんが私の頭に手を置いて

「だから、レナはなんにも悪くないんだよ。それどころか、僕が不甲斐ないばかりにレナに怪我をさせてしまって、本当にごめん……………」

「こ、光司さん……………」

光司さんは私を守るためにあんな怪我までしたのに、それなのに私に怪我をさせたことを謝ってくれた。

(この人はどこまで優しいんだろ……………皆さんが好きになるのも頷けますね)

そんなことを思っていると光司さんが一人呟いた。

「あゝあ、僕はやっぱりダメだな。女性が相手だとどうも手加減してしまうんだよな……………」

「……………そ、そうですね！…光司さんは女性に甘過ぎなんです！…」

「れ、レナ!？」

光司さんは私が急に怒りだしたことに驚いている。

この際だから思っている事を全部言ってみましょう！

「だいたい光司さんは女性に弱すぎです！それに優しすぎだし、かわいし、けどかつこいい所もあるし、笑顔が素敵だし、撫でられるとふにゃ〜ってなるし、それからそれから……………」



「まあこのぐらいにしておきましょう。それより怪我の手当てです  
！」

そして私は半ば強引に光司さんを医療班のところに連れていった。

そして光司さんを近くの台に座らせ医療班の人に怪我の具合を見て  
もらった。

「これはひどいですね……………手の骨がほとんどひび割れてますね。  
それに、手の皮膚もかなりひどい状態ですね」

「そ、そんなに酷いんですか……………」

「とにかく、1ヶ月ほど動かさないで下さいね。皮膚の方は回復魔  
法をかけましたので、後は包帯を巻いて安静にしてください」

そして医療班の人はそう言って私に包帯を渡した。

「では後は彼女にお任せします。お大事に」

「『か、彼女／＼！!?』」

そう言い残し医療班の人は去っていった。

でもこれは光司さんを女性に慣れさせるいい機会ですね！

そして私は包帯を取り光司さんの手をとる。

「れ、レナ／＼!?」

「じつとしていてください。包帯がまけません」

巻いている最中、光司さんは顔を赤くしていた。

そしてしばらくして包帯を巻き終わった。

その頃にはもう夕方になってしまっていた。

「はい、巻き終わりました光司さん」

「ありがとう、レナ」

光司さんは私に笑いかけながら言うてくれた。

「い、いいえ／＼／＼」

その笑顔に私は見惚れてしまった。

(これが……………初恋／＼、なんでしょうか／＼……………)

「それじゃあ、帰ろっか」

「はい」

そうして夕日に照らされて、私たちは六課に戻っていった。



第47話「神谷光司危機一髪!？」(後書き)

第48話「新部隊設立パーティー」(前書き)

今回はパーティーです！

そして若干キャラ崩壊が……………

それではどうぞ！

## 第48話「新部隊設立パーティー」

光司 side

あれからしばらくして、ようやく六課にたどり着いた。

しかしもう空は暗くなり始めていた。

「きつとみんな怒ってるだろうな……………」

と呟くとレナが

「大丈夫だと思えますよ。とりあえず、食堂の方へ行ってみましょう。皆さん夕食を食べている頃だと思いますから」

まるで何もかも知っているかのように答えた。

「うん………」

僕は戸惑いながらも頷きレナと食堂へ向かった。

そして食堂の扉を開けると……………

『「『『『新部隊設立と部隊長就任おめでとございます!!!!!!』』』  
『『『  
『『『

六課のメンバーに拍手やクラッカー等で派手に出迎えられた。

あまりに突然だったので僕はキョトンとしてしまった。

「いったい……………これは……………」

「何言つてんねや、光司君のお祝いのパーティーに決まってるやん」

はやてさんは嬉しそうに答えた。

（そう言えばそんなこと言ってたかな）

と僕が思っていると

「『さあさあ、主役はこっちこっち 他の二人も待ってるよ』」

なのはさんやフェイトさんが、僕を連れて前の方に連れていき、レナは僕についてきた。

前には既にガルシアとルークがいた。

「なんだか知らねえんだが、急にこんな所に連れてこさせられちまっ

たぜ」

「そうなんだよ。ねえ光司、今から何が始まるの?」

ルークとガルシアはなんだかワクワクしているようだった。

「ほんなら主役に部隊のメンバーの説明をしてもらおか」

「分かりました。えーと、今ここにいる四人が新しくできた部隊のメンバーです。それでは一人一人自己紹介していきましょう」

そしてまず初めにルークが自己紹介し始めた。

「初めまして……………じゃないか、ルークって言います。いろいろあったけど、よろしく願います」

なんとかルークが自己紹介をし終わり次はガルシアがし始めた。

「俺の名はガルシアだ。今は光司に救われてここにいる。まあ、よろしく頼む」

そして最後にレナの番なんだけど、まさかこの自己紹介が波紋を呼ぶとは……………

「初めまして、私はレナと申します。私も光司さんに色々と救っていただきまして、ここにいられます。光司さんとは……………その口では表現できない）クローンであると言いたくないため、こんな言い方にした）間柄……………ですかね。こんな私ですがどうぞよろしくお願いします」

「『『『『』』』』……………はああああ!!?!?!?!』』』』」

当然この説明に全員が驚きの声をあげた。

無論僕もだ。

「ちょっと光司君どういうこと!？」

「そつだよ! いったい彼女と何があったの!？」

レナが言った途端その場にいたほとんどの人が僕に詰め寄ってきた。

「いや! 全然何にもないですって!! ..... 多分」

「『多分!!!!??』.....」

そんなことは無い!! ..... と言いたるところだけども、  
しも、'と'言うことがあったかもしれないからだ.....

（ 本当にそんなことはありません ）



「そ、そんなことより乾杯しましょ!!!」

僕は慌てて話題を変え、乾杯の音頭を取ろうとした。

「まあその事については後でゆ~~~~~~~~つくり話してもらおうか。  
ほんならみんな、グラスは持ったな？」

「~~~~~はい~~~~~」

「ほんなら光司君の新部隊の設立を祝って!」

そうしてみんながグラスを持って僕に注目した。

「乾杯!!!!!!」

「~~~~~かんぱ~~~~~い~~~~~」

そして僕たちは飲み始めた……………この後に起こる悲劇など考えもせず……………

一方の三人は、なんとか六課のみんなと打ち解けているようだった。

ルークはあの事件の途中から仲間になっていたので、ほとんどみんなと打ち解けていた。

ガルシアはシグナムさんとトーレさんと意気投合し、バトルの話で盛り上がっている。

こう言うのを、類は友を呼ぶ、って言うのかな……………三人とも戦い好きだし……………

そしてレナは先程の真意を問い詰められていた。

……………あそこには近づかないでおこう……………

しばらくの間みんなの様子を見て回っていると、ウーノさんが飲み物を持ってきてくれた。

「はい、どうぞ光司さん」

「あ、ありがとうございます。あのウーノさん、クアットロの姿が見えないんですが……………」

「ああクアットロなら、マリエル技官と言う方が技術開発局の方へ連れていかれましたよ」

「マリエル技官が？……………大丈夫かな？」

「クアットロでしたら大丈夫でしょう。本人も楽しそうでしたし」

（ウーノさんがそう言うなら……………大丈夫なのかな？）

ウーノさんの一言もあり、僕は納得した。

そしてウーノさんが渡してくれた飲み物を飲むと……………

「っ！…う、ウーノさん、これお酒ですよ！？」

「え、いけませんでしたか？皆さんでつきりお飲みになれるものだと思います……………」

ん？皆さんってことは……………もしかして

「ウーノさん、これって他の人に渡しましたか？」

「え、ええ……………配ってしまいましたけど……………」

「た、大変だ!!……誰かが酔って暴走しないうちに、早く止めないと!!」

しかし、時すでに遅し……

「……う……君　楽しんどるか?」

「うわぁっ／＼!?!は、はやてさん／＼!?!」

突然、顔がほんのり赤くなったはやてさんが抱きついてきた。

そして顔が近くにあってため、なんだかお酒の臭いがした。

「は、はやてさん……まさか……」

「いや、なんやええ気分やわ……ヒック」

(完全に酔ってるよ!!!)

そしてはやてさんは僕から放れようとしなさい。

「あ／＼、もうそろそろ放してもらえると／＼……………」

「え／＼やんか／＼ それとも光司君は、うちのことが嫌いなんか？」

「あ／＼、いやその／＼……………そういつわけじゃあ／＼……………」

僕が返答に困っていると、向こうからおそらく酔っているだろうと思われるフェイトさんがやって来た。

なぜそう思ったのかと言うと、足がすでに千鳥足だからだ。

「あ〜〜！、光司こんなところにいた〜〜」

「フェイトさん顔真っ赤ですよ！もう完全に酔ってるでしょー！」

「え〜〜、そんなことはいよ〜〜」

（ダメだ……………ろれつが回ってないくらい酔ってる……………）

そしてフェイトさんはとんでもない行動にではじめた。

「ちょっと暑いねこの部屋〜。服脱いじゃっていいよね」

フェイトさんがジャケットを脱ぎはじめると、それにしづらね……………

「しづちも〜〜」

はやてさんまで脱ぎ出す始末だ。

「ちよつ／＼、二人とも止めてください／＼！………こんなところで／＼／」

「え〜なんで〜？私光司には見られてもいいよ」

「そつやな〜、未来の旦那さんには見せてもええな〜」

さらにはこんなことまで言い出してしまった。

しかしここは六課の中。

別に僕だけならいいと言う訳では無いけど、ここで脱がれるのは不味い。

そして二人はシャツのボタンに手をかけた。

周りでは男性職員が目を輝かせてみている………てか止めてよ…



……仕方ない

「二人ともごめん。フラッシュムーブ！」

「『きゃっ！』」

そして僕は脱ぎかけの二人を抱えフラッシュムーブでその場を脱げ出し、それぞれの部屋のベットに寝かした。

「まったく……酔っつて大変だ……」

そうぼやきながら僕は戻つき、戻ってきてみると……

「な、なんなんだ……この状況は」

目の前にはなのはさんがレナやギンガまでにお酒を飲ませようとし

ている光景だった。

僕は慌ててそこに駆け寄った。

「な、なのはさん!!何やってるんですか!?!」

するとなのはさんはこちらに気づいたようで、レナとギンガを放しゆっくりと振り向いた。

「あ~~~~!光司君やつろ見るけら~~~~!!」

「な、なのは……………さん?」

なのはさんはフェイトさん以上にろれつが回っていないかった。

あの短時間でいったい何が起こったと言っただろう……………

と、とりあえずなのはさんも早く止めないと！

しかし

「え〜〜い  
」

「どわぁっ／＼！？」

僕はなのはさんに飛びつかれ、そのまま押し倒されてしまった。

「な／＼、なのはさ／＼#\$%& a m p ; \$ # @ \* +  
」

「光司君……………私……………ふにや  
っ！！」

「え？」

突然なのはさんは変な声を上げこっちに倒れてきた。  
どうやら気絶したみたいだった。

「よっ光司、大丈夫か？」

「た、助かったよ……………ヴィータ」

どうやらなのはさんを気絶させたのはヴィータのようだった。

そのため手にはアイゼンが握られていた……………なのはさん大丈夫だろうか……………

「それじゃあ僕はなのはさんを部屋に連れて行って来るね」

「ああ、また後でな」

そして僕はなのはさんを抱き抱え部屋まで連れていった。

その間、数人から視線を感じただけ、気のせいだよ……

なのはさんを連れて戻ってきてみると、ようやく普通のパーティーみたいな感じに戻っていた……うん、よかった。

するとシグナムさんが向こうからやって来た。

「大変そうだな光司。隊長になっても、いつもとやることは変わらないな」

「え、ええ。まあもう慣れましたけどね……それでシグナムさん

その子は？」

僕は先ほどからシグナムさんの影に隠れているユニゾンデバイスであるつ子について聞いた。

「ああ、こいつはアギトと言ってな、あの事件の時に騎士ゼストより託されたんだ」

するとアギトも僕に挨拶してきた。

「あなたのことは旦那から聞いてるよ、俺には出来すぎた弟子だ、ってな。まあこれからよろしく頼む」

「こちらこそ、よろしくアギト」

「おう！………そうだ光司、旦那は今どうしてるんだ？元気なのか？」

「それならもう大丈夫。今は元気になって、入院生活を退屈してる

そうだよ」

「そうか、旦那は元気なんだな！！」

そう言ったアギトの顔は本当に嬉しそうだった。

「それじゃ二人とも、僕は他の人の様子を見てくるので」

「ああ。それと光司、これはお前のパーティーだ。楽しめよ」

「はい。それでは」

そうして二人と別れ、しばらく歩いていると、フォワードの集団を見つけた。

「みんな楽しんでる？」

「あ、兄さん。はい、なんとか楽しんでます！」

「ギンガさんも復活して、スバルさんとあっちの方にいるはずですよ」

と、エリオとキャロは二人の方を指差した。

そして僕がそっちの方に顔を向けると

「『ふえ？』」

二人揃って口にエビフライをくわえてスバルとギンガは振り返った。

それに口の回りには色々なものが付いていた……………どれだけ食べたんたる……………



なんて思っていると、ギンガが慌ててエビフライを食べ終え顔を赤らめて

「ち／＼、違うんです／＼！！これはその／＼……………あんまりにも料理が美味しくて／＼……………」

「そうなんだよいい兄／＼、この料理とっても美味しいんだよ」

顔を赤らめて否定するギンガに対し、スバルは本当に楽しんでいる表情だった。

「そ、そうなんだ……………それより二人とも、食べるより口のまわりを拭いた方がいいよ」

「『ええっ／＼！？』」

二人は気づいていなかったのか、慌てて口を拭いた。

気づかなかったってことは、よっぽど美味しかったんだろうな。

そして顔を赤くしながら口を拭く二人は、なんだか可愛く見えた。

「そう言えばティアナはどこ行ったの？」

「ティアさんなら、さっき兄さんを探しに行きましたけど……  
…あっ、戻ってきました」

すると向こうからティアナがやって来た。

「兄さんどこ行ってたの！ けっこう探したんだから」

「ごめんティアナ。それで何か用？」

「いや、兄さんもてっきり酔っちゃったんじゃないかと思って……  
……」

ティアナはどうやら僕を心配して探してくれていたようだ。

「ありがとうティアナ。でもこの通り大丈夫だし、それに僕は未成年だからお酒は飲めないんだよ」

僕はティアナの頭を撫でながらティアナに感謝した。

撫でてる間ティアナの顔が赤かったけどどうしたんだろう………

そして僕はフォワード達と別れ他の人の様子を見に行った。

そうしてしばらく歩いているとレナ、ルーク、ガルシアの三人がいた。

「三人とも、どう機動六課のメンバーは？」

「うん、みんないい人ばかりだね」

「そうだな。歯応えのありそうなやつもいたしな」

「もう、ガルシアそればかりなんだから」

「『確かにね』」

ガルシアのコメントに対し他の三人は同意見だった。  
まあガルシアらしいと言えば、ガルシアらしいけど……………

「そう言えば光司、その怪我どうしたの？」

三人と話していると、突然ルークが怪我のことを聞いてきた。

「ああ、ちよつとさっきの任務でね……………医者の話によるとしばらく使えないらしい」

「へえ、光司でも怪我することあるんだね」

この時平静を装っていたが、レナの顔は少し沈んでいた。

するとガルシアが

「となるとだ、腕が使えないんじや任務はできないよな？ そうなれば、俺が出る番も増えるってことじゃねえか！！」

と、嬉しそうに言い出し始めた。

「まったくガルシアは、こつ言つときだけ頭が働くんだから」

「何だと！？俺がバカだとも言いたいのか！？」

ルークの言葉にさすがにカチンと来たのか、ガルシアが言い返した。

まあ、事実だけど……………

「じゃあ35×22は？」

「ああ！？……………えっと…………… - 5だ！」

ガクッ

ガルシアの答えを聞いたとたん全員こけたた。

ガルシア……………マイナスって……………

僕らは呆れてものが言えなかった。

「はあ〜〜、もういいよガルシア。そんなことより光司、お大事にね」

「分かってる、ありがとうルーク」

そうしてルークとガルシアは向こうの方へ行った。

そして僕はレナと二人きりになってしまった。

レナの顔はまだ少し沈んでいた。

「あの……………光司さん……………私……………」

やはりレナは、まだこの怪我のことを気にしているようだった。

僕はレナの頭に、怪我した方の手を置いてレナに言った。

「レナ、僕はたとえこの腕が使い物にならなくなってたとしても、レナを守ったことを絶対に後悔なんてしない」

「そ、それじゃあ私の気が収まりません／＼！何か……………」

そしてしばらくレナは考えてから

「そうです！！光司さんの腕が治る間、私が光司さんの右腕の代わりをすればいいんです！！」

なんて、とんでもないことを言い出した。

「い、いや／＼、そんな悪いって／＼！！それに、気にしなくてい



「いつて／＼／！！」

僕は当然これは不味いと思うので、断ろうとするが……………

「いえ！やらせていただきます！！」

レナは頑として聞き入れてくれなくて、結局……………

「は……………はい／＼……………」

僕は肯定する他なかった。

そしてそれからしばらくして、パーティーも終わりを迎えそれぞれ解散していった。

みんなが解散した後、僕も部屋に戻り寝る準備をしようとした。

その時レナが「私がお手伝いします！！」と言ったのを、なんとかなだめて断るのには苦労した。

「しかし、今日は色々あって疲れちゃったな」

《本当に色々ありましたね今日は》

しばらくザツクスと話していると、部屋をノックする音が聞こえたので扉を開けてみると、そこにはウーノさんがいた。

「どうしたんですかウーノさん、こんな時間に？」

ウーノさんはなんだか申し訳なさそうか表情だった。

「光司さん、先ほどは申し訳ありませんでした」

「えっと………なんのことですか？」

僕には当然そんな覚えが無いので、ウーノさんに聞き返した。

「お酒のことです……………私があの時お酒をお出したせいで、なのはさん達があんなことになってしまって、それで光司さんにご迷惑をおかけしてしまいました……………本当にすみませんでした」

そう言ってウーノさんは深々と頭を下げた。

そう言えばそうだったような……………と、僕は思い返した。

「いいんですよウーノさん、別に悪気があつてしたわけじゃないんだし。それに……………気付かなかつたなのはさん達の方にも否はあつたと思いますよ。なので、今回はおあいこです」

「は、はあ……………でも、光司さんにご迷惑をおかけしたことは事実です。ですからその、何かお礼をさせてください」

「えっ、いや別にいいんですよそのくらい」

「そう言わずに、何かおっしゃって下さい」

そう言っつてウーノさんは僕の方を見続ける。

(弱ったな〜、何かっつて言っつても何もなからな……………)

と僕が悩んでいると、ウーノさんが僕を見て

「光司さん、手から血が出てますよ!！」

「えっ?……………あ本当だ」

よく見ると、手の包帯から血が滲み出していた。

おそらく傷口が開いたのだろうが、僕は全く気付かなかった。

「光司さん、替えの包帯はありますか!？」

「え、ええ、救急箱なら部屋にありますけど………」

「分かりました、失礼します」

するとウーノさんは僕を近くのベットに座らせ、救急箱から素早く包帯を取りだし、汚れた包帯を取って血を拭き、新しい包帯を巻き始めた。

そしてすぐに包帯は巻き終わった。

僕はウーノさんの手際の良さに驚き、巻いてもらっている間何も言えなかった。

「これでもう大丈夫です」

「あ、はい………ありがとうございました」

「いいえ、どういたしまして。それで光司さん、何かしてほしいことは決まりましたか？」

「何言ってるんですかウーノさん、もう十分してくれたじゃありませんか」

せんか」

「え、私……何かしましたか？」

ウーノさんは困惑した表情でそう言った。

なので僕はウーノさんに説明して、ようやく分かってくれたが

「それは私が勝手にやったことで、あれは違います」

と、逆に言い返されてしまった。

「そ、それじゃあ……………」

そして僕はしばらく考えてようやく一つ思い付いた。

「ウーノさんに、イージスの事務的仕事を頼みたいんですけど……………  
……………いいですか？」

「そんなことでいいんですか？」

「はい、お願いできませんか？」

「そう言つてことでしたら、喜んでお引き受けします」

と、ウーノさんは快く承諾してくれた。

(ちなみに仕事の内容は、ウーノさんに言わせればそんなことだが、これを普通の人が行うとするとかなりキツイのである)

「では光司さん、おやすみなさい」

「はい、ウーノさんもおやすみなさい」

そしてウーノさんは自分の部屋へと戻っていった。

ちなみに言うと、ウーノさんはトーレさんやクアットロと同じ部屋で、僕の部屋の近くである。

一応監視期間が過ぎるまでここにいることになっているのだが、クアットロはいいのだろうか………と、やはり思ってしまう。

そして僕は布団に入り眠りについた。

翌日

「『『光司（君）、昨日は本当にごめん／＼！』』」

と、酔った3人が顔を真っ赤にしながら謝ってきたのは、言うまで



もない。

第48話「新部隊設立パーティー」（後書き）

次回から休暇編に入ります。

結構長くなると思いますが、気長にお待ち下さい。

第49話「平和？な冬の一時〜始まり〜」（前書き）

今回から休暇編に入ります。

五六話位を目処にしていますので気長にお願いします。

それではどごぞ

## 第49話「平和？な冬の一時〜始まり〜」

光司 side

あの事件から何事もなく2ヶ月がたったある日。

僕の腕は完全に回復し

、日常生活に支障が無いほどまでに回復した。

手が治る間、レナの他にもなのはさん達まで手伝ってきたので、誰がするかでかなりもめたけど……………

そして僕たちは今、どこにいるかと言つと……………

「『『す』……………い……………』』」

辺りは一面の銀世界。

まさに雪一色と言った感じの光景だ。

「やっぱり来てよかった」

「ほんまやな、フワード達も喜んでるみたいやし」

「久しぶりにこっちで過ごす冬って言うのもいいよね」

「まさかあんた達が急に来るなんてね」

「ほんとほんと、でもみんな来れてよかったね」

そう、只今僕らはアリサさんが所有する山奥の旅館に来ているのだ。

なぜここにいるかと言うと、話しは数時間前にさかのぼる。

~~~~~2時間前~~~~~

「六課に休暇を取らせる？………ってどういうこと？」

いつものように仕事をしていると、クロノから通信が来た。

「ああそうなんだ。このところ六課は大忙しだったからな。上が強制的に休暇をもうけたんだが………。休暇を取ろうとしなくてな。ただでさえ余ってこっちは困ってるんだ。だから光司、君から言ってくれないか？君から言えば、なのは達も素直に取ると思っただが………。」

要するになのはさん達を休ませるとのことだった。

「そんなことならお安いご用だよ。で、期間はどのくらいなの？」

「三日ほどもらっているんだが………。」

「………分かった、よく言っておくよ。」

「それと君も、少しくらい休めよ。新しい部隊が出来てバタバタしてると思うが、時には休みも大事だぞ」

「分かったよ、この機会に僕も休暇をもらうよ。それじゃクロノ」

「ああ、頼んだぞ」

と言っわけで機動六課は三日間の休暇を貰ったのだ。

その事をはやてさんに話すと……………

「そ、そうやったんか……………まあこのところ働き詰めやったし、たまにはええやろ」

あっさり承諾してくれた。

案外、クロノの言っていたことは当たっていた。

するとなのはさんとフェイトさんが部隊長室にやって来た。

「はやてちゃん、ちょっといい？」

「どづしたんや、なのはちゃん？」

「さっきアリサとすずかから電話があつてね、今から山奥の旅館に行くんだけど予定はどう？」って聞かれたから」

アリサさんとすずかさんが……………なんとタイミングのいいことか……………

僕がはやてさんの顔を見て見ると、はやてさんもどづやら同じことを考えていたようだ。

「そんならちようどええわ。な、光司君」

「ええ、ナイスタイミングですね」

「『?????????』」

なのはさんとフェイトさんは、訳が分からないようだったので説明すると……………

「それじゃあみんなで行こうよ!~!」

「うん、だいぶ広い旅館って言ってたから大丈夫だと思うよ!~!」

「決まりやな、ほんなら前線メンバーとバックヤード陣で分けていこうか」

「あつ、でも六課の守りが……………」『その心配は要らないよ』ッ!?!
ルーク!」

声のした方を振り返るとそこにはルークがいた。

「六課の守りは僕とガルシアでやるよ。光司はみんなと楽しんできて」

「ルーク……………ありがとう、そつちをばてまらつよ」

「ほんなら、みんなでレッツゴーや……………」

「『』お……………『』」

~~~~~回想終了~~~~~

そして旅館に来ているのは、なのはさん、フェイトさん、はやてさん、リイン、ヴィヴィオ、シグナムさん、アギト、シャマルさん、ヴィータ、ティアナ、スバル、ギンガ、エリオ、キャロ、レナの計16人。

ちなみにザフィーラは一応六課の護衛の方に回っている。

何でも、あの二人だけでは心配らしい。  
主にガルシアが何か壊しそうで……………

と言っわけで、僕らは3日間地球の旅館で過ごすこととなった。

「ねえティア、雪だよ雪!!」

「あんまりはしゃぐんじゃないわよ、みっともないんだから」

「でも、僕こんな綺麗な景色初めて見ました!」

「本当に綺麗ですね」

「そうね。辺り一面真っ白で、現実の世界じゃないみたい」

ミッドではあまり見ることでできない雪にフォワードのみんなはとてもはしゃいでいるようだ。

するとヴィヴィオが不思議そうに下を見つめていた。

「何見てるんだいヴィヴィオ？」

「ねえパパ、この白くて冷たいものってなあに？」

ヴィヴィオはどうやら、雪と言うものを知らないようだ。

「これは雪って言ってね、ここみたいに寒いところにしか降らないんだよ」

「ふ〜〜ん、じゃあパパあれは？」

ヴィヴィオが指差した先にはフォワードのみんなが雪合戦をやっていた。

「あれは雪合戦って言ってね、こうして雪で球を作って相手にぶつ

ける遊びだよ」

「だったらヴィヴィオもやりたい!!」

「あぁいいよ、行っておいで」

「は〜い」

そうしてヴィヴィオはスバル達の方へ駆けていった。

すると入れ違いにアリサさんとすすかさんが来た。

「こうしてみると、本当の親子みたいだね」

「本当よね。にしても光司、あんたまた無茶したんだって!？」

「なっ、何でそれを!？」

「なのはちゃん達に聞いたんだよ。なのはちゃんもそうだけど、光司君もけっこう無茶する人なんだから気を付けてね」

「は、はい……………」

「まあ、分かればいいわ。で、本題はここからよ!」

そう言っアリスさんとすずかさんが詰め寄ってくる。

本題って何だろう?……………

「知らない女の人が増えてるみたいだけど、あれっていったい誰なのかな?……………」

「正直に答えなさい!」

すずかさんが涼しい笑顔で、アリスさんが強い口調で聞いてくる。

それぞれで怖い……………

するとそれにつられてか

「『『それについては私たち（うちら）も詳しく聞いてないんだけど（やけど）？………』』」

「はっ！？」

パツと振り向くとそこにはこれまた笑顔の三人がいた。

これで逃げ場は無くなってしまった………

「『『『おめ、どつなの（なんや）！………』』』」

「え、えっと………」

するとここでタイミングがいいのか悪いのか

「皆さん、お揃いでどうなさったんですか？」

何にも知らないレナがやって来た。

(いや……………君のことなんだよ……………)

こんな僕の思いもむなしくレナは首をかしげている。

「あっ、申し遅れましたそちらのお二人は初めてですね。私はレナと申します。以後お見知りおきを」

「ああっ、これはどうも」

「じっ、じちらこそ」

レナの丁寧な挨拶に、アリスさんとすずかさんは上手く丸め込まれてしまった。



「で光司君、このレナちゃんは光司君の何なんや？……」

しかし5人は気を取り直し再び僕に詰め寄って来た。

「何？……と言っか……えっと……」

僕は助けを求めるようにレナを見つめるが……

「じ〜〜〜〜〜」

レナも僕の答えを気にしてじっと見つめている。

これはもう……答えるしかない……

「えっと……大事な人（守るべき）……ですかね  
……」

「『『』』……………ええええええー！！！！！！！！！！』』』』」

「だ、大事な人／＼／……………だなんて／＼／……………」

なぜか5人は驚きの声を上げ、レナは真っ赤になっている……………  
…間違っただこと言っただかな？

「もちろん、なのはさんも、フェイトさんも、はやてさんも、アリスさんも、すずかさんも、みんな僕にとって大事な人（守るべき）ですよ」

「『『』』……………／＼／＼／／／／』』』』」

今度は6人とも真っ赤になってしまった。

なぜだろう……………

「こ、光司君／／……………その／／……………いきなり過ぎでしょ／／……………」

「そ、そうだよ／／／……………心の準備が／／……………」

「ほんま／／……………びっくりやわ／／／」

「そ、そうよ／／／！……………まあ／／、う、嬉しかったわよ／／……………」

「うん／／／……………ありがとう、光司君／／……………私も、同じ気持ちだよ／／／……………」

「その／／／……………本当に、嬉しいです／／／……………」

「は、はあ……………と、とりあえずもうそろそろ中に入りましょ。う。あんまり長居すると寒いですから」

「『『うん(はい)』』」

そうして僕は旅館の中に入っていった。

旅館の中をしばらく行くと少し開けた場所に出た。

いわゆる大広間と言うやつだ。

そこで部屋割りを決めることになったわけなんだけど……  
……………どうしてこうなるんだろ……………

「『『光司(君)(兄さん)(しい兄)、一緒の部屋になる  
(なりませんか)!!?』』』」

なのはさん、フェイトさん、はやてさん、レナ、アリサさん、すずかさん、ティアナ、スバル、ギンガが一斉に言った。

「いや普通僕とエリオが一緒の部屋でしょ！？そ、それに／／／……その／／／ヤバイでしょ色々／／？」

男女が同じ部屋になるなんて………僕には考えられない／／

「でも光司君なら、大丈夫って信じてるから………ね、みんな」

「『『うん（はい）』』」

と、みんな即答した。

何だか、それはそれで悲しいような………

「そ、そうだとしても／＼／＼……………やっぱりダメなものはダメです／＼！！！」

僕は断固拒否したが、この時僕は忘れていた。

今の僕には大切なあるものが欠けていることに……………

するとなのはさん、フェイトさん、はやてさんが得意気に言った。

「『『光司（君）、あの時の約束忘れたの（んか）？』』」

「あの時の約束……………はっ、まさか！？」

「そっや、あの時はただ、うちの言うこととは何でも聞いてもらって言うただけやで。あの日だけとは言うてへんよ」「

そう、今の僕には拒否権が無かった。

「そ、そんな……………」

僕はそれを聞いて愕然とした。

(これからどうなっちゃうんだろう……………僕……………)

しかし僕の不幸はこれだけではなかった。

「何よそれ!! はやて達だけずるいわよ!!」

「そうだよ、それじゃあ不公平だよ!!」

「『』そうですよ!!」

なのはさん達を除く6人の猛抗議が始まったのだが……………それが  
はなのはさんの一言で解決した。

もちろん、僕にとって悪い方向に……………

「だったら、みんなにもそうしてもらえるように、私達が光司君に頼めば文句ないでしょ」

「『『』』……………確かに』』』」

「これで万事解決だね」

みんな本当に嬉しそうだ……………不味い、非常に不味い。

ここは助けを求めるしかないな。

そう思い僕はシグナムさん達に助けを求めるが……………

「シャマル、お茶が美味しいな」

「そうね〜シグナム」

「平和だな〜〜」



「ですです〜」

「全くだ〜」

誰一人として取り合ってくれない。

エリオとキャロも苦笑いを浮かべているだけである。

「はあ〜………これからどうなっちゃうんだろう………」

こうして、僕の大変な三日間は始まったのだった。

第49話「平和？な冬の一時〜始まり〜」（後書き）

次回で、一応一日目が終了になります。

二日目と三日目は前編と後編に分けるつもりです。

それでは感想お待ちしております。

第50話「平和？な冬の一時〜1日目〜」（前書き）

1日目です!!

そしてネタを送ってくださった皆様、本当にありがとうございました!!

それではごっごー!

第50話「平和？な冬の一時〜1日目〜」

光司 side

アリスさんの旅館に泊まる事になり、部屋割りをなかなか決められないまましばらく時間が過ぎた。

そしてついに1つの結論が出た。

「ほんならいつそのこと、みんな1つの部屋に泊まったらどうせよ  
？」

「『『『いいね(ですね)！...！...』』』」

しかしこれに驚いたのはエリオである。

「ええええええ！！そ、そんなあ！？」

と反対するものの……………

「『『『エリオ（君）、文句ないよね？』』』」

「ヒイツ！……………は、はい」

9人の怖いほどの笑顔にエリオはただ頷くしかなかった。

「エリオごめん……………僕が弱いばかりに……………」

「そんな……………兄さんは必死に頑張ってたじゃないですか」

エリオはこんなことになったと言っのに僕を攻めたりはしなかった。

「エ、エリオ！」

「兄さん！」

ガシッ

僕らは互いを慰めるかのように抱き合った。

ここにエリオとの深い友情が生まれた気がした。

「じゃあ部屋割りも決まったことだし、これからどうする？」

と、今度は話題を変えアリサさんが言った。

「とりあえずみんなは雪なんて初めてみたいだから、外に出て遊ぶとかいんじゃない？」

「なるほど………確かにそれはいい考えですね。みんなはどう？」

「『『』良いと思います…!』」

「じゃあ決まりだね」

「それじゃあみんなで行こー!」

「『『』おー!』」

こうして僕らは再び外へ出ることとなった。

外へ出ると各々散らばり、それぞれに雪を楽しんでいるようだった。

「何だかこうしてゆっくりするのも久しぶりだね」

するとヴィヴィオが僕の服を引っ張って

「パパ、遊ぼう」

「うん、いいよ」

ヴィヴィオに連れ出され、僕も久しぶりに雪で遊ぶことにした。

僕とヴィヴィオは、定番の雪だるまを作ることにした。

すると

「あっ、なのはママ、フヘイトママ」

なのはさんとフヘイトさんがこっちにやって来た。

「ヴィヴィオ、何してるの？」



「あのね、パパと雪だるま作るの」

「そうなんだ。ねえヴィヴィオ、ママ達も一緒に作っていいかな？」

「うん、いいよ」

そうしてなのはさんフェイトさんを含めた4人で雪だるまを作ることになった。

まず最初に下の方の雪玉を作る。

作り初めは小さい雪玉からなのでヴィヴィオでも楽に作れるのだが、だんだん大きくなるにつれて僕やなのはさんたちも手伝って大きな雪玉ができあがった。

大きさで言うと直径60センチほどの雪玉だ。

「できた〜」

「けっこう大きいのが出来たね」

そして次は一回り小さな雪玉だを作る。

今度はさっきより小さいので、ヴィヴィオ一人で出来た。

「パパ、出来たよ」

「それじゃあこれを持ち上げて………よいしょっ！」

そして僕はヴィヴィオの作った雪玉だをさっき作った雪玉の上のせる。

出来上がった雪だるまはヴィヴィオの身長より高かった。

「おっきいね、パパ」

「そうだね。でもまだ完成はしてないんだよ」

そうして僕は雪だるまにマフラーや手袋等で飾りつけをしていき、

最後に雪だるまに顔を書いてあげた。

僕が飾りつけした雪だるまにヴィヴィオはすごく喜んでくれた。

「わあ、パパすごいすごい!!」

「本当に光司君こう言うの上手いよね」

「そうそう、小さい頃もこういった風に雪だるまを作ってたよね」

「そう言えばそう(バサッ)……………」

そこまで言った途端、突然後頭部に雪玉が直撃した。

ふと見てみると、アリサさん、すずかさん、はやてさんがいた。

僕は雪玉をくらったせいで体についた雪を払いながら

「ど、どうしたんですか？そして誰がやったんですか!？」

そう三人を問い詰めたが

「『『さあ?』』」

三人とも笑顔でとぼけるだけだった。

「……………で、何か用ですか?」

「そうそう、いい忘れてたんだけど、この旅館温泉があるのよ」

「『『温泉!?!』』」

これには僕たちは驚いた。

まあ、アリサさんの旅館ならありそうだけど……………

「それで今からその温泉に入りに行くんだけど、みんなも一緒にいかない?」

「いくいく!」

「みんなとお風呂なんて前の出張任務以来だね」

「それに入ったら丁度夕飯の時間やし丁度ええやろ」

「どうやらなのはさんやフェイトさんは行く気満々みたいだ。」

「もちろん光司君も行くよね?」

「さすがさんが聞いてくるが、どうせ断ったところで無駄なので」

「ええ、僕も行きますよ」

と答えた。

だが、このあと思いもよらぬ展開が待ち受けていた。

~~~~~

アリサ s i d e

私達は、なのは達を連れて旅館にある温泉にやって来た。

まあ光司が案外素直についてきてくれたのには驚いたけど。

そしてお風呂場の入り口に着くと、光司が何か探し始めた。

「あ~~~~~、アリサさん……………」

「何よ?」

「……………男湯は?」

「男湯って、そんなものないわよ」

「……………はあああ!?!?..?」

光司は急に大きな声を出して驚いた。

こっちまでビックリしたわまったく！

「な、な、何で男湯が無いんですか！？」

「何でって、ここは私の旅館だし別に営業してる訳じゃないのよ。連れてくるのはみんな女の友達ばかりだし、男湯なんて作っても仕方ないでしょ」

「そ、そんなぁ……………」

そう言って光司はその場へたりこんだ。

そして

「はぁ、だったら皆さんだけで行ってください。僕は後からエリオと入りますから」

そう言って光司はその場から立ち去ろうとする。

まあそうはさせないけど

「何言ってるの！アンタも一緒に入るのよ！！」

そして私は光司の肩を強引につかんでなのは達と一緒に女湯へ連れ込んだ。

まったく、他の男なら泣いて喜ぶところなのに、どうしてこいつはこうなのかしら！！

女湯に入った私達は光司を先に入らせて、後からみんなで入ることにした。

「それにしても、アリサちゃんナイスや」

「だよ〜、まさかこうも簡単に光司君とお風呂に入れるなんて」

「もしかしてアリサちゃん、これを見越してわざと男湯作らなかつたの？」

「バツ／＼、バカね／＼！！そんなわけないでしょ／＼！」

着替えてるとすずかが変なことを聞いてきた。

まあ、結果的にそうなったけど／＼……………狙ってなんか無いんだからね／＼！！

「そ、そんなことより早く入る。光司待たせてるよ」

フエイトのその一言で私達もお風呂場に入ることにした。

中に入ると、光司は温泉の中に一人ポツンと真ん中に座っていた。

するとすずかが

「じゅっじゅっ君」

「す／＼、すずかさん／＼!!??」

温泉に入っていた光司に抱きついた。

「あっ、こらすずか! 抜け駆けは許さないわよ!!」

そして負けじと私もすずかと反対側から抱きついた。
べ／＼、別に抱きつきたかったんじゃないからね／＼!!

「ア／＼、アリサさんまで／＼!!.....」

すると今度はなのは達まで来て、光司の顔がますます赤くなってきた。

そして遂には.....

「あの／＼……み／＼、皆さ／＼……¥\$%&@#&
………」

「『『『『』』』』』光司（君）！？』』』』」

光司が真っ赤な顔をしてよく分からないことをいいながら気絶して
しまった。

~~~~~

光司 side

僕はなのはさん達とお風呂に入ってなのはさん達に囲まれてしまい、  
耐えきれず気絶してしまった。

我ながら、なんだか情けない……

そしてしばらくして体の感覚が戻ってくると、後頭部に柔らかい感  
触があり、目を開けてみると……

「あっ光司さん、気がつかれましたか？」

「レ……………ナ？……………ええっ／／！？」

レナの顔が近くにあり、僕はレナに膝枕されていた。そして僕はあわてて体を起こした。

「な、な、何してるの／／！？」

「何って、膝枕ですが？」

レナはさも当然のことのように答えた。

「そうじゃなくて／／！！」

「とにかく、まだ寝てくださいー！！」

そう言っつてレナは僕の体を倒し、僕の頭はレナの膝に戻った。

そして辺りを見回すと、なぜか羨ましそうに見つめているスバルとティアナとギンガの姿と、きれいに一列に並んで正座しているのはさん達の姿があった。

そしてしばらくすると

「皆さま〜ん、食事の用意が出来ましたよ〜」

シヤマルさんが嬉しそうに呼びに来た。

嬉しそうなのは、料理を作ったわけじゃないよね……………

そう願ったのは、僕だけではないだろう……

そうしてみんなで夕飯の準備された部屋に向かった。

部屋にはすでにシグナムさん達が座っており、ヴィータやリン達

が今か今かと待っていた。

そして僕たちも座ったところでようやく

「『『『』』』いただきます〜」す 『『『』』』

みんなで合掌して食べ始めた。

今日の夕食は冬の食材を使った和食料理だった。

嫌いなピーマンが無いせいか、ヴィヴィオも美味しく食べている。

すると突然、どこからか視線を感じた。

（ん、誰だろう？）

そう思いふと周りを見てみると、スバルが僕の分の料理が置いてある方をじっとみている。

ちなみにスバルの分の料理はもうほとんどなかった……………どれ

だけ早いんだ

ためしに一つ小皿を取って動かしてみる。

ヒョイ(右) サッ

ヒョイ(左) サッ

どうやらこれが欲しいようだ……

「いいよスバル食べても」

「えっ、本当にいいの!? ありがとうしい兄」

そう思い言っつてスバルは嬉しそうに僕の分の小皿を取って食べ始めた。

隣でティアナに怒られながら……

と、こんな感じで僕らの夕食の時間は過ぎていった。

そして時間は経って、今は部屋にもどって寝る準備をしてるんだけど……………

「『『『『『光司（君）（さん）』』』』』」「兄さん」「っい兄」

「『『『『『隣で寝てもいい（ですか）／／／？』』』』』」

あの九人がまた一斉に聞いてきた。

何でみんな考えることが一緒なんだろう……………不思議だ……………

（《なぜマスターはこれほど解りやすいのに気付かないんでしょう



か……そちらの方が不思議でたまりません（

九人がそう言ってくるが、当然僕は断った。

これはさすがに諦めたくはない。

だが、結果は虚しく

「『『』』拒否権なんて無いよ（ありませんよ（

『『』』

やっぱりダメだった。

するとヴィヴィオが僕の服を引っ張りながら

「今日はパパと一緒に寝たい」

と言い出した。

確かにここ最近、忙しくてヴィヴィオと一緒に寝てあげられなかった。

「いいよヴィヴィオ、今日は一緒に寝よっか」

「わーい」

ヴィヴィオが喜んでいる一方、9人は何やら集まってじゃんけんをしていた。

なんでも、3日間の寝る順番を決めているらしい……

しばらくして、どうやら決まったようで、二人ほどその集団から出てきた。

「えへへ、よろしくねしい兄ノ」

「ま、まさか初日とは思わなかったけどノ………よろしくね兄さんノ」

どうやら今日はスバルとティアナのようだった。

ちなみに、二日目はなのはさんとフェイトさんで、三日目はアリサさんとすずかさんになったらしい。

残りのはやてさんとギンガとレナは、横の方でいじけていた……………

そして寝る時間になり各自で布団を敷いて中に入る。

ヴィヴィオは僕の布団の中に入ると、ものの五分で眠りについた。

「今日はたくさん遊んだから疲れちゃったのかな……………おやすみ  
ヴィヴィオ」

僕は寝息をたてているヴィヴィオの頭を撫でながらそう言った。

そして僕も、ヴィヴィオの寝顔を見ながら眠りについた。

2時間後、みんなが寝静まった頃僕は目を覚ました。

その理由は……………

「ふ、二人ともノ……………」

僕が目を覚ましてみると、ティアナが僕の腕に寄り添うように寝ていて、スバルは僕の足の方にいた。

特にスバル、君はどれだけ寝相が悪いんだ……………

そして二人とも自分の寝ていたところから動いていたため、布団が  
らけっこう出ていた。

「まったく、風邪引くよ」

僕はそう呟きながら寝た状態で二人に布団をかけ、僕自身も再び眠りについた。

第50話「平和？な冬の一時〜1日目〜」（後書き）

今回は二日目の前編です。

はたして光司は、無事？な休日を送ることが出来るのか！？

次回もお楽しみに！

第51話「平和？な冬の一時〜2日目・前編〜」（前書き）

休暇二日目です!!

さてはて今度は何が起ころのか……………それではどうぞ!

第51話「平和？な冬の一時〜2日目・前編〜」

光司 side

あれから一夜明け、僕ら一行は近くにあるスキー場へ行きスキーをすることになった。

最初、僕とアリサさんとすずかさん以外の人はスキー経験がなかったため軽いレクチャーを受けた。

そしてみんなで滑り始めたんだけど……………約1名だけ滑れていない人がいた……………

「と、止まらないよ〜！……………にやあ〜！？」

そう、その約1名とはなのはさんのことだ。

他のみんなが快調に滑る中、なのはさんは3メートルほど滑ってこけた。

( ヴィヴィオでも滑れてるのに何で滑れないんだ?..... )

僕はなのはさんの運動神経に若干の不安を抱えつつ、なのはさんのところまで行き

「なのはさん大丈夫ですか、起きられますか?」

なのはさんに手を差しのべながらそう言った。

「う、うん／＼……ありがとう光司君／＼」

そしてなのはさんは頬を赤らめながら僕の手をって起き上がった。

するとなのはさんが



「光司君良かったら私にスキー教えてくれない／＼？」

僕にスキーを教えてくれるよう頼んできた。

このまま滑れないままなのも可愛そうなので、僕は快くオツケーした。

その時からなぜかみんなよくこけ始めたのは気のせいだろうか……

……

僕はなのはさんと並走しながら教え、なのはさんもだいぶ滑れるようになってきた。

でもちよつと目を放すとすぐにこけてしまった。

（もしかしてなのはさん………運動音痴？）

そう思わずにはいられない僕だった………

~~~~~

はやてslide

今日はみんなでスキー場に来ている。

うちら六課のメンバーは、光司君を除いて全員スキー初心者だったから軽いレクチャーを受けた。

最初は難しかったけど、滑っていくうちに慣れてきてけっこう思うように滑れるようになった。

そやけど運動音痴なのはちゃんはなかなか滑られず、光司君に教えてもらった。

「ええなあ〜なのはちゃん……………うわっ!？」

うちはなのはちゃんと光司君の方を見て気をとられていて、コースからはみ出して近くの林に突っ込んでいってしまった。

林の中はスキー場のゲレンデより急になっていて、うちも慌ててい

たせいもありどんどんスピードを上げていった。

(あかん、早う止まらんとー!)

そう思ってつちは懸命に止まるうとするけどなかなか止まらず、遂に……

「っ!?!キヤアアア!?!」

木にぶつかりやっとなまったものの、スキー板が折れて足もくじいてしまった。

「いつ!?!……あかん、どないしよ……」

周りを見ると木ばかりで、そうとう奥の方に来てしまったようやった。

「デバイスもみんな調整とかで持ってきてへんし、うちの携帯も旅館の方に置いて来てしまったし……」

今の状況は正に万事休すやった。

「くよくよしてる場合やないな……………」

とりあえず、うちはくじいた足を引きずって休める場所を求め歩き始めた。

……………

ギンガ side

あれから私たちは初めてのスキーを楽しんだ。

まあ、光司さんと滑れなかったのは残念だけど……………

そして昼頃になり私たちはスキー場の近くにあるレストランに集合していた。

すること

「……………あれ、はやてさんは？」

人数を数えていた光司さんが部隊長がいないことに気が付いた。

……………そう言えば滑ってる間見なかったかも……………

「光司君、私探しに行ってくる！！」

「『私も！』」

「いや、ここは全員で手分けして探しましょう。みんな、いいかな？」

「『もちろん（はいっ）！！！！』」

「よし、だったら一時間後ほどしたら、またここに集まるぞっ」

「『『了解』』』」

こうして部隊長の搜索が始まった。

私はまずゲレンデを探してみた。

「八神部隊長~~~~~!!、いませんか~~~~~!!」

人混みの中呼んでみたけど返事はなかった。

するとゲレンデの近くにある林が目に入った。

(もしかして、あそこかも……………)

そう思い、私は林の中へ入っていった。

しかし林の中を大分探したけど、部隊長はどこにも見当たらなかった。

「うーん、ここでもないか……………あつ、そろそろ時間だ」

そうして帰るつもりが………

「あれ？………私って、どっから来たんだっけ………」
辺りはスキー場とは程遠く、木ばかりだった。

（もしかして………私遭難？………いやまだよ！そうと
決まった訳じゃないわ！）

そして前向きに考え再び歩き始めた。

~~~~~

光司 side

あれから一時間ほどたち、僕はレストランに戻っていた。  
しかし誰もはやてさんを見つけられなかった。

そしてさらに悪いことだ

「あれ、ギン姉は？」

「そう言えば……いないわね……」

「もう集合の時間は過ぎてますが……」

「もしかして、探していて遭難してしまったんでしょうか……」

ギンガもどうやら行方が分からなくなっただらしい。

「私、探してくる!!」

「落ち着いてスバル。スバルまで遭難しちゃ、本末転倒だよ。ここは僕が行く」



「でも、しい兄一人じゃあ……………」

「そつだよ！光司君まで遭難しちゃったらそれこそ本末転倒だよ！」

僕の発言に、みんな口々に反対してくる。

「大丈夫です、僕は遭難はしませんよ。絶対にはやてさんとギンガを連れて戻って来ますから、みんなは食事を済ませて旅館の方へ戻っていてください」

「で、でも……………」

「光司一人じゃ……………それに、どうやって戻って来るの!？」

「大丈夫ですよフェイトさん、これがありますから」

「『『『『何ですかそれ?』』』』」

僕は帰って来られる証拠に、あるものを見せた。

みんなは一斉に聞いてきたが、レナだけは、  
「ああ！」と言った表情  
だった。

「これはイージスの隊員を表すバッジです。これには通信機能と発信器があります。レナもこれと同じのを持っているので、その信源をたどって行けば戻れる、という訳です」

レナも自分のバッジを出して見せてあげた。

なぜかみんなの目が羨ましそうだったけど………

「じゃあみんなは旅館で吉報を待っていて下さい。必ず僕が二人を連れて帰ってきますから」

そして僕は二人を探しに向かった。

~~~~~

はやてside

うちが遭難してからだいたい2時間ぐらいがたった。

うちは歩き疲れてもうへとへとやった。

その時

「あっ……………洞窟や……………」

うちは大人一人が入れそうな位の洞窟を見つけた。

(ちょうどええわ、あそこで休憩しよ)

そう思い、うちは洞窟の中に入って近くの岩に腰かけた。

「しかしあれやなく、まさか遭難するとは……………人生何が起
こるか分からへんなく……………いつつっー!!」

すると挫いた足が痛み始めた。

(「こらあ、もうここから動かずに助けを待ってた方がええかな」)

「はあ、早く王子様(光司君)が助けにきてくれんかな……………
……………ってここはどこのおとぎ話やねん!!」

うちの声が洞窟に響いた。

「漫才をしても一人……………悲しいわあ、はよ誰か来
て……………!!」

うちの声は虚しく洞窟に響くだけやった。

~~~~~

光司 side

探しはじめてから早一時間、僕はある場所を除いてくまなく探したが二人は全く見つけれなかった。

「いないか……………と云うことはやっぱり……………あそこか」

ある場所とはスキー場の近くにある林。

いや、あれは最早森と言っべきだろう。

地元の人曰く、あれは通称「迷いの森」と言っらしい。

どこのRPGだ！

とりあえず、僕はその‘迷いの森’へ入っていった。

しばらく中を進むと、あっという間に周りは木ばかりになった。

そして人の気配も全く無くなった。

「おそらく二人とも、ここで遭難したんだろうな」

地元の人曰く、この季節になると森に入った人が何人も行方不明になっていると言う。

どれだけ恐いんだこの森！

「でも、行方不明者が大勢いるとなると不味いな。早く見つけないと！」

そして僕は辺りを見回して、人が無いことを確認する。

「ザックス、いいかい？」

《オーライマスター、いつでもいけます》

「じゃあ、お願い」

《了解。生態センサーを起動し、半径二キロ以内の生態反応を調べます》

そしてしばらくして

《マスター、ここから北西一キロ地点に二つの生態反応があります》

「おそらくそれだね。ザックスいくよ！」

《いいんですかマスター？ここで魔法を使っても》

「文句は後で聞く、それより今は一刻も早く二人を見つけ出す！」

《分かりました》

「よし、セットアップ、リミットブレイク……！」

《スタンドバイレディ、セットアップ》

そして僕は冬の空へと飛び立った。

~~~~~

ギンガside

あれから一時間ほどさまよったが迷ったままで私はさまよっている間に見つけた洞窟で休んでいた。

「ああ……、やっぱり遭難しちゃったのか……………」
「それからどうしたの？」

私はどうしよう（最初から）迷ってしまったようだ。

するん

「……………おとぎ話やねん!?!……………」

突っ込みが聞こえてきた。

でもこれって……………

「八神……………部隊長?」

私は声がした方へ進んでみた。

洞窟は一本道で私は壁づたいに歩いていき、20メートルほど進んだ進むと……………

「や、八神部隊長!?!?!」

「ぎ、ギンガ!?!来てくれたんか!?!」

そこには岩に腰かけた部隊長がいた。

(てことはやっぱり、あの突っ込みは……………)

私はそう思いながらも触れないようにした。

「それで、みんなはどこにおるん!？」

「あ、いえ……………その、実は私も……………」

「も、ってことは……………ギンガも?」

私は申し訳なく頷いた。

部隊長は一瞬落胆したけど、すぐにいつもの顔に戻った。

「まあ、一人より二人の方が気が楽やわ」

「その……………すみません」

「ええって。それよりなんか話せん？」

「話ですか？」

(部隊長と共通の話題なんて何かあったかしら……………)

と、私が悩んでいると

「なあギンガ。ギンガはやっぱり、光司君のこと好きなん？」

「ええっ／＼／＼！？こ、光司さん／＼／＼！？」

突然の部隊長の言葉に、思わず声をあげてしまった。

「その反応やと……………やっぱり好きみたいやね」

「あ、いえ／＼……………その／＼……………」

「隠さんでもええよ。うちも光司君のこと好きやし。まあ、他にもけっこつおるみたいやけどな……………」

「は、はい……………そうですね」

確かに光司さんを好きな人は多い。

それでいてあの人は、そんな気持ちに全く気付いていない。

「ほんま、光司君の鈍さには詣るわな」

「本当にそうですね」

こうして私たちは、光司さん、と言う共通の話題で話が盛り上がり始めた。

「それで、ギンガはいつから光司君のこと気になり始めたん？」

「えっと……………あの空港火災の時助けられてから私もあんな魔導師になりたいなあと思って……………それでフェイトさんと光司さんと一緒に任務をしたときに、また助けられて……………それからですかね」

「そうなんか……………うちも光司君に助けてもらってばかりやな」

「では、部隊長は光司さんのどこが好きですか？」

「そやなく、まず優しい所やろ、でかわいらしい所、でもいざと言うときにはむちゃくちゃ頼りになる所とか……………あと、女装したときも可愛かったわあ」

最後の言葉に私は耳を疑った。

じよ、女装？

光司さんそんな趣味が……………確かに、光司さんは女性に見えな

くもないけど……………ちょっと以外だわ。

「そう言えば、ギンガは光司君の女装見たことないんよな？」

「え、ええ……………」

「ほんなら今度光司君にお願いせんといかな。まあ嫌がるやろうけど、今の光司君に拒否権は無いからな」

部隊長が言つところによると、どうやら光司さんは無理やり女装させられたようだ……………

そして内心、女装が趣味じゃなかったことにほっとしている。

「あの部隊長、もう一ついいですか？」

「ええよ、何？」

私がかねてから気になっていたあの疑問をぶつけてみた。

「あの、光司さんに彼女はいらっしやるんでしょうか？……………噂に

よると、綺麗な女性と楽しそうに歩いていたとかで……気になっ
て」

この噂が本当なら、私の思いは片想いのまま終わってしまう。

私はこの真実をどうしても知りたかった。

「それはな………光司君曰く………」

「曰く?………」

「彼女はおらんそじや」

「そ、そうですか………はあ、良かった」

私はほっとして胸を撫で下ろした。

「まあ光司君は色恋沙汰は興味無さそうやもんな………けど変な
噂はたってしまうしな、困ったもんや」

「ですね……………」

すると、私が来た方の奥から物音が聞こえてきた。

その音は、カツ、カツ、と人が歩くような音だった。

「もしかして、助けが来たんか!？」

「はい!きつとそうですよ!!!」

そうして私たちが奥の方を見ると、遠くの方に赤い光が不気味に光っていた。

そして、その赤い光は足音と共にこっちへ近付いて来ていた。

「なあギンガ……………あの赤い光って……………もしかして火の玉……………」

「そ、そ、そんなわけないじゃないですか!!!だ、だいいち、どうしてこんな所に火の玉が!？」

私はこういった話は最大の苦手だ。

光司さん達とDrクロウの研究施設に踏み込んだときだって、最初の方はずっと光司さんにしがみついていたほど、自分で言うのもなんだけど怖がりだ。

そしてその光は音が近くなって来るにつれ、だんだんと人の形みたいになってきた。

その変化に私たちは恐怖を感じ、体がすくんで身動きが取れなかった。

そして私たちとの距離が五メートルくらいになったとき、私たちは思わず顔を伏せた。

しかし次の瞬間、私たちは同時に驚きの声をあげるのだった。

「二人ともこんなところにいた！！まったく、みんな心配してますよー！！」

「『こ……………光司……………君？……………』」

「はい 迎えに来ました」

そこにはバリアジャケットを着たいつもの光司さんがいた。

あの赤い光は、実は光司さんのフォースフィールドによるものだった。

「二人ともどうしたの？お化けでも見てるような顔して」

「『い／＼、いや／＼何でもないんや（ないんです）／＼！』」

「????????」

光司さんは私たちの言葉に首をかしげた。

そして、それがちょっと可愛かった／＼……………

「それより、早く旅館に戻りましょう。二人とも立てますか？」

「あつ、はい……………」

そして私は立とうとするが、長い間寒いなかにしたせいか体があまり動かなかった。

そして部隊長も足をくじっていたようで、同じく動けなかった。

そこで私は光司さんにある提案をした。

「光司さん、先に部隊長から運んであげてください。私はそれまで待っていますから」

「それはダメだ！！ギンガだけ置いていくなんて僕には出来ない！！」

「こつ、光司さん……………」

光司さんは私の提案に首を縦にはふらなかつた。

「そやけど光司君、二人いつぺんに運ぶには無理があるで」

部隊長の言う通りだ。

体格的にも光司さんは私たちより少し大きい程度。

二人を同時に運ぶにはどうしても無理がある。

「大丈夫ですよ、はやてさん。僕にいい考えがあります」

「『いい考え？』」

「はい。それではやてさん、ちょっとごめんなさいね……………」

「ほえ／＼／！？」

光司さんはおもむろに部隊長の肩と膝に手を回し、お姫様だっこで抱え上げた。

すると今度はしゃがみこんで

「ギンガ、悪いんだけど僕におぶさってくれない？」

「ふええっ／＼！？」

光司さんの言葉に、私は思わず変な声をあげてしまった。

（おぶさって……って、あのおぶさるだよね／＼……
こんなことなら、もっと痩せておけば良かった……）

と、私は今更ながらに後悔した。

「あの／＼……ここ、光司さん／＼……」

「ん、何ギンガ？」

「あ、えっと／＼……その／＼……重いですよ／＼……」

「あははっ、そんなこと気にしなくてもいいんだよ。それに、ギンガは痩せてスタイルも良いから大丈夫だよ」

「ええっ／＼／＼……あ、その／＼／＼……じゃあ、お言葉に甘えて／＼／＼」

私は光司さんの背中におぶさった。

その背中とは思ったより大きく温かいものだった。

(これが、男の人の背中なのかな………なんか感動だわ)

「こ、光司君にこうしてだっこされると／＼、なんや暖かいわ／＼」

「そうですね／＼」

「それはそうですよ。二人が寒くないように、僕から半径一メートル以内に温度のあるオーラを纏っていますから」

「『そう言う意味じゃなくて(ないんですよ)』」

「え？？？……まあ、とりあえず旅館に戻りましょう」

「『うん（はい）』」

そうして私たちは光司さんのお陰で助かったのだった。

第52話「平和？な冬の一時」2日目・後編」(前書き)

二日目後編です！

そして3日目がかかなり長くなる予感が……………

では、気を取り直してどうぞー！！

第52話「平和？な冬の一時〜2日目・後編〜」

光司 side

僕はやつとのことで二人を見つけ出し、はやてさんは足をくじっていたので両手で抱えて、ギンガは寒さで動けなかったのでおぶって連れて帰った。

その時終始顔が赤いような気がしたけど……………気のせいかな。

旅館に着くと、僕は二人をシグナムさんとスバルにそれぞれ任せ部屋に戻った。

「ただいま戻りました〜」

「『『『おかえりなさい』『』』」

扉を開けると、みんなが出迎えてくれた。

そしてみんなに二人の無事を報告して、みんなもほっと一安心したようだった。

「あゝあ、なんだか安心したらお腹空いちゃったね」

「確かに……………そう言えば僕、二人を探しに行ってお昼食べてなかったな」

「それじゃあちよつと早いけど、夕食にしましょうか」

「『『『『』はい』』』』」

そうして僕は食事のため大広間へ向かった。

すると、向かっている途中にはやてさんとギンガに会った。

「二人とも、もう大丈夫なの？」

「はい。『ご心配をお掛けしました』」

「うちはただの捻挫やし、ギンガもちよつと寒さで弱つとつただけ
やったからな」

しかし、はやてさんは捻挫のため右足に包帯を巻いてシグナムさん
に掴まっている。

するとはやてさんが

「そや光司君、ちよつとええか？」

「何ですか？」

「うちを広間までさっきので運んで欲しんや」

「いいですよ」

「ありがとうな、光司君」

僕ははやてさんが足を捻挫しているため、歩きにくいと思い快く承諾した。

けど、はやてさんを抱える時に感じた視線は一体なんだろ
うか……

そんなこんなで広間に着いて、今夜の夕食は鍋のようで、机には大
きめの鍋が二つ置いてあったので僕らは2つに別れて座った。

「『『』』 いただきます」

そして合掌をしてみんなで食べ始めるまでは良かったのだが……
… 鍋が煮詰まってきた頃、壮絶な乱闘（具の取り合い）が勃発した。

一方では

「ああ！アギトそのお肉はリンのです……！」

「へっ、おめえは甘いんだよ!」

「こらアギト、少しは遠慮と言つものを……………ってヴィータ、それは私のだ!」

「そう言つお前も甘えんだよ!」

また一方では

「スバル!! あんたちよつと取りすぎよ!」

「だつて〜、美味しいんだもん。それにギン姉やエリオだつて……………」

スバルが指差した方には、夢中で食べまくっている二人の姿があった。

そして鍋はどんどん無くなっていった……………恐るべき食

欲だ。

しかしここである問題が起きた。

「何だか、ある特定の人物達しか食べていないような気がするんだけど……………」

周りには、満足そうな表情のアギト、リイン、ヴィータ、スバル、ギンガ、エリオが寝そべり、それ以外の人は苦笑いを浮かべていた。おそらくこの人達が凄すぎたため、あまり食べることが出来なかったようだった。

「ねえ光司、あんた何か作りなさいよ」

「あつ、それいいね。光司君お願いしていいかな？」

アリサさんのお願いに、すずかさんも便乗してきた。

そしてそれにつられて、他の食べられなかったメンバーが頼み込んできた。

「もちろんいいですよ。それじゃあちよつと厨房をお借りしますよ」

「『『『『『やっ たー！！！』』』』』」

そして僕は旅館の厨房を借り、簡単な料理を作ることにした。

アリサさんが所有している旅館だけあって、食材はどれも良いものばかりだった。

「なんか料理しがいがあるな〜、よしっ！！」

僕は少し気合いを入れ料理を作り始めた。

~~~~~2時間後~~~~~

「出来ましたよ〜」

僕は出来上がった料理を持って戻ってきた。

ちなみに今回は和食ばかりだったので、趣向を変えて地中海風のブ

イヤベースを作ってみた。

「『『『『美味しそ〜〜!!!!』』』』」

どうやらみんなの反応も上々だった。

そして各々好きな量を取って食べ始めた。

「やっぱり美味しいね〜、光司君の料理は」

「ほんまやな〜。そうや光司君、これ後で作り方教えてくれんか？」

「もちろんいいですよ」

「にしても光司、あんたまた腕を上げたわね」

「本当だね。あの時の料理も美味しかったし、光司君魔法使いじゃなくて、コックさんになればよかったのに」

「あははは………再就職に考えておきます………」



「光司さん、これはなんと言う料理ですか？」

「ブイヤベースって言う料理だよ。どうしたの、レナ？」

「いえ、こんなに美味しい料理は初めてだったもので」

「そっか、レナは初めてなことが多いからね。きっと、光司の料理が新鮮に感じられたんだよ」

「な、なるほど……………」

「まあ光司君の料理は凄いからね。驚くのも無理ないと思うな」

「はい。それで、光司さんの料理はいつたいどれくらいすごいんでしょうか？」

「え、どれくらい？」

この質問には困ってしまった。

確かに料理には少しは自信があるものの、どれくらいと聞かれて明確にどう答えたらいいのか分からなかった。

すると、意外な人物が答えを出した。

「パパの料理は世界一」

「『『『『『本当だね（ほんまやな）』』』』』」

「世界一……………ですか」

「あ、いやあ……………今のは言葉の」

「さすが光司さんですね」

「あははは……………あっそつだ、皆さんデザートにアイスいかがですか？」

「『アイス!!???』」

‘アイス’ と言う言葉を聞いて横になっていたスバルとヴィータが飛び起きた。

どれだけアイス好きなんだ二人とも……………

そして他のみんなも欲しいそうだったので、僕はあらかじめ作っておいたアイスを取りに行った。

そしてしばらくして戻って来ると、他の横になっていた人も起きていてアイスを今か今かと待っていて、僕がアイスをテーブルに置くとヴィータとスバルが真っ先に食べた。

「うめえ!! やっぱ光司の作ったアイスはいつ食べても旨いな!!」

「私しい兄のアイス初めて食べたけど、こんなに美味しいなんて!! もっと早く食べておけばよかった〜」

そして他のみんなも食べて、なかなかの好評だった。

そして僕は食事を終え部屋に戻り、僕はエリオと二人でお風呂場へ向かおうとした。

しかし……………

「『『『『『光司（君）今日も一緒に入ろう』』』』』」

昨日と同じようになのはさん達が言ってきた。

僕は昨日みたいなことになったらまた大変なので断ろうとすると…

……………

「皆さん！昨日のことを忘れたんですか！！」

すると僕が断る前にレナが大きな声を出した。

そしてすごい剣幕でなのはさん達を説教し始めた。

恐らく、昨日も同じことが行われたのだろうと思う……………

そして説教が終わり、なのはさん達がしょんぼりしている中レナが  
突然

「ですから、今日は私が一緒に入ります！！」

なんてことを言い出した。

僕は慌ててエリオを連れて早く行くつもりだが、その場にエリオはいなかった。

「え、エリオ!？」

辺りを見回してみると、フェイトさんとキャロに連行されているエリオの姿が見えた。

「エリオオオオ!!!」

「兄さー！ーん!!」

「さあ、光司さんはこっちですよ」

そして僕は西側にあるお風呂場へ、エリオは東側にあるお風呂場へと連行されて行った。

そしてなぜかお風呂場へ向かう途中ティアナ達に出くわし一緒に入ることとなった。

(拒否権がこんなに大切なものなんて、今まで思いもしなかったよ  
.....)

移動しながらふとそう思ってしまう僕だった。

~~~~~

ティアナ side

私とスバルとギンガさんがお風呂へ向かっていると、丁度兄さんとレナさんもお風呂場へと向かうようだったので、私たちも一緒に入ることになった。

何だか兄さんが断ろうとしたのをレナさんが強引に許してくれたのは気のせいだったのかしら..... まあ結果的に兄さんを入れることになったからいいんだけどね。

そんなこんなで私たちはお風呂場に着いて、先に兄さんが服を脱いで入り、後から私たちが入った。

中に入ると、兄さんが一人湯船に入り何だかぶつぶつ唱えいた。

「落ち着け落ち着け落ち着け落ち着け落ち着け落ち着け落ち着け落ち着け落ち着け落ち着け落ち着け」

「に、兄……………さん？」

「はっ！！ティアナ、ど、ど、どうしたの／＼！？」

私が声を掛けると兄さんは、はっと気が付いた様に答えた。

「兄さんが妙なことぶつぶつ言ってたから……………」

「あ、ああ／＼。前になのはさん達と入らされた時は気絶しちゃったからね／＼……………だからそうならないように落ち着かせてたんだ／＼……………」

しかし説明する兄さんの顔はすでに赤くなっていた。

すると

「『二人ともどうしたの（んですか）？』」

スバルとギンガさんとレナさんが遅れて入ってきた。

そしてそれにつられて兄さんの顔は更に赤くなったようだった。

にしても兄さん、どれだけ女性に対する免疫が無いのかしら……

「い、いや／＼……別に／＼、ど、どうもないよ／＼」

私たちは体をタオルで巻いてるから直接見えるわけじゃないけど……
……男の人ってどう見えるのかしら

そしてとりあえず私たちも湯船に入ることにした。

「それにしても、しい兄と一緒に風呂に入るなんて思いもしなか

つたよ〜」

「確かに貴重な体験ね」

「これもいい機会ですから、ちゃんと女性に慣れてくださいね光司さん！」

「は、はい／／………努力します／／………」

そうして私たちは兄さんと一緒のお風呂で一時をすごした。

これで少しは免疫がつけば色々助かるんだけど

………まあ恥ずかしかつてる兄さんも、それはそれでいいんだけど
ね／／／

~~~~~

光司 side

あれからしばらくレナ達とお風呂に入っていた。

するとギンガが

「あの／＼、助けていただいたお礼も兼ねて／＼、お、お背中流させてください／＼!!」

と言い出すと

「いいえ、私が洗いますから!!」

「わ、私も／＼、洗ってあげてもいいわよ兄さん／＼」

「それじゃ私も〜〜」

みんなも言い出してきりがなかった。

結局自分で洗ったけど………

そうしてお風呂から上がった部屋に戻ると、すでに全員がお風呂を済ませて寝る支度をしていた。

「『光司（君）、こっちこっち〜』

『『』

そしてすでになのはさんとフェイトさんが僕の分の布団を敷いて待っていた。

(それにしても、布団と布団の間がずいぶん狭いような……………  
と言つか引っ付いてるような……………)

そんなことを思いながらも僕は二人の方へ向かい、時間も時間だったのでみんなで就寝することにした。

: : : : : : : : :

いや、眠れなかった。

「う、動けないノ……………」

僕の右側にはなのはさんが、左側にはフェイトさんが、そして僕の上にはいつの間にかヴィヴィオが乗っていた。

なのはさんとフェイトさんはしっかり僕の腕を掴み、ヴィヴィオも僕の胸の辺りにしっかり居座っている。

「これじゃあ、休暇のような休暇で無いような……………まあ、いつか……………」

そして僕は強引に自分を納得させ眠りに着いた。

第52話「平和？な冬の一時」2日目・後編」(後書き)

3日目はもしかしたら三つに別れるかもしれないので、更新が遅くなるかもしれませんがよろしくお願いします！！

### 第53話「主人公設定その3」(前書き)

主人公設定を載せていなかったなので書きました。

短いですがどうぞ！

### 第53話「主人公設定その3」

リミットブレイク・パラディンフォースについて

ランク

S + SSS

詳細

光司が本当の意味でリミットブレイクした姿。

光司の中の眠った力が引き出され、炎と光の魔力変換が使えるようになった。

炎：光が7：3の割合で存在しているため、光を使った魔法はあまり使えない。

バリアジャケットは鎧の色が赤から白に変わりマントが赤と白になる。

ただし使用すると本人の体はかなり影響し、長時間の使用をしないようにきつく言われている。

技等

○デイバイン・セイバー

ザックスの刀身に魔力刃を展開させ敵を一刀両断する技。  
構造的にはチェインソーに近く、魔力刃は時速300キロメートルで回転し光司の中で最も破壊的な技。

○シャイニング・フィールド

フォースフィールドに光の魔力変換を付加させた技。  
レナを救ったように攻撃的な技ではなく、相手を回復させる用途の技。

○ヒール・オブ・シャイン

回復の効果のある光を発生させて疲労、魔力、外傷などを様々に回復する技。  
ただし外傷については完全に回復するわけではなく、あくまで生命維持に問題がない程度まで回復する。



○サンクチュアリーバインド

キャラの使う召喚術と少し似ていて亜空間から聖なる鎖を呼び出し  
相手を捕縛する。

強度は聖王状態のヴィヴィオが抜け出せないくらい強い。

○サン・フレア・インパクト

光司の中で唯一の広域魔法にして最も危険な技。

炎の魔力を一心に集め擬似的な太陽を作り出す技。

擬似的と言っても本物の太陽とほとんど変わらないので、使い時は  
慎重に選ぶ必要がある。

○光焰一閃

紅蓮一閃の強化版の技。炎と光の魔力が加わったため、若干色が変  
化し威力も桁違いに上がった。

○新・虚空撃霸斬

同じく虚空撃霸斬の強化版の技。

的の懐にはいるスピードが格段に上がっている。

○終蓮・絶霸・閃光斬

ザックスの刀身に魔力を集め一振りと共に魔力を解放し、衝撃波と共に打ち出す技。

また炎の魔力変換を付加しているためその温度はかなり高い。

ガルシアとの戦いではガルシアの技による風圧で温度は下げられたが、それでも威力はかなりのもの。

○フラツシユムーヴ（改）

普段使っているフラツシユムーヴと指して変わらないが、速度が異常に上がり光の速さに近付いたためフォースフィールドを発動させてないと人体に影響が出る。

ザックス・ストレイダーフォームについて

○ストレイダーフォーム

ザックスに隠された古代ベルカ時代に「覇剣」と言われた所以のフォーム。

形状はレイジングハートのエクシードモードを彷彿とさせるような大剣で、全長は1.3メートルほど。

重さもブレイドやランサーよりもかなり重いため扱いが難しいが、その一振りはまさに覇剣と呼ぶにふさわしい攻撃力を持つ。

第54話「平和？な冬の一時〜3日目・前編〜」（前書き）

ついに休暇編3日目です！

はてさて光司は今度はどんな目に会うのか……………それではどうぞ！！

第54話「平和？な冬の一時〜3日目・前編〜」

光司 side

色々あった昨日から一夜明け、今日で休暇3日目。

今日は、はやてさんが足をくじいているのもあってみんな外出することなく中でのんびりしている。

「しかし、こう言う退屈な時間を過ごすって言うのもたまにはいいですね」

「そうだね〜。最近私たち色々と忙しかったし暇な時間ってなかったもんね」

「でもやることがないんもなんや退屈やな」

「だったら、トランプでもする？売店に売ってると思っわよ」

「じゃあそっしょっか」

「『』わんせ〜〜『』」

こうして僕らはトランプをすることとなった。  
メンバーは、僕、なのはさん、フェイトさん、はやてさん、アリサ  
さん、すずかさんの六人だ。

何だかこうしていると、小学生時代を思い出す……………

するとはやてさんからこんな提案が

「なあ、どうせトランプで勝負するんやったら罰ゲーム付けへん？」

「別に私はいいわよ」

「私もだよ」

「ほんなら三回やって負けた人がそれぞれ罰ゲームな」

「まずはどいつする？」

「とりあえずババ抜きでいいんじゃない？」

こうして僕らは罰ゲーム付きのババ抜きをすることになり、僕はトランプをシャッフルしみんなにカードを配った。

そしてそれぞれでペアを出し準備は整った。

ちなみに順番は、僕　なのはさん　はやてさん　すずかさん　フエイトさん　アリサさんの順で、カードの枚数は僕が4枚で他のみんなは5枚。

まずは僕からなのはさんのカードを引く。

「うーん、あつて無いな……………」

「次は私だね。えいっ……………やった揃った！」

なのはさんがはやてさんのカードを引き1ペアできて一歩リードした。

「よっしやうちも……………ていっ……………あかん、揃ってへん」

「じゃあ私だね。うーんと……………これっ……………やった！揃った！」

今度はさすがさんが1ペアできて、なのはさんと並んだ。

「それじゃあ次は私だね。えっと……………これっ……………あつ、揃ってる！」

「やっと私の番ね。じゃあ……………これ！……………よし、揃った！」

そしてフェイトさん、アリサさん共に1ペアできて、一周回った。

現在枚数は、僕4枚、なのはさん3枚、はやてさん5枚、さすがさん3枚、フェイトさん3枚、アリサさん3枚だ。

この時点では、はやてさんの枚数が多い。

しかし問題は誰が“ジョーカー”を持っているかだ。

一周目でのみんなの反応から見て、ジョーカーを引いた人は恐らくいない。

と言うことは、最初にジョーカーを持っていた人がまだ持っていることになる。



(うっっん……………いったい誰がジョーカーを持っているんだろっ……………)

そんなことを考えながらなんとなくカードを引く。

そして引いたカードを見ると、そこには薄気味悪く笑っぴエロの絵が描いてあった。

(ジョ、ジョーカーを引いちゃった……………いけない！ポーカーフェイスだ……………)

僕は必死に平静を装った。

しかし

「あ、光司君ジョーカー引いたやろ？」

「なっ！、どうしてそれを!？」

「だって、なのはの嬉しそうな顔と光司の驚いた顔を見ればすぐ分

かるよ」

「そ、そんなあ……………」

僕のポーカーフェイスはどうやら無駄だったようだ。

「それじゃあ私だね。これっ！……………やった、また揃った！」

この時点でなのはさんの手札は残り一枚となり、勝ちが決定した。

「なのはちゃんの勝ちが決まってしもうたか……………これやつ！……………よしっ、うちも揃った！！」

はやてさんも1ペア揃いこれで僕の手札が一番多くなり、更にはジョーカーまで持っていることになった。

(不味い……………このままだと罰ゲームに……………)

そう焦る僕だったが、順番が回ってこないと何もしようもないので、じっと待つことにした。

そしてさすがさん、フェイトさん共に1ペア揃い、次はアリサさんの番。

「ふっふっふ、さあジョーカーはど」これっ……………やった、揃ったわ！」……………」

アリサさんは、迷うことなくジョーカー以外のカードから1枚選んだ。

まるでジョーカーの場所を知っているかのように……………

「どうして迷わなかったんですか？」

「簡単よ。光司引いたカードをそのまま手札に加えているんだもの。すぐ分かるわよ」

「しっ、しまったー！！！！」

僕はジョーカーを引いたままそのまま手札に加えたままで、シャッフルもせずにそのままでいた。そして今度はちゃんとシャッフルした。

「さあなのはさん、どうぞー！！！！」

「光司君……………光司君が引く番だよ……………」

「あ……………」

そして僕はやっと1ペア揃え、順番は周りなのはさん、すずかさん、フェイトさん、アリサさんは抜け、はやてさんと一騎討ちとなった。

ここで枚数を確認しておくと、僕が3枚ではやてさんが2枚だ。

そして順番は僕。

「うーんと、これだっ！……………やった揃った！」

これでようやく残りのカードは3枚。  
ラスト1ペアだ。

「うーん、どっちがジョーカーやる……………迷っわ……………」

はやてさんはどちらのカードを引くべきか迷っている。

ちなみに右がジョーカーで左が残っているカードだ。

そしてはやてさんの手が右へと延びる……………

( よっっ、そのまま引いて…! )

と思いきや左に延びる

( あー…! そっちじゃなくて、さっきの方! )

そうして、はやてさんは手を右へ左へ動かし、僕をヒヤヒヤさせた。

「じゅ……………んど、これやつ…!」

そしてついに引いたカードとは……………

「……………よっしや! 揃った…!」

「ま、負けた……………」

こうして、僕に二つ目の黒星がついた。

~~~~~

レナ side

今日は休暇三日目。

私はすることもなく、旅館の中をうろつろしていた。

「はあ、何だか暇ですね。部屋に戻りますか」

そして私が部屋へと戻ると

「ま……………また負けた……………」

人生に絶望しているかのような光司さんがいた。
そしてあのへこみよつは尋常ではないように見えた。

「ど、どうしたんですか光司さん！？そんな絶望したような顔を
して」

「あ、ああレナ……………実は……………」

~~~~~回想~~~~~

2ゲーム目・大富豪にて

その1

光司「じゃあ1で。もうないでしょう」

フェイト「あ待って、じゃあ私は2」

光司「そんなあ……………」

その2

光司「今度は8、9、10の階段で！」

はやて「ほんならつちは10、J、Qの階段や！」

光司「ま、また……………」

その3

光司「5ダブルで。やっとあと一枚だ」

すずか「じゃあ私は7渡しのダブルで。はい光司君」



光司「トホホ……………」

3ゲーム目・7並べにて

光司「う…………ん……………パスで」

なのは「光司君パス二回目…。あと一回だよ」

光司「だって……………誰かが？の6を止めてて出せないんですよ！！」

……………回想終了……………

「……………という訳なんだ」

「な、なるほど。全敗したわけですね。それにしても、どうしてそんなに落ち込んでいるんですか？こう言っただけなんですが、たかがゲームですよ」

「いや、ゲームに負けたことに絶望してるんじゃない、あれに絶望してるんだよ……………」

光司さんはそう言っている方向を指差した。

そこには

「私これがいいと思うな」

「こっちの方が光司に似合ってるって」

「いや、絶対こっちの方が似合ってるって」

「私はこっちがいいと思うな」

「なに言ってるの、こっちでしょ」

なのはさん達が楽しそうに様々な服を広げ、あーでもないこーでもない服選びをしていた。

これはいい？

「何だか罰ゲームで女装させることにしたらしいよ……………はあ  
」

「じ、女装ですか」

（光司さんが女装……………面白そうですね）

私はそう思いなのはさん達に近づいて

「皆さん、私も一緒にいいですか？」

「『『『『』』』』もちろん」

そうして私もなのはさん達に交じって服を選ぶことにした。

「レナまで……………はあ~~~~」

光司さんのこんな声が聞こえましたが、まあいいでしょう

~~~~~

光司 side

罰ゲームが開始してから一時間、ようやく服が決まり今それを着てるんだけど……

「ど、どこにあったんですかこれ／＼!？」

今着ているのはメイド服である。

何だか、この服けっこ着ているような……………

「こんなこともあろうかと、色々持って来ておいたんや」

そう誇らしげに言うはやてさん。

どんなことを想定したんだろうか……………

「でも、光司君本当に似合うよね」

「だよね。昔も可愛かったけど、今でも十分いけるよね」

「光司は昔からそうだったよね」

「光司さんは、本当に男性なんですか？」

「男だよ／＼!!」

「そんな格好で言っても説得力ないのよ!!」

「はうう／＼……………」

「さて、次はどないしようかな」

はやてさん達が悩んでいると、温泉に入りに行っていたフォワード

達が帰ってきた。

みんな見馴れているのか、あゝまたか、と言った反応だったが、ギンガだけは反応が違った。

「」……………光司……………さん？」

「あ、ああ／＼、そうだよ」

「なんと云うか、その……………とっても綺麗です」

僕は服を着せられると共に化粧もされてしまったので正直言つと普通の女性だ。

悲しい……………とてつもなく悲しい……………

「あ、ありがとう。誉め言葉として受け取っておくよ／＼……………」

するとどうやら次の内容が決まったようで、はやてさんが代表して前に出た。

ちなみに罰ゲームは三つあるのでこれをいれてもあと一個残っている……まさか三回とも負けるなんて、自分でも思っていないかった。

「ほんなら光司君の第2の罰ゲームは………ホンマのメイドさんになつてもらおうか」

「……………と言つと？」

「つまりは本当のメイドさんみたいにみんなの言うことに従つてもらうちゅつことや」

「要するにいつもと変わらないんですね……………」

何だか最近こつ言つことが多いため、不本意ながら馴れてしまった。

「まあそつ言つことやけど、今回はちよつと趣向を変えて言葉遣いもメイドさんみたいにしてもらおうか」

「分かりました……………はやお嬢様、これでよろしいでしょうか？」

僕は、きつとはやてさんのことだから、語尾に『にやあ』、とか『ワん』とか付けさせるに違いない』と思っていたので、普通のメイドさんみたいなしゃべり方に少しほっとしている。

それに丁寧な言葉遣いは普段で慣れているので、そう難しくもない。

「はやてお嬢様、どうかされましたか？」

「／／／／……ええなあ／／、なんか良い響きやわあ／／……」

はやてさんは顔がほんのり赤くなっていた。

なにか変なこと言ったのかな？

すると、なぜか他のみんながすごいスピードで押し寄せてきた。

「『『『『私も呼んでもらっていい)ですか(／／／!?!?』』』』」

ヴィヴィオに至っては僕を僕と認識できていないようだ………
…それほどまでに女性っぽくなってしまったのか………

僕は気を取り直し、三人にそれぞれ答えた。

「エリオお坊つちやま、キャロルお嬢様、敬語がお嫌いならばお二人がぼ……いえ、私におっしゃっていただければすぐに直します。ヴィヴィオお嬢様、私はただのメイドです。ヴィヴィオお嬢様の望みをおっしゃってください」

僕がそう言うと、エリオとキャロルはほっとした様子で、ヴィヴィオは少し考えていた。

「じ、じゃあ、僕らには普通に話すようお願いします」

「その方が……」

「分かった。ありがとうエリオ、キャロ」

「『やっと兄さん（お兄ちゃん）が普通に戻った』」

エリオとキャラロは僕が普通のしゃべり方に戻ると、どうやら安心したようだった。

しゃべり方だけでなく、メイド姿なのは変わりないんだけどね

.....

すると悩んでいたヴィヴィオが思い立ったように言った。

「じゃあメイドさん、ヴィヴィオとかくれんぼして遊ぼ？まずはメイドさんが鬼ね」

そう言い残し、ヴィヴィオは逃げていつてしまった。

(かくれんぼか.....面白そうだな)

そうして僕は30秒ほど目を閉じて数え、再び目を開けると

「29、30、よし！あれ？.....誰もいない」

目を開けると部屋には誰もいなかった。

おそらく、他のみんなもかくれんぼに参加したのだろう。

「さて、すぐ見つけますよ、お嬢様方！」

何気にこのしゃべり方が普通になってしまっている。

ひよっとしたら、将来は執事でも良かったんじゃないかと思っ
てきた……………

そう思いつつも、僕はみんなを探しに旅館の中を探しに向かった。

~~~~~

アリス side

光司がメイド姿になってからヴィヴィオとかくれんぼすることになり、私たちもそれに参加した。

（かくれんぼなんて何だか久しぶりよね、さてどこへ隠れようかしら）

と私が隠れる場所を探していると、使っていない空き部屋から物音が聞こえた。

「あれ？確かここは空き部屋のはずなんだけど……………」

私は不思議に思い扉を開けて中の様子を見た。

「誰かいるの？……………っ誰よあんた!？」

私が入ってみると、全身を真っ黒な布で覆った人が立っていた。

「見つかったか……………だがこれは好都合」

そいつは私を見ると不気味な笑みを浮かべこっちを見た。

私は少し恐ろしく思えたけど、強気に言った。

「どっ、どっという意味なのよ!？」

「なに、ちよつとアイツを誘き出す人質になるだけさ」

「なっ、人じ……………」

そこまで言いかけて、私は後ろから薬品のようなものを嗅がされ意識を失ってしまった。

~~~~~

すずか side

私達がかくれんぼに参加してしばらくたったころ、私はどこかから妙な気配を感じた。

私が気になってその気配のする方へいつてみると……

「あ、アリサちゃん!」

そこにはアリサちゃんが気絶して倒れていた。

私はすぐに駆け寄って見てみると、目立った外傷もなくただ気絶しているだけみただった。

「良かった。とにかく、光司君に連絡しないと!」

私は急いで携帯を取り出し光司君へと電話を掛ける。

(お願い……………早く出て!)

しかし私は急いでいたため、後ろに迫っていた気配に気付かず

「……………光司君、早く出っ……………」

光司君につながる前に後頭部を叩かれ気絶してしまった。

第54話「平和？な冬の一時」3日目・前編」（後書き）

今回は中編です。

まあ内容的には察しがつくと思いますが……では次回をお楽しみに！

第55話「平和？な冬の一時」3日目・中編」(前書き)

今回は光司無双のターンです!!

そしてここで問題です。

この話の中で、光司があるセリフを言っています。

元ネタは何でしょう？

(おそらくだいたいの方が分かると思いますが……………)

それではどうぞ！

第55話「平和？な冬の一時」3日目・中編」

光司 side

かくれんぼが始まり、僕がしばらく旅館の中を探していると血相を変えたシグナムさんがやって来た。

「光司、探したぞ！……………って、なんと言つ格好をしているんだお前は！？」

「あつ、いえ……………これは、まあ色々ございまして……………それよりどうされましたか、シグナムお嬢様？」

「なっ／＼、何を言っている／＼！？」

僕は口調をそのままで、‘シグナムお嬢様’と呼んでしまったためシグナムさんは顔を赤くして慌てふためいた。

「そ／＼、それはともかく、これを見てくれ／＼！！！」

そうやってシグナムさんは、二つの携帯電話と一枚の紙切れを差し出してきた。

「これは……………アリサお嬢様とすずかお嬢様の！？……………まさかつ、二人の身に何か……………」

「その通りだ。詳しくはこれを読んでみてくれ」

そして紙切れには、紅蓮の騎士へ、二人を助けたければE23地点へ一人で来い」と書かれていた。

「……………シグナムさん、これをどこで？」

「ああ、妙な気配を感じて探している途中に空き部屋で見つけてな。大急ぎでお前を探していたんだ」

「そうでしたか……………」

そして僕はその紙切れを握りつぶした。

無論、誘拐した犯人に対する怒りのためだ。

「光司……………一人で行くつもりか？」

「ええもちろん。二人を助けないと」

「しかし、これは明らかにお前に対する挑戦だ！恐らく、『紅蓮の騎士』を知っていると言うことは、相手は違法魔導師だろう。だとすれば、どんな罠があるか分からないんだぞ！！」

「そうだとしても、僕は行きますよ」

「し、しかし……………」

それっきり、シグナムさんは黙り込んでしまった。

相手は何人なのかも、どんな魔導師なのかも、二人がどんな状況なのかもわからない。

それなのに行くのは僕にだって無茶なことくらい分かっている。

だけど

「僕は、僕のせいで連れ去られてしまった二人を一刻も早く助けたいんです!! 助けないといけないんです!!」

「……………分かった、もう止めん」

シグナムさんは渋々納得してくれた。

そうして僕が行こうとすると

「待て光司」

「……………何ですか？」

「……………必ず、戻ってこい!!」

「……………はい、行ってきます!!」

そう言って僕は指定されたポイントへと向かっていった。

~~~~~

アリス side

気が付くと、私とすずかは見知らぬ場所で手足をロープのようなもので縛られていた。

まさかこんな時に誘拐に合うなんて思ってもいなかったわ……………

そしていつの間にかすずかも目が覚めて辺りを見回し始めた。

「アリスちゃん……………私たちやっぱり……………」

「ええ、誘拐されたみたいね」

「やっぱり〜」……………「この年で誘拐されるなんて思ってもいなか  
ったよ〜」

「すずかも私と同じことを口にした。」

「小学校の頃はたまにあっただけど……………まったく慣れちゃったわ  
よ！」

「すると誘拐したであろう男達がこっちにやって来た。」

「お目覚めかな、お嬢さん方？」

「真ん中にいた男が言った。」

「回りの男達が従っているところを見ると、コイツがリーダーっぽい。」

「で、あんた達何が目的？どっせお金でしょっ」



すると男は不適な笑みを浮かべながら答えた。

「いやいや、我々の目的は金では無いのだよ。我々の目的は、ある男への復讐さ」

「『復讐？』」

私とすずかは声を揃えて聞き返した。

あの場所にいた男って……………まさか……………

「そう、『紅蓮の騎士』神谷光司への復讐さ！……！」

そいつは高らかにそういいはなった。

光司って……………紅蓮の騎士って呼ばれてるのね……………思えば光司が魔導師になったことは知ってたけど、どんなことしているか詳しく聞いてないわね。

後で聞いてみましょう。

「そして君たちは、そのための人質と言うわけだ。お分かりいただけたかな？」

「なあ、こいつらアイツ倒したら襲ってもいいよな？」

「俺もそれに賛成だ。グへへッ……………」

回りにいた男どもが私たちを汚ならしい目で見てくる。

本当に気持ち悪いわ……………

「まあまあ落ち着け、アイツを始末した後でゆっくり楽しめばいいだろ」

そう言っつてリーダーの男も同じ目付きで私たちを見た。

( ちょっと〜！早く来なさいよね！ )

そう私が心の中で叫んだ時

ズガアアアアアアアア

「『『『』っ!?!?』』』」

突然建物の壁が壊れ、そこに現れたのは……………

「『』』……………光司（君）!!!』」

赤い甲冑を身に纏い、剣を持って立っている光司だった。

~~~~~

光司 side

僕は指定されたポイントにある建物に着くと、セツトアップをして壁をぶち破って中に入った。

中を見ると、手足を縛られてたアリサさんとすすかさんと、それを囲むようにして立っている数人の男達がいた。

「そこまでだっ！！」

僕は男達に向かって殺気を込めて声を放つ。

「まあまあ落ち着け紅蓮の騎士、ちゃんと一人で来ただろうな？」

「……………ああ、一人で来た。それより、二人に何かしていないだろうな!？」

「安心しろ、二人には手を出さない。まあ、それもお前次第だが…

……………」

「……………」

リーダーらしい男の言葉に、僕は黙って剣を下ろす。

「さすが物分かりがいいな。お前がなにもしなければ二人は無事に返してやるぞ」

すると回りにいた男達が僕の方にやって来る。

その表情は不適に笑っている。

「さあお前ら、思う存分やるがいい!!」

リーダーの男がそう言うと、回りの男達が魔力弾をそれぞれ形成し始める。

そして僕は……………ただ、目を閉じた。

~~~~~

すずか side

光司君が登場してどれくらいの間がたったのか………私たちには目の前の光景が凄まじい過ぎて分からなかった。

私たちの目の前で、光司君がなんの抵抗もせずにあの男の人達に痛め付けられている光景に、私たちはなすすべもなくただ呆然と見ているしかなかった。

そしてふと我に帰ったアリサちゃんが

「ちよっ、ちよっとう光司………なんでなにもしないのよ………」

すると今度は近くにいたリーダーの男の人がそれに答えるように言った。

「それはそうでしょう。彼が少しでも反撃するようなら、我々はあなた方に何をしてまかまわないんですからね」

「そ、そんな………」

「あたし達のことはいいいから、反撃しなさいよ………」

アリサちゃんの呼び掛けに光司君は答えず、そのまま攻撃を受けていた。

(なんで、どうしてそこまでして私たちのために……………)

私は自分が捕まっていることも忘れ、やるせない気持ちで一杯になった。

「ちょっとあんた達!!! いい加減止めなさいよ!!!」

するとアリサちゃんが大声で叫び始めた。

確かに、このまま何もしないなんて出来ない!!!

「そつよ!!! お願い、もう止めて!!!」

私もアリサちゃんと同じく必死に叫んだ。

そしたらリーダーの男の人の気にさわったのか、突然態度が急変して

「えーい黙れ!!! お前らは人質らしくここで大人しくしてろ!!!」

「何よっ！！キヤアアツ！！」

「っ！？アリサちゃん！！キヤアアツ！！」

私たちはリーダーの男の人に黙らされるように殴られた。

するとその瞬間、何かが起こった。

最初何が起こったのか分からなかったけど、それはある方向を見るとすぐに分かった。

「お、おい……………どうして立っていられる！？……………一時  
間以上攻撃を受けていて、なぜ立っていられるんだ！？そして何な  
んだその目は！？」



私たちが光司君の方を見ると、来たときよりも凄まじい殺気でリーダーの男の人を睨み付けている光司君の姿があった。

その姿はいつもの光司君とはまるで別人のようだった。

すると今度は

ズガアアアアアアン

「『ゴゴゴ、今度は何だ！？』」

突然、光司君とは反対側の壁を破壊して現れたのは……………

「『れつ、レナ（さん）！？』」

「はい。お二人供、助けに来ました」

「……………レナ、二人を頼めるかい?……………」

「……………はい。すぐに皆さんのところにお連れします」

レナさんも少し光司君の殺気に動揺したようだったが、すぐにその答えた。

「なっ、何を言っている!? 人質の命は、まだこちらが握っているんだぞ!」

リーダーの男の人は少しびくつきながらもそう言い放った。

けど光司君は無視して誰かと話し始めた。

「クロノ、現在位置でリミットブレイクを使う……………大丈夫かい

？」

「君の頼みだから許可は取ったが………時間は一時間だ」

「大丈夫、五分で終わるよ。ありがとう、クロノ」

そして光司君は話し終わり再びリーダーの男の人の方へ向いた。

「ザックス、モードリリース。リミットブレイク、パラディンフオーズ……！」

《オーライ、モードリリース》

光司君がそう言うと、腰に挿していた剣は腕輪になって、鎧も赤から白に変わり髪が綺麗な深紅色に変わった。

その姿は、まさに聖騎士と呼ぶにふさわしい姿だった。

「き、聞こえなかったのか！？こつちには人質が……  
……あら？」

気が付くと、私たちは光司君に抱き抱えられ、レナさんの近くにいた。

一瞬のことで私もアリサちゃんも目を丸くしていた。

そして光司君は私たちを地面に下ろした。

でも正直、もうちょっと抱かれていたかったかな／＼／＼……

すると今度は光司君がしゃがみこんで私たちに謝りだした。

「二人ともすみません。僕のせいで……こんな目に会ってしまつて……本当に、ごめんなさい……」

その顔はいつもの光司君に戻り、申し訳なさそうだった。

「べつ、別にいいのよ。誘拐なんて慣れてるんだし」

「そ、そうだよ、私たちは全然気にしてない。それより、光司君大丈夫なの？」

アリサちゃんも頷きながら心配そうに光司君を見つめる。

するとここでレナさんが仲裁に入った。

「三人とも、詳しい話はまた後にしましょう。それよりも……………」

「そうだね。それじゃあレナ、二人をお願いね」

「はい。光司さんも、気をつけて」

そうして私たちはレナさんに連れられ旅館へと戻った。

~~~~~

光司 side

レナが二人を無事に連れていったのを確認すると、僕は再びあいつらの方を向き殺気を飛ばす。

それこそ殺すくらいに……

「さて、それじゃあ反撃させてもらおうか。もっとも……」

僕の言葉が途切れると同時にあいつらが一斉に構えた。

だが、その腰は既に退けている。

そして……

「これから先は、三人にはとても見せられないけどね……」

そして僕も拳を構える。

今回はザックスは無しで純粹な格闘技で決着をつけるつもりだから

だ。
今の僕だと、たとえ非殺傷設定があつたとしてもあいつらを殺しかねない。

それほど、今の僕は怒りに満ちている。
だが極めて冷静であつた。

「さあ……………いくぞっ!」

そして僕はあいつらに突っ込んでいった。

先ずは一番前にいた一人の方へ向かい、瞬時に後ろに回り込み……………

「はあっ!」

「ぐぼおっ!」

相手の足を払いバランスを崩したところで背中に腕を降り下ろし地面に叩きつける。

相手はなすすべもなく地面に叩きつけられたまま気絶した。

これであと五人。

「じ、このおおお!!」

近くにいた一人ががむしゃらに拳を振り上げ攻撃してきた。

僕は軽くそれを避け、突っ込んできたのを利用して相手の腕を掴み、柔道の一本背負いの要領で相手を投げ飛ばした。

相手はそのままそのまま壁に激突し、頭を強く打ったのかこちらも気絶した。

すると落ち着きを取り戻したのかリーダーの男が気付いたように叫んだ。

「おっ、おい!! 相手は一人だ、一斉にかかれ!!」

そして他の男達も我に帰り僕の周りを囲んだ。

数は三人……………無駄な事だな……………

「『『死ねええええ！！』』」

そして困んだ三人は一斉に飛びかかってきた。

しかし僕は動じることなく、一旦しゃがみそれぞれの攻撃を避け一人にアツパーを食らわし、残りの二人を回し蹴りで横に蹴り飛ばした。

そして残りはリーダーだけとなった。

「さあ……………残るはお前だけだ……………」

そして僕はリーダーの方へゆっくりと近付いていく。

「くっ、来るなあ、来るなあ！！」

近付いていくとリーダーは腰を抜かしガタガタ震えながら後退りしていった。

「さあ……………お前の罪を……………数えろおっ！！」

そして僕はリーダーの懐に拳を一撃入れ、さらにその衝撃で下がった頭に再び一撃を入れた。

「ぐおおおっ！！……………」

リーダーの男はそのままショックで気絶した。

「ようやく片付いたか……………ザックス、時間は？」

《4分23秒です》

「思ったよりかかったな……………よし、それじゃあ戻ろうか」

《了解です》

そうして僕はリミットブレイクを解除して旅館へと戻っていった。

第55話「平和？な冬の一時」3日目・中編」(後書き)

問題は分かりましたでしょうか？

書いている途中浮かんでしまったので、思わず使ってみました！

そして次回はいよいよ休暇最後の日です！

なのではっちゃけて見ようと思いますので、次回をお楽しみください！

第56話「平和？な冬の一時」3日目・後編」(前書き)

いよいよ休暇編最後です！

はちゃけた感じは自分的にはかなりやった方なのですが、皆様にはどう見えるか……………

それではどうぞー！

第56話「平和？な冬の一時〜3日目・後編〜」

フイットside

かくれんぼの途中シグナムが急いで私たちを呼び寄せた。

何でもアリサとすずかが誘拐されてそれを助けに光司が一人で助けに行ったらしい。

それを聞いてレナが急いで飛び出し、私たちはただ待つしかなかった。

そしてしばらくして……

「『『レナ(さん)……!』」

二人を抱えたレナが旅館の扉を開けて戻ってきた。

しかしそこには光司の姿はなかった。

「光司君は!？」

「いえ、犯人グループを片付けて来ると思っているので……………もうしばらくしたら来ると思います……………」

「『そ、そうね(だね)……………』」

そう言う三人はどこか言葉を詰まらせていた。

何かあったのかな?……………

そして二人を一応シャマルの所へ連れて行ってしばらくたつと……………

……………

「た、ただいま戻りました……………」

「『『『光司(君)(さん)!!』』』』』」
「しい兄」

「『』』(お)兄さん(ちゃん)!!!!『』」

旅館の扉を開け少しフラフラした光司が戻ってきた。

「やっと……………着い……………た」

「光司!!」

やっと帰ってきたかと思うと光司は玄関で倒れかけてしまった。

私はすぐに駆け寄って光司を支え、見ると光司の頭からは血が出ていた。

「シグナム、手伝って!!」

「分かったテストロッサ、すぐにシャマルの所に運ぼう!!」

そうして私はシグナムに手伝ってもらい、光司を部屋まで運んだ。

そしてシャマルに見てもらおうと……………

「魔力ダメージの蓄積が原因ね……………しばらく休養が必要よ」

「そうですねか……………やっぱり無理しちゃっ『』『』『無理すぎよ（だよ）！！』『』『はっ、はいいいい！！』『いつっ……………」

「全く、本当死んじゃうんじゃないかと思ったわよ！！」

「そうそう！！光司君無理すぎだよ！！！！」

只今、もう大丈夫になったアリサとすずかが布団に入っている光司を叱っている。

（でも本当に光司は無茶すぎだと思っな……………）

するとはやてがその場にいた人に耳打ちで話してきた。

（あんなあ、ちょっと相談なんやけど、光司君がまた無茶しないように誰か見張り立てへん？）

（それって……………二人つきりっこと？）

(まあ、そうなるわな)

()()(もちろん)です(!!!)()()

(ほんなら誰にするかじゃんけんで決めよか)

こうして、光司と二人つきりになれるのを賭けて壮絶？なじゃんけんバトルが始まった。

~~~~~

光司 side

シャマル先生に言われて、僕は夕食が始まるまでの間休養を取ることにした。

その時みんなが一ヶ所に集まって何かしてたような……………まあいいけど。

そして寝ていた僕がふと目を覚ますと……………

「あつ、起きちゃった？気分はどう？」

「あ、フェイトさん／＼……………ええと……………まあ大丈夫です／＼／＼」

そこには“な・ぜ・か”ナースの格好をしたフェイトさんがいた。そう、“な・ぜ・か”……………大事なことなので二度言ってみた。

「ふえ／＼、フェイトさん／＼！ど、どうしてそんな／＼……………」

「あつ、これね／＼……………これは……………その／＼……………」

……………回想……………

じゃんけんバトルの結果勝者はフェイトに決まったが……………

「ほんなら、はいフェイトちゃん」

「ほえ？」

はやてがそう言って渡したのはナースのコスチュームだった。

「は、はやてノノ！こんなものどこからノノ！？」

「いやあ、ほんまは光司君の衣装に持ってきたもんやけど、あつてよかったわ」

満面の笑みを浮かべて答える狸（笑）……………おそらく確信犯であるっ……………

（（（（（なんだか、負けて嬉しいような悲しいような……………）））））

そしてその言葉を聞いてこう思ってしまう一回であった。

~~~~~回想終了~~~~~

「……………と言っわけなの」

「そ、そうだったんですか／＼……………はあ、まったくはやてさんはしょうがないな／＼……………」

もしかしたら自分がこの衣装を着せられたのかと思うと、せめて着せられないだけでしたかと思っってしまった。

「と、とりあえず私は光司が無茶しないように見張ってるよ!」

フェイトさんは気を取り直して「えへん」と胸を張った。

‘見張りの役’と‘ナース姿’の関係性が全く分からないが、僕には説得力に欠けているように見えた。

「で光司、どこか痛い所ない?大丈夫?」

「ああ／＼、はい／＼……………大丈夫です／＼……………」

フェイトさんに言い寄られて、僕はたどたどしく答えた。

ただでさえ女性に迫られるのは苦手なのに、ナース姿のフェイトさんだと／＼／＼……………ここ、効果はバツグンだ／＼／＼……………

「どうしたの、顔赤いよ？熱でもあるんじゃないの？」

そしてフェイトさんはどんどん近付いてきた。

（ま、不味い／＼／＼これ以上接近されると僕が精神が／＼／＼……………
…）

そしてフェイトさんは自分のおでこに僕のおでこに手を当て、熱を計り始めた。

「うーん、熱は無いみたいだけど……………顔真っ赤だよ」

「あ／＼いや……………その／＼……………えっと／＼……………」

(どづしよづ／＼／＼……………「フェイトさんのせいですよー!」なんて言えないしな／＼／＼……………)

そう僕が困惑していると

「光司く〜ん、フェイトちゃ〜ん夕食の支度が……………って何してんねん!？」

「『ふえ?』」

突然扉が開きはやてさんが呼びに来てくれた。

そして今の状況はフェイトさんが僕を押し倒してるように見えるだろづ……………ってヤバイよな／＼／＼……………

「二人きりにしてもうたんはしたかたないけど……………**抜け駆**けはあれほどしたらあかんって言うたやん!!」

「ち、違つよはやて／＼／＼!ぬ、**抜け駆**けなんて／＼／＼……………」

はやてさんの言葉にフェイトさんは顔を赤くして答えていた。
「いったい何のことだろう………“ 抜け駆け” って………」

「二人とも、抜け駆けって何のことなんですか？」

「『なつ、何でもないよ（ないんや）／＼／＼！！』」

「ん？？？」

今度ははやてさんまで顔を赤くして答えた。

本当に何だったんだろうか………」

「そ、それより光司君夕食食べられる？」

「あ、はい。もう大丈夫です」

「ほんならみんなと食べれるな。さ、行くっか」

そして僕ははやてさんについて行き、みんなの待つ大広間へ向かった。

そしてしばらくしてフェイトさんも追い付いて来た。

多分ナーズ服を脱いでいたのだろう………あのまま行ったら不味いこと間違いないからな………

そうして大広間に着くとすでに全員が着席し、案の定ヴィータとスバルは今か今かと箸を持って準備万端だった。

「ほんなら全員揃ったところで、光司君乾杯の音頭よろしく!!」

「かつ、乾杯ですか………分かりました」

そして僕ははやてさんからグラスを渡されみんなを見て立つ。

「それでは、乾杯!!」

「『『『『カンパーイー!!』』』』」

僕が乾杯の音頭を上げ、みんな一斉に飲み物を飲み始める。

それがなんであるかも知らずに……………

~~~~~

三人称 side

休暇最終日の夕食会が始まって30分がたった頃、光司はトイレのため一旦席を立ち再び戻ってきてみると……………

「ど、どつしてこんなことに……………」

目の前に見えてきたのは、なぜか顔をほんのり赤くさせながら不思議な液体を飲んでいる皆さん方。

そしてエリオやキャロは横の方でこれまた顔を赤くして横たわっている。

「ま、まさか……………」

すると光司の足元に何かが転がって来た。

当然不思議に思い手に取って見てみる。

そこにはやはり、あの文字が書いてあった。

「はあ~~~~、なんで“アルコール”って書いてあるんだ?……………」

光司は涙目になりながらそう呟いた。

彼にとってお酒にはあまり良い思い出がないのだ。

そして光司の災難が始まろうとしていた……………」

「『『(じいじ)~~~~』』」

「……………／／／／／、どうしてこうなっちゃうの／／／？」

顔が真っ赤になった、なのはとフェイトとはやてが光司の後ろから抱き付いてきた。

彼女達は以前の経験を忘れているのだろうか……………はたまた確信犯なのだろうか……………

しかし、今日の光司はこれまでの光司とはひと味違った！！

「いい加減にして下さい／／／！！僕たちはまだ未成年なんですよ／／／！！」

彼は赤くなりながらも、抱き付いた手を振りほどきながら必死に怒った。

かつて無いほど光司は必死に抵抗した。

それは未成年者の飲酒と言う違法なことを注意する真っ当なこともあったからだろう。

しかし所詮、光司は光司だった……………

「『『固い』と言わないの』』」

「うわああああ／／／……………」

そしてここぞとばかりに抱き付く3人。

そしていつも通りされるがままの光司……………

しかしお酒が入った3人はいつもより凄かった……………

「何だか暑くなっちゃった〜。光司君いるけど別に脱いで良いよね」

「えええっ／／／!?!?」

そう言つて脱ぎ始めるのは。  
そして残りの二人もつられて脱ぎ始めた。

「ちよつと3人とも脱ぐのは」『』「答えは聞いてない」『』『』つ  
て、そんな理不尽な／＼／＼！！」

光司の注意をよそに脱ぎ始めるお姉さん方。

服が抜けていく度に光司の顔はトマトの様に赤くなつていく……………

1652

「ああ／＼／……………いえ／＼／……………そんなあ／＼／……………  
……………」

光司も万事休すと思つたその時、救世主が現れた。

「『』『』ふにやつー！！』』」

突然3人はすつとんきょうな声を出してその場に倒れた。

しかし、この結果は光司にとって良い方向へ向かうことはないのだ  
った……………

そしてなのは達を気絶させた犯人が光司に近寄る。

「た、助かったよレナ……………」

「……………」

「レ……………ナ？」

「……………る……………せ……………ませ……………」

「ん？」

光司を助けたレナは何やらぶつぶつ言っていた。

「レナ、どうしたの？」

「……………許せません」

「えっ？」

「私以外の女の人が光司さんに近付くなんて許せません／＼！！！！」

「えええええ！！！？こつちも理不尽！！！！」

とことんついてない光司だった。

そして……………

「こ、光司さん／＼……………」

「な、何かな／＼……………」

レナは少しずつ光司に歩みより、光司はそれにつられて後退りする。

そしてその顔は、あの3人と同様に赤くなっていた。

「ま、まさかレナ……………お酒のんだ？」

「ふえ〜？何言ってるんれすか〜、お酒なんかちつとも飲んでらせんよ〜」

「ぜ、絶対飲んで……………それも呂律が回らないぐらいに……………」

いつもの穏やかな表情のレナと違い、今のレナは人が変わったようにちららんぽらんな表情をしていた。

（レナって、酔うところなるんだ……………大変だな……………）

そう思わずにはいられない光司だった。

「光司さん……………あの私……………」

「れ、レナ……………顔が近いんだけど……………」



レナは光司にどんどん近付いていき、光司も壁際に追い詰められレナとの距離が縮まっていた。

そして二人の距離が数センチになり……………

「私……………」

「レナ……………ま、まさか……………」

「……………眠いです……………」

「ふえつ……………」

そう言うとレナは光司の肩に寄り掛かり寝息を立ててしまった。

そして今度こそ光司に救いの手が舞い降りた。

「『『大丈夫！？』』』」

よってない組のティアナとスバルとギンガである。

今の光司にとって、3人は間違いなく救世主に見えるだろう。

「あ、ありがとう3人とも……………まさかとは思うけど、3人は酔って無いよね？」

「いえ、それは大丈夫です。私がちゃんと見てましたから」

光司の問いかけに、ギンガは自信有り気に答えた。

しかし光司は、“どうして他の人は止めてくれなかったの！？”と聞いたそうな表情である。

そしてそれを察したのか、ティアナとスバルはある方向を指差した。

そこには……………

「はあ、まったくそんなことだろうと思ったよ」

そこには陽気な顔でお酒を飲んでいる金髪の女医さんと、何だか申し訳なさそうにお酒を飲んでいるピンク色の髪の剣士さんがいた。

「間違いなくあの人達が原因だな。ごめんけど、3人で酔い潰れちゃった人たちを布団に寝かせといてくれないかな」

「それは良いけど、兄さんはどうするの?」

「僕は……………」

そう言うと光司は少し間を置いて、3人に言った。



「す、すいませ〜ん……………」

「本当に……………その、すまん……………」

光司の O H A N A S H I は夜遅くまで続いたと言っ……………

……………

~~~~~

光司 side

シヤマルさん達にお説教してから僕はふと思い詰めて外に出た。

それは今日の誘拐事件のことだ。

「はあ〜、今日と言つ日をこんなに恨んだことはないよ」

《どうされました、マスター?》

僕がポツリと呟くと、僕の相棒のザックスが心配してか僕に聞いてきた。

《やはり、今日の事ですか？》

「うん、まあね……………」

今回の誘拐事件。

主犯は最高評議会の直属の暗殺集団だった。

ドゥーエさんがレジアス中将の暗殺を阻止したときも、それは暗殺集団の仕業だったらしい。

そして僕が最高評議会を始末したあと、暗殺集団も動いてくるかと思いい様子を見ていた結果……………まったく関係の無いアリサさんやずかさんを巻き込んでしまった。

「本当に、僕はやっぱりダメだな……………みんなを守る騎士になるって決めたのに……………」

「『そんなこと無いよ（わよ）わよ』」

「ッ！？」

声のした方を見るとそこにはアリサさんとずかさんがいた。

「まったく、こんな所でしんみりしてるなんてあんたらしくないわよ」

「それに光司君はダメなんかじゃないよ」

「ふ、二人とも……………でも結果的に二人を危険な目に会わせたことには……………」

「もういいのよ！！私もすずかも光司のせいだなんて思って無いわよ！！！」

「そうだよ。光司君が悪気を感じることもなんてないんだよ」

そう言って二人は僕の手を取って強く言ってくれた。

その手は不思議と暖かく感じた。

「あっ……………ありがとうございます」

そうして僕はしばらくの間、二人に手を握られていた。

するとアリサさんが口を開いた。

「そう言えば光司、あんた向こうでいたいどんな生活してるの？」

「きつと危ない人から狙われたりしてるんでしょ？」

「うう……………否定できない……………」

「でしょ、それで二人で考えたんだけど……………」

そして二人はしばらく溜めてから、意を決したように話し始めた。

「二つちにいると、なのはちゃん達の事とかたまにしか分からないし……………」

「それに加え、あんたはなのは達より危険な任務が多いって聞いたし……………」

「『私達もそっち（ミッド）に行かせてほしいの！』」

「ああ〜……………なるほど……………」

二人の発言に僕は驚きはしなかった。
だいたい想像が出来ていたからだ。

「しかし、魔法の使えない二人を連れていくわけにはいきません。
それに二人の進路だって……………」

「無茶なことだって言うのは分かってる。けど心配なのよ、あんた達のことか！」

「私達もう、待っているだけで何も出来ないのは嫌なの！！お願い
光司君！！」

「……………」

二人の真剣な眼差しに僕は少し圧倒されてしまった。

でも、僕の考えは変わらなかった。

「それでも、二人を連れていくわけにはいきません。これは、なのはさん達に言っても同じですよ。それに無理に今行かなくなったら、時が来れば……………」

「『えっ?』」

「あっ、いえ。それより、もう中へ入りましょう、冷えてきましたから」

そう言って僕は話を打ちきり二人を中へと促す。

「もう仕方ないわね、分かったわよ」

「あつそう言えば、今日は私達が光司君と一緒に寝れるんだよね？」

「えっ、隣じゃ無かったでしたっけ／＼！？」

「そんな細かいことはいいのよ！ほら、早く行くわよ！！」

「そうそう、あんまり外にいと風邪引いちゃうよ」

そう言つて二人は両腕に抱き付き僕ごと部屋へと向かおうとした。

(はあ〜、まあ二人を危険な目に会わせただし、これは仕方ないのかな〜……………)

そう僕は納得して、いや自分を納得させた。

そして僕は、二人の中に“ある物”を感じながら二人に連れられ部屋へと戻っていくのだった。

第56話「平和？な冬の一時」3日目・後編」（後書き）

次回はちよつと番外編です。

果たしてどんなお話になるのか、次回をお楽しみください！！

番外編「お前はやっぱり建てるのか!」 (前書き)

番外編「お前はやっぱり建てるのか!」

光司 side

最近はいージスの任務や急な呼び出しもなく、平穏な毎日を送っていたそんなある日僕にある依頼が来た。

何でも、ある星の環境保護で若干のトラブルがあり、環境保護に反対する人々と賛成派の人々の争いが少し危険な域に達したらしく、政府が僕に事態の鎮圧をしてほしいとのことだった。

そしてこの任務にもう一人加わるらしく、今はその人を待っているところだ。

「どんな人がくるんだろう?確か、ヴェレイサーの知り合いって言うってたけど……………」

ヴェレイサー・セウリオン

最近任務等で顔を合わせ意気投合した仲間の一人。

少し人当たりが冷たいけど、本当はいい人だ。

それに実力もかなりのもので、僕と同じく傭兵部隊「カタストロフ
イー」の隊長だ。

ヴェレイサー曰く、俺の仲間ピッタリのヤツがいるんでそいつを
送っておいたぞ、らしい。

(カタストロフィーのメンバーならヴェレイサーと同じく相当な実
力者だと思うから心強いけど…………… ヴレイサーはその人
について一言も言っていなかったからな〜本当に誰がくるんだろっ…
…………)

とっていると、向こうからこちらにやって来ている女性が見えた。

長髪で銀色の髪をゆらし颯爽と歩き、まさに大人な女性と言う感じ
である。

「はじめまして、エクシーガ・スラストよ。あなたがヴェレイサー
の言っていた……………」

「か、神谷光司です。今回はよろしくお願いします!」

「ええ、「こちら」そよろしく」

僕は軽く握手を交わし目的地へと向かっていった。

しばらくして、僕は反対派の人達のところへ着き、そのリーダーに会うことにした。

するとエクシーガさんが急に話し出した。

「私ね、自然が大好きなの。自然に囲まれていると、何だか心が落ち着くじゃない？だから、私は自然を破壊する人間は許せないの」

「なるほど、それでヴィレイサーがエクシーガさんにこの任務を…

……」

「ええ、適任だって言われてね」

そして話すのを止め、僕は反対派のリーダーのいる部屋に入った。いった。

中に入ると数人の男に囲まれ、一人の男性が煙草をふかしていた。

恐らく、この男が反対派のリーダーだろう。

そして僕らはその男に近づいていった。

「あなたが反対派のリーダーね？悪いことは言わないわ、至急反対行動を止めなさい！」

エクシーガさんは机を、バシッ、と叩きながら男に言いはなった。

そして少しだけど、最初に見た冷静さが失われている気がした。

僕らの任務はあくまで事態の鎮静化。

反対派を黙らせることなく、双方合意の上で事態の解決を図ることである。

すると、回りにいる男達を沈めながらリーダーの男が言った。

「こつちも遊びでやってる訳じゃないんだよ姉ちゃん。だから、はいそうですか、って止めるわけにはいかないんだよ。帰んな」

「だ、だけどつ、分かりました。今日はこれで失礼させていただきます。つ！？光司、あなた！！」

僕はエクシーガさんの言葉を遮り、今度は僕が男に言いはなった。

「ただ、一つ聞いてもよろしいですか？」

「何だ兄ちゃん、まだなんかあるのか？」

「いえ、ただあなた方が反対している理由をお聞きしたいと思いまして」

そう言つと、男は渋々訳を話始めた。

「俺たちだって別に好きで反対行動してる訳じゃねえんだ。俺たちは、賛成派の奴らのやることが許せねえだけのことだ！」

「だからって、自然を破壊していい理由には、エクシーガさん、ここは僕に任せて………分かつたわ」

僕は怒鳴るエクシーガさんを抑えてリーダーの話の続けさせた。

「数ヶ月前、やつらがいきなり攻撃してきてな。もちろん俺たちが先に攻撃した訳じゃねえ。まあ、あいつらとは前々からいがみ合ってきたが……………あんな攻撃は初めてだった。それで降何かとあいつらとぶつかるようになってな、終いには武器まで取り出す始末になって今に至るって訳だ。どうだ、これでいいか？」

「なるほど……………分かりました。では僕たちはこれで失礼します」

リーダーの話の聞き終わると僕たちはその場を後にした。

光司 side out

エクシーガ side

反対派のリーダーの所に行った後私たちは今度は賛成派の方に行つて同じく話を聞いた。

どちらともほとんど同じ内容だったけど……………これを聞いて一体何になるのかしら……………

そして次に私たちは問題になっている保護地域に来ている。

この星は、陸地：海が7：3の割合で存在し、こつ言つた美しい大自然が残っている所が多い。

そして私たちはしばらく歩き、人気の少なく木漏れ日が美しい少し開けた場所に出た。

「で、こんな所に連れてきて一体何を話すの？愛の告白でもする気？」

私は冗談混じりにそう言ってみた。

すると光司は……………

「ええっ／＼／＼!? いや／＼／＼……………その／＼／＼……………そ
ういう話では無いんですけど／＼／＼……………いや確かに、エ
クシーさんは綺麗で大人っぽい人ですから、こんな人気の無い所
でもない告白なんて出来ませんが／＼／＼……………そ、そう言う話
は無くて／＼／＼……………その／＼／＼……………」

赤くなり言葉を詰まらせながらなんとか答えた。

何だか、みた目通り可愛い反応をしてくれたわね……………

でもこれじゃあ話が前に進まないわ!

「冗談よ、今のは忘れてちょうだい。それで、何の話?」

「あっ、冗談／＼／＼? 冗談ですか／＼……………そうですよね／＼、
そんなわけ無いですよね／＼／＼……………では気を取り直して、エ
クシーガさん今回の件どう思いますか?」

「どっつって言ひと?」

「今回の事件、何か裏があるような気がしてならないんです……………」

そう言うと、光司はそう考えた訳を話し始めた。

「さつき僕達は賛成派と反対派の両方の方に話を聞いてきましたよね。そしてその両方が同じような解答をしました。数ヶ月前、いきなり攻撃を受けた」と

「それって……………賛成派と反対派を争わせるために誰かが意図的に攻撃したってこと!？」

「その可能性は十分考えられます。その証拠に、どちらのリーダーも、自分達から攻撃した」と言う証言は得られませんでした」

「でも……………それで誰が得するって言うの!？」

この問題になっている森林は、賛成派のいる所と反対派のいる所に挟まれるようになっていて。

そしてこの森林には、この星でも特に貴重な植物や生物が多く住み、

豊かな森になっている。

さらに、この森が賛成派と反対派の戦場になろうとしている……
……もし黒幕の目的が森の貴重な植物や生物なら、こんなことはないだろう。

そして光司は意外な答えを出してきた。

「考えてみて下さい……戦争をして、一番儲かるのは誰か……
……」

「儲かる？……思い付かないわね……」

「戦争をして一番儲かるのは、武器を売っている人達ですよ」

「武器商人ってこと？」

「ええ、戦争をすれば必ず武器が必要です。両リーダーも言った通り武器を使い始めたのは間違いなく、この星にはほとんど武器はないため、高額で取引されます。もし黒幕が両側に武器を流していたとしたら……相当な額を儲けていると思いますよ」

「な、なるほど……」

私は光司の説明に聞き入ってしまった。

さすがヴィレイサーが一目を置く人物だわ。

最初はちよつと女みたいで頼りなさげに見えたけど、この洞察力と
いい思考力といい……………ただ者じゃないわね。

「まあこれはあくまで僕の推測なので、証拠は一切無いのですが…
……………」

「いいえ。それでも少し調べてみる価値はあるわ。早速調べてみま
しよ」

そう言っって私が行こうとする……………

「あつ、エクシーガさん待ってください」

「何かしら？」

「この辺でちよつと休憩していきませんか？」

「……………」

「はい」

光司が私を呼び止めここで休憩しようと言い出した。

そして光司の手にはいつの間にかお弁当袋のようなものが握られていた。

(どこから出したのかしら……………あれ……………)

私はそんな風に思いながら光司の方に近づき、木陰に二人で座った。

「さて、それじゃあお弁当を食べてみましょうか」

「けどいいの？私までもらって……………」

「もちろん！一人より二人の方がお弁当も美味しくなりますから」

私が心配そうに聞くと光司は笑顔で返してきた。

そしてお弁当箱を開くと中には色とりどりのおかずが並んでいた。

「光司……………これあなたが作ったの？」

「ええ、そうですよ」

「……………凄いわね」

「ありがとうございます。料理はけっこう作るんですが……………お弁当は初めてだったので少し心配だったんです」

「そうだったの、それじゃあ早速頂こうかしら」

そして私はおかずの一つに箸を伸ばし口に運んでみる。

「ど、どつですか？……………」

「……………うん、凄く美味しいわこれ！」

「よかった、お口に合って何よりです」

そうして私たちが食事を取っていると、私にある疑問が生まれた。

「ねえ光司、このお弁当箱どこから出したの？最初見たとき何も持っていないようだったけど……………」

「ああそれでしたら……………これに入れてあつたんです」

そう言つて光司は胸元から一つのバッチを差し出して私に見せた。

「これは僕の所属する部隊の隊員バッチなんです。実はこれ色々便利な機能があつて、その中の収納機能を使つたんです」

そう言つと光司はバッチの中から色々な物を出してきた。

中からは傘や救急箱、寝袋等が出てきた。

(どれだけ準備が良いのかしら……………)

そう思わずにはいられない私だった。

「確かにエクシーガさんの言った通り、自然に囲まれてると心が安

らぎますねっ」

「そうですね。自然は本当に素晴らしいわ」

私たちはそんな会話をしながら豊かな自然の中で時を過ごしていった。

エクシーガ side out

光司 side

エクシーガさんとの昼食が終わり今は二人でのんびりしている。自分で言い出したは良いが、たちまちどこを調べたらいいかわからないからだ……………

「しかしあれね。こんなきれいな自然が戦場になっちゃうなんて……………本当に悲しいわ……………」

「そうですね……………ん？」

賛成派と反対派の争いが激化したため二つの勢力の間にあるこの森は戦場になろうとしている。

もし黒幕がこの森の貴重な植物も目的だとしたら、当然戦いを止めようとするはずだ……………だとしたら……………

「エクシーガさん、もしかしたらっ!!！」

「えっ!?!?どうしたの、光司!!！」

僕はあることに気が付き、エクシーガさんを連れ急いである場所へと向かった。

inとある場所

ここはこの星の政府関係者の建物。

僕に依頼をした人物もここにいる。

そう、僕らはその依頼者に会いに来たのだ。
あることを確かめるために……………

「すみません神谷光司です。大臣はおられますか？」

「ああ、入りたまえ」

そうして僕らは依頼してきた大臣の部屋へと入った。
部屋を見たところ不審なものは見当たらなかった。

「大臣、少しお時間よろしいでしょうか？」

「ああ、だが手短かに頼むよ」

大臣は机に座り自分のノートパソコンに向かいながら答えた。

「この星で、この紛争以外に問題はありますか？」

「いや、特に無いな。それより、あの紛争を早くどうにかしてくれ！我々には手に負えんのだ」

大臣はパソコンのキーボードを打ちながら素っ気なく答えた。

（おかしい……………武器の密売は明らかに行われているハズなのに……………確かにこの星には武器の密売に関する法律は無いにしても……………これは紛争に関わる問題のはずだ）

するとエクシーガさんが念話で話してきた。

（ねえ光司、大臣の様子何かおかしくない？）

（エクシーガさんもそう思いますか？）

（ええ、明らかに何かを隠している様子ね……………光司、まさか大臣を？）

（はい。少しかまをかけてみます）

そしてエクシーガさんとの念話を切り大臣との会話に戻った。

「大臣もう一つ。両者の争いが激化したため、例の森が戦場になるうとしていくことをご存知ですか？」

すると大臣のキーボードを打つ手が止まった。

そして僕は大臣がこの件に何らかの形で関わっていることを確信した。

「それがどうかしたか？」

「いえ、ご存知でしたか」

「当たり前だ。この件に関する情報はすべて調べてある。あの森のためにも、一刻も早く事態を収集せねばなるまい。もう用は済んだのか？ 済んだならさっさと出てってくれ。私は忙しいんだ」

「ええ、もう結構です。それでは失礼しました」

そうして僕は不機嫌そうなエクシーガさんを引き連れ、大臣の言った通り部屋を後にした。

光司 side out

大臣 side

あいつらが出ていってから、ワシは一人思い詰めていた。

(あの神谷光司と言う男……………想像以上の切れ者だな。
もしや、我々の計画に感付いたか……………いや、しかしあ
いつとて証拠が無ければどうしようもあるまい)

すると再びワシの部屋を訪ねるものが来た。

まあ、誰かは分かっているが。

「入っていいぞ」

「失礼しますよ、大臣」

現れたのは賛成派と反対派に武器を流している武器商人の男。

こいつのお陰でワシはけっこう大金を手に入れているわけだが、我ながらいい儲け方だ。実行は全てこいつに任せ、ワシは輸入品の受け書にサインするだけ。
もしばれても、ワシ自体は何もしてないので逮捕されるわけではない。

あいつが口を割ろうとすれば口封じをして全ての責任を擦り付ければいいしな。

しかし、最近武器の密売に関する法案が出されているからな……
……もう長くは持たんか。

「それで、今日は何の用だ？」

「いえ、双方に武器を一通り売り払って来ましたのでその報告と、例の森の植物の売値についてですが………言い値がつかまし

たよ。流石大臣ですね、目の付け所が違いますよ」

「そうかそうか……………それと、あいつらが真相に迫りそうにな
っている……………頼めるか？」

「お任せください。こちらも、管理局に見つかるわけにはいきませ
んから。それでは、今後ともご贔屓に……………」

そう言っつて男は不適な笑みを浮かべ部屋を去っていった。

大臣 side out

三人称 side

ここはとある宅地開発が行われている場所。

今は無人で、人気は全く無い。

そんなところに二人の人影が見えた
司とエクシーガである。

他ならぬ光

「そろそろ出てきたらどうですか？」

「隠れてないで出て来なさい、私たちの後を付けているのは最初から分かったたのよ！」

そう二人が叫ぶと、物陰から六人くらいの銃を持った男達が出てきた。

この男達こそ、武器の密売人である。

「気付かれてるなら話は早い。どうやらあんたら二人、事の真相に迫ってるようじゃないか」

「こっちも捕まる訳にはいかないんでな、消えてもらっぜ」

そう言っつて男達はジリジリと二人に歩み寄る。

しかし男達は知らなかった
この二人が、とんでもなく強いことに……………

「光司、あなたは下がっていてももらえる？」

「いやっ、でも!」

「おい、まさか俺達相手に女一人で来る気か？」

「ええ、あなた達の相手ぐらい私一人で十分だわ」

「そんな口聞いてられるのも今のうちだ!」

そして男達はエクシーガ目掛け一直線に銃を放った。

しかし

「ハヴオツクゲイル!!」

「『『『うわああっ!!』』』」

エクシーガに放たれた弾丸は、突然の竜巻によって跳ね返され殺し屋達の方に飛ばされた。

無論これはエクシーガによるものだ。

「こいつ……………強ええ……………」

「こつなりや実力行使だ、やっちまえ!!」

銃が効かないと分かった男達は銃をしまいナイフやスタンガンを取り出しエクシーガ目掛け向かってきた。

するとエクシーガは動じることなく長剣を構えた。

「まったく無駄なことを……………テンペスト・ラッシュユー！」

刹那、エクシーガから男達に向け目にも止まらぬ早さで突きが繰り出された。

そうして瞬く間に男達は頭を垂れ地面に伏せた。

あまりにも一瞬だったため、流石の光司も啞然とした表情だ。

「さっ、一応急所は外しておいたわ。これでもまだやる気？」

「あは……………あははは……………すごいや……………」

そうして反撃の意思が見えなくなった男達のリーダーらしき人物に

エクシーガが歩み寄る。

「さてそれじゃあ、あなた方に黒幕が誰なのかを吐いてもらいましょうか!?!」

エクシーガはリーダーの男に長剣の鋒を突き付けながら言い放つ。

「さあ、言いなさい!!--」

更にエクシーガはその男に掴み掛かり白状するように要求する。

が、男は頑として聞き入れようとはせず、銃を取り出し自分の頭に向けた。

「こっ、こっになったら、吐かされる前にし、死んでやる!!--」

「ッ!?!待ちなさい!!--」

エクシーガは必死に銃に手を伸ばすが、時既に遅く……………

パアアアアンツ

その銃に手が届くことなく弾は発射され、乾いた銃声が響いた。

しかし

「あ……………あれ、俺の銃……………は？」

男の手に銃はなく、男も無事生きていた。

後ろを見ると、建設中の建物に銃が紅い槍で刺されてあった。

「まつ、まさか……………光司？」

「ええ、まあ……………」

エクシーガが光司の方を見ると、光司は既にセットアップをしていた。

「あ、あんた……………どうして？」

「別に、どんな悪人だろうと助けるのに理由はいらないだろ？」

「……………そうか、分かった。黒幕は、あんたらの推測通り、大臣だ」

光司の言動に促された武器の密売人の男は素直に自供し始めた。

彼の優しい心が、事件を解決へと導いたのでたある。

「さて、それじゃあ黒幕の所へでも行きましようか」

「ええ、そうしましょう」

そうして二人は黒幕の大臣の所へ向かうのだった。

三人称 s i d e o u t

大臣 s i d e

あの武器商人が出ていってからしばらくたった。

まあいくら神谷光司と言っても、武器を持った男達相手にどこまでやれるか……………楽しみだ。

するとドアをノックする音が聞こえた。

きっとあいつだろう、そう思いワシは何の迷いもなく返事をした。

すると入って来たのは……………

「なっ、なぜお前がここに!？」

「ええ、大臣の思惑通り消えてなくてすみません」

「隠しても無駄よ、武器商人の男達がすべて白状したわ!!」

「くっ……………だがそれはワシが主犯だと言う確たる証拠にはならんぞ!」

「『……………』」

あいつらも確たる証拠が無いみたいで急に無口になったな。

まあ、ワシはそんな証拠を残すへまはしないがな。

「確かに、あの証言は確たる証拠とは言えません。がしかし、これならどうです?」

「それはなんだ？」

あいつが取り出したのは一枚の紙切れだった。

それが一体なんだと言っんだ。

「これは、ある地点に攻撃を許可する許可書よ。そしてここに大臣、あなたのサインが書かれてあるわ」

「だから、それが一体なんだと言っんだ!？」

「話は最後まで聞いてください。問題なのは地点です。この地点は、まだ何の騒動も起こしていなかった賛成派と反対派の人達がいる地点です。この意味がお分かりですね？」

書類が意味すること
戦いを仕組んだことだ。

それは明らかにワシが意図的に

しかし、なぜ!!

「バカな!!その書類はちゃんと処分したはずだ!!」

「ええ、大臣は確かに一枚は処分したかもしれませんが、こういつた書類にはたいいてい予備があるんですよ」

そ、そんな……………今までの稼ぎが、ワシの地位が……………

仕方ない、最後の手段を取るか……………

「この証言は明らかに大臣がこの件の黒幕である確たる証拠です。さあ大臣、ご同行願えますか？」

「あ、ああ……………その前に、こいつを持っていくか?!」

「『ッ!?!』」

ワシはもしもの時にとっておいた拳銃を取り出しあいつらに向けた。まさかこのワシが銃なんか持っているわけないと思っていたのかそつとつ驚いてるな。

「ふっふっふ、真相に迫った者を生かしておくわけにもいかないのでな、二人ともここで死んでもらうぞ。まずは……………その女の方からだ!」

狙いを付けワシが引き金に指をかけ射とうとした瞬間……………

突然銃が真っ二つに割れてしまった。

ワシは何が起きたかも分からずただ呆然としていた。

「な、何が……………起きたんだ……………」

冷静になって前を見ると、いつの間にか剣を抜いている神谷光司と銃と同じように真っ二つに割れている机が目に入った。

まさか……………こいつあの一瞬で……………

「大臣、これ以上拒むと言うなら罪状に公務執行妨害も加えますよ」

「ひいいいい！！！！……………はぁ……………」

そしてワシはあいつの凄まじい殺気にやられて気を失ってしまった。

大臣 side out

エクシーガ side

あの後私たちは大臣を逮捕し、賛成派と反対派の人達に事情を説明しなんとか和解させることに成功した。

そしてあの大臣が逮捕されたお陰で武器の密売に関する条約も即座に締結され、あの森も星の最重要自然保護地域に指定されてもう森に危険が迫ることもなくなった。

そうして今は光司と二人であの森を歩いている。

「それにしても、今回の事件は厄介でしたね」

「ええそうね。でもここが無事保護地域になってよかったわ」

「それもこれも、エクシーガさんのお陰ですよ」

「えっ？」

光司の言葉に私は耳を疑った。

何も出来なかった私の事をそんな風に言うなんて思いもしなかったからだ。

「でも、私は何も出来なかったわ。今回の事件はあなたが解決した様なものよ」

「そんなことはありません。自然を大切に思うエクシーガさんのその心が、この森を救ったんですよ。現に黒幕が大臣だと分かったのも、

エクシーガさんの一言だったんですから」

「そ、そう／＼／＼……………」

彼の言葉に私は思わず顔を赤らめ下を向いてしまった。

こんな気持ち初めてだわ／＼……………何かしら……………

ヴィレイサーやヴェルファイアと話してる時と何かが違うこの感覚

……………

私は自信の気持ちに戸惑いを感じつつ、そのまま森を歩いていった。

しかし、とうとう別れの時間が来た。

「エクシーガさん、今回は本当にありがとうございました」

「何言ってるの。さっきも言った通り、この事件を解決出来たのはあなたのお陰よ。私一人だったら、とても出来なかったわ。それにあなたは私の命の恩人よ、こちらこそありがとう」

「そんな、綺麗な女性を守るのは当然のことですよ」

「えっ／／……………綺麗／／……………私が？」

「もちろん、エクシーガさんはとても魅力的な女性じゃないですか」

「……………／／／／」

私はそれ以上言葉を発せなくなった。

光司ったら……………真顔でなんてこと言ってくれるのかしら／／／……………

もしかして私……………恋したのかもしれないわね／／／……………

「エクシーガさんどうしたんですか？顔が赤いですよ」

「なっ、何でもないわ／＼……………それじゃあ光司、今回は本当にありがとう。またいつかあなたと任務したいわね」

「はい！また、何処かで会えるといいですね。その時はまた、一緒にお弁当食べましょう、エクシーガさん」

「ツ／＼／！？え、ええ／＼、また食べたいわね／＼……………それじゃあ……………」

「はい……………では」

そうして私たちは、あの森のあの場所で最後にまた握手をして別れた。

神谷光司か……………本当に、大した男だったわ。

エクシーガ side out

光司 side

エクシーガさんとの任務を終えて、僕はようやく機動六課に戻ってきた。

が、行く前と何かが違っていた。

それは目の前にこわ〜い笑顔を浮かべている人達がいるからだ。

「あ、あの〜……………皆さん何かあったんですか？」

「『『『『『』』』』』……………『『『『』』』』』」

僕が質問しても、みんな笑顔を浮かべたままだった。

それが逆に怖い……………

すると、黙っていたみんなが一斉に息を吸い込んだ。

そして……………

番外編「お前はやっぱり建てるのか!」(後書き)

番外編「黒蒼の友」(前書き)

今回は、天照大神さんの魔法少女リリカルなのは〜転生せし物語〜とのコラボです!!

ほとんどバトルなので今回はフラグはありません。

それではごっごぞー!!

番外編「黒蒼の友」

三人称 s i d e

ここはとある世界のとある場所。

この場所は違法魔導師のアジトになっており……………いや、正確に言うとアジトだった場所だ。

今この場所にはただ一人の人物しか立っていない。

黒いジャケットに銀のマントを靡かせている一人の青年。
この世界で“黒蒼”の別名で名の通っている魔導師
優星である。

津川

「エクス、もうこれで全員かな？」

はい、周囲に危険な反応は見られません

「よしそれじゃあ戻ろうか。あんまり遅くなるとみんなに怒られるからね」

了解しました。転送準備に入ります

そうして優星が任務を終え六課に戻ろうとしたその時、気絶していた男が優星に向かって何かを投げた。

「くそっ……………これでも食らえ!」

「ッ!?!はぁっ!?!」

優星は条件反射で投げられた物を手に持っていた剣で切り捨てようとした。

だが……………

「くっ!……………なんだこの光は!?!……………」

男が投げたもの、それはある種のロストロギアで物理的衝撃を与える事によって発動、周囲の物を別の世界に転移させてしまうものだった。

光が治まると、そこにはもう優星の姿はなかった。

三人称 side out

光司 side

イージスの部隊長になってから数週間の時が流れた。

最初の方こそとても忙しかったものの、今ではだいぶ忙しくなくな

った。

そんなある日、僕に直接の連絡が入った。

それはある大富豪の人からの依頼だった。

「神谷光司一等空佐、あなたにお願いがある。誘拐されたワシの娘を取り返してほしいんだ！」

「まず落ち着いてください。犯人側からの要求は？」

「そ、それが……………あなた一人でこの地点に来いと言われたのですが……………」

その人の言った地点は無人の星で、植物や動物もいない岩だけの星だ。

おそらく、娘さんを人質にして僕を始末するのが目的だろう。

「分かりました。大丈夫です、娘さんは、必ず僕が助け出して見せます！！！」

「おお、さすが頼もしい言葉。頼みましたよ」

そうして僕は通信を切り、その場所に向けて転移した。

inとある星

僕が指定の場所に転移し終え周りを見渡してみると、僕の周りが高台に囲まれておりそこには沢山の違法魔導師達がいた。

中には指名手配を受けているヤツや、懸賞金がかかっているヤツ、質量兵器を持っているヤツなど、とにかくうじゃうじゃいた。

そして僕の目の前の高台に、人質であろう一人の女性を腕に抱えた大男がやって来た。

「約束通り一人で来たのか!?」

「ああ、僕一人だ。だから人質を解放しろ!!」

すると、回りにいた違法魔導師達が笑いだした。

「ハッハッハッハッハッ、別に俺たちはお前を倒せば人質なんぞ
どうでもいんだよ!!それに、誰が人質を解放すると言ったんだ、
ハッハッハッハッ!!!」

(くっ、言うだけ無駄だったか……………でも不味いな、これだ
けの人数を相手にしながら人質を助け出すなんて……………)

「さすがの紅蓮の騎士でも、これだけの人数じゃあ勝ち目はあるま
い。野郎共、やっちまええええ!!!」

そして回りの魔導師達が魔力弾を形成し、そのすべてが僕を狙って
いた。

「そらあ、死ねええええ！！！！」

そして大男の合図で魔力弾が僕に向かって放たれようとしていた。

さすがにもうダメだと思った瞬間、僕の真上から眩い光が現れた。

そしてそれが幸いし、僕を狙っていた魔力弾はすべて外れ回りの地面に当たり凄まじい土煙を上げた。

(くっ、いったい何が起きたんだ……………)

僕は光が収まった後目を開けてみると、そこには一人の青年が倒れていた。

黒い服装に銀のマント……………間違いない、この人を僕は知っている。

そして向こうも気が付いたのか頭を抱えながら起き上がった。

「いつっっ……………何が起こったんだ？」

「それはこっちのセリフだよ、優星」

「っ！？その声……………光司にい？」

その青年は、平行世界の僕の友人
津川優星だった。

光司 side out

優星 side

突然目の前が真っ白く光ったかと思うと、僕は急に固い地面に落ちた。

そして気が付くと目の前に光司にいが立って、回りは土煙が立ち込めていた。

「もしかして、ここって光司にいの世界なの？」

「そうなんだけど………今はゆっくり話している時間はないんだ。」

それより優星、ちょっと手伝ってくれないかな？」

「手伝う？」

話によると光司にいの任務中に突然僕が現れ、運良く攻撃を避けられたものの今の状況はかなり危ないため、僕にも任務を手伝って欲しいとのことだった。

丁度、この前模擬戦をしてくれたお礼をしたかったところだったので僕は快く承諾した。

それにいくら平行世界だって僕も管理局の一員なので違法魔導師達を放っておけない。

しだいに回りの土煙が晴れてきたので僕らは背中合わせにそれぞれ剣を構える。

「まさか、こうして光司にいと一緒に戦うことになるなんて思っても見なかったよ」

「それはこっちもだよ。僕が人質を助けに行くから、優星は援護を
お願い!!」

「了解!」

「それじゃ……………いくよっ!」

僕はそれぞれ剣を一振りして土煙を払い、光司には人質を助けるため飛び立った。

よし、それじゃあ僕も!

「シューティング・シューター……………」

「おいつ、あいつが出てきたぞ。今だやれえ!」

光司にいの姿が見えた違法魔導師達は次々に魔力弾を放っていく。

まあ、そうはさせないけどねっ!!

「……………シューッ!」

僕が放った魔力弾は光司にいを守るように違法魔導師達の魔力弾を相殺していく。

光司にいの方も数が多いため相殺し損ねた魔力弾を華麗に避けていく。

「人質は返してもらおうよ。虚空撃破斬！」

「な、いつの間につ！？グフオア！！！」

光司にいの方は人質を無事助けたことだし、こっちも攻撃しようかな。

と思っていると、僕の存在に気付いたのか高台から雪崩れ込むようにして違法魔導師達の波が押し寄せて来た。

「久しぶりの大人数相手だけど、僕らの敵じゃない！！エクス、い

くよー！」

オーライ、マスター

「はあああああつー!!」

そして僕は剣を振りかざしその波に突っ込んでいった。

優星 side out

三人称 side

光司と優星が戦ってしばらくがたった。

敵の数は少しは減ったものの、已然その勢いは衰えずにいた。

「しかし、けっこう倒したと思ったけど……………なかなか減らないね」

「そ、そうだね……………ちょっと数が多いかな……………」

流石の二人もリミットブレイクせずに戦っていたので若干の疲れの色が見えていた。

そして状況は二人にとって悪い状況へと向かうのだった。

マスター、何か来ます！

両デバイスが警告を発し、二人が高台を見上げるとそこには違法魔導師達ではなく剣と盾を持った兵士のようなロボットが立っていた。

ロボットが現れたことで違法魔導師達の士気は更に上がった。

「ハアハア……………よくもやりやがったな！？こいつは『エランド』って言うってな、俺達に忠実な兵士だ。いつの間にかもう一人増えるようだが、二人まとめて地獄に送ってやるぜえ！やれえ、エラ

「ンドオー！」

リーダーの男の合図と同時に高台にいたエラント達が一斉に二人に押し寄せる。

二人は改めて剣を構え、エラント達に立ち向かっていく。

「はあっ！たああっ！！」

「っ！？おっと！……………せいっ！！」

二人はエラントに肉薄していくが、その数は一向に減らなかった。

そして二人は再び背中を合わせ一呼吸を入れる。

「はあはあはあ……………ちょっときつくなってきたかな……………
光司にい大丈夫？」

「ああ……………なんとか。でも、この数はちょっと異常だな……………」

「そうだね……………何かこいつら製造されてるみたいに増えていくね……………」

その言葉を受けて、光司はある考えを巡らせる。

もしかしたらどこかに製造しているプラントがあるかもしれない

そんな考えが過り辺りを詮索し始めた。

すると

マスター、前方一キロ地点に熱源を感知しました

「何っ!?!……………優星、あれ!?!」

「ん?……………あ、あれはいつたい……………」

二人が見た方には、巨大な建造物の様な物が建っており、その回りから次々にエランドが出現していた。

そしてその建物には不思議な文字が刻まれそれが不気味に光っていた。

「何なんだあれ!？」

「まあ何にしても、あれを壊せばエランドは出てこなくなるみたいかな。優星、そろそろ……………」

「うん、僕も丁度同じことを考えてたところだよ」

そして二人は改めて剣を構え、その準備をする。

「ザックス!!」

「エクス!!」

オーライ、リミットブレイク・ランサーフォーム
フルドライブ、スタンドバイレディ・レッドジョーカーフォーム

それぞれリミットブレイクを発動し、二人のバリアジャケットに変化が見られる。

光司の方は甲冑やマントが加わって全体が紅く染め上がり、まさに紅蓮の騎士となった。

優星の方は両肩に巨大な砲台、腰にはレールガン、そして右手にはこれまた巨大なビームライフルと重装備になっており、バリアジャケットには光司と同じ様な紅のラインが入っていた。

「いくよ……………優星！」

「うん、光司にい！！エクス！」

バスターシュート

優星の合図と共に腰のレールガンからエネルギー砲が発射され、辺りのエラントを吹き飛ばすと同時にプラントへの道を開いた。

「光司にい、今のうちに早く向いっつを！..」

「分かった！..」

光司は優星とアイコンタクトを取りそのプラントの方へ向かった。

三人称 s i d e o u t

光司 s i d e

僕はエランドの相手を優星に任せてプラントの方を破壊しに向かった。

そして近くに来てみると、その大きさに圧倒された。

「さすがに大きいな……………でもっザックス!!」

ロードカートリッジ

「瞬……………迅……………ッ!？」

僕が瞬迅槍を放とうとすると突然プラントが動きだし、両側から巨大な手が出てきて上半身だけのロボットの様になった。
そして手の部分をドリルに変えて僕を攻撃してきた。

「なるほど……………ただじゃやらないって事かな?だったら!!」

僕は改めて槍を構え直しドリルの方を向く。

「はあああああっ!! 槍雨・一塵!!!!」

僕は向かってきたドリルを次々に槍で一掃していった。

「っと！……………ふう、これであとは本体かな、ザックス、もう一回頼むよ！」

そして僕は再びカートリッジをロードし槍を構える。

薬莖の落ちる音と共に槍に紅い魔力が宿っていく。

そして次第にそれは龍の形になりゴウゴウと音を立てながら燃え出す。

「烈空……………魔龍槍！！！」

限界まで溜めた渾身の一撃をプラントに向けて放つ。

さすがに手応えがあったと思い、僕は一旦下がって様子をつかがう。

「どうかな……………ッ！？な、何……………」

僕がプラントの方を見ると攻撃したはずの所は確かに壊れていたのだが、その部分の下からコアの様な物が現れプラントの形も更に変

わり、両手には大剣が握られていた。

そしてプラントはその頭をこちらに向けて何やチャージしているよ
うで、更に回りにはエランドが僕を取り囲んでいた。

「くっ……………不味い……………だったら……………ッ!？」

僕はふと攻撃するのを止め、目を閉じた。
無論、これは諦めたんじゃない。

思い出したんだ……………僕は、一人で戦ってるわけじゃないって
ことを!!

「そうだったよね……………優星!!」

「その通り!!」

突然僕の真上から優星が現れ、プラントからの攻撃をプロテクションで
防ぎ周りにいたエランド達を一掃した。

「助かったよ優星」

「こっちにいたエランドが急にいなくなったからね。心配して来てみたんだ。にしても……………これが本体か……………」

優星はプラント本体を見上げて驚嘆の声を漏らした。

「優星、多分中心のコアの部分を破壊しないとダメみたいだ。優星のあれで何とかならない？」

「うん、任せて光司にい!!」

そう言うと優星の武装の周りに赤と蒼の魔力が集まっていく。

しかしそうはさせまいとエランド達が優星の方へ襲いかかってくる。

けど、そうはさせない!!

「サウザンドレイン!!」

僕は次々に魔力で作った槍を形成して優星に近付いてくるエランドを倒していく。

そして……………

「グレイブ……………メテオ……………レエエザアアアアアア
! ! ! ! !」

優星の砲撃が放たれると同時にプラント本体からも砲撃が飛んできた。

2つの砲撃がぶつかり少し均衡したかと思うと、優星の砲撃が勝利砲撃共々本体のコアの部分を貫いた。

「グオオオオオオオ……………」

そしてプラントはつめき声の様な声を発し、エランドと共に跡形もなく崩れ去った。

「これで……………ようやく終了かな……………」

「そう……………みたいだね……………」

僕達がようやくホットー息つくこうとしたその瞬間

「まだ終わってねえええぞおおお！！！！！！」

「『ツ！?』」

僕達が振り返ると、そこには先程より巨大な入道のような物が聳えるように立っていた。

光司 side out

三人称 s i d e

二人が振り返ると、先ほどのプラントと同じかそれ以上の大きさのドラゴンのようなロボットが鎮座していた。

そのドラゴンは足が無く、胴体から下は地面と繋がっているようだった。

「ハッハッハッ、これぞ俺たちの最終兵器“クリムゾン・ドラゴン”だ！お前らなんぞ捻り潰してくれる
！！」

どこからか操縦しているであろうリーダーの声が聞こえたかと思うと、いきなりクリムゾン・ドラゴンから巨大な爪が出てきて二人を襲った。

二人が避けると今度は周りから次々にミサイルなどが飛んできて二人をおいつめた。

しかし二人も負けじと応戦する。

「くそっ…………… フレームランサー！！」
「シューティングスター！！」

「『シューーート!!!!』」

二人の放った攻撃は確かにクリムゾン・ドラゴンに届いたが、全く効いている様子は無かった。

「無駄だ無駄だ!! そんな攻撃ではびくともしないぞ!!」

リーダー男は余裕のあざけ笑いをしていた。

だがこの男は知らなかった。

この二人は、まだ本気を出していないことに……………

「優星、本気でいこうか……………」

「うん。その方がいいみたいだね……………」

そして二人は頷き合い、お互いに構える。

「ザックス!!」

「エクス!!」

<パラディンフォース。ストレイダーモード、セフトアップ>
<フルドライブ。スタンドバイ・ブラックエースフォーム>

二人の掛け声に愛機が答え、二人はそれぞれの魔力光に包まれる。

光司は紅と白の魔力光に包まれ、騎士甲冑は紅から白に変わりマントは裏は紅で表は白になった。

そしてザックスは槍から一変し、1メートル程の大剣になった。

優星の方は蒼と黒の魔力光に包まれ、バリアジャケットは魔力光の蒼と黒に変わり背中には鮮やかな蒼色の3対の翼が付き、右手には長剣を握っていた。

そして二人はクリムゾン・ドラゴンの方を見つめる。

その目から出る殺気は、先程の二人より凄まじいものだった。

そして……………

「オメガ……………レーザーザアアア!!」

「光焰……………一閃!!」

優星は剣先から魔方陣を展開し、そこから蒼と黒の砲撃を放ってクリムゾン・ドラゴンの片方の爪をいとも簡単に飲み込み、光司は紅と白の織り交ざった魔力を剣に纏わせ残っていたもう片方の爪を一刀両断した。

「グオオオオオオ!!……………」

ドラゴンはさっきの攻撃が効いたのか、凄まじい呻き声を上げ首を高く上げた。

「よしっ、今だザックス!!」

<ロードカートリッジ>

光司は飛び上がってクリムゾン・ドラゴンの頭より上にいきカートリッジをロードしてザックスを高く掲げた。

そしてザックスの刀身からは魔力刃が伸びかなりの大きさになっていた。

「デイベイイイン……………セイバアアアア！！！！」

そして光司は巨大な剣を振り下ろしドラゴンの頭から根元までを真っ二つに切り裂いた。

切り裂かれたクリムゾン・ドラゴンの方は真っ二つに切り裂かれた首がそれぞれで形を成し、双頭の龍の姿になった。さらに胴体部分からは不気味に黒く光るコアのようなものが見えていた。

「やっぱりあれが本体か……………優星！！」

「分かった、はあっ!!」

優星は剣を左手に持ち替え右手に魔力を収縮させ、球状の擬似的なブラックホールを作り出しクリムゾン・ドラゴンに向けて放つ。

すると手に収まる位だったブラックホールはたちまち巨大になりクリム・ゾンドラゴンを飲み込んだ。

「光司にい、いくよ!!」

「うん!!」

そうして二人は互いに自分の剣を構え目の前の黒い球体目掛けて二人同時に飛び出した。

そして.....

「ブラックエンド.....ギャラクシー!!!」

！

二人の凄まじい速さの斬激はブラックホールを切り裂き、クリムゾン・ドラゴンは大爆発を起こし粉々に砕け散った。

そして二人の戦いはようやく終わりを迎えたのだった。

三人称 side out

優星 side

最後の二人でのブラックエンドギャラクシーが決まり、僕たちはクリムゾン・ドラゴンを倒すことが出来た。

そして操縦していたリーダーの男はちゃっかり脱出していて、僕らに‘命だけはとらないで！’と泣いて頼んできたので僕らはあきれ物と言えなかった。

その場にいた違法魔導師達は光司にいと協力して全員捕まえることが出来た。
人質の方も光司にいが助けた時に安全な場所へ転移させておいたらしく無事だった。

しかし、これですべて解決と言うわけにはいかなかった………

「これからどうしよう………」

そう僕はもとの世界に帰らなければならない。
けど帰る方法が見つからないのだ。

「ん、なんだこれ？」

すると光司にいがあるものを拾い上げた。
それは僕がこの世界にきた時に思わず斬ってしまったあのロストロギアだった。

「光司にい……………それ……………」

「もしかして、これで優星が？」

「う、うん。エクスによると、物理攻撃を受けると別の世界に転移するロストロギアらしいんだ。来る時そいつを斬っちゃったから、多分その半分で戻れると思う」

「そっか……………お別れだね」

「うん……………」

最後に僕たちは握手をした。

「助かったよ優星、本当にありがとう」

「どづいたしまして、このくらいどおってこと無いよ」

互いの絆を確かめるように、互いの健闘を称えるかのように、僕たちは強く握手をした。

「それじゃあ優星、元気だね……………」

「うん。光司にいつも……………」

そして僕は光司にいかからロストロギアを受け取り真上に投げた。
光司には渡し終わるとゆっくりと下がり、顔を伏せるようにして
背を向けて行ってしまった。

「さよなら……………光司に……………」

そして、上に投げたロストロギアが落ちて砕ける音と同時に僕はま
たまぶしい光に包まれた。

優星 side out

番外編「黒蒼の友」（後書き）

天照大神さんいかがだったでしょうか？

間違っている点、ご不満な点がありましたら言ってください。

今回は戻って日常編です。

具体的に言えばナンバーズあたりを書こうと思います。

それではっ！！

第57話「ナンバーズの行方」（前書き）

今回は主にナンバーズのフラグです。

なんかナンバーズのキャラって難しいです……………

そして最後には伏線も……………

それではどござー！

第57話「ナンバーズの行方」

光司 side

イージスの任務も一段落付き、みんなで一息ついていたそんなある日。

僕はデスクワークをしていると僕はあることが気になった。

(そう言えば最近忙しくて見てなかったけど、ナンバーズのみんなはどうしてるかな……………)

今のところ、ウーノさんはイージスのデータ整理や雑務を手伝ってくれているため一番動向が分かる。

しかしウーノさん以降のナンバーズのみんなは、行き先は知っているものの元気にやっているかどうかは分からない状況だ。

「この際だから行ってみようかな？……」

「どこへ行くんですか？」

「ああウーノさん。ちょっと他のナンバーズのみんなのことが気になったものですから、この際だから見に行こうかなと思って」

「そうでしたか。でしたら妹達によろしく言うておいてください、私はもう少し雑務がありますので」

「いつもすみませんウーノさん」

「いいえ、そのノノ……（光司が）好きでやらせていただいていますからノノ」

「でも本当にいつも助かってます、ありがとうございますウーノさん。そうだ！今度ウーノさんにも休暇をあげないといけませんね」

「いえそんなノノ……あの、よろしかったらその時に光司さんもノノ……」

「ゴホン！……！」

「『ツ！？』」

僕達が会話をしているとどこからか大きな咳払いが聞こえ、話を中断させてしまった。

そして咳払いをした本人がこっちへやってきた。

レナである。

「何を楽しくお話しになっていたのですか光司さん？」

「え？いや別に……………」

振り返るとものすごく笑顔のレナが立っていた。
笑顔が逆に怖い……………

でもそれより僕には気になる事があった。

「それよりレナ、風邪かい？ものすごい咳払いだったけど大丈夫？」

「ええ／＼！？……………いや、これはその／＼……………」

するとレナは顔を赤らめて答えてきた。

(これはやっぱり熱でもあるんじゃないのかな?)

そう重い僕は右手をレナのおでこに、左手を自分のおでこに当て体温を比べた。

「うーん……………熱は無いみたいだけど……………」
本当に大丈夫？」

「あ、いや／＼……………そのお／＼……………キヤア
アア／＼！！！」

「えっ？ちよっ！…！」

ガッシャーン

僕はなぜかレナ腕を掴まれ一本背負いの要領で投げ飛ばされてしまった。

レナさんお強い……………」

「大丈夫ですか光司さん！？」

「す、す、すみません光司さん／＼……………」

「い、いやあ大丈夫だよ……………これぐらい元気があるなら大丈夫かな……………それじゃあ僕は行ってくるよ」

僕は気を取り直してナンバーズみんなの様子を見に行くことにした。

地上本部

僕は最初地上本部にやってきた。

ここはドゥーエさんが内部からの監視役として、トーレさんが教官として、クアットロが技術者として勤務している。

まずはクアットロの方から行ってみよう。

「すみません。ここにクアットロと言う局員はいますか？」

「ああ、その人なら20階にある技術室にいますよ」

僕は近くにいた男性局員に聞いてその技術室へ向かった。
なぜ男性なのかというと、女性に聞くとなぜか顔を赤くして逃げられてしまうからだ。

イージスの隊長になってからなんだか女性に避けられてる気がする。

そして僕が20階にある技術室へ着くと

「はあくい光ちゃん、お・ひ・さ・し・ぶ・り」

「ああは……………久しぶり、クアットロ」

技術室にはたくさんさんの機会や機器がたくさんあふれていた。
こんなにたくさん何に使うんだろう……………

「そんな事より、どうしたの光ちゃん？こっちに来るなんて珍しいわね」

「最近はいージスの任務も一段落したから、ナンバーズのみんなが
どうしてるか気になってね」

「まあ、光ちゃん優し」

クアットロはどうやら今の生活に満足……………と言っ
か楽しんでるようだった。

もしかしたら、そのうち大発明でもするのかも。

「そつだ光ちゃんこれあげるわ」

そつ言つてクアットロはあるものを差し出してきた。

それは携帯電話のようなものだったけど何か違った。

「クアットロ、これは？」

「それは携帯転移装置よ。大がかりな転移装置が無くても大抵の場所に行けるわ」

「ありがとう、助かったよクアットロ。それじゃあ」

こうしてクアットロから携帯転移装置を買った僕は、今度はトーレさんに会いに向かった。

僕が向かったのは訓練場。
バトル好きなトーレさんのことだからきつとここにいたと思ったの
だ。

すると訓練場から一人の女性が出てきた。

他ならぬトーレさんだ。

「あつ、トーレさん。お久しぶりです」

「ん？ああ光司か、久しぶりだな」

「相変わらず訓練ですか？」

「まあな。ここのやつらは齒ごたえが無くてつまらん」

「あはは……………」

僕は最早笑っしかなかった。

するとどこからか局員の女性が現れた。

「失礼ですが、神谷光司さんでいらっしやいますね？」

「そうですね……………あなたは？」

「うふふっ、もうお忘れですか？私ですよ、ドゥーエです」

「ええ！？ドゥーエさん！？」

するとドゥーエさんは変装を解いて元のドゥーエさんの姿に戻った。ドゥーエさんは以前に見た女性とは違っていたので分からなかった訳だ。

「お久しぶりです光司さん、私のこともうお忘れですか？」

そう言うとドゥーエさんは僕の方に顔を近づけてくる。でも近すぎなような／＼……………

「ドゥーエさん／＼……………ちっと近いような気がするんですけど／＼／＼……………」

「あら、嫌でしたか？」

「いやその／＼……………そう言う意味じゃなくて／＼……………」

「うふふっ、やっぱり光司さんはかわいい人ですね」

そう言うってドゥーエさんは僕から離れてくれた。

なんかドゥーエさんと話すとよくからかわれるんだよね

「それで、今日はどうされたんですか？もし時間があつたら私と一緒にお茶でも」

「何を言っている、光司は私と模擬戦をしに来たんだ。お茶などしている時間は無いぞ」

あれ、僕そんな約束したっけかな？

それになんか勝手に話が進んでるような……………

「トーレさん、僕そんな約束しましたっけ？」

「いや、今私が決めた」

「……………そ、そうですか」

「さあ、では早速模擬戦を」

「何を言っているのトーレ、光司さんは私とお茶するのよ。これは決定事項よ!!」

「模擬戦も決定事項だ!!」

「あ、あの……………僕の意味は？」

二人は僕の意見を全く無視して兄弟で口喧嘩をし始めた。

(弱ったな、まだ行くところがあるのに……………そ
うだ!!クアットロのくれたあれを使おう!!)

僕はさつきもらった携帯転移装置を取り出して、二人に黙っていくのは悪いので一言言ってから行く事にした。

「お茶よ!!」

「模擬戦だ!!」

「あの、二人とも、」

「『何だ（ですか）！？』」

二人の見幕が少し怖かったが、僕あ二人に言った。

うん、あれは下手な殺気よりも怖かった。

「僕、この後も色々あるのでこれで失礼します。二人の元気そうな顔が見れてよかったです、それでは！」

「『うっ、光司さん！』」

僕は二人を残した地上本部を後にして次の場所へと向かった。

聖王教会

今度僕は聖王教会にやってきた。

聖王教会にもナンバーズの数人が行っているらしく、セインとセツテ、オットーにデイドと4人行っているらしい。

セインとデイドはシスター見習いとして、オットーとセツテはカリムさんの護衛と世話係を兼ねた執事役として聖王教会にいるらしい。

僕は聖王教会の入り口辺りに転移し周りを見渡す。

幸い人がいなかったので見られてはいないようだった。

「さて、それじゃあ入りますか」

そして僕は一呼吸いれて聖王教会へと入っていった。

中に入るとすぐにシスターシャツハが来てくれてカリムさんのところへ案内してくれた。

「では光司さん、騎士カリムはこの部屋ですので……………私はこれで」

「は、はい……………」

なぜかシスターシャツは僕に妙な眼差しを向け、逃げるように去っていった。

まるで、御愁傷様、と言わんばかりに……………

カリムさん、何かあったのかな？

そう思いつつ、僕はドアをノックして部屋に入る。

するじ……………

「光司さー！ー！ー！ー！ん！ー！ー！ー！」

「へう？.....ゴフッ！ー！」

ドアを開けた瞬間カリムさんがすごいスピードで突っ込んできた。

カリムさんって.....あんなに早く走れたんだ.....

「か、カリムさん／＼.....その／＼.....離れていただけると／＼.....」

「.....はっ！ー！し、失礼しました／＼！ー！」

するとカリムさんは顔を赤くしてさっきより早く離れてくれた。

「それでどうしたんですか取り乱して！？カリムさんらしくも無い」

「そ、それは／＼.....ここ。光司さんのせいです／＼／＼！ー！」

「ぼつ、僕の!？」

カリムさんの言葉に僕は驚きを隠せなかった。

何かしたのかな？

「2ヶ月間も連絡も何もよこさないからですよ／＼!！」

「は、はあ……………それはすみません……………」

カリムさんはどうやら音信不通だった事に怒っているらしい。

でもこここのところ、任務や休暇で連絡したりする暇も無かったのは事実だ。

「そうですね!！本当に心配したんですから!！……………
…ふう、まあいいでしょう。それよりお茶にしましょう」

そしていつもの表情のカリムさんに戻り僕はカリムさんに連れられ席に座った。

「でカリムさん、ナンバーズみんなは？」

「ああそれでしたら、今シャツハが呼びに行ってるはずですよ。あつ、ほら」

そう言うと扉が開きナンバーズのみんなが顔をのぞかせた。

「セイン、セツテ、オットー、デイドー！！久しぶりだね」

「やつほー光司さん、久しぶり」

「そちらもお元気そうだなによりです」

「お久しぶりです光司さん。騎士カリム、お茶をお持ちしました」

「お久しぶりです。その説はどうも」

並んでいる順にセイン、セツテ、オットー、デイドと挨拶してくれた。

そしてセイン以外のみんなは以前よりも表情が豊かになっていた。

まあセインは……………いつも通りかな。
シスターの衣装も半袖だし。

「それで、光司さん何しに来たの？」

すると4人とも顔を赤らめて下を向いてしまった。
なぜだ？

そしてなぜかカリムさんがジト目でこっちを見ている。

これもなぜだか分からない……………

「さて、みんなも元気そうだった事だし僕はそろそろ帰ろっかな」

そう思い僕が席をたとうとすると……………

「『』待ってください（待ってよお（！！！『』」

「え／＼！？」

周りにいたみんなに腕をつままれ引き止められてしまった。

しかし僕にもまだ行くところがあるので困ったしまった。

それに／＼／……………両腕に何かあたって／＼／……………

すると、僕にめったにこない救いの手が差し伸べられたのだ。

「だめです。騎士カリム、仕事を終わらせた光司さんと違って、あなたにはまだまだやるべき仕事が残ってますよ！それに、シスターセインにシスターデイドもそうです！」

シスターシャツハがカリムさん達を呼びに来たらしく、扉のところで腕組みをしていた。

おそらくカリムさん達には悪魔のように見えるだろうが、僕には天使のように見えた。

「むう……………シャツハは厳しいんだから……………では光司さん、またの機会に……………」

「わ、分かりました……………ではまた。それじゃあみんなも元気
でね」

そうして僕は聖王教会を後にしてみんなに挨拶をかわし次なる場所
へ向かった。

ナカジマ家

次に来たのはナカジマ家。
ここには養子としてチンク、ノーヴェ、ディエチ、ウェンディの4
人が来ている。

そしてゲンヤさんにはクイントさんが戻ってきて、幸せな家庭を築
いている事だろう。

「さて、ここに来るのは何年ぶりかな。なんだか懐かしいな。」

そう呟きながら家のインターホンをおした。

「は〜いどちら様です……………ここ、光司くん!？」

「お久しぶりです、クイントさん」

そしてクイントさんに連れられ、家へ上がらせて貰うと、リビングにナカジマ家が集合していた。

そう、なぜかスバルとギンガとゲンヤさんもいるのだ。

けど改めて見ると……………大家族だなここ。

「おう光司久しぶりだな。またちょっと見ないうちに出世しやがって」

「あはは、どうもお久しぶりですゲンヤさん。そう言えば、今日は仕事の方はよろしいんですか？」

「ああ、嫁さんが帰ってきたのに中々休みが取れなくてな、やっと今日取れたってことだ。ついでにスバルとギンガにも連絡して、家族で過ごそうってことになったんだ」

「『そうなんだよ()です』」

なるほど、だからスバルもギンガもゲンヤさんもいたわけか……

……

「そつだ、あいつらがお前に会いたがってたぞ。おーい、お前から」

ゲンヤさんがそう言うと、向こうの方にいたナンバーズ組が走ってきた。

「アニキー……!」

「あつ、兄貴!？」

そう言いながらまず飛び込んできたのはウエンディ。

しかしなぜ兄貴？

「スバルから聞いたんツス。アニキは兄のような人だって。だからあたしもアニキと呼ばせて貰うツス!」

「あはは……………なるほど」

どうやらスバル経由で広がったらしい。

ん?と言う事は……………

「兄上(兄さん)!!」

「チンク……………デイエチ……………君達もか……………つてあれ?ノーヴェの姿が『あたしはここだっ!!』ツ!?いてっ!」

チンクやディエチに気を取られていたら後ろからノーヴェに叩かれてしまった。

相変わらずけつこつ痛い……………

「やあノーヴェ……………久しぶり」

「ふんつ、別に会いたくも無かったけど……………まあ、来ちまったんらしいか……………久しぶり、兄貴^{ボソッ}」

「ん？ごめん最後のほうが聞き取れなかったんだけど、なんて言ったの？」

「なっ／＼、なんでもねえよ／＼！！」

そう言いながら僕はもう一発叩かれてしまった。

僕の頭は大丈夫だろうか……………

「そう言えば、お前が家に来るのは本当に久しぶりだな。あん時はまだまだ中学生のひよっこだったのに、今じゃ超有名な紅蓮の騎士だ」

「本当よね、目が覚めて聞かされた時凄く驚いたわ」

「そんな、止めてくださいよ。僕は別に……………」

ゲンヤさんとクイントさんの言葉に僕は思わず顔を伏せる。

するとゲンヤさんがこんなことを言い出した。

「しかしあれだな、こうして見ると光司は兄弟の長男みたいだな。どうだ、いつそのこと家へ養子に来ないか？お前はもう家族同然だしな」

「あ、いえ……………お気持ちだけで嬉しいですから。それに……………僕には……………」

「そつよ、養子にするなんて出来ないわ」

と、僕が断ろうとするのでクイントさんもこれに反対してくれた。

しかしほっとしたのもつかの間、クイントさんは更に上を行く発言をするのだった。

「だって養子にしちゃったら、お婿にもらえないじゃない」

「そつですよ。養子にしたら婿に………ってなあ？」

クイントさん、今“婿”と言いましたよね………聞き間違いじゃないですよね？

聞き間違いであってほしいけど………

「婿になればそれこそ家族じゃない、きっとその方がいいわ」

「おおそうだな。おし光司、いったい誰がいいんだ？」

「ちょっと勝手に話し進めないでくださいよ！！みんなからも何か言つてよ」

そう言つてみんなの方を見ると、なぜかみんなそろつて顔が赤くなつていた。

つて、みんな想像したのか……………

「まったく、そう言つのは僕にはまだ早いです。二人とも気が早すぎですよ」

「『あら（ああ（、そうかしら（そうか（？』」

まったく二人とも昔とちつとも変わらないんだから……………
…まっ、それがいいのかな。

そう思いつつ時計をみると12時30分、お昼の時間だ。

「そろそろお昼ですね、せっかくですから僕何か作りますよ」

「ええ！？悪いわよそれは、光司君は一応お客様なんだから、料理なら私が」

「でもクイントさん、あれ……………」

「あれ？」

僕が指差した方向には目を輝かせた表情のスバルとウエンディが見えた。

そして心なしか他のみんなも“作ってください”オーラを放っている。

これはもう作るしかないだろう。

「そう言っわけなんで、クイントさん」

僕とクイントさんで作った料理はあつという間に無くなってしまった。

人数分以上作ったけど……………何でもあっさりと無くなるんだ？

ナカジマ家の食費が心配になってきた……………

「やっぱりいい兄の料理はおいしいね〜」

「そうね、毎日でも食べたいぐらいね」

「本当においしかった〜、ありがとう兄さん」

「しかし、兄上は男なのにこんなに料理が上手いとは……………料理とは、主に女性がやるものではないのか？」

「そうツスよね……………ああ、分かった！！アニキは女みただからこんなにも上手いんスね！？」

「違いねえ」

絶対にその解釈は間違ってるんだけど……………まいつか。

そうして僕はナカジマ家でしばし楽しいひと時をすごしていった。

光司 side out

三人称 side

光司がナカジマ家で過ごしている一方で、ここにはある男がいる。

そしてこの場所は管理局も知らない無人の星。

しかし無人の星なのにそこには巨大な建物があり、世話もなく何かを製造する様な音が響いている。

その建物にこの男はいるのだ。

「もう少しだ……………もう少し……………」

男は次々に製造されていく“あるもの”を見下ろしながらそう呟いた。

その姿は全身が金属で出来ているロボットの様な代物だった。

1781

「フッフッフ……………楽しみにしていたまえ……………」
…神谷光司……………」

その男の不適な笑いは不気味にその建物に響いていた……………」

三人称
s i d e o u t

第57話「ナンバーズの行方」（後書き）

今回は趣向を変え、光司以外の日常を書きたいと思います。

ジャンル的にはこの後のシリアスのためにギャグをふんだんに入れていきたいと思います。

ギャグを書くのはあまり自信がないので、よろしければアドバイス等ありましたら感想等に書いていただけるとありがたいです。

それでは!!

第58話「とある部隊の日常」(前書き)

今回は日常編です。

最近あまり出てこなかったルークやガルシアも出ます。

それではとつぞー！

第58話「とある部隊の口癖」

ルークside

「暇だ〜〜」

僕の名はルーク。

管理局特別精鋭部隊“イージス”の隊員だ。

さっきから暇だ暇だとうるさいのが、同じくイージスの部隊員のガ
ルシア。

いいやつなんだけど……………バトル好きと馬鹿なのが玉に瑕。

「あゝあ暇だ……………そうだ！光司に模擬戦をつ」光司なら

いないよ。さっき任務に出て行ったから』……くっ！！」

で、さっき話に出てきた“光司”ってのは、イージスの部隊長・神谷光司。

僕達の上司になるんだけど、そんな感じは全く無くて普通の仲間として接してくれている。

光司のおかげで僕達は今ここにいられるんだ。

「な〜ルーク、お前でいいから相手してくれよ。暇でしょうがねえ」

「今月に入ってからもう10回目だよ！！少しは我慢してよ」

「人間ってのはな、欲望に忠実な生き物なんだよ！！」

「どこで覚えたんだよ……………」

最近ガルシアが変な言葉を覚えてきたんだよね

いったいどこで聞いたんだろう……………

「それよりレナのやつどこ行ったんだ？」

「さあ、見てないけど？光司が任務に行ってから姿が見えなくなっ
たような……………あ、いた」

そこには手に何かが入ったグラスを持っているレナの姿があった。

でもその何かが問題だった……………

「レナ……………それ何？」

「あ、これ？私もちよっとお料理の勉強をしようと思ってね。試し
に健康ドリンクを作ってみたの」

「おいレナ……………料理って誰に教わった……………？」

「え、シャマルさんだけど？」

((明らかな人選ミスだー！ー！))

その時僕とガルシアの心はこんな風にそろっただろう。

でもこの展開は……………不味い……………

「本当は料理の詳しい光司さんに飲んでもらおうと思ったんだけど、任務でいないわね……………よかったらどちらか飲まない？」

やっばり……………

シャマルの料理には絶対にてを付けないで、って光司も言ってたし……………ここは……………

そしてガルシアを見るとガルシアも同じ考えのようだった。

「『ごめん(悪い)レナ！ー！急用を思い出したからまた今度！ー！』」

そして僕らは逃げるようにその場から出て行った。

あ、光司帰ってきたらどうしよう……………

ん…………、でもまあ何とかなるかな。

そう思い、僕とガルシアは“ついでに町を見に行こう”という事になって町へと繰り出した。

光司 side

僕が任務から帰ってくるとそこには誰もいなかった。

「あれ？レナとガルシアとルークはどこへ行ったのかな……………？」

今日はウーノさんに休みをあげているので、ここに僕以外がいない
ということは本当に僕一人だけだ。

「たまには一人になるのも『光司さん、任務から帰ってきたんです
ね！』『う、うん……………レナ……………』」

声のした方を見るとレナがいたんだけど……………僕は思わず言
葉を詰まらせてしまった。

レナの、その右手に持っているものを見てしまったから。

それはグラスに入っていてどうやら飲み物の様なんだけど……
色が真っ黒……… いったい何を入れたんだろうか
………?

と、とりあえず勇気を出して聞いてみよう………

「レナ………それどうしたの………?」

「これですか? シャマルさんに習って私もちょっと作ってみたんです。あのノノ、よかったら飲んでくれませんかノノ?」

「えー!? ……あ、その………」

「ダメノノ………ですかノノ?」

レナのお願いに僕は困り果ててしまった。

(シヤマルさんに教えてもらっちゃったのか……………不味いな。だとしたらレナのあの飲み物も……………いや、でも作ったのはレナだしいじょうぶなのかな?……………でもあんな色見たこと無いしな……………かといって断るわけにもいかないし……………うん……………)

しかし上目遣いで頼んでくるレナに耐え切れず……………

「わ／＼分かったいただくよ／＼」

そして僕はそれを口へと運んだ……………すると……………

(あれ?見た目はアレだけど味は普通……………じゃない!!!
なんだ、この甘いようで酸味がありなおかつコクがあつてその上後からくるほろ苦い味は!!!……………ん?なんだか意識が……………)

バタッ

そうして僕は意識を失ってしまった。

光司 s i d e o u t

三人称 s i d e

所変わってここはクラナガンの繁華街。

ここに今二人の男が歩いている。

他ならぬガルシアとルークだ。

今彼らは一般人の様に普通の服を着ているのだが……………

「なあルーク、何だか道が広くないか？」

「そうかな？別に変わらないと思うけど」

二人がこう思うのには訳がある。

それはズバリ二人の服装だ。

ルークは比較的普通の服をなのだが、ガルシアの服装はまるでヤクザの様な格好だ。

おまけにサングラスまで掛けているため相当厳しい。

「ねえ、あれ誰？」

「さあ？でも間違はなくヤバイことは確かだよな……………」

「隣のヤツはなんで平気なんだ？」

なんて声が周りから聞こえ始めてる。

もちろん二人はそんな声に気付いてすらない。

するとそんな二人に近づく影が……………

「おいそこの二人、止まりな！！」

「『あゝん(？)』」

二人を呼び止めたのはこここの辺りを縄張りに行っている不良グループ。
警察に何度もお世話になっている厄介者だ。

「何か用か？」

「用か？じゃねえよ！！てめえけんか売ってんのか！？」

「ほう、おもしれえ……………」

そっぴいなながら腕を鳴らすガルシア。
その顔は素晴らしく笑顔だ。

しかしそんな彼に邪魔が入った。

他でもないルークである。

「止めるよガルシア。まったく………また光司に叱られるよ」

「売られたけんかはすべて買うのが常識だろ!!」

「それで相手をぼこぼこにしすぎて警察に突き出されたのはどこの誰だったかな?」

「そ、そんなの相手が弱すぎるんだよ!!」

「まったくガルシアはバカだからすぐ調子に乗るんだから」

「誰がバカだ!!」

「『『『』』』』……………『』』』」

いきなり口げんかを始めた二人をただ呆然と見詰める不良達。

これではどちらがけんかをふっかけたか分からない。

「お、おい！！無視してんじゃねえよ！！！」

「俺達を差し置いてでかい顔してんじゃねえつつつてんだよ！！！」

すると二人は驚いてお互いの顔を見始める。

「ルーク、俺の顔そんなにでかいか？」

「僕の方こそ大きくないかな、ガルシア？」

ズコッ

これには不良たちも呆れてこけてしまった。

そして周りで聞いていた人たちも数人こけている。

「なめてんのかああ!？」

不良グループの方も痺れをきらしガルシアに飛び掛る。

しかしガルシアはいとも簡単に受け止める。

「ルーク、こうなったらこっちは冷凍防衛でいいんだよな」

「正当防衛ね……………まあ、それならいいんじゃないかな？」

「おっじゃー！だったら……………いくぜええええ！ー！」

その時、不良グループの悲鳴が聞こえたという……………

一方その頃、機動六課にて

実はイージスのメンバーは機動六課で生活をしているため、デスクやデータも六課にあるのだ。

そしてレナのポイズンクッキングを口にした光司は六課の医務室で寝かされていた。

「光司さん……………こんなことになるなんて……………」

光司は先程から意識が戻らず寝たままになっており、そばにはレナ

がついている。

それほどレナの“あれ”は強力だったらしい。

するところまで医務室を訪ねる人が現れた。

なのは、フェイト、はやての三人である。

「レナちゃん、光司君の様子どう？」

「みなさん……………いえ、まだ目を覚ましません」

「まったく、レナちゃんもシャマルやのつてうちに聞いてくれれば
えかったのに」

「は、はい……………シャマルさんは“料理なら大得意よ”と
言っていましたから……………」

「『『あははは………』』」

実はシャマルは光司の手伝いにより料理が上達したように思えたのだが、本当は全く変わらないのだった（詳しくは、第23話参照）。

すゝゝゝ……………

「ん……………あれ？……………」じじは……………？」

「『『光司（君）（さん）！！！！』』」

ようやく光司が目を覚まし起き上がったのだった。

しかしこの時の光司はまるで別人のようになってしまっていた……………

……………

「JJJは……わたしは……誰にゃ？」

「『『『』』』』……は？』』』』」

その言葉を聞いた瞬間全員が呆然としてしまった。

いつもの光司なら絶対に言わないような言葉が彼自身から発せられたからである。

「これって……もしかして……」

「うん。もしかしなくなっても……」

「『『『『『記憶喪失！！！！？？？』』』』」

「はい……………私自身、何の記憶も思い出せないにや……………」

しかし光司の記憶喪失は記憶だけでなく、言葉遣いも変わらせてしまったように……………」

「『『『『『かわいいiiiiiiiiッ！！！！』』』』』」

「????????」

「光司君、何やそのしゃべり方!?!」

「光司君かわいすぎだよ〜」

「そ、そうですね？」

「『『『『『可愛い〜』』』』』」

かくして、光司は記憶喪失になり更には語尾が猫語になってしまったのだった。

三人称 side out

光司 side

私の名前は神谷光司……………と言つらしいじゃ。

“らしい”と言つのは、記憶喪失になってしまい自分の名前すら覚

えていないからにや。

目が覚めたとき、私の周りには4人の女性達がいたにや。

どうやら彼女達は私の知り合いのようだったにや。

そして何やら4人で話しているようにやんだけど……………私にはよく分からにやかった。

「あの……………私はこれからどうにやるんでしょうか……………?」

私が4人に話しかけると、茶色でショートカットの女性　確か、はやて……………さん、だったかにや?、その人がこっちの方に来てくれたにや。

そしてなぜかみんなは顔が少し赤かったようにや……………

「光司君……………よう聞いてな……………」

「……………（ゴクッ）」

はやてさんは神妙な顔で迫ってきたにや……………何だかこち
らも緊張するにや……………

「実はな、ここにいる4人は……………

光司君のフィアンセなんやで」

「にやにやあっ／＼／＼!?」

この4人が私のフィアンセ……………どんな人だったかにや……………
私って……………

「そ、そんな大事な人を忘れちゃったりして……………本当にごめんなさいにゃ」

「う、ううん／＼、別に光司が悪いわけじゃないから気にしないで／＼……………」

「そ、そうですね／＼……………私達のことをそんな大切に思ってくれる時点で満足です／＼／」

そう言った二人は金髪でロングヘアのフェイトさんと、同じくロングヘアで金髪のレナさんにゃ。

こんなにきれいな人たちが私のフィアンセで、本当にいいんだろうかにゃ？

「そう言えば、私はもともと何をやってたんですかにゃ？」

「光司君と私達は“魔導師”って言ってね、いろんな人達を守ったり助けたりする仕事をしてるんだよ」

そう言って説明してくれたのは、茶髪でサイドポニーにしているのはさんにゃ。

それに魔導師って……… いったいどんな人だったんだろつか怖くなってきたにゃ……………

「それよりみなさん私は『』ちよつとまったー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！』にゃ！ー！ー！ー！ー！ー！ー！」

突然扉が開いたと思うと今度は3人の女の子が飛び出してきたにゃ。

2人は青い髪のロングヘアとショートヘアの女の子で、もう一人はオレンジの髪のツインテールの女の子だったにゃ。

なんだか女性が多いにゃ……………

「『』ファイアンセってどいじうことですか！ー！ー！ー！ー！ー！ー！』」

「いや、この際やから光司君に色々吹き込んだらどうかと……………」

……そやー！」

するとはやてさんはさっき来た3人に何やらヒソヒソと話し始めたにや。

何だか嫌な予感がするにや……………

「実はな、この3人もフィアンセなんやで」

「『『……………// // /』』」

「や、やっぱりなんですかにや……………」

私の嫌な予感が的中してしまったにや……………はっ！まさか、私ってとんでもない女誑しだったりなんかしてにや……………

「でも部隊長、フィアンセって普通1人じゃないんですか？」

「そうなのかにゃ!?!」

「『』にゃ!?!」

そうしたら3人が私の語尾に気付いたのか驚きの声をあげたにゃ。

……………そんなに変なのかにゃ?

「それではやてさん、それは本当なのかにゃ?」

「いや、それは……………その『大丈夫です』ツ!?!ほんまかレナちゃん!?!」

「はい。イージスの部隊長の特記事項に多重婚は認められると明記されていたと思います」

「へえ、……………言ってみるもんやな。……………と言っわけで、
こんだけおつても大丈夫ってことや」

「にゃ、にゃあ……………」

なんだかよく分からないけどオツケーらしいにゃ。

「あゝ、さっきから気になってたんですけど、しい兄……………」

「記憶喪失なんですか……………」

「うん……………どうやらそうらしいの……………シヤマル
先生の話だと、一時的な記憶喪失らしいんだけど……………記
憶が戻るのは三日後かはたまた半年後か……………」

「それじゃあ……………もしかして光司さんはこのまま記憶が
戻らないってことも……………」

「……………」

その瞬間みんながだまってしまったにや。

私のことでみんなが悲しそうな顔をするのは、記憶が無くてもなんだからいやなきがしたにや……………

すると今度はこの空気を破るかのようにバタンツと扉があいたにや。

「光司くっく、生きてるかくっく?」

「もうガルシア!ここは医務室なんだから静かにしないと」

「大丈夫大丈夫、別にた……………」

そこまで言ってガルシアと呼ばれた人は言葉を詰まらせたようだったにや。

なぜなら……………

「『『『『』』』』……………（こんな時に入って来るんじゃない！！）』』』』」

と、言いたそうな目で睨んでいたにや……………恐ろしかったにや……………

そうして入って来たガルシアさんとルークさんにも状況を説明してあげたにや。

でもせっかく説明してあげているというのに、ガルシアさんは終始笑いを堪えていたにや。

何がそんなにおかしいのか不思議だにや〜

「にゃ〜……………」

「やっぱり記憶喪失になっても光司は光司だね〜。いつもと変わらない光景だよ」

「い、いつもこんな感じなんですかにゃ!？」

「ああ、いつもこんな感じだよ」

そう言うルークさんの顔は本当にいつもの事のように喋っていたにゃ。

やっぱり、本当のことみたいだにゃ……………」

「でも、このまま記憶が戻らないのはやっぱり嫌にゃ。みなさん何とかならないかにゃ?」

「う〜ん、何とかしてあげたいのは山々なんだけど……………」

「そうだね〜……………どうやって戻したらいいのかな〜?」

「『『』』』そうだね（〜）『『』』」

そう私達が悩んでいると……………

「みなさん、とりあえず一息入れませんか？」

レナさんが飲み物を持ってきてくれたにや。

考えてもいい考えが浮かばない私達はとりあえず一息入れることにしたにや。

「はい、光司さん」

「ありがとうございます、レナさん」

私はレナさんから飲み物を貰い一口飲んでみるにや。

すると……………

「『『『ツ!!!!』』』」

みんな一口飲んだときみんながみんな“!?”みたいな顔をしたにや。

(こゝこの甘いようで酸味がありなおかつコクがあってその上後からくるほろ苦い味は……………あの時の!?……………)

そうして私は意識を失ってしまったにや。

光司 side out

三人称 side

光司が倒れてしばらくたった頃

「す、すいません……………」

「またやっちゃうとはね、レナも気をつけないと」

「また光司君気絶してもうたな……………レナちゃんの料理、も
しかしたらシャマル以上かもしれないな……………」

「こ、今度は光司さんに教えてもらいますから大丈夫ですよ」

「ん……………ん？」

光司は回りの声のせいか目を覚ました。

そして今度の光司は……………

「あれ、みんな揃ってどうしたの？」

「『『『光司(君)!!』』』」
「『(しい)兄!!』」

もとの光司に戻ったのだ。

まるであの光司は、レナの飲み物が造り出した幻だったかのように

……………

「光司君元に戻ったんだね!？」

「よかった!!一時はどうなることかと思ったよ」

「でも、あれはあれで良かったけどな。」

光司が元に戻ったことにより、みんなの顔に安堵の色が見える。

だが、ここで一人場の悪そうな顔をしている人物がいた

ルークである。

「あの、光司……………記憶が戻った所で悪いニュースがあるんだけど……………」

「何かな、ルーク？」

「あの……………これ」

そう言って差し出したのは一枚の紙切れ。

確かに何も変わった所の無い紙だが、それは彼にとってとんでもない内容のものだった……………

「え〜つと何々……………請求書・神谷光司様、以下の金額を早急にお支払ください……………ルーク、何これ？」

「じ、実は……………」

~~~~~回想~~~~~

不良グループをやっつけた2人は近くのゲームセンターにやってきた。

ここにはありとあらゆるゲームがあり店内は大いに賑わっていた。

○パンチングマシンにて

「おいルーク面白そうなのがあるぜ」

「へえ〜、パンチの打撃力を競うのか……………ガルシアにぴったりだね」

「おうまかしとけ!!」

そうしてガルシアは自慢の右腕を振り上げ……………

「おらあああつ!!」

渾身の一撃を繰り出した。

しかしよく考えて見ればガルシアは言わば戦いのプロ。

とりわけ腕力では管理局でも右に出るものはいないほどの豪腕だ。

そんな攻撃に機械が耐えられるはずも無く……………

「ん？なんだ故障か？動かなくなったぞ」

「それに、なんだか煙も出ちゃってるみたいだけど……………大  
丈夫かな？」

「じゃあねえ、次行くか」

○ガンシューティングにて



「今度はお前向きだなルーク」

「そうみたいだね」

そういつつ銃を構えるルーク。

その目はいつにも増して真剣な表情だ。

そして……………

「ふう〜、こんなもんかな」

「お前……………ワンコインでゲーム完全クリアとかありえねえだろ」

ルークは初めに入れた一枚でゲームを最後までクリアし、ハイスコアをたたき出した。

しかし

「でも、なんだかこの銃壊れちゃったみたいなんだよね……………」

「…」

ルークの動きにやはり機械が付いて行けず、ゲームをクリアすると同時にこちらも壊れてしまった。

○ホッケーにて

「ガルシア、今度はこれやろうよ」

「何々……………このゲームは対戦できるのか……………おもしれえ。ルーク、ここらでどっちが上かはつきりさせとこじゃねえか!!」

「望むところだよ、今日こそ決着つけよう!!」

かくして、ガルシアVSルークの仁義無き戦いが始まったのだが…

……………

「おららああ!!」

ガルシアの放ったストーンは、ガルシアの魔力変換の風の力を受けリング場を突き抜けありえない機動を描きながらゲームセンターの中を飛んでいく。

そしてゲーム機器を破壊しながらルークの方へ向かっていく。

しかし、もう一方のルークも

「なんのっ!!」

向かってきたストーンをルークの魔力変換の電気で手繰り寄せ、電気をストーンに付加させて打ち返す。

すると、この電気にやられて回りにあった機械が次々にショートしていく。

そしてしばらく続いた後……………



「うん、今度はもっと丈夫な店にしようね」

「多分……………いや、絶対無いと思うよ……………」

…」

光司の嘆きは、二人には聞こえなかったと言う……………

「それにしても、しい兄記憶を無くしていた時のことは覚えてないの？」

「え／＼！？そ、それは……………どうだろうね／＼」

光司は顔を赤くさせながらそう答えた。

こうして、イージスの日常はまた一日過ぎていった。

この後待ち受ける、あの結末を知るはずも無く……………

第58話「とある部隊の日常」(後書き)

次回からは急展開です!!

果たして彼らの運命やいかに……………

それでは次回をお楽しみに!!

第59話「別れのクリスマスイブ」(前書き)

今回からいよいよ最終決戦編に入ります。

といっても短いですが……………

そしてシリアス系にしようと思ったのに後半どうしてこうなった……………

それではおつごー……!



## 第59話「別れのクリスマスイブ」

三人称 s i d e

時は12月中旬。

ここクラナガンでは最近大きな事件はなく、平和な時を過ごしていた。

そしてここ機動六課も平和な時を少し暇そうに過ごしていた。

「なんや最近事件もなくて暇やな」

「良いことじゃないですか。事件がないってことは、それだけ町が平和な証ですよ」

「です」

部隊長室には、はやてとリンの他にはやてに呼ばれた光司がいた。何でも光司に頼みがあるらしい。

「で、用は何ですか？また変なことじゃないでしょうね？」

「違う違う。折り入ったの頼みはな、光司君に料理をつくって欲しいよ」

「料理を？」

「ほら、もうすぐクリスマスやん。せやから六課でもクリスマスパーティーを開こうと思って、光司君の料理出したらみんな喜ぶと思うんよ！せやからお願いや」

「そんなのお安いご用ですよ。僕でよかったですら喜んで作りますよ」

「やったです！また光司さんの美味しい料理が食べられるんですね  
！！」

「よかったなリン。ほな光司君よろしくお願いするわ」

「はい、では僕はこれで」

そう言っつて光司は部隊長室から出ていった。

するとそれと入れ違いに2人の女性が入ってきた。

なのはとフェイトである。

「はやくちゃん来たよ」

「用っつて何はやく？」

「2人に集まっつてもらったのは他でもない……………あの日が近付  
いていることや」

「『あの日……………あぁ!』」

2人は少し考えた後、あることを思い出し2人揃っつて声を上げた。

「『光司（君）の誕生日!』!』!』」

「そう言うことや。光司君自分の誕生日毎年忘れてるから祝ってあげんな」

そう、12月25日は光司の誕生日。

彼は毎年誕生日を忘れ、毎年はやて達にどつきりパーティーを仕掛けられている。

「光司君にはクリスマスパーティーの準備って言うてあるから、それも含めて光司君の誕生日パーティーや!」

「『おー!』!」

こうして、クリスマスパーティーと光司の誕生日パーティーの準備は進んでいくのだった。

一方そのころ、とある場所にて。

ここは管理局にも知られていない星。

この星にあの男がいた　　銀色の短髪にギラリと光る怪しい  
眼鏡を掛けているあの男……………Drクロウだ。

彼はD・C事件で光司によって倒されたはずなのだが、現に彼はここに  
いる。

「ようやく……………ようやくだ、ようやく準備が整った。さあ……………  
もうすぐ幕が上がる……………期待して待っているよ、神谷  
光司」

彼のもとにはこの星を覆い尽くすようなプレデターの大群があった  
……………

時はたつて12月24日、いよいよ明日がクリスマスとなった日だ。町ではいつも通りの時間が過ぎ、この日もまたそんな風に時間が過ぎていくものだと思っていた……………

そんな中、すべてのテレビ、ラジオ等の報道機関全ての放送がストップした。

「えっ、なに故障!？」

「どこのチャンネルもやってないぞ!」

「どっつなってるんだよ!」

街中やテレビを見ていた人々が異変に気付き騒ぎ始める。

すると今度はそのすべてのテレビ、ラジオから全く同じ放送が流された。



「だが現にやつは先ほど声明を出したばかりだぞ!!」

「もういいでしょう!!口争うためにここに集まったではありません!  
せん!!」

いくら難関を越えてきた上層部の者であってもこの未曾有の危機に  
は誰しも焦りの色が見える。

いや、むしろここで焦らない方が不自然だろう。

するとここで再び声明が、今度はこの場所だけに流れた。

まるでここにいるのを分かっているかのように……

「管理局の諸君、今頃集まって無い知恵でも振り絞っている頃だろ  
う」

「なっ、なぜこんな所から流れている!?おいつ!!どこから流れ  
ているのかまだ分からのか!!」



「君たちが考えていることを当ててやるつ“私がどこにいるか”そうだね？」

「くっ！……………ヤツにはすべてお見通しと言っことか……………」

Drクロウはまるで話しているかのように管理局側の行動言い当てた。

レジアス中将はそれにただ憤りを感じてしまっただけだった。

「しかしこちらが一方的に攻撃するのも面白くない。そこでだ、この星に4人だけ招待しよう。ああ先に言っておくが、この星は君らの技術では来ることは出来ない。なのでこちらが転送ポートを用意する。明日の午前零時にこちらに付くようにした。それまでに決めておきたまえ。それではせいぜい頑張ってくれよ……………」

そしてDrクロウの声明は終わっった。

それからしばらくは誰一人として口を開こうとはしなかつた……………

しかしそんな中、沈黙を破りレジアス中將が口を開いた。

「まったく、とんだ余興だな……………あいつの言いなりなどなるものか！―すぐに部隊を編成しつ『無駄ですよ中將』ッ！？光司、貴様……………」

レジアス中將は光司のいつもとは違った威圧感に言葉を失った。

そして光司は徐に話し始める。

「おそらく、Drクロウの言ったことは本当でしょう。ですから部隊を編成したところでなんの役にも立ちません」

「くっ！……………ではどうしろと言っんだ、このまま黙って見ているしかないのか！？」

「いえ、そうは言いません……………」

光司はしばらくの沈黙の後、意を決して言った。

「僕が、僕達“イージス”のメンバーがあいつのいる星に行きます  
!?!?!」

「????ツ!?!?!」

この言葉には誰もが驚いた。

いくらイージスのメンバーだと言えど、敵の本拠地にたった4人で  
行くのはあまりにも無謀である。

「ダメだ光司!?!いくら君たちイージスでもたった4人で何ができ  
るんだ!?!」

「それでも、僕が行かないわけには行かないんだ……Drクロウ  
だけは、僕の手でけりを着けたいんだ……」

「光司……………」

光司の強い目にクロノや他の上層部のメンバーも言葉を失った。

それだけ今の彼の目は説得力があったのだ。

「……………いいんだな……………?」

「向こうでは何が起こるか分からないぞ……………」

「……………覚悟は出来ています!?!」

「では、管理局特別精鋭部隊・イージス部隊長―神谷光司―等空佐、及びイージスのメンバーはDrクロウの討伐、敵戦力の殲滅の任を命じます」

「はい、全身全霊をもって任に当たります!!」

「うむ、健闘を祈る……………」

三提督から正式な任務を承諾し、光司はその場を後にした。

光司は地上本部から帰ってきて六課に戻り、イージスのメンバーを集めた。

もちろん六課のメンバーには内緒で。

「実は、みんなに言わなければならないことがあるんだ……………」

「なんだよ、勿体振ってないでさっさと見えよ……………」

「なんだか、いつもとは違う雰囲気だね……………」

「確かに、六課の皆さんにも内緒でってことは……………」

光司の表情に、その意味を察したのか3人も真剣な表情になる。

「みんなも知ってたの通り、Drクロウが全世界に声明を出したのは知ってるね？」

「え、ええ……………」

「そのDrクロウから管理局に声明があった　一方的に攻撃するの面白くない、4人だけ招待するから、止められるものなら止めてみせる　ってね。そこで、僕達イージスがDrクロウの討伐と敵戦力の殲滅の任に着くことになったんだ」

「『』……………『』」

「それで、みんなに了解も取らずにこんな任務を承諾しちゃって……  
……………本当にごめん。この任務は僕が勝手に請け負っちゃったから、無理にとは言わない……………」

光司はメンバーに頭を下げた。

この任務は明らかに命に関わる任務。

いくら隊長とは言えこんな任務を隊員に了解無しに請け負った上、強制出撃させるなど光司はどうしてもできなかったからだ。

しかし、光司は分かっていたいなかった。

たとえ共に過ごした時間が人より少なくとも

たとえ命を落とす任務だと分かっているても

彼らは本当の“仲間”だと言つことに……………



「……………バカじゃねえのか」

「ガルシアにバカって言われちゃ、どうしようもないね。けど、本当に光司はバカだよ」

「ええ……………本当におバカさんです、光司さんは……………」

「えっ？……………みんな……………？」

光司は3人の反応に唾然としている。

そして3人はさも当然のごとく答える。

「私たち……………」  
「俺たち……………」  
「僕たち……………」

「『『仲間でしょ（だろ）』』」

「み、みんな……………」

「私たちは光司さんに助けられた命です。ですから、この命はあな

たのものです」

「僕も光司がいなかったらここにいられなかったからね。光司とならどこまでも行くよ」

「そうだな、お前がいなくなるとせっかくの模擬戦相手がいなくなるからな。それに、そんな面白そうな任務お前だけでやるなよ……  
……………相棒」

「レナ、ルーク、ガルシア……………みんな、ありがとう……………  
……………絶対に勝とう！！これが僕らの最終決戦だ！！！！」

「はい！！」

「おう！！」

「うん！！」

こうして、イージスのメンバーは堅い絆と共にDrクロウの待つ星へと向かう決意をするのだった。

そして光司は一人ある場所へと向かった。  
それはある人物に会うためだ。

「やあ、スカリエッティ」

「まったく久しぶりに会ったと思ったたらこれかね」

それはかつての異端の天才科学者、ジェイル・スカリエッティだった。

「それで、例のものは出来てる？」

「君に言われて急いで作ったが、物が物だけにこれだけしか出来なかったよ……………」

そういつてスカリエッティは装置のようなものを手渡す。

光司のそれを見る目はどこか悲しそうだった。

「それと、もう一つ……………出来ればこれを使わない事を祈るがね」

そしてスカリエッティはもう一つ装置を渡した。

それは先ほどよりも大きなものだった。

「まあ、これを使う時は絶体絶命の時かな」

「でも私は、君がそれを使わなくても事を片付けると信じているよ」

「ありがとう……………それじゃあ……………」

「ああ、幸運を祈っているよ……………」

そういつて光司は六課へと戻っていった。

そしてそれを見るスカリエッティの目はかつての面影などまったく無く、ただ一人の友人の無事を本当に祈っている目だった。

そして、出発時刻となった12月25日、午前零時。

地上本部の外に4つの転送ポートが現れた。

そして地上本部の外には多くの人々や報道人が詰め掛けている。

管理局は人々の混乱を避けるためあえてマスコミにこの事を報道したのだ。

そして管理局の職員は転送ポートまでの道を空けるようにして立ち、光司たちを待つ。

しばらくもしないうち、光司達イージスのメンバーは管理局の制服を紅くした服を着て歩いてきた。

これはイージスの制服で、光司のバリアジャケットの色を取り入れており、めったな事では着ないものだ。

「イージス部隊長、神谷光司一等空佐以下……………勇氣ある隊員達に……………敬礼！……………」

隊員達が敬礼をする中光司達は一歩ずつ歩みを進めていく。

その足は離れるこの地を惜しむかのようにしっかりと……………

光司達が装置の近くまで来ると、そこには六課のメンバーがいた。

「みんな……………こんな事になっちゃって……………  
…本当にごめんなさい……………」

「本当に、光司君はいつも無茶しちゃうんだから……………」

「『』なのは(さん)(ちゃん)に言われたく無いです……………」

……………」

「にゃ！？今の空気でそれを言うの！？」

「『』アハハハツ！！『』」

少し緊張していた雰囲気がいっもの会話で少しではあるが和やかな  
雰囲気になった。

「でもまあ、光司は昔から無茶するんだもんね……………」

「ほんま、無茶ばっかやな……………」

「確かに無茶しすぎですね」

「『』確かに(そうですね)『』『』『』『』」

「みんなしてそこまで言わなくても……………」

最早さつきまでの緊迫した雰囲気はどこへやら、いつもの六課メン  
バーの雰囲気に戻っていた。



「パパ！ー!!」

「ヴィヴィオ!?!」

すると光司のもとに泣きながらヴィヴィオが走ってきた。

「パパ……………またどこか行っちゃうの?」

「うん……………ちょっと、みんなを守るために遠くへ行かなくちゃならないんだ……………」

「いつ帰ってくるの?」

「さあ……………分からないけど、必ず帰ってくるよ」

「そうなの……………じゃあパパ、ちょっとしゃがんで」

「ん? いいよ」

光司はヴィヴィオに言われたとおりにヴィヴィオの前でしゃがんだ。

そして……………

チュツ

「ツ／／！？」

「『先を越された！！！！！』」

ヴィヴィオはしゃがんだ光司に“キス”をしたのだった。

しかも“唇”に……………そう、“唇”に。

大事なことなので、二回言った。

「えへへっ／＼、パパ、早く帰ってきてね」

「う、うん／＼……………」

「ああっ！！ヴィヴィオだけずるい、うちも／＼！！！！」

「なっ、はやてちゃん何言ってるの！？だったら私も／＼！！」

「なのはまで／＼……………だ、だったら私だって／＼！！」

「えっ、フェイトさんまで！？で、でしたら私も／＼！！」

「レナさんまで／＼……………ああっもう／＼！！わ、私だって／＼！！！！」

「ギン姉／＼……………ああでもこの際だから私も／＼……………」

「スバル何よこの際って／＼！！？……………みんなするなら／＼……………仕方ないわね、私も／＼！！！！」

結局ヴィヴィオを皮切りに、光司はその場にいた7人から一気にキスをされた。

もう何がなんだか分からない……………

「『『『『いい加減にしろよ……………』』』」

一部から発せられているピンク色の雰囲気、回りの人々は遂にこんな声まで漏らす始末だ。

「ゴホンッ………と、とにかくそろそろ行かなく  
ちや」

「『『『『『そ、そうだね（／＼／＼……………』』』』』』」

気を取り直して光司達は転送装置の前に立つ。

「それじゃあみんな……………行ってきます……………」

「本当に光司君、気をつけてね……………」

「絶対に……………帰ってきてね光司……………」

「ほんま……………帰って来んかったら承知せえへんで……………」

「兄さん……………無茶しないでね……………」

「しい兄……………しい兄ならきつと大丈夫だよね……………」

「光司さん……………私、信じていますから……………」

「兄さん……………僕らの兄さんなら、きつと帰って来ますよね……………」

「お兄ちゃん……………頑張つて下さい……………」

「パパ……………行ってらっしゃい……………」

それぞれ別れの言葉を告げると、光司達は装置に足を踏み入れる。

すると間もなくして体が光に包まれていく。

「皆さん、私達は必ず帰ってきます。だから、信じて待っていてく

「ださい」

「まあ、みんないるんだしなんとかなるよ」

「たく、ルークはいつもその調子だな。安心しろ、何が起ころうとこいつらは俺がきつちり連れて帰る!!」

「『『『ガルシアだと心配だな……………』』』」

「何だとっ!!???」

「あはは、心配しなくてもみんなは僕が守って見せる。それじゃあ

……………」

それを最後に、光司達はその場から転移していった。

世界、仲間、愛するもの、その全てを守るために……………」

第59話「別れのクリスマスイブ」（後書き）

今回は本拠地でのバトルが中心となります。

で、そんなに長くないと思いますが………と言っか逆にすぐ終わってしまうような………

まあ、何とか頑張ります。

第60話「決戦のクリスマス〜前編〜」（前書き）

今回から決戦です！

今回は前編ですのでそんなに闘いません。

そして後半はガルシアのポケが炸裂してます……………

それではどうぞー！！



## 第60話「決戦のクリスマス〜前編〜」

光司 side

みんなに見送られ僕らは転移ポートでDrククロウのいる星に転送された。

その星は生物の気配など無く、目の前には巨大な城のようなものが不気味に建っていた。

「恐らく、あそこにヤツがいるんだろうね」

「はい、まず間違いないでしょう」

「と言うか、あそこになかったらどこにいるんだろうね？」

「違いねえ」

と、全く緊張感の無い会話をしていると回りから何かの気配がし始

めた。

恐らく、1体や2体どころではなく数百はいるだろう。

「みんな……………準備はいい？」

「はい、いつでもいいです……………」

「僕も……………大丈夫だよ」

「こっちは準備万端だ！……………さっさと始めようぜ」

どうやらみんなとつくに準備していたようだった。

だったら……………

「目的地は目の前に見えているあの城。あそこまで一直線に進んでいくよ！…！」

「はい……………」

「うん……………」

「おう……………」



「よし、みんな行くよ!!!」

そうしえ僕の掛け声とともに僕たちはあの城へ向け一直線に進んでいった。

光司 side out

三人称 side

とうとう最終決戦の火蓋が切手落とされた。

イージスのメンバー4人に対し向こうの勢力はおよそ200。

さすがに手こずると思いきや……………

「『『』』はあああああっ！……！……！」

光司達は臆するどころか目もくれず、ただ薙ぎ倒して目的の城へ進んでいった。

だが、向こうも倒されると何処からともなく現れ光司達の行く手を阻む。

その数は減るどころか、逆に増えていつているようである。そう光司達は苦しめた。

「くっ……………思っていたよりキツイかな……………ザックス！  
「！」

「確かにな……………バル、モードチェンジだ！……！」

All right!

光司はザックスをストレイダーフォームに、ガルシアはバルバトロスをモード2に変え……………

「『はあっ!!!!』」

先程より数段威力が勝ったそれぞれの武器で回りの数体を一気に薙ぎ払った。

それに負けじと、ルークとレナも次々に敵を倒していく。

1869

「しかし切りがねえな!……………仕方ねえ、活路を開くか……………  
ルークあれいくぞ!!!!」

「おっけー、いつでもいいよ!」

ガルシアとルークは互いに背中を預け息を合わせる。

そして二人は城の方にそれぞれの片腕を翳し、魔力を溜め始めた。

「見せてあげるよ、これが光司の技を見よう見まねでやってみた！  
！！」

「俺たち初の合体攻撃！！！」

溜まってきた二人の魔力はガルシアは緑色に、ルークは黄色にそれぞれ輝きを増す。

「ルーク、そろそろいくぞ！！！」

「うん、いくよガルシア！！！」

そして息を合わせ二人同時に溜まった魔力を爆発的に前に打ち出した。

「『ライジングテンペスト！！！！』」

爆音と同時に放たれた魔力は、螺旋状に渦を巻きながら吹く暴風で

更に雷も帯びているようだった。

その雷を帯びた竜巻は一直線に城の方へ進み、路線上にいた敵をすべて薙ぎ払い活路を開いた。

「二人ともやりますね！」

「あはは………あれが、見よう見まね………？」

二人の活躍にレナは驚嘆の声をあげ、光司は呆れて言葉が出なかった。

「と、とりあえず城へ急ごう……！」

「『了解……！』」

そうして光司達は急ぎDarkクロウの待つ城へ急ぐのだった。



三人称 s i d e o u t

ガルシア s i d e

俺とルークのコンビ技で何とか城にたどり着いた俺達だったが、城の中はさっきと打って変わって静けさだけが支配していた。

1872

「まったく、走っても走っても何にもねえな！」

「そうだね……………みんな逃げちゃったのかな？」

「そ、そんなことは……………」

こんな時でもルークのマイペースぶりは変わらず、あんなことを言

っている始末だ。

まったく能天気なヤツだぜまったく……

「おかしいな……………ッ!?みんな、どうやら彼が姿を現したようだよ」

「『ツ!!??』」

光司の声に俺達がそっちの方を見てみると、そこには玉座に座った一人の男がいた。

そいつは前と同じ様な気に食わない笑みを浮かべていやがった。

「いやはや、やはり君達が来たのかね……………、まあ、すべては予想通りだがね」

「『『『『DrkCrow!!』』』」

あいつは俺達を見ても全く動じず、相変わらず玉座に居座っていた。

「そこ動くなよおおー!!」

「ッ!? ガルシア早まっちゃだめだ!!」

光司の言うことを無視して俺はあいつに飛び掛った。

だが……………

「ガルシア、君は実に単純だ」

「くうう!!……………う、動かねえ……………」

俺の体はあいつの目の前で止まりそれ以上動けなかった。  
俺は全身に力を込めたがそれでもやはり動かなかった。

「どつなつてやがるんだ……………!!」

「ガルシア!!とにかくそこから離れるんだ!!」

「……………ちっ!!」

俺は光司に言われやつの傍から離れた。

だが不思議な事に離れる時には簡単に離れる事が出来た。

「やっぱりアレが厄介だね……………」

「光司何か知ってるの？」

「うん……………一度だけ見たことがあるんだ……………」

そう言う光司の顔は何だかいつもと違って暗い表情だった。

「どうやら、あいつの周囲に入ると動きが封じられるらしいんだ。それがどんな仕組みか分からないけど、恐らく重力やベクトル操作による……………」

光司は淡々とあれについて説明してくれるんだが……………俺にはさっぱり分かん。

重力？ベクトル操作？……………頭が痛え……………

レナとルークはうんうん言いながら聞いているが……………も

う俺は我慢できねえ!!

「ああもついい!!そんな説明よりどうすんだよこれから!?!」

「とにかく、あいつから距離を取って闘うしかないな……………」

「そうか……………だったら!!!!」

俺は瞬時に手に魔力を溜め始める。

そして魔力はさっきと同じように螺旋状に渦を巻き始め……………

「これで……………どうだっ!!!!」

俺が放った魔力の竜巻は一直線に進みあいつを意図も簡単に飲み込んだ。

これを喰らって無事じゃあねえだろうと思ったが……………

「ガルシア、君はちっとも変わらないね。まったくもって単純だ」

「『『『ツ！？』『『『」

あいつは何事も無かったかの様に浮いていた。

そう、“浮いて” いやがたんだ……………さっきまで玉座にふんぞり返っていたはずのあいつが……………

その証拠にあいつの後ろには俺が放った竜巻による大穴が開き、ヤツが座っていた玉座も跡形もなく消し飛んでいた。

「ど、どくなつてやがるんだっ！？」

動揺を隠せない俺に対し、ヤツは坦々と説明し始めた。

「簡単なことだ。私の周りの半径1メートル以内には何物も入ることとは出来ない。彼の言う重力やベクトル操作等の生易しいものでは

なく、すべてに対する拒絶だ。故に無重力となり私は浮いていら  
るのだ」

俺にはさっぱり訳が分からなかったが、どうやらそう言っているらしい……

するとここで光司が意義を唱えた。

「ちょっと待て、すべてに対する拒絶により無重力になったと言っ  
のに………どうして生きていられるんだ!？」

光司はまるで有り得ないことでも聞くようにあいつに向かって叫ん  
だ。

それが一体なんだって言うんだよ、空気が無い訳じゃあるまいし……

………

「さすがに察しがいいな………その通り、私は人の体では  
ない。いや、人の体を捨てたのだ!……!」

「カカカツ!!!」 光司・レナ・ルーク  
「????????」 ガルシア

俺はまた訳が分からなくなった。

さっきの話からいったいどう展開すればあいつが人間じゃない話になるんだ？

確かに人間離れたやつだが、今それを言わ無くてもいい気がする

.....

しかもまた俺だけ置いてけぼりになってやがるし.....

...面白くねえ!!

なんて俺がブツブツ文句を言っていると

「口で説明するより目で見た方が早いだろう。見たまえ、我が技術の真髄を!!!」

そう言った途端、やつの体からは皮膚が剥がれ落ち、その下からどす黒い金属のようなものが顔を出した。



人間を捨てたって………そう言うことかよ………

「これが私の技術の粋を集めて作った最高傑作だ。さあ、存分に楽しむとしようかー!!」

そしてアンドロイドと化したあいつが俺達目掛けて突っ込んできた。

第60話「決戦のクリスマス〜前編〜」(後書き)

次回はDrクロウ戦です。

多分長くなると思います……………

そして最後には○○○○な展開が!!

次回もお楽しみに!!!!!!

第61話「決戦のクリスマス〜中編〜」（前書き）

今回もバトルメインです。

しかし最後は少しシリアスが混じってます。

なんかシリアスって書くのが難しいです。なので最後の方は文章が

……

とにかくどどぞー！

## 第61話「決戦のクリスマス〜中編〜」

三人称side

光司達とDrクロウとの闘いがしばらく続いていた。

しかし、Drクロウの拒絶空間のお陰で彼らはまったく近付けず苦戦していた。

「くっっ！！避け続けるしかないの!?!」

「ハッハッハ、さあどこからでもかかってくるまえ!?!」

Drクロウは戦闘中その不適な笑みを浮かべながら向かってくる。

が、光司達は解決策を見つけられぬままただ避け続けるしかなかった。

「おいっ！！本当に何も出来ないのかよ！？」

「確かに……………このままでは消耗戦になるだけです……………どうします光司さん？」

「せめて……………あの拒絶空間が無くなればなんとか出来るかも  
しれないんだけど……………」

光司は考えを巡らせながらDrク로우から距離を取った。

するとここで光司はあることに気付く。

（考えてみれば、拒絶空間なんてものが簡単に出来るわけがない。  
仮に出来たとしても相当なエネルギー量が必要だ。だとすれば、装  
置は確実に高熱を帯びているはず……………）

ふと光司がDrク로우の方を見ると、本体から微かだが銀の粒子の  
ようなものが見えた。

「装置はあそこか、だったら！！！」

装置がDrク로우本体にあると分かった光司はフォースフィールド

を発動させて、自身のフィールドに高熱を帯びさせていく。

その温度は上がり続け、終には1000 程になり周囲を熱気が包み込んだ。

「みんな、すぐに離れて!!!!」

「『『了解!!!!』』」

光司に言われずに3人は距離を取る。

そして光司はフォースフィールドを発動させたままDrクローウの周りを回っていく。

「ハッハッハ、いくら炎を纏っていても私に届かなければ意味がないぞー!」

「それは……………どうかな!!!!」

「何だと……………ッ!？」

余裕の表情から一変、Drクロウの表情が曇り始めた。

それもそのはず、Drクロウの拒絶空間が揺らぎ始めたのだ。

「いくら拒絶空間と言ってもDrクロウ本体部分は物質。と言っているとは温度があると言っている……………つまり!！」

すると突然Drクロウの本体が爆発した。

しかしこれに驚いたのはDrクロウ本人だけではなかった。

「い、一体どうなってやがるんだっ!？」

「そう言うことが……………」

「そう言っことでしたか……………」

分からなくなっているガルシアに対し、ルークとレナは光司の考えたことが理解できたようだった。

「何だよまた二人だけ理解しやがって！！俺にも分かるように説明しろよ！！」

まだ分からないガルシアにルークとレナは渋々説明をする。

「えつとね、つまりは光司が周りから熱を加えたことによってDrクロウ本体にあった拒絶空間の発生装置が壊れちゃったってことだよ」

「だから、温度とその装置とどんな関係があるんだよ！？」

「おそらく光司さんはこう考えていたんだと思うわ。“拒絶空間の発生には相当な大きさのエネルギー量が必要になるから、きつとその装置は高熱を帯びているはず。その温度を更に上げてやれば装置はオーバーヒートを起こし壊れるんじゃないか”って」



「な、なるほどな……………でもよう、拒絶空間に温度は通るのか？」

「まあ拒絶空間自体には温度は通るか分からないけど、D r k クロウ本体には通ったと思うよ。どんな物体でさえ絶対に温度ってものはあるからね」

「そ、そんなもんなのか……………でも、要するにこれであいつに近づけるってわけだな！！！」

「通りの説明を聞き終えたガルシアは気を取り直し再び武器を構える。」

光司の方もD r k クロウの方から戻ってきてフォースフィールドを解除して3人の元へ戻り同じく武器を構える。

するこ

「いやはや、さすがは神谷光司と言ったところだな……………この  
ワールドの発生装置を破壊するとは……………だが、これ  
くらいでなければ面白くない!!!!」

Drクロウの中から何事もなかったかのように歩きながら言った。

そして光司によって高温に熱せられたボディは真っ赤になっていた。

「あれだけ熱したのに……………まだ立っていられるなんて……………  
……………」

「この金属は特別製でね、ちょっとやそつとじゃ壊れない。さあ、  
第2ラウンドと行こうか!!!!」

Drクロウは冷えてきたドス黒いボディを動かし一直線に光司達の  
方へ向かっていった。

そのスピードは先程よりかなり速くなっていた。

「おっと!!……………何だか面白くなってきやがったぜ!!!!」

「そんなこと言ってる場合じゃないと思うんだけどっ!!」

光司達はスピードの上がったDrクロウの攻撃も簡単に避けられたが、まだ警戒しているため距離を取り続けていた。

そんな中、やはりガルシアが一番先に攻撃をしかけた。

「はあああああっ!!!!暴風……………絶覇斬!!」

ガルシアは凄まじい暴風を纏わせた斧を振り下ろす。

その攻撃は今までのどんな相手でも軽く吹き飛ばしていた……………

だが

キイイイイイン

金属同士がぶつかり合う甲高い音が辺りに響き渡る。

それは同時にある驚愕の事実を明らかにしていた。

「う、受け止めやがっただと!？」

「やれやれ、だから言ったろう。この金属は特別製だと。物理攻撃などまず通らない……………そしてっ!！」

「ッ!？」

今度は逆にDrクロウの方がガルシアの攻撃を防いでいた手でガルシアを吹き飛ばした。

ガルシアはこれに驚くも、何とか空中で体勢を整え着地した。

「その程度の衝撃では私を吹き飛ばすなど到底無理だね。さあ、精

々私を楽しませてくれー!!」

そしてDrkクロウはガルシアの方へ素早く移動し武器も持たず肉薄していく。

「くそっ！固えなこいつー!!……………ッ!?ほつとー!!」

「ガルシア、うまく避けてねー!!」

するとここでルークがガルシアを援護し始めた。

「グレイガー、カートリッジをー!!」

All right . Magnum cartridge loading

ルークは普通のカートリッジではなくグレイガー専用のカートリッジをロードする。

これは普通のカートリッジより格段に魔力が上がるカートリッジだ。

「マグナムカートリッジ装填完了……………いくよ、レーザーアアアア……………バレット！！！」

ルークの放った弾丸はガルシアに手を伸ばしていたDrクロウの手に当たり、ギリギリの所でガルシアを助けた。

「って、おいルーク！！今の鼻にかすったぞ！！！」

「仕方ないでしょ、これ上手く狙えないんだから助かっただけ感謝してよね！！！」

しかしこれに驚いたのはガルシアだけではなかったようだ。

「ん？おかしいな、今くらいの攻撃なら軽く弾き返せると思ったんだが……………」

Drクロウは自分の手を動かしながら不思議そうに呟いた。

確かに今の攻撃には腕を止めるだけの攻撃力は無かった。  
だが運命の女神はこの時光司達の方に微笑んでいた。

そしてその事に気が付いたのは他ならぬ光司であった。

「なるほど……………そう言うことが……………」

「また一人で納得してやがる」

「でも今回は僕達には分からないよ」

「どう言う事なんですか。光司さん？」

「それは人間の体の作りに関係してるんだ」

「『『』』体の作り??』』』」

「うん。さつきルークの弾丸があたった肘の内側の部分は、じょうぶ上腕骨  
つないじょうが内上顆つないじょうがって言うって体の中で神経が比較的浅い所を通っているんだ。  
それで、この神経を刺激すると腕が一時的に痺れてしまうからガル  
シアへの攻撃を防ぐ事が出来たってこと」

「『なるほど』」

「さっぱりわかんねえ……………」

光司の説明にレナとルークの2人は分かったようだったが、相変わらずガルシアは理解に苦しんでいた。

「そう言うこと。いくら特殊な金属で作っていても、人間と同じ構造には変わりが無いんだよ!!」

光司は説明を終えると再びDrクロウの方へ向き構えなおした。

するとDrクロウの方も理解できたようで徐に口を開く。

「なるほどなるほど、全く持って面白い。しかしアレだな、細密に作り過ぎて人間の特性まで取り入れてしまうとは、私とした事か？ なんだ失敗をしたものだ。まあ、君らにはちょうど良いハンデになるかもしれないが」

これには光司も返す言葉が無かった。

確かに今のDrクロウは構造的には人間かもしれないが、そのボディは特殊な金属で覆われているため別に弱点という訳ではない。

今の状況を打破するまでには至らなかったのである。

(どうすればいいんだ……………今のあいつに物理攻撃はまるで



効かない。かといって僕らの魔法攻撃が特別効くとも思えない……  
……何か弱点は無いのか!?)

「万策尽きたと言ったところか……ならば、こちらも  
本気で相手をしよう!!」

「ッ!?は、速い!!」

Drクロウは先ほどよりもずっと早いスピードで光司に襲い掛かってきた。

光司もそのスピードに驚いたが何とかザックスを構えていたので受け止める事が出来た。

しかし、受け止めた衝撃で数メートルほど押し流された。

「くっ!!……ここまで押されるなんて……本気って言ったのは伊達じゃないか……」

「ハッハッハッハ、私の本気はこんなものではない!!」

するとDrクロウは光司に攻撃している側とは反対の腕を光司に向

けた。

その腕は光司に向けられる間に先が手の形からガトリング砲に変わっていた。

「喰らうがいい!!」

「ッ!? 危ない!!」

Flash move

光司は危険を察知し、すぐさまフラッシュムーブを発動させ、ガトリング砲の弾丸を紙一重のところまで避けた。

しかし

「ッ!? .....あれでも完全に避けきれなかったみたいだ.....」

「ッ、光司さん!?!」

「おい、大丈夫か!?!」

光司は2、3発バリアジャケットを貫いてガトリング砲の弾丸を喰らっていた。

いずれもかすっただけだが、戦闘での疲労に加え一層不利になってしまった。

「あのガトリング砲……………ただのガトリングじゃないね……………光司が避けられなかった弾の速度と言い、バリアジャケットを貫通した威力と言い……………」

「そうだろう、そうだろう。なにせ、この弾丸も特別製で以前のよりも改造を施したからね」

「それは……………確かスカリエッティに撃った……………」

「ああその通りだ。以前の質量兵器の弾丸と魔法のハイブリットに彼自身の技術・AMFを加えた最強の弾丸さ」

「くっ……………厄介な……………」

「やあ……………どんどんいぐぞ……………」

Drクロウはもう片方の腕もガトリング砲に変え、光司達に狙いを定め攻撃してきた。

するとここでも光司達の前に一人の陰が立ちはだかる。

三人称 s i d e o u t

ルーク s i d e

僕らは作られた。

ただ彼の道具として、ただ闘うために産み出された存在。

でも

“彼”が救ってくれた。

そしてそんな僕でも、仲間が出来た。

僕を“人”として見てくれる、人として扱ってくれる、そんな人たちが。

そして僕はそんな人たちを守る仕事に就いた。

そんな仕事に就くことが出来たのも“彼”のおかげ。

みんなみんな“彼”のおかげ。

今ここにいるのも、“彼”のおかげ。

だから、今度は僕がみんなを助ける！！！！

僕は急いでみんなの前に立ち、相棒を構える。

「ここは僕に任せて！！」

「ル、ルーク無茶だ！！」

「大丈夫、大丈夫。グレイガー、いくよ！！！！」

<All right . load cartridge >

僕は片方ずつ4発のカートリッジをロードして魔力を最大限に溜める。

「まだだ……まだいける……そうだよね相棒  
！！」

<Of course . It is possible to s  
till go . >

魔力が溜まっていく度、僕にもグレイガーにも負担が掛かっていく。

でも……それでも……守りたい。

僕はどうなったってかまわない

みんなを……守れるなら……！！



「はあああああああ！！マルチプル・バレット！！！！」

僕の放った魔力弾は幾つにも分裂し、Drが放った弾丸より数倍の数になった。

でもこれでもまだダメだって分かってる。

だから！！

「はあああああああ！！！！！！！！！！」

僕はトリガーを引き続けた。

何度も、何度も……………

僕の魔力弾は確実にDrクロウの弾丸を落としていくが、やはりDrクロウの弾丸の方が威力が大きく全部は落とすきれなかった。

それでももちろん弾丸が当たっていく……………

手や体や足が悲鳴を上げている。

もちろん痛みも感じてきた。

激しい痛みだった。

今までに感じた事の無い痛みだった。

でも……………どんなに弾が体に当たろうと……………どんなに激痛で意識が飛びそうになっても……………僕はトリガーを引くのを止めなかった。

無我夢中になってトリガーを引き続けた。

今、僕の背中にいる、大切な……………とても大切な“中間達”を守る“イージス”（盾）となりたいから……………

光司  
side

ルーク  
side  
out

.....

ルークが僕達の前に立ちはだかった時にはすでに遅かった。

たくさん銃声が鳴り響き、僕達はただ立ち尽くすしかなかった。

しかも銃が炸裂する時の激しい閃光によって僕たちは目を開けることさえ出来なかった。

しかし不思議な事に1発もDrクロウの弾丸がこちらに来る事は無かった。

そしてしばらくして、弾が切れたのか銃声は収まり静かになった。

僕達が目を開けてみると……………

「ルーク………」

そこには、血だらけになりながらもまだ立ち続けているルークの姿があった。

1908

僕たちは慌ててルークへ駆け寄る。

ルークの体は何発も銃弾を浴び血で真っ赤になっていた。

それにグレイガーも至る所に弾丸を受けていた。

「ルーク、ルークしっかりしろ!!」

「一人だけかつこつけてんじゃねえよ!!」

「ルーク、生きてますよね!?!生きてるんでしょ!?!」

僕たちの声にルークは途切れ途切れだけどいつもみたいな陽気な声で答えてくれた。

「アハハ……… ちょっと無理しちゃったかな………

……… ねえ、僕はみんなを守れたのかな? …… みんなの役に立てたのかな………?」

「う、うん!!……… もちろんさ!」

「そっか……… それは………

……… よかつ……… た」

「『ツ!?!ルーク!?!………!?!』」

僕らの叫びは虚しく辺りに響いた。

光司 side out

第61話「決戦のクリスマス〜中編〜」（後書き）

次回はいよいよ決着になります。

何かあつけない終わり方になるかもしれませんが、お楽しみに！！



第62話「決戦のクリスマス〜後編〜」（前書き）

今回でいよいよ決着です!!

でも若干こじつけがましい気もするので納得されない方も多いと思います……………

そんなこんなでござ!

そしてBGM、JAM Projectで『未来への咆哮』

## 第62話「決戦のクリスマス〜後編〜」

光司 side

ルークが身を呈して守ってくれたお陰で、僕達はあの攻撃から助かることができた。

ルークと言う大切な仲間の犠牲を払って……………

「ルーク！おいルーク！！返事しろよ！！まだ俺との決着が着いてねえだろ！！！」

「そんな……………ルークが……………」

レナもガルシアもかなり動揺している。

無理もない……………仲間が目の前でこんなになっただら普通焦ってしまふ。

でも、こんな時こそ冷静にならないと！！

僕はルークの状態を見極めるため、Drクロウへの溢れる怒りを押さえつつルークの状態を観察した。

「2人ともちよつと退いて！……………出血が酷い……………それに脈も弱い……………」

「ルークは、ルークは死んじまってなんかいないよな！？大丈夫だよな！？」

「どうなんですか……………光司さん……………」

「うん……………はっきり言うと……………ほぼ死んでる。でも、微かだけど息はある」

「それって……………」

「まだ……………助かるってことだよな！？」

僕の言葉に2人の顔は一気に明るくなった。

けど、問題はまだ解決してない。

ルークの容態は思っていたより酷く、正に一刻を争うほどだった。

「レナ、ガルシア……………僕がルークを何とか治療している間、時間を稼いで欲しいんだ……………」

「……………任せてください!!」

「ルークを頼んだぜ光司!! つつても今の俺じゃあ、時間を稼ぐより……………あいつをぶっ飛ばすことしか考えてないけどな!!」

「それは……………私も同感ですね。光司さん、早くしないと私たちが倒してしまいますよ」

「それは困ったな、僕もこの怒りをぶつけないと気がすまないんだ……………でも2人とも、くれぐれも気を付けてね」

「『お互いに(な)!!!!』」

そして僕はルークの治療へ、2人はDrクロウの方へそれぞれ向かっていった。

光司 side out

レナ side

光司さんはルークの治療へ、私達はDrクロウの足止めをすることになった。

そして光司さんはルークを抱え少し離れた場所へと向かった。

同じ頃、私達もDrクロウの下へとたどり着いた。

「話は終わったのかな？まあ彼があんな状態になったことで君達の勝利がまた遠くなった今となっては、意味はないと思うがね」

「ほざきやがれ！！お前はこの俺がぶっ飛ばす！！」

ガルシアはさっきからずっと声を荒げている。

よっぽどさっきのことが許せないのね……………

でも、あんまり頭に血が上りすぎてるのはこっちが不利になるだけだわ。

「ガルシア、少し頭を冷やして」

「ああ！？……………ああ、分かった……………って冷たっ！！」

実は私はガルシアの頭にカリバーンを宛てて若干冷気を出してみた。

文字通り頭を冷やしてみたわけね

「まあそんなことは置いといて……………どうするの？」

「関係無えよ、力で押し伏せるだけだ！！」

「まったくそれじゃあダメだって何度言った『それでも！！俺はあいつをぶっ飛ばしてんだ！！』……………ガルシア……………」

この時のガルシアはいつになく真剣な眼差しだった。

「でもダメよ。あなたがいくら頑張ったって、ほとんど勝ち目はないわ」

「確かにそうかもしれないねえ……………だが俺は『だから!』ッ!」  
「?」

「あなたと私、コンビでいきましょう」

「面白え、いつちょやってやるうじゃねえか!!!」

ガルシアは元の勢い溢れる目に戻り、その巨大な斧を振るった。

私もカリバーンを構え、手に力を入れる。

「ねえガルシア、ルークとやったあの技私とも出来ない?」

「ん?……………まあ物理的に考えれば出来なくもないよな」

「あなたから“物理的”なんて言葉が出るなんて思わなかったけど、

やってみるわよ！」

「おう、任せとけ！！！」

そして私達は互いの腕に魔力を溜めていく。

時間がたつにつれ私は青色、ガルシアは薄緑色の魔力が激しく溜まっていく。

するとこれに気付いたのかDrクロウが私達目掛けて走ってきた。

「また何かされては面倒だ。2人まとめて始末してくれよう！！！」

Drクロウとの距離が縮まるにつれ私達に緊張の糸が走る。

あいつがこちらに来るのが早いか、はたまたこっちの魔力が溜まるのが速いか……………

そして



「よし、今よ!!!」

「いつけええええ!!!」

「『ブリザード・テンペスト!!!』」

私達の放った魔力はルークとガルシアの時のように螺旋状に渦を巻いて、やつを呑み込んだ。

やはりあまり効かないのではないかと少し不安になったけど、勝利の女神はまだ私達を見放してはいなかった。

「ぐぐつ!!」……………まさか、これほど協力的な冷氣とはね……………  
……………計算外だ……………」

私達の放った攻撃はDrクロウのほとんど全身を凍らせ、上手く足止めすることが出来た。

「ガルシア、今よ!!」

「おうよ!!!!」……………疾風、連撃刃!!」

ガルシアは一瞬でDrクロウの懐まで行き連激を繰り出した。

氷付けになってあの攻撃を喰らってはひとたまりも無い。

私達はそう確信したが、今度はそうはいかなかった。

それは、氷が碎ける音と共に明らかになっていった……………

「そ、そんな……………」

「マジかよ……………」

「言ったはずだ、私に物理攻撃は効かないとね……………」

Drクロウは少し前と同じ顔で私達を見ていた。

そして更に悪い事に……………」

「ッ！？バル、大丈夫か!？」

<No problem. However, it is a little difficult any further (問題ない。だが、これ以上は少し難しい) >

「くそっ!!……………こんな時に!!！」

ガルシアの愛機“バルバトロス”が限界を迎えていた。

確かに私達のデバイスはちょっとやそつとでは壊れないように出来ているが、それさえ限界を迎えさせるほど、相手のボディは硬い事

を明確に表していた。

同時に私達にはもう、打つ手は残されていないことも示していた……

「そんな……もう打つ手が……」

「おいっ！！諦めてんじゃねえよ！！」

「ハッハッハッハ！！諦めたまえ、どう足掻こうと君たちに勝ち目は『そんな事は無い！！！！』ッ!?!?」

すると、あいつの言葉を遮るようにあの人が颯爽と私達の前に現れた。

私の思い人の、あの人が………

「『光司さん！！！！』」

「待たせたね2人とも！！」

「光司、ルークの方は!?!?」

「回復の魔法をかけて今は安静にしてる。まだ予断は許されないけど、なんとか一命は取り留めたと思うよ」

「そうか……………そうかそうか！…ルークは助かったんだな！？」

「うん、でも戦闘にはもう……………」

「ルークが助かっただけで十分だ！…こいつは俺達で倒そうぜ！」

「ああ！！…いこう2人とも！！」

「で、でも光司さん！！もう、打つ手が……………」

ルークが一命を取り留めたことに喜ぶ私だったが、すぐに我に返り辛い現実を目の当たりにした。

あのガルシアの攻撃でさえ、デバイスが壊れるほどの攻撃でさえ、手傷を負わさせる事さえ出来なかった。

でも、それなのにあの人は、いつもみたいに私達に笑いかける様に言ってくれた。

「大丈夫、3人の力を合わせればきつと勝てるさ!」

「こ、光司さん……………」

「でも光司、俺はもう……………」

そう、ガルシアのデバイスはもう使えない。

いくらガルシアだって自分の相棒が壊れるのを分かって闘ったりはしないはずだ。

でもガルシアだってもう片方の相棒ルイックのために闘いたいと言う気持ち  
は人一倍のはず。

その2つの思いに板ばさみになって、ガルシアはとてもしりきれない  
表情を浮かべていた。

そんな中、光司さんは真剣な表情に戻って言った。

「大丈夫、僕に作戦があるんだ。これがもし効かなかったら、本当に僕達に勝ち目は無いかもしれない……………だから、心して聞いてくれ」

そうして、光司さんは作戦の内容を話してくれた。

レナ side out

三人称 side

光司はある作戦を考えた。

これは最早、彼らにしか出来ないほどのとんでもない作戦だった。

そう、彼ら“4人”にしか……………

「さて、そろそろ終焉だ。君達に最早方に一つの勝ち目もない。あきらめたまえ」

「そう言っていていられるのも今のうちだぜ！！この変態マッドサイエニティストが！！」

「ほほう。ガルシア、いくら君でも丸腰で私を相手にしようかというのかね？」

「うせええ！！いくぞ！！」

ガルシアは武器も持たずDrククロウに突っ込んでいった。



「はあっ！！たあっ！！てりゃあ！！」

ガルシアは格闘技選手顔負けの激しいラッシュでDrクロウを圧倒していく。

しかしDrクロウの方はその攻撃をいとも容易く避けていく。

彼が自身の体を人間の構造に忠実に作ったのは、こういった人間ならではのスムーズな動きを自身の体で実現させるためだ。

もちろん、各種の身体能力は人間や人造魔導師や戦闘機人よりも遙かに勝っていた。

ガシッ

「くっ！！」

そしてとうとうガルシアの攻撃はDrクロウに受け止められてしまった。

もちろんガルシアは拳を引き戻そうとするが、ガルシアの力を持ってしてもその拳は離れなかった。

「終わりだ……………ガルシア……………」

「……………フッフッフ……………」

「何がおかしい？」

「……………終わりなのは……………お前だ！！！」

実はガルシアは右手に魔力を前もって溜めていたのだった。

「まだ分からないのかね？私にそんな攻撃などっ『分かってんだよそんな事！！』……………では、いったいどう言う事かな？」

ガルシアの意図が全く分からないDrクロウは、からかう様にお手上げのポーズを取った。

しかしすでにこの時から、“彼”の作戦は始まっていたのだった。

「確かに俺の攻撃じゃあテメエはぶっ飛ばせねえが……  
…違うモンならぶっ飛ばんだよ!!……たとえ  
ば、俺とかなあ!!！」

ガルシアは溜めていた魔力を一気に開放しDrクロウにぶつけた。

Drクロウには相変わらず何の効果もなかったが、今のガルシアにはそれが狙いだった。

普通、あるものを押した時押されたものは押したものに同等の力を加えている。

これが作用反作用の法則だ。

今の状態でガルシアが放った魔力の反作用をガルシア自身が受けたとするとどうなるか。

答えは………

「何！？逃がしただと!？」

ガルシアが放った魔力の衝撃のおかげでガルシアはDrクロウから離れられる事が出来たのだった。

「痛つうう！！腕が折れちまったぜ全く……………今だ光司！！」

「ああ！！」

Drクロウが慌てて声のした方を見上げてみると、光司が頭上に太陽の様に燃える真つ赤な球を作り上げていた。

そしてガルシアは上手い具合に光司の真下辺りに移動し、光司の攻撃が喰らわない位置にいた。

「喰らえ！！灼熱の業火の意思よ……………全てを滅する日輪と成せ！！サン……………フレア……………インパクト……………！！！！！！」

灼熱の太陽がDrクロウを襲う、周りの壁や床は焦げるより先に溶け出して周りは文字通り灼熱地獄と化した。

光司の方もこれには多量に魔力を消費したためその場に片膝を付く。

だが彼はこれで終わるなどと言う考えは毛頭無かった。

「はあはあはあ……………まだ、倒してはいないだろうな

……………」

「……………」

時間がたつにつれ段々と灼熱は引いていき、その場の様子が分かるようになっていった。

壁はほとんど崩壊しその役割を微塵も果たしておらず、床には解けて冷え固まった金属のようなものが大きなクレーターを作っていた。そして、その中心に佇む人影が1つ。

真っ赤になった体をなんとか動かし、彼は数歩歩いた。

「拒絶空間を破壊した時より温度が増しているようだが……………この金属は一度固まると解けないんだよ……………君はガルシアに隙を作らせ、私にこの攻撃を当てる気だったようだが、無駄に終わったようだね……………」

「……………」

どうやら光司の攻撃はDrクロウには効かなかったようだった。

しかし、彼にはこの事も計算済みだったようだった。

「……………Drクロウ、ここで科学者であるあなたに1つ問題だ」

「……………何だね……………?」

「問題、高熱に熱した金属を急に冷やしたらどうなる!?」

「ッ……………」

それが合図のように光司は下がり、代わりにレナが前に出てきた。

無論、とてつもない冷機を放って……………

「カリバーン……………カートリッジを最大までロードして」

<All right . Loading cartridge

i n t o m a x >

「これで終わりです……………氷結は終演、されど散り際春に舞う桜の如し！……！」

そう言うと灼熱地獄から一変、辺りは冷たい冷気に包まれた。

そしていつの間にかDrクロウの回りには、桜の花弁の様な結晶が舞い始めた。

「ッ！？……………こんな、こんなことでは私は……！」

Drクロウは急激に冷やされたことでボディの金属の原子の配列が著しく乱れ、金属自体がその形状を保てなくなったのだ。そこですかさずレナは追撃を入れる。

「はぁっ！……！たぁっ！……！」

レナは次々に斬激を繰り出しDrクロウを攻撃していった。

するとどうだろう、彼女が攻撃する度にDrクロウの体に氷で出来た花の結晶が出来ていた。

その数は斬激の数と共に増えていき、次第に全身を花の結晶が覆った。

「……………氷楼……………乱千舞!!!」

レナの最後の一撃と共に咲き誇った花は一気に壊れ、その壊れた破片が舞ってまるで桜吹雪のように辺りに散らばった。

そこにいる誰もがこれで終わったと信じていた……………

だが

「まだ……………まだあああああああ!!!」





「ば……………バカな……………」

一発の銃声と共に彼の心臓部分に風穴が開き、そこから連鎖的に体が粉々に砕け散っていった。

そう、光司でもレナでもガルシアでもない、“誰か”が放った一発の銃弾によって……………

しばらく呆気にとられていた光司達だったが、ようやく真相に気が付き……………

「そうだったね……………僕らは“4人”いるんだっただね!!」

「ああ!!俺はこんな芸当が出来るやつを1人しか知らねえな!!」

「はい、私もです!!」

3人が感極まる中、その人物が重い足を引きずって彼らの後ろからようやく姿を現す。

「そうだったよね……………」

『ルーク!!!!』

「まったく、僕がいないとやっぱり駄目みたいだね……………」  
みんな……………」

そう、イージス・ナイトオブ2・ルークの神業的なショットのおかげだったのである。

「ルーク！！ルーク！！この野郎心配させやがって！！！！」

「痛い、痛い！！痛いよガルシア！！！！」

「そうだよガルシア、ルークはまだ重症なんだから。それからレナ、大丈夫？肩を貸そう」

「あ、はい／＼……………」

ルークも何とか生きていたことで、イージスのメンバーもいつもの雰囲気に戻っていた。

それもそうだが、彼らは戦いに勝利したのだ。

勝ち目など毛頭無かった、この絶望的な戦いに。

「さて、それじゃあ戻るか。みんな待ってる事だしよー！！」

「うん、そうだね」

「えーっと、あれから6時間ぐらいか……………どうやら、クリ  
スマスパーパーティーにも間に合いそうだね」

「そうですね。早く帰りましょう」

そうして、4人はDrクロウの城を後にした。

4人が去った後、誰もいないはずの城で不気味な声が聞こえ始めた

「フッフッフッフッフ.....まさか、ここ  
までやってくれるとは.....プランBを発動」

その不気味な声が聞こえなくなると、動いていなかったはずの城の  
製造機関がゆっくりと動き始め、新たなプレデターを作り始めた.....

三人称 side out

光司 side

僕達は、やっとの事でDrクロウを倒す事が出来た。

おかげで僕達は殆ど魔力を使い果たしてしまい、まさに疲労困憊だった。

そして、最初に転送されてきた場所に着くと………

「何だよこれ!？」

「やっぱり、そんな感じは薄々してたんだよね………」

僕達が使った転送装置は跡形もなく壊されていて、転送できなくなっていた。

「おそらく、最初からこうするつもりだったんだろうね。自分が勝とうが負けようが、僕たちがここから出る方法はこれだけだから」

「最初から帰すつもりはなかった、と言うわけですね………」

Drクロウを倒したはいいけれど、帰れなければ意味がない。

所謂、遠足は帰るまでが遠足ってやつだ……………ちよつと違うかな？

僕達が帰るすべもなく途方にくれていると

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

「な、何だこの音は!？」

「ッ!?!見て城の方が!！」

地震のような轟音が聞こえ、僕達が城の方を見てみると驚愕の光景が目に見えび込んできた。



第62話「決戦のクリスマス〜後編〜」（後書き）

突然ですが、次回で残すところあと2、3話くらいになってしまいました！！

何だか早いようで短いものでした！！

次回作はもうすでに決まっておりますので、宜しければそちらの方も応援よろしく願います！！

分類的にはギャグ系です。

そして、書きたかった学園を舞台にしたいと思います。

もちろん主人公は……………

それでは、次回もよろしく願います！！

第63話「you さらば、愛しき人よ」(前書き)

タイトル通りです。

それでは今回の挿入歌

ひぐらしのなく頃に「you」

第63話「you さらば、愛しき人よ」

三人称 side

光司達が目の当たりにした光景は先ほど倒したはずのDrクロウの城から沢山のプレデターが生産されている光景だった。そしてその数は留まる所を知らず、まるで地面を多い尽くす蟻の様に増えていっていた。

「な、何だよこの数は……………」

「それよりも……………まだ増えてるよ。どうやらあの城から作られているみたいだけど」

「Drクロウは倒したはずなのに……………」

「きっと、転送装置を破壊して僕達を閉じ込めて消耗戦に持ち込むつもりだったんだろう……………いくら僕らでもあの数はかなりきついな。それに前の戦闘の疲労もある……………」

そう、いくらイージスのメンバー4人が全員集合したところで、先

程の戦闘による魔力疲労に加えこの数相手では勝ち目などない。

しかも帰る手段を絶たれた彼らにとってこの状況はあまりにも酷だった。

すると、生産されていたプレデターたちは光司達の目の前約2キロメートル地点で止まった。  
と、同時に世話しなく動いていた城の方からの轟音も途絶えた。

「あれ？急に静かになっただけ……………」

「どうやら、向こうの方は準備万端なようだな」

そう言いつつ前が出るガルシア。

こんな時でも彼の戦闘好きは生きているようだ。

「ガルシア！あなたはもうデバイスがついて関係ねえだろ、今の状況じゃ……………」  
「た、確かにそうですが……………」  
「では私も……！」

そしてガルシアに続きレナも1歩前が出る。

しかし彼女は魔力が殆ど残っておらず、あまりしっかりと立ててい

ない。

「しょうがないよね……………だったら僕も!」

今度はルークが光司の肩から離れ2人と同じラインに並んだ。

しかし冷静に考えてみると1人はデバイスが既に使えず、1人は魔力が底をつきはじめ、1人は重傷から回復したばかり。

これでは最初から結果は見えている様なものだった。

そんな戦いに“彼”はある決断をした。

「みんな、よく聞いてほしい……………」

そう、彼はある悲しい決断をしたのだった。

三人称 side out

なのは side

私達六課メンバーは光司君達を見送った後、六課に戻り吉報を待った。

だが、光司君達が転送して行ってかなりの時間がたったと言つのに、今だ光司君達から連絡は来ない。

光司君達を信じていないわけじゃない、ただどうにも嫌な予感がしてならなかった。

「なのは、大丈夫……………?」

「あ、フェイトちゃん……………うん、大丈夫だよ。フェイトちゃんこそ大丈夫?」

「うん……………私も大丈夫……………」

そう言うフェイトちゃんの顔にはやっぱり心配の色が見える。

他のみんなも、心なしかいつもより表情が暗い。

「はやてちゃん、本部からの連絡はまだないの？」

「それが、まだみたいなんよ……………向こうも何とか光司君達と連絡を取ろうとしてくれてるみたいなんやけど……………」

「そっか……………」

「ティア……………しい兄大丈夫かな……………？」

「スバル……………きっと兄さん達ならもうすぐ任務を終えて帰ってくるわよ。きっと……………」

「そうね……………光司さんなら大丈夫なはずよね……………」

「はい……………兄さんなら……………」

「エリオ君……………そうだよね、大丈夫だよね……………」

フォアードのみんなも、せめて声には出すまいとみんなで励ましている。

でも、やっぱり思ってしまう……………もしかしたら……………

私は一瞬、最悪の状況を考えそうになったけどすぐに止めた。  
考えたくもなかった。

「また……急にさよならなんて、嫌だからね……私」

あの時、7年前、彼は突然私達の目の前から姿を消した。  
でも5年前一度再開し、今まためぐり合う事が出来た。

だから、今度もまた……合えるよね。

光司君



なのは s i d e o u t

光司 s i d e

僕はみんなにあの事を話した。

それはこの任務に来る前にスカリエッティからもらった物のことだ。

それは強制的に異空間を作り出しこの星ごとその亜空間に葬り去ることの出来る装置。

こんな事もあるつかと、スカリエッティに家の地下を研究室に改造させて密かに作ってもらっていた。

実はかなり違法なんだけどね……………

「そう言うわけで、この大群は実は何とかかなりそうなんだよね」

「さすが……………と、言つべきなんでしょうか……………」

「分からん……………」

「ただ」

「『』ただ……………?『』」

「これを発動させるためには時間もかかるし、僕らまで巻き込まれてしまう。それにあいつらだって、いつまでもああしているとは思えないし……………」

そして、僕はプレデターの大群の方に目を向ける。

目に見えてくるのは不気味に光る赤い2つの目だけ。

それが薄暗い平地に何千何万と光っている。

「だから分かりやすく言っと……死ぬって事かな……」

「そうですね……」

「まあ……覚悟はしてたけどな……」

「でも、僕らはもともと生まれるべき存在ではなかったからね……  
……その点においては、何の後悔もないかな」

「み、みんな……まさか!？」

「はい。みんな、光司さんとここに残ります」

「短い人生だったが、けっこう楽しかったぜ」

「ガルシア、何だか爺くさいね」

「うるせえ!！」

こんな時まで、みんなはいつもの調子で僕に言ってくれた。

当然、こんなとんでもない意見に少しくらい意義を唱えたっておかしくない。

でも、みんなは僕とここに残る事を選んでくれた。

僕は、本当に良い仲間巡り合えたんだと思った。

もちろん、今まで出会った全ての人が僕にとってはかけがえのない存在。

だからこそ、僕はみんなを守るこの仕事に就いた。

この素晴らしい仲間を

守るために

僕は

死を選ぶ。

「……………分かったよ。それじゃあ、ちょっと3人ともこれ持って」

そう言いつつ差し出したのは、これまたスカリエッティに作ってもらった装置。

これは3つだけしか出来なかったらしい。

でも、これは3つで良かったのかもしれない。

「何ですか、これ？」

「なんかの……………装置みたいだな」

「真ん中の赤いボタンを押してみてください」

すると3人は一斉にボタンを押して、しばらくすると球体のバリアが3人それぞれを包み込んだ。

これで、作戦成功だ。

3人とも上手く引っ掛かってくれた。

「光司さん今度は何ですか？」

「新手の回復装置か何か？」

「いや……………それは特別製の……………」

転移装置を  
「

「『』！……？？？『』」

僕の言葉にようやく僕の意図に気が付いたのか、慌てだす3人。

「ちょっと、どういふことですかこれ！？」

「おい光司……！……てめえ、まさか！？」

「どうやら、僕ら3人はしてやられたわけだ」

「ごめん、みんな………「うしろしか、みんなを守れないから」

「だからってこんな………あんまりです……！」

「おい、それなら俺がやる！！お前が死んでいいはずがねえ！！」

「でも、これは元々僕の戦いだ。僕自身の手で決着を付けたいんだ。……あれと、六課のみんなにメッセージがあるから、みんなに伝えといてね。メッセージはもうレナのデバイスに送っておいたから」

「嫌……です……嫌です！！嫌です！！嫌です！！」

「そんなの……自分の口で伝えろよ！！バカ野郎が！！」

レナは子供の様に駄々をこね、ガルシアは何度もそのボロボロの手でバリアを殴り、ルークは全てを悟ったように俯いていた。

そして、みんなの目からはいつの間にか涙が溢れていた。

もちろん僕涙が出そうになったが、余計に別れが辛くなると思い必死に涙を堪えた。

「みんな……いままでありがとう。みんなと出会えて本当によかった……」

「そんな……私……」



「ふざけんじゃねえよ!!!俺はあいつらにお前を連れて帰るって約束したんだぞ!!!約束は破るもんじゃなくて、守るもんだろ!!!そうじゃねえのかよ!!!???」

「……………光司」

おもむろに、さっきまで黙っていたルークが口を開く。

「僕ら……………また、会えるよね……………?」

「……………うん」

「必ず……………会えるよね……………?」

「……………うん」

「それまで……………待ってるからね」

「……………うん」

「……………絶対……………帰ってこいよな!…」

「……………うん……………約束だ」

すると3人を包んでいたバリアが光始めた。

どうやらもうすぐ転移するようだ。

「あ、あの!…光司さん……………最後に1つだけ、聞いて欲しい  
ことがあるんです……………」

「……………いいよ。言ってみて……………」

「はい。今だから言える……………今ならはっきりと言える……………  
……………こんな時だから言える……………光司さん、私は……………」

..... あなたの事がS」

そこまでで、レナの言葉は聞こえなくなった。

同時に、3人の姿も見えなくなった。

僕は、1人になった。

すると、急に頬に冷たいものが滴り落ちた。

それは涙であり、雨だった。

僕の瞳と、この暗い空から、大粒の“雨”が降り始めた。

光司 s i d e o u t

三人称 s i d e

所変わってここは起動六課の指令室。

六課のメンバーが4人の帰りを今か今かと待っているところだ。

そんななか、突然眩しい光が現れた。

「『『『『ツ!!!???'』』』』」

当然、一同はその光の方に目を向ける。

そして目に飛び込んできた光景とは……………

「『『『『み、みんな（みなさん）!!!』』』』」

なんとそこにいたのはイージスのメンバーだった。

その場は喜びと感動に満ち溢れ、歓喜の声をあげる者もいる。

だが喜んだのもつかの間、一同はイージスのメンバーの表情とメンバーの数を数えることで辛い現実を目の当たりにした。

そう“彼”がいないのだ。

紅蓮の騎士と唄われた、彼が……………

「みんな……………光司君は……………？」

一同を代表しはやてが3人に聞いてみる。

レナはその場に崩れたまま静かに涙を流し、ガルシアルークはやるせない表情を浮かべていた。

そしてそんな中、ガルシアが意を決したように答えた。

「あいつは……………一人で、あそこに残った。俺達を、助けるために……………」

「そ、それって……………」

「ま……………まさか……………?」

「ああ……………あいつは恐らく、死ぬ気だろうな……………  
……………世界を守るため、なにより、ここにいるみんなを守るためにな  
……………」

全員が言葉を失った。

ここにいる誰もが彼の生還を願い待ち望んでいただけあり、そのシ  
ヨックは大きい。

「……………シヤマル、ルークを診てやってくれ。一応光司が  
回復させたみたいだが、まだ完全じゃねえからな」

「あ、は、はい……………」

いつもとは違う口調のガルシアに戸惑いを感じつつ返事をしてル  
ークに駆け寄るシヤマル。

そして一通り診てからルークを医務室へ運んでいった。

「……………レナ、あいつの伝言をみんなに伝えてやれ」

「……………分かったわ」

レナは少し落ち着きを取り戻し、デバイスから取り出したデータをメインディスプレイに映し出した。

そのデータはどうかやらビデオレターで画面にはいつもの表情の光司が映っていた。

「ゴホン、ゴホン……………あー、あー、テスト、テスト<Master. This is not a mike but a video>《マスター。これはマイクではなく、ビデオです》>  
あ、そっか……………」

その瞬間、重い空気だったその場の雰囲気が少しだけまぎれた。

どうかやら彼の方も、若干緊張しているようだ。



「えっと、みなさん元気ですか？……………このビデオレターを見ているということは、僕はもう……………みんなと一緒にいることが出来なくなってしまったんですかね……………」

メンバーは光司の最期の言葉に必死に耳を傾ける。

彼の言葉を一言一句聞き逃さないように……………

「えっと……………まず、短い間でしたが本当にお世話になりました。僕は、この機動六課にはいつて本当に良かったと思っています。なのはさん達に出会って、魔法に出会って、それから沢山の人達と出会って……………数え切れない程の思い出や喜びを貰いました。本当に……………みんなありがとう」

もう既に何人かは目に涙を浮かべながら聞いていた。

彼声を聞いているうちに彼との思い出が走馬灯の様に頭の中を巡っていく。

そのたびにまた涙が溢れる。

「最後に……みんな、どうか元気で……」  
「さようなら」

その言葉を皮切りに、画面は真つ暗になりノイズが聞こえ始めた。

ノイズの音だけが寂しくその場に響いた。

まるで、その場にいる者たちの泣き音を掻き消すように……

……

光司 side

みんなを転送させてから、僕は1人、その場に立ち尽くしていた。

今までのことが頭の中をもの凄いスピードで巡った。

両親を失った事、魔法に出会った事、そして………かけがえの無い人達に出会った事………

その全てが今の僕を作ってくれた。

その出会いと別れの全てが、大切な思い出。

だからこそ、僕は誓った。

全てを守る、騎士<sup>ナイト</sup>になると……!

僕はゆっくりと向きを変え、大群の方に目を向ける。

相変わらず、不気味な二つの赤い目だけが無数に光っていた。

「……………ザックス」

<What?>

「これで、本当に良かったのかな……………これでみんなを守る事が出来たのかな？」

<It is not understood whether your judgment was correct. However, I am with you no matter it is what. 《あなたの判断が正しかったかどうかは分かりません。しかし、私は何があるかとあなたと共にいます》>

「……………そうか……………ありがとう」



だから、僕は装置が作動するまでの間ここを死守しなければなら  
ない。

「セット完了……………どうやら、向こうも動き出したよ  
うだね……………」

僕がセットを完了して見てみると、先程まで動いていなかった大群  
が一齐にこちらに向かって動き出していた。

「さてと……………じゃあ、いきますか。ザックス！」

<A-I-I r-i-b-a-c-t.>

そして僕は相棒と共にプレデターの大群へと向かっていった。

光司 side out

三人称 side

今巨大な軍勢の中に、1人の騎士が立ち向かっていった。

あまりに無謀で、どんなに辛く苦しい戦いになる事を分かっているから……………

「はあああああああ!!!!!!」

彼はその身の丈ほどの得物を振りかざし、阿修羅の如き気迫で敵を薙ぎ倒していく。

しかし、その数は減るところか彼の周りに集まり始める。

まるで、一箇所の出口から流れ出る水のように……………

「ザックスー!!」

<Loade cartridge>

数対を薙ぎ払うと同時に3本の薬莢が飛び、刀身に魔力が収縮する。

「デイバイン……………セイバーー!!!!」

魔力刃で巨大になった得物で、周りにいた敵を一掃し、すぐさま飛び上がり今度は自身に魔力を溜める。

「サウザンド……………レインー!!」

空から文字通り雨のように紅い槍が降り注ぎ、辺りを赤く燃え上げ



る。

一帯には倒されたプレデターの残骸だけが残り、まさに戦場と化していた。

燃え盛る大地の中、彼は再び地面に降り立った。

「はあ、はあ、はあ……………」

<Master. The last cartridge has been consumed by loading a little while ago《マスター、先程のロードで最後のカートリッジを消費しました》>

「そ、そうか……………こっちも、もうほとんど魔法が使えないな……………」

しかし、煙が晴れてくると、炎の向こうからまだまだプレデターの大群が迫ってきている。

「ザックス……………あと時間はどれくらい?」

<It is about three hours.《およそ三時間です》……………>

「……………そうか」

そう聞くと、彼は再び得物を握り締める。

そして心なしか、戦闘の疲労よりさつき程の覇気が感じられない。

「……ぞおおおおお！……！」

そして再び一人で立ち向かっていった。

その体は倒していく度傷つき、血が流れていく。

それでも、その歩みを止めることは無かった。

「はあ、はあ……………」

数時間後、ついに彼はその場に倒れこんでしまった。

体からはいたる所から血が流れ、息も絶え絶えになっていた。

そして、彼の周りにはおびただしい数のプレデターの残骸と、戦闘中傷ついて出た彼の血が付いた騎士甲冑が点々と落ちていた。

しかし、意識が朦朧とする中彼は再び立ち上がった。

彼の前には、最初見た時と変わらない位の数の敵が見え、今だこちらに向かってきているようだった。

「ザ、ザックス……………」

<It is ten another seconds unt  
il time 》時間まであと10秒です《>

「10秒か……………そうだ、ザックス」

< W  
h  
a  
t  
? >

9

1979

「最後に……  
感かけて」  
……  
今までありがとう。  
そしてごめん、  
迷

< What do you say? My main is on  
I y you . And , I was happy 》何を言っ  
いるんですか？私の主はあなただけですよ。それに、私は幸せでし  
た 》  
>

「.....ありがとう、本当にありがとう」

6

< You're welcome. Master. Final  
y what do you want to say to t  
hem? 《どういたしましてです。マスター。最期に、みなさんに  
なると言いたいですか?》 >



「そつだな  
ただいまって言いたいかな」  
.....  
みんなに  
.....  
.....

< Really? Then, it is necessary  
to return. 》そうですね。ならば、必ず戻らないとい  
けませんね >

「そつだね……………帰るといいね」

2

< Yes . Let's return . . . Surely  
《はい。帰りましょう。》.....《ん》>

0

その瞬間、1つの星と1人の騎士が亜空間に葬り去られたという。

1988

三人称 side out

第63話「you さらば、愛しき人よ」(後書き)

とうとう次回で最終話となってしまいました。

主人公が最後いないのはどうかと思いますが、一応第二期的なものも考えておりますので……………あとはご想像にお任せします。

そして、この作品が完結したあと、第二期と今作を繋げるのを書きたいと思っております。

主人公は以前にも書いていた通り〇〇です。

どうかお楽しみに!!!!

最終話「The after days」(前書き)

とうとう最終話です。

ここまで来られたのも読者の皆様のおかげです!!!!

本当にありがとうございました!!

そして、これからもこのような駄作者ですがどうぞよろしくお願  
い  
します!!

それではごっごー!!

## 最終話「The after days」

あの日、とある星と共に1人の騎士が姿を消した。

それは世界を、仲間を、何より、愛する者たちを守るためであった。  
そんな彼の行動に、誰もが悲しみ、涙した。

その後の管理局による捜査で、Drクロウが潜伏していた星の座標が判明し調査員達が駆けつけたが、そこには既に跡形も無くなっていた。

そして彼の名は世界を救った英雄ヒーローとして知れ渡り、同時に行方不明者の欄に名前が刻まれた。

そして、そんな事件から数カ月後……………



レナ side

あの事件から数ヶ月。

いまだ“あの人”は帰ってこない。

私達イージスは、あの事件に多大なる尽力をしたとして、管理局から表彰された。

そして、隊長が不在のため私が隊長に、ガルシアとルークは副隊長と副隊長補佐にそれぞれ就任した。

さらにはイージスの部隊力拡大向上のため、来年度からの人員も増やす予定となり私とガルシアは教導官の資格も取った。

なぜかルークだけは、フェイトさんと同じ執務官の資格を取った。

本人いわく、“なんかこっちの方が面白そうだったから”らしい。

そして今日、4月28日は機動六課解散の日。

「長いようで短かった一年間、本日をもって機動六課は任務を終えて解散となります。みんなと一緒に働けて、闘えて、心強く嬉しかったです。次の部隊でも、どうかみんな元気で、頑張ってください」

機動六課の部隊長、はやてさんが挨拶を終え拍手が巻き起こる。

私達イージスのメンバーも、この機動六課の解散式に参加している。

あの人は、イージスであり、機動六課のメンバーだったから……………

「それではここで、機動六課に協力していただいたイージスのメンバーから一言いただきたいと思います」

そしてはやてさんから紹介をうけ、私も壇上へと上がる。

「短い間でしたが、機動六課の皆さんと共に仕事が出来た事を嬉しく思っています。本来ならば、彼がここで話すはずでしたが……………皆さんも知っての通り、前部隊長・神谷光司一等空佐は行方不明となってしまうました。ですが、ここにいる方々は彼は必

ず戻ってくる、信じているものだと思います。そして、我々タイジスは、彼の思念に則り、全てを守る盾として行動していく所存です。ですので、どうか皆さんも誰かを守る盾のような存在になってください」

同じく私も拍手を受け、壇上を後にする。

その後はスムーズに進行し、あっけなく終わった。

その後私たちは新しい隊舎に向かおうとしたところ、後ろから声がかかった。

「みんな、ちょっと待って」

振り返ってみると、声の主はフェイトさんだった。

「いったい何の用だろう？」

「詳しい事はまた後で話すから、とにかくみんな来て」

慌てている様子のフェイトさんに連れられ、私たちはとある部屋の前にやってきた。

「い、ここは……………」

そう、その部屋とは光司さんの部屋。

機動六課が解散になるということで部屋の整理をしているはずだ。

「ここに何があるってんだ、フェイト？」

「うん、もうちょっと待ってて。今なのはがフォワード達を呼んでくるから」

そしてしばらくすると、なのはさんがフォワードのみんなを連れてきた。

さらには、はやてさんやギンガさん、ヴィヴィオまでいた。

「どつやら、みんな揃ったようやね」

「いったいこれは何の集まりなの？」

「はやてさん、もうそろそろ教えてください」

数人がしびれを切らした様に言い始めると、はやてさんは口を開いた。

「実はな、この部屋からこんなものを見つけたんや……………」

そう言いながら差し出したのは、小さな箱だった。

その箱は幾つもあり、どつやらここにいる人数分あるようだった。

そして、その箱の上には光司さんの字で『Present for Rena』と、書かれていた。

「プレゼント……………ですか？」

「でも、いったいどうして」

私とルークが不思議がっている中、なのはさんが私たちに説明してくれた。

「多分なんだけどね……………これは、光司君から私たちへのクリスマスプレゼントなんじゃないかな……………？」

以前、光司さんの誕生日カイの時にクリスマスイベントについて話してもらった事がある。

光司さんのいた地球では、クリスマスになると“サンタクロース”と言う人物が子供達にクリスマスプレゼントを届けるのだと言う。

「じゃあ……………光司さんは、これを私たちのために……………？」

「あいつらしいな……………まったくよ……………」

「そう……………だね」

光司さんは、どんな時でも私たちのことを考えてくれていた。

あの時だって、自分を犠牲にしてまで私たちを守ってくれた。

「とりあえず、中を見てみよう。私たちも実はまだ開けてないんだ」

フェイトさんの言葉でその場の全員が箱を開けた。

小さいながらも箱は丁寧に包装されて、私はそれを慎重に開けていった。

すると……………

「ネックレス……………?」

「私も」

「私もです」

スバルやティアナもどうたらネックレスのようで、他の女性陣もネックレスのようだった。

「僕はブレスレットでした」

「俺もだ」

「同じく」

そして男性陣はブレスレットなようだ。

そしてそれぞれに各々の魔力光を模したような色の宝石が付いていた。

私はそれを手にした瞬間、光司さんの事が走馬灯のように思い出され急に目頭が熱くなってきた。

みると、どうやら他の人も目に涙を浮かべているようだった。

「ほんま……………光司君は、変わらへんな……………」

「そうだね……………昔から、みんなの事ばかりで」





「

こうして機動六課のメンバーはそれぞれの方面へと進んでいった。

それぞれに、あの人の思い出を胸に刻んで……………

レナ side out

???.side

ここはどこだろう

意識だけはあるのだが、どう言うわけだか生きているのか死んでいるのかも分からない。

周りはどこを見渡しても真っ暗で何も見えない。

所謂死後の世界と言うヤツなのかもしれない。

すると、急に目の前が明るくなり何かが姿を現した。

この出会いが、新たな物語の始まりであったことは夢にも思わなかった。

最終話「The after days」(後書き)

2003

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0600n/>

---

魔法少女リリカルなのはStrikerS～紅蓮の騎士物語～

2011年6月18日08時22分発行